Under the forest,
ダイチの物語第三章

目次

始業式の朝 1
イメージ 8
ワイルド系プリンス 14
仮囲いの外と中 19
あっちとこっち 25
再会 34
サンマ 40
とうちゃんの弁当箱 49
作業用バッグ 57
とうちゃんの初弁当 64
育児のプロ 72
のり弁 79
鶏レバー 87
あてなるもの 94
欲しいもの 102
K-POP 110
森下家の空気 116
実力テスト最終日 123
おからとうずら 131
しょうゆ入れとカード 137
かんぴょうと愛里の計画 144
練習と下準備 152
円作りと電話 159
初めての風呂 164
書斎とジオラマ 172
会話する 180
落ちたトビの話 186
席替え 192
去年の運動会の話 201
競技とテーマ決め 209
テーマ 216
インプリンティング 223

川口の妹 231
ぶちかます 239
16 歳最後の 246
ハッピーバースデー 252
誕生日の午後 263
ウエディングブーケ 270
オーバーヒート 280
空を飛ぶ 288
とうちゃんの指導とかあちゃんの衣装 295
クラス T シャツ 305
軍団の初訓練 313
リレーの練習 318
割り箸と代用バトン 324
信頼関係 332
友だちを連れて来る 339
愛里との LINE 346
練習とピクニック用品 353
毛布とふんどし 362
鉢巻きとバトン 369
運動会の朝 376
競技スタート 382
夢を叶える 389
女子力 395
運動会の昼休み 400
ネコにネコ 408
応援タイムと志田 416
男女混合リレー 422
結果発表 428
運動会の帰り道と晩メシ 436
フラワーカフェ 444
フラワークッキー 453
救急搬送 463
入院の準備 471
晩メシ 478
愛里の決意 484
愛里とねえちゃんからの LINE 491
タオル 496
メシ粒 503
あんときのこと 511
運動会の写真と上映会 518

かあちゃんの病室 528
ナポリタン 536
ハチミツトースト 546
フォトブック 554
マグロ 562
おままごと 571
一般常識としての 579
レンチンごはん 588
レンチン容器 595
おむすびメーカー 603
行先変更 610
おかえり 621
おしりふきシート 629
優大くんの世話 638
冷凍ごはん容器 648
治一郎 655
追いプリン 665
9 月 30 日 673
衣替えと卵焼き 684
グループ決め 695
シャウト 704
初めて言えたこと 713
牛若餅 721
行き先の話し合い 727
移動手段 737
お地蔵様 745
部屋割り 754
アメニティグッズ 762
サブバッグ 768
普段着 777
救急セット 787
俺のリュック 796
てんとう虫のリュック 806
おみやげ屋 813
前祝い 822
葛藤 832
雨上がりの現場 840
汚れたリュック 851
アネモネ 859
とうちゃんのあんぱん 869

魚肉ソーセージ 877
修学旅行前日 885
てるりん小僧 895
怒涛の朝 904

始業式の朝

目ぇ覚めて
なんだよぉぉ　現場行くときの時間じゃん
まだまだ早えから　もう少し寝・・
ワアアアアア
な、なんだ？　アラーム　え？　もう？　一瞬みてえに感じた　二度寝で爆睡かよ
顔洗って　制服着て　まだ夏服　あれ？　なんか　腕んとこちょいキツくね？
胸んとこもちっと　気のせいか？　だよな　中学生じゃねえんだから
成長痛もねえしさ
キッチン行って
「とうちゃんおはよう」
「ダイチ、おはよう」
とうちゃんがニッコリして
「制服か」
「うん、高校生だよ」
「だな、ダイチは高校生だな」
昨日作っておいたドライカレー温ためて
「ダイチ、それ、美里のにももらってもいっか？」
「いいけどさ、かあちゃん俺のでいいの？」
「アイリちゃんとおんなし弁当がいぃんじゃねえかなって」
「そっか、そんじゃ愛里のは、とうちゃんのブロッコリートプチトマトのもらう」
「タコさんウィンナー作っといたよ」
「これだよな」
卵焼きも焼いて　かあちゃんと愛里のおそろいの弁当できた
「ダイチ、これよ」
握りメシ　二個？
「ダイチは現場行くんだろ？」
「ショーさんにプレゼント渡しに行くだけだよ」
「ちょうど昼どきじゃ腹減るかもしんねえから、どっかで食えよ」
「どっか？」
「公園でも道っ端でもよ」
「そっか、そんじゃ持ってく」
ホイルに包んだ握りメシを小さい方のスーパーの袋に入れて
「ダイチ、これ入れといた方がいんじゃねえか？」

保冷剤か
「だよな、まだ暑っちいもんな」
保冷剤も入れて　スクールバッグに入れた
「ダイチ、握りメシ食ってけ」
「うん、ありがとう」
ハァァァ　美味え
「二学期ショッパナの朝のとうちゃんの握りメシ、最高だよ」
「そっか？」
「なんだろな、とうちゃんの握りメシってメッチャ力出んだよな」
「米と塩だけだよ」
「とうちゃんのエキスが沁みてんのかもしんねえ」
「俺の、え、えき？」
「とうちゃんに作ってもらった握りメシが大好きっつうことだよ」
「そっか、そんじゃ明日っからもずっと作んねえとな」
「ずっとお願いしやす」
玄関に行って　久しぶりのスクール靴だな
脇に　俺のゴム長　汚れてて擦れたりしてっとこもあるけど
「ダイチのゴム長、洗っとくからよ」
「俺洗うよ」
「俺はヒマだからよ」
ヒマじゃねえじゃん　そんでも
「そんじゃ、とうちゃん頼むよ」
とうちゃんがニッコリした
「俺、愛里のこと迎えに行ってそのまんま学校行くから」
「そっか」
「そんじゃ、とうちゃん、いってきます」
「ダイチ、いってらっしゃい」
俺が　いってきますって言えんのも
とうちゃんにいってらっしゃいって言ってもらえんのも
「おっ、あ？　　ダイチ？　　どした？」
とうちゃんに抱きついてて　だってさ　ここが俺の場所だからでさ
「とうちゃん、ありがとう」
「あ？」
とうちゃんから腕離して
「そんじゃ、いってきます」
とうちゃんが優しい顔で頷いて
「いってらっしゃい」
玄関のドア閉めて
愛里の部屋に向かった

ドアホン鳴らしたら　ドアが開いて
愛里が　おおおお　久っしぶりの制服姿
メッチャ可愛い　一学期よかもっともっともっときれいになっててさ
「愛里、おはよう」
「え・・　おはようございます」
あれ？　なんか後ろに下がってってんだけど
「愛里？」
「THE・モリシタダイチ」
「あ？　俺だけど」
「まだ慣れない」
「まだ？　え、今日はまだ夏服だよな？」
「そうです、衣替えは 10 月 1 日です」
「朝メシ食った？」
「はい、イチゴのヨーグルトがけとトーストを、おとうさんが新しい食パンを」
全然目ぇ合わねえんだけど
「んっと、そっか、そんじゃ行くか」
「はい、あ！」
あ？　なに？
「あなたに言っておかないといけないことが」
「え？ なに？」
「あなたにもらった指輪」
「あ、うん」
「学校につけていくのは、ちょっとムリなので」
「うん」
「チェーンにつけてネックレスみたいにとも考えたんですけど」
「あ？ ああ、うん」
「知らないうちにチェーンが切れて失くしちゃうのはイヤだなって」
「あ、そっか」
「だから、外して箱に入れてますけど」
「そっか」
「べつにイヤになって外したとか、そういうことではないので」
愛里・・
「え？　なんで笑うの？」
「んなこと、俺、気にしねえからさ」
「気にしない？」
「学校にはムリだってわかってから」
「そう・・ですけど、あなたのことだから、なんで外したのとかなんか」
「へ？」
「予約の指輪外して、俺のことイヤになったのとか、どうしたのとか」
「俺、んなこと言わねえから」

「あなたはけっこうゴマ粒みたいな小さいことでグチグチ」
「グ、グチグチ？」
「グチグチは言わないけど、いちおう前以て言っておいた方がいいかなって」
「そっか、わかった、ありがとう」
「いえ」
「愛里」
「えっ」
抱きしめてる俺の腕ん中で
「学校行く前に？」
「や、あの、あれはしねえ」
「朝からハムハムはやめて」
「うん、しねえよ」
「そうですか」
「学校ん中で愛里のこと抱きしめらんねえからさ」
「あたりまえでしょ？　そんなことしたら絶交だからね」
「絶交ってさあ」
「行きますよ」
「おう」
「放してください」
「あ、そっか、うん」
愛里がスクール靴履いて　ヤッベ　メッチャ可愛い
「行きましょう」
「おう」
鍵閉めて　エレベーターに向かった

手ぇつないで　始業式の学校に登校
一学期の始業式の日の俺に教えてやりてえ
おまえは二学期の始業式には上原愛里と手ぇつないで登校できんだぞってさ
信じねえかもしんねえな　あんときはまだコクッもねえし　おんなしクラスになるとか
「そろそろ校門なので手を離した方がいいです」
「え？　あ、そっか、わかった」
「指」
「ん？」
「私の小指握ってますけどっ」
「なんつうかさ、名残惜しいっつうかさ」
「バカなの？」
だってさあ
「そんなキュゥゥンみたいな顔しないで」
「なんだよそれ？」
「森下くん、おはよう」

誰だっけ？　あ、焼きそば班の女子か
「おはよっす」
「森下くんどこに行ったの？」
「どこ？」
「沖縄？」
「沖縄？　や、行ってねえよ」
「それじゃ、グアム？　ハワイ？」
何を言ってんだ？
あ！　愛里が先に行っちまってる
「森下くん、おはよう」
えっと　あ、焼きそば班女子２だ
「おはよっす」
「森下くん、どこに行ったの？」
なんだ？　なんでみんなおんなしこと聞くんだよ
「ジムに通ってたの？」
ジム？
「や、通ってねえよ」
「えぇぇ、ウッソ〜！」
「ウソじゃねえけど」
あっ　愛里がもう校舎ん中に入っちまった
「そんじゃ、俺」
「またあとでねぇ」
またあとでって　おんなしクラスじゃん
走って校舎ん中のロッカー　いた　愛里がいた　靴履き替えてる
「愛里」
「あいかわらずモテモテですね」
「モテモテ？　や、どこに行ったとかわけわかんねえこと聞かれただけだよ」
「フッ」
「マジだって」
「自覚があると思い込んでる自覚なきモテ男」
「ハア？」
「見てるとおもしろい」
「おもしれえって、なにが？」
「上原さん、おはよう」
おんなしクラスの男子　気安く愛里におはようってさ
「おはよう」
愛里のおはようモードは人見知りモードだよっつの
いなくなった
「今の男子」
「あ？　え？」

「誰でしたっけ」
まだ覚えてねえ
「なんで笑うの？」
「や、なんもねえよ」
「誰なの？ さっきの」
「覚えなくていいよ」
「でも」
「ほれ、行くぞ」
「え、はい」

教室入ると
愛里と俺の席は・・
なんでたよ　なんでこんなに遠いんだよ
や、ちっと欲が出てんな
一学期の始業式んときは、愛里とおんなしクラスになっただけでメッチャ嬉しくてさ
あっ　花問屋の志田が愛里に話しかけて
えっ　愛里もなんか楽しそうに話してんだけど？　　なんでだよ？
志田、それじゃみてえに手ぇあげてんじゃねえよ
あっ　今度は川口としゃべってる　ま、まあ川口はなんつうか
え？　　川口が愛里に携帯見せて　んなそばに寄んなよ
え・・　　えええっ　愛里が笑って川口の腕をパンて　パンてさ
俺も愛里んとこ行こう　あああああ　始業のチャイム鳴っちまったよぉぉ
なんかさ　学校に来ると俺の身がもたねえっつうか　身っつうか気が休まんねえ
これは・・　なんとかしねえと

担任が来て　出欠取って　この並び　ずーーっと名簿順
おかしくね？　　もういい加減席替えしてくんねえかな
でねえと俺の神経がもたねえよ
「先生！」
「森下、どうした？」
「席替えしねえんすか？」
「席替え？」
ポッカンとした顔してねえでさ
「あああああ！」
え？ なに？ なんだ？ あああって？
「あの、そうだな、あの、来週の実力テストが終わったら」
「来週っすか？」
「テストは、あれだ、名簿順に座るから、その、そういうことで」
「おいっす」
よっしゃ　来週のテスト終わったら　やっとやっと愛里の近くになる

これ以上遠くなることなんてねえもんよ
俺的には　愛里の隣り　それ最高　ちょっと譲ってすぐ後ろ　ずっと見てられっし
前はダメだ　見れねえから
「俺もおかしいなと思ってたんだよ」
誰だ　隣りの席の　あ、焼きそば班の男子２
「うちの担任、書道だろ」
「ああ、だよな」
「朝と帰りの学活しか教室来ないから、おそらく忘れてたんだなって」
「ハァアアアア？　　忘れてたあっ？」
「シッシーーッ声大きいよ」
「も、森下」
「え？　　あ、はい」
「忘れてた・・わけじゃないんだけど、まあ、すまない」
「あ、や、いいっすよ」
やっぱ忘れてたんだな
言ってよかったな　でねえと一生愛里と離れた席でさ　気ぃ休まんなくてさ
あれ？　　なんか・・　トラックの音？　　足場組んでるみてえな音？
気のせいか　ずっと現場にいたから　脳のどっかにまだ残ってんだな
全校集会の時間か
高校だな　高校っすよ

イメージ

椅子持って体育館に移動
「愛里」
愛里んとこに駆けてって
「椅子持つよ」
「大丈夫です」
「いいから持つって」
「これくらい自分で持てます」
「俺が持ちてえんだよ」
愛里が俺のこと上目遣いで睨んでっけど？
「俺が持つ」
「だったら、川口くんのも持ってあげてください」
「え？ 僕の？」
「なんで川口のもなんだよ？」
「僕は自分で持てるから」
「川口くんヒョロッとしてるから持ってあげてください」
「え？ 僕ヒョロッとしてる？　ヒョロッとはしてないと思うんだけど」
「持ってあげてください」
川口のを持たねえと愛里の椅子は持てねえのか
「川口、寄こせ」
「僕はそこまでヒョロッとはしてないよね」
「いいから寄こせ」
「え・・　それじゃ」
俺のと川口のと愛里の椅子重ねて
「森下すごいね」
「なにが？」
「椅子三脚ってさ」
「こんなん」
トン袋ふたつ担ぐのにくらべたら空のスーパーの袋みてえなもんだよ
「川口くん行きましょう」
「え、ちょ、俺も」
スタスタ前を歩く愛里の後ろ　椅子持って歩く俺
そっか　愛里から見たら川口はヒョロッとして頼りねえのか　そっかそっか

愛里の椅子を女子のいちばん前に置いて

「愛里、そんじゃ」
愛里が俺をチラッと見て　スッて目ぇそらした　なんで？
「森下、あの」
川口、ヒョロッとはしてねえけど愛里はそう思ってんだよ
俺を見てっからかなあ　そっかもしんねえなあ
「なんていうかありがとう」
「おう」
俺は男子のいちばん後ろ
これも名簿順で　なぜか男子が前で女子がその後ろ
一年ときは　これじゃ上原愛里が見れねえじゃんて思っててさ
今も見れねえんだけどさ

相変わらず校長の話が長げえ
だっれも聞いてねえのによくこんなにしゃべれんな　虚しくねえんかな
そんくれえ図太い神経じゃねえと校長にはなれねえんだろうな　大変だな
「起立！」
立ち上がって　校歌斉唱
バタン
あれ？　え？　あれって　反射的に走ってた
４組の森山　気ぃ失ってる
抱きあげて
駆け寄ってきた先生に
「保健室行ってきます！」
「え、あ、あの」
そのまんま保健室に走った
走りながら　なんかトラックの音とか現場っぽい声聞こえんな
重てえの持って走ってっから脳がバグッてんのかもしんねえ
「失礼します！」
足で保健室のドア開けて
「え？　あら、え？」
保健室の先生がビックリした顔してっけど　集会で倒れるなんていつものことじゃん
「なんか貧血起こしたみてえで」
「あら、それじゃ、こっちのベッドに」
「おいっす」
ゆっくりベッドの上に置いたら　目ぇ開けた
「え？ 森下？」
「森山、貧血起こしてぶっ倒れたんだぞ」
「ああ・・　なんかボーッとしてきて」
「熱中症かもしれないわねえ、冷やしてあげるから」
「あ・・もう・・大丈夫です」

起き上がろうとすっから
「森山、熱中症ひどくなっと、脳みそ茹で卵になんだぞ」
「ゆ、ゆでたまご？」
「グツグツの湯に生卵入れっと、二度と二度と白身は透明に戻んねえんだよ」
「本当にそうよ、熱中症は軽くみちゃダメよ」
「あ、はい」
森山がまた枕に頭つけた
「それにしても卵って、うまい喩えねえ」
「俺じゃなく愛里が言ってたんす」
「愛里って上原愛里さん？」
「そうっす」
「上原さんはねえ、毎月ここに、あっ」
「生理痛っすよね」
「え、あの、そう・・ね」
「女の人は大変っすよ」
「そうなのよ、なかなか男子でわかる人はいないけどね」
「森下」
森山？
「どした？」
えっ　おいっ　ちょっ　俺の手ぇにぎんなよ
「ありがとう」
「や、全然なんつうことねえから」
それよか手ぇ放してくんねえかな
「一度はライバルだった俺を助けてくれて」
「ライバル？　　なんの？」
「上原さんと森下のこと」
「ハ？」
「応援するよ、ちょっとまだスパッとは割り切れないけど」
「割り切れよ！　　つか、それより寝てろ！」
「うん」
「つか手ぇ放せよ」
「そうだね」
そうだねじゃねえよ　つか、一度はライバルって
愛里は森山にコクられたとさえわかんなかったんだぞ
まあいい
「そんじゃ、失礼します」
保健室から　体育館に　え　あれ　みんな椅子持って廊下歩いてる
終わったんか　俺の椅子持ってこねえと
え？
「川口、何してんだよ？」

「僕も二脚くらいなら」
「いいよ、戻ってきたんだから」
川口から俺の椅子取って
「愛里は？」
「女子はもう先に行ったよ」
そっか
「森下ってすごいね」
「何が？」
「森山はけっこうガッシリしてるのに」
そんなでもねえだろ
「ヒョイッてお姫策抱っこしてさ」
お姫様だっこぉおお？
「また回ってくるんだろうな」
「何が？」
「まあ、あとでね」
あとでね？
「なんだよ？　川口、言えよ」
「今椅子を持ってるし、携帯は教室だから」
携帯？　なんのことだ？

教室着いたら　愛里がいねえ
10 分休みだから　便所か？
椅子戻してたら、川口が来て
「これ見て」
携帯の画面見せて
なんだこの統計表みてえの？
「これが僕のところにまで回ってきたっていうことは、ほぼ全校に回ってる」
「これはなんだよ？」
「森下大一がこの夏休み中どこに行ったか」
「俺は現場でバイトしてたよ、川口だって知ってっだろ」
「知ってるけどさ、これはスクショだから僕は何も言えなくて」
「なんでスクショなんだよ、川口にも参加させろよ」
「もう結果が出たやつだから」
「結果？　なんの結果だよ？」
「だから、森下大一がこの夏休み中どこに行ったか」
「俺は現場でバイトしてたっつうの」
「3 位沖縄のコテージ風ホテルでマリーンスポーツ三昧」
「ハァアア？」
「2 位ハワイのリゾートホテルでマリーンスポーツ三昧」
なんなんだ　これは？

「堂々の１位はマリブのスパ付きホテルでジム通い」
「これは・・　なんのことだよ？」
「言ってみれば、みんなの中の森下大一のイメージかな」
「マリブなんて言ったことねえよ」
「イメージだから」
「どんなイメージだよ？」
「こういうイメージ」
「こういうって、え・・　なんだこの・・　上原愛里 FC って」
「あ、それは・・　見ない方がいいと思う」
「なんでだよ、見せろよ」
「落ち着いて見られる？」
「ったりめえだろ、首ひねってねえで見せろよ」
「それじゃ」
　『上原愛里またきれいになってる』
　『神々しい』
　『もはや女神レベル』
なんだ・・　これは？
「川口、これは・・　なんなんだ？」
「上原さんに憧れてる男子たちのグループライン」
「憧れるって、愛里はもう俺とつき合ってんだよ」
「みんな薄々は、ていうか、森下が堂々と上原さんの傍にいるから」
「ったりめえだろ、つき合ってんだからさ」
「わかってはいるけど、憧れてるんだろうね」
「ろうねってさ、なんとかしろよ」
「僕はなんとかできないよ」
えっ　なんだこれ？
　『ワンチャンいけないかな』？
　『上原愛里けっこう森下にクールだもんな』　ハァァアア？
　『あの森下にクールに対応ってさすが我らの女神』だとぉおおっ
ジョーーーダンじゃねえよ！
『愛里は俺のカノジョだよ！』送信
「森下！　なにしてるの？」
「ハッキリ宣言してやったんだよ」
「これは僕の携帯だよ？」
「わかってっけど、俺が愛里とつき合ってるってことハッキリ言わねえとさ」
「森下、僕の携帯から送ったってことは、僕が送ったってことになるけど？」
「へ？　あっ」
ピコンピコンピコンピコン
川口が俺に携帯画面差し出して
　『え』『え』『え』『え』・・・

「川口・・」
「いいよ、土下座しないでよ、あとでなんとか処理するよ」
「ごめん！　マジごめん！」
「森下ってさ」
「え、なに？」
「上原さんのことになると、IQ ゼロくらいになるよね」
「へ？」
「そういうところなんだろうな」
そういうところ？
「僕には無理だな」
「何がムリなんだよ？」
ピコンピコンピコン　あ　あああああ　川口の携帯が鳴り続けてる
「川口、マジごめん」
「大丈夫だよ、もし本当に僕が送ったとしても誰も信じないよ」
川口が携帯見て
「ほら」
また俺に画面見せた
　『草』『wwwww』『草過ぎて森』『草通り越して笑えない』
ハァアアアア？
「川口、こんなやつらとつながってんなよ！　笑うことねえだろ！」
「笑われてるのは僕ってことだけど」
「んなさ、川口を笑うとかさ、友だちじゃねえよ！」
「え？」
「勉強のことマジで悩んでさ、真剣に医者になりてえっつってさ」
「森下・・」
「川口の友だちは、なんつうか、俺・・と、なんつうか愛里でいんじゃねえの！」
「ありがとう」
「や、や、なんつうか」
あ！　愛里が戻ってきた！
あああああ　始業のチャイムゥゥゥ
「それじゃ」
「あ、おう、川口マジでごめん」
「嬉しかった」
え？
愛里　愛里　こっち見てくんねえかな
あ　川口となんかしゃべってる　こっち見そう・・見ねえっ
早く席替えしてくださいっ

ワイルド系プリンス

やっと　やっと帰りの学活が終わった
長げえぇぇ　時間にすりゃ長くはねえんだけど
遥か斜め前方に愛里がいんのにそっちに行けねえ状態が辛かった
愛里んとこ行こう
「森下」
え？　隣りの焼きそば班の男子２　なんだよ？
「森下は、夏休みどこに行ったの？」
その話か　俺が愛里のとこに行こうとすんのを止めてまで　その話か
俺は　机バンッて叩いて立ち上がって
「みんなに言いてえことがある！」
みんなこっち見た
「俺は、この夏休みの１ヵ月、あさひ町の工事現場で土方のバイトしてた」
メッチャざわざわしてっけど
「土木作業員っつうのは、建設現場の作業員っつうのは」
メッチャ熱くなってきてっけど
「日本作ってるすげえ人たちなんだよ」
　「日本？」「え？」「どういうこと？」「なに？」
「建設作業員がいなかったら、道路もねえし、みんなの家だってねえ、
　この学校だってねえ、その人たちがいるから、エアコン効いた部屋で、
　な〜んも考えねえで、安全安心に暮らしていけんだよ」
俺は　マジでそう思ってて　マジでそれを教えてもらって
「その人たちに感謝して尊敬できねえやつは、自分で道作って、自分で家建てて、
　自分で配線配管して自分で学校作るっきゃねえんじゃねえの？」
ヤベ　熱くなり過ぎた
「まあ、なんつうか、俺は・・　土方やってました」
パチパチパチパチパチ　え？　拍手？　なんで？
「以上っす」
愛里んとこ行こう
「愛里、途中まで一緒に帰ろう」
愛里が　え？　なんかすげえ優しい顔してる　メッチャきれい
「はい」
はいってさぁぁ　メチャ可愛いぃぃ
「川口くん、さようなら」

「上原さん、さようなら」
「川口、そんじゃな」
「森下、かっこよかったよ」
「あ？ なにが？」
「それじゃ火曜日にまたね」
「おう」
愛里と一緒に廊下歩いて
「あなたは」
「ん？ なに？」
「どれだけ自分の株を爆上げするつもりなんですか？」
「株？　 爆上げって、なに？」
「今、あなたがなんて呼ばれてるか知ってますか？」
「森下？」
「そういうことじゃなくて」
「大一？」
「名前じゃなくて」
「そんじゃなに？」
「フッ」
え　鼻で笑った？
「愛里、なんで笑ったの？」
「え、ちょっと・・　口に出そうとしたらグフッ」
「なんだよ、言ってくれよ」
「フッ　グフッ」
口押さえて　フーーーッて息吐いてっけど？
「愛里、なんだよ？」
「ワイルド系　グフッ　プリンス」
「ワイルド系なに？」
「プ　グフッ　王子様」
「ハア？」
「ハハハハハ」
「なんだそれ？」
「始業式のときに、森山くんをグフッお姫様抱っこしてグフッフフ」
「あれはさ、貧血っつうか、熱中症だったら危ねえじゃん」
「森山くんて、けっこう身長高くて」
「俺よかずっと低いじゃん」
「筋肉質っていうか」
「そうでもねえよ」
「その森山くんを軽々とお姫様抱っこして」
「お姫様抱っこってさ、ただ抱き上げて搬送しただけでさ」
「王子様みたいって」

「ハァァアア？」
「しかも日に焼けて筋肉もすっごくかっこいいカンジでついてて」
「マジ？　愛里マジでそう思ってくれてんの？」
「みんながそう言ってるんです」
みんなかよ
「だから、ナヨッとしたカンジじゃないワイルド系プリンス」
「俺、全然プリンスじゃねえじゃん、足臭せえしさ、あ、今は臭くねえよ？」
「学校のみんなにはそう見えるんです」
「どうすりゃそう見えんだよ、わけわかんねえ」
「人は自分が見たいようにしか見ないから」
愛里　なんかすげえ深けえこと言うな
「10 分休みのときに、なかなか帰ってこれなかったのは」
愛里　ウンコだとしても　俺はなんとも思わねえよ　ウンコ出ねえ方が心配だよ
「トイレを出たら、ミカリンとアミリンとバッタリ会って」
誰だ？
「そしたら他の女子たちも来て囲まれちゃって」
「なんかされたんか？」
「何もされませんけど、モリシタダイチは夏休み中どこに行ったの？ って」
それかよ
「土木現場で土木作業員のバイトをしてたって言ったら」
そうだよ、俺はマジで土方やってたんだよ　愛里は知ってるよ
「笑われて」
「なんで笑うんだよ！　土木作業員のどこが」
「そういう意味の笑いじゃないです」
「え？　んじゃ、なんで？」
「ウッソー、ラブリン冗談きっつ〜い」
「ハ？」
「まあ私も悪いのかもなんですけど」
「なんで愛里が悪りぃんだよ？」
「最初に、夏休みはどこか行った？ って聞かれたから、最初と後半にニューヨークの」
「本当じゃん」
「そうですけど、ニューヨークのパパとママのところに行ったって言ったら、
　やっぱりって言われて、何がやっぱりなのかなと思ったら、
　ラブリンがニューヨークってことは、モリシタダイチは絶対マリブだよねって」
「どうやったらそういうことになんだよ？」
「私のレベルでニューヨークだったら、モリシタダイチはもっとレベルが上のところ」
「ハァァアアア？」
「本当に土木作業のバイトをしてたのって言っても、そのときは誰も私の話は聞いてなくて、
　なんかみんなで盛り上がってて、だから、こっそり抜けてやっと戻ってこれました」

「なんか、ごめんな」
「なんであなたが謝るの？」
「なんか、俺のことで、なんか愛里がさ」
「みんなはわかってないんです」
「わかって・・ねえ？」
「あなたの本当のすごいところ」
「俺の・・　本当の、すげえとこ・・　足がすげえ臭せえっつうこと？」
「やだ、ハハハ、バカじゃない？」
「そんじゃ・・　すげえ汗臭せえ？」
「もう！　ふざけてる？」
「マジで言ってっけど」
「そうでした、自覚なきでした」
「なんだよ、愛里、言ってくれよ」
「あなたが、クラスで土木作業員は建設作業員はって熱く語って」
「あぁぁ、あれは、なんつうか、ごめん」
「だからなんで謝るの？」
「なんつうか、頭に血ぃのほっちまって」
「私は感動しました」
「えっ　マジ？」
「あなたは夏休み中すごいことをしていて、すごい人たちと出会って」
愛里・・
「それをみんなの前で、日本を作ってるすごい人たちなんだって堂々と語って、
　なんか、まあ私は何もしてないけど、すごく誇らしかった」
「マジ？」
「はい」
「愛里」
「だからっ　ここで抱きつこうとしないで」
「あ、はい」
「それなのに、淋しいとか言って、ごめんなさい」
「んなことねえよ、俺、愛里に淋しかったって言ってもらって嬉しかった」
「なんか駄々っ子みたいで」
「俺だって愛里がアメリカ行ってっとき淋しくてさすげえ淋しくてさ」
「それじゃ・・　お互い淋しかったってことで」
「うん、だな」
校門出た
「愛里、こっからは手ぇつないでいっかな？」
「方向逆ですよ」
「あっ　そっか」
「日本を作ってるすごい人たちに会ってきてください」
「うん、あ、でも今日はヤッさんとスギさんはいねえんだよ」

「あ、そうでしたね、それじゃ、ショーさん」
「うん、愛里が作ってくれたプレゼント渡してくる」
「あなたも作りましたから、ていうか、あなたからのプレゼントですから」
「そんでもさ」
「あと、ロウソクをフーッ」
「ぜってえフーッしてもらうから」
愛里がフフッて笑って
「それじゃ、いってらっしゃい」
「愛里、いってきます」
愛里の左手つかんで　薬指んとこに　くちびる　軽くチュッ
「もう！」
愛里がサッと手ぇ引っ込めて
「そういうこと！」
まわり見て
「そういうこと」
少し小せえ声になって
「こんなところでしないでってば！」
「いいじゃん、俺は愛里とつき合ってんだからさ」
「そうだけど、まだみんな、うちの学校の人たちがいるでしょ」
「いてもいいじゃん、俺、愛里のこと予約してっから」
愛里が上目遣いで俺のこと睨んで
「そうですね」
ぶっきらぼうな言い方が　また可愛くてさ
「それじゃ、本当にっいってらっしゃい」
「愛里、ありがとな」
「なにが？」
「なんか、いろいろ」
「どういたしまして、ワイルド系王子様」
「愛里ぃぃ、ぜってえからかってっだろ」
「はい、からかってます　ハハハ」
「んな、もう、メッチャ可愛いから抱きしめっぞ」
「それはやめて」
「あ、はい」
「それじゃ」
「うん、いってくる」
愛里がクルッと背中向けて　家の方へ歩いていった
愛里の姿が見えなくなって
そんじゃ俺も行ってくっか
日本作ってるすげえ人たちが働いてる現場に
俺の大好きなショーさんに会いにさ

仮囲いの外と中

現場の前
昨日までの俺は　この仮囲いの中と外を　なんも考えねえで出たり入ったりしてた
今は　なんつうか　入っていぃんかなって
関係者以外立ち入り禁止で　昨日までの俺はいちおう関係者で
そんでも今は・・　もう関係なくなっちまったんかな　この中の人たちにとって
なに考えてんだよ　監督は始業式終わったら来ればいいっつってくれたじゃん
一歩中に入ると　みんな昼休憩で　俺のことチラッと見る人もいっけど
表情も変えずにすぐに顔そらす　忘れたんかな　つか　もともと憶えてねえのかな
監督に挨拶してこよう

監督室の扉開けて
「失礼します」
監督が振り向いて
俺のことジーーーーッと見てっけど
「監督？」
「エーーーーッ？　　森下？」
「そうっす」
「そういうの着てると高校生みたいだな」
「高校生っす」
「そうだけどさ」
監督が笑ってる
「あのギリ浮浪者の」
へ？
「森下しか見たことないからさ、へえ」
「へえってなんすか？」
「これが高校生森下大一なのかって思ってさ」
んな・・
「制服着てても作業服でも、俺は俺っす」
「そうなんだよね」
「え？」
「森下っておもしろいよね」
おもしれえ？
「ショーさんなら休憩室にいると思うよ」

「おいっす」
あれ？　監督が食ってんのって
「監督、コンビニ弁当っすか」
「奥さんは作るって言うんだけどさ、寝不足でフラフラなのに作れなんて言えないよ」
「そうすよね」
「俺はなんでもいいんだけど、森下のおにぎり食べてたから、米がパッサパサでさ」
俺の・・　握りメシ？　あ！
「監督」
スクールバッグから　とうちゃんが作ってくれた握りメシ一個出して
「これ、とうちゃんが作った握りメシなんで、よかった食ってください」
「100 円？」
「金はいいっす、俺の昼用に作ってくれただけなんで」
「森下お腹空くだろ」
「もう一個あるんで大丈夫っす」
「それじゃもらうよ、嬉しいな、またこれが食べられると思わなかったよ」
「よかったっす」
「しっかり勉強しろよ、若造」
「なんすかそれ？」
「ちょっと偉そうに言ってみたかっただけだよ」
「ハハハ、おいっす、しっかり勉強します」
「それじゃ、また」
また？　なんか・・　すげえ嬉しくて
「そんじゃ、また」
監督室を出た

休憩室の扉開けて
ショーさん　どこかな
「あ、ボク」
ボク？　あ、宇野さん
「こんなところに入ってきちゃダメだよ」
「あの、ショーさん探してるんすけど」
「ショーさんて、緒方正さん？」
「え？ あ、そうっす」
「親戚の子とか？」
「や、あの、俺、大一っす、土方のバイトしてた大一っす」
「だいち？」
「森下大一っすけど」
宇野さんが俺の顔ジーーッと見て
「エーーーーーッ　ウソ！」
「ウソじゃねえっすよ、大一っすよ」

「その、恰好・・は？」
「え、これは制服っす、高校の」
「コーーコーーセーー？」
またこれだよ
「そうっす」
「えぇぇぇぇ、ウソだろ」
「ウソじゃねえっすよ」
「疑ってんじゃなくてさ、なんかさ、全然・・　そうだったんだ」
「おいっす」
「ショーさんなら、いつもヤッさんたちと涼んでるところにいるんじゃないかな」
「そうっすか、そんじゃ」
「だいづ、じゃねえわ、ダイチくん」
「はい？」
「高校卒業したら、この会社に来んの？」
この会社に・・
「憧れっすよ」
「憧れってさあ」
「ユンボ動かしてる宇野さんなんつったら、メッチャャかっけえっす」
「そんなさあ、照れんじゃ〜ん」
「俺はまだ普通免許も取れねえから」
「高校生だもんねえ」
「おいっす」
「いつか、待ってるよ」
待ってる・・
「え、ちょ、や、俺、なんか悪いこと言った？」
「や・・　なんか・・　待ってるとか、嬉しくて・・」
「そうなんだあ」
「そんじゃ、失礼します」
「うん、またな」
またな　なんていい響きなんだよ
「おいっす」
休憩室の扉閉めて
いつも俺たちが涼んでたところに走った

いた！　ショーさんいた！
「ショーさーーん！」
走ってったら　俺のこと　なんか　ポカンと口開けて見てっけど
「ここにいるんじゃねえかって、宇野さんがおしえてくれたからさ」
「え？　えっ　エーーーーーーッ　ダ、ダイちゃん？」
「うん」

「なんか・・　見慣れないから」
「んな恰好で土方できねえじゃん」
「そう・・だけど、あれ？」
ショーさんが俺の胸元に顔近づけて
「この校章・・　カナちゃんの高校だよ」
「ショーさんの奥さん？」
「俺なんかよりずっと頭よくてさ、ダイちゃんやっぱり頭がいいんだな」
「俺は愛里から IQ ダダ下がりとか友だちから IQ ゼロになるって言われてさ」
「ハハハハ」
よかった　やっと笑ってくれたよ
「今日はどうしたんだ？　　賃金とか？」
「んっとさ、ショーさんに渡してえもんがあって」
「俺に？」
どれからどうすりゃ　とにかく　スクールバッグから手提げ袋出して
「これ、愛里がショーさんにって縫った」
「愛里ちゃんが・・　俺に？」
「タオルとか着替えとか入れる用だってさ」
「わざわざ？」
「ショーさん、スーパーの袋に入れてんじゃん？」
「そうなんだよ、買った方がいいんだろうなとは思うんだけどな、ついさ」
「これからはこれ使ってよ」
「ありがたいなあ、わざわざ縫ってくれるなんて」
「愛里、ミシンすげえ上手なんだよ」
「そうなんだ、愛里ちゃんに、ありがとうって伝えてくれよな」
「や、まだあんだよ」
「まだ？」
手提げ袋に手ぇ突っ込んで
「これ」
「財布？」
「これも愛里が縫ったんだよ、俺もチコッとこのまわりだけ縫ったけど」
「財布を・・　縫った？」
「材料費 1,130 円、愛里すげえだろ？」
「1,130 円で・・　こんな立派な財布を？　　本当に縫ったのか」
「ほら、中にさカード入れっとこもあってさ」
「すごいな、これを縫ったって信じられないな」
「ショーさんの免許とか保険証？　　ここに入れとけばさ」
「免許、更新させてもらったんだよ」
「うん、聞いたよ、よかったね」
「まさか更新できるなんて思ってもなかったよ」
「監督は、一人でも運転できる人がいた方がいいっつってさ」

「そう言われてさ、ダイちゃんのおかげだよ」
「俺はなんもしてねえよ」
「俺は更新したくてダイちゃんに見せたわけじゃないんだよ」
「わかってるよ」
「失効する前に、ダイちゃんに見せたかったんだ」
「うん、新しいのは？」
「あるよ」
ショーさんがケツポケットから数枚のカード出して
「これが新しい免許証で、こっちは・・　ダイちゃんに見せたよな」
二枚の免許証
「ショーさん、やっぱ俺が言ったとおりじゃん」
「え？」
「今の方がずっとずっといい顔してんじゃん」
「そうかな、白髪も増えてさ」
「かっけえよ」
「ハハハ、ダイちゃんは優しいな」
「ここに免許証とさ、それは保険証だろ？　それも入れてさ」
「ありがたいな、財布も買わないととは思ってたんだけどな」
ショーさんが免許証なんかを財布のカード入れんとこに差し入れて
「なんかな、俺が財布なんか持っていいのかなって思っちまってさ」
「なんで？」
「財布に入れる金なんて持ってなかった俺がさ、財布ってさ」
とうちゃんも　そういうカンジのこと言ってたって
「なんていうのかな、分不相応みたいな気がしちまってな」
「今は稼いでんだから、逆にちゃんと財布に入れねえとさ」
「そうだな、それじゃ使わせてもらうよ」
ショーさんがケツポケットから千円札二枚と小銭出して
「あれ？　ダイちゃん、ここに五円玉が入ってるよ」
「それ、愛里が入れろって、お金にご縁がありますよにってさ」
「種銭？　愛里ちゃんはよくそんなこと知ってるね」
ショーさんも知ってんだな
「その５円玉はとうちゃんが稼いで貯めてた瓶貯金の中の５円だよ」
「カズの・・　それじゃ福があるな」
「だろだろ？」
「こんなにしてくれるのは・・」
「ショーさん、それさ」
「ゆうべ、スギさんの部屋にいたらな、ヤッさんが来て・・
　だいづが俺のシャベルを完璧に磨き上げてくれたって」
完璧・・じゃねえとは思うけど
「俺なんかの小方になりたいって言ってくれてってさ・・

　最後にこんなことしてくれるなんてなって・・　泣いてさ」
最後・・
「俺やスギさんももらい泣きして・・　そういうことか」
「そういうこと？」
「最後に俺にも」
「や、ちげえよ、そんなんじゃなくてさ、ショーさんの」
あ、順番間違った　手提げ袋ん中からカード出して
「これ」
まだ開かねえで
「カード？」
「これ開くとさ、立体的なケーキみてえなのになってさ」
「ケーキ？」
「ショーさん誕生日８月１日だろ？」
「8 月になった途端に歳とるんだよ」
「ちょっと遅くなっちまったけど、これ」
カード開いて　ハッピーバースデーの曲が流れて
ショーさんが驚いた顔してカード見てて
とうちゃんとかあちゃんと愛里と俺が書いたところを見てて
なんか　あれ？　　すげえ険しい顔になってっけど　あ　曲が終わった
「ショーさん、ここのロウソクんとこをさ」
え？　　ショーさんが真っ赤な目で俺を睨んで・・
立ち上がって　えっ　走ってちまって
「ショ、ショーさん？」
追いかけたら　便所に入っちまって
なんだ？　　マジで便所？
「ショーさん？」
マジで便所なんかな
便所の前で　待ってっけど
ショーさん　出てこねえ

あっちとこっち

「ショーさん？　　ウンコ？」
ウンコでもウンコしてるっては　言えねえか
「ウンコだったらドア叩いてくんねえ？」
叩かねえ　ウンコじゃねえんだ
「具合悪りぃ？　　悪かったらドア叩いてよ、つか、出てきてよ」
なんも　反応ねえ
なんか　なんか・・　あの顔は　なんか・・
「ショーさん、俺がなんかしたんだよな？」
わかんねえけど　ショーさんが怒るみてえな　なんか
「ごめんな、俺、そういうのよくわかんなくてさ」
なんて言えば　いぃんかな　なんて・・　んっと・・
「俺のとうちゃん、前に言ったけど、新聞紙にくるまれて駅の便所に捨てられてて、
　とうちゃんは、9 月 13 日に見っけられたからでほんとはいつかわかんねえって、
　そんでも、かあちゃんが調べたら、見つかった日と新聞紙の日付がおんなしで、
　だから、やっぱ 9 月 13 日に生まれたってわかって、そんでも、とうちゃんは」
んな話でいぃんかわかんねえけど
「施設んときは、9 月 1 日に 9 月生まれの子たちに小せえチョコとか菓子くれて、
　とうちゃんは、それがなんなのかあんまわかんなくて、
　9 月 1 日は菓子がもらえる日としか思ってなくてさ、
　院では、9 月 13 日は副食 1 個増える日ってだけっきゃ思ってなくて、
　誕生日祝ってもらうなんてわかってなかったみてえで、そんでも・・」
そんでも 9 月 13 日は俺にとってはメチャ大切な日で
「俺は、とうちゃんが 9 月 13 日に生まれてきてくれてよかったって思っててさ、
　とうちゃんが生まれてきてくれて、俺、マジしあわせだなって・・　だから・・」
俺は・・　何が言いてえんだ？　　なんかうまく言葉出ねえ
「俺は、ショーさんが生まれてきてくれてよかったなって思ってる、
　ショーさんが生まれてきてくんなかったら、俺、ショーさんに会えなかったじゃん、
　8 月 1 日は、まだ会ってなかったから、なんもできなかったけど、
　なんつうか、今年の分ってことで、ショーさんの誕生日祝いたかったんだよ」
なんか俺・・　一人でしゃべってる気ぃして
「俺、一人で勝手に盛り上がっちまって、ショーさんの気持ち考えてねえっつうか、
　なんか、ごめんな、ごめん・・」
もうこれ以上は・・

「俺、ショーさんと出会えてよかった、俺、ショーさん大好きだよ」
マジでそう思ってっけど　そんでも・・
「ショーさん・・」
次の言葉　言いたくねえ　そんでも・・
「さよなら」
便所に背ぇむけて　さっきいた場所に向かって歩いて
なにやってんだ俺・・　地面に置いといたスクールバッグ
えっ
ガシッて　後ろから
「ショー・・さん？」
俺のこと　後ろから抱きしめる手が震えてて
俺の背中に
「さよならなんて・・」
え
「言うな」
ショーさん・・
「言わないで・・くれよ・・　ダイちゃん」
「ショーさん」
「まだ・・　まだ振り向かないでくれ」
「あ・・　うん」
「俺は・・　もう誕生日を祝ってもらうことなんてないと思ってて・・
　そんなことすら忘れてて・・　あの・・カード・・見てたら・・
　小さい・・ころ・・　親父とお袋が祝って・・　女房が・・祝っ・・」
そう・・だったんか
「俺にも誕生日が・・あったんだなって、祝って・・もらっ・・たこと」
俺の背中で　ショーさんが大きく息吐いて
「それで、今、ダイちゃんがさ、ダイちゃんの大切な人たちが、俺・・なんかの
　なんかもう温ったかくて温ったかすぎて、どうしたらいいのか・・頭が・・
　ごめんな、ダイちゃん、こんなになるなんて初めてで、ごめん」
「ショーさん、振り向いてもいっかな」
「グチャグチャでちょっとさ」
俺は制服のズボンのポケットからハンカチ出して　背中にいるショーさんに
「これで拭いてよ」
「こんなリッパなハンカチ、もったいないよ」
「ショーさんの顔見てえんだから使ってよ」
「そうか？　　それじゃ」
ショーさんが受け取って
「俺、ティッシュも持ってっから」
ティッシュも渡した
「幼稚園ときからハンカチとティッシュは必ず持たされてさ」

「そうか」
ショーさんが鼻かむ音がして
「かあちゃんがうるせえからだけどさ」
「ダイちゃんのお母さんはダイちゃんのこと考えてくれてるんだよ」
「おかげで持ち物検査んときはバッチリだった」
「そうか」
俺は隙をついて振り向いた
「あっ、ダイちゃ・・」
ショーさんの目は真っ赤に腫れてて　鼻も真っ赤で
「ショーさん、8月1日の誕生日、おめでとう」
ショーさんのくちびるが少し震えて　そんで
「ダイちゃん・・　ありがとう」
あ！
「ショーさん、愛里に言われてたことがあってさ」
「愛里ちゃん？」
俺は地面に落ちてるカード拾い上げて
「ここのロウソクの絵、この火のとこ、フーッて」
「ん？ え？」
「愛里が、雰囲気だけでもっつって」
「そうか」
「そんじゃ、もっかいやろう」
「もう一回？」
またカード閉じて
「曲が終わったら、ロウソクの火のとこフーッだから」
ショーさんが微笑んで　頷いた
カードを開けて　曲が流れて
「はい、ショーさん」
ショーさんがロウソクの絵の火のところをフーッて
俺は拍手して
「ショーさん、誕生日おめでとう」
「ありがとう、ダイちゃん」
「来年はちゃんと8月1日にお祝いしようよ」
「来年？」
「来年も、再来年も、その先も」
ショーさんがくちびる噛んで　そんでフーーッて息吐いて
「そうか、ダイちゃんが祝ってくれるのか」
「うん、ヤッさんもスギさんもみんなでさ」
「それじゃ・・　長生きしないとな」
「そうだよ、長生きしてよ」
「ダイちゃんの誕生日はいつなんだ？」

「12 月 25 日」
えって顔した　みんなするんだよ
「うん、世間ではクリスマスなんだけど、俺ん家では俺の誕生日だけ」
「そう・・なんだ」
「かあちゃんが行事ごと嫌れえでさ、クリスマスとかやんねえんだよ」
「サンタさんは？」
「へ？」
「ダイちゃん、サンタさんは来なかったのか？」
ショーさん　メチャマジな顔して
「子どもにはサンタさんだろ」
「うちは最初っからそういうのなかったから」
「それでも友だちがサンタさんって言ってて、淋しくなかった？」
ショーさん、すげえ真剣な顔でサンタさんてさ　メッチャおもしれえ
「かあちゃんに聞いたことあんだよ、サンタさんてだれ？ って」
「お母さんはなんて？」
「聖ニコラスの話された」
「え？ あ？」
「現在のトルコ共和国に位置する小アジアのアナトリア半島で 270 年ごろに・・みてえな」
「それは・・　たしかに・・そう・・だろうけど」
「そんで、かあちゃん、12 月 25 日はあんたが生まれた日、うちではあんたの誕生日が、
　何千年も前にいた見たこともない人の誕生日よりずっと大切なのっつってさ」
「そうか、そうだな、お母さんの言うとおりだな」
「だから、誕生日は、すげえ大切な日なんだよ」
ショーさんが　うん、うんって　何度もうなずいた
「ショーさん、昼メシはもう食ったんか？」
「そこのコンビニでアンパン買ったよ、半額になっててさ」
「アンパンだけ？」
「ゆうべ米炊くの忘れちゃってさ、おかずもヤッさんやスギさんに頼りっぱなしで、
　もっとちゃんと自分のことくらいできないとな」
あ！　そうだよ
「ショーさん、これさ」
スクールバッグん中から握りメシ出して
「とうちゃんの握りメシ、食ってよ」
「え？　なんで・・」
「俺の昼メシにって、とうちゃんが握ってくれた」
「それじゃダイちゃんが食わないとさ」
「俺は家帰ったらなんか食うから」
「それでも」
「それに、今日は現場仕事してねえから、そんな腹へってねえしさ」
「ダイちゃん」

「食ってよ」
ショーさんが俺の手の中の握りメシ　ジッと見てて
「ショーさん、食ってくれよ」
「それじゃ、もらうよ」
ショーさんが握りメシ手に取って　ホイル開いて　一口
「カズの握りメシはやっぱり美味いな」
「だろ？」
「ダイちゃんに初めて会ったときも・・　握りメシくれたな」
「ショーさん、美味そうに食ってくれてメッチャ嬉しかった」
ショーさんが　俺の・・　制服？　　なんかジッと見てっけど
「その高校に通ってるってことは、エリートってことだ」
エリートって　なんかちっと腹立って
「ショーさん、俺はさ」
「ダイちゃん、俺の話を聞いてくれ」
「あ、うん」
「俺の女房の同期も、今じゃ大企業の重役、官僚、医師、弁護士、政治家もいる」
まあ・・　うちの高校の卒業生は　そうだけど
「俺の女房もなかなかの大学の薬学部卒業したんだよ」
「そんじゃ薬剤師になったっつうこと？」
「それがさ、卒業した途端、たっちゃんのお嫁さんになるって言ってさ」
「そうなんだ」
「向こうの親は大反対だよ」
「なんで？」
「反対するだろ、小さな町工場の嫁になんてさ」
「そんでも奥さんはショーさんが好きだったからだろ」
「俺は止めたんだよ」
「なんでだよ？」
「大手の薬品会社とか大学病院の薬剤師とかさ、面接受けて全部受かって、
　それなのに俺んとこに嫁に来るなんて考えなおした方がいいって」
「ショーさんも奥さんのこと好きだったんだろ？」
「カナちゃんは小学校のときからマドンナでさ」
「マドンナ？」
「今はそう言わないのかな、男子みんなの憧れの的だったんだよ」
愛里みてえだ
「俺なんかには見向きもしないだろうなって思ってたのにさ、
　お互い大学に入ってからかな、なんとなく一緒にお茶飲んだり映画観たり、
　カナちゃんが誘ってくれたんだよ、俺からは絶対誘えなかったよ」
なんかメッチャいい話だなあ
「それで、つき合うようになったんだけど、まさか嫁にってな」
「ショーさん、ほんとはさ、メッチャ嬉しかったんじゃね？」

「嬉しかった、吐きそうになるくらい嬉しくてさ」
「ハハハハ」
「それでもな、どう考えても苦労するのは目に見えてるからさ、
　考え直した方がいいって言ったんだよ、そしたら」
ショーさんが俺の方を見て
「たっちゃんは私のこと好きなの嫌いなの？ って」
ショーさんがちっと困ったみてえに笑って
「好きだよ好きだけどって言ったら、
　好きならさっさと私と結婚しなさいよ！ ってさ」
おもしれえ
「俺も覚悟決めてさ、なんとかしあわせにしないとなって」
「そっか」
「俺とカナちゃんは別世界にいたんだよ」
別世界？
「カナちゃんは医者の娘で、俺は小さな町工場の息子でさ
　カナちゃんの方が俺の世界に来てくれたんだよ」
ショーさんの世界？　　世界って　ひとつだろ？
「ダイちゃん、俺はな、すべてを失う一瞬前まで」
一瞬前？
「失ったあとどうしたらいいのかなんて考えもしてなかったんだよ」
失った・・あと
「この手の中で」
ショーさんが両腕で　なんかでっけえもの抱える恰好して
「ボロボロボロボロ崩れていくのを、なんとか食い止めようとして・・
　それでもどんどん崩れていくのに、抱えるのに必死で考える余裕なんてなかった」
俺は　わかるようでわかんなくて
「ほら、海辺でさ、砂の山を作って、波が一瞬でサーッと消してくだろ、
　まるでそこにはなんにもなかったみたいに・・　そんな感覚かな」
ショーさんの目が虚ろになってて　俺は　思わずショーさんの手ぇ握って
「何もなくなったときには、これからどうすればいいのかわからないんだ、
　パソコンも携帯もないし、どこで誰に相談すればいいのか助けを求めればいいのか
　なんとか知ってるハローワークに行っても、住民票がないから・・な」
「う・・ん」
「最近になって、寮の若い子にパソコン借りて調べてみたんだよ、
　NPO 団体とかさ、国のホームレス救済措置みたいなのがあったけど、
　そんなこと浮浪者にはわからないんだよ、こっちから行けないんだよ」
こっちから？
「でもさ、こっちに来てくれって誰に言えばいいのかもわからない、
　せいぜい炊き出しがどこであるかくらい、わかるようになるかな」
こっちに来て・・くれ？

「俺たちみたいな浮浪者は、世間ではゴミみたいなもんでさ、
　たまに傍に来ると、なんていうかな、犬のフンみたいな」
「犬のフン？」
「臭い、汚い、そばに寄りたくない、さっさとなくなって欲しい」
なんだよ・・それ
「俺たちどん底の人間は、あっちの人たちにとっては存在もしてないんだよ」
「存在してねえとか、なんでんなこと、ちゃんと存在してんじゃん」
「マジックミラーってあるだろ？」
マジックミラーは知ってっけど
「こっちからは見えるけど、あっちからは見えない」
「それが・・　なに？」
「エリートの世界からは、俺たちどん底の人間なんて見えてない、
　だから存在してないのと同じでさ、こっちはこっちであっちの世界は見えるんだけど、
　マジックミラーのあっち側には行けないんだ、見えるだけでさ」
ショーさんがフッて鼻で笑った
「ショーさん、俺、ショーさんが何言いてえのか、わかんねえよ」
「わからないよな、だってダイちゃんの中にはないんだからさ」
「何が？」
「ダイチちゃんの中には、こっちもあっちも、そういう感覚がないんだよ」
「そういう感覚ってなに？」
「そんなエリート校に通ってるのに」
「エリート校とか、そういう」
「まあ聞いてくれよ」
「え・・　うん」
「あんな擦り切れた汚い作業服着て」
え？ あ？
「泥だらけになって汗かいて臭くなっても気にしてなくて」
ん・・っと？
「俺ね、正直に言ってもいいかな」
「いいよ、なに？」
「俺と同じような浮浪者が、たまたまここで仕事もらえたんだなって思ったんだよ」
「へ？」
「俺にさ、なんの躊躇もなく話しかけてきて」
「だって何してんのかなと思って」
「握りメシくれてな」
「腹へってんじゃねえかなって思ったからさ」
「まるで前から知ってるみたいに話をしてくれてさ」
「とうちゃんの話わかってくれて楽しかったもん」
「うん、わかったよ、俺なんかと話してて楽しそうにしてるなって」
「俺は、学校の友だちとはとうちゃんの話あんまできなくてさ」

「まあ、そうだよな」
「ショーさんはフッツーに聞いてくれてさ、わかってくれて、すげえ嬉しかった」
ショーさんが優しい顔で俺を見て
「でもな、一緒に働いてるうちに、この子はなんだか違うなって」
「なにが？　俺なんも違わねえよ」
「ダイちゃん、話は最後までちゃんと聞け」
「あ、はい」
「たとえば、そうだな、ヤッさんの手伝いをしてるとき、言われたことだけじゃなく、
　ヤッさんの作業の次の次まで考慮に入れて動くんだよ」
「え、俺、んなことなんも考えてねえけど」
「考えて動くと逆にモタモタするんだよ、ダイちゃんは瞬時にとらえるんだな」
瞬時に？
「この子は相当頭がいいなって、成績がいいとかじゃなくて、地頭がいいんだな」
「じあたま？」
「俺もいちおう人を使って仕事してたからさ、そういうのを見ることはできるんだよ」
「そういうの・・」
「でもな、それよりなにより、ダイちゃんの性格がな」
「性格？」
「性格って言葉じゃ表せないな、持ってる空気っていうかさ、たまらなくよくてな」
「マジでそう思ってくれてんの？」
「そうじゃなきゃヤッさんもスギさんもあんなに可愛がらないよ」
「うん、メッチャ可愛がってもらってる」
「ダイちゃんといるとさ、この世界が、俺にとっては殺伐として灰色だった世界がさ、
　なんか温かくてしあわせできれいな世界に思えてな」
え・・
「ダイちゃんが総理大臣になったら」
「俺は総理大臣なんかぜってえなりたくねえよ」
なれるわけねえけどさ
「そうだな、政治の世界はな」
「そういうんはぜってえやだよ」
「ハハハ、それじゃ・・たとえば、ん・・　弁護士」
「弁護士？」
考えたこともねえよ
「弁護士ってさ、小さな町工場のときでも敷居が高いっていうかな、
　弁護士に頼んだら高いんだろうなって、それくらいのイメージしかなくてな、
　まして浮浪者のときなんか、まさに別世界だよ」
俺にとっても別世界だな
「パソコンで調べたとき、生活保護のことや住民票取得については、
　弁護士に相談を・・なんて書いてるけど、浮浪者がさ、弁護士なんてな」
そっか　弁護士に相談はできるんか

「でも、たとえばだよ、たとえば、ダイちゃんが弁護士だったら、
　ダイちゃん、ちょっと聞いてくれないかなって世間話みたいに言えそうなさ」
ハハハ、おもしれえ
「いや、ダイちゃんだったら、道路っ端に座ってる浮浪者の俺のところに、
　ダイちゃんの方から来てくれそうなさ、おっちゃん、どした？　　腹減ってない？」
「それは、ただの俺じゃん　ハハハハ」
「ダイちゃんがダイちゃんのままでいてくれれば」
俺が　俺のまま
「俺はそれだけでしあわせだよ」
「俺は俺のまんまでっきゃいらんねえよ」
「そうか」
ショーさんがニッコリ笑って
「それじゃ」
立ち上がった
「そろそろ俺は仕事に戻るよ」
「あ、だよな」
俺も立ちあがって
「俺も行くよ」
「ダイちゃん、スボンのケツに土ついちまってるよ」
「こんくれえ大丈夫だよ」
「ダイちゃんは」
ショーさんが笑って　首んとこにかけてたタオルでパンパンて払ってくれた
「ダイちゃん、またな」
「うん、ショーさんまた」
ショーさんが便所掃除しに行った
俺も　帰ろう

再会

電車ん中
ドア付近のとこに立ってて
『愛里』送信
『ショーさんにプレゼント渡したよ』送信
『ロウソクフーッもしたよ w』送信
『ショーさんカード見て感激して泣いてた』送信
ピコン
『よかったですね』
『愛里のおかげだよ』送信
ピコン
『私のおかげではないです』
『愛里があのカード用意して考えてくれたからだよ』送信
ピコン
『私はあなたの思いを具現化しただけです』
具現化？
ピコン
『きっとあなたの』
ピコン
『LOVE に感激したんです』
俺の LOVE？
ピコン
『あなたはおじさん LOVE に溢れてるから』
おじさん LOVE ってさ
『俺は愛里 LOVE っす』送信
ピコン
『そうですか』
スンとした愛里の顔が見えるみてえだよ
ピコン
『お昼のお弁当美味しかったです』
そっかそっか
ピコン
『おかあさんとおそろいで』
ピコン

『それも嬉しかったです』
『とうちゃんが考えたんだよ』送信
ピコン
『そうなの？』
『愛里とかあちゃんのおんなしにした方がいいって』送信
ピコン
『おかあさんもおそろいねって喜んでました』
マジ？
ピコン
『私はテスト勉強しているので』
ピコン
『おわったらあなたの家に行きます』
そっか
『わかった』送信
ピコン
『それじゃ　あとで』
『愛里　好きだよ』送信
ピコン
『そうですか』
え？　なんかさ
『なんか冷たくね？』送信
ピコン　画像？
これは・・　俺が愛里の薬指にキスしてるとこじゃん
すげえきれいに撮れてんな　愛里の横顔メッチャきれいでさ
ピコン
『ミカリンから送られてきました』
ミカリン？　んっと？
ピコン
『ラブリンと森下くんの日々を記録してあげたいからって』
マジ？　ありがてえ
ピコン
『ていのいい盗撮です』
んなさ　せっかく撮ってくれたんだからさ
『愛里の横顔メッチャきれい』送信
ピコン
『そんなノンキなことを言ってる場合ではない！』
ノンキなこと？
ピコン
『こういうことがあるから』
ピコン

『学校近辺では』
ピコン
『慎重に行動してください』
生活指導の先生みてえだな　ハハハ
『俺は愛里とのこと誰に見られてもかまわねえ』送信
『隠さなきゃなんねえことなんてなんもねえ』送信
　　あれ？
『愛里？』送信
ピコン
『なんかもう』
ピコン
『いいです』
いいです？
ピコン
『それではあとで』
『愛里　好きだよ』送信
ピコン
『はいはい』
はいはいってさ　おもしれえな
にしてもさ　この写真メッチャいいなあ　保存
ドア開いた
中に入ってきた人の　白衣？　　胸んとこの名前って
あのチェーンの焼き鳥屋の名前だよな
顔見たら　あ！
「春男さん！」
え？ みてえな顔してっけど　忘れたんかな
「俺っすよ、大一っす」
ジーーッと俺の顔見て　忘れちまったんかな
「えっ　ダイちゃん？　　ほんまにダイちゃん？」
「そうっす」
「なんか全然ちゃうから誰かと思ったわ」
「学校の帰りっつうか」
「ほんまに高校生なんやなあ」
「おいっす」
「なんやかっこいいにいちゃんやなあと思てたら、ダイちゃんか」
「大一っす」
「学校こっちなんか」
「や、現場のおっちゃんに会いに行ってきたんす」
「まだ現場でバイトしてんのん？」
「や、昨日で終わって」

「いやあ、別人やな」
「そんなっすか？」
「これは・・　モテるやろ」
「おいっす」
「否定せえや」
「あ、すいません」
「いちいち謝らんでええっちゅうねん」
「春男さんは仕事っすか？」
「病院にな」
えっ
「あの、花恵さんの」
「ようおかんの名前憶えとんなあ」
「きれいな名前なんで」
「せやねん、メッタクソ名前に負けとんねん」
ん・・っと、どうすればいぃんかな　つっこむのか？
「えっと、なんでや・ねん」
「出た！」
「え？」
「関東人の関西弁！」
「あ、すいません」
「ほんでまたダイちゃん、絶望的にヘッタやな」
絶望的？
「耳腐りそうやったわ」
「あ、マジでなんか、あの」
「なんでやの、なぁにポイント置いたらあかん」
ポイント？
「なんでのでぇや、なん　で　やねん」
「あの、俺の関西弁の指導よか、花恵さんは」
「ああ、それがな」
え　俺に顔近づけて
「おかんな」
え・・　すげえ深刻な顔してる
「メッチャ元気やねん」
ニカッと笑った
「えっ　マジっすか？」
「退院してからな、どんどん元気になりくさってな」
「よかったっすね」
「病院なんかいたら死ぬとこやったわあてな」
「え、そんじゃ春男さんはなんで病院に」
「今朝、おかん一人で診察に行ってな」

「具合悪かったんすか？」
「痛み止めもらいに行っただけや」
「どっか・・　痛てえんすか」
「それがな、治療やめたら痛みなくなってきたっちゅうねん」
「そうなんすか」
「ほんでも痛み止めもらいに行くってアホちゃうか」
「ハハハ」
「保険払ってんねんからもらわな損やわって、ほんでもタダやないっちゅうの」
なんか　よかった　すげえ　よかった
「ほんで、痛み止めもらいに行ったのにやで、薬受け取ってくんの忘れたて」
「え？」
「ハルくん取りに行ってって、こっちは仕込み中やっちゅうねん」
そんでも取りに行ってあげたんだ　だよな
「おかんが帰ってきたら忙しいてしゃあない」
「春男さん・・　よかったっすね」
「ダイちゃん、ダイちゃんが泣いてどないすんねん」
「なんか・・　メッチャ嬉しいっす」
「あれは死なんな」
「死なねえっすよ、花恵さん、死なねえっつったんだから」
「有言実行のおばちゃんやな」
「さすが花恵さんっす」
「さすがて　アハハハ」
あ　次乗り換えだ
「ダイちゃん」
「はい？」
「連絡先、おしえてくれへんか」
「もちろんっすよ」
「LINE 交換て、女子高生みたいやな」
「ハハハ」
「なんかあったら連絡させてもらうわ」
「なんかあったら？」
一瞬　マジな顔で俺を見て　そんで笑って
「うちの店で食べ放題やりまっせっちゅうお知らせや」
俺は　なんか　わかったけど
「食べ放題行きてえっす、ぜってえ知らせてください」
「そうかあ」
春男さんが優しい顔で笑って
「そんじゃ、俺、ここで」
「せやったな」
「春男さんにまた会えて嬉しいっす」

「こんなブッサイクな顔見てどこが嬉しいねん」
「春男さん不細工じゃねえっすよ」
「マジなトーンで言うなや、慰めとんのかいや」
「や、マジでいい顔っす」
「ダイちゃんに言われてもな、慰めにしか聞こえん」
「そんじゃ、慰めっす」
「しばくで！」
「ハハハ」
「ほんじゃ、ダイちゃん、またな」
「はい、また」
電車出て　振り向いたら　ドア閉まって　春男さんが
あ・い・あ・お・あ　ハハハ
俺も　ありがとな
春男さんに手ぇ振って　乗り換えのホームに走った

サンマ

家帰って　着替えて
とうちゃんと二人で　商店街に晩メシの買い出しに来てる
「とうちゃん、サンマ、メッチャ安くなってる」
「だな、そんじゃサンマにすっか」
「大根とカボスも買わねえとだよな」
「あそこの八百屋なら、ちっと萎びた菜っ葉ならもらえっからよ」
「そんじゃ菜っ葉と揚げの味噌汁つけっか」
「だな」
サンマ買って　八百屋で大根とカボスとイチゴ買って
菜っ葉と白菜の上っ側ももらえて　大収穫
他にもいろいろ買って　もちろん愛里の豆乳ヨーグルトも買って
「とうちゃんと買い出しすんの久しぶりじゃね？」
「だな、ダイチと来ると、なんか楽しくてよ」
「俺もだよ」
なんかまた　俺のいつもの日に戻った気ぃすんな

晩メシは、サンマの塩焼きと菜っ葉と揚げの味噌汁に白菜のゴママヨサラダ
「あらあ、サンマ！　秋が来たってカンジね」
「メッチャ安くなっててさ」
あれ？　愛里がジーーッとサンマ見てる
サンマ嫌れえだったかな　アジは食うよな
「愛里、サンマ嫌れえか？」
「いえ、あの・・　ナイフとフォークをもらえますか」
「ナイフと　フォーク？」
「あの、話すと長くなっちゃうんですけど」
「いいよ、話してくれよ」
「そうよ、話してちょうだい」
「私は憶えてないんですけど、小さいときにサンマの骨が喉に刺さっちゃって」
「あら・・」「マジか」
「パパとママが大慌てで救急で耳鼻科に連れて行って取ってもらったって」
「そっか、痛かったんか」
「私は憶えてないんです」
「あ、そっか、うん」

「それからは、ママがぜーーんぶ骨を取って身だけにして私に出して」
「そんでも、愛里、アジは食うよな？」
「なんとか、でも、サンマにはわけのわからないトラウマが・・」
ん・・と、どうすりゃいぃんだ？
「愛里、あのさ、箸でここんとこ押してさ」
「それは正式な食べ方じゃないわよ、愛里さん、ここにお箸を入れてね」
「箸で押した方が骨取れやすいじゃん」
「どうせなら正式な食べ方を知っておいた方がいいでしょ」
「食いやすい方がいいじゃん」
「将来愛里さんが正式な会食で恥をかいてもいいの？」
「正式な会食でサンマなんか出ねえだろ」
「上司や同僚に定食屋に連れられてサンマ定食食べることだってあるでしょ」
「そんときは別なもの食えばいいじゃん」
「そうはいかないことがあるのよ、社会に出たら」
「社会に出てサンマ定食以外食っちゃいけねえとかはねえだろ」
「どっちにしても、正式な食べ方を知っておいて損はないでしょ」
「そんでも食いやすい方が　あれ？」
愛里が　サンマ食ってる
「愛里・・　そのサンマ・・」
「愛里さんが・・　取ったの？」
愛里が　俺とかあちゃんの顔交互に見て
「あの、おとうさんが取ってくれて」
「とうちゃん？」「カズオが？」
俺とかあちゃんに見られて　とうちゃんが　え？ え？ って顔して
「アイリちゃんが早く食いてえんじゃねえかなって、なんか、ごめんな」
「まあ・・ね、それはね、たしかにそうよね、ダイチ」
「あ？　おう、その方が、なあ、かあちゃん」
「あの・・　なんか、私のことで、ごめんなさい」
「んな、全然、なあ、かあちゃん」
「そうよ、美味しく食べるのがいちばんよ、ねえダイチ」
「美味しいです」
「そう、よかったわ」
「よかったなあ、かあちゃん」
え　なんだよ　そのスッと冷めたみてえな顔
なんか俺一人が大騒ぎしたみてえじゃん
「え、これ白菜？　美味しい」
「それはダイチが中学んときから作ってくれんだよ」
「美味しいです」
「あ、マジ？　よかった」
「今日のはちょっとマヨネーズが多いわね」

かあちゃんっ　俺が何した？　　なんでそういちいちさあ
「あの」
愛里がかあちゃんに
「私のせいですよね」
「愛里さんのせいって何が？」
「二人が、なんか・・」
「ちがうわよ、愛里さんのせいなんかじゃないのよ」
「愛里、ちげえから」
「ダイチが物を知らないだけ」
ハァアアアア？　　ぜーーんぶ俺のせいか？　　かあちゃん、ちょっとかあちゃん
「なによ？　　あんたも早く食べなさいよ」
「食ってるよっ」
「ほらね、こういうところが子どもでしょ？」
愛里に　んなさ　愛里が困ってんじゃんよ
「でも・・　この白菜サラダ、ゴマとマヨがちょうどいいカンジで」
愛里ぃぃ　やっぱ愛里はさあ
「愛里さんは優しいから」
かあちゃんに比べたら　闇魔大王だって一億倍優しいよっ

晩メシ終わって
愛里とかあちゃんはリビングでしゃべってて
俺ととうちゃんはキッチンで後片付けしてて
「とうちゃん、さっきは、なんか、ごめんな」
「さっき？」
「俺とかあちゃんがくっだらねえ言い合いしてっときにさ」
「ダイチも美里も、アイリちゃんにきれいな食い方教えたかったんだろ？」
「まあそうだけどさ、肝心の愛里放っぽっといてさ、とうちゃんがやってくれて」
「俺は食い方汚ねえからよ」
「とうちゃん汚くねえよ」
「若けえ頃は箸の使い方もわかんなくてよ」
「とうちゃん箸ちゃんと使えてんじゃん」
「こういう、なんつうんだ？　　握ってよ」
「握り箸？」
「施設んときは、みんなそんなんだったからなんも思わねえで、
　院入ってるときも、みんな、んなカンジでよ」
「そんじゃ、なんで今できてんの？」
とうちゃんがチラッといたずらっ子みてえな目で俺を見て
「ねーちゃんの真似した」
「かあちゃんの？」
「ねーちゃん食ってんの見て、そんでな」

それで今ちゃんとできてるって　すげえな
「最初にスパゲッティ食わせたもらったときによ、食い方汚ねえって」
「ああ、かあちゃんに言われたっつうやつか」
「そんときは、俺なんかを叱ってくれてんのが嬉しかっただけでよ、
　そんでもな、一緒に食うようになって汚ったねえのはな」
とうちゃんが　ちっと情けねえ顔して
「そんでもどうしていぃんかわかんねえからよ、ねーちゃんが食うの見てから、
　なんつうか、んなカンジかなあってよ」
「そうだったんか」
「フォークもこうやって握って、こうやって刺して、こうやって食っててよ」
「ワイルドじゃん」
「ねーちゃんの見て、あれ、ちげえってよ」
「そんじゃサンマの食い方は？」
「俺、最初こうやって手で持ってそのまんまガブッてやったらよ、
　ねーちゃんが、なにやてってのっつって教えてくれた」
「そんでもさ、俺はとうちゃんから教わったよな」
「あれはねーちゃんが教えてくれたからよ」
「え？　ちょ、箸で押してっつう」
「うん、こうやっと骨が取れやすいっつって」
「ハ？　さっき俺がそうやったのにさ」
「臨機応変よ」
あっ　かあちゃん
「カズオ、今、来週から家政夫で行くヒシタニさんから電話があったの」
ヒシタニ？　聞いたことあんな
「追加の仕事をお願いできないかって」
「あ、うん」
「ご主人の次の日のお弁当のおかずを作って欲しいんですって」
「あ、うん、わかった」
「追加の料金は支払うって言われたけど、それはお断りしたけどよかった？」
「そんなん晩メシ作るついでにできっからよ」
「そうね」
そっか、とうちゃんあさってから仕事再開か
「ダイチ、愛里さんを送ってあげなさい」
「おう」
愛里が　俺を見上げる目が　憂い？　憐れみ？　なんだ？

愛里の部屋の玄関
「あの・・」
「ん？ なに？」
「さっき、なんか・・　ごめんなさい」

「なにが？」
「私のせいで、あんな、大騒ぎになってしまって」
「あ、や、あれは、俺とかあちゃんが勝手に、なんか、ごめん」
「私、練習します」
「なんの？」
「サンマの食べ方」
愛里　んなさ
「検索して動画かなんかあると思うので、それで」
「愛里、んなこと練習しなくていいよ」
「でも、高校生にもなってサンマの食べ方を知らないとか」
「愛里のサンマは俺がほぐすから心配すんな」
「え、それじゃ私ずっと覚えられないですけど」
「ずっと俺がやる」
愛里が俺のことジーーッと見てっけど
「サンマのことなんか心配すんなよ」
「それじゃママと同じでしょ？」
「愛里のママだって心配だからそうやってくれたんだろ」
「そんなこと言ったら、私、一生自分でサンマを」
「一生俺がやっから」
「ハ？」
「愛里のサンマは一生俺が骨取って食わせっから」
愛里が口開けて　ポッカーンと見てっけどさ
「メシはさ、美味きゃいんだよ、いちいち作法とかんなさ」
愛里が口パクパクしてなんか言いたそうにしてっけど
「俺は愛里には、なんも考えねえで美味え美味えっつって食って欲しいんだよ」
「それって、悪い意味でメッチャ過保護です」
「過保護とかじゃねえよ、愛里には美味えって食って欲しいだけだっつうの」
「でも、私は一生サンマの身の取り方を知らないままになりますけど」
「いいじゃん」
「よくないですよね」
「一個くれえできねえことあってもいいじゃん」
「私はほぼできないことだらけです」
「いっぺえいろんなことできんじゃん」
「ハ？」
「ショーさんの、あんなすげえ財布縫ったりさ、すげえきれいな花活けたりさ」
「それはただの趣味みたいなもので」
「俺なんかセンスのいい服選べって言われても一生できねえよ」
「それはそうですけど」
え・・　ハッキリ肯定　まあ・・だけどさ
「そんじゃなに？　　俺はセンスいいもの選ぶ練習した方がいぃんか？」

「極論過ぎる」
きょ・・　極論？
「俺はおそらく一生センスいいものなんて選べねえよ」
「それは、あなたのおかあさんとか、まあ、私が選びますから」
「ほらな！」
「なんですか？」
「俺ができねえこと、愛里がしてくれんだろ？」
「それはあなたのセンスが壊滅的にひどいから」
壊滅的・・　まあいい　そうだ
「それにさ、愛里がなんでもできたら、俺、用無しじゃん」
「バカなの？」
「ハ？」
「私はあなたに何かして欲しいからそばにいて欲しいとか、そういうのじゃ」
愛里
「俺もだよ」
抱きよせて
「あ、ダメ」
「なんで？」
「サンマ食べから・・　サンマの匂いが・・」
「俺も食った」
愛里のくちびる　そっと　メッチャ柔らかくて　そんで・・
くちびる離したら
「サンマ食べたって言ったのに」
「俺も食ったっつうの」
「ハムハムって」
「した」
「ゴマの香りが立ってました」
「そっか」
「はい」
「愛里、サンマは俺にまかせろ」
「まかせないって言っても、あなたはやるんでしょうね」
「やる」
「そうですか」
「そうですよ」

サンマの後日談なんだけどさ・・

ねえちゃんが高校一年とき　ねえちゃんは生物部に入部した
そんでも一日でやめて帰ってきた
「ねえちゃん、どしたの？」って聞いたら

「あんなところ、時間の無駄」つった
俺が知ってたのはそこまでなんだけど
俺が高校一年のとき担任が生物の先生で、その先生は当時の生物部の顧問で、
俺がねえちゃんの弟だって知ったら、ねえちゃんが入部した当日の話をしてくれた
生物部には伝統っつうか、一年生が入部すると通過儀礼みてえのがあって
それはカエルの解剖で、たいていの一年生は震えてできねえんだって
そんで先輩たちが鼻で笑いながら解剖してみせるんだってさ
ねえちゃんが入部したとき、一年生は全部で 6 人、男子 5 人で女子はねえちゃんだけ
目の前に出された麻酔でピクピクして寝てるカエルを見て男子たちは固まった
固まったまんま動けねえ・・中で、ねえちゃんがスッと台の前に来て
「解剖を始めます」つって、ここっきゃねえっつうとこにスッとメス入れて、
内臓の配置の確認、心臓だけ取り出して拍動のリズムの確認とか一人でやって、
最後には全部前のとおりに中に戻して、カエルに合掌させて
ねえちゃんもカエルに向かって合掌して、「終わりました」ってさ
一瞬つか数秒シーンとなったんだけど、先輩たちも全員拍手してる中
「退部します」っつって実験室出てったって
「森下のお姉さんすごいよな」って先生に言われて「はあ」しか言えなかった
なんで、んなこと思い出してっかっつうと
ねえちゃんにできて俺にできねえっつうことはねえんじゃねえかって
つか、ねえちゃんとおんなし血が流れてんだから、俺にもできんじゃねえかって
カエルじゃなくてサンマだけと　生じゃなくて塩焼きになったやつ
真横にきれいに線入れて背と腹んとこもきれいに切って
身を崩さねえようにはがして、頭付きの骨取って、小骨全部丁寧に取って
下っ側の身の小骨もきれいに取って頭付きの骨を真ん中に戻して
その上にまた身を、なんつうの、一匹そのまんまに見えるように戻して　できた
パッと見、サンマの塩焼き　そんでも骨の心配しねえで身だけきれいに食える
愛里の前に出したら「え？」っつって箸つけてまた「え？」つった
愛里、俺はただ身をほぐすだけじゃなくてさ
愛里にサンマの塩焼きの姿はちゃんと見せて・・の、ほくしっつうか
どうっすか？
かあちゃんが横から覗いて
「あら、まあ・・これは・・なんていうか」
なんも言わなくてもいいよ
「バカみたい」
ハ？
「こんなところに労力と時間を使って」
笑ってっけど、これが俺のやり方で、ねえちゃん流っつうかさ
ほれ、ほれほれ、愛里がスムーズにサンマ食えてんじゃん
そんで・・
次にまたサンマの塩焼きっつう日

「今日はそのまま出してください」
「なんで？」
「え・・　熱々が食べたいから」
そっか、やっぱ解剖方式だと冷めちまうもんな
目の前でほぐしてあげればいっか
愛里の前に焼き立てのサンマ出して
「愛里、そんじゃほぐすからさ」
愛里が俺の手ぇ払いのけた　え？
スーーーーハーーーって大きく深呼吸して　えっ　マジ？　　なんで？
愛里がかあちゃん式でサンマの身をほぐして食ってる
「愛里さん、見事よ、とってもきれい」
かあちゃんは褒めてっけど　愛里が食えるようになったのはよかったけど
ナ　ン　デ　ダ？
「動画を死ぬほど見てイメトレしてきました」
「イメトレは大事よね」
「あ・・愛里、んっとさ、なんで、その、なんつうか」
愛里がメッチャ挑戦的な目で俺を見ながら
「あなたの労力と時間を無駄にしたくないからです」
へ？
「愛里さん、そのとおりよ、しかもあんな解剖みたいなの」
解剖みてえってさ　まあ、発想はそこだったけどさ
「食欲なくなるわよね」
なんか・・　俺が悪いことしたみてえな・・
「そうじゃなくて、やっぱり自分でできないとって」
愛里
「あの解剖的なものを見て」
解剖的？
「そう思ったので」
かあちゃんは満足そうに愛里に微笑んで
俺は・・　よかれと思ってやったことが、なんか・・
「あなたがあの解剖的なものを作ってくれたおかげで」
え？
「動画の最終形態はこうなんだってわかったから、あなたのおかげです」
愛里・・
「私のサンマに対するトラウマを失くしてくれたのは、あなたです」
愛里・・　俺、ちっと泣きそうなんだけど
それから愛里は、サンマを自分で食えるようになった
まあこれは、サンマにまつわるサイドストーリーっつうことでさ

俺はまだ高二の始業式の夜にいて・・

「おやすみなさい」
「え、あ、おう、おやすみ」
ドアが閉まって　鍵が閉まって
始業式の日が終わった

とうちゃんの弁当箱

日曜日の朝
俺は愛里の部屋を掃除して
昼メシの卵サンド作って　愛里と食ってる
「火曜日は現国と数学ですよね」
「あ？　　なにが？」
「実力テスト」
「あ、そっか、だな」
「そんなカンジ？　　そんな軽いカンジ？」
「軽くはねえよ」
「私なんて一年の夏休み明けの実力テストのトラウマがまだここに」
愛里が頭の後ろ押さえて
「ガッタガタだったから」
「愛里メッチャ勉強してんじゃん」
「正しい方向なのかどうかもわからないです」
「合ってたよ」
「何が？」
「俺のノートに幾何の証明書いててさ」
「えっ？」
「導き方も答えもちゃんと合ってた」
「エーーーーーッ、ごめんなさい」
「なんで？　　あれけっこう難しいのにすげえって思った」
「あれは・・　アメリカでママに頭にきててヤケクソになってたときに」
「ハハハハ、ヤケクソで正解ってすげえじゃん」
「消しておいてください」
「なんで？」
「あなたの神ノートを汚した気がするから」
「なんだよそれ」
「だって、なんか、大丈夫かな、数学が・・」
「幾何はちゃんとできてっから」
「幾何だけじゃダメですよね」
「これ食ったら一緒に勉強しよう」
「はい、まだ明日という執行猶予があるからよかったですけど」
「執行猶予ってなんだよ」

愛里の表現は独特で　俺はそれが大好きでさ
「あれ？　　おとうさんは、明日から仕事ですよね」
「うん、あ、そんでも掃除とかは俺がやっから心配ねえよ」
「それは心配してないけど」
「そっか」
「おとうさん、なんとなく張り切ってますよね」
「丸山のおばちゃん経由の仕事再開できたかんな」
「よかったですね」
「迷惑かけたとかっつって遠慮しててさ」
「おとうさんは悪くないですよね」
「そうなんだけどさ」
「おとうさんて、仕事のときはお昼はどうしてるんですか？」
「なんかテキト～に食ってるみてえ」
「テキト～・・とは？」
「かあちゃんに作った弁当の残りの握りメシ持ってったり」
「私のお花の先生のときは、あなたが作ったお弁当食べてましたよね」
「あんときは、愛里に作った弁当の残りで作っただけなんだけどさ」
「生まれて初めてのお弁当だって喜んでましたよね」
「うん、喜んでた」
あんときの気持ち　思い出して　ちっとジーンとして
「また作ってあげればいいのに」
「弁当？」
「あ、なんでもないです、ただ・・」
「ただ？　　愛里、なに？」
「私、夏休み中おとうさんにすごくいろいろお世話になって」
「とうちゃん喜んでやってたからさ」
「何か恩返しできないかなって」
恩返し？
「おとうさんが喜んでくれそうなこと、なにかできないかなって」
とうちゃんが　喜んでくれそうなこと
「でも、私は何もできなくて」
俺も・・　とうちゃんいてくれたから　現場のバイト続けられたよな
おっちゃんたちの握りメシ、朝からいっぺえ握ってくれたりさ
俺の代わりに現場行ってくれたり・・
そっか　とうちゃんに弁当　それくれえっきゃ俺はできねえけど
「愛里、俺、とうちゃんに弁当作るよ」
「え？　　ほんと？」
「うん、明日っから一週間とうちゃんに弁当作る」
「おとうさん絶対喜びます」
「そっかな」

「そうですよ、あなたが作ってくれたお弁当持って仕事できるなんて最高ですよ」
「マジ？」
「はい」
「そっか、そんじゃ作る」
「おとうさんのお弁当箱ってあるんですか？」
「ねえよ」
「お花の先生のときは・・」
「タッパー」
「あの古くて汚い・・」
「あの汚ったねえタッパーっす、あれ大きさがちょうどいいっつうかさ」
愛里が　なんかまた考えてて　表情クルックル変わって
「どっちがいいのかな」
「どっちって？」
「私がお礼にお弁当箱を買うのがいいのか、あなたが現場で稼いだお金で」
弁当箱を・・　買う？
「私がお礼って買った方がいいのかな」
「や、俺が買う」
愛里に金なんか出させらんねえよ
「そうですか？」
「愛里、選んでくんねえ？」
「私が？」
「俺センスねえじゃん」
「買うとしたら・・　今日ですよね」
愛里が両手を両頬にあてて　また考えだした　なんだ？
「愛里、もし愛里が今日は出かけたくねえっつうんならさ」
テスト勉強してえよな
「明日はあのタッパーにしてさ」
え、手でストップ？　　黙れっつうこと？
「あなたが選んだ方がいいと思う」
「へ？　　俺？　　俺センス全然ねえじゃん」
「あなたとおとうさんて感覚が同じだから」
「感覚？」
「センスより、安いが優先ていうか」
「や、これはちゃんとしたのでいいよ」
「おとうさんは、あなたの感覚で買ったものの方がフィットするっていうか」
フィット？
「あなたが心からこれだと思うものの方が絶対にいいと思う」
「心からこれだ？」
「そのダサイ赤 T」
「え？　　あ、だからこれはさあ」

「500 円で安かったから買ったんですよね？」
「え・・まあ、うん」
「その感覚で」
「この、感覚で？」
「その方が、おとうさんは心から喜べると思います」
「マ・・・ジ？」
「はい」
「そんじゃ・・　俺が・・　ホームセンター行けばいいっつうこと？」
「ほら」
「え？　　ほら？ ほらって？」
「あなたは、今、速攻でホームセンターって言いましたよね」
「あ？ うん」
「私なら雑貨屋さんです」
「あ、そんじゃ雑貨屋行く」
「ホームセンターなんです、きっと正解は」
正解？　　なんのどんな正解？
「これを食べたら行ってきてください」
「え、あ、そんでも勉強は？」
「あなたは、たかだか数時間勉強しなかったら数学の点数がた落ちしますか？」
「や、それはねえけど、愛里のさ」
「たかだか数時間あなたがいなくて勉強できないなら、私は速攻で留年です」
「え、あ、そっか、そんじゃ、これ片付けたら行ってくる」
「お皿は私が洗います」
「えっ？」
「お皿くらいは洗えますけど？」
「あ、ああ、おう、わかった」
「いいですか？　　お弁当箱とお箸ですよ」
「わかった」
「あなたが、これはいいって心から」
「わかった、俺が心からいいと思ったやつな？」
「そうです」
ホームセンター行って帰ってくるつつったら
「俺、帰りは夕方になるけど、いいんかな」
「はい」
「そっか・・　そんじゃ、いってくる」
愛里がメッチャ真剣な顔で
「いってらっしゃい」
なんか・・　戦場に送り出される気分っつうか
家戻って財布持って　行こう

このホームセンターは安い　とにかく安い
俺ととうちゃん愛用のホームセンター
おそらく愛里はぜってえここでは買い物したくねえっつうだろうけどさ
食器・キッチン用品コーナーは・・　あっちか
弁当箱は・・　あるな　保温弁当箱、二段・・はいらねえな
とうちゃんは昼メシはちこっとあればいいんだよ　握りメシとちこっとおかずだけ
どれがいぃんか・・　これか？　コンバクトランチボックス　1,650 円
どうなんかなあ　俺が心からいいと思ったやつっつたよな　思えねえな
あれ？　あっちに、激安訳ありセールコーナーって
あ、すげえ　安くなってのいっぺえある　子ども用が多いな
プリントされてんのがもう流行ってねえからかな
この棚の下んとこにゴチャって積まれて・・　どれにも値段ついてねえ　いくらだ？
奥の方に・・　アルミの弁当箱？　なんか昭和っぽいっつうか　えっ？　これ
北斗の拳のプリントついてるアルミの弁当箱　大きさもちょうどよくね？
いくらだ？　値札ついてねえな　なんか横で整理してる店員さんがいる
「すいません」
「はい？」
「これって、いくらっすか？」
「それ？　どこにありましたか？」
「この棚のいちばん下の奥に」
「ああ、そこのは売り物にならないので」
売り物にならねえ？
「お客様が持ってるそれも、ほら、下のところがちょっとへこんでるでしょ」
そう言われればちこっへこんでっけど、んな大したことねえじゃん
「これ、いくらっすか？」
「ですから、それはもう売り物にはならないんですよ」
「売ってくださいっ」
「売ってくださいって言われても、そこまでのを売ったら店としても」
「買いますっ」
「え・・」
店員さんがキョロキョロまわりを見て
「あげますから」
「えっ　マジっすか？」
「シーーーッ」
「あ、すいません」
「どうせ問屋に返却して廃棄ですから」
「廃棄？　廃棄すんならくださいっ」
「シッ　ただし、返品は絶対にできませんよ」
「ぜってえ返品しませんっ」
ヤッ　ターーーー！　タダだタダ　タダで北斗の拳だ！

「あの、訳ありの箸はありますか？」
「そのカゴの中に、それも返品はできませんからね、返品不可って書いてますからね」
「しねえっす」
ん・・と　いっちゃん安いのは・・
「お客さん」
「え？　　はい」
「お子さんの弁当箱セット探してるの？」
「や、とうちゃんのっす」
「お父さん？」
「明日っからやっと仕事行けるんで」
「やっと？」
「弁当作ってあげようと思ってんすけど、弁当箱持ってねえから」
「持ってない？」
「今まで弁当箱持ったことねえから」
「今まで？」
「とうちゃんの弁当箱っつうのを買ってあげてえなと思って」
これか？　　130 円　そんでもお姫様のプリントって　とうちゃん気にしねえかな
「これ」
箸箱？
「え？ あ？」
「大人用、ここ、白い部分が変色して黄色くなってて」
「こんくれえ使えっじゃねえすか、いくらっすか？」
「あげるよ」
「えっ」
「ただし、返品は」
「ぜってえしねえっす！　　ありがたく使わせてもらいます！」
「このことは、誰にも言わないでくれるかな」
「言わねえっす」
「俺いちおう店長だけどさ、こういうことは基本・・」
手でバツ作って
「だから」
「はい！　　死んでも言いませんっ」
「お父さん、仕事もらえて、なんていうか、よかったね」
「おいっす」
「それじゃ、本当に、ここでのことは」
「ぜってえ言わねえっす」
あ、菜箸も買わねえと　折れちまったから、とうちゃん割り箸使ってんだよ
んっと・・　どれがいちばん
「菜箸は訳ありはないよ」
「あ、ちゃんと買います」

「こっち」
「え？」
「三組セットで１３５円」
「おおおおお、これ買いますっ」
「それはレジ通して」
「おいっす」
「あ、ちょっと、こっちで」
「おいっす」
店員さん・・じゃなくて店長がレジまで俺を連れてきて
「弁当箱と箸出して」
「おいっす」
店のテープ貼ってレジ袋に
「あ、袋はいらねえっす」
「お金取らないから」
「あ？」
「まわりに見られたら困るから」
「あ、そうっすか、そんじゃ、ありがとうございます」
菜箸はピッてやって
「税込み価格で 135 円」
「おいっす」
スエットのポケットから　愛里に作ってもらった財布出して
「その財布・・」
「これっすか？　　作ってもらったんす」
「財布を・・　作った？」
「俺が小学生から使ってたケロロ軍曹の」
「ケロロ・・軍曹」
「ビニールの財布が汚ったねえからっつって」
「そう・・なんだ」
135 円出したら　レシート切って　俺の顔見て
「政治の歪みだよな」
「え？」
「ありがとうございます」
「こっちこそ、ありがとうございます」
頭下げて　そんで　なんとなく・・　なんとなく奥の作業服売り場に
夏用の作業服　セールになってんな　空調服もセールか　もう秋だもんな
秋冬用か　あ　ドカジャン
俺が小学生んとき　とうちゃんと一緒にホームセンターに来たとき
「とうちゃんが土方やってたときによ、これ着ててよ」って
「古着屋で 300 円で売っててよ、LL だったから売れねえって 100 円にしてくれてよ」って
「浮浪者んときもずっと着ててボロッボロになっちまったけどよ」って笑ってて

今はもっとすげえ防寒用作業服があるんだな・・って、なにやってんだ
早く帰んねえと
帰りのバスん中
『愛里』送信
『とうちゃんの弁当箱買ったよ』送信
『俺が心からこれだっつうの買った』送信
ピコン
『あなたにはもうひとつやることがあります』
もうひとつ？
『なに？　なんか買ってくればいい？』送信
ピコン
『真っ直ぐ帰ってきて真っ直ぐ私の部屋に来てください』
なんだ？　あ、数学か　教えてほしいことあんのか
『わかった』送信
『速攻で行くよ』送信
ピコン
『待ってます』
待っててくれ　愛里！

作業用バッグ

今　俺は　愛里の部屋のリビングの床に座ってて
これまたリビングの床に並べられた　バラバラにされた作業ズボンを見てる
「ん・・と、愛里、これ・・は？」
「あなたのおとうさんにもらってきました」
「うん、俺にくれるっつったけど、とうちゃんのだから返したやつだけどさ」
「おとうさんに、もしこれを大一さんが雑巾にしても気にしませんかと聞きました」
「あ？　　雑巾作ればいぃんか？」
「話を最後まで聞いてください」
「あ、おう」
「おとうさんは、あなたの好きにしていいと言ってくれました」
「愛里、これで雑巾作れば」
「所有者のおとうさんの許可を得たかったから」
許可？
「何を作るかはまだ言えないと思って雑巾なんて言っちゃったけど」
「なんか作ればいぃんか？」
「お願いだから、黙って、私の話を聞いて」
「あ、はい」
「あなたが私のところに家政夫として来てたとき、スクールバッグとは別に、
　レスポの黒のバッグを持ってましたよね」
「れすぽ？　　れすぽってなに？」
「レスポートサック」
「なんだそれ？」
「黒の、作業用の服とかタオル入れてたバッグ」
「ああ！　　かあちゃんがさ」
「でしょうね」
「でしょうねっつうのは？」
「レスポートサックをなんだそれって言ったから」
愛里は　なにを　言ってんだ？
「おかあさんが買ってくれたんですか？」
「買ったんかどうかはわかんねえけど、初めて家政夫に行く前の日にさ、
　んな汚ねえバッグ持ってくなっつって」
「え・・　何を・・　持って行こうとしたの？」
「中学んときのスクールバッグ」

「そう・・ですか」
「人様ん家に、んな擦り切れたバッグ持って入ってったらイヤがられるっつってさ」
「おかあさんは配慮があると思います、思うっていうかメチャ配慮です」
「愛里、あのバッグ好きなんか？　　あれ持ってって正解っつうこと？」
「最初はあなたが何を持っているのかなんて見る余裕なかったですけど」
「え？」
「そのうち、レスポのバッグ持ってる、でも、その中には、今着てる煤けてダサイ」
「わかってっから、この赤 T な」
「それを入れてるって、どういう感覚？ って不思議だったけど」
「や、だからこれは作業用でさ」
「いつも着てますよね、その恰好でホームセンター行ったし」
「ホームセンターは、んなさ」
「あなたのことは今はどうでもいいの」
「愛里が先に」
「おとうさん」
「とうちゃん？」
「お花の先生のときは、スーパーの袋を持ってました」
「ああ、うん」
「今までもずっとスーパーの袋だったんですか？」
「俺が小 6 んときに、とうちゃんの擦り切れたジーパンでエコバッグ作って」
「小 6 で？ エコバッグ？」
「小 5 の誕生日にミシンもらったから」
「小 5 で・・　ミシン？」
「俺的には天体望遠鏡が欲しかったんだけどさ」
「なのに、なんでミシン？」
「かあちゃんが買ってさ、将来好きな子が可愛い弁当袋が欲しかったとして、
　それをダイチがササッ縫えたら・・　あっ」
「あなたのミシンの話は置いておきましょう、本題とは関係・・なくは・・ない」
「え？　　関係なくはない？」
「えっと、どこまで」
「とうちゃんのエコバッグ？」
「あ、それです、その、あなたが作ったエコバッグは？」
「やっぱ小 6 で作ったからさ、いろいろほつれたりして、直してもどうにもなんなくて、
　今はとうちゃんがクローゼツトん中でなんか入れてるらしいけどさ」
「それからは、スーパーの袋ってこと？」
「だな」
「あなたはレスポの黒バッグで、おとうさんはスーパーの袋」
「あ、だよな、かあちゃん、俺には失礼だとか言ってさ、とうちゃんにはなんも」
「おかあさんは、おとうさんの世界を壊したくないから」
「へ？」

「でも、おとうさんにも仕事用のバッグは必要だと思います」
「ホームセンター戻って買ってくればいい？」
「あなたの目の前には何がありますか？」
「え・・　バラバラになった作業ズボン？」
「これで作ってください」
「雑巾？」
「話聞いてた？ ねえ、話聞いてた？」
「え、あ、聞いてました」
「おとうさんのっ　仕事用バッグを作ってくださいっ」
「え？　　俺が？」
「私が作ろうかと思って、検索して裁断とか作り方の動画とか見たんですけど、
　これはやっぱりあなたが作った方がいいと思います」
「愛里が作ってくれたらとうちゃん喜ぶよ」
「ちがう、遠慮が出る」
「遠慮？」
「あなたと、もともとはおとうさんのだから、二人の汗がたっぷり沁み込んだ」
汗がたっぷり
「この作業ズボンで、あなたが作るから意味があるんです」
「どんな意味？」
愛里が黙った　黙ったまま俺のことジッと見てる
「俺・・　なんか悪りぃこと言った？」
「どんな意味とか、なんとなくそう思っただけで」
あ、そこか　愛里も漠然と・・だったんか
「どうしますか？　　作りたくないなら、これをもう一回全部縫い直してズボンにしますか？」
「や、作る、作ります」
「そうですか、はい」
「そんでも、愛里、勉強は？」
「私にはまだあと一日ありますけど、おとうさんは明日から仕事ですよ？」
「そっか、うん、わかった」
愛里がミシン出してきた
糸は　ショーさんの財布のときとおんなしのだな
「この糸は丈夫なんだそうです」
「だな、針は・・　14 番か」
「これでいいんですよね？　　14 番て、書いてたので」
「おう、これ最高」
愛里の裁断は見事で　メッチャいいカンジにツギんとことこポケットんとこ使えて
縫いながら　チラッと愛里のこと見ると　ワクワクした子どもみてえな顔して見てて
メッチャ可愛いっ
「おっしゃ、できた」

「すごーーい」
「なんかメッチャかっけえな」
「オシャレですよね、ツギのところがアクセントになってて」
「ポケットもさ、ここにあると携帯とか suica 入れられんじゃん」
愛里が端切れを手に取って
「あの・・　お願いがあるんですけど」
「いいよ、なに？」
「これで、これくらいの袋を作ってもらえますか？」
「袋？」
「キュッて紐を絞るやつ」
きんちゃく袋か　大きさからすっと・・　お守り袋みてえなのか
「紐は・・どうすっかな」
「この、お尻のところのツギの長いのは？　いちばん濃い色の」
「だな」
ダダダッと小せえ袋縫って　紐作って通して
「ほい、愛里、できたよ」
「ありがとうございます！」
「何に使うの？」
愛里がいたずらっ子みてえにちょっと笑ってベッドルームに入ってって　出てきた
「これを入れたかったの」
これは・・・　俺が現場で拾った白い小石二個
「机の上に置いてたんだけど、あなたが着てた作業ズボンの袋に入れたら」
愛里が嬉しそうに小石を袋ん中に入れて
「この夏の思い出袋になるから」
愛里・・
「あなたが拾ってくれたシーグラスとあなたの作業ズボ・・」
俺は　抱きしめてて　たまんなくて　抱きしめてて
「愛里・・」
言葉　出なくて
「今年の夏休みは、いろいろあって、濃くて」
愛里が俺の腕ん中で
「すごくしあわせでした」
「でしたって過去形にすんなよ」
「だって、来年の夏休みは三年生で、受験まっしぐらだから」
「俺はバイトするよ」
「えっ？」
愛里が俺から身体離して
「三年生の夏休みに・・　バイト？」
「するよ」
「勉強は？」

「するよ」
「そう・・ですか」
「俺は金稼いで勉強して、愛里のこと守れる男になりてえから」
「そう・・ですか」
「おう」
「このバッグ、おとうさんに見せにいきましょう」
「おう」
「あなたが買ってきたお弁当箱は・・　明日の朝まで内緒は？」
「内緒？」
「あなたがお弁当作って入れてから、ジャジャーンて」
ジャジャーンて　可愛いなあ
「わかった、明日の朝な」
「はい」
とうちゃんの作業用バッグと弁当箱と箸が入った袋持って
愛里と二人で俺ん家に向かった

家に入ったら
かあちゃんはリビングで　とうちゃんはキッチンで晩メシのしたくしてた
俺は　弁当箱と箸が入った袋を自分の部屋に置いて
キッチンのとうちゃんとこへ
「とうちゃん」
「ダイチ、晩メシはサンマの竜田揚げにすっから」
「わかった」
「これならアイリちゃんも食えっからよ」
「だな、あのさ、とうちゃん」
「なんだ、どした？」
「愛里がさ、作業ズボンでさ」
「雑巾作るんだってな、作ったんか」
「ちげえよ、これ作った」
とうちゃんが驚いた顔してバッグ見て
「これは・・　すげえな、あの作業ズボンが、んな、すげえな」
「これは、とうちゃんの仕事用バッグ」
「お、俺の？」
「愛里が、とうちゃんには必要だっつって」
「アイリちゃんは雑巾っつって・・」
「とうちゃん驚かせようっつってさ」
「これは・・　アイリちゃんが作ったんか」
「アイデアと裁断、んっと切ったのは愛里で、俺が縫った」
「ダイチが・・」
「使ってくれよ」

「んな、リッパな・・　ありがてえな」
「着替えとかさ、タオルとか入れてさ」
「そっか？　そんじゃ明日っから使わせてもらうよ」
とうちゃんが　ちっと目ぇ赤くしてバッグ受け取った

晩メシ終わって
かあちゃんと愛里はリビングでしゃべってて
俺ととうちゃんは片付けしてて　俺は米研いで
「ダイチ、明日は学校休みだよな」
「うん、なんつうか、愛里がさ」
「アイリちゃんが朝メシに米食いてえっつったんか」
「あ・・まあ」
「そっか、たまにはな」
とうちゃん　ウソついてごめんな　つかウソ未遂で、ついてはねえけどさ
そんでも、俺は明日の朝からとうちゃんの弁当作りてえからさ
「ダイチ、愛里さんを送ってあげて」
「おう」
かあちゃんの後ろで愛里が　ん？　俺の部屋？　俺の部屋に入る？　うんうん？
なんだ？　部屋に入ったら、愛里がドア閉めて　俺の部屋　臭くねえよな？
「あの」
メッチャ声ひそめて
「おかあさんに、おとうさんのお弁当の話をしたら」
愛里が俺の前に　紺色のとグレーに白の線がいっぺえ入った　ハンカチ？
「大判サイズだそうです」
「これが・・　なに？」
「私、作業用バッグのことばかり考えて、お弁当袋のこと忘れてて」
「それは・・　スーパーの袋に」
「それじゃ意味がないでしょ」
「あ、はい」
「おかあさんが、これに包めば？ って」
「かあちゃんが？　これ、かあちゃんの？」
「私にも参加させてって」
「参加？　なにに？」
「おとうさんお弁当作戦」
作戦て　なんだよめっちゃ可愛いなあっ
「そっか、わかった、ありがとう」
「それじゃ、そういうことで」
「おう、あ、ちげえよ、送るから」
「あ、そうですね」
愛里と二人で家を出た

愛里の部屋の玄関
「愛里、とうちゃんのこと、いろいろ考えてくれてありがとな」
「あなたにはいろいろやらせてしまって」
「俺だったら考えつかなかったからさ」
「おかあさんも、あのバッグ、ポップで可愛いって言ってました」
ポップ？
「あの汚い薄汚れた作業ズホンとは・・　あっ」
「いいよ、かあちゃんが言いそうだよ」
「明日こそ勉強しないと、私は危機です」
「大丈夫だって、俺がついてっから」
「はい、よろしくお願いします」
「愛里」
「テスト期間中のハムハムは禁止です」
「愛里ぃぃ、ハムハムしねえからさあ」
「私は今から勉強するので」
「俺も戻ってからするよ」
「これで」
愛里が　俺に抱きついて
「ガマンしてください」
愛里
「ガマンする」
「はい、それじゃ」
さっと腕離して
「勉強します」
「おう」
「それじゃ」
「愛里、そんじゃまたな」
「はい」
ドアが閉まって　鍵が閉まった
愛里といると　ただの日曜日が　すげえ情実した日曜日になってさ
「愛里、ありがとう」
俺も　部屋戻って勉強しよう

とうちゃんの初弁当

現場に行く時間に目ぇ覚めた
夜中にこっそりとうちゃんの弁当に入れるおかずの下ごしらえしてて
ベッドルームのドア開いたときは　ドッキーーッとしたけど
奥からかあちゃんの「ダイチがお腹空いて何か作って食べてるのよ」って声がして
ベッドルームのドアが閉まったときにホーーーッとした
かあちゃんは俺がとうちゃんの弁当の下ごしらえしてたのを知ってて
何の音か見に来ようとしたとうちゃんを止めてくれた　おそらく
かあちゃんが味方だとメッチャ心強えな　初めて知ったよ
まだとうちゃんは寝てる・・よな
顔洗って　キッチン行って
とうちゃんの初弁当、とうちゃんは、前のを初めての弁当だっつってたけど
俺的には正式は初弁当はこれで　何を作るか考えたメッチャ考えた
でっけえ握りメシ一個とおかず少し・・は、これからいつでも作れる
北斗の拳の弁当箱見てたら　浮かんだ
小人さんの弁当
俵型の小せえ握りメシとミニハンバーグと卵焼きとタコさんウィンナーと
ブロッコリーとミニトマトのサラダ
これっきゃねえだろって思った
「ダイチ、おはよう」
「グワアアアアアアア」
「あ？　ダイチ？　どした？」
身体で弁当箱隠して
「え、あ、んと、とうちゃん、お、おはよう」
「なんだ？　アイリちゃんになんか作ってんのか」
「え、あ、まあ、おう」
「とうちゃんが見ちゃいけねえんか」
「え、あの、あとで、あとで見せっから」
「なんか新しいもんでも作ったんか」
「あ、まあ、んっと、とうちゃん早えな」
「仕事行く前にでっきるだけ掃除しとこうと思ってよ」
「んなこと俺がやるよ」
俺はずーーっと不自然な恰好したままでさ
「ダイチ、ほれ」

とうちゃんが、昨日作った作業用バッグかかげて見せて
「着替えとタオル、入れさせてもらった」
「あ、おう、どう、いいカンジ？」
「いいなあ、ダイチがこれ履いて働いてよ、そんでダイチが縫ってくれてよ」
とうちゃんがバッグ撫でて
「ダイチと一緒にいるみてえな気になんなあ」
愛里　これか？　　俺が縫うことに意味があるって　いや、愛里は漠然としか
「ダイチ、俺もなんか手伝おっか？」
「や、これは・・　あ！　　とうちゃん、俺の部屋掃除してくんねえかな」
「ダイチの？」
「お、俺、今日勉強すっからさ、俺の部屋までは掃除できねえっつうかさ」
「そっか、だよな、そんじゃ掃除してくっからよ」
「うん、お願いします」
とうちゃんがキッチン出ていった
ホへ〜・・　俺はこういうの苦手だ　サプライズとかぜってえムリだ

できた
んっと　携帯の録画ボタン ON にして　カウンターにセットして
つうのは、ゆうべのおやすみ LINE で愛里が
『おとうさんお弁当作戦初日の様子はおかあさんに見せてあげてください』って
『とうちゃんに携帯向けっといっつも固くなっちまってさ』
『それでは　記録という名の　ていのいい盗撮で』っつうんだけど
俺マジこういうの苦手なんだけどな
北斗の拳がついたフタを軽く乗せて
「とうちゃん」
「ダイチの部屋、掃除終わったよ」
俺の部屋から声がして
「とうちゃん、ちょっと来てよ」
とうちゃんが俺の部屋からキッチンに来た
んっと、とうちゃんが写るように携帯の前に誘導して
「とうちゃん、ジャジャーン」
とうちゃんが弁当箱ジッと見て
「北斗の拳じゃん！」
子どもみてえな言い方してさ
「とうちゃん、この弁当箱さ、タダでもらった」
「だれに？」
「弁当箱買いに行ったんだけどさ、底の隅っこがちこっとへこんでて売り物になんねえって、
　店の人がこそっとくれた」
「そっかあ、北斗の拳タダでもらえんなんて、すげえ」

「この箸もさ、箸箱のここんとこがちょっと黄ばんでっからってタダでもらった」
「箸も？　んなリッパなのタダで、よかったなあ」
「とうちゃん、この弁当箱は、とうちゃんの弁当箱だよ」
「え？」
「とうちゃん今日からまた丸山さんとこの仕事再開でさ、なんつうの？
　今日から一週間は俺がとうちゃんの弁当作っからさ」
「え・・」
「そんで昨日とうちゃんの弁当箱買いに行ったんだよ」
「これ・・」
「とうちゃん北斗の拳好きじゃん、これっきゃねえなって」
とうちゃんが弁当箱のフタ　そっと撫でて
「俺の小学校は弁当でよ」
え？
「俺は一学期も通えなかったけどよ、施設から持たされた菓子パン食っててよ」
んな話を　とうちゃんから聞くのは　初めてだ
「他の子たちが弁当持ってきてて、俺は、すげえご馳走ばっかだなって見ててよ、
　弁当箱のフタにいろんな模様ついててよ、こうやって」
とうちゃんが手ぇ横にして
「変身するマンガのとか、俺、それ見てっだけで楽しくってよ、
　そんでも俺が見てっと、みんなサッと隠して、俺が盗ると思ったんだろうな」
とうちゃんが情けねえ顔で笑って
「自分の弁当箱なんてよ、んなもん持てるなんて思ったこともなくてよ、
　施設の子の俺が、自分の弁当箱なんて・・　弁当作ってもらうなんてねえしよ」
とうちゃん・・
「北斗の拳なんてな、すげえかっけえな」
「これはとうちゃんの弁当箱だっつうの」
とうちゃんが　俺の顔見て
「マジ・・で？」
子どもみてえな顔で聞いて
「マジだよ、そんでさ、今日の弁当はさ」
フタ開けて
「これ・・　ダイチの好きな」
「小人さんのお弁当だよ」
「え？　俺に？」
「幼稚園とき作ってもらうとメッチャ嬉しかったからさ、とうちゃんにも作った」
「こんな・・　こんなすげえ弁当・・　もったいなくて食えねえよ」
「食ってくれよ、せっかくとうちゃんに作ったんだからさ」
「ダイチ、なんつっていぃんか・・　ありがとな」
「俺だけじゃねえよ、愛里も協力してくれて、そんで」
俺は、とうちゃんの弁当箱を、かあちゃんがくれたハンカチに包んで

「ダイチ、それは、それ使っちゃ、美里のハンケチだからよ」
「かあちゃんが、とうちゃんの弁当包むのにってくれた」
「え？　美里が？」
「私も参加させてっつって」
「さんか・・っつうのは？」
「あ、かあちゃんもとうちゃんに弁当持たせるのに協力してえってさ」
「美里が・・」
とうちゃんが　下向いちまった　俺は見てねえふりして
「とうちゃん、この袋ん中に入れとくからな」
とうちゃんの袋の底んとこに入れて
「そっか、ありがとな」
とうちゃんの声は鼻声で
「ダイチ、白メシまだ残ってっか？」
「うん、まだいっぺえあるよ」
「そんじゃ」
とうちゃんが手ぇ洗って　塩出してきて
「朝ちょこっとつまむのによ」
かあちゃん用の俵型の握りメシ二個と愛里の分も二個にぎって
「かあちゃんぜってえ喜ぶよ」
夜は俺の晩メシだから余計にだよな
「ダイチ」
え？　でっけえ握りメシ
「握りメシ、食えよ」
とうちゃん
「ありがとう」
美味え
「俺、とうちゃんの握りメシだけで生きてけるよ」
「んな、てえしたもんじゃねえよ」
笑ってっけどさ　とうちゃんの握りメシは　俺にとっては特別なんだよ

とうちゃんが玄関で　かあちゃんが前に買ったスニーカー出して
「美里がこれ履いてけっつったからよ」
白Ｔに緩めのジーンズにスニーカー
「とうちゃん、かっけえよ」
「そっか？　美里がこれ着てけっつうからよ」
とうちゃんがバッグん中の白Ｔを出して見せて
「やっぱ赤ちゃんいるとこだからよ、あんま薄汚れてんのはダメって、美里がよ」
「かあちゃん言うとおりだよ、清潔感大事だよ」
「清潔感てな、俺にあんのかな」
「ハハハ、あるよ」

俺には　あんのかな？　　どうなんだ　愛里？
「そんじゃ、ダイチ、いってくるよ」
「とうちゃん、いってらっしゃい」
「弁当ありがとな」
「明日も作っから、一週間作っから」
「ありかとな」
とうちゃんの目が　ちっと潤んでっから　俺まで
「とうちゃん、早く行かねえと」
「だな、そんじゃ、いってきます」
「いってらっしゃい」
ドアが閉まって
なんか　なんつうか・・
愛里が　俺が心からいいと思ったものっつったのが
俺の感覚ととうちゃんの感覚が合うっつったのも　今　なんかわかった気がして
北斗の拳のアルミの弁当箱は　とうちゃんの憧れの夢の弁当箱だった
あっ　録画 ON にしたままだったあ
キッチンに走ってって OFF

掃除して・・つっても昨日とうちゃんがきれいにやってたから、
せいぜい便所掃除と水回りくれえで、洗面台掃除してたらかあちゃん起きてきて
「かあちゃん、愛里の部屋掃除してくる」って、愛里の部屋行って・・つうことで、
俺は今、愛里の部屋のフローリング掃除してる
「おとうさん、どうでしたか？」
「メッチャ喜んでたよ」
「記録できましたか？」
「記録？」
「という名の、ていのいい盗撮」
「あっ、まだ見てねえけど、いちおう」
「あとで、おかあさんと一緒に見ましょう」
「あ、おう」
とうちゃん、ごめん　マジごめん

そんで今、愛里とかあちゃんが俺の携帯で動画見てる
愛里の目には涙が溜まってて　特に小学生んときの話んとき
「こんな話、初めて聞いたわ」
かあちゃんはサラッと言いながら続きを見て
とうちゃんが、かあちゃんがハンカチくれたっつうとこで下向いちまったとこで
「ハンカチくらいで」
ハンカチくれえって、とうちゃんは下向いちまってつまりは泣いたっつうことでさ
愛里が俺に

「おかあさん、感動してますね」
「え？」
「愛里さん？　私は、べつに、感動とか、そういうことじゃなくてね」
え？　マジ？　このかあちゃんがしどろもどろってさ
愛里がフッと笑って　すげえ　かあちゃんのこと　そんなにわかるなんてさ
俺は全然わかんねえ

昼はかあちゃんはとうちゃんが作った握りメシ食って
愛里もとうちゃんが作った握りメシ食って
俺はとうちゃん用に作って残ったおかず食って
午後からは愛里の部屋で　愛里と勉強
「あの、この問題の答え、これで合ってます？」
愛里が俺にノート見せて　指さして　ん・・っと？　ここか
「合ってる、これでいい、解き方もカンペキ」
「よかったあ、あとはもう・・　知らない」
「知らないってさ、ハハハ」
「やっぱり、あなたじゃなきゃダメでしたね」
「あ？ なにが？」
「小人さんのお弁当なんて、あなた以外思いつかないから」
「逆にそれっきゃ思いつかなかった」
「北斗の拳を見たときのおとうさん、小学生の男の子みたいでしたね」
「うん」
「やっぱりあなたで正解ですね」
「正解かどうかはわかんねえけど、まあ、喜んでくれてよかったよ」
「私には北斗の拳なんて、頭のどこを探してもないし、タダでもらうとかムリ」
あ、そうだ
「愛里、あの作業ズボンで作ったバッグさ、とうちゃんが、俺がこれ履いて働いて、
　俺が縫ったっつうのは、俺と一緒にいるみてえだなんつってよ、ハハハ」
「え・・」
「えっ？　愛里？　なんで泣いてんの？」
「感動しちゃって・・」
「なにに？」
「なんていうか・・　森下家の父と息子」
「なんだよそれ」
「よかったですね」
「愛里のおかげだよ」
「私はなにも・・　でも、おかあさんはすごいですよね」
「かあちゃん？ なに？」
「ハンカチ一枚でおとうさんを泣かせるって」
「あ・・　だよ・・な」

「おとうさん、ハンカチのことハンケチっていうの？」
「うん、昔っからでさ、俺どっちが正しいんだか小せえ頃ゴッチャになってた」
「ハンケチって、なんか可愛い」
「そっか？」
「はい」
愛里は・・　もっと可愛いよ
「愛里」
愛里が顔あげて　俺を見て　なに？　　なんで突然真顔？
「私は、あとは現国を一人で勉強したいので」
「あ？　　あ、そっか、うん」
「終わったら、あなたの家に行きます」
「おう」
察知されたな
あれ？　　ハムハムは禁止っつったけど
「愛里、ハムハム禁止ってさ」
愛里がキッと睨んだけど
「それってさ、ハムハムはダメだけど、ふつうのはいいんだよな？」
「私の中ではハムハムは、そういう全般含めてってことになってますけど」
「えっ？　　チュッて、それも？　　チュッだけは？」
「テスト期間中は、テストだけに集中しないと」
「え、あ、うん」
「あなたは大丈夫でしょうけど、私は危険です、実力テストは怖いです」
「そっか、わかった」
「ご協力お願いします」
「おう、まかせろ」
「はい、おまかせします」
愛里のためならさ　俺は　んな　そんくれえ　どうってことねえよ
「そんじゃ、またあとでな」
「はい」
「あの・・さ」
「はい？」
「あの・・　ギュッてすんのも、ダメ？」
「あなたは・・」
「あ、ごめん、わかった」
「ギュッくらいは・・　まあ」
「いい？　　ギュはいい？」
「なんかそんなカンジになられるとダメって言いたくなる」
「愛里ぃぃ」
「もうしてますよね」
「してます」

「そうですか」
愛里も　俺の背中に腕まわして
「おとうさんお弁当作戦、成功してよかっさたですね」
「うん、ありがとな」
「あなたが正解」
「なんだよそれ」
腕少しだけ力抜いて　そんで
「アーーーーッ」
「へへ」
「私が実力ガッタガタになったら」
「俺のせいっす」
「まあ・・　今日は作戦成功お祝いということで」
「あざーす」
「そういう軽いカンジ？　　なにそれ？」
軽くねえよ　軽いわけねえじゃん
「愛里、ありがとう」
「え・・　よかったです」
「そんじゃ」
俺がドアの外出たら速攻でドア閉められて速攻で鍵かけられた
そういうとこがさあ　メッチャ可愛いんだよなあ
晩メシのしたくしねえと

育児のプロ

晩メシは、とうちゃん用のミニハンバーグ作るときに作っといたタネで、
ピーマンの肉詰め、プロッコリーとベーコン炒めたのと大根サラダと・・
生姜とネギたっぷり乗っけた冷ややっこ、イソフラボン必要だかんな
「ただいま」
とうちゃんだ
「とうちゃん、おかえり」
「ダイチ、ただいま」
とうちゃんニッコリしてさ　仕事うまくいったんだな　うまくいかねえわけねえけど
「すぐ着替えてメシ作っからよ」
「晩メシはもう俺が作ってあるよ」
「なんか悪りぃな」
「悪くねえよ、この一週間は俺が作るって約束したじゃん」
「そっか？　　ありがとな」
「とうちゃん、どうだった？」
「それがよ、奥さん疲れててよ、目の下んとこ、なんつうんだ？」
「クマ？」
「あ、うん、そんで顔も青くてよ、かわいそうだったな」
「カズオ、おかえり」
かあちゃんも出迎えてるよ
「美里、ただいま」
とうちゃん嬉しそうでさ
「どうだった？」
かあちゃんにもおんなしこと聞かれてるし
「あのよ、丸山さん、男の家政夫だっつってなかったみてえでよ」
「契約書にはちゃんと森下一男って書いたし、あちらも確かめたはずだけど」
「俺が入ってったら、ちっとこう後ろに下がっちまって」
「後ろに下がった？」
「ポピンズ紹介所の森下一男だっつったんだけど、ボーッとしたまんまでよ」
「ボーッと？」
「俺みてえなおっさんが来たからビックリしちまったんじゃねえかな」
「働いてはきたのよね」
「俺が掃除して洗濯して干してっつうの見てるうちによ、なんか」
「だったらまあよかったわ」

とうちゃんの仕事っぷり見たらさ、男とかそんなん関係ねえよな
「おじゃまします」
愛里
「おとうさん、おかえりなさい」
「アイリちゃん、ただいま」
「どうでしたか？」
またおんなしこと聞かれてるよ

晩メシんときは　とうちゃんはかあちゃんと愛里からいろいろ聞かれててさ
「どうだった？　　久しぶりの赤ちゃんの世話」
「16・・7年ぶりだからよ、どうなんかなと思ったけど、身体が憶えててよ」
「私の身体にはいっさい記憶が刻まれてないから、その感覚はわからないけど」
「え？　　いっさいって・・」
「愛里さん、私はね、オムツさえ換えたことがないの」
「オムツ・・さえ？」
「おかげで退院したその日からグッスリ眠れてね」
「理想ですね」
愛里　愛里んときは俺がやったから
「え？」
愛里が俺の熱い視線感じたんだな　俺のこと見た
俺は愛里にはオムツ換えさせたりしねえから
「なに？　　なんですか？」
伝わってねえな　全然
「あ、や、なんもねえよ」
「愛里さんも、そういうことができる人と結婚すればいいのよ」
かあちゃん　それは俺ってことだよな　俺を推してくれてるっつうことだよな
「私は、赤ちゃんとか結婚とか、大学だって、今は実力テストのことで頭がいっぱいで」
「そうよね、ハハハ」
そうよねって　だったらなんで聞いたんだよっ
「ダイチ」
とうちゃん？　　小せえ声で
「とうちゃん、どした？」
「肉詰め、美味えよ」
「マジ？　　とうちゃんがいっつもやってるとおりに作った」
「ちょっとお肉が硬かったんじゃない？」
「ハ？　　とうちゃんがいっつもやってるとおりにやったよ」
「同じレシピでも作り手が違うとね」
ハァアア？
「美味しかったです」
愛里　愛里ぃぃぃ

「愛里さん、慰めなくてていのよ」
「そうじゃなくて、私、ピーマンが大嫌いだったんですけど」
「えっ　マジ？」
「最初の日に言いましたよね？」
「そんでも弁当に入れたピーマン全部食ってくれたじゃん」
「そうなんです、ヤケになって食べてみたら」
ヤ、ヤケ？
「美味しくてビックリしちゃった」
「マジ？」
「愛里さん、今も全部食べたわよね？」
「はい、美味しくて」
「あら、そう」
「森下家で、私、好き嫌いがかなりなくなりました」
マジかあ
「今も食べられないものってあるの？」
「ん・・・　多分、レバーは」
「私もレバーは大嫌い」
「ですよね？　　あれはちょっとどうやっても」
「鶏レバーだけはちょっと食べられるようにはなったけど、好んではねえ」
「ムリです」
ぜってえレバーは出しません　安心してください
「フォアグラは」
フォ、フォアグラ？
「ステーキに乗ってるのはなんとか食べられますけど」
「まあれはね、私もなんとか食べられるけどね」
「単体では・・　食べたいとは思えなくて」
「だって、あれって脂肪肝にさせたガチョウの肝臓でしょ？」
「そうですよね、不健康ですよね」
なんか　すげえ話になってっけど　この家ではぜってえ出ねえから
あん肝は・・　あん肝はかあちゃん好きだよな　あれもレバーじゃねえの？
まあいいや

かあちゃんと愛里はリビングでしゃべってて
俺ととうちゃんは後片付け
とうちゃんが作業用バッグから弁当箱出してきて
「ダイチ、すげえ美味かった」
「マジ？」
「俺がキッチンで食ってたらよ、奥さんが来て、可愛いっつってよ」
とうちゃんはそう言いながら弁当箱洗おうとすっから
「とうちゃん、俺が洗うよ、ついでだしさ」

「俺が洗う、俺の弁当箱だからよ」
とうちゃんがメッチャ嬉しそうな顔でさ
「そっか、だな、とうちゃんの弁当箱だもんな」
「奥さんに、この弁当は息子が作ってくれて、この弁当箱も息子が買ってくれたって」
とうちゃんは丁寧に弁当箱洗いながら
「そしたらよ、この子もそういう子になって欲しいっつってよ」
「つことは、赤ちゃんは男の子？」
「そうなんだけどよ、最初奥さんがミルクあげてっとき、なっかなかなくなんねえんだよ」
「飲みが悪りぃっつうこと？」
「30 分くれえかかってよ」
「30 分も？」
「そんで、哺乳瓶洗うとき乳首んとこ見たらよ、いっちゃん小せえ穴でよ」
見ただけでわかるんか
「これじゃねえかなって、奥さんに言ってよ」
「なにを？」
「まだ吸う力弱えから、もひとつ大きい穴の方がいんじゃねえかって」
そうなんだ
「そんで、近くの店で買ってきてよ、次の授乳んとき」
とうちゃんは　赤ちゃん用品や用語っつうの？　　そういうのよく知ってんだよな
「ゴックゴク飲んでよ、奥さんも喜んでてよ」
「とうちゃん、よくそんなこと知ってんな」
「ヒトミんときな、なっかなか飲まねえなと思って相談しに行ってよ」
「どこに？」
「小児科」
とうちゃんの行動力はすげえな
産婦人科でも、かあちゃん待ってる間にいろいろ情報仕入れてたっつってたもんな
ねえちゃん経由で聞いたんだけどさ
「そしたら、おばちゃんの看護師さんが教えてくれてよ、それでな」
「へえ、そうなんか」
「ダイチんときは最初っからそうしたから、あっつう間に飲み終わんだよ、
　ダイチはでっかくなんだろうなと思ったら、なったな」
「とうちゃんとおんなし身長だよ、あ、つうことは、とうちゃんもメッチャ飲んだんじゃね？」
「俺は・・」
とうちゃんが上向いて　なんか考えて
「憶えてねえな」
「俺だって憶えてねえよ」
「なんかな、ダイチのこと育ててっときのこと思い出してよ」
「俺？　　最初に子育てしたのはねえちゃんだろ？」
「ヒトミんときは必死こいててよ、なんかマジで必死であんま憶えてねえんだよ」

「んなさ、ハハハ　ねえちゃん怒るよ」
「ダイチんときは二人目だったからよ」
「余裕あったっつうこと？」
「そこまでじゃねえけど、そんでもな、可愛くてよ、寝てる顔ずっと見ててよ」
とうちゃんから　俺が赤ちゃんだったときの話聞くのが好きでさ　何回聞いても飽きねえ
「あんま見てばっかで掃除すんの忘れそうになったりよ」
「ねえちゃんときは？」
「ヒトミんときは・・　心配が先っつうかよ、なんかこう」
とうちゃんが水で濡れた両手かかげて
「大切な、なんつうんだ？　んっと、お宝？　預かってるみてえなよ」
「俺はお宝じゃねえの？」
「ダイチは可愛いおちんちんついててよ、仲間だあ、俺の仲間だあっつうな」
「ハハハ、おちんちん仲間かよ」
「小学生の会話ね」
か、かあちゃん　なんでいっつもとうちゃんと楽しくしゃべってっとさ
「ダイチ、愛里さんのこと送ってあげて」
「おう」
かあちゃんの後ろにいた愛里の顔が・・　え？　なんか引いてね？　おちんちん聞いてた？
それはさ、男はみんなついててさ、なんつうか、まあいい、送ろう

愛里の部屋の玄関
「愛里、愛里のおかげで、とうちゃん無事仕事再開できたよ」
「私のおかげではないです、あなたやおかあさんがバックアップしたから」
「そんでもさ」
「おとうさんが勘違いしてることがあります」
「え？　なに？」
「おかあさんから聞いたんですけど」
「とうちゃんが、どした？」
「派遣先の奥さんが、男の家政夫さんだと思ってなかったって」
「丸山のおばちゃんが言い忘れたんじゃねえかな」
「おとうさんを見て後ろに下がっていったって」
「男だったからビックリしたんじゃねえかな」
「おとうさんがイケメンだったからです」
「へ？」
「そのあとボーッとしてたっていうのも、おとうさんがイケメンだったから」
「え、あ、どういう」
「奥さんはきっと、丸っとしたおばちゃんみたいなおじさんが来ると」
「ハハハ、おばちゃんみてえなおじさんてさ」

「そこにあのおとうさんですよ？」
あのおとうさん？
「自分の人生で、生で見ることがあるとは思わなかったイケメンが玄関に」
そういえば・・　愛里は　最初にとうちゃんに会ったときからスケメンイケメンて
「私だったらもう、フリーズしちゃってしばらく動けないかもぉ」
「へえ」
「その上、家事はカンペキ、育児もできちゃうって」
「ああ、まあ、だな」
「伝説の家政夫って言われてる意味がよくわかります」
「そうなんだ」
「どうしたんですか？」
「あ？　なにが？」
「いつもなら、おとうさんの話になるとメッチャのってくるあなたが、なんか」
「や、とうちゃんがすげえのはわかってっから」
「あ、そうですよね」
「あのさ」
「はい」
「あの・・　俺ってさ、よくとうちゃんに似てるって言われんだけどさ」
「似てますね」
「そんじゃねあの、愛里にとって俺は・・　どう？」
「どうって、なにが？」
「や、だから、愛里から見て俺はどう見えんのかなって」
「モリシタダイチに見えますけど」
や・・　そういうことじゃねえんだよ　じゃなくてさ
「明日から実力テストですね」
「え？　あ、おう」
「現国と数学、まずはこれを失敗しなければ気持ち的にいけそうな・・　どうかな」
「あの・・さ」
「はい」
「明日って、現国と数学と、午後から世界史あるよな」
「あります」
「あ、わかってんだ」
「わかってますよ、そんなこと、忘れてたら破滅です」
「愛里が世界史のことはなんも言わねえからさ」
「世界史は、暗記するしかないですよね」
「だな」
「そういうことです」
そういうこと？
「あ、うん」
「問題出してみてください」

「問題？」
「世界史、アテネ」
「え、急に・・　んっと、アテネの僭主政治を行ったのは？」
「ペイシストラトス」
「すげえ」
「すげえって、これは絶対出ますよね」
「即答したからさ」
「すげえとわかるあなたはもっとすごいと思います」
「俺はゆうべ見たばっかだから憶えてただけでさ」
「まあ、とにかく世界史は暗記で」
「そっか、うん」
「それじゃ、また」
「愛里、それじゃまたな」
「あ！　明日の私のお弁当」
「愛里の弁当？　作るよ、ったりめえじゃん」
「おとうさんの好みを優先してください」
「とうちゃんの好み？」
「おとうさんが好きなもの、食べたいだろうなっていうもので」
「とうちゃんは、食えりゃありがてえっつう人だからさ」
「あ・・　そうでしたね」
「そんでも、ありがとう、とうちゃんのこと考えてくれて」
「おとうさん嬉しそうだったから」
「うん」
「それじゃまた」
「愛里」
「ダメです」
「あ、はい」
ドア閉めたら　速攻で鍵閉まった
明日の弁当か　何にすっかな
じゃねえよ、俺も実力テストの勉強しねえとさ　まあサラッと見返すくれえだけど
家戻ろう

のり弁

朝起きて
今日はのり弁だ
じゃねえ、室力テストなんだけど
ゆうべ考えた　とうちゃんの弁当
愛里がとうちゃんの好きなものでいいつってくれたけど
好きなものっつうか、THE・弁当みてえなの食いてえんじゃねえかなって
下準備もしておいた
シャケ焼いて身ぃほぐしておいた
二段のり弁だけど　真ん中にほぐしたシャケ敷き詰める
のり弁にシャケは付き物だけど、そのまんまだと愛里が骨を・・って考えたら
そういう構想になって　あとはちくわ三等分にして真ん中で切ってちくわの磯部上げ
のり弁にはちくわの磯部上げはマストだろ
きんぴらも作っておいたレンコンとニンジンとさつま揚げのやつ
ゆうべの大根サラダの大根を梅とハチミツちょっと入れたので和えておいた
顔洗って
キッチンに行くと
「ダイチ、おはよう」
「とうちゃんおはよう」
とうちゃんはかあちゃんの卵焼き作ってんのか
「とうちゃん、今日は俺のスペシャルのり弁だよ」
「スペシャルのり弁？」
「真ん中にシャケ敷き詰めんだよ」
「ダイチはいろいろ考えてすげえな」
「とうちゃん、のり弁好き？」
「食ったことねえかんな」
「俺とねえちゃんにはよく作ってくれたじゃん」
「こんなんかなって作っただけでよ」
とうちゃんが焼けた卵焼き簀巻きにして
「現場で働いてっとき、みんな弁当屋で弁当買ってきてよ、のり弁てどんなんかなって、
　そんでも弁当屋の弁当は高けえから買ったことねえけどよ」
「俺、とうちゃんののり弁大好きだよ」
「そっか？　　そんじゃダイチの弁当は俺が作っからよ」
「え？ や、いいよ、そんじゃ意味ねえじゃん」

「ダイチが俺の作ってくれんだろ？」
「うん」
「そんじゃ、俺はダイチの作っから」
「なんだそれ、おもしれえ」
「そんじゃ・・　美里ものり弁にすっかな」
「4 人おそろいの弁当？」
「おかずはちっと違げえけどよ」
「磯部上げは入れてよ、俺、好きだからさ」
「美里のにももらっていっか？」
「いいよ」
とうちゃんが作ったおかずは、卵焼きとごぼうとニンジンのゴママヨサラダと・・
え・・
「とうちゃん、これって・・」
とうちゃんが困った顔して
「う・・ん、鶏レバーの竜田揚げ」
「ゆうべかあちゃんが」
「あんときよ、前の日に血抜きしてタレに付け込んだのが冷蔵庫に入れてあってよ」
「あ、奥に入ってた小せえタッパー」
「美里は貧血になりやすいからよ、たまには食って欲しくてよ」
「俺・・　知らねえよ？」
「ダイチがヨーグルト買ってたとき、鶏肉屋で買ってよ」
「あそこのは新鮮だもんな」
「もったいねえしよ、食わなきゃ食わねえでいっかなって」
「そっか、まあ、だよな」
「ダイチには入れていぃんだよな？」
「俺は好きだからさ」
とうちゃんの弁当箱、かあちゃんのハンカチで包んで
「とうちゃん、これ、とうちゃんの弁当」
「ありがとな」
とうちゃんが作ってくれた俺の弁当と俺が作った愛里の弁当をそれぞれの弁当入れに入
れて
愛里が作ってくれた手提げに入れて・・と
「ダイチ、握りメシ食ってけ」
「ありがとう、そんじゃ俺もとうちゃんに作る」
「白メシ少しっきゃ残ってねえから、かき集めてノリでも巻いて食うからよ」
「そんじゃ、ちょっと待っててよ」
釜ん中の白メシかき集めて、小せえ俵型の握りメシにしてノリ巻いて
「とうちゃん、ほい」
とうちゃんがニッコリして
「ありがとな」

口ん中に放り込んだ
「そんじゃ、俺、愛里のこと迎えに行って学校行く」
「そっか」
玄関までとうちゃんが来てくれて
「とうちゃん、いってきます」
「ダイチ、いってらっしゃい」
とうちゃんが作ってくれた弁当　久しぶりだな　なんかメッチャ嬉しい

今朝は　ここ曲がって真っ直ぐ行けば校門っつう角で　愛里が手ぇ離してさ
「また盗撮されますから」ってさ
一緒に歩いてんだから手ぇつなごうと離そうとほぼおんなしじゃん
・・て言おうと思ったけど、愛里がイヤがることはしたくねえから言うこと聞いたよ
そんで、教室入ると、こーーんな離れてる席だろ
早く席替えになんねえかな
学活終わって　現国のテスト　愛里の顔が緊張してる
愛里、現国だぞ　愛里はけっこう得意だろ　んな緊張しなくていいよ
「始め！」
一気に集中して問題解いた

現国終わって 10 分休み
愛里は・・　教室出てった　便所か　俺もションベンしておくか
便所から出たら
「森下」
「おう、森山」
「土曜日はありがとう」
「もう大丈夫なんか」
「もう大丈夫だよ」
「そっか、よかったな」
え、なんで俺の腕つかむんだよ？
「あのさ」
俺はさっさと教室帰って愛里に数学のポイントをもっかい教えてえんだよ
「俺が今、クラスでなんて呼ばれてるか知ってる？」
知らねえよ、知りてえとも思わねえよ
「森山だろ」
森山が俺に　顔　近づけんなよ
「プリンセス」
「ハ？」
どう見てもプリンセスではねえだろ　男だしさ
「森下に抱きかかえられた姿がプリンセスなんだってさ」
それは・・

「森山は熱中症で倒れたのにさ、んなこと言う前に心配しろっつうんだよ」
「森下優しいな」
「優しいとかじゃねえよ、ふつうだろ、んなさ」
「なんか、慰められたよ」
「慰めたわけじゃねえよ」
「現国の漢字ひとつ間違えたからさ」
それかよ
「賄うを度忘れしちゃってさ、貝部のところに目を書いちゃって」
惜しいな　惜しくはねえけど
「賄うなんて漢字を度忘れするなんてさ」
なんで俺はんなこと聞かされてんだ？
「森下、俺の脳みそ、もう白くなっちゃったのかな」
「あ？　　なに？」
「熱中症でさ」
「え？　　あ、大丈夫だよ、あんくれえで、まだ生卵だよ」
わかんねえけど
「そうか、森下に言われると安心する」
俺の言葉で安心すんなよ　俺はわかんねえんだから
「あ、そろそろ休み終わるよな」
そうだよっっっ
「それじゃまた」
「おう」
ったく　マジで 10 分休み終わっちまったじゃん！

数学
愛里　愛里はぜってえ大丈夫だよ　あのけっこう難しい幾何を解い
「始め！」
一気に集中
・・・で、終わった
なんかメッチャ簡単だったな
愛里が何回もわかんねえって聞いたとこが全部出てさ　愛里すげえな
やっと　やっと昼休みだ！
「愛里」
「はい」
「どうだった？」
「なんかあの、はい、なんとか」
愛里の表情は
「そっか」
わりと大丈夫だったんだな

昼休みの中庭　懐かしいなあっ
「わあ！　　のり弁！」
愛里が嬉しそうな顔してさ
「え？　　なんで海苔が縮んでないの？」
「縮んでねえっつうより端っこから敷き詰めてっからさ」
「そんなワザを・・」
「とうちゃん」
「ああ、すごいですね」
愛里が俺の弁当をジーーッと見て
「あれ？　　なんか・・　おかずがちがう」
「俺のはとうちゃんが作ったんだよ」
「おとうさんが作ったお弁当？　　そっちも美味しそう」
「食う？」
「少しもらってもいいですか？」
「全然いいよ」
愛里が卵焼きを・・
「美味しい・・けど、不思議」
「不思議？」
「あなたのと同じような味つけなのに、なんか、すこ〜しちがう」
「それはあれじゃね？　　かあちゃんが言ったレシピはおんなしでも作り手がっつうさ」
「どっちも美味しいです」
「そっか」
「これも食べていいですか？」
あっ　それは　鶏レバーの・・
「美味しい」
「えっ　マジ？」
「なんだろう、この食感・・　何のお肉？」
「え・・　鶏の・・」
「鶏肉？　　こんな食感の食べたことない、味が染みてて」
「おといからタレに付け込んでたって」
言った方がいぃんかな
「生姜も効いてて　美味しい」
「そ、そっか」
「竜田揚げ？」
「あ、うん」
鶏レバーって言ったら・・
「でも、なんか食べたことのない食感」
世界史のテストに影響すっかもしんねえから　言わないどこう
「不思議」
やっぱ言った方がいぃんかな

「1ヵ月前と同じところに座ってるのに、なんかちがう」
あ、それか
「9月だからじゃね？」
「それもあるかもだけど、なんか・・　ちがって見える」
「そっか？」
愛里が俺の方見て　あれ？ って顔した　なに？
「ちょっと笑ってみて」
「笑う？　　こうか？」
ニカッてしてみせたら
「プッ」
「え、なんで笑うんだよ、愛里が笑えっつったからさ」
「歯に海苔がついてる」
「え、マジ？」
舌で・・　どこだ？　　あ、これか？　　なっかなか取れねえな　あ、取れた・・か？
「ハハハハ」
「なんで笑うんだよぉ」
「だって、舌で歯を・・　こんなにしちゃって」
俺の真似してる愛里の顔が　メッチャ可愛くてさ
「しあわせだーーー！」
「やめて！　　大きな声で」
「だってしあわせだからさ」
「歯に海苔がついたのが？」
「ちげえよ」
愛里の手をにぎって
「また盗撮されるかもですよ」
「いいよ、そんなん」
「そうですね」
「え？」
「これくらいなら」
マジ？
「イチゴ食べましょう」
「イチゴアーンしていいっすか？」
愛里が俺のこと睨んだ
「あ、やらねえっす」
「次は世界史ですね」
「おう」
「はぁぁぁ、あと3日も続くなんて」
「愛里は大丈夫だって、数学だってよかったんだろ？」
「よかったまでは・・　あなたに教わったところが出てビックリだったけど」
「俺も愛里すげえなって思った」

「できてるかどうかは別ですから」
「アテネのペイシストラトスが行った政治は？」
「え？　僭主政治」
「ほらな」
「そうですよね、そういうパターンもありますよね」
「愛里は大丈夫だよ」
「あなたに言われると・・　大丈夫みたいな気がしてくる」
そっか　愛里　そっかあ
「そろそろ戻りましょう」
「おう」
空になった弁当箱　手提げに入れて　愛里と二人で教室に戻った

世界史も終わった
出たよ　ペイシストラトスの僭主政治
両方 (　　) だったよ　そういうパターンありか
つか、今回の、やたら (　　) だらけじゃね？　書けたけどさ
あれ？　愛里が　なんか　ボーッとしてっけど　どした？
あ、学活始まる

学活終わって　愛里んとこへ
「愛里、帰ろう」
「あ・・　はい」
まだボーッとしてんな
教室出て　ロッカーで靴履き替えるときも　愛里はボーッと黙ったままで
なにがあったんだ？
「愛里、どした？　なんかさ」
「私・・　こういう感覚は・・　初めてで」
「ん？ え？　なに？」
「本当にそうなのかどうかは・・　ちょっとわからないですけど」
「あ、うん、どした？」
愛里が俺に顔近づけてくれたあ
「もしかしたら」
すげえ小せえ声で
「もしかしたらなんですけど」
「うん、なに？」
「世界史・・　100 点かも」
「マジ？　すげえじゃん」
「まだわかんないから」
「そんでも愛里は科目別で世界史はいつもトップ 10 に入ってんじゃん」
「でも 100 点は取ったことないです」

「そんでも 100 点かもって思ったんだろ？」
「思っただけですけど」
「そういうときは、だいたい 100 点だよ」
「そうなの？」
「うん」
「あなたが言うなら・・　なんか、ちょっと自信が持てます」
「愛里がんばってたもんな」
「ママのせいかも」
「せい？　　せいっつうのは？」
「ママにアタマにきてずーーっと世界史の参考書に集中してたから、
　さっきも、これはあのページの下のところにあったって絵みたいに見えて」
「すげえ」
「挿絵まで見えました」
「すげえよ、愛里」
「まあ、とにかく、一日目は終わったので」
「だな」
「明日は・・」
「明日のことは帰ってからでいい」
「あ、はい」
校門出て　俺は　愛里の手ぇにぎった
「俺は愛里のカレシだから」
「そうですね」
「こんくれえさせてくれよ」
「わかりました」
二人で　手ぇつないで帰った

鶏レバー

晩メシは野菜カレー
帰ってきてから愛里の部屋掃除して　買い出し行って作った
「ただいま」
「とうちゃん、おかえり」
「ダイチののり弁美味かった」
「とうちゃんの弁当も美味かったよ、愛里も食ってさ」
「え、そんでも、あれは」
「あれも食っちまってさ」
「アイリちゃんは嫌れえなんだろ？」
「美味えっつってた」
「へ？」
「なんなんだかわかってなかったけど」
「そっか、美里も最初はわかんねえで食ってくれててよ」
とうちゃんもキッチンに来て
「奥さんに笑われちまったよ」
「なんで？」
「弁当食った後、歯に海苔ついてるってよ」
「俺も海苔ついてるって愛里に笑われた」
「そっか、ダイチもか」
とうちゃんニコニコしててさ　仕事順調なんだな
「今日ダンナさんの部屋掃除してよ」
ダンナさんの部屋って、夫婦別室なんかな
「狭めえ部屋で両脇の壁んとこの棚にズラーッと本があってよ」
書斎か？　書斎があるって　すげえな
「そんで、机の上がゴチャーッとしててよ」
「それ片付けたんか」
「そこは手ぇつけねえどいた」
「なんで？」
「なんかよ、ヒトミの机の上みてえなカンジしてよ」
「ねえちゃんの？」
「ヒトミの机の上、ゴチャーッとしてっけど、なんつうんだ？」
とうちゃんが手ぇ洗いながら
「ヒトミにっきゃわかんねえ、ヒトミの、なんかがあってよ」

「なんかってなんだよ　ハハハ」
「だからよ、なんつうんだ？　　さわっちゃいけねえ気ぃしてよ」
「そんじゃどこ掃除したの？」
「棚んとこの埃取って床掃除してよ」
「そんでも、机の上も掃除して欲しいんじゃね？」
「どうなんかなあ」
「奥さんに聞いてみりゃいいのに」
「寝ててよ、やっと寝れてんのに起こすってのはよ」
「そっか、だよな」
「そんでよ、ダンナさんの部屋の棚の上に、こんな、なんか建物の」
「ジオラマ？」
「あ？」
「模型みてえなやつ？」
「それ、そういうのいっぺえあってよ」
なんだ？　　設計家か？
「すげえよな、あんな細けえの作るってよ」
「とうちゃんだって、お菓子のおまけのプラモデル組み立ててくれたじゃん」
「あれはくっつけりゃいいだけだからよ」
「俺まだ持ってるよ」
「そっか？」
「とうちゃんと一緒に拾った石とか、そういうの箱に入れてクローゼットに入れてる」
「そっか」
とうちゃんが嬉しそうな顔して　とうちゃん、あれは俺の宝箱だよ
「今日洗濯したんだけどよ、作業服入っててよ」
「作業服って、現場の？」
「どっかで見たことあんだよな」
「作業服はどれも似たようなカンジなんじゃね？」
「そんなに汚れてねえんだよ」
「作業服なのに？」
「なんかよ、すげえリッパなやつでよ」
模型作ってて作業服・・つうことは、設計家がたまに現場見るってやつか？
「ただいま」
かあちゃんだ
「おじゃまします」
愛里も一緒だ
キッチンにかあちゃんと愛里が入ってきて　ギュウギュウなんだけど
「のり弁美味しかったわよ、中にシャケが入ってて」
「あれはダイチが考えてよ」
「へえ、そうなの」
「俺の弁当もとうちゃんが作ってくれた」

「カズオがダイチの？」
「今日は 4 人とものり弁」
「あら、そうだったの」
「私もおとうさんが作ったおかず、いただきました」
「愛里さん食べたの？　あの竜田揚げ」
「はい、美味しかったです」
「あれが何か・・」
かあちゃん　たのむ　言わねえでくれ
「鶏肉ですよね、今まで食べたことのない食感で」
かあちゃんが　俺ととうちゃんの方を見た
「そうね」
こっち見ながら
「たまにならね、ああいうのもね」
なんか　なんだ？　俺ととうちゃんが犯人みてえな雰囲気になってっけど
「たまになら　ね」
「おとうさんと、あの、ダイチさんの、両方食べられて得した気分です」
「そう、それなら・・」
かあちゃんが愛里にニッコリして
「よかったけど」
つって　真顔でまたこっち見た　怖えよ　かあちゃん
かあちゃんと愛里がキッチン出てって
ハアハアハア　息止めてた
とうちゃんのこと見たら　とうちゃんもハアハアしてて　とうちゃんも息止めてたんだな
「とうちゃん、晩メシ、野菜カレー、と、サラダ」
「だな」
見りゃわかるよな

晩メシ食い終わって
かあちゃんと愛里はリビングでなんかしゃべってて
俺ととうちゃんは後片付けして
「奥さんがよ、夜中に授乳すっだろ？」
「あ、うん」
俺はよくわかんねえけど
「ゆうべは時間かかんねえでよく飲んでよく寝てくれたっつってよ」
「すげえじゃん、とうちゃん来てくれてよかったじゃん」
「うん、そう言ってもらったんだけどよ、手ぇかかんねえ赤ちゃんでよ」
「そっか」
「腹いっぺえ飲むとぐっすり眠ってよ、あんま泣かねえしよ」
それは・・　とうちゃんが泣かせねえって　かあちゃん言ってたっつう

「ダイチみてえだなって」
「俺、手ぇかかんなかった？」
「ダイチはいっぺえ飲んで、いっぺえウンコして」
「ハハハ、なんだよそれ」
「ヒトミんときは、首座わんねえうちはこういうのに入れてよ、掃除すっときも、
　メシ作るときもそれに入れて、そばにおいてたんだけどよ」
あれか？　　ねえちゃんが赤ちゃんときの写真のコンパクトベビーベッドみてえの
「ダイチんときは、首座んねえときから使える抱っこひもでここんとこに抱っこしてよ」
「俺の赤ちゃんときの写真、いっつもとうちゃんの胸んとこに入ってるよな」
「ヒトミの幼稚園のお迎えんときもダイチ抱いてな」
すげえな、とうちゃん　新生児と幼稚園児同時に世話してたんだよな
「あの抱っこ紐も山口さんがおしえてくれてよ」
山口さん・・つうのは、んっと、とうちゃんのママ友のアメリカ人だよな
「山口さん元気にしてっかなあ」
「アメリカに帰ったんだっけ？」
「ダイチが 2 歳くれえんときかな、山口さんには世話になってよ」
「とうちゃんが声かけたんだよな」
「ねーちゃんと気ぃ合うのは外人かなって」
だよな　とうちゃんは鋭でえよ　かあちゃんのことメッチャわかってるよ
「赤ちゃん見てっとな、ダイチが赤ちゃんのときのことばっか思い出してよ」
「マジ？　　俺のことばっか？」
「ダイチなら、もっかい育ててえな」
「そんじゃさ、俺の子、育ててよ」
「ダイチの子？」
「俺も育てっけどさ、とうちゃんに教えてもらってさ、一緒にさ」
「ダイチの子なら可愛いだろうな」
「とうちゃんの孫じゃん」
「俺の・・　孫？」
「俺の子はとうちゃんの孫だよ」
「そっか、孫か、孫っつうのも可愛いんだろうな」
「とうちゃんそっくりの孫」
「ダイチの子ならダイチそっくりだろ」
「俺はとうちゃんに似てるって言われっから、やっぱとうちゃんにそっくりだよ」
「よくもまあ、まだひとっ欠片も存在していないもので」
かあちゃん？
「まるで今ここにいるような話ができるわね」
「それは・・さ」
「あんたたちがくだらない妄想の中にいるときに」
くだらねえってさ
「派遣先の奥様から電話があったのよ」

「追加の仕事？」
「ご主人の机の上」
「え・・」
あっ　とうちゃん・・　やっぱ片付けてねえから
「ご主人がね、よくわかってくれたって感心してらしたんですって」
「あ、そんじゃ、やっぱヒトミとおんなしか」
マジか　とうちゃん　すげえな
「作業服にアイロンはかけないでいいそうよ」
「あ、うん、わかった」
とうちゃん　作業服にアイロンかけてたんかよ
「ダイチ、愛里さんを送ってあげて」
「あ、おう」
かあちゃんの後ろにいる愛里
愛里　俺はさ　愛里に生んで欲しいんだよ　とうちゃんの孫　あ、つか、俺の子
「なんですか？」
「あ、や、行こう」

玄関出て
「おとうさん、すごいですね」
「え？」
「おかあさんと話してるときに電話があって」
「ああ！　派遣先の奥さんか」
「本当は明日来てくださったときでもいいんですけどって、おかあさんが私に」
「ああ、うん」
「ご主人てわりと感情がフラットなんだそうで、これもおかあさんから」
「うん、わかってる」
「そのご主人が感心していたから、思わず感謝の電話をしたって」
「そっか」
「あと、おとうさんのおかげで、少し眠れるようになったって」
「よかったよな」
「おかあさんにも感謝を伝えたかったって」
「そっか」
「伝説の家政夫って、イケメンてだけじゃないんですね」
「へ？」
「顔がいいだけじゃ伝説の家政夫とは呼ばれませんよね」
「あ、うん」
「おとうさん、本当にすごいです」
愛里　俺は　とうちゃん目指してっから　家政夫としてじゃなくて　男としてさ
「え？　なに？」
「あ、や、なんでもねえ」

エレベーター乗って
愛里の玄関
「明日は英文法と物理と古文ですね」
「おう」
「物理は・・　ちょっと」
「わかんねえとこあんなら教えるよ」
「今さらあがいてもってカンジなので」
「ハハハ、そっか、そんでも、愛里はけっこうわかるようになったからさ」
「物理学者になりたいわけでも、物理の先生になりたいわけでもないのに」
ん？ え？
「なぜ物理を勉強しなきゃならないのかは、永遠にわからないと思いますけど」
「俺もわかんねえけど、脳みそ動かすのはいいことなんじゃねえかなって」
「脳みそを動かす？」
「将来にさ」
「将・・来？」
「何か考えねえといけねえときに、物理で動かした部分使えっかもしんねえじゃん」
「あなたって・・」
「え、なに？」
「発想が・・　やっぱりモリシタダイチです」
「あ？ え？」
「こういうときは、あなたってすごいなって思う」
「え、こういうときはって？　他んときは？」
「他のときは・・　ちょっと言葉が浮かばないので」
「言葉が浮かばねえって、愛里」
「竜田揚げ、美味しかったです」
「あ、とうちゃんのな」
「鶏レバーだとはわかりませんでしたけど」
かあちゃんっ　なんで言っちまったんだよっ
「料理のやり方によっては食べられるんだってわかりましたけど」
「あ・・ん・・」
「たまに・・で、お願いします」
「あれは俺じゃねえよ」
「おとうさんがおかあさんの貧血を心配して作るんですよね」
「え？　あ、そうなんだよ」
「そっくりです」
「なにが？」
「あなたに、じゃない、あなたが？ おとうさんに？」
「マジ？」
「はい、それじゃ」
「愛里」

ギュッて抱きしめて
「そんじゃ、またな」
「はい」
腕　離したら　愛里が俺のこと見てて
「俺は・・　とうちゃん目指してっから」
「はい、いつもそう言ってます」
「目指してっからさ」
「はい、がんばってください」
「おう」
愛里がフッて笑って
ドア閉めて　鍵閉まった
おーーっし　俺も明日の見返してシャワーして寝よう

あてなるもの

実力テスト二日目
今朝も、とうちゃんが俺とかあちゃんの弁当作って
俺がとうちゃんと愛里の弁当作ってさ
とうちゃんが、今週だけでも俺の弁当作りてえっつってくれたからで
「ダイチの弁当、中学でもう作れねえんかなと思ったんだけどよ、作りてえから」
俺は嬉しかった
とうちゃんの弁当大好きだし、自分で作った弁当ってさ、なんかさ感動がねえっつうかさ

一時間目は英文法のテスト
ねえちゃんが言ってた
英文法はクソつまんねえけど、実はいちばん役に立つって
留学して Paper、いわゆるレポート書くとき、英文法しっかり身についてっと
どんな文章でも自在に書ける、英語が話せるっつうことより役に立ってるって
愛里は英文法も得意だから緊張した顔はしてねえな
「始め！」
一気に集中

終わった
愛里は・・　もう教室出てった　便所か
俺も行っとくか
戻ったら愛里に、ここときこだけは押さえといた方がいいっつうの教えとこう
便所から出たら
「森下」
「おう、志田」
「あのさあ、上原さんのことなんだけどさあ」
愛里？　　愛里がなんだよ？
「来週誕生日じゃん」
なっ・・
「なんで知ってんだよ？」
いちおうがんばって冷静な声出してみた
「上原さんの一年のときの友だち、俺と中学同じクラスでさあ」
誰だ？　　なんちゃらリンっつう子か？
「それで上原さんに何か欲しいものある？ って聞いたらさあ」

おい、ちょっと待って
「なんで志田が愛里に、プッ・・プレゼントあげんだよ？」
「文化祭で助けてもらったしさあ、俺が紹介した体験教室行ったって」
そういうことか　まあ・・そういうことなら　そういうことだけだったら
「それに俺さあ、上原さんのおかげで進路決められたんだよね」
愛里のおかげ？　　進路？
「文化祭のときに上原さんが俺のこと花問屋さんて呼んだじゃん」
「ああ、まあ、呼んでたな」
「俺、それまで花問屋なんか継ぐ気なくてさ、でも何をしていいのかもさあ」
俺と志田って・・　話したことあんまねえよな　おはようくれえでさ
「花問屋さんって呼ばれて、あんな捨てるだけの花をきれいに活けてくれてさあ」
なのに　志田はなぜ俺にこんなことまで話してるんだ？
「そしたら、花問屋もいいなって思えてさ」
「え、あ、そっか」
「東京農大の経済学部目指すことにした」
「そっか、がんばれよ」
すげえな愛里　志田の将来決めるきっかけになるってさ
愛里はそういうところがあるんだよ　なんかすげえ力持ってんだよ
「森下聞いてる？」
「あ？　　聞いてるよ」
「上原さん、また一日体験教室のお知らせがあったら教えてって言うんだよ」
「教えてあげればいいじゃん」
「バースデープレゼントに？」
「愛里がそう言ったんなら、そうなんじゃね？」
「花をあげようかって聞いたらさあ」
花？　　花はさ、いくら花問屋でもさ、それはさ
「もう文化祭はないんだから必要なくない？ って言われてさあ」
愛里　愛里の勘違いが今は嬉しい
「体験教室のお知らせだけでいいのかなあ」
「愛里がいいっつってんだから」
「そうかあ」
首かしげてっけど、俺は愛里んとこに行って物理の
「あ、もうすぐ 10 分休み終わる、俺トイレまだだよぉ」
「早く行け！ 漏らすなよ！」
「森下、ありがとねえ」
いいけど　もう愛里に教える時間ねえよ！

ギリで教室戻った
「志田！　　遅いぞ！」
「トイレ行ってて」

「早く席に着け」
間に合ったか
愛里は・・　緊張してねえな　すげえ冷静な顔してんな
「始め！」
一気に集中

終わった
愛里にとこに走ってって
「愛里」
「はい」
「森下」
川口？　なに？
「ちょっと相談があるんだけど」
「相談？」
「私、先に行ってます」
「あ？　お、おう」
川口が俺を　廊下の遊び場？　なんでここ？　俺よくここでコクられたけど？
「来週、上原さんの誕生日だよね」
またその話かよ
「おう、そうだけど」
「森下はもうプレゼントは決まってるんだよね」
俺は　まだなんも決まってねえ　なんも
「え、まあ、なんつうか」
「それを聞くつもりじゃないから」
「おう」
聞かねえでくれ　真っ白なんだよ　まださ　ずっとさ
「さっきの 10 分休みにね、上原さんに何か欲しいものある？ って聞いたんだけどね」
聞いたんか　みんな聞くんだな
「シャーペンの替え芯ＨＢの 0.7mm って」
へ？
「まじめに言ってるのかな？」
「まじめ・・なんじゃね？」
愛里なら　おそらくマジだ
「それって、お店とかにある箱ごとってことかな」
「え、や、1 個じゃねえの？」
「誕生日のプレゼントに替え芯 1 個？」
「愛里がそう言ったんなら、そうじゃね？」
「それじゃ・・　替え芯 1 個をラッピングしてもらえばいいのかな」
「そこは、川口の好きにすりゃいぃんじゃね？」
「いちおうラッピングしてもらうよ」

つかさ
「川口、愛里に聞いたのに、なんで俺に聞くんだよ？」
「替え芯て言われて意味がよくわからなくてさ」
「愛里がそう言うんならそうなんだよ」
「うん、森下なら上原さんのことわかるだろうなと思って」
「え？　ああ、まあ、そうだな」
「森下に聞いてよかったよ、ありがとう」
「おう」
愛里　かぐや姫状態になってんぞ　かぐや姫の逆パターンだけどさ
かぐや姫は求婚者たちに、志田も川口も求婚者ではねえよぜってえにねえけどな
ぜってえ不可能な難問出して困らせっけど、
愛里は逆におよそ誕生日に欲しがるとは思わねえ意外なもの言ってさ
志田も川口も途方に暮れてるよ
そんで・・　俺も途方に暮れてんだよ
愛里の誕生日が 9 月 13 日だって聞いたときから考えてた
あんときはまだつき合ってなかったけどさ　つき合ったらって
そんでつき合ってからも、つき合って初めての愛里の誕生日だから
なんつうか、やっぱ俺にとってもスペシャルでさ
そんでも何をプレゼントすればいぃんか全然浮かばねえんだよ
サプライズは嫌れえで、俺もサプライズはできねえし
歳の数のバラもイヤで、俺もんなシャレたことできねえし
指輪は　あれは愛里と初めて遠く離れて　やっぱ俺には愛里しかねえって
今はプロポーズはできねえから　せめて予約っつうかさ
愛里のいねえ間に稼いだ金で買いたくてさ
予約のネックレス？　愛里のママがきれいなネックレス買ってくれてっからな
予約の、あれはなんつうんだ？　腕輪？
予約ばっかしてどうすんだよ
予約・・　宿の予約　言葉浮かんだだけだけど
なんなら俺は、愛里が行きてえっつうなら、ちっとだけ高級な温泉連れてく金はある
そんでも、やっぱそれはまだマズイだろ　高校生二人で温泉てさ
かあちゃんと行ってもらう？　それじゃ意味ねえよ、俺留守番てさ
やっぱ聞くしかねえな　そんで今週末一緒に買いに行ってさ
「森下」
「森山！」
おまえもかよ！
「上原さんが」
「愛里がそうだっつったらそうなんだよ！」
「え？　うん、あの、箸が入ってなかったから購買に行ってくるって」
「なんで森山が知ってんだよ？」
「ちょうど俺が購買から戻ってきたら、森下に伝えてくれって」

「あ、そっか、おう、ありがとな」
えっ
「箸が入ってなかったあ？」
「そう言ってたよ」
あれ？　俺、入れたよな　愛里のはちゃんと・・　入れた・・かな
「上原さんのお母さんて、よく箸を入れ忘れるみたいでさ」
「ハ？」
「一年のときもよく購買に走ってたよ」
知ってっけど　つか愛里から聞いてますけど
「また入れ忘れたんだな　アハハハ」
アハハじゃねえよ　愛里ごめん！　マジごめん！

中庭に走ってった
「愛里、遅くなってごめん」
「大丈夫です、森山くんから聞きましたか？」
「聞いた、ごめんな、俺ちゃんと入れたと思ったんだけどさ」
「私のは入ってましたけど、あなたのが」
俺の？
「だから購買で買ってきました」
「俺のを？」
「はい、戻ってきてからだと時間かかっちゃうなと思って」
「愛里ぃぃ　ありがとう」
俺のためにわざわざ購買まで行ってくれんなんてさあ
あ、箸の金
「愛里、箸の金返すからさ」
制服のズボンのポケットから財布出して・・
「えええええ、やだあ」
「あ？ な、なに？」
「そのお財布持ってきてるの？」
「あ、これ？　だって愛里が作ってくれたからさ」
「それは現場用で、学校にはちゃんとしたお財布を持ってきてください」
「そしたら、この財布、次いつ使えっかわかんねえじゃん」
「そんなの、なんなら使い捨てにしていいです」
「使い捨てなんてできねえよ、ぜってえ・・　んっと、割り箸は」
「10 － 3」
「ハ？」
「10 － 3・10 － 3・10 － 3」
「愛里？　どした？」
「グフッ　フッフッフッハハハハ」
な　ん　だ？

「私が購買にお箸を買いに行ったとき、あなた、私の顔を見ながらずっと 10 − 3 って」
「あ　や、それはさ、なんつうか、上原愛里だってビックリしてさ」
「私の方がビックリしました別の意味だけど」
「うん、前にも言ってたよな、ごめん、ほい、箸の代金」
愛里の手に金置いたら
「ハハハハ」
え、どした？
「7 円って・・　ハハハハ、10 − 3 のお釣り」
「あ！　そっか、3 円だったな」
「いいです」
「そんでもさ」
「瓶貯金してください」
瓶貯金　憶えててくれてた
瓶貯金・・　とうちゃんは　おそらく　確実に　愛里の誕生日は消しゴムで
川口がシャーペンの替え芯　そんじゃ俺は・・
「愛里、マーカーペン欲しくね？」
「夏休み中に買ったばかりだから」
「あ、そうなんか」
つか、愛里の誕生日にマーカーペンはねえだろっ
「ふだんは使わない」
え？　ふだん使わねえものが欲しいんか？
「脳の部分を」
脳？
「将来のために動かしておくんだっていうつもりでやりました」
「え？　あ、物理？」
「まだまだ運動不足であまり動かなかったですけど」
「そんでもさ、少しずつ動かしてけばさ」
「そうですよね、少しずつですよね」
ニッコリした顔が可愛い
「午後は古文ですね」
「うん」
「うつくしきもの　瓜にかきたる児の顔」
愛里ワールドだ
「平安時代はうつくしいって可愛いって意味なんですよね」
「うん」
「最初混乱しちゃった」
俺にとっては　愛里は美しくて可愛いよ
「おとうさんのお弁当のおかず、少しもらってもいいですか？」
「いいよ」
「フフ、なんか得した気分になる」

「ん？　なにが？」
「あなたとおとうさん二人のおかずを食べられるから」
クアアアアアアア　メッチャ可愛いっ
「うつくしきもの　おかず食ってる愛里です」
「なにそれ？　ハハハハ」
愛里　愛里は何が欲しいですか　俺は愛里に何を贈ったらいいですか
愛里が欲しいっつうなら　俺は
仏の御石の鉢でも蓬莱の玉の枝でも火鼠の皮衣でも
龍の頸の玉でも燕の子安貝でも
ぜってえ本物見つけてくるよ
「え、なに？　なんでジーッと見てるの？」
「あ、なんつうか、美味そうに食ってんなって」
「美味しいから」
とうちゃんと俺のおかず食って美味えっつってくれてる愛里がこうやっていれば
俺はなんもいらねえ　俺はいらねえけどさ　俺じゃなくてさ　愛里でさ
イチゴ美味そうに食っててさ　なんか
「いみじううつくしきちごの、いちごなど食ひたる」
「え？　問題？」
「あ、や、んな」
「あてなるもの？」
「え、おう、正解」
「憶えてた、よかった」
メッチャ可愛い愛里がイチゴ食ってんのが　俺には高貴で神々しくてさ
俺が何贈っても　なんか煤けて見える気ぃすんな
なーーんつってられねえんだよ　つき合って初めての愛里の誕生日なんだからさ
「そろそろ戻りましょう」
「え・・」
「どうしたの？」
「愛里、あのさ」
「はい」
んな　真っ直ぐな目で見られっと　俺　なんつっていいんか
「んっと、古文がんばろう」
「古文は、まあ大丈夫だと思います」
「そっか、だよな」
「削り氷にあまづら入れて、新しき金椀に入れたる」
え？
「平安時代もかき氷あったんですね」
「みてえだよな」
「でも、あてなるものだから、貴重っていうか貴族しか食べられなかったんですね」
「氷が手に入んねえもんな」

「ふつうに食べているものが、時と人によってはすごく貴重なんですね」
「だな」
「ここは多分出ないと思うけど」
「テストには出なくてもさ、知ってんのって、なんかいいじゃん」
「そうですね」
俺には　こうやって愛里としゃべってる時間が　あてなるものっすよ
そんでもあ、どうすっかなあ、どうすりゃいぃんだ？　　愛里の誕生日プレゼント
「頭真っ白だあ」
「えっ？　　忘れちゃったの？」
「や、大丈夫、大丈夫だからさ」
「なら、なり・に、なり、続きは？」
え？
「な・・　なる、なれ、なれ」
「大丈夫ですね」
「おう」
まずは実力だ　それからだ
考えらんねえもん

欲しいもの

帰りの学活終わった
「愛里、帰ろう」
「はい」
ロッカーで靴履き替えて校舎出て
「あの」
「ん？ なに？」
「今日は何の日ですか？」
何の日？　え・・　祝日ではねえし
「強いて言えば・・　実力テストの日？」
「それはわかってますけど、男子の中で何かイベントとかあったんですか？」
男子の中でイベント？　なんだ？
「俺はわかんねえけど、なんで？」
「朝の学活の前に、花問屋の息子さん、名前なんだっけ」
「志田？」
「その人が」
名前憶えてあげてくれよ　志田は愛里のおかげで進路決まったっつうんだからさ
「なにか欲しいものある？ って聞いてきてから」
誕生日プレゼントか
「また一日体験教室があったら情報が欲しいって言ったら」
花だろ
「お花を持ってこようかって、もう文化祭終わってるのになに言ってるの？ って思って」
だからそれはさ
「あと、10 分休みのときに川口くんが、なにか欲しいものある？ って」
だからそれもあれだろ？
「シャーペンの芯があと少ししかないなと思ってシャーペンの芯て」
あ・・れ？
「シャーペンの芯？ って聞き返すから、私が使ってるのは HB の 0.7mm って言って」
まさか？
「森山くんも」
森山？　森山は伝言・・　あれ？
「購買でお箸買うのに走ってたら、何か欲しいものある？ って」
森山・・
「お箸忘れちゃったから購買で買ってくるって」

これは・・　出たな
「他には？ って言うから、森下くんにそう伝えて欲しいって言ったんですけど」
愛里の　超人的鈍感が
「男子の中で、人に親切にする日とか、そういうことしてました？」
俺の頭の中で　志田と川口と森山が一瞬で爆破されてぶっ飛んでる図が浮かんだ
「や、俺は聞いてねえけど」
「なんかわけわかんなくて気持ち悪かった」
気持ち　悪りぃって
「え、なに？　泣いてる？ 笑ってる？　ヘンな顔」
「ヘンな顔ってさ」
「あなたは何か欲しいものありますか？」
「俺？　俺はべつに、なんもねえけど」
「急に聞かれても答えられませんよね」
「あ、まあ、だな」
「なんかもうヘンなゲームに巻き込まないでほしい」
ゲーム・・
「またヘンな顔して」
「ヘンな顔ってさ、笑っていぃんだか泣いていぃんだかさ」
「なにかあったんですか？」
「俺はなんもねえけどさ」
志田、川口、森山、愛里はさ　すっげーーー鈍感なんだよ　俺も忘れてたよ
とうちゃんやかあちゃんといるときってメッチャ感覚鋭でえからさ
「男子ってヘンなゲーム考えついたり、子どもみたい」
子どもみてえって　マジでそんだけっきゃ言わなかったんかな
「愛里、その、何か欲しいものあるって言葉の前に、なんか言ってなかったか？」
「なにか？　えっと・・　季節の話かな」
季節？
「もう 9 月だねって、だから、そうだねって」
そっからいったか
「そう言えば上原さんの誕生日って 13 日だよねって」
「それは誰が言ってた？」
「花問屋と川口くん」
少なくとも二名はちゃんと言ってんじゃん
「これは 13 日生まれイジリかなって」
へ？
「しかも私、13 日の金曜日に生まれたから」
結びつかねえか？　その日付と何かほしいものっつう言葉
「言いたくないんですけど」
「なに？　俺には言ってくれよ」
愛里が俺のことチラッ見て

「小学生のとき、男子たちにジェイソンってからかわれて」
そいつら　愛里のことが好きだったんたな　やり方メチャ間違ってっけど
「しかも！」
俺を睨んでっけど？
「卒業式のとき、アルバムにサインしてって言うの」
やっぱな　好きだったんだ
「ジェイソンて書かせる気だなと思って無視しました」
愛里だよ　愛里だ　小学生んときから愛里だ
「なんで笑ってるの？」
「や、そりゃな、無視するよな」
「ですよね？」
「うん」
小学生んときの愛里も見たかったなあ
「あっ　おとうさんとおかあさんも 9 月 13 日生まれですよね？」
「え？　　あ、うん」
「13 日生まれが私以外に二人も、しかもあのおとうさんとおかあさんて心強い」
メッチャ 13 日にフォーカスあたってんな
「おとうさんとおかあさんに何かプレゼントあげるんですか？」
急にピンポイント突いてきた
「しかも結婚記念日ですよね」
「ああ、うん、まあ、いっつもカードでさ」
「私はどうしたらいいんでしょう」
「どうしたらっつうのは？」
「私もなにかお祝いしたいです」
つか、自分の誕生日はっ？
「結婚記念日と二人の誕生日が同じって、おとうさんとおかあさんにとっては」
愛里の誕生日でもあんだけどなあっ
「えぇぇ、何がいいんだろう」
愛里は何が欲しいんですか？　　シャーペンの芯以外でさ
「あ！　　直接聞けばいいですね」
「へ？」
「欲しくないものをもらっても嬉しくないし」
「ああ、まあ・・　かあちゃんはいっつもそう言ってる」
「ですよね、夕食のときに聞いてみます」
俺は愛里にいつ聞けばいい？
「明日は、政経と生物と倫社、魔の倫社」
「魔ってさ」
「でも、脳みその新たな部分を動かさないとですよね」
「あ、おう」
「動くかなあ」

「動く、ぜってえ動く」
「でも、ずーーっと寝たきりだった人がすぐには歩けませんよね」
「寝たきり？」
「私の倫社部分の脳みそは寝たきり、昏睡状態だったかも」
「愛里、脳みそのことは今は考えねえでいい」
「あ、そうですね、もう今さら」
「捨てんなよ」
「あ・・　はい」
捨てようとしてたんか

家帰って　愛里の部屋掃除して　俺ん家の洗面台と便所掃除して
買い出し行って　晩メシ作ってる
生姜焼き　ポテサラも作った　キャベツの千切りがなあ　とうちゃんみてえにはなあ
「ただいま」
「とうちゃん、おかえり」
「ダイチ、ただいま」
「晩メシは生姜焼きにした」
「俺にできることあっか？」
「キャベツの千切りがさあ」
「俺がやっから」
「とうちゃん、ありがとう」
「ダイチがいろいろやってくれっからよ、ありがてえよ」
とうちゃんとキッチン入って
「今日よ、俺が行って、赤ちゃん見てっから少し寝た方がいいよっつったらよ」
とうちゃんがキャベツ丸めてギュッと押して
「そんじゃっつってベッドルーム入ったっきり出てこねえんだよ」
「えっ？」
なんかあったんか？
「昼メシも食わねえしよ」
具合悪かったんかな
「そんで、晩メシ作り終わって、ダンナさんの弁当もチンすりゃいいだけにしてよ、
　ベッドルームのドア、コンコンてな、そんで、奥さん奥さんて呼んでも出てこねえんだよ」
なにがあったんだ？
「そんでちょっとしたらよ、中からエーーッて声がしてよ」
「エーッて声？」
「そんでドア開いて、奥さんが出てきてよ、俺に、カズさん」
カズさん？
「ずっと寝ちまってたっつってよ」
あ・・　寝てたんか　そっか

「こんなん長く寝たんは出産してから初めてだっつってよ」
「そっか、まだ生まれて半月だもんな」
「よかったな、やっぱ寝ねえとな」
「だよな、その間とうちゃんが赤ちゃん見てたんか」
「ミルクだしよ、ヒトミやダイチとおんなしだからよ」
とうちゃん、ぜってえ泣かせなかったんだな、ウンコやシッコ察知してさ
「やっぱ赤ちゃんは可愛いなあ」
俺も　子ども生まれたら・・　愛里と俺の子・・　メッチャ可愛いだろうな
「ただいま」
かあちゃんだ
「おじゃまします」
愛里もだ

晩メシ食ってて
「あの、9 月 13 日って、おとうさんとおかあさんの誕生日で結婚記念日ですよね」
そうだよ　そんで
「愛里さんの誕生日でもあるわよね」
かあちゃん　よく言ってくれました！
「私のことはいいんですけど」
よくねえよ！
「何か欲しいものありますか？　　ブランドのバッグとかは買えないけど」
「ハハハ、愛里さんにブランドのバッグは買わせないわよ」
「私が買えるようなもので欲しいのありますか？」
「ない」
かあちゃん、もうちっと言い方さ
「欲しいものは自分で買うから」
「そうですよね、私もそうです」
「愛里さんは誕生日のプレゼントに欲しいものは？」
かあちゃん　よく聞いてくれました！
「欲しいもの・・」
「私はブランドのバッグを買ってあげられるわよ」
「ブランドは、私が完敗しますから」
「完敗？　　負けるってこと？」
「はい、ブ・ラ・ン・ド！ みたいに主張されて、私がいなくなっちゃうみたいな」
「ハハハ、そうね、10 代には 10 代にしかできないオシャレがあるから」
10 代にしかできねえオシャレって・・　なんだ？　　なにがオシャレかもわかんねえな
「愛里さんはあれされたことある？　　サプラ〜イズ」
「あるんですぅぅ、去年友だちにぃぃ」
「あれってわかっちゃうわよね」
「はい、当日のしかも平日の学校帰りに、しかも今まで行ったことのないカフェ」

「それはわかっちゃうわね」
「でも、言えないですよね」
「言えないわね」
「私、すっごく緊張しちゃって、サプラ〜イズに、うまく反応する自信がなくて」
「私は真顔になっちゃうのよ」
かあちゃんの真顔　サプライズした人たち怖かっただろうな
「最後に大きいデザートプレートが出てきて」
「ああ・・　それね」
「はい、小さめのケーキにロウソクじゃなくて花火みたいなのが立ってて」
「もはやありきたり」
「花火じゃフーッできないし」
「フー？」
「誕生日はロウソクをフーッてイメージがあって」
「そうね、願い事してからね」
「しかも一本じゃなくて 16 本で、テーブルに置かれたらグラッとしてまとまっちゃって」
「まとまった？」
「はい、そのまとまっちゃった花火がチバチバチッでボッて火が」
「ほぼ事故じゃない」
「ある意味サプライズでしたけど怖かったです」
「ハハハ、そうね、そこまでいけばね」
「そういうのはもうイヤです」
そんじゃどういうんがいいんだ？
「たとえば、今日は愛里さんのバースデーパーティするわよっていうのは？」
愛里が眉しかめてかあちゃん見てっけど
「ママが、毎年ケーキを買うんですけど、パパとママと私の 3 人だけなのに」
愛里が手ででっけえ輪作って
「こ〜んな大きいケーキで、しかも二段」
「二段？」
二段のケーキなんて生で見たことねえな
「あとはマジパンでドレスみたいなのの上に人形が乗ってたり・・
　食事は毎年どこどこのホテルのバースデー特別ケータリングで」
「そう・・なの」
「中学一年のときのはジビエコースで」
「鹿肉とか？」
「そうなんです、ウサギとかイノシシとか鳩とか」
とうちゃんは鳩食ったことあんだよ
「鶏肉かなって食べたら鳩で、臭かったしなんかもう」
愛里が口押さえながら白目向いてる　よっぽどだったんだな
「お母様も・・　チャレンジャーね」
「ジビエの美味しさも知っておいた方がいいわよって、永遠に知らなくていい」

「ジビエは好みがハッキリ分かれるわね」
「私の誕生日なのに拷問みたいでした」
「ハハハ、うちは誕生日はオムライスなのよ」
「そういうのがいいです、わあ、オムライスだみたいな」
「ケーキはカズオが買ってくるコンビニの半額になったイチゴケーキ」
「その小さなしあわせ感がステキ」
「小さなしあわせ感？」
「男の人が高級ホテルのとか有名バテシエのケーキ買ってきたらちょっと引くかも」
「はいはいがんばっちゃってみたいなね」
「そうです、コンビニでケーキ買ってきたよみたいな小さなしあわせ感ていいですね」
コンビニケーキの小さなしあわせ感　俺がやったらとうちゃんの二番煎じだな
「私は、ひっそり、なにごともないように過ごしたいです」
ひっそり？　なにごとも・・ねえように？
「愛里さん、私もなの」
「そうなんですか？」
「だから愛里さんも、私やカズオに何かなんて考えなくていいわよ」
「そうですか？　それじゃそういうことにします」
「愛里さんは？　どうして欲しい？」
「私もオムライスを食べさせてもらえたら」
そんだけ？　マジそんだけ？
「もちろんよ、4人で食べましょう」
「はい」
ん・・・っと　俺からのプレゼントは・・　どうしたらいぃんかな？

晩メシ終わって
かあちゃんと愛里はリビングでしゃべってて
俺ととうちゃんは後片付けしてて
「とうちゃん」
「ん？ どした？」
「とうちゃんはさ、かあちゃんと出会って最初の誕生日のプレゼント、お守りあげたんだよな」
「あれは・・　なんつうか・・　心配でよ」
「心配？」
「ねーちゃんヌケてっとこあってよ、信号赤なのに見ねえで渡ろうとしたりよ、
　走ってスッ転んだりよ、俺がそばにいねえときになんかあったらどうようって」
神頼みか
「神社の人に聞いたんだよ、これはぜってえ効くんかってよ、ぜってえ効くっつったからよ」
そりゃそう言うな
「効いてんな、あれから美里、スッ転んだりしなくなったもんな」

それは　一緒に歩くときとうちゃんがガードしてっからだけどさ
「そのお守り以外はプレゼントあげたことねえんだよな？」
「俺はそういうのよくわかねえしよ、んな、俺の稼ぎじゃよ」
とうちゃんメッチャ稼いでんだよ　かあちゃんが調整してっだけでさ
「そんでもな、美里のイチゴは買えっから」
とうちゃんが嬉しそうな顔で皿すすいで
「俺はそんくれえっきゃできねえけど、美里は喜んでくれっから」
小さなしあわせ感・・か
「とうちゃん、愛里の誕生日に、俺、何ができんのかな」
「ダイチはなんでもできっだろ」
「なんでもっつってもさ」
「アイリちゃん、オムライス食いてえっつってたから、ダイチが作ってあげりゃいんじゃねえか？」
「9 月 13 日のオムライスはとうちゃんのじゃなきゃダメだよ」
「んなことねえだろ」
「俺も 9 月 13 日のオムライスはとうちゃんの食いてえよ」
「そっか？　　そんじゃオムライスは俺が作っからよ」
「ケーキもとうちゃんがコンビニで買ったのじゃなきゃダメだよ」
「んなことねえだろ」
「かあちゃんだけじゃなくてさ、俺も、ねえちゃんもさ」
「ヒトミ？」
「誕生日の晩メシはとうちゃんのオムライスで」
誕生日んときのとうちゃんのオムライスは特別感あってさ
「とうちゃんが買って来たコンビニのケーキじゃねえと」
一人分の小せえケーキを分けて食うのが楽しくてさ
「なんか誕生日って気ぃしねえんだよ」
「そっか？　　そんじゃそうする」
んで？　　俺は愛里に何をあげたらいぃんだ？

K-POP

実力テスト三日目
結局ゆうべは愛里に贈るもの、なんも思いつかなかった
いっろいろ考えたけど　俺の脳みそん中にはプレゼントに関する情報がなんもねえ
とうちゃんにもかあちゃんにも基本プレゼントしたことねえし、
ねえちゃんにもねえし、家ん中にはそういう風習がねえからさあ
これは・・　情報収集した方がいいのかもしんねえ
「始め！」
一気に集中

10 分休み
愛里は　便所か
今のうちに　なんとなく　なんとなくっつうカンジで
「川口」
「森下、なに？」
「や、なにっつうか、川口は妹いんだよな」
「うん、いるよ」
「妹に誕生日のプレゼントとかすんの？」
「するけど、なぜ？」
「なぜって？」
「急にそんなこと聞くからさ」
「俺もねえちゃんいんだけど」
「うん」
「ねえちゃんにプレゼント贈ろうかなと思っててさ」
「お姉さんの誕生日っていつ？」
「2 月 14 日」
「けっこう先だよね」
「え、あ、まあ、ねえちゃんにプレゼントすんの初めてでさ」
「そうなの？」
「うん、だから、なんつうか、女きょうだいにはどんなの贈るんかなって」
「僕の妹は６月生まれなんだけどね」
「つことは、もうあげたんか」
「僕は去年からファンクラブに入れられちゃってさ」
「ファンクラブ？　　妹の？」

「ちがうよ、僕の妹が K-POP のファンなんだよ、そのグループのファンクラブ」
「なんで川口まで？」
「チケットが当たる倍率を高めたいからって」
　　あ、口開いてた
「でも、妹の誕生日にライブはないし、そのあとあったけどハズレてさ」
ん・・・と　なんの話になってんだ？
「それで、グッズをね」
「ぐっず？」
「それも発売したら早めに買わないと完売しちゃうからさ」
「そう・・なんだ」
「僕の妹はサプライズが大好きだから聞けなくて」
俺は　なんの話を聞かされてるんだ？
「ぬいぐるみが欲しいって言ってたから、たしかウサギだったなって」
「川口、ファンクラブとぬいぐるみの関連性がわかんねえんだけど」
「それぞれの推しのキャラのぬいぐるみがあるんだよ」
「あ・・　そうなんだ」
「手に入れた、ウサギ」
「よかったな」
もう席に戻ろっかなあ
「それを誕生日にあげたら、私の推しはブタウサギ！ って言われちゃって」
ん・・と　どうすりゃいぃんだ？　　聞いた俺が悪いんか？　　悪いんかもしんねえけど
「ファンクラブに入ってるなら推しのキャラくらい憶えてよって言われたんだけどさ、
　K-POP ってなんかみんな同じ顔に見えちゃうしさ、名前も似たようなのばかりで」
「川口、俺、そろそろ」
えっ　腕つかまれたけど？
「森下は K-POP の名前と顔、憶えられる？」
「俺は・・　縁がねえから」
「もしも上原さんが K-POP のファンだったら？」
「え・・それは・・　　K-POP っつうのは男？」
「男だよ」
それは・・　複雑だ　メッチャ複雑だ　他の男にキャーキャー言ってる愛里を
そんでも、愛里がチケット当選確率のためにファンクラブに入ってっつったら
入んのかな？　　入るか？　　入るな
そんで愛里の推し？　　それはメッチャやだな　そんでも愛里がそうしてくれっつったら
「俺は憶える」
「やっぱり森下はすごいよ、僕には無理だよ」
「妹のためなら憶えてやれよ」
「そうだね、でも、もう二度と買わないでって言われちゃってさ」
「二度と・・？」
「ペンライトも買ったんだけど、もう持ってる！ って」

なんかよくわかんねえ
「森下、ペンライトいる？　いるならあげるよ」
「いらねえ」
「だよね、僕もどうしたらいいのか、けっこう高かったから捨てるのもさ」
「んと、停電のときにでも使えばいんじゃね？」
「停電のときにペンライトってどうなのかな？」
知らねえよっ
「え？　あの、なんでここに？」
愛里
「二人で何の話をしてたの？」
「K-POP」
じゃねえよ！　誕生日のプレゼントの話だよっ
「へえ」
俺の顔見てっけど　そういう話じゃなかったんだよ愛里
「K-POP に興味あるんですか？」
ねえってわかってっだろ
「森下はね、もしも上原さんが」
「川口っ　次は生物だぞ」
「うん、そうだね」
「医師ゃになりてえなら生物はしっかりやんねえとな」
「そうなんだよね」
あ　チャイム鳴った
「そんじゃ、あの、愛里」
「生物ですよね、がんばります」
「おう」
俺は　なんのために川口に話しかけたんだ？　話しかけてしまったんだ？

昼休みの中庭
愛里が　俺が作った愛里の弁当ととうちゃんが作った俺の弁当のおかず食って
「美味しい」つってさ　その顔見てっだけで　俺はしあわせだ
「川口くんから聞いたんですけど」
「えっ」
愛里　俺は K-POP のファンじゃねえから　そういう話じゃねえんだよ
「お姉さんに誕生日のプレゼントを贈るって」
「え、あ、まあ、なんつうか、どうすっかなあっつうくれえでさ」
「私は一度会っただけですけど、お姉さんはセンスもよくて」
ねえちゃんが？　んなカンジで見たことねえけど　まあ・・　そっかなあ
「プレゼントをあげるとしたら・・」
愛里にプレゼントあげるとしたら？　何がいいですか？
「むずかしいですね」

むずかしいよ　メッチャむずかしいよ　俺にはどうしていぃんか
「あ！　　もしかしたら・・」
「え、なに？ なに？」
「お姉さんの誕生日、ママが祝っちゃうかも」
「愛里のお母さんが？」
「そういうの大好きだから、家で誕生パーティやりましょうみたいな」
「ねえちゃん喜ぶんじゃね？」
「でも・・　ジビエコースだったりしたら」
「ねえちゃんなんでも食うからさ」
「なんでもって、あれは・・」
「つか、ねえちゃん、食いてえもん言うから、あれ食いてえこれ食いてえっつって」
「あ、そうですか、だったらよかった」
ねえちゃんのことよりさ　愛里のさ
「お姉さんがいるって、どんなカンジですか？」
「どんなカンジ？　　あんなカンジのねえちゃんだよ」
「じゃなくて、姉がいるってどんなカンジなのかなあって」
「生まれたときからいっから、どんなカンジっつっても・・」
「私、ずっとお姉さんが欲しかったんです」
「え？」
「一人っ子だから、お姉さんがいたらなって」
義理のでもいいっすか
「あなたがうらやましい、あんなにきれいで優しいお姉さんがいて」
あげますっ　将来　愛里にあげますっ
「私も何か贈った方がいいですよね」
「え？ なにが？」
「あなたのお姉さんの誕生日に、ママがお世話になっちゃって」
「いらねえよ、ねえちゃんそういうの気にしねえし、美味えもん食ってりゃいいっつうか」
「そうなりますよね」
「そうなる？」
「森下家に生まれ育ったら、ごはんも美味しくて、もうそれだけでしあわせみたいな」
「そっかな」
「そうですよ、あなたはずっと森下家にいるからあたりまえなのかもしれないけど」
「へ？」
「今だって私、この、戦国時代みたいな状況の中で」
戦国時代？
「こうやって、あなたのお弁当で癒されて傷を」
「傷？　　どっかケガしたんか？」
「生物でちょっと・・　やっちゃって」
あ・・　そういうことか
「落ち込んじゃったけど、あなたのお弁当食べてたら、なんかもういいやって」

それは　投げやりになってるってことか？
「次に進もうって」
あ　よかった
「次って、倫社ですけど」
「愛里はちゃんとできてんじゃん、この前一緒に勉強したときもさ」
「仁」
「え？ あ？」
「孝悌、克己、恕、忠、信」
「できてるよ愛里」
「ハァァァよかった」
「すげえよ、ちゃんと憶えてるよ」
「森下家みたいだなって思って憶えたから」
「え？」
「孝悌は親と兄に尽くすことで、克己は私利私欲を抑えてっていうか、森下家には無いですけど」
愛里
「恕は他人に対して思いやりを持って、忠は自分の心に素直で、信は人をあざむかない」
そんなふうに・・　見てくれてんのか
「今の意味で合ってます？」
「え？　　あ、おう、合ってる」
「なんか少し楽になりました」
「そっか」
「ああ、イチゴ美味しい」
なんか　俺　ちっと感動して　目の端にちっと
「あなたのお弁当は、なんていうか・・」
空の方見てる横顔がきれいでさ
「あてなるものです」
「え？」
「私にはそうです」
愛里
「そっか」
「はい」
愛里にとって　俺の弁当は　貴重な　んなこと言ってくれんなんてさ
「俺はしあわせだー！」
「やだもう、またそんな大きい声！」
「あ、ごめん」
「あなたの声ってメッチャ通るっていうか響くっていうかなんだから」
「ごめん、愛里、ごめん」
「それがあなただから」
「愛里ぃぃ」

「しかたないです」
「んなさあ、バチッと切るみてえなさあ」
「切ってないですけど」
「マジ？」
「私は K-POP ファンではないし」
「ハ？」
「ファンクラブに入ってとも言いません」
川口っ　それを言いやがったんか
「正直、私にも全部同じ顔で同じような名前にしか見えない」
「だよな、だよな」
「そろそろ戻りましょう」
「おう」
あれ？　　あれ？　　なんか・・　西校舎の裏側の旧体育館に
「どうしたんですか？」
「あ、や、なんか旧体育館に仮囲いしてあんなって」
「かりがこい？」
「現場でさ、まわりに囲いみてえなのあんじゃん」
「壊すらしいですよ」
「マジ？」
「川口くんのお父さんが同窓会の理事の一人で、なんか関わってるらしくて」
「へえ」
「老朽化が激しいから壊すみたいで」
マジか
「その跡地に多目的スペースを作るって」
「多目的スペース？」
「部活の部室とか、勉強室とか、あとなんだっけ、シャワールーム？」
「学校でシャワー浴びれんなんて最高じゃん」
「でも完成するは３年後・・だったかな」
「なんだよぉ、卒業したあとじゃん」
「あ、もう本当に戻らないと」
「あ、だな」
愛里と二人　校舎の中に走って戻った

森下家の空気

家帰ってきて
愛里の部屋掃除して　俺ん家の掃除もして　買い出し行って
晩メシはハンバーグ
ピコン　愛里
『ちょっと横になっているので』
え？
ピコン
『夕食は』
ピコン
『いいです』
どした？
『愛里どした？』送信
ピコン
『大丈夫』
大丈夫じゃねえだろ
『行くから』送信
ピコン
『来なくてもいいから』
『行く』送信
家の鍵閉めて
愛里の部屋に　エレベーター一階だ　階段だ

愛里の部屋の前
『愛里　開けるからな』送信
鍵開けて
「愛里」
ベッドルームか
「愛里、入るぞ、いっか？」
「はい」
声が元気ねえな
ドア開けて
「愛里、どした？」
愛里がメッチャ顔しかめて俺のこと見て

「月に一度の・・です」
「生理か」
「私は濁したのに、そんなハッキリ・・」
「痛てえの？」
「腰がすっごく重たいカンジで」
「温っためたか？」
「一日目だからまだそこまでじゃないけど」
「早めに温っためた方がいいぞ、今持ってくる」
愛里の部屋のリビングの・・　ここか　あった
愛里のベッドルームに入ると　うつ伏せになってた
「愛里」
「腰が・・」
「愛里、腰、さすっていっかな」
「え？　　でも・・」
「ねえちゃんによくやらされてたから」
「え・・　それじゃ」
薄がけ布団の中から　愛里の腰に手ぇ
「あ・・　楽かも」
愛里の腰をさすりながら
「俺の手ぇでけえし力あるから効くって、ねえちゃん言ってた」
「はぁぁぁ・・　一生さすってて欲しい」
「一生さすってっから」
「なんかもうイヤになるぅぅ」
「辛れえよな」
「明日は魔の二日目で、英訳と日本史と化学って」
「今んなこと考えなくていいから」
「だって、私、英訳で点数取らないと」
「うん、そっか」
「どうしよぉぉ、途中でガマンできなくなっちゃったら」
「そしたら保健室行けばいいからさ」
「テストは？」
「先生が追試してくれっから」
「やだあ、追試とか、もう明日で終わらせたい」
「だな、愛里がんばってるもんな」
「もう！　　せっかくがんばってるのに生理がジャマする」
愛里　辛れえだろうな　見てて俺が泣きそうになっけど　泣きてえのは愛里だよな
「痛み止めは飲んだか？」
「飲んだけど」
「腹へってねえ？」
「へってるけど！　　食べる気になれないの！」

「そっか」
「あ、ごめんなさい、あなたにあたっちゃって」
「いいよ、全然いいよ、ねえちゃんで慣れてっから」
「お姉さんありがとうですぅぅ」
「ハハハ、そっか」
「あなたに・・　さすってもらうと・・すご・・く・・楽」
「そっか」
愛里が目ぇつぶって　痛み止め効いてきたんたな
愛里の寝息が聞こえるまで　俺はゆっくり腰さすってて
目ぇ覚めたら　俺ん家来るかな　それよか握りメシ持ってきておくか
薄がけ布団から手ぇ出して　そっとベッドルーム出て
俺ん家に戻った

とうちゃんとかあちゃんはもう帰ってきてた
「愛里さんは？」
「生理になっちまった」
「あら、それは・・ね」
「一日目で、腰痛てえって」
「ヒトミと同じね」
「うん、とうちゃんとかあちゃん先に食っててよ、俺、愛里に握りメシ作って持ってく」
「愛里さんと食べるの？」
「愛里寝てっから、起きたら食うかなって」
「そう」
キッチン入ってったら　とうちゃんがいて
「愛里ちゃん、生理か」
「うん、腰痛てえって」
「そっか、辛れえだろうな」
「辛そうだった」
「握りメシ持ってくんか」
「起きたら食うかなと思ってさ」
「そっか」
皿に握りメシ置いてラップかけて
愛里の部屋に行って
そっとドア開けて　愛里はまだ寝てる
ダイニングテーブルに握りメシ置いて
愛里の部屋を出た
スーパー行かねえと
明日の弁当のメニュー一部変更だ

家に戻ったら　とうちゃんとかあちゃんはメシ食ってて

「ダイチ、メシ食わねえんか？」
「あとで食うよ」
キッチン入って
明日は鶏と卵のそぼろ弁当にしようと思ってたけど
愛里は生理んとき梅干とおかかの握りメシ食いたがるんだよ
そんで、あとはイソフラボンと鉄分
ひじきと大豆の炒め煮と鶏ひき肉は小せえ団子にして　卵は明日の朝卵焼きにしよう
あとはほうれんそうも鉄分摂れっから胡麻和えにすればいいな
おっし、下準備はできた
とうちゃんが入ってきた
「ダイチ、洗いもんは俺がやっとくからメシ食えよ」
「うん、とうちゃんありがとう」
俺の分のハンバーグとメシとサラダ持ってダイニングテーブルに置いて
他に俺にできることってなんかあんのかな
「ダイチ、明日もテストよね」
「うん、最終日」
「テストのときに生理、ヒトミもよくそういうことあったわ」
「うん」
「なんであんたが落ち込んでるのよ」
「落ち込んではねえけど」
「あんたはふつうにしてなさい、異様に心配されると逆にウザイ」
「ウゼえって」
「あんたがやってあげられることをやって、あとは、自然にまかせるしかないでしょ」
「わかってるよ」
「あんたは愛里さんのバースデープレゼント」
え？
「もう決めたの？」
「まだ・・　かあちゃんは何あげんの？」
「何もあげない」
「へ？」
「愛里さん言ってたじゃない、さりげなくなにごともないように過ごしたいって」
「そんでもさ、俺は愛里とつき合って初めての愛里の誕生日でさ」
「ミシン買ってあげたら？」
「ミシン？　　ミシンがいぃんかな？」
「私が高二で、つき合ってるカレシからミシンもらったら・・　別れる」
「なんだよ、ミシンつったのかあちゃんじゃん」
「あんたは？　　今年の誕生日は何が欲しいの？」
「まだなんも考えてねえよ」
「そろそろ新しいミシンにしたら？」
「ハァアアア？　　誕生日にミシン欲しくねえよ」

「ほら、そういうことよ」
そういうことよって　かあちゃんが言い出したのにさ
「慣れないことはしない方がいいわよ」
「ハ？」
「女の子にバースデープレゼントなんて初めてでしょ」
「ったりめえじゃん、つき合ったことねえし、つき合いてえと思ったことねえもんよ」
「愛里さんの感覚、私は大好きよ」
「愛里の感覚？」
「小さなしあわせ感」
小さなしあわせ感？
「他人から見たら小さいけど、自分にとっては世界より宇宙より大きくて包まれてるカンジ」
なんか・・　よくわかんねえけど
「愛里さんのその感覚を大切にしてあげようって思えばいいのよ」
「そんでも、かあちゃん、とうちゃんとの最初の誕生日にお守りもらったんだろ」
「あれはね、心配されてたのね」
とうちゃんもそう言ってたけどさ
「あのお守りは効くわね、あれから事故にも遭ってないし転んだりしないもの」
それはとうちゃんがさりげなくガードしてっからでさ
「今でも持ってるのよ、いつもバッグに入れてるの、見たい？」
「見てえ、俺見せてもらったことねえよ」
ねえちゃんは見たことあるっつってたけど
かあちゃんがベッドルームに入って　そんでまた出てきた
「ほら」
なんつうか・・　擦り切れて色あせて文字もほぼ見えねえな
「かあちゃん、お守りってさ、ずっと持っててていいもんなの？」
「そんなことはどうでもいいのよ、これがいいの、これじゃなきゃダメ」
「へえ、そうなんか」
「物じゃないのよ、気持ち」
「わかってっけどさ」
「ダイチ、私は行事ごとが嫌いなの」
「知ってるよ」
「そのときだけお祝い、そのときだけ感謝ってなに？ って思っちゃう」
まあ　それはそうだけど
「毎日がお祝いみたいなものよ」
「毎日が・・　お祝い？」
「今こうやってなんともない一日を一緒に過ごせることが奇跡だから」
俺は・・　なんか　なんかわかんねえけど　ウルウルして
「かあちゃん、中国思想の仁て言葉を表す五つの言葉、あんじゃん」
「えーっと、孝悌、克己・・　あとはなんだったっけ」

「恕、忠、信」
「ああ、もう遠い昔にやったから忘れちゃったわ、テストに出たの？」
「出たんだよ、愛里それちゃんと憶えててさ」
「よかったわね」
「なんで憶えられたかって、それが森下家みてえだなと思ったからだってさ」
「森下家？」
「身内を思いやって、私利私欲を抑えて、私利私欲は森下家にはねえっつってたけど」
「あら、そう」
「他人に対して思いやりを持って、自分の心に素直で人をあざむかねえって、
　愛里は森下家をそう思ってくれててさ、俺すげえ嬉しかった」
かあちゃんが俺の前に座った
「それは森下家じゃないわよ」
「え？」
「それは、カズオ」
ヤベ　涙
「なに泣いてるのよ？」
「わかんねえ、急に出てきちまって」
指でぬぐって
「少なくとも私は、親を思いやる余裕なんてなかったし、私利私欲が盛沢山だったし」
「盛沢山て　ハハハ」
「自分の心に素直じゃなくて、人をあざむくこともあったわ、ひっどい女ね」
「俺は・・　かあちゃんがひっでえ女だと思ったことねえよ」
「あら、そう？　　若い頃の私はイヤな女だったわよ」
「そっかな」
「カズオが私の部屋の空気をガラッと入れ替えちゃったの、勝手に」
「勝手にってさ」
俺　笑ってっけど　なんか　かあちゃんの気持ちがすげえわかって泣きそうで
「ホームレスのくせに、人の家の空気を全とっかえしちゃうなんてね」
笑おう・・と　したけど　なんか　手で鼻水ぬぐって
「愛里さんは感じてくれたのね、森下家の空気は何でできてるかって」
森下家の空気が　何で・・　とうちゃんで・・
「あんたもその空気の中で育ったんだから、そのままでいいんじゃないの？」
「そのまま？」
「背伸びせず自分のままで愛里さんのそばにいれば」
背伸びせず・・
「だいたいあんたが何か選んだって、どうせダサくて愛里さん逆ビックリよ」
「逆ビックリってなんだよ？」
「よくもまあこんなダサいものを探してこられるものだなって」
「ハァァァアア？　　指輪！　　指輪はメッチャ気に入ってくれてっけど？」
「あれは一生に一度の奇跡ね」

「奇跡ってさ」
「あと何回生まれ変わっても、もう二度とないわね」
「ハァァアア？」
「美里」
とうちゃん　俺は今すげえディスられてんだよ
「風呂入ったよ」
「そう、ありがとう」
かあちゃんがバスルームに行った
「とうちゃん」
「ん？ どした？」
「ハンバーグは、やっぱとうちゃんのが美味えよ」
「そっか？　　俺のダイチのハンバーグ好きだよ」
「やっぱ森下家のハンバーグの元祖はとうちゃんだからさ」
「がんそ？」
「森下家はとうちゃんから始まったんだよ」
とうちゃん首かしげて困った顔で笑ってっけど
とうちゃんみてえになりてえ　とうちゃんの空気いーーっぱい吸ってさ
「ごちそうさま」
「俺が洗っとくからよ」
「いいよ、俺が洗うよ」
「ダイチは勉強あんだろ？」
「こんくれえ大丈夫だよ」
「ちっとはとうちゃんにもやらしてくれよ」
とうちゃんが　俺に　とうちゃんて言うときは　俺が小せえときの感覚になってるときで
「ありがとう、とうちゃん」
俺は　小せえときみてえに　とうちゃんに甘える
おっし　勉強すっか

実力テスト最終日

実力テスト最終日
ゆうべ愛里は
『少し勉強してお風呂に入って寝ます』って
俺も
『そっか　愛里　おやすみ』だけ送った
かあちゃんが言ってたもんな　あんま心配し過ぎっとウゼえって
朝迎えに行ったときは　魂抜けたみてえな顔で立っててさ
「痛み止め飲んだか」って聞いたら　その顔のまんま　コクンてさ
学校行くときも手ぇつないだら　愛里の手がすげえ冷たくてさ
もうそんときは愛里と手ぇつないでるっつう喜びより
俺の体温で温っためてえって必死でさ
いっそ俺のキンタマに痛みが移ればいいのにって思った
思ったけど　やっぱタマ痛てえと歩けねえし息できねえっつうか
そういうカンジなんかな？　　それとは違げえよな
男がおんなし痛み感じたら失神するってなんかに書いてたもんな
それを耐えてんだよ　愛里は　今　遥か右斜め前方でさ
「始め！」
一気に集・・　あ、腰押さえてる　痛てえんだな
や、ダメだ　集中しねえと

なんか・・　やらかした気ぃする
英訳　な〜んかやらかしたんじゃねえかな
愛里は　便所か　便所だよな保健室じゃねえよな　便所であってくれ
ダメだ　俺がこんなんでどうすんだよ
俺がドーンとかまえてねえとさ　愛里が俺に頼れねえじゃん
フーーーーッ　おっしゃ　あ、愛里戻ってきた　やっぱ便所だったんか　よかった

昼休みの中庭
愛里の顔に少し血の気が戻ってきてる
「あたなのおむすび、さっぱりするぅぅ」
「そっか」
「このひじきと大豆？　　これ美味しい」
「そっか」

「日本史の後半なんか、あなたのお弁当が待ってるって」
え？
「それを支えにがんばりました」
愛里　泣きそうになるからやめてくれ
「英訳は、もう意地でした」
「そ・・っか」
「これで点数を取らないと私は点数取るものがないんだから！ って」
「愛里はあるよ、点数取れんの、夏休み中すげえがんばってたじゃん」
「すごくがんばってたのに、これですよ？　　最終日に生理！」
「あ・・　だよな、なんか、ごめん」
「なんであなたが謝るの？」
「や、なんか」
「朝は、身体が骨まで冷えちゃってる感覚で」
「手ぇ冷たかったもんな」
「でも、見て」
愛里が俺に顔を近づけて
「汗かいちゃってて」
「そんなに辛れえんか？」
「じゃなくて、まだこんなに暑いのにホカロンつけてるから」
「あ・・　そっか、ああ、だよな」
「ホカロンを熱いと感じるようになってきたから、だいぶマシになってきました」
「マジ？」
よかったあ
「あとで購買の前の自販機で冷たいの買いたい」
「買ってこよっか？」
「ううん、あとで、今はお弁当をゆっくり味わいたいから」
「そっか」
「このお弁当は・・　イソフラボンと、なんだろう、鉄分？」
「え、まあ、うん」
「すっごい贅沢」
「んな、ひじきとか大豆とかさ、ほうれんそうも鶏ひきも高くねえよ」
「そうじゃなくて、私のために私の状態を考えて作ってもらったお弁当食べられるから」
「俺はこんくれえっきゃできねえからさ」
「あなたのこんくれーで、私はすごく救われるから」
「マジ？」
ヤベ　マジで泣きそうなんすけど
「いっつもそう言ってるでしょ」
「あざーす」
「なにそれ　ハハハ」
愛里が　笑った　笑ったよーー！

「次は化学ですね」
「だな」
「化学はもう・・」
「捨てんなよ」
「あ、はい」
愛里がイチゴ食って
「イチゴが沁みるぅぅ、ビタミンCをありがとう」
「なんだよそれ　ハハハ」
「チョコ食べたーーい」
「あるよ」
「あるの？」
「うん」
手提げの中に手ぇつっこんで
「ほれ」
「神ぃぃぃ」
愛里がチョコ一口食って
「はぁぁもう最高、しあわせ」
「スーパーで買ったやつだよ」
「だって、生理中に学校でチョコ食べられるとか」
「食いたくなんじゃねえかなって」
えっ
「あ、愛里？　どした？　泣い、痛てえんか？」
「嬉し泣きですぅぅ」
「え？ あ？」
「生理で情緒不安定だからぁぁ」
「え、あ、そっか」
「チョコ美味しいぃぃ」
「泣きべそかいて言うなよ」
「だってぇぇ」
メッチャ可愛くて　俺が泣きそうになっからさ

購買の前の自販機で
「愛里、どれがいい？」
「自分で買います」
「どれがいい？」
愛里が俺のこと上目遣いでちょっと睨んで
「午後ティーのミニで」
制服のズボンから財布出して
「またそれ持ってきてるの？」
小銭入れて　これか

「これは俺にとって」
ボタン押して
「最高級財布なんだよ」
「見られたら恥ずかしいから早くしまってください」
「どこが恥ずかしいんだよ」
出てきた　フタ開けて
「ほい」
「ありがとうございます」
一口飲んで　ハァァァって　可愛いなあ
「ダイちゃん」
「え？　　あ！　　おばちゃん」
「元気にしてた？」
「ずっと店番できねえでごめんな」
「いいんだよ、夏休み前にさ、娘一家と同居したの」
「マジ？」
「ムコさんがいい人でさ、母さん一人じゃかわいそうだってさ」
「よかったなあ」
「今は孫の顔見放題だから、心配しなくていいよ」
「そっか」
「あれ？　　ダイちゃんのカノジョ？」
愛里がフリーズした
「俺のカノジョ」
「あらあ、ダイちゃんよかったねえ」
「愛里、購買のおばちゃん」
「はい・・　知って・・ます」
「一年のとき、よく割り箸買いに来てたもんねえ、昨日もさあ」
「はい、いつもお世話になってます」
「お世話って、割り箸売っただけだよ　アハハハ」
なんか愛里が居心地悪そうにしてんな
「おばちゃん、そんじゃまたな」
「ダイちゃんもカノジョさんもまたね」
愛里と廊下歩いて
「愛里、ごめんな、愛里人見知りなのにさ」
「私は何回も会ってます、昨日もお箸買いました」
「なんか固まってたからさ」
「あなたと購買のおばさんの親しさ度合いがすご過ぎて、ちょっと頭が混乱しただけ」
「俺、購買で店番して小遣い稼ぎしてたからさ」
「聞いてましたけど、すごいですね」
「なにが？」
「人懐こいっていうか」

「俺？」
「ゴールデンレトリバーも真っ青みたいな」
「なんだよそれ」
あ、もう空になってる
「愛里、捨ててくっから」
「え？ あ・・　はい、あ！」
あ？　　あっつうのは？
「これ・・　ちょうどいいかも」
ちょうどいい？
「持って帰ります」
「そのペットボトル？」
「はい」
「そんじゃ、手提げに入れっから」
「はい」
愛里が俺に空のペットボトル渡して
「私、あの・・　ちょっと・・　先に戻っててください」
便所か
「おう」
愛里が小走りに廊下の向こう側に
愛里　あとは化学だけだ　もう少しだかんな

「始め！」
前半は　夏休みの課題からの問題が多いな
最後の問題　おもしれえ
条件と数値与えて　こっから計算して割り出すわけだ
そんで　回答欄は値だけ書くのか　しかも配点がこの問題だけで 10 点
まあそんだけのことはあるか
これはいろんな方法があんな
とうちゃん　こういうの大好きだよな　クイズみてえだっつって
とうちゃんならどの方法で解くかな
俺は　この方法で　そんで答えは　2
みんなどの方法で解いてんのかな　それぞれ個性出ておもしれえだろうな
え・・　愛里　愛里は？　　これは・・　愛里にはちっと・・　どうだ？
焦るなよ　これ以外の問題は夏休みの課題からが多いからさ
そこしっかりやれば　万が一ここわかんねえでもいけっからさ
「後ろから集めて！」
愛里は・・　愛里の横顔　無だな　どういう意味の無だ？

帰りの学活終わって
「愛里、帰ろう」

「はい」
ロッカーで靴履き替えて校舎出て
「愛里、大丈夫か？」
「どっち？」
「どっち・・っつうのは？」
「生理ならだいぶ楽になってきました」
「よかったあ」
「化学ならダメです」
「ダ、ダメ？」
「前半のは、夏休みの課題で、あなたから教えてもらって、なんとなくは」
「そっか、うん、そっか」
「最後の問題は、質問の意味すらわかりませんでした」
「あれは・・　ちっとな」
「何を聞かれているのか、何のことなのか全然わかんない」
「あれは、どっちかっつうと理数系用だからさ」
「なんかもういいやってテキト～に数字書いて終わりました」
「テキト～？」
「頭に浮かんだ数字書いただけ」
「そっか、空欄よかな」
「絶対ダメ、当たるわけがない」
「愛里、もういいから、終わったからさ」
「笑っちゃう、もう、頭に浮かんだのが２」
「え？」
「２って、そんなわけあるはず」
「２だよ」
「なにがですか？」
「最後の質問の答え」
「ハ？」
「２」
「いいです、慰めとか」
「慰めじゃねえよ、２なんだよ」
「えっ　ウソ・・」
「ウソじゃねえよ、２だよ」
「エーーーーーッ」
「愛里、すげえよ」
「それじゃ・・　私は・・」
「できたんだよ、正解だよ」
「化学は・・　10 点ていうことで」
「へ？」
「０点を覚悟してたから」

「前の方もできてっから」
「わかんない、ボヤッとだから」
「ボヤッとでも全然やってねえよかできてっから」
「まあいいです、私は化学者になりたいわけでも化学の先生になりたいわけでもないから」
「そっか、うん、だな」
「だなって、無責任！」
「へ？」
「あ、ですよね、あなたに責任はないです」
「俺に責任がある」
「ないでしょ、どう考えてもないでしょ」
「俺が教えたからさ」
「だからって責任はないです」
「もしも、もしも、万が一、愛里が追試に」
「イヤーーーーツ」
「な、なんねえ、追試にはなんねえから」
「またそんな根拠のないことを」
「俺が教えたんだからさ、愛里がどんくれえ理解したかは俺がわかってんだよ！」
「逆ギレ？」
「な、なんの逆？」
「もういいです、終わったから」
「あ・・　そっか」
「はい」
校門出た
愛里の手ぇにぎったら　よかった　体温戻ってきてる　まだ指の先っちょ冷てえけど
「あなたは明日は何か予定があるんですか？」
「明日？　　なんもねえよ」
「私は明日はお花の先生のバイトです」
「あ、だよな、土曜日っつってたもんな」
「よかったあ、二日目じゃなくて、二日目でバイトとかムリ」
「そんでも、あんまムリすんなよ」
「はい、あの・・　お弁当は」
「作るにきまってんじゃん、なんか食いてえもんある？」
「あなたが作ってくれるお弁当ならなんでも好きです」
「そっか」
なんか嬉しくて愛里の手ぇにぎりながら前と後ろにさ
「やだあ、子どもみたいに振らないで」
「いいじゃん、学校帰りにさ、愛里と二人でさ、楽しいからさ」
「ギャップあり過ぎ」
「ギャップ？　　なんのギャップ？」

「なんでもない」
「愛里ぃぃ、なんだよぉぉ、言ってくれよぉ」
「なんでもございません、王子様」
「またなんか回ってきてんのかよ？」
「今のところは来てません」
「ったくさあ、言いてえことあんなら俺に直接言えっつうの」
「言えるわけないでしょ」
「なんでだよ？」
「モリシタダイチだから」
「ハ？　　俺は俺だけど？」
「そうですね、あなたはあなたです」
「おう、そうだよ」
「そうです」
なんかわかんねえけど
愛里が少し具合よくなって　よかったあああ

おからとうずら

今日の晩メシは　おから　だけじゃねえけど
おからはメッチャ安いから　見つけると必ず買う
メッチャ増えるしさ　なんにでも使えっからさ
今日は煮物作ったけど　明日の愛里の弁当は・・　おから混ぜたコロッケと
メンチも作った方がいっかな　メンチよりかハンバーグか？
「ただいま」
「とうちゃん、おかえり」
とうちゃんがキッチン入ってきて
「おから作ったんか」
「とうちゃんみてえにはできねえんだけどさ」
「ダイチのおからの煮物は美味えよ」
とうちゃんが手ぇ洗いながら　え？　なんか考えだした
なんだ？　メッチャ真剣な顔　なんかあったんかな
とうちゃんが考えてっときの顔ってさ　メッチャかっけえんだよな
男の俺でも惚れそうなくれえ男らしくてさ
「ダイチ」
「あ、はい」
はいなんて言っちまったよ　声も低くてかっけえカンジになってっから
「うずらの卵ってよ」
「え？ あ？ なに？」
「うずらの卵ってよ、どうやって食えばいぃんかな」
うずらの卵？
「中華丼とかに入れんじゃね？」
「中華丼は作ってきた、そんで入れた」
「うちじゃ・・　あんま使わねえよな」
「ダンナさんがもらってきたんだってよ、10 個入り５ケース」
「え、ごっ 5 ケース？　50 個じゃん」
「俺にもくれてよ」
とうちゃんが手提げから
「とうちゃん、これ、スーパーのじゃねえな、メッチャマジなやつじゃん」
「マジなやつ？」
「あ、なんつうか、農家直売的な？」
「なんか会社で働いてる人の、なんつうんだ？　遠くの家？」

「実家？」
「そこが百姓で送ってきて、ダンナさんにもくれたんだってよ」
「こんくれえ新鮮ならさ、卵かけごはんにしてもいんじゃね？」
「１個かけんのか？」
「や、10 個割れば・・　どうなんだ？」
「早く使わねえと悪くなっちまうからよ」
「だよな、ちっと待って」
検索するっきゃねえな
うずらの味つけたまご・・　美味そうだな　小せえから食いやすいんじゃね？
「とうちゃん、うずらの味つけたまごってあるよ」
「いいかもしんねえな、豚肉と生姜入れて一緒に煮ればよ」
「うわ、メッチャ美味そう」
あとは・・　うずらのスコッチエッグ　スコッチエッグ？　　これ・・
「とうちゃん、このうずらさ、明日の弁当に使っていっかな」
「ダイチにまかせっからよ」
愛里ととうちゃんの弁当、小せえコロッケとうずらのスコッチエッグにしよう
ふつうの卵じゃでけえから作ってねえけど、これならいけんじゃね？
明日は愛里のバイト再開初日だもんな　そんで整理三日目だからやっぱイソフラボン
そんで今日のひじきと大豆の煮物を酢飯に混ぜた混ぜ寿司　寿司？　　あれ？
「アーーーーーッ」
「ダ、ダイチ、どした？」
「俺・・　忘れてた」
「な、え？」
「愛里がアメリカから帰ってきたら巻き寿司作るって」
「明日作ればいんじゃねえか？」
「明日？　　そっか」
そんでも・・　弁当が混ぜ寿司で晩メシも寿司・・って　どうなんだ？
日曜日か？　　そうだな

かあちゃんが帰ってきて　愛里も来て
晩メシ食ってる
「おからって美味しいんですね」
「愛里さんは初めて？」
「前にママが作ったことがあって、それがパッサパサで、そういうものなのかなって」
「私は作ったこともないから何も言えないけどね」
「こんなにしっとりして、ゴボウの風味が効いて、いっくらでも食べられますね」
「おから攻めに遭うわよ」
「おからぜめ？」
「一度買うと、いろんなものに入れてくるのよ」
「おからもイソフラボンですよね」

「そうね、たしか豆乳を絞った搾りかすよね」
かあちゃん　かすってさ
「贅沢ですね」
「おからは安いのよ」
「おかあさんと私の身体を気遣ってくれるおかずだから」
「愛里さんたら、そんなこと言ったら本当におから攻めに遭うわよ」
おから責めってさあ
「おからにならせめられてもいいです」
「ハハハ愛里さん、おもしろい」
愛里ごめん　明日の弁当マジおから攻めになんだよ
「私にとって、お昼のお弁当は命綱なんです」
「命綱？」
命綱？
「今日もお弁当のおかげで、身体も心も助けられて」
愛里・・
「なんとか、この状況の中、実力テストを乗り越えられました」
んなこと言ったら泣きそうになんじゃん
「よくがんばったわね、生理二日目で」
「一時間目の英訳は、なんかもう、痛みと意地との闘いでした」
そんなだったんか
「どっちが勝った？」
かあちゃんっ　んなこと聞くなよ
「意地が勝ったと、思いたいです」
愛里・・　俺　マジで泣きそうになってんだよ
「絶対に勝ったわよ」
「そう・・ですか？」
勝ったよ　愛里　最後までやってたじゃん
「愛里さんは大丈夫」
「おかあさんにそう言ってもらうと 100 点取った気分になりますぅ」
「ハハハハ、でもね、痛いときは無理しないでね」
「はい」
「テストより身体の方がずーーっと大事だから」
かあちゃん　いいこと言うなあ
「明日はお花の先生のところのバイトよね」
「はい」
「あまりムリしないでね」
「大丈夫です、いろいろ教えてもらいたいこともあって楽しみなので」
「そう、よかった」
「はい」
ヤベエ　俺　ちっと涙出ちまってる

命綱ってさ　俺の弁当をさ

晩メシ終わって
かあちゃんと愛里はリビングで
俺ととうちゃんは後片付けしてて
「アイリちゃん、辛かったんだな」
「うん、朝なんて手ぇメッチャ冷たくなっててさ」
「ヒトミは大学の受験とき、二日目でよ」
「マジ？　　知らなかったよ」
「俺はどうもしてやれねえからよ、弁当の中にチョコ入れてよ」
とうちゃんもか
「こう包んでるやつあんだろ？　　あれ入れるくれえっきゃよ」
「ねえちゃん喜んでただろ」
「ん・・　チョコ見たら涙出たっつってた」
愛里も　泣いてた
「女の人は大変だな」
「だよな」
「奥さん見てても、思い出すもんな」
「なにを？」
「美里が・・」
とうちゃんの顔つきが　ちっとヤベエ
「とうちゃん」
とうちゃんの泡だらけの手ぇ握ったら
「悪露がまだ続いてっだろ」
「一ヵ月くれえだったっけ？」
「一ヵ月も血ぃ出て、いろんなの出てよ、大変だよな」
「そっか、だよな、俺は見たことねえけどさ」
「院ときの産婦人科の先生がよ、お産は全治一年の交通事故にあったくれえのことだって」
「とうちゃん俺にもそう教えてくれたよな」
「生きてくれてっだけでありがてえんだよな」
かあちゃんは・・　マジのやつだ
「そんなんで赤ちゃん生んでくれてよ」
「うん」
とうちゃんが俺のこと見て
「こんなでっかくなってよ」
「おかげさまで大きくなれました！」
「ほんとね」
かあちゃん
「カズオが育てたら規格外に大きくなっちゃって」
「規格外って、俺はとうちゃんとおんなしなだけでさ」

「私が育ててたら、その前に育てられないけど」
「ねーちゃんは、んなことしねえでいぃんだよ、俺が」
「カズオ、育ったから、あんたが育てちゃったから大丈夫よ」
育てちゃったってさ
「ダイチ、愛里さん」
「おう」
愛里と二人で家を出た

愛里の部屋の玄関
「今日は、いろいろと、あの、ありがとうございます」
「んなこといぃんだよ、辛れえのは愛里なんだからさ」
「森下家の男の人って」
「ん？」
「本当に女の人を大切にしてくれるんですね」
「大切じゃん、メッチャ大切じゃん、なんもできねえけど、そんでもさ」
「なにもできないとか、そんなことないから」
「え？」
「生理痛は代わってもらえないけど」
「それは、なんか、ごめんな」
「やだあ、なんで謝るの？　　ムリだから、そんなの」
「そうだけどさ」
「あなたがいてくれたから」
え？
「私、なんか、すごく、ひとりじゃないカンジがして」
愛里
「遥か左斜め後方にあなたがいるって思うと、心強かった」
「愛里」
抱きしめて
「あと・・」
俺の腕ん中で
「私のことを思って作ってくれたお弁当が、本当に嬉しくて」
「俺は、それっきゃできねえけど、そんでもこれからも愛里のために作っから」
「私にとって、あなたのお弁当は・・　あなただから」
え？
「明日は何を作ってくれるんですか？」
「おから攻めっす」
「ハハハ、わかりました、攻めてください」
なんだよそれ　メッチャ可愛い
「愛里」
くちびる　柔らけえ　メッチャ　あ・・　ヤベ

パッと愛里から離れて
「どうしたの？　お腹痛い？」
「や、全然」
「だって、なんか、こんなになって身体丸めてて」
「や、なんもねえ、なんもねえから」
「お腹痛いならちゃんと言ってくださいね」
「痛くねえよ、マジで」
よ・・し　よし　少しおさまった
「ほら、な？」
「ムリしてない？」
「してねえよ」
違げえことでは　ちっとムリしてっけど
「そうですか」
「うん、なんもねえから」
「明日は、あなたは何をするんですか？」
「俺は・・　愛里の部屋掃除して、家の掃除かな」
「土曜日なのに働くの？」
「これは仕事じゃねえよ、つか、愛里は土曜日にバイトすんじゃん」
「あ、そうですよね、なんかそういう感覚じゃなくて」
「よかったな、そういうとこでバイトできるなんてさ」
「はい」
ん・・っと
「愛里、そんじゃな」
「はい、それじゃ」
玄関から出てドア閉めて
あああああ　久っしぶりのハムハムで　ヤバかった
えっ　俺の背中に　愛里が
「ありがとう」
背中でよかった　今　俺の海綿体に動脈血がドバーッと流れ込んでて
愛里が手ぇ離して　ドアが閉まった
ハァァァ　急襲は　やべえよ　愛里
シャワーだシャワー

しょうゆ入れとカード

おから混ぜた小せえコロッケとうずらのスコッチエッグも揚がった
これは・・　爪楊枝に二個ずつ刺すか　これなら食いやすいんじゃね？
あと一個ずつは・・　半分に切って　いいんじゃね？
ゆうべ作っといたケチャップとソースとしょうゆと白ワイン煮詰めたタレを・・
このしょうゆ入れ　フタんとこがゆるくなってきてんだよな
昔かあちゃんがどっかでもらってきたメッチャ高級弁当についてたやつ
もひとつは焼売についてたやつ　どっちも漏れそうだな
ホームセンターで買ってくるか　これからも使うしな
コロッケとスコッチエッグをレタスの上に乗っけて　ブロッコリーとトマトのサラダで
そんでひじきと大豆の混ぜ寿司の上に紅ショウガ　おっし　できた
愛里ととうちゃんの弁当包んで
「とうちゃん」
あれ？
「とうちゃん？」
ベランダか
「とうちゃん、弁当置いとくからさ、持っててよ」
「ありがとな」
「洗濯物は俺が干すからさ」
「あとちっとだからよ」
「俺、愛里んとこに弁当持ってって、そのまんま掃除すっからさ」
「そっか、その間に俺出かけっけど」
「うん、とうちゃん、いってらっしゃい」
「いってきます」
弁当持って愛里の部屋に行った

愛里は弁当持って出かけた
ちっと緊張してたな
そんでも、「久しぶりだから」って笑ってたから大丈夫だな
おっし　愛里の部屋の掃除も終わった
次は・・　かあちゃんの早え昼メシだ

「あんたのハムサンドってカンジね」
「そうっすか、息子の味っつうことでさ」

「ハハハ、そうね、息子の味ね、あんた、どうしたの？」
「なにが？」
「今までは、どうせとうちゃんの味がいいんだろって突っかかってきたのに」
「かあちゃんにとっては、とうちゃんの味が唯一無二なんだろうなって」
「へえ、愛里さんが何か言ってたの？」
「愛里は、ただ、愛里にとって俺の弁当は俺だっつってただけで」
「あら、そう」
「かあちゃん、俺、ホームセンター行ってくっから」
「やだあ、また何か安売りのヘンなもの買ってくるの？」
「ちげえよ、弁当用のしょうゆ入れ、口んとこゆるくなっちまってっから」
「そうなのよ、この前カズオがおしょうゆ入れてくれて、それが漏れてたの」
「新しいの買ってくっから」
「やっと！」
「ハ？」
「うちにあるおしょうゆ入れって 3〜4 年前のじゃない？　もっと前のもあるわね」
「まだ使えっからさ」
「ああいうのは基本使い捨てなのよ」
「もったいねえじゃん」
「出た！　もったいない」
「もったいねえだろ、まだ使えんのにさ」
「なんかもうカズオが二人に増殖しちゃって、この家はゴミ屋敷」
「ゴミはちゃんと捨ててっだろ」
「私の独身時代にくらべると、我が家から出るゴミは無いにも等しいわよ」
「いいじゃん、なんつうの？　ほれ、環境とかさ」
「あんたとカズオはエコなんて考えていません」
「ハア？」
「ただただ、もったいないもったいないで、あ、そうだわ」
かあちゃんが立ち上がってベッドルームに入ってった　なんだ？
「これ」
薄いブルーのジーパン　とうちゃんのだ
「見て、ここのお尻のところから後ろももの半分まで擦り切れちゃって」
「まだ履けんじゃねえの？」
「あら、ダメージジーンズ？　オッシャレ」
「え？ あ？」
「なわけないでしょ」
俺なんも言ってねえじゃん
「これはただのダメージ！　ここから下着が見えるの」
「あ、うん」
「あんたは自分の父親がパンツ見せて歩いてても平気なの？」
なんで俺が怒られてんだろう

「や・・　それは」
「あんた捨てて」
「え？ 俺？」
「私は捨てろって言ったの、去年よ、昨日クローゼットの中を見てビックリよ」
「あ・・そっ・・か」
「まだまだあるけどね、いくらなんでもこれはムリ、雑巾にもならないでしょ」
「そんじゃ、うん、俺が、捨てます」
「頼むわよ」
とうちゃん　ごめんな　俺　なんか　ごめん
とうちゃんのジーパン持って部屋入って　愛里用の金入った財布ポケットに入れて
キッチン行って、家計用の金入った袋も持って
「かあちゃん」
リビングのソファに座ってるかあちぉんとこ行って
「晩メシ何食いてえ？」
「今食べたばっかりでそんなこと聞かれても浮かばない」
「そんじゃ、コッテリ系？　サッパリ系？」
「今はサッパリ系の気分だけど夜になったコッテリ系になるかもね」
とうちゃん　よくこれに対応してんな
「カードも買ってくるの？」
「カード？」
あっ　とうちゃんとかあちゃんの誕生日カード
「あんたはいっつもホームセンターで買ってくるから」
「え、そんじゃ、べつんとこのがいい？」
「ホームセンターのでいいわよ、あんたのチョイス笑えるから」
「わ、笑え・・」
「あれはいつだっけ？　小5？ 6？　マレフィセントのカードをくれたわよね」
「あれはさ、あれはホームセンターじゃなくてさ、ねえちゃんに連れられて、
　なんか女の子のばっかの店で、ねえちゃんがかあちゃんにはプリンセスがいいって、
　そんで俺、カードんとこ行って恥ずかしくてテキト〜にひっつかんで」
「それがマレフィセント」
「ハロウィン用・・で、ねえちゃんにはバカかって言われた」
「ウケたけどね」
あんときも笑ってたけどさ
「あんたにはあんたの味があるから、けっこう楽しみなのよ」
「え、マジ？」
「今年はどんなので笑わせてくれるのかなって」
笑わせるつもりはねえんだよっ　マジで一生懸命選んでんだよっ
「愛里さんのはどうするの？」
「え？」
「ホームセンターで買うの？」

愛里のは・・
「かあちゃん、どしたらいぃんかな？」
「あんたからのカードなんだからあんたの好きにしなさいよ」
「俺の好きってさ、やっぱ愛里のは、なんつうかシャレたとこで買った方がいぃんかな」
「どうせあんたが選ぶんだから、オシャレなショップでもホームセンターでも同じよ」
「同じっつうのは？」
「ダサくてズレてて笑える」
「ハァアア？　俺、マジで聞いてんだけど」
「私もマジで言ったんだけど」
ったくよ　俺は真剣に悩んでんのにさ
「もしもカズオが私に、1 枚 1,000 円とかのオシャレなカードを買ってきたら」
「きたら？」
「どうしちゃったの？　頭でも打った？　おかしくなっちゃった？ って心配になるわね」
「へ？」
「カズオがまだ漢字の読み書きができなかった頃、スーパーのチラシの裏に私の名前を、ズラーーッと書いてたの、写経みたいに、怖かったわよ」
それで里親の里は知ってたっつうやつか
「それでいいのよ、カズオはそれがいいの」
「俺は？」
「知らないわよ、好きにすればいいでしょ」
「んなさあ、アドバイスしてくれてもいいじゃん」
「あんたのセンスに私はどうアドバイスすればいいのかしら？」
「俺ってさ・・　そっんなにセンスねえの？」
「基準が私とは違うのよ」
「基準？」
「あんたにとって大切なのは　安い」
「そんじゃ高えの買えばいぃんかよ？」
「あんたが高いカードなんか買ったら、愛里さんが心配するわよ」
「んな、俺、金はねえわけじゃ」
「頭打っておかしくなっちゃったの？ って」
「そう・・すか」
なんか・・
「ホームセンター・・　いってきます」
「私は好きよ、あんたのホームセンターで選んだカード」
「そう・・すか」
「なにたそがれてるのよ」
「や、べつに・・」
「愛里さんのあのセンスに太刀打ちできる人なんてそうそういないわよ」
「俺は太刀打ちしてえとか、んなことは全然思ってねえよ、たださ」

「高くて微妙なカード贈るより、ホームセンターのカードで笑わせてあげなさいよ」
「笑わせるってさあ」
「カードで笑わせられるなんて、なかなかできないわよ」
「え？」
「微妙な顔されるより、なにこれって笑ってる顔が見たくない？　私なら見たいわ」
愛里の　笑ってる顔
そっか　だよな　愛里が　ダッセーっつって笑ってくれんなら
「かあちゃん、俺、ホームセンター行ってくる、愛里のカードも買ってくる」
「おしょうゆ入れもね」
「あ、うん、いってきます」
「いってらっしゃい」
ホームセンターに　行こう

しょうゆ入れ・・　一袋 100 個って　100 個はいらねえよ
これは・・　薄いピンクと薄い水色と薄い黄色のふたで 10 個で 123 円か
10 個もいるかな　そんでも一生使うとしたら 123 円の元は取れるよな　これだ
次は・・　カードだ
ん・・っと　花束とかケーキとかばっかだな　おもしろくはねえな
おもしろくなくていぃんだけどさ　かあちゃんの言葉に乗せられてんな
そんでもさ　いつもはもっといろいろあんだけどな
これは・・　あれじゃねえか？　愛里とおんなし土俵に立ってさ
愛里ならぜってえ選べねえような　つか選ばねえんだけど
それだな
前にヤッさんスギさんの奥さんたちにカード買った店だ　あそこだ

おおおお　いっぺえある　そんでメッチャ高けえ
そんでもさ、一年に一度のお祝いなんだからさ
ここは NEW って書いてっから余計に高けえんか
こっちのは・・　ちっと安いな　300 円ならさ
かあちゃんは・・　リベンジだ　プリンセスだよ　これってプリンセスだよな
とうちゃんには・・　あ！　握りメシがいっぺえ　これだ！　とうちゃんつったら握りメシだ
そんで愛里は・・愛里には・・　わかんねえ
あれ？　あっちの方にも　カードコーナー？　なんかすげえリアルな植物の・・絵か？
球根や根っこまで描いてんじゃん　こういうのいいな　なんつうの？　手書き感？
こっちはキノコだ　下の落ち葉みてえのまで描いてある
濃いピンクっつうの？　毒キノコかな　そんでも可愛いな
誕生日カードにキノコってどうなんだ？　他の花のよか俺はこれ好きだな
笑われてもいい　俺はこれを愛里に贈りてえ　可愛くね？　キノコだよ

タケノコのはねえかな　ねえか　カードにタケノコは・・　俺なら欲しいけどさ

よっしゃ　カード買った　俺史上いっちゃん高けえ　三枚で税込み 1,038 円か
たまにはさ　一枚 100 円じゃねえやつでさ　うん　あれ？　　ポップに・・
“市販のケーキで簡単ミニケーキ”
ああ、ここにある型抜きでコンビニやスーパーで売ってるスポンジくり抜くんか
そんでクリームやなんやでデコレーションすんのか　いろいろ考えんだな
ハートとか花とか？　　こっちはクマか？
ケーキ・・　愛里のケーキ　どうしたらいぃんだ？
ん・・・っと　今は考えらんねえ　カードで脳みそ使い切っちまった
スーパー行こう
ピコン　愛里
『今ちょっと休憩中です』
ピコン
『お弁当美味しかった！』
ピコン
『ひじきと大豆のごはん、酢飯でビックリしたけどお酢がまろやかで』
マジ？　　すし酢は俺の特製です
『すっごく美味しい』
ピコン
『うずらのスコッチエッグもすごく美味しかった』
よかったあ
ピコン
『先生にもおすそ分けしたら美味しいって感激してました』
ピコン
『コロッケもしっとりして美味しかった』
ピコン
『ブロッコリーとトマトのサラダもさっぱりしてて』
ピコン
『感動を伝えたくて』
ピコン
『また仕事に戻ります』
感動ってさあ　愛里　俺が感動してるよ
『感動伝えてくれてありがとう』送信
『メッチャ嬉しい』送信
『仕事がんばって』送信
『でもあんまがんばりすぎんなよ』送信
ピコン
『はい』
ピコン

『稼いできやす←あなたの真似 w』
クゥゥゥゥ　可愛い
おーーーっしゃ　晩メシの買い出し行こう

かんぴょうと愛里の計画

電車下りて改札に向かって歩いて
あれ？　ガチャ？　メッチャある
すげえな　今いろんなのあるんだな
小せえ頃好きだったな　つっても見てるだけだったけど
見てるだけでもワクワクしてさ　これが出たら最高だなとかさ
一回だけやったことあんだよ　小学生んとき
スーパーの入り口にあるやつ　北斗の拳のフィギュアだって見ててさ
とうちゃんが「ダイチ、欲しいんか」って
そんとき小遣い持ってきてなくて　だから
「こづかい持ってこなかったから」つったら
とうちゃんが　とうちゃんの金入ってる財布ん中の小銭数えて
「一回だけならできっからよ」って
「この前コロッケ買ってもらったからいいよ」つったら
「どんなん出てくっか、とうちゃんも見てえからよ」って
そっか、とうちゃんも見てえんかって
ほんとは俺にやらせてくれるためだったんだって今はわかるけど
ケンシロー出てくださいケンシロー出てくださいって手ぇ合わせて回したら
ユリアでさ、そしたら、とうちゃんが「ユリアじゃん！　すげえ！」つって
だから俺もすげえって気になって、だよなケンシローの婚約者ですげえ力あんだもんな
「とうちゃん、ユリア出た！」って
とうちゃんも「ダイチ、ユリア出たな」ってさ
今でも持ってる　あの箱ん中にカプセルごと入ってる
あれからはやってねえな　あのユリア以上のなんてねえもんな
愛里はガチャやったことあんのかな　どんなん引いたんかな
愛里なら・・　愛里なら？
・・ってガチャに思いを馳せてる場合じゃねえよ　スーパー行かねえと

スーパーん中
何にすっかな　サッパリ系かコッテリ系か
愛里がまだ生理三日目だからさ　そこも考えねえと
サーモンのホイル焼き　だな　あとは・・　納豆？
前に・・　誰だっけ？　ショーさんだ
奥さんが油揚げに納豆入れて焼いたの作ってくれて大根おろしで食うって

それやってみっか　油揚げ　ねえちゃんいなり寿司が好きだったよな　だったって生きてっけど
一個だと食いにくいから半分に切ってって言われて
そんだけじゃなんかなって上に刻んだ生姜の甘酢漬け乗せてさ
ねえちゃん気に入ってミニいなりって名前つけたな
月曜日の愛里の弁当にどっかな？　待て、明日は巻き寿司だろ？
今日の弁当も混ぜ寿司で明日も巻き寿司で月曜日もって、寿司が続くっつうのもな
つか、今日と明日、寿司続きっつうのはどうなんだ？
とうちゃんの仕事終わった祝いっつうことか？　祝い・・　祝い？　祝い！
そうだよ、愛里の誕生日の日の弁当は巻き寿司がいんじゃね？　巻き寿司とミニいなり
それだ　それだよ　祝いの弁当　巻き寿司といなり寿司ってメッチャ祝いじゃん
かんぴょう買わねえと　とうちゃんは干したかんぴょう煮るんだよ
院で習ったっつってさ　やっぱ市販のとは全然味違って美味えんだよな
今から作っとけば日持ちすっから使えんじゃん
あとは・・　や、巻き寿司の材料はまだいい　晩メシだよ
おから残ってっから、鶏ひきと混ぜてつくねは？　かあちゃんつくね好きじゃん
愛里の豆乳ヨーグルトも買わねえと
これか　市販のスポンジケーキっつうのは
これくり抜いて、こっちのホイップクリームでミニケーキになるんだな
いろいろ考える人がいるんだなあ・・って　愛里のケーキはどうする？
晩メシんときのとうちゃんのコンビニケーキでいぃんかな　いいかもしんねえけど
そんでもさ、愛里のためだけのケーキもさ　二段のとかはムリだけどさ
このスポンジ買って試してみっか　ホイップクリームと・・
あの写真にはなんかピンクとかいろんな色の飾りあったよな
製菓コーナーか
カラースプレーっつうのか　この小せえの買ってみるか　試作しねえと　俺の場合はさ
夜中だな　かあちゃんに見られるとさ
あとは・・　キッチン用漂白剤だ

かんぴょうはできた
水で洗って塩もみして何度も水洗いして柔らかくなるまで煮て絞って
調味料入れた中に入れて煮てひっくり返してまた煮て
全部とうちゃんのやり方だけどさ
これをタッパーに入れて冷蔵庫に入れとけば木曜日には使える
晩メシの準備もできた　あとはホイル焼きを焼けばいいだけだな
「ただいま」
「とうちゃん、おかえり」
「カズオ！　おかえり！」
リビングからかあちゃんの声
「美里！　ただいま！」

とうちゃんがキッチンに入ってきて
「もう晩メシできてんのか」
「あとはホイル焼き焼くだけ」
「ダイチが作ってくれたうずらのあれ」
「スコッチエッグ？」
「奥さんが可愛いっつってよ、美味そうっつうから一串あげたらよ、美味えって」
「そっか、よかった」
「俺の息子が作ってくれたっつったら、うちのユウくんも」
「ユウくん？」
「赤ちゃんの名前、ユウダイっつうんだよ」
「そうなんか」
「なんかよ、ユウっつうのはダンナさんのお母さんの名前から漢字もらったって」
なんだろな　どっかで聞いたことあんな
「ダンナさんのお母さん、すげえ優しくてよくしてくれたんだってよ」
どこでだったっけな
「もう死んじまって、ユウくんのこと見せらんなかったのが悲しいって」
だよな、孫だもんな
「そんでよ、ユウダイのダイはダイチとおんなし漢字でよ」
「大きいの大？」
「大根から大てつけたっつうんだよ」
「えっ？」
「俺の息子の名前も大根の大からだよっつったらビックリしててよ」
大根から名前つけるって・・　流行ってんのかな
「美里がよ、俺が読めて書けるようにって大根の大にしてくれてよ」
「俺、自分の名前すげえ気に入ってるよ」
「大一っつうのは、んっとにいい名前だな」
とうちゃんがニコニコして　俺はんっとに大一でよかったって思う
俺が生まれたときから　とうちゃんが読めて書ける名前でさ
「おじゃまします」
「愛里」
「遅くなってすみません」
「全然遅くねえよ」
「ちょっと寝ちゃって」
「バイト、疲れたんか」
「いえ、なんか気がついたら寝ちゃってて」
「具合は？」
「全然もう大丈夫です」
「そっか」
「あの、あとでちょっとお願いがあるんですけど」
「いいよ、なに？」

「あとで」
「そっか、うん、わかった」

晩メシ食い終わって
愛里とかあちゃんはリビングでしゃべってて
俺ととうちゃんは後片付けしてて
「あの」
「愛里？　どした？」
「ちょっと聞きたいことが・・」
「いいよ、なに？」
「えっと・・」
愛里が困った顔してっけど　どしたんかな
「ダイチ、あとは俺がやっから」
「とうちゃん、ありがとう」
愛里が　指で　俺の部屋？　うんうん？　そっか
二人で俺の部屋入って　愛里がドア閉めて
「あの・・」
メッチャ小せえ声で
「ライトブルーの」
「ん？　なにブルー？」
「え？」
愛里が俺の机の上見て
「あ！　これ！」
これ？　あ、かあちゃんが捨てろっつったとうちゃんのジーパン？
「これは・・　あなたのですか？」
「とうちゃんの・・だった」
「だった・・とは？」
「ケツんとこ擦り切れて穴開いてっから、かあちゃんが捨てろっつって」
「だったらもらってもいいですか？」
「いいけど、ケツんとこに穴開いてパンンツ見えんだよ」
「私は履かないです」
あ　だよな
「これって・・　解体してもいいですか？」
「解体・・　ああ！　バッグ作るんか」
「ちがうの、生地を買ったら意味がないかなって」
意味？　なんの意味？
「ベストはおとうさんので最低限でもあなたの」
え、俺のは・・　最低限？
「もらってもいいですか？」
「いいよ全然いいよ」

「よかった！」
愛里が使ってくれんなら　そのジーパンも本望だと思う
つか、俺のは最低限？　　んな汚ねえかな　とうちゃんのだってけっこうさ
「あと、私の部屋でやってもらいたいことがあります」
「え？　　あ、おう、行くか」
「はい」
愛里が背中にとうちゃんのジーパン隠して　二人で家を出た

愛里の部屋のリビング
「このペットボトルを」
「これって、昨日持って帰ってきたやつ？」
「はい、これを、ここからカットしてもらえますか？」
「おう」
キッチンの引き出しからカッター持ってきて
「あなたの方が私のキッチンのどこに何があるかわかってますね」
「俺が入れたから」
「そうでした」
「ここだよな」
「はい」
刃先グッと入れてから・・　クルッと
「ありがとう」
「またなんか花の作んの？」
「おとうさんとおかあさんの結婚記念日のお花を」
「結婚記念日の花？」
「プレゼントっていうより、ちょっとテーブルの上にあったらいいかなみたいな」
んなこと考えてくれてたんか
俺やねえちゃん、結婚記念日の祝いなんてあげたことねえな
「あなたやおねえさんは誕生日のカードを贈るって」
「あ、まあ、うん」
「森下家の誕生日の夕食はオムライスで」
そんでも、愛里の昼の弁当は祝いの巻き寿司といなりにすっからな
「誕生日は森下家の伝統があるので」
「伝統ってほどのもんじゃねえよ」
「でも、なんかそこに私が入り込むより、私は結婚記念日にさりげなくみたいな」
「とうちゃんとかあちゃん喜ぶよ」
「喜んでもらえなくてもいいかなくらいで」
「え？」
「気がつかないくらいさりげなくが目標で」
「気ぃつくにきまってんじゃん、愛里の花、すげえきれいなんだからさ」
「今日お花の先生に相談したんですけど」

バイトしながら、んなことまでしてくれてたんか
「私の感性で私の思うようにやった方がいいって言われちゃって」
「ぜってえそれがいいよ」
「何を根拠にそんなこと言うの？」
「かあちゃん愛里の感性好きだから」
「え・・」
「マジで」
「そう・・ですか、それじゃ、なんとか作ってみます」
「このペットボトルに入れんの？」
「はい、小さい方が負担にならないしさりげないかなって」
つうことは・・　昨日の昼休みにはもうそういうこと考えてたっつうことか
「明日は生地を買ってきます」
「生地？　なんか縫うの？」
「このペットボトルを包んでペットボトルが見えないようにしたいから」
「そんじゃ俺も行く」
「なんで？」
愛里と一緒にいてえから
「え、んと、荷物持ち」
「そんなにいっぱい買わないです、端切れ程度だから」
ん・・っと
「お、俺も参加させてくれよ」
「参加？」
「とうちゃんとかあちゃんの結婚記念日プロジェクト」
「そんな大げさなのじゃないってば」
「そんでもさ、俺、とうちゃんとかあちゃんの結婚記念日祝ったことねえからさ」
「そう・・ですよね、私からっていうより、あなたとっていう方がいいかも」
「俺は花活けらんねえけど」
「ペットボトルをカットしてくれたし」
「そういう雑用ならまかしてくれよ」
「雑用じゃないです、花器を作るっていう大切なことです」
愛里ぃぃ　メッチャ優しいぃぃ
「あなたの現場の仕事で、私もちょっとわかったっていうか」
「現場？」
「どんなに素晴らしい設計でも、現場の作業員さんたちがいないと形にならないでしょ」
愛里
「雑用とかどうでもいい仕事なんてこの世にないんじゃないかなって」
愛里　俺は　今　感動してます
「それじゃ、明日は生地を買いに行きましょう」
「花は買わねえの？」
「お花は当日の学校帰りに」

「愛里の誕生日じゃん」
「だから好きなことします」
好きなこと
「そっか」
「学校帰りにカフェに連れていかれてサプライズとか、もう二度とイヤ」
「俺はんなことできねえしさ」
「やったら絶交」
「やらねえって」
「はい」
花のことになると愛里は生き生きしてて
やっぱ花の方がよかったんかな　球根とか根っこついたやつ
ちっと・・　聞いてみっかな
「愛里、あの・・さ、キ・・ノコ」
「キノコ？」
「え、んっと、きのこの山とたけのこの里だったら、どっち好き？」
「えぇぇ、どっちもすごく好きでもすごく嫌いでもないけど」
「強いて言えば？」
「強いられても、そんなこと考えたことないから」
質問の仕方が悪かったな
「そんじゃさ、キノコ好き？」
「大好きです」
「マジ？」
「しいたけとかしめじとかマッシュルーム、私が好きだって知ってますよね」
食う方か
「あ、うん、知ってる」
「明日の夕食？」
「あ、や、まだ、なんも考えてねえけど」
あ、これはマジで聞かねえと　巻き寿司の具
「あのさ、カニカマと魚肉ソーセージ、どっち好き？」
「どっちも食べたことないけど」
「えっ　マジ？」
「本物の蟹なら、あとふつうのソーセージとかなら」
ふつうのソーセージを巻き寿司に入れんのはなあ
「でも、あなたが作るものなら絶対美味しいから」
え？
「どっちも、多分大丈夫です」
「そっか」
「はい」
「愛里」
抱きしめて

「ギュッてしていいっすか」
「聞く前にするってどうなの？」
「身体が勝手にさ」
「なにそれ」
少しだけ腕緩めて
「愛里」
や、今はヤベエな　ぜってえなるな　つか、もうすでになりかけて
「んっと、そんじゃ明日な」
「はい、それじゃ」
「愛里、またな」
ドア閉めて
俺のキノコ　メッチャ元気っす
これは愛里にはぜってえ見せらんねえよ
シャワーしよう

練習と下準備

シャワーして勉強して
もうかあちゃんたちは寝てっかな
そ〜っとドア開けて見ると、ベッドルームの灯りは消えてる　ヨッシャ
キッチンの手元灯りだけつけて
スポンジ出して　これは・・　コップで抜けばいんじゃね？
このコップなら 4 個はできんな　まず二個抜いた　次はどうすりゃいいんだ？
間にホイップクリームグルグルッて、そんで上にスポンジ乗っけて
まわりもホイップクリームで・・どうすりゃいぃんだ飾りみてえに絞れねえな
そんで？　　カラースプレー振りかけて
なんだ　これは？　　なんか・・なあ
「なにしてるの？」
「グワアアアアアッ」
「夜中に何やってるのよ、灯りもつけないで」
かあちゃんがキッチンの天井の照明つけた
「それは・・　なに？」
「な、なにって・・」
「白いウンチみたい」
「ウンチィィィイイ？」
「な〜んかゴテゴテして不味そう絶対食べたくない」
「かあちゃんに食わすわけじゃねえから」
「誰に食べさせるの？」
「え、や、な、なんとなく作ってみただけで」
かあちゃんが横眼で俺のことジーーッと
「な、なんだよ」
「ちょっと待ってなさい」
なに？　　俺はただ練習してただけでさ
かあちゃんがパソコン持ってきた
「ほら」
なに？　　ケーキの店？
「ここも、ここも」
「これ買えっつうこと？」
「センスのあるパテシエのプチガトーは」
プチガトー？

「どれも飾り付けはシンプルでしょ」
たしかに
「こんな白いウンチみたいなのはないでしょ」
「俺はパテシエになりてえわけじゃねえよ」
「プロのテクニックをいただけって言ってるの」
「いただく？」
「この白いウンチを」
「白いウンチって言うなよ」
「まずは側面を、ナイフとかそういうのでスッと、この写真みたいに」
包丁の方がいいんかな
「こんな・・　カンジ？」
「あら、なかなか上手いわよ」
「マジ？」
「上のその汚いのもスッと取って」
汚ねえって・・　こういうカンジ・・かな　ちょっと脇に　これをならして
「いいじゃない」
だな　さっきのよか全然いいな
「間には何を入れたの？」
「ホイップクリーム」
「だけ？」
「だけ」
かあちゃんがなんか考えてる　なんでかあちゃんが真剣になって考えてんだよ
「薄く切ったイチゴを並べたら？」
「イチゴ？　　間に？」
「クリームとイチゴ」
そっか　イチゴか　だよなイチゴだよ
「そして、上の真ん中にイチゴを一個置くのよ、ちょっとやってみなさい」
「え、今？」
「雰囲気を見るだけでもした方がいいでしょ」
「あ、わかった」
冷蔵庫からイチゴ出して
「この小さめのをここに・・　ほら！」
「おおおお、すげえ」
「で？　　いつ渡すの？」
「昼メシの弁当んとき　あっ」
「あってバレバレよ、お弁当のときに、何に入れて持っていくのよ？」
「んっと・・　いっつもイチゴ入れてる　このフルーツ入れ？」
「これは・・　この中に入れるとき、脇のクリームが、どうなのかしら」
「あ・・　指の跡ついちまうか」
かあちゃんがまた考えてる　なんか思いついた

「いっそ、脇にはクリームを塗らない」
「スポンジ見えちまうじゃん」
「このケースに入れて渡すなら、どっちみち脇のクリームなんか見えないわよ」
「あ、そっか、そんでもそれじゃ淋しいカンジになんねえかな」
「そっちのスポンジは？」
「残りだけど」
「型抜きして、二枚」
「おいっす」
「イチゴをスライスして」
「こんなカンジ？」
「そうね、それくらい薄い方がいいわ、スポンジの上にクリーム塗ってイチゴを均等に乗せて」
「こんくれえ？」
「そうそう、それをケースの中に入れて」
「ケースん中？　　こんなカンジ？」
「残りのスポンジに、ほら、パンにバター塗る要領でクリーム塗って」
「パンにバター？　　んなカンジ？」
「もうちょっとクリーム多くてもいいかも」
「こう？」
「そう、それをそっとケースの中の上に乗せる」
そ〜っと　端のクリーム触らねえように　乗った
「真ん中にホイップクリームをギュッて一絞り」
「ギュッと」
「ストップ」
「あ、はい」
「そのクリームの上にイチゴを乗せて」
ここに　イチゴ　おおおおお
「いいんじゃない？」
フタも閉まるな
「味見したら？」
夜中にケーキはちっとキツいな　そんでも食って不味かったら
チコッと切って
「あ、美味え」
「あら、そう？」
かあちゃんも少しだけ食って
「あら、最近の市販のスポンジってなかなかなのね」
「間のイチゴがメッチャいい」
「言ったでしょ」
「かあちゃんすげえよ」
「だてにあちこちのケーキブッフェに行ってるわけじゃないわよ」

「ケーキブッヘ？」
「若い部下たち連れてね、ホテルのアフタヌーンティーとかね」
「へえ」
「でももうダメ、最近はいちばん下のサンドイッチだけ食べてる」
ケーキ食いに行ってサンドイッチがあるって　よくわかんねえけど
「それじゃ私は寝るから」
「かあちゃんありがとう」
「見つけてよかったわ」
「マジ助かった」
「愛里さんに白いウンチ食べさせるところだったわよ」
「ハァァア？　　白いウンチじゃねえよ」
「ハハハ、おやすみ」
「かあちゃん、おやすみなさい」
マジ助かった
残りはタッパーに入れて　明日食おう

朝起きて　顔洗って
今日はとうちゃんの弁当最終日　なんか淋しいな
そんでもさ、またなんかんとき作ればいいじゃん
今日の弁当は　俺が幼稚園のとき好きだったやつ
焼きそばパンとコロッケパン　これもとうちゃんが作ってくれた
小せえロールパンに焼きそば挟んだやつとコロッケとキャベツの千切り挟んだやつ
昨日コロッケ作ったときに余分に作って冷凍してたからさ
とうちゃんの、いわゆる憧れの総菜パン
「食いたくてよ、そんでも高けえからな」
俺とねえちゃんに作ってくれて、俺もねえちゃんも大好きだったな
あとは卵焼きとタコさんウィンナーとプチトマトのサラダ
「ダイチ、おはよう」
「とうちゃん、おはよう、これ、今日のとうちゃんの弁当」
「焼きそばパンじゃん、コロッケパンも、すげえ」
とうちゃん、子どもみてえにさ
「愛里やかあちゃんの昼もこれにすっから、みんなおんなし昼メシだよ」
「そっか」
とうちゃんがすげえ大切なものみてえにゆっくりフタしめて
かあちゃんのハンカチに包んで箸箱挿して作業バッグに入れた
玄関でスニーカー履いて
「そんじゃ、ダイチ、いってきます」
「とうちゃん、いってらっしゃい」
ドアが閉まった
おーーっし　洗濯物干して　掃除して　愛里の部屋の掃除だ

愛里とかあちゃんが焼きそばパンとコロッケパン食ってる
「焼きそばパンを家で食べられるなんて思いませんでした」
「カズオがダイチやヒトミのお弁当に入れてたのよ」
「お弁当に？　いいなあ」
「ダイチに頼めばホイホイ作ってくれるわよ」
ホイホイってなんだよ　作るけどさ　愛里が食いてえっつうんなら全然作っちゃうけどさ

そんで今
俺は愛里と生地の店にいる
愛里は白ばっかのコーナーですげえ真剣に生地を見てる触ってまた見る
俺は愛里のすぐ後ろに立ってて　愛里がひとり言言ってんの聞いてて
「これだと・・　光沢があり過ぎだよね」とかさ　ぜってえ俺には言ってねえんだけどさ
「あの　ワッ！」
突然振り向いてすぐ後ろの俺にビックリして　可愛いなあ
「気配消してました？」
「消してねえよ」
「こんなすぐ後ろに、それはいいけど、この生地を・・」
「出せばいぃんか」
「お願いします」
上の方にある生地一巻きを引っ張って、近くの台の上に置いた
愛里がバッグからゆうべカットしたペットボトル出して
「これをこの生地で包みたいんです」
「あ、おう」
「こうやって包んで、首元？　そこで少し縛ってフワッて花が開いたようにしたくて」
ん・・っと？
「だとすると円にカットした方がいいんだけど、そしたらフワッとした部分が」
愛里が何を言いてえんか必死に頭ん中で想像してみてんだけど
「生地の裏になっちゃって」
ん・・っと　円にカットした生地で包んで絞ってフワッ
「あ、裏だな」
「包む部分もフワッと開いて見える部分も生地の表にしたいんですけど」
「つうことは・・　円を二枚作って生地の表が見えるように合わせて」
「ああ！　あ、でもカットした部分がほつれるっていうかきれいじゃないですよね」
「かがり縫いすりゃいんじゃね？」
「ジクザグみたいな？」
「ミシンですぐできっからさ」
「えぇぇ、なんか安っぽくてやだ」
やだ？　安っぽい？　そんじゃ・・　ん・・っと　あ！
「表側を合わせてダーッと途中まで縫って、裏っ返してアイロンで」

「アイロン？」
「うん、縫ってねえ部分もアイロンで中に」
「何を言ってるのかわかんない」
「わかんねえ？　そんじゃ俺がやっから」
「神ぃぃ」
「そこまでのことじゃねえよ」
「それじゃ・・　この生地、どれくらい買えばいいのかな」
「んっと、このペットボトルを包むんだよな？」
「はい」
「そんでフワッと」
「はい」
「50cm あれば余裕じゃね？」
「それじゃこれを 50cm と、あとは・・　チュール」
チュール？　ネコが食うやつ？
「これ」
透けてるやつか
「これを 20cm？　10cm じゃ足りないかな」
参加してえよ　そんでも何言ってんのかわかんなくてごめんな
「20cm にします、あとは・・　糸だけど、この生地を縫う糸ってなに？」
「これは絹ではねえから、フィラメントの白か」
「なんだかわからないから選んでくれますか？」
「いいよ」
「ハァァァ」
愛里が台に手ぇついてうなだれちまった
「愛里？」
「私・・　なにやってるんだろう」
「え？ ど、どした？」
「メインは花なのに、こんなところにこんな神経使って」
んっと　どうすればいぃんかな
「だからなんなの？　こんなことやって何の意味が」
「意味はある、愛里、かあちゃんにとっては意味がある」
正直ほぼ何をやろうとしてんのかわかんねえけど　それはぜってえそうで
「かあちゃんはすげえ細けえとこまで神経行き届いてんのが好きじゃん」
「え・・」
「愛里がこういうのに神経使ってるってことは、かあちゃんにはわかる」
俺にはまだ全然わかんねえにしてもだ
「そうですよね？」
「あ、おう」
「あぁぁ、なんか救われました」
「そっか、うん、よかった」

「それじゃ買ってきます」
「俺が買う」
「でもこれは私が勝手に」
「俺のことも参加させてくれるっつったじゃん」
「あなたは円を縫ってくれるから」
「それは手伝うってレベルで参加とは言えねえだろ」
愛里が俺のことジッと見てっけど
「形にしてくれんのは愛里なんだからさ、俺が買う」
「あなたって・・」
「俺は間違ったこと言ってねえよ」
「ただ単に、私が買いたいと思うものを買ってあげたいってだけでしょ」
ウッ・・
「そう言えばいいのに、なんかいろんな理屈こねくりまわして」
「こねくり・・」
愛里が俺のこと上目遣いでちょっとイジワルっぽい目で見て
「わかりました、お願いします」
「おう」
生地と糸買って　店を出た

円作りと電話

愛里の部屋のリビング
俺は　作った　完璧な円
愛里のこだわりを守るために端ミシンも究極に端にした
「わあ！　　すごい！　　きれい！」
よかった　ハァハァハァ　端ミシンしてるとき息止めてたよ
「次はリボンなんですけど」
リボン？　　買ったっけ？　　この布で作れればいぃんか？
「これで作りたくて」
とうちゃんのジーパン？
生地の店でも縫うときでもメッチャ美に神経集中させて　とうちゃんのジーパン？
「愛里、あの・・さ、とうちゃんのジーパン？」
「はい、ダメージジーンズを使いたくて」
かあちゃんいわく　ただのダメージで　かあちゃんにとっては捨てるゴミを　使う？
「このジーパンを縦にズーッと切ったらいいのかなって」
そんでも愛里がそうしてえっつうんだからさ
「何 mm 幅で長さどんくれえ？」
「えっと・・　1cm・・は太いかな、8mm?　長さは、この首元に巻いてリボンみたいに」
つことは表っ側はダメだヒザんとこすり減って穴開いてっから切れちまうな
「愛里、つことは 16mm プラス縫い代分カットして」
「縫い代分？」
「うん、裏を表にしてダーッと縫ってひっくり返せばいんだろ？」
「ひっくり返す？」
「ボソボソが出ねえように、そんで縫い目を真ん中にしてアイロンかければいんだよな」
「ボソボソが出ていいんです」
「へ？」
「切りっぱなしでいいの」
なんか全然わかんねえけど　愛里がそれがいいっつうなら
「わかった、8mm 幅だな」
「はい」
チャコペンで線引いて
「いちおう 1cm 幅のもカットしてくれますか？」
「おう」
8mm 幅と 1cm 幅の二本切って　愛里に渡した

「どっちかな」
愛里がペットボトルにあててみて
「やっぱり 8mm」
2mm にもこだわるってすげえな
「まだお花がないからイメージが伝わりにくいかもだけど」
俺はまだ０レベルでなんのイメージもわかってねえんだけどさ
「この円にした布で、こうやってペットボトルを包んで」
おおお　上の方　なんか花が開いてるみてえだな
「ここを輪ゴムで、えっと、どうしよう」
「愛里持っててよ、俺が輪ゴムかけっから」
「はい」
ペットボトルの下から愛里が手で押さえてるとこまで輪ゴムやって
「ここのヒダを均等にして・・　輪ゴムの上にこのジーンズのリボンをつけて」
やっと　見えた　やっとわかった　そんでも
「愛里、あの、聞いていっかな？」
「はい」
「せっかく白い布はきれいなのにさ、なんでとうちゃんのジーパンのリボンなんかなって」
「抜け感」
抜け・・感？
「ここにサテンの薄いブルーのリボンをしたらきれいだけど、いかにもだし」
いか・・にも　いかにもって・・　なんだ？
「おとうさんのおかあさんの写真、ビースラのウエディング写真で、
　お色直し的な、地下道で撮ったのでは、二人ともダメージジーンズのジャケット着てますよね」
「え？　ん・・・　なんか、そっかな」
「このペットボトルの部分は、おかあさんのウエディングドレスのイメージです」
「え？　んと・・　あ！　そういうことか」
「はい、写真だけだから本物の生地がどういうのかはわからないけど、
　だいたいこういう生地かなあって、本物はもっともっと上質な生地だけど」
すげえ　愛里　んなこと考えてこれ作ったんか
「ジーンズ生地のリボンは、買ってもいいけど、おとうさんのジーンズっていうところに、
　なんか、おかあさんには価値があるんじゃないかなって」
それでとうちゃんのがベストって　最低限で俺のっつうのは　だよな　俺じゃさ
「このドレス部分ていうか、ドレスを表したつもりの部分は、あなたが作りました」
「俺は愛里に言われるまんま縫ったり切ったりしただけでさ」
「アイデアは私でも、あなたの手で作ったっていうことに意味があるから」
「意味？」
「おとうさんとおかあさんの息子のあなたが、結婚記念日のお花のドレスを作るって、
　それってすごくステキで感動的っていうか、私なら」
「愛里」

抱きしめてて　俺　泣きそうになってて
こんなにさ　こんなに　とうちゃんとかあちゃんのこと考えてくれてるなんてさ
俺とねえちゃんにとっては　とうちゃんとかあちゃんが結婚してんのはあたりめえで
9月13日は　二人の誕生日で結婚記念日っつうだけみてえなカンジになってて
とうちゃんもかあちゃんも思い出話とか　そんなしねえし　そんでも
「愛里・・　ありがとう」
「私こそありがとうです、私だったらこんなにきれいな円は作れなかったから」
「じゃねえよ」
うまく言葉出なくて　そんで思いがメッチャ溢れて溢れすぎて
愛里の　柔らけえ　くちびる　もっと　愛里のこと　もっと　もっと
「ちょ！」
え？　突き飛ばされた
「ハァハァハァ」
「あ、愛里？」
「長い　ハァハァ　息が　ハァハァ」
「息？」
「息ができなかった！」
「なんで？」
「ハムハムのとき息止めてるからっ」
「え？」
「えって、あなたは息してるの？」
「や、意識したことねえけど」
「どうすればいいの？」
「どうすればって、俺もそれはあんま」
愛里が真剣な顔でなんか考えて
「あの」
「なに？」
「すごーく長いハムハムのときは」
「え、あ、うん？」
「息継ぎの時間をください」
「あ、おう、わかった」
わかってねえ　俺はまだよくわかってねえな　んっと
「愛里、もっかいやってみてさ」
「そういうカンジでハムハムしないで！」
「あ、うん」
な　ん　だ　この　沈黙
「愛里」「あの」
「なに？」「なんですか？」
愛里が俺の顔見て　手で　俺？　俺から？　うんうん？　そっか
「んっと、俺、晩メシと明日の弁当の買い出し行ってくる」

「はい、それがいいと思います」
それがいい？
「んっとさ、なんか食いてえもんある？」
「え・・っと　あ！　　キノコ」
「キ、キノコ？」
「あなたがゆうべキノコキノコって言うから頭から離れなくて」
「あ、そ、そっか、んと、そんじゃ、キノコスパゲティかキノコの炊き込みごはん、どっち？」
「えぇぇぇぇ、どっちも食べたいぃぃ、選べないぃぃ」
「そんじゃ、今日はキノコスパにすっか」
「あああああ、楽しみ過ぎるぅ」
メッチャ可愛いぃぃぃ
「それじゃキノコ狩りに行ってきてください」
キノコ狩りって　ハハハ
「そんじゃキノコ狩り行ってきやす」
「はい、クマに気をつけて」
「なんだよそれ　ハハハハ」
愛里とならこのまんまずっとしゃべっててえよ
「それじゃ、いってらっしゃい」
「愛里、いってきます」
ドア閉めて　よっしゃ　スーパー・・の前に家戻んねえと

「ただいま」
リビングから　かあちゃんがしゃべってる声がする　電話か
キッチン行って
明日の弁当は何にすっかな
とうちゃんもかあちゃんの弁当作るから　とうちゃん何作んのかな
冷蔵庫の中は　卵はあるし
「ダイチ！」
「あ？　　なに？」
リビングに走ってったら
「監督から電話」
「監督？」
「あんたがバイトしてた現場の監督」
「え？」
なんだ？　　監督から電話っつうことは
「監督」
「森下」
「人足んねえんすか？　　俺、平日は学校で土曜日っきゃ」
「なんで俺が電話すると人足探しだと思うんだよ」
「ちがうんすか？」

「森下、今から俺の家に来てくれないかな」
「監督ん家？」
「うちの奥さんが森下に会いたいっていうんだよ」
奥さんが？　なんでだ？
「急で悪いんだけどさ」
「それはいいんすけど、今とうちゃんが仕事に行ってるんすよ」
「カズオさんは」
「家政夫の仕事してるんすよ」
「あれ、森下も知らなかった？」
「や、とうちゃんが家政夫してんのは知ってて」
「そういうことじゃないんだけどな」
「俺、晩メシ作んねえとなんねえんすよ」
「ダイチ、私と愛里さんは外で食べてくるから」
「え？　マジ？　あ、なんか、行けることになりました」
「それじゃ頼むよ」
「おいっす」
「住所は森下のお母さんが知ってるから」
かあちゃんが？
「待ってるよ」
「おいっす」
なんで監督の奥さんが俺に会いてえんだ？
なんかわかんねえけど
「かあちゃん、監督ん家に」
「これを着ていきなさい」
かあちゃんが高けえ方の白Ｔと高けえ方のジーパン差し出した
「んなさあ、監督は俺が汚ったねえ恰好してんの見てっからさ」
「奥様！　清潔感！」
「今着てんのだって、ちゃんと洗ったやつだよ」
「イメージ！　そのニューヨークの地下鉄マップのＴシャツ着てる男子って」
「これは愛里が買ってくれたやつだよ」
「愛里さんは作業用に買ったって言ってたわよ」
「そ・・だけどさ」
「スニーカーはこれ」
なんかなんつうか　いっつもさ
「わかったよ」
俺はセンスねえから　なんも言えねえんだよっ

初めての風呂

俺ん家がある駅から５つ目の駅　おんなし沿線だったんか
ここ真っ直ぐ行って・・　このマンションか
305だよな　３　０　５
「はい」
監督の声
「森下っす」
「入って」
ドアが開いて　エレベーターで三階
この部屋か
ドアホン鳴らして　ドア開いた
「森下、急で悪かったな」
「監督久しぶりっすね」
「まだ一週間しか経ってないよ」
私服の監督って初めて見るな
「葵！　森下が来てくれたよ！」
奥さん、あおいさんっつうのか
「はい！」
奥から声がして　女の人が小走りに　え？　後ろ下がった　どした？
「ダブル」
ダブル？　なんだ？　んっと
「はじめまして、森下大一です」
「声までそっくり！」
監督と？　そんな似てねえと思うけど
「あ、ごめんなさい、菱谷の妻の葵です」
ひしたに？　なんか聞いたことあんな　つか　監督の名字ひしたにっつうんか
監督の名札には菱谷しか書いてなかったから　菱谷建設の・・　あれ？　おんなし名字？
あ、俺の後ろ　ドアが開いた
「ダイチ！」
「え？　えっ　えーーーっ　とうちゃん？ とうちゃん？ なんで？ とうちゃん？」
「それがよ、俺もビックリしてよ」
「え、なに？　なにがどう、え？」
「とにかく二人とも中に入ってくれ」
「え、あの、はい」

なんでとうちゃん？

リビングに通されて
とうちゃんは晩メシの下準備するっつってキッチンに行っちまって
俺は　何がなんだか
「俺もさ、今朝ドアを開けたらカズオさんが立ってて一瞬ハテナだったんだよ」
「あの、とうちゃんはここで働いてたんすか」
「そうなんだよ、今朝まで俺も知らなかった」
「そう・・すか」
「家政婦さんのことは葵に、うちの奥さんに任せてたから俺も詳しくは知らなくてさ、
　男性だっていうのは聞いたんだけど、勝手なイメージでおばさんみたいなおじさんかなって」
愛里が言ってたとおりだ
「伝説の家政婦だって葵が言ってたんだけど、どんななんだよと思ってたらさ、
　初日から確かに伝説の家政夫だなって、家中完璧に掃除されてて食事は美味くてさ」
「そう・・すか」
「感心したのは俺の書斎、棚の埃も床もきれいになってるのに机にだけは手をつけない」
あ　それか
「そういうところをわかってくれるっていうのは只者じゃないなって」
「なんか、ねえちゃんの机の上みてえな気ぃして触らなかったっつってました」
「そこがすごいよな、なによりありがたいのは優大の世話と葵のことだよ、
　寝不足でちょっと産後鬱になりかけててさ」
「えっ・・」
「それがカズオさんが来てから顔色がどんどんよくなって笑うようになってさ」
「よかったっすね、マジよかったっす」
「俺もなんで気がつかなかったかな、弁当にさ、おにぎりが入ってて、
　どこかで食べたことがあるなあって、おにぎりのときは毎回そう思ってたんだよ」
そっか　監督とうちゃんの握りメシずっと食ってたもんな
「そりゃそうだよな、カズオさんのおにぎりだったんだもんな」
「とうちゃんの握りメシは美味えんすよ」
「知ってるよ、知ってたはずなんだけどなあ、まさかさ」
「とうちゃんも監督んとこだって知らなかったみてえっす」
「うん、カズオさんも驚いてたよ」
「薫さん」
奥さんがリビングの入り口から顔出した
かおるさんて　監督のこと？
「カズさんが、そろそろ優大をお風呂に入れたいって」
「そうか、お風呂」
「しっかり憶えてね」
「頑張ります」

「監督が風呂に入れるんすか？」
「今日はそのつもりで待ってたからさ、カズオさんに教わるとはな」
「大丈夫っすよ」
「正直ドキドキしてるよ」
そう言いながら監督がリビングから出ていった
奥さんが俺の前にコーヒー出してくれて
「あなたが大一さん」
「はい、森下大一です」
「さっきはごめんなさいね、カズさんにそっくりでビックリしちゃって」
「よく言われます」
「一度お会いしたいと思ってたの」
「俺にっすか？」
「カズさんの息子さんが、主人の言っていた大一さんだってわかって、
　これはぜひお会いしたいって無理をお願いして、ごめんなさいね」
「全然いいっすよ、久しぶりに監督にも会えたんで嬉しいっす」
「薫さん、あ、主人がね」
フワッと穏やかなカンジの奥さんだな
「優大の名前を決めるとき、どうしても大の字を使いたいって言うのね、
　なぜ大なの？ って聞いたら、大根の大って言われたときにはビックリしちゃって」
「そこからじゃビックリっすよね」
「そうなのよ、薫さん私が驚く顔を見て笑ってるの」
監督そういうとこあるよな
「でもね、その大根の大の字に、お母様とお父様の愛情がいっぱい込められていて、
　私、涙が出ちゃって、なんて温かい名前だろうって」
「俺は、すげえ気に入ってます」
「私も優大ってつけて本当によかったと思ってるの」
「優大っていい名前っすよ、あ、マジで」
「あなたのこともね、主人はすごく気に入ってるの」
「俺をっすか？　　いっつもからかわれてばっかっすよ」
「あの人、気に入った人のことはからかうのよ、子どもみたい、フフフ」
「監督はすげえ監督っすよ、俺、初日に現場行って、なんつうか、すげえって」
「高校生のくせに」
「あ、すいません」
「ちがうのちがうの、主人がね、高校生のくせに初日で俺の思考を把握しやがってって」
「監督の思考？」
「あの人、人のことをけなすことはけしてしないけど、手放しで褒めちぎることもないの、
　それが、あなたのことは・・　あ、あんまり言うと叱られちゃうわ　フフ」
この奥さんが産後鬱になりかけてたなんて　信じらんねえくれえ　今は穏やかな顔してて
「カズさんね、優大のこと泣かせないの、泣かせないっていうより、

　オシッコやウンチをするなっていうタイミングがわかるみたいでね」
「ねえちゃん生んだとき、かあちゃん大量出血起こして」
「まあ・・　そうだったの」
「そんで、退院してからは、かあちゃん寝かせてえって、とうちゃんほとんど寝ねえで、
　ねえちゃんの世話して、そうやってるうちになんかわかるようになってみてえで」
「おかげで私、カズさんが仕事をしている間ずっと眠っちゃってたことがあるの」
「よかったっす」
「ありがたかったわ」
奥さんが優しい顔で微笑んで
「カズさんね、オムツを換えるとき、シッコ出たなよかったなサッパリしたなとかね、
　ウンコいっぱい出たなあ、えらいな、こんにウンコしてえらいぞって・・
　オシッコやウンチをするだけで、こんなに褒めてもらって・・
　優大はしあわせだなって・・　私・・　感動しちゃって」
奥さんが目のところを指でぬぐって
「そうよね、ちゃんとオシッコやウンチが出るって、それは健康な証拠で、
　そういうことを忘れちゃいけないわね」
とうちゃんが赤ちゃんの世話すんのは見たことなくて
今こうやって奥さんから話を聞いて　俺もそういうふうに育てられたんだなって
「それじゃ、私は夕食のしたくをするから、ゆっくりしていってね」
「えっ？　　奥さんがメシ作るんすか？」
「私、料理はできるのよ、カズさんほど手際はよくないけど」
「俺がやりますよ」
「え？」
「奥さん寝ててください」
「大丈夫よ、それにそろそろ私も動かないと」
「そんじゃ手伝います」
「そういうつもりでお呼びしたんじゃないのよ」
「手伝わせてくださいっ」
「え・・　そう、それじゃ、お願いしようかしら」
「おいっす」
奥さんと二人でキッチン行って
「今夜はね、ハンバーグ、主人が大好きなの、子どもみたいでしょ」
「俺ん家でもハンバーグはよく作るんすよ」
この肉は・・　牛ひき肉オンリーだ　つうことは　ナツメグと胡椒多めだな
「カズさんが玉ねぎを炒めてくれてるから、私は混ぜればいいだけなのよ」
「俺がこねるんで」
「大丈夫よ、これくらい」
「そんじゃ、奥さんは形作ってください」
「フ・・　フフフ」
「なんすか？」

「大一さんの未来のお嫁さんはしあわせね」
「マジっすかあ」
「高校生のくせに」
「え・・」
「あ、主人が言ったのよ、命賭けで守ろうとしてるんだよって」
「監督、んなこと言ってたんすか？」
「あの人、あなたのこととなるとよくしゃべるの」
「なんつうか、監督にはいろいろ知られちまってるっつうか」
「知れば知るほど好きになってるみたいよ」
え？
「まあ、もう練れてるわ、やっぱり男の子は力があるから」
「あとは何作るんすか？」
「ポテトサラダをね、じゃがいももカズさんがもう茹でてくれてるから」
「そんじゃ、俺、ポテサラ作りますよ」
奥さんが俺の顔見上げてっけど？
「あの、なんすか？」
「本当に大一さんがお弁当作ってるのね」
「本当に？」
「カズさんね、いつもここでお弁当を食べるの」
「あ、はい」
「ダイニングテーブルでどうぞって言っても、
　俺はここで食べる方が落ち着くからって言うのよ」
「家政夫は雇用主とは一緒にはメシ食わねえことになってるんすよ」
「そう書いてあったけどね、キッチンの隅っこでって」
「俺ととうちゃんは二人んときキッチンで食ってっから」
「そうなの？」
「洗うの楽だし気楽でつい」
「カズさんね、お弁当を食べるとき、いつも泣いてるの」
「え？」
「号泣とかではないのよ、お弁当箱のフタを撫でて、お弁当開けて、
　指で涙拭いててね、最初はどうしたのかなって思ったんだけど」
弁当食ってるとき・・　泣いてる？
「お水を飲みに来たときに、そんなふうだったから、なんだか触れちゃいけない気がして、
　可愛いお弁当箱ねって言ったら、息子が買ってくれたって嬉しそうにね」
俺は・・　なんか胸んとこが
「中を見たら、とっても可愛いお弁当で、可愛いお弁当ねって言ったら、
　息子が作ってくれたって鼻をすすりながら言うの、なんだか私もウルッとしちゃって」
とうちゃん・・　俺が作った弁当　そんなに　そんなふうに
「お父様のためにあんな手の込んだお弁当を作ってくれるなんて優しい息子さんだなって」

俺は・・　声出なくて　つか出したらやべえカンジで
　　「あっ　あっ　あぁぁぁぁ　カ、カズオさん！」
ど、どした？　　バスルームから
奥さんと顔見合わせて　バスルームに走った
「監督、どしたんすか？」
監督　こんな顔今まで見たことねえ　すんげえ情けねえ顔でこっち見た
「ウンチしちゃったよ」
ウンチ？
「風呂入れる前にウンコもシッコもしたんだけどよ」
とうちゃんがシンクのお湯抜いて　優大くんにそっとお湯かけながら
「とうちゃんに入れてもらって、気持ちよくなっちまったんだな」
ニッコニコしながら話しかけてて
「ユウくんはとうちゃんが大好きなんだな」
「俺、ウンチされたけど？」
「安心したんだなあ、ユウくん」
「カズオさん、よく落ち着いていられるね」
「ダイチも風呂でウンコしたことあんだよ」
「え、俺？」
「ハァァァってサッパリした顔してよ」
とうちゃんの顔見てっと
「ユウくんもサッパリしたか、そっか」
俺が赤ちゃんときも　こんな顔して世話してくれてたんかって
「カズさんがいてくれてよかったわ、私もパニックになってたと思う」
「ダイチが風呂でウンコしたときはよ」
とうちゃんが嬉しそうな顔で　優大くんにお湯かけながら
「そっか、ダイチは風呂でウンコしてみたかったんか」
俺は　今　とうちゃんに話しかけられるみてえな気持ちになって
「いいなあ、とうちゃんはもう風呂でウンコはできねえかんなあってよ」
俺は・・　とうちゃんに　そうやって話しかけてもらって風呂入ってたんか
「カズさんたら、フフフ」
「カズオさんは肝がすわってるな」
「あ？」
「次はどうすればいい？」
「裏っ返して背中とケツんとこをよ」
「うら、裏返す？」
「薫さん、それじゃがんばってね」
「葵、行っちゃうの？」
「お風呂上りのミルクを作らないと」
「そうか、うん」
そんじゃ、俺も

「監督、がんばってください」
「カズオさん、裏返すってさ」
夢中だ

キッチン戻ったら　奥さんがミルク作ってて
「ミルクのこともね、カズさんに助けられたのよ」
哺乳瓶の乳首の穴か
「私の母は母乳だったからミルクのことはわからなくて」
奥さんが哺乳瓶を頬にあてて
「薫さんが、もしカズさんが了承してくれるなら９月いっぱいお願いしようかって」
「え？　　マジっすか」
「でもね、それじゃ私、ずっとカズさんに頼りっぱなしになっちゃうなって」
「頼っちゃいけねえんすか？」
「私が優大のお母さんにならないとね」
「え？　　お母さんっすよ」
「さっきもそうだったけど、優大の世話をしてくれるカズさんを見てるとね」
奥さんが椅子に腰かけて
「カズさんはこうやって大一さんのお父さんになっていったのねって」
「俺のお父さんに、なっていった？」
「いっぱい話しかけて、いっぱい抱っこして、可愛くて可愛くてしょうがない思い？
　それがいっぱい溢れ出て、そういうのが伝わって今の大一さんになったんだなって」
「俺は、自分の赤ちゃんの頃はわかんねえっすけど」
「さっき見たでしょ、あなたをお風呂に入れたときの話をしてたじゃない」
「はい、ウンコした話」
「お風呂でウンチして、あんなふうに話しかけられたら、私が赤ちゃんならしあわせよ」
「とうちゃんは、俺が小せえ頃もあんなんで、ずっとあんなんで」
「そうね、わかるわ、大一さんを見てると、そういうふうに育ったんだろうなって」
「俺、とうちゃん目指してるんすよ、とうちゃんみてえな男になりてえって」
奥さんが俺を見上げて
「薫さんがね、あなたにはあなたにしかできないことがある気がするって言うの」
「それは・・　前にもなんか言われて」
「合わせ貝って知ってる？」
「はい、平安時代の、中に絵ぇ描いてある貝っすよね」
「私の実家にあるんだけどね」
「え？　実家に、合わせ貝が・・ある？」
「そうなの、代々伝わってるものでね」
実家に・・　代々伝わってる？
「あれって、ぴったり合う貝はまったく同じではないのね、微妙に違うからピタッと」
「あの、実家に伝わってるって、平安時代のがっすか？」
「うちのは江戸時代のものだって言ってたわ」

江戸時代の！　　す・・げえ
「微妙に違うところがあるからピタッと」
「終わったよ」
監督　なんかハァハァして優大くんを抱いてっけど
「カズさんは？」
「風呂掃除してるよ」
「それじゃ、優大にミルクあげてくるわね」
奥さんが監督から優大くんを受け取って　キッチン出てった
監督が冷蔵庫開けて　水ゴックゴク飲んでる
んっと　俺は何すりゃいぃんかな
「森下」
「おいっす」
「せっかくだから、俺の書斎見るか？」
「見てえっす」
監督と一緒に　奥の書斎に向かった

書斎とジオラマ

すげえ　書斎なんて初めて見んな
「俺は基本、自分の本棚を見られるのがイヤなんだよ」
「なんでですか？」
「俺の頭の中を見られるみたいでさ」
「ハハハ、なんすかそれ」
「でも、森下は、そういうの超えちゃってるからさ」
「超えちゃってる？」
あ！　これだ　ジオラマ
「このジオラマ、全部監督が作ったんすか？」
「そうだよ」
「設計もやるんすか？」
「そのつもりだったんだけどね」
「あきらめちまったんすか」
「言い方きついよ」
「だって現場監督やってっから」
「落ちぶれたって言いたいの？」
「ちげえっすよ、俺言いましたよね、監督が現場監督でよかったって」
「それは、やっぱり褒めてたってこと？」
「そうっすよ、監督みてえな現場監督いねえっすよ、他の現場見たことねえけど」
「なんだよそれ　ハハハ」
「とうちゃんも言ってたじゃねえっすか、ここは、なんかパラダイスだって」
「葵とずいぶん話してたよな」
「話題変えましたよね今」
「変えたよ、葵は森下から見て、どう？」
「どう？　どうってどういうどうっすか？」
「どんな印象かなってさ」
「すげえ聡明な人だと思います」
「聡明、そこきたか、ふつうそこにいかないけどな」
「ふつうっつうのは？」
「穏やかでのんびりとした印象」
「最初はそうっすけど、監督はそんなんじゃ満足しねえっつうか」
「生意気だなあ」
「まあ俺もそうっすけど」

「森下はカノジョのどんなところが好きなの？」
「全部っすよ」
「俺は会ったことないから言語化してもらわないとさ」
言語化か・・　んっと
「なんつうか、放つ空気が透き通ってて、すげえ繊細ですげえ感性なのに、へンなとこ鈍感で」
愛里のことは　言葉では表しきれねえよ
「すげえ頭いいのにヌケてて、ハハハって大きな口開けて笑って、そんで」
「わかった、わかったよ」
「や、まだまだあって」
「聞いた俺が悪かったよ」
「監督も奥さんに一目惚れっすか？」
「まあ・・　そう言えなくもないけど、状況的にはちょっと違うかな」
「状況的？」
「俺と葵は見合い結婚」
「ウッソ」
「本当だよ、俺が 27 で葵が 20 歳」
「20 歳？」
「もうすぐ短大を卒業するときに見合いさせられたかわいそうなお嬢様だよ」
「お嬢様？」
「旧家のお嬢様でさ」
だから貝合わせの貝持ってんのか
「こっちは土建屋の次男坊だからさ、向こうから見たら絵に描いたような成金の土建屋、
　間に入った人が俺の家も向こうの家も断れないような人でさ、
　俺もまだまだ結婚する気なんかなかったから、どうやって断ろうか考えながら行ってさ」
「そんでも一目惚れしたんすよね」
「まあ、そうだけど、チラッと俺を見ただけであとはずっと下向いててさ、
　ああこれはもうダメだなって、二人きりにさせられたときは拷問だったよ、あの沈黙」
「なんでなんか言わねえんすか？」
「こっちは一目惚れしてガッチガチになってたんだよ」
「ああ、そうなんすか」
「なんか森下って頭にくるなあ」
「え、なんでですか？」
「調子狂うっていうかさ」
「そんでガッチガチになってたのに、なんで結婚できたんすか？」
「それがさ、二人きりになって沈黙が続いて、彼女が俺に、俺の名字菱谷だからさ」
ひしたに・・　やっぱそっか
「菱谷さんて言おうとしたんだろうな」
つうことは・・？

「ヒヒハニさんって言ったんだよ」
「ヒヒハニ？」
「言った後、下向いててで口押さえて必死に笑いをこらえてるんだよ、
　だからつい、すみません、もう一度僕の名字を言ってもらえますかって言ったらさ、
　畳に突っ伏してずーーっと笑ってるんだよ、この人しかいないなって思ってさ」
監督のツボが　よくわかんねえ　おもしれえけど
「ダメ元で結婚を前提にって電話したら、よろしくお願いしますってさ、ビックリだよ」
「奥さんも監督のこと好きになったっつうことっすよね」
「どこがいいんだか、結婚して 10 年経つけど今もわからないよ」
「全部なんじゃねえんすか？」
「全部って都合のいい言葉だよな」
「そんじゃ監督は奥さんのどこが好きなんすか？」
「それは・・」
「言えねえじゃねえすか」
「言えるよ、さっき言ったヘンなところでツボにはまるところとかさ、
　あと、これは誰もわからないと思ったんだけどなあ、森下がさ」
「聡明っすよね」
「そういうところがムカつくんだよなあ」
「なんで？」
「タメ口？」
「あ、すいません」
「俺はいちおう取締役なんだけどさ」
取締役？
「取締役報酬も出てるんだけど、葵は現場監督の給料しか使わないんだよ、
　あなたは現場監督なんだからってさ、そうじゃなきゃ、なんちゃって現場監督よって」
やっぱ奥さん思慮深けえっつうか　聡明なんだな
「おかげて俺も毎月小遣いもらってやりくりだよ、社長のボンボンなのにさ」
「監督は、どこの取締役なんすか？」
「うちの会社」
「うちの会社っつうのは？」
「俺、菱谷だよ?」
「そうっすね」
「菱谷建設」
「えっ、やっぱなんかつながりあったんすか」
「今は父が社長で兄貴が専務、そのうち兄貴が社長になるだろうな」
「監督は取締役なのに、なんで現場監督やってんすか？」
「話せば長いし長いわりにはつまらないからいいよ」
「聞きてえっす」
監督が俺の顔見て　フッて鼻で笑った
「俺は小さい頃から設計に興味があって、設計するためには現場も知っておこうと思っ

てさ、
　高校生のときに父の会社の下請けの現場でバイトしたんだよ、
　俺は生意気な高校生でさ、現場監督に、あそこの動線は効率が悪いとか言ってさ、
　やだねえ、トップ進学校のボンボンはってよく言われたよ」
え？　あれ？
「監督、それ、俺に言ってましたよね？」
「うん、俺も言ってみたかったから」
「なんすかそれ」
「ハハハ、高校生のしろうとの俺の言葉を聞いてくれる監督もたまにいたけど、
　ほとんど相手にもしてくれなくてさ、現場の声を聞けないのはどうですかね、
　なんて生意気な高校生だよ、しかもただのバイトのくせにさ」
監督が俺の顔見てニヤッと笑った　ん？　なに？
「あらゆる工程を期日までに間に合わせる・・のはわかる、必須条件だよ、
　そのためには、作業員たちが仕事しやすい効率的な現場にする必要があるんじゃないか？
　何かを決めるのにいちいち上に上にじゃ時間のロスでしかないよね・・ってなことを、
　兄貴に愚痴ったらさ、おまえは設計より経営に向いてるって言われてさ」
「そんで設計はあきらめたんすか？」
「設計は俺じゃなくてもいいんだよ、俺なんかよりずっと才能持った人たちがいる」
監督は棚の上のジオラマのひとつを手にとって
「俺には、少なくともうちの会社の中で、俺にしかできないことがあるんじゃないかって」
監督にしかできねえこと
「俺の設計した家が並ぶ街を作るなんて夢より、うちの会社で働いてくれている人たちが、
　できるだけ効率よく安全安心に働ける環境を作ることはできるんじゃないかってさ」
「あっ！」
監督！　ジオラマを
「あーーーーっ！　監督！」
床に叩き落としたあっ
「なにやってるんすか？　壊れちまいましたよ」
「いいんだよ、駄作だ」
ぜってえ後で後悔して拾って繋げるよ
ほら　しゃがんで欠片集めてんじゃん　手伝おう
「でもさ、俺一人じゃできないことがたくさんあるんだよ」
「こんなんして欠片集めてんなら壊さなきゃいいじゃねえっすか」
「ほら」
「ほら？」
「森下はランダムに拾ってないよな」
「ハ？」
「パッと見て、これはここに繋がる欠片だって無意識で集めてる」

「え、そうすか？」
「シゲさんがぎっくりになったときもさ」
「スギさんの腰、どうなんすか？」
「もう元気だよ」
よかったあ
「迅速に病院に搬送して適切な処置を受けたおかげだな」
「よかったっす」
「今、腹にホッカイロして空調服着て作業してるよ」
とうとう着たんか　空調服
「シゲさんがトイレに行くときはまわりがバッテリーバッテリーってさ」
「ハハハ」
「あのときも、森下は、たまたまその前にショーさんに見せてもらった免許証、
　その有効期限が次の日までだってことも頭にインプットしていて」
「それはマジでたまたまで」
「たいていは、たまたまはたまたまのままで終わってしまうんだよ、
　森下はそのたまたまを瞬時で繋げて問題解決の重要なツールにするんだよな」
「この欠片は瞬時じゃ繋がんねえっすよ」
「ほら」
「何がほらっすか？」
「集めた欠片をなんとなくの形にして置いてるだろ」
「あ、無意識に」
「無意識！　やだねえ、トップ進学校のボンボンは」
「それ、今、関係ねえっすよね」
「あるよ」
「どこがっすか、あ、監督踏んでますよ」
監督が足元の欠片　指でつかんで
「たとえば、このジオラマが、一人の人間の人生だとする」
「アーーーーッ　監督！」
ゲンコでバッシバシ
「監督、こんなん、もう元に戻せねえっすよ」
「その人の人生、今まで培ってきたものが修復不可能なくらいバラバラになったら」
え？
「俺にできることなんてないんだよ」
これが・・　このバラバラになったのが・・　一人の人間の・・
「森下ならどうする？」
「俺？　俺は・・」
俺ができんのは・・　せいぜい・・
「掃除して」
「これを元に戻そうとはしないの？」
「修復不可能って言いましたよね」

「そうだよ」
「できねえもんに時間使ってるよか、もう一回作ろうって言うかな」
「同じものを？」
「前とおんなしのはできなくても、もっと、前のよかもっとその人に合うもの、
　こんな白いペラッペラなんじゃなくて」
「ペラッペラってさ」
「どっかに落ちてる石とか木切れとか、そういうのの方が本物で・・」
「本物・・か」
「このジオラマ作れる技術があんなら、作ったことあんなら、きっと今度はもっと」
「そうなんだよ」
「え？」
「形のあるものは壊れても、その人が持っている技術や知識や経験は誰も壊せない」
「あ・・」
「これさ、俺の卒業作品で、最優秀賞取ったやつ」
「エーーーーーッ　こ、こんなにしちまって」
「過去にしがみついてたら前には進めないよ」
「だから壊したんすか？　　やること極端っすよ」
「ショーさんも」
ショーさん？
「工場も家も金も何もかも失くしたけど、ショーさんが長年培ってきた技術や経験は、
　今も失ってないんだよ、運転もできるしな」
「そうっすよね」
「寮では若い連中の世話をよくやってくれててさ、工場で若い作業員を育ててきた経験だな」
「そう・・っすよね」
「森下はすぐ泣くよな」
「や、なんか・・　よかったなって」
「うちの会社にとっても大切な人材だよ」
「よかっ・・たっす」
「森下が発掘してきたおかげだよ」
「俺は発掘なんてしてねえっすよ、何してんのかなって声かけただけで」
「森下が声をかけなかったら、ショーさんは今も浮浪者のままだったよ」
「それはたまたまで、監督がショーさんを雇ってくれたからっすよ」
「俺はゴミ箱漁ってる浮浪者を即決で雇おうなんて思わないよ」
「けっこう即決で雇ってくれましたよね」
「森下がショッパナでショーさんの事情を聞き出してたからね」
「俺はただ話してただけで」
「森下と話してると、なぜかみんな素になるよね」
「素？」
「なんていうのかな、あれだ、強面の人が犬には目尻下げてデロデロになるみたいなさ」

「い・・ぬ」
やっぱ俺って　犬みてえなんかな
「ショーさんも浮浪者の顔から緒方正のままになってたから人となりがわかったよな」
「俺はショーさんを浮浪者とか、そんなカンジで見てなかったっす」
「そこなんだよ」
「どこっすか？」
「森下は、足場から落ちた鳶を救う、そんな天性の感覚があるよな」
足場から落ちた鳶を救う？
「救急隊員っすか？」
「どうしてそっちなんだよ」
「そんじゃ、なんすか？」
「それは森下が考えることだろ」
「んな、ここまで言っといて、ちっとはヒントくれてもいいじゃねえっすか」
「ヒントもなにも、俺は漠然とそう思っただけで、それ以上はわからないよ」
「んなあ」
「なんで俺は卒業制作の作品壊しちゃったのかもわからないけど」
「勢いであんなことすっからですよ」
「どっちにしても、この部屋は優大の部屋にするつもりだから」
「マジっすか」
「優大の部屋は必要になるだろうし、俺がここに籠ってたらさ」
「そうっすよね」
「俺も優大のお父さんにならないと」
え？
「葵にさ、もしカズオさんが了承してくれたら、9 月いっぱい来てもらったらって提案したら、
　それじゃカズオさんに頼りっぱなしになって」
さっき奥さんが言ってたことだ
「私もあなたも優大のお父さんとお母さんになれないってさ」
「お父さんがそばにいてくれるって、すげえ嬉しいし心強いっすよ」
「俺は仕事上なかなかずっと一緒にはいられないけどさ」
「そんでも、この部屋に籠ってるよか、顔見せて欲しいっす」
「そうだな」
「俺は息子の立場っきゃわかんねえけど、とうちゃんの存在ってすげえすげえ大切で」
「森下は特にそうだよね」
「さっき奥さんに、俺はとうちゃん目指してるっつったら、合わせ貝の話をして、
　合わせ貝っつうのは、微妙に違うからピタッとっつって」
「そこなんだよ、葵の聡明なところはさ」
「ノロケっすか？」
「ちがうよ、まあ、多少はあるけどさ、カズオさんと森下は同じようで微妙に違う」
「そうなんすか？」

「その違うところが絶妙な加減で違うから最強のコンビなんだろうな」
「コンビって父子っすけど」
「父子を超えてるんだよ、なんだかさ」
父子を超えてる？
コンコン　って　ドアをノックする音
「薫さん、そろそろお時間よ」
「わかった、今行くよ」
監督と一緒に書斎を出た

会話する

監督ん家の玄関
「カズオさん、一週間本当にありがとう」
「仕事もらえてありがてえよ」
「カズさん」
奥さんの目にいっぺう涙溜まって　あ！　座った　あれだ　愛里がやった　なんつったっけ
「お、奥さん、俺なんかに」
つって　とうちゃんも土下座した　どうすりゃいぃんだ？
「カズさん、本当に、本当にありがとうございます」
やっぱ育ちのいい女の人って　みんなこの、あ！　座礼つったな、やるんだな
「奥さん、俺は働かせてもらってよ、ありがてえよ」
「大一さん」
「え、あ、はい」
俺も土下座した方が　あ、監督が俺の腕つかんだ　するなっつうことか
「あなたとお会いして、優大にお名前の一字をいただいて本当によかったって」
「え？」
「大根の大、おすそ分けしていただきました、ありがとうございます」
「や、それは、俺が著作権持ってるわけじゃねえんで」
「フフ、おもしろいわね」
「葵、そろそろ立って」
「はい」
「とうちゃん、あの、立った方が」
「そっか？　そんじゃ」
「森下、明日から解体工事が始まるよ」
「そうなんすか」
「旧体育館」
「うちの高校の旧体育館も・・　あれ？」
「そうだよ」
「えっ？　そんじゃ、監督の母校って」
「あそこ」
「ハンパな進学校って」
「俺が卒業するくらいだから」
「んな、最初っから言ってくれりゃいいじゃねえっすか」

「森下の先輩だって言ったら何か変わった？」
「え、や、なんも変わんねえっすね」
「変われよ、少しは敬えよ」
「メッチャ敬ってますよ、監督すげえっつってんじゃねえすか」
「フッ　フフフ」
奥さん？
「兄弟でじゃれ合ってるみたい」
監督と目ぇ合って　監督がなんか気まずそうにしてっけど　あ！
「そんじゃ、ヤッさんやスギさんやショーさんも来るんすか？」
「他の現場もあるから常駐じゃないけど、メインはあそこになるからな」
「うぉおお」
「現場は関係者以外立ち入り禁止だよ、解体現場は危険だからな」
「あ、そうっすよね」
「仮設休憩所があるから、たまに顔見せに行けば？」
「おいっす」
「それじゃ、カズオさん、また」
とうちゃんがペコッて頭下げた
「森下もまたな」
「おいっす」
「大一さん、また遊びにいらしてね」
「はい、あ、なんかやることあったら俺やりに来るんで」
「やること？」
「赤ちゃんの世話はできねえけど、換気扇の掃除とか排水管掃除でも風呂掃除でも」
「まあ、それじゃそのときは紹介所を通してお願いするわね」
「や、いいっすよ、仕事じゃなくて」
「仕事として来ていただいた方が、私も気が楽だから」
やっぱ思慮深けえな
監督が惚れてますって目で奥さん見てるよ　あ　目ぇ合った　真顔になったよ
「そんじゃ、失礼します」
とうちゃんと二人　監督ん家の玄関を出た

帰りにスーパーで買い出しして帰ってきた
「ただいま」
リビングからかあちゃんが来て
「おかえり」
「美里、ただいま」「かあちゃん、ただいま」
「愛里さんは部屋に戻ったわよ」
「そっか」
「生理 4 日目だから少し貧血気味で」
「えっ」

「心配するほどじゃないわよ、お風呂に入って少し勉強したら寝ますって」
「そっ・・か」
とうちゃんとキッチンに行って　買い出ししてきた食材冷蔵庫に入れて
「とうちゃん、晩メシどうする？」
「なんかあるもんでテキト〜によ」
「それがさ、晩メシ、スパゲティにしようと思ってたからなんもねえんだよ」
「そんじゃ、そうめんでも茹でっか」
「だな、ツナ缶あるし、シソも」
「俺が作っから、ダイチは休んでろよ」
「俺も手伝うよ」
「とうちゃんにメシ作らせてくれよ」
とうちゃん
「うん、とうちゃんのメシ食いてえ」
とうちゃんが嬉しそうな顔して
俺は・・　リビングに
かあちゃんはソファに座ってタブレット見てる
俺は　どうっすかな
「どうだった？」
「なにが？」
「カズオの家政夫っぷり」
「すげえよ、なんつうか、すげえって思わせねえのがすげえよ」
「そう」
かあちゃん　満足そうな顔してるよ
「監督さんの奥さんがさ、とうちゃんは優大くんのこと泣かせねえって、
　すげえよな、赤ちゃん泣かせねえってさ」
「泣くわよ」
「そんでも、ねえちゃんから聞いたけど、俺たちんときも」
「泣いてたわよ」
「へ？」
かあちゃんがタブレット脇に置いて
「泣いてると思わなくさせられるのよ」
かあちゃんが怖え話でもするみてえな顔して
「え？ あ？ なに？」
「会話するの」
メッチャ怖がってるみてえな顔になってっけど
「か、会話？」
「オムツを換えてミルクを飲んでも泣くときがあるのよ、私は何もしなかったけど」
かあちゃんがなんもしなかったんはわかってっけど
「ダイチ、どうした？　　とうちゃんに何が言いたいのかなって抱きあげて、
　背中が熱かったのか、そうだな、ずっと同じ格好で寝てるもんなってさすって、

　とうちゃんに熱いよって教えてくれたのか、ダイチ、ありがとうな・・みたいな？」
俺は・・　優大くんをお風呂に入れてっときのとうちゃん思い出して・・
「ダイチがね、火がついたように泣くって言葉があるじゃない？
　あんなふうに泣いたときがあって、どうするのかなって思ってたら」
どうするのかなって　他人事みてえにさ
「ダイチ、何か言いたいのか、そうだな、とうちゃんは頭悪いから何か教えてくれてんだな、
　そっかそっか、手を動かすくらいとうちゃんに言いたいことあるんだなって、
　言いたいことがあると思う？　赤ちゃんが」
わかんねえけど　かあちゃんのその反応もどうなんだ？
「そしたら、ブリブリブリッてウンチ！　オムツからはみ出すくらいのウンチ、
　私は見てないけどね、オムツを換えながら、ダイチはすごいよ、自分でンガーッて、
　ふんばって、手と足動かして、がんばってウンチしたんだなあ、えらいなあ、
　よくがんばったなあ、ありがとなって、本気で感動して言ってるの」
やっぱマジで・・　とうちゃんは　マジでそうやって育ててくれてて
「そういうのをずっと聞いてるとね、泣いてるって感覚じゃなくなってきちゃうの、
　またカズオとダイチがおしゃべりしてるくらいの？　とにかく、あんたはよく泣くのよ」
「え・・」
「カズオが、ダイチ、なんだ？　とうちゃんとしゃべってくれんのか？ って、
　抱っこすると、だんだん泣き止んで気持ちよさそうな顔して、
　そっかあ、ダイチはとうちゃんに抱っこしてほしかったのか、とうちゃんもダイチを
　抱っこしたいから嬉しいなあって、本気で言ってるのよ、本気で」
かあちゃんが　信じらんねえって顔して言ってっけど　俺は・・
「そっ・・か」
泣きそうになってて
「私がいたから、土曜日か日曜日？　とにかく、カズオがトイレに行ったのよ、
　そうしたらダイチが泣き出して、えぇぇ、なに？　ウンチだったらどうするの？
　匂いはしないからオシッコ？　オシッコでもどうしたらいいの？ って思ってたら、
　ヒトミがね、ダイチ、とうちゃんはウンコしてるのって、真面目な顔で話しかけるの、
　ダイチもウンコするでしょ、とうちゃんもウンコしてるんだよ、ウンコ、わかる？ って、
　ウンコウンコって、幼稚園でも連呼してるのかしらってちょっと心配になったけど、
　その、わかる？ がツボだったみたいで声を出して笑ったの、そうしたらヒトミが、
　わかるよね、ダイチはねえちゃんの言ってることわかるよね、えらいねって」
ねえちゃんが・・　そんなことしてくれてたんだ
「なんかこの家の中で、赤ちゃんと会話できないのは私だけ？ って、ちょっと肩身が狭い？
　そんな気持ちになっちゃって、いやいやいや、ちがうちがうって感覚をリセットしてたら、
　カズオがトイレから飛び出してきて、手は？　手を洗ったの？ って言いそうになっ

たけど、
　緊急事態だから、そこはスルーして、そしたらカズオが、ダイチ、とうちゃんウンコしてた、
　ごめんな、ウンコ途中でやめられなくてって、そんなの途中で、まあいいわ、
　そしたらヒトミが、とうちゃん、ヒトミがとうちゃんはウンコしてるってダイチに言ったよ、
　ダイチはちゃんとわかってくれたからって、あれはわかったっていうの？　いいけど、
　それでカズオが、そっかヒトミがダイチに言ってくれたのか、ありがとな、
　ダイチもわかってくれてありがとなって、なんかね、異次元に迷い込んだ気分でね、
　カズオがオムツを開けたらウンチしてたのよ、ウンチの匂いはしなかったのに、
　私の鼻がマヒしちゃった？ って思いながら見てたら、ダイチもウンコしてたのか、
　とうちゃんと一緒にウンコしたんだなあ、ダイチと一緒にウンコできて嬉しいなって、
　え？　私がおかしい？　この光景をふつうだと思えない私がおかしいの？」
なんか・・　一生懸命しゃべってるかあちゃんが・・　おもしれえ　笑っちゃいけねえけど
「まあ・・　そういうカンジ？」
「そういうカンジ？」
「日々、そういうカンジだから、感覚がおかしくなっていって、しまいには私まで、
　あら、ダイチがカズオに何か言いたいみたいって思ったときには、怖かった」
「ハ・・　ハハハハ」
「笑いごとじゃなかったわよ」
「かあちゃん、おもしれえ」
「あんたが、本当の言葉？ 日本語？ 言うようになったときは、ホッとしたわよ」
「俺はいっちゃん初めになんつったの？」
かあちゃんが俺の顔ジッと見てっけど？
「かあちゃん？　なんつったの？」
「ヒトミはね」
俺のこと聞いてんだけどな
「カズオと二人きりで、カズオがかあちゃんかあちゃん言ってたから、
　最初の言葉は、かあか・・だったのよ、なんだか申し訳なくて、私は何もしてなくて、
　世話をしてるのはカズオなのに、カズオは大喜びしてたけど」
「俺は？」
かあちゃんが　ため息ついて
「うんと」
「うんと？」
「カズオとヒトミがウンコウンコ言うから」
「最初の言葉がウンコ？」
「なんだか、あんたには申し訳ないけど、そうなの」
「ハハハハ」
「ダイチ」

とうちゃん
「できたよ」
「あら、何ができたの？」
「そうめん」
「どれ？」
「ツナとシソとレモンの」
「私も食べたい」
「かあちゃん食ってきたんじゃねえの？」
「愛里さんと、けっこういいイタリアンに行ったんだけどね」
「美里、そんじゃこれ食ってくれよ」
「こんなにはいらない、少しでいいの」
「そんじゃ、とうちゃんと俺の分から分ければいんじゃね？」
「そんじゃ、やってくっから」
とうちゃんがキッチンに戻ってった
「愛里さんとね、ポルチーニ茸のクリームパスタ白トリュフ添えを食べたんだけどね、
　美味しいのよ、美味しいの、でも、なんかね、なんかなのよ、そしたら愛里さんが、
　ダイチさんのキノコスパゲティの方が美味しいですねって、笑っちゃった」
愛里ぃぃぃ
「一皿数千円のイタリアンのパスタよりダイチのキノコスパゲティって、ハハハ」
「そっか」
俺は　今　メッチャ感動してますっ
とうちゃんが　かあちゃんに小せえ器を渡して
「ハァァァ、やっぱりカズオのそうめんは美味しい」
だよな　やっぱさ　とうちゃんのメシがいっちゃん美味えよ
「とうちゃん、美味え」
「そっか？」
とうちゃんが嬉しそうな顔してさ
なんか　なんかさ　おかえり　とうちゃんっつうカンジだよ

落ちたトビの話

シャワー終わって
かあちゃんはまだソファに座ってんのか
俺は　部屋で勉強すっかな
「ダイチ」
「なに？」
「監督の奥様は少しは落ち着かれたの？」
「それがさ、監督が、とうちゃんに頼んで９月いっぱい来てもらったらっつったら、
　それじゃとうちゃんに頼りっぱなしになってお母さんになれねえからっつったってさ」
「お母さんに」
「女の人ってやっぱすげえなあって」
「私はいまだにお母さんになれているのかわからないけどね」
「ん・・っと、かあちゃんは、なんつうか、父親？」
「ヒトミも同じこと言ったわよ」
「監督さ、菱谷建設の取締役なんだってさ」
「そうよね」
「えっ　かあちゃん知ってたの？」
「あんたがバイトするとき、未成年だから親の承諾書を送ったでしょ」
「そんとき？」
「名刺の画像が送られてきたのよ」
「エーーーッ　かあちゃんなんで言ってくんなかったんだよ？」
「言ったら何か変わったの？」
「え・・　や、なんも変わんねえけど」
「私は取締役自ら監督してくれる現場ならって安心したわよ」
「そっか」
「現場作業員になりたいですとでも言ったの？」
「や、それは・・」
かあちゃんならわかっかな
「かあちゃん、落ちた鳶を救えるのは・・　なんだ？」
「トビ？　　動物愛護団体？」
「それじゃなくて、足場から落ちた職人」
「救急隊員じゃないの？」
「俺もそう言ったんだけどさ」
「やだ、あんたと同じ答え言っちゃったの私？」

「やだってさ」
「それがどうしたの？」
「監督が何言いてえんかわかんねえんだけど、その人の人生が元に戻らねえくれえ」
なんつったけかな
「バラバラに壊れちまったら、監督は何もできねえって」
「それはそうよ、他人の人生をどうこうできるわけがないわよ」
「そんで、ショーさんの話になって」
「ホームレスだった人ね」
「うん、俺がショーさんに声かけなかったら、ショーさんは今も浮浪者のままだって」
「そうね、ホームレスに声をかける人なんていないわよ」
「かあちゃんかけたじゃん、とうちゃんにさ」
「あれは・・　緊急事態だったからよ」
「そんでもさ、駅の地下道ならいろんな人通ってんのに浮浪者のとうちゃんにさ」
「Listen」
「聞いてるよ」
「朝の忙しい時間に見ず知らずの他人の指輪を探してくれる人なんている？」
「とうちゃん」
「しかも汚い側溝の中に落ちた指輪」
「とうちゃん探したじゃん」
「それは、カズオが時間がたっぷりあって、汚い側溝も気にしないホームレスだったから、
　適材適所、完璧な人選、もっとも合理的な解決策」
「そんでもかあちゃん、とうちゃんのこと連れてきて、風呂入れたり服買ったりさ」
「私の部屋にあんな汚ったなくて臭い恰好で入って欲しくなかっただけ」
「追い返せばよかったじゃん」
「私が連れてきちゃったのに追い返せないでしょ？　それは人としてどうなの？」
「つまり、かあちゃんはとうちゃんに、思いやりっつうの？」
「思いやりではない、人道的行為、それだけよ」
「そんでもかあちゃん、その後もずっととうちゃんのこと置いてあげてさ」
「私は親切でカズオをここに置いていたわけじゃないのよ」
「好きになったから？」
かあちゃんが　俺のこと無表情でジーッと
「好きになったからだよな？」
「必要だったから」
「好きよかすげえじゃん」
「そういう意味ではない、掃除が上手で洗濯も上手で料理も上手だから、
　つい、つい、つい、で、長引いちゃって、途中でネコなんか拾ってくるから」
ねえちゃんが　かあちゃんはこの話になるとメッチャ照れて本音言わねえって
角度変えてみっか
「そんじゃ、かあちゃんは、浮浪者のとうちゃんを救うために結婚してあげたんか」
「ダイチ」

「な、なに？」
「この世の中のどこに、慈善活動で結婚する人がいるの？　いたら連れてきて」
きたきたきた　よしよしよし
「とうちゃんのこと助けてあげたかったんじゃねえの？」
「ダイチ」
「はい」
「私は、困ってる人がいたら助けましょう、かわいそうな人がいたら助けましょうみたいな？
　そういうのが大嫌いなのよ、知ってるでしょ」
「あ、うん」
「あんただって、そのショーさんをかわいそうな浮浪者だから声をかけたの？」
「ちげえよ」
「あれでしょ？　なんか親しみ感じちゃったんでしょ」
「うん、とうちゃんの話すっと、すげえわかってくれるしさ」
「わかるでしょうとも、そりゃわかるわよ」
「監督がさ、俺と話すとみんな素になっから」
「みんな素になる？」
「そう言ってたけどさ、俺はそこんとこがよくわかんねえんだよ」
「あんたはゴールデンレトリバーみたいに人懐こくて泥棒にでも懐いちゃうから」
「泥棒には懐かねえよ」
「包丁持って侵入した泥棒にもハッハッハッてシッポ振ってそばに来るから、
　泥棒もつい、撫でたくなっちゃうんでしょうよ」
「だから泥棒には懐かねえって」
「監督だって、ショーさんがかわいそうだから雇ったわけじゃないでしょ」
「人となりがわかったからだって」
「あの監督は頭の回転が速いからね」
「俺とおんなし高校卒業したんだってさ」
「そうよね」
「えっ　それも知ってんの？」
「あんたの高校、歴代の卒業生代表の挨拶した人の名前が載ってる冊子があるでしょ」
「ねえちゃんが載ってるやつ？」
「あそこに名前があったわよ」
「マジか、あんま見ねえからさ」
「あんな冊子誰が見るのよ、なんで毎年毎年作るのかしら PTA 会費使ってわざわざ」
「俺はわかんねえよ」
「きっと、卒業生代表の挨拶をしたってことだけが自慢で生きてる人のためでしょうね」
かあちゃん　辛辣だな　そうかもしんねえけど
「それで？　トビが落ちたのはどうなったのよ？」
「落ちてねえけど、落ちた鳶を救う、なんつったかな、天性のなんかがあるって」
「天性の？　野生の勘？」

「野生？」
「落ちたトビでもタカでも救えるんじゃないの？」
「だからさあ、鳥の話じゃねえよ」
「なるほどね」
「だから鳥の話してんじゃねえって」
「あの監督が何を言いたのかわかったわ」
「え、なに？」
「そういうことか」
「どういうこと？」
「私と同じことを思っていたとはね」
「おんなしこと？　　なに？」
「愛里さんのバースデープレゼントは決めたの？」
「おんなしことってなんだよ？」
「愛里さんのプレゼント、何にしたの？」
「何にっつうか、俺ができることやるっきゃねえかなって」
「そうね、あんたにしかできないことが愛里さんにとってはいちばん嬉しいんじゃない？」
「そっかな？ そう思う？」
「それゃそうでしょ、あんたみたいなのを好きになったんだから」
「みてえってなんだよ」
「ほら、そろそろ寝なさい」
「うん、かあちゃんおやすみ」
「おやすみ」
とうちゃんは・・　まだ風呂か　入った後の風呂掃除してんだな

部屋に戻って
愛里はもう寝てっかな
『愛里』送信
『おやすみ』送信
ピコン
『おかえりなさい』
おかえりなさいってさあ　たまんねえな
『ただいま』送信
ピコン
『今日おかあさんにステキなイタリアンのお店に連れていってもらって』
ピコン
『アラカルトで頼んだんですけど』
ピコン
『おかあさんのチョイスが私の大好きなものばかりで』
ピコン
『でも』

ピコン
『これは美味しいだろうなって頼んだポルチーニ茸のパスタ白トリュフ添えが』
ピコン
『そんなにトリュフかける必要ある？　お皿からはみ出してるけど？ みたいで』
ハハハ　おもしれえ
ピコン
『美味しかったんですけど』
ピコン
『不味いか美味しいかって言われたら美味しかったんですけど』
ピコン
『あなたのキノコスパゲティの方がずっと美味しいです』
愛里ぃぃぃ
『メッチャ嬉しいっす！』送信
『明日の晩メシに作ろっか？』送信
ピコン
『明日はおかあさんに久しぶりにおとうさんの料理を食べさせてあげたいから』
そっか　だよな　ずっと俺が作ってたもんな
ピコン
『私にはあなたのお弁当があるから』
ピコン
『それだけでしあわせです』
俺の弁当でしあわせってさあ
『明日の弁当いちおう決めてっけど』送信
『追加リクエストありますか？』送信
ピコン
『明日はお任せで w』
お任せされますっ
ピコン
『それじゃ私はそろそろ寝ます』
ピコン
『おやすみなさい』
『愛里　おやすみ』送信
俺の弁当があるだけでしあわせってさあ
俺がしあわせっすよぉぉ
俺の弁当・・　とうちゃん泣いてたって
美味そうだねって言われて　すげえ嬉しそうな顔したって
とうちゃんにまた弁当作ってあげてえけど　しばらくまた作ることねえもんな
待て　ある　9 月 13 日　とうちゃんの誕生日でもあるじゃん
とうちゃんにも巻き寿司といなり寿司の弁当作ればいんじゃね？
かあちゃんにもさ　かあちゃんイヤかな　そんでもさ

そしたらさ、13 日の昼は俺の弁当で三人の誕生日会みてえなさ
どうなんかな　そんでもそれっきゃ浮かばねえ
俺ができることっつたら　それっきゃねえよ
あとは・・　愛里にはあれもやりてえな
どうなんかな　わかんねえけど　そんでもさ
寝よう　もうこんな時間になっちまったよ

席替え

目ぇ覚めて　月曜日だ
愛里生誕ウィークの始まりだ
つってもさ　俺にとっては 365 日が愛里生まれてきてくれてありがとうデーだけどさ
顔洗おう

キッチンに行くと
「ダイチ、おはよう」
「とうちゃん、おはよう」
とうちゃんはかあちゃんの弁当作ってて
俺は愛里の、まあいちおう俺のもだけど、弁当作る
今日は鶏そぼろと卵そぼろ弁当　真ん中に紅ショウガ乗せて
アスパラのベーコン巻きとしいたけのバター醤油焼きとピーマン焼いたやつ
キノコスパは入れらんねえけど　せめてしいたけっつうカンジで
「アイリちゃんの弁当、可愛いな」
とうちゃんが愛里の弁当見てニコニコしてて
「とうちゃん、とうちゃんの弁当作ろっか」
とうちゃんがキョトンとした顔して
「俺はもう仕事ねえよ」
「そう・・だよな」
なんか、とうちゃんに喜んで欲しくてさ
「とうちゃん」
「ん？」
「俺の弁当、美味かった？」
とうちゃんは俺の方見ねえで　一瞬手ぇ止めて　そんで　俺の頭クシャクシャッて撫でた
そんだけで　伝わったよ　とうちゃん
13 日にはさ　俺　とうちゃんにも誕生日の弁当作っからさ
「ダイチ、握りメシ食ってけ」
「ありがとう」
握りたてのとうちゃんの握りメシ
「美味え」
「そっか？」
とうちゃんが嬉しそうな顔で俺のこと　やっと見た

「とうちゃん、俺、愛里迎えに行ってそのまんま学校行くよ」
「そっか、ダイチ、いってらっしゃい」
「いってきます」
愛里の部屋へ　走った

学校に近づくと、工事現場独特の音が聞こえてきた
ヤッさんたち　みんな　やってんだな
「解体工事が始まったんですね」
「監督やヤッさやスギさんやショーさんもいんだよ」
「そうなの？」
「うん、菱谷建設が請け負ったんだってさ」
愛里が俺のこと見上げて　ジッと見てっけど
「愛里、なに？」
「あなたもやりたいんじゃないかなって」
「俺の夏休みは終わったから」
「夏休み？」
「ハンパな気持ちじゃさ、ダメじゃん、どっちもさ」
「どっちも？」
「勉強と現場」
「そうですか」
「監督にさ、俺には、足場から落ちた鳶を救う、なんかがあるって言われてさ」
「足場から落ちた鳶って？」
「ショーさんみてえにさ、なんもかも失くした人？　なんかよくわかんねえんだけど」
「え・・　それって、弁護士？」
「なんで？」
「だって、労災とかなんかそういう手続きするときって弁護士じゃないんですか？」
「まあそうだけど」
「でもお金かかりますよね、弁護士に頼むって」
「そりゃまあそうだよな」
「私、調べたんですけど」
「なにを？」
「自己破産するのに」
「愛里、なんでんなこと調べたの？」
「ショーさんのお財布作るときに、なんとなく」
すげえな　なんかわかんねえけど
「お金がないから自己破産して借金をゼロにしたいのに、そのために弁護士に頼むと」
俺はとうちゃんのこと考えてたときに調べたことあんだけど
「30 万かかるって、お金がないから自己破産したいのに、バカみたい」
「しゃあねえよな、弁護士も仕事だからさ」
「あなたが、お金のかからない弁護士になればいいんじゃないんですか？」

「へ？」
「そうしたら、ショーさんみたいな人は助かるんじゃないかなって」
「そんじゃ、俺は何で稼げばいぃんだよ？」
「ん・・・　現場で？」
「なんだよそれ　ハハハ」
「あなたなら、そういうメチャクチャなことやっちゃえそうで」
「メチャクチャってさ」
「でも、人を救うって考え方が、上から目線的でなんか」
「上から目線？」
「自分が上にいるっていう意識っていうか、そういうのってどうなのかなって」
愛里もかあちゃんとおんなしような感覚してんだな
「大切な人なら意識もしないでサッと手で支えますよね」
「うん」
「おとうさんがおかあさんが歩道からはみ出しそうになったときいつもサッて」
それはちゃんと見てんだ
「そういうのがいいなって」
「そっか」
「まあわからないです、私は今日から返ってくるテストの結果もわからないから」
「愛里は大丈夫だって」
「また無責任なこと、あ、ちがう、あなたに責任はないですけど」
「終わったこと考えてもしゃあねえんだよ」
「あなたはそういう余裕があるかもしれないけど、私は」
「かあちゃんはさ」
「おかあさん？」
「俺やねえちゃんの通信簿やテストなんて見ねえもん」
「えっ？　ウソ！」
「あんたたちがそんときがんばったんならそれでいいっつってさ、
　終わったことをああだこうだ言ってもしゃあねえだろって」
「神！　女神！」
「なんだよそれ」
「ママなんて、愛里ちゃん数学この点数で大丈夫？ ママ心配よって、あ、校門」
愛里はサッと手を離した・・勢いでよろけて
「愛里！」
とっさに腕つかんで
「あ・・　ありがとうございます」
「俺、ずっと手ぇつないでてえよ」
「ダメです」
「そんでもさ」
「えっと、こ、こういうカンジですよね」
「なにが？」

「足場から落ちた鳶を救う？」
「愛里は足場上ってねえけど」
愛里が俺のこと見上げて　メッチャ睨んでっけど　可愛いんすけど
「おっちょこちょいだと思ってるんですか？」
「そこが可愛い」
「バカみたい」
ツンとしてロッカーんとこに走ってったから　俺も後追いかけた

朝の学活
「今から席替えをする」
そうだ！　そうだった、席替え　やっとやっとだ
「くじ引きで、廊下側の列からA・B・C・・　前から1・2・3・・」
どこでもいい　どこでもいいから　愛里の隣りにしてくださいっ
三つに分けられた箱ん中の折りたたまれた紙
お願いしやす！
E-6　窓際から3列目の後ろから2番目か　微妙に真ん中に近くはなった
あ、川口が俺の二つ前　んなことはどうでもいい　愛里は？
愛里が箱から紙取って　中見て　あ　こっちに歩いてきたあああああ
え？　俺の右隣りの列の前から三番目？　なんだこの微妙に近けえようで遠いカンジはさ
あっ！　川口の隣り　川口となんかしゃべってる
愛里の右隣りは・・　え、志田？
これは　なんとかしてえ　なんとかしねえと
「先生！」
「も、森下、なんだ？」
「これって双方の合意があれば交換できねえんすか」
「それは・・」
いいって言ってくれ！
「くじ引きの意味がなくなるから、混乱が起こるしな」
「そう・・すか」
微妙だ　喜べねえ　メッチャ遠くなったわけではねえ　近づいた・・けどさ
愛里　こっち見てくれよ　愛里
あ・・　隣りの列だから逆に振り向きづれえんか
「森下くん、よろしく」
右隣り　誰だ、んっと、バド部の鈴木？　じゃねえ、佐藤か
「森下、また隣りだな」
え？　あっ　焼きそば班男子2　またかよ
そんでもさ・・　そんでも　愛里が近くなって　愛里のこともっと見れて・・って
思わねえとやってらんねえ　川口代わってくんねえかな　こそっとさ
「来週の土曜日は運動会だから、クラス委員がそのまま実行委員として・・」

運動会の気分じゃねえよ　んな晴れ晴れとした気分になれねえよ
そんで　そのまま英訳の授業
テスト返されてきて
あっ　やっちまってた　やっちまった気ぃしてたけど　やっちまってた
accurate　acccrate ってＣ３つ書いちまってた　正確なっつう単語間違えるってさ
まあいっか

10 分休み
俺は速攻で愛里んとこ行って
「愛里」
俺は隣りになれねえでけっこう落ち込んでます
「英訳、どうだった？」
「え、まあ・・　100 点でした」
「すげえじゃん」
「あなたは？」
「98」
「え？　どこをどうすればあなたが間違えるの？」
「accurate のＣ 3 つ書いちまってさ」
「正確なっていう意味の単語を間違える？　Ｃを 3 つって、あなたはそういうケアレスミスが」
「二人ともすごいね、僕は 92 点だった」
川口、話に入ってくんなよ
「どこを間違えたの？」
愛里、俺としゃべってくれよ
「なんかそこの 3 人はレベルがちがうよなあ」
志田っ　なんでおまえまで入ってくんだよっ
「俺は 78 点、まあ英訳は苦手だからさあ」
なんでこんなグループチャットみてえになってんだよっ
あああああ　チャイム鳴っちまったよ
「愛里、そんじゃ、昼休みにな」
「はい」
どうなんだ　この席？　俺のっつうより愛里の両隣りがさ
いや　いやいやいや　欲出してちゃダメだ　初心に返んねえと
愛里とおんなしクラスになっただけで大喜びしてた俺にさ

昼休みの中庭
やっと　やっと愛里と二人きりになれた！
「わあ、そぼろ弁当、美味しそう」
愛里が俺の弁当見て喜んでくれてるよ
「美味しい、しいたけも美味しい、全部美味しい」

「そっか」
「生物の痛手を・・　終わったことはもういいです」
「そうだよ、もう終わっちまったんだからさ」
「来週運動会って、すっかり忘れてました」
「うちの運動会は余興みてえなカンジだからさ」
「私、小学校や中学校の運動会が大嫌いで」
「なんで？」
「本気で走るでしょ？」
「本気で走る・・っつうのは？」
「100m 走とかリレーとか本気で走るでしょ」
「ああいうのは、うん、本気で走っけど」
「意味がわからない」
「意味？」
「たとえば、あのバスに乗れなかったら遅刻すると思ったら本気で走るけど、
　何の目的もなく 100m 全力疾走しなきゃいけない意味ってあります？」
「意味って、まあ、ねえっつっちゃねえけど」
「ですよね？　　あと、リレー、中学一年のときのリレーが地獄でした」
「地獄？」
「同じクラスから来た人が全然いなくて、私、選手に選ばれちゃったんです」
「そっか」
「勝手に足が速いと思われちゃって、ムリだからって言ったんだけど、第三走者にされて、
　次々と追い抜かれて・・　なんかもうクラスのみんなに顔向けできなくて、
　そのままトイレに走っていって、フォークダンスまで隠れてました」
笑っちゃいけねえ　愛里はマジで言ってる
「リレーって聞いただけで今も・・　手から汗が出ちゃう」
「そ・・っか」
「フォークダンスもすっごくイヤだった、オクラホマミキサー、
　ほっとんど口きいたこのない男子と次々と手をつないで踊るって地獄」
男子と　手ぇつないだあ？
「なんだよそれ？」
「でしょでしょ？」
「愛里にんなことやらせんなんてさ」
「そうなんです、ああ、わかってくれて嬉しい」
「わかる、メッチャわかる」
「あなたはフォークダンスやりましたか？」
「ん・・と、あ、やった」
「なに？　　オクラホマミキサー？」
「や、じゃなくてさ、なんつったっけ、んっとさ」
見せるっきゃねえか
「こういうやつ」

「え？　なに？」
「だから、こういうやつ」
「え、わかんない、そんなフォークダンスある？」
「ほれ、チャ〜ラララチャラチャラっつう」
「え・・　まさか・・　マイムマイム？」
「それ！　それそれ！」
「エーーーッ」
「なに？」
「あなたが、踊ってみせたものが、まったく原型を留めてない」
「ウッソ」
「あのあれで」
あのあれ？
「ちゃんとそろったんですか？」
「練習んときさ、こう手ぇ合わせんじゃん隣りと」
「ああ・・　合わなかった」
「愛里、よくわかんな」
「あなたのあれを見たら・・　みんなわかると思う」
俺のあれってなんだ？
「それで・・　本番は？」
「なんか先生が森下くんは外れていいっつってくれてさ」
「ですよね」
「なんでなんすかって聞いたら、次のリレーのアンカーだからって」
「先生も・・　いろいろ・・　フッ」
「え、なんで笑ってんの？」
「ハッキリ言えないですよね」
「なにを？」
「壊滅的に踊れないって　あっ」
「え、俺踊れねえ？　さっき踊ったじゃん」
「そこも自覚ないの？」
「なんの？」
「え、いえ、いいです、高校ではフォークダンスはないから」
「だよなあ、あんなん踊らされてさあ」
「踊ってないですよね」
「だから、俺はリレーのアンカーだからって言われたからさ」
愛里？　口押さえて　下向いちまった
「愛里・・　泣いてんの？」
愛里が口押さえたまんま首振ってっけど
「愛里、俺、なんか悪りぃこと言った？」
「ヤ・・メ・・　ハハハハハハ」
「え、どした？」

愛里が　ハァァァッて息吐いて
「生物何点でしたか？」
「100 点だけど」
「だったら、いいと思う」
「なにが？」
「いいから！　　もうヤメテ！　　ハハハハハ」
愛里が大きな口開けて笑う顔が好きだ　大好きだ
「なんだよぉ、なんで笑ってんだよぉ」
「だって・・　ハハハハ　可愛いから」
「可愛い？」
「はい、ハハハ」
男が可愛いって言われんのはなんかあれだけど　愛里になら
「そっか、俺は可愛いんか」
「可愛いです　ハハハハ」
愛里が笑ってくれんならさ　愛里の笑う顔見てるとさ
席が微妙な位置だっつうのも　いっかあくれえになる
「なんか、工事の音しませんね」
「昼休憩だから」
「10 時くらい？　　30 分くらい音がしなかった」
「10 時休憩、あと、3 時休憩もあんだよ」
「行かなくていいんですか？」
「どこに？」
「おじさんたちのところ」
「今日はいいよ」
「私、先に戻ってますから」
「いいって」
愛里の手ぇにぎって
「今は愛里といてえんだよ、俺」
俺は高校生でさ　だからこうやって愛里のそばにいれてさ
「しあわせだーーー！」
「もう！　　どうしてそういう大きい声出すの！　　やめて！」
「あ、ごめん」
「バカみたい」
「愛里、ごめん」
「いいけど、おもしろいから」
「おもしれえ？　　俺、おもしれえ？」
「おもしろいですよ」
「愛里の方がおもしれえけどな」
「私はまったくおもしろみのない地味な人間です」
ヤベ　くちびる噛んでガマンしてっけど

「なんですか？」
「や、なんでもねえ」
「なに？　やだ、言いたいこどあるなら言って」
言いてえこと？
「言っていいんすか？」
「好きとかそういうの以外なら」
「え・・」
「で、なんですか？」
「好きです」
「バカなの？　今言ったでしょ私」
「いいじゃん、ほんとのことなんだからさ」
「そうですか、そろそろ教室に戻りましょう」
「おいっす」
「次は物理ですね」
「おう」
「テスト、返ってきますね」
「だな」
「あぁぁ」
「愛里、考えんな、終わっちまったことだからさ」
「そうですよね、考えたって点数が上がるわけじゃないし」
「いぃんだよ、愛里は一生懸命やったんだからさ」
愛里が　俺を見上げて
「はい」
「愛里、好きだよ」
「はい」
「マジで」
「はい、もういいですから」
「おいっす」
二人で　教室戻った

去年の運動会の話

晩メシは　とうちゃんのキノコの炊き込みごはん
「アイリちゃんがキノコスパゲッティ食いてえっつってたんだろ？
　俺はスパゲッティはあれっきゃできねえからよ、炊き込みにした」
「愛里喜ぶよ、炊き込みも食いてえっつってたからさ」
あとは肉豆腐とニンジン千切りにして炒めて塩かけたやつ
それを美味そうに食いながら　かあちゃんと愛里がしゃべってて
俺ととうちゃんは　それ聞きながらメシ食ってる
そうだよ　愛里は毎晩こうやってとうちゃんとかあちゃんと俺とメシ食ってさ
なんつうの？　　家族みてえなさ　つかもうファミリーじゃん
英語で言うとザックリ収まっていいな
だからさ　席が隣りじゃねえくれえどうってことねえよ
「あら、もう運動会の季節？」
「はい」
「愛里さんは去年何に出たの？」
「障害走と団体戦です」
見てたよ　障害走　網スルッと抜けて平均台ススッと渡って　その時点ではダントツ一等で
ビックリした顔で後ろ振り向いてさ　そんで最後のバスケ　手が届きそうな低さのゴール
みんなズルしてリングつかんで入れてたのに、愛里は律義にボードにあてて投げてさ
なかっなか入んなくてさ　結局ビリだったけど　俺はその律義さに感動してたよ
「ダイチ」
「あ？」
「あんたは去年何に出たんだっけ？」
かあちゃん見に来ただろ
「フルコース」
「えっ　フルコースに出たんですか？」
見てなかった・・よな　俺の存在も知らなかったんだもんな
「出た」
「どんなのだった？」
かあちゃん見に来たじゃん
「あれは、男子には過酷な競技で」
愛里　わかってくれてんだな

「男子は目隠ししして女子と手をつないで、女子がアンパンを食べさせて、
　全部食べるまでは次に行けなくて、その次はゆで卵をむいて食べさせて」
俺と組んだ女子、殻ちゃんと向けなくて　俺は殻も食ったよ
「それも全部食べるまで次に行けなくて、最後がジンジャーエールで」
鼻から出そうだった　意地でも出さなかったけどさ
「これも全部飲まないとゴールに行けないんです、うちのクラスの男子たち、
　席に戻ってきてずーーっとゲホゲホしてました、吐いちゃった人もいて」
「ダイチなら大丈夫でしょ」
なんだよそれ　大丈夫だったけどさ
「あ！　　そうよ、大丈夫だったわよ、アンパンも卵も一口でパクッと食べて、
　ジンジャーエールもゴクゴクゴクッて飲み干して、目隠ししてるのに女子引っ張って」
「えええええ？」
「フッツーに一位でゴールしてたから、大したことないんだなと思って見てたのよ」
けっこうがんばったんすけど俺
「あそこの学校、一・二・三年と男子女子別で借り人競争ってあるでしょ」
「はい、私はあれじゃなくてホッとしました」
「あら、なんで？」
「お題がけっこうハードで」
「ああ、そうよね、ヒトミが三年生のとき、あれに出たのよ」
「え？　　あれに・・」
「あの子足が速いから、サッとお題の紙が置いてあるところに行って、
　お題を見て一瞬の迷いもなく本部席に走って、校長先生！ って」
「校長先生って書いてたんですか？」
「それがね、校長先生を引きずるように走って一等になったんだけど、
　一等のお題ってマイクで読み上げられるでしょ？」
「はい」
「ハゲのおっさん」
「グッ・・グフッ」
「当時の校長だけどね」
とうちゃんも俺もそれは見てねえんだよ
俺の中学校の運動会と重なってさ　とうちゃんは俺の方に来てくれたからさ
「一瞬みんなどう反応していいのか困ってたわよ、その後大爆笑だったけど」
「お姉さん・・　おもしろすぎる」
「愛里さんは今年は何に出るの？」
「まだ何も決まってないです、明日の午後？　　でしたよね？」
え？ 俺？
「うん、二学期から家庭科の時間は自習か特別授業かイベントの打ち合わせ」
「あの学校は運動会に力入れてるわよね」
「そうなんです、一年のときビックリしちゃって」
「クラスごとにテーマを決めて鉢巻きや衣装？　　そういうのも揃えるのよね」

「はい、一年生はだいたいお祭りの法被かエプロンでした」
「ヒトミのときもそうだったわ、ダイチ、あんたは去年どうだったの？」
「え・・　なんだったけかな」
「憶えてないの？」
愛里のことばっか見ててさ　愛里はプロンと三角巾でメッチャ可愛かった
つか、かあちゃん見に来てたんだからさ　かあちゃんも
「祭りの・・」
とうちゃん　とうちゃんは憶えててくれたんか
「ああ、そうだった、つっまんないわよね」
「俺が決めたんじゃねえよ」
「去年の三年生の男女混合リレーの風林火山はすごかったですね」
「私は途中で帰っちゃったの、ダイチはもう出ないからいいやって」
とうちゃんは最後までいてくれたよ
「すごかったんです、バトンは風林火山の旗で」
「あの学校のリレーは勝つ気ないわよね？ ってものばかりよね」
「そうですよね、大きい提灯とか、一年生はラップをバトン代わりにするクラスが多くて」
「ヒトミのときもそうだったわ」
「その風林火山の三年生は、最初の走者は足軽みたいな恰好で、次々と被るものが出世して、
　最後は武田信玄の兜をそのまま再現みたいなの被って」
「そういうところは手を抜かないのよ、感心しちゃう」
「一等のクラスより目を引いてました」
「部活対抗リレーなんて、柔道部？　畳持って走ってたわよね」
「バッタンバッタン倒れて砂ぼこりがすごかったです」
三年生の風林火山や柔道部の畳は憶えてて　俺は愛里の記憶の片隅にもねえっつうのがねえよな　しゃあねえよ　存在も知らなかったってさ
「愛里さんのお母様は見にいらしたの？」
「はい、パパと同期だった方たちとその奥さんたちと一緒に」
「そうね、あそこは父兄も卒業生っていうのが多いわよね」
「お弁当のとき、知らない三年生たちと一緒で」
昼メシんとき愛里のこと探したけどいなかったんだよな
「しかも、ママが和食のお店にお弁当注文してて」
「愛里さんのを？」
「全員です、高校の運動会のお弁当にイクラとか西京焼きって」
「お母様なりに他の方にも気を使ったのね」
「おとなの人たちは喜んでましたけど、三年生たちは、なんか・・　微妙な顔してました」
「ハハハ　微妙な顔」
俺はとうちゃんの握りメシと卵焼きとか食ってたよ　愛里にも食わせ・・られる！
今年は一緒に弁当食えるよ　とうちゃんの弁当　あれ？　俺が作った方がいぃんかな
「今年はお母様の代わりにはなれないけど、私とカズオが行くからね」

「嬉しい！　おとうさんのお弁当ですか？」
「俺が作っからよ」
「最高！」
あ・・　とうちゃんの弁当がいいんだ　そっか
まあ俺も運動会っつったらとうちゃんの弁当だもんな　幼稚園のときからさ
つかさ　運動会よりさ　その前にさ　俺にとっては一年ん中で最大最重要なイベント
イベントっつか　愛里の誕生日だろ　それだろ
去年まではとうちゃんとかあちゃんの誕生日で結婚記念日でさ
やっぱ最大の日だったけど　今年からは祝日にして欲しいくれえの日だよ

晩メシ終わって
かあちゃんと愛里はリビングでまだ運動会の話で盛り上がってるよ
俺ととうちゃんは後片付けしてて
「ダイチ、炊き込み、いっぺえ残ってんだけどよ」
「そんじゃ、明日の愛里の弁当、炊き込みの握りメシと梅とおかかの握りメシにする」
「美里のもそうすっかな、それと塩だけの握りメシ」
「かあちゃんはとうちゃんの塩むすびねえとだもんな」
とうちゃんが嬉しそうな顔してさ
「とうちゃんさ、13 日って結婚記念日じゃん」
「うん、だな」
ちょっと照れた顔してるよ
「そんときの前っつうか、今くれえ？　2〜3 日前って、なにしてたの？」
「え・・んっと・・　住民票・・はもっと前だな、そんで、ねーちゃんぶっ倒れちまって」
「や、もうちっと 13 日寄りは？」
「ん・・と、掃除して・・洗濯して・・　メシ作ってたな」
フッツーの日々っつうことか
「あ！」
「え、とうちゃん、どした？」
とうちゃんが　俺に顔近づけて
「アイリちゃんの」
メッチャ小せえ声で
「誕生日のあれ、買った」
「そっか、うん」
「消しゴムでいんだよな？」
「うん、愛里楽しみにしてるっつってたじゃん」
「女の子用ってわかんねえからよ、ヒトミやダイチのとおんなしにしたんだけどよ」
「あれがいっちゃん消しやすいから、あれがいいよ」
「そっか」
とうちゃんがホッとした顔して
その日はさ、とうちゃんの誕生日でもあってさ

「俺も」
こんくれえは言ってもいいよな
「とうちゃんへのカード買ったよ」
「俺の？」
「とうちゃんの誕生日でもあんじゃん」
「ダイチもヒトミも毎年カードくれてな」
「それっきゃ思い浮かばねえからさ」
「俺、全部取ってあんだよ」
「全部？　いつからの？」
「ヒトミは幼稚園ときからで、ダイチもか」
「マジ？　全部？」
「うん、ヒトミもダイチも最初はひらがなでよ、そんで漢字書くようになってよ、
　俺はパッとは書けねえけど読めるようにはなったからよ、外国語のはムリだけどよ」
とうちゃんは英語だけはどうしても憶えらんねえっつってたよな
「誕生日って漢字書いてあっと、字読めるっていいなあってよ」
「とうちゃん、漢字は高校生レベルで読めんじゃん、書けるしさ」
「そんでもなあ、ふだん使わねえのは忘れちまってよ」
「俺だってそうだよ、学校でやるから憶えてっけどさ」
「そんでもよ、俺、コーヒーって漢字は書けんだよ」
「珈琲？　俺も今頭でボヤッと浮かんだけど、今すぐ書けって言われたら自信ねえよ」
「ねーちゃんが初めてアイス屋に連れてってくれたときによ、珈琲って書いててよ、
　カタカナん中にそれだけあっから、なんなんかなあって」
「そんで憶えちまったの？」
「なんかな、ジーッと見て憶えて、ねーちゃんの部屋戻ってからチラシの裏によ」
かあちゃんの名前だけじゃなかったんだ
「俺なんかは、こん先一生使わねえのはわかってんだけどよ、なんかな」
とうちゃんは　字読めねえから　読めなかったときは、必死になって見て憶えたって
大根て字も見て憶えて読めるようになって　そんで書けるようになったって
とうちゃんは、この家ん中で実はいっちゃん頭いぃんじゃねえかと俺は思ってる
視角で記憶して絵みてえに憶えるってさ　相当じゃねえとできねえよ
「ダイチはバラって字は書けんのか」
「薔薇は、うん、書ける」
「あれは、なんであんな字なんだろなあ」
「なんかさあ、薔って中国では垣根っつう意味で薇は風にそよぐって意味なんだってさ」
「垣根んとこで風吹いてゆらゆらすっからか」
「みてえなこと書いてあった」
「バラもいいけど」
かあちゃん？
「正確なっていう意味の」
へ？

「accurate も正確に書いて欲しかったでしょうね」
愛里・・　言ったんか　かあちゃんに　いいよ　愛里なら　うん
「accurate も泣いてたでしょうねえ」
「accurate が泣くってどういうことだよ」
「よりにもよって、正確なって意味の単語を」
「わーーかったよ、俺が悪かったよ」
「ウケたわよ、わざと？」
「わざとじゃねえよ」
「愛里さんのこと」
「送ってく」
かあちゃんの後ろで愛里がすまなさそうな顔してっけどさ　いいんだよマジで

廊下でもエレベータでも愛里は下向いて黙ったまんまで
愛里の部屋について　玄関開けて
「あの」
「ん？ なに？」
「私、あの、告げ口とか、そういうつもりじゃなくて」
「なにが？」
「accurate」
「ぜ〜んぜん気にしてねえよ、かあちゃん俺のことからかいてえだけだからさ」
「おかあさんに言ったのは・・　もしかしてなんですけど」
愛里は下向いたままで
「英訳は、私の生理二日目のいちばん最初のテストで」
え？
「もしかしたら、あなたが私のこと心配して集中できなかったんじゃないかって」
それは・・
「ちげえよ、ほれ、俺ってさ、ケアレスミス多いからさ」
「本当に・・　そうですか？」
「マジマジ」
「おかあさんも・・　そう言ってくれましたけど」
「だろ？　　それにかあちゃん、俺が何点取ろうと気にしねえしさ」
「おかあさんも、そう言ってましたけど」
「やっぱ英訳は愛里と勉強して愛里にチェックしてもらわねえとな」
「はい、中間のときは、全力でチェックします」
「お願いしやす」
愛里の　鋭さに　俺はちっとドキッとして
んなことで集中力なくす俺はまだまだだなって
どんなことがあっても集中しねえとなんねえときは集中しねえとさ
「物理は・・　何点でしたか？」
「100」

「あ・・　よかった」
「なんだよ、愛里の方がお母さんみてえじゃん」
「何点でもいいんですけど、それじゃ英訳は・・」
「ケアレスミスっすよ、いっつも愛里に言われてんのになあ」
「あ、ちがう、物理は別の日で、あの日は化学と古文」
「愛里、まかせろ、多分両方 100 点だ」
「あ・・　よかった、ていうか、すごいですね」
「愛里は？　　物理は何点だった？」
「聞かないでください、落とさなかったとは思いますけど」
「そっか」
俺のこと心配すんなんてさ
「愛里」
抱きしめて
「終わったことは、もういいじゃん」
「はい」
「あのさ・・　愛里の誕生日」
愛里がサッと俺から身体離した
「サプライズはイヤですよ」
「しねえよ、そんなんできねえし」
「何もしなくていいですから」
「それは、やっぱやらして欲しいっつうかさ」
「だったら、えっと、仏壇用のロウソク」
仏壇用のロウソク？
「何かまあなんでも、ロウソクフーッだけでいいですから」
ロウソクフーッ　愛里言ってたよな　ショーさんとき　誕生日はロウソクフーッて
「二段のこーんな大きいケーキとかそういうの絶対イヤ」
「そんなん買わねえよ」
「ジビエコースとか」
「愛里が食いてえっつうんなら」
「食べたいわけないでしょ」
「ハハハ、そんなんしねえよ、俺、そういうのできねえからさ」
「安心しました」
「安心してくだせえ」
「それじゃ・・　あの、また」
「愛里」
抱きよせて　そんで　メッチャ好きで　メッチャ・・　あ、ヤベ
くちびる　そっと離して
「好きだよ」
愛里が俺の顔見て
「席が隣りじゃなくてよかったです」

「へ？」
「隣りだったら、あなた、私のこと心配ばかりするから」
え・・
「それじゃ、また」
「え、あ、おう、また」
ドアが閉まって　鍵が閉まった
愛里は　俺のことばっか考えてくれてて
席が隣りじゃねえのがよかったって　それは　俺のこと考えてくれてて
泣きそうだよ　愛里　俺は単純に隣りになりてえってばっかだったのにさ
「愛里！　　好きだーーー！」
「うるさい！」
ドアの向こうから愛里が　うるさいってさ
「愛里、好きだよ」
小せえ声で言って　そんで
家戻ろう

競技とテーマ決め

火曜日の学校内は　運動会一色になってる
午前中テストが返されても　そっちよりみんなの頭は運動会だ
やっぱ二年になると気合の入れ方が違げえな
俺は　出るものに出てがんばるだけだな　あんま興味ねえんだよ
一年ときも　テーマ決めるっつうとき　興味ねえから黙ってて
実行委員がエプロン用意してって言ったとき　思わず「エプロン？」つっちまって
それは　俺ん家にエプロンなんてねえから買うっきゃねえんかなと思っただけで
そんでもなんか知んねえけど　急遽　なんだったけ　あ、法被か法被にしようって
父親が町内会長やってるっつうやつがいて　人数分法被用意できるって
よかったあ　エプロン買わなくて済むってさ
「肉団子美味しい」
俺は愛里とこうやって昼メシ食ってりゃしあわせでさ
「午後から運動会の話し合いですね」
「うん、だな」
「テーマは何にするんでしょう」
「何にするんだろうな」
「あなた全然興味ないですよね」
「え？　　あ、や、俺はそういうの考えんのあんま得意じゃねえからさ」
「私もあまり興味はなくて」
「だよな、テーマなんてなんでもいいよな」
「去年の三年生の風林火山を超えるものなんてないと思う」
「おんなしのやれねえしな」
「個人の種目、何になるんだろう」
「二年生は・・　借り人競争はぜってえあって」
「借り人競争になったらやだなあ、お姉さんみたいにハゲのおっさんだったら」
「どっかにいんじゃねえか？」
「またそんな無責任な、まあ私の個人種目にあなたは責任ないですけど」
「別なのになっかもしんねえしさ」
「二年生は他の個人種目って何でしたっけ？」
「ん・・と、男子は障害走だな」
「あ！　　すっごい障害のやつですよね」
「うん、上から網かぶせられて、そこを抜けたら丸太渡って・・んっと」
「なんかバスケのボールてんてんてんて」

「ドリブル？」
「その先に三年生の男子バスケ部全員が両手広げて、なっかなか通れなくて」
「そんでメッチャ高けえゴールにシュートしてたよな」
「女子は・・　あああ！　　献立レース！」
「ああ！　　カゴ持ってお題見て、野菜んとこ走って　偽物の肉とか魚選んでっつうやつか」
油淋鶏とかカルボナーラとかで　間違ってると戻されてさ　監修があの家庭科の先生だもんな
「あれは・・　ムリ」
「愛里は料理に入ってるものはわかっだろ？　　作るわけじゃねえからさ」
「あ、そうですよね、だったらあれがいいなあ」
いいなあって　可愛いな
「この肉じゃが、ほんのりカレーの香りがして美味しい」
「マジ？」
「はぁぁぁ、しあわせです」
俺もしあわせです
「もう秋ですね」
「だな」
「秋は夕暮れ」
枕草子か　愛里ワールドだ
「でも、私はこういうお昼の秋の空が好きだなあ」
俺は愛里といれればいつでもいいっす
「寒くなったら、どこでお弁当食べますか？」
「どこでもいいよ、ここでもいいけど」
「うぅぅぅって震えながら食べるの？」
「そんでもいいけど」
「だったらいっそお鍋食べたい」
「ここで？」
「ムリだけど」
愛里のためなら　ここにカセットコンロ持ってきて鍋食わせてあげてえよ
「そろそろ戻りましょう」
「おう」
愛里と二人で　教室に戻った

運動会の話し合い
最初の一時間は個人競技のくじ引きとテーマ決め
「まずは男子、前に来てクジ引いてくださーい」
これでいっか
んっと？　　借り人競争か
ハゲのおっさんだったらどうする？　　あ、一年ときの地理の先生・・は転勤したんだった

「森下、なに？」
やきそば班男子２
「借り人競争」
「俺は去年それでさ、振袖着た人って、いないだろ？　　粉の中に顔突っ込んでアメくわえてさ」
そうだった　お題が見っかんねえと粉ん中に顔突っんでアメ探してゴールだった
俺はべつにそれでもいいけどさ　お題見てゲキムズだったら速攻粉んとこに走ろう
「俺は障害物だよ、できるかな」
つかさ　その前にさ
「名前、なんだっけ？」
「俺の？　　冗談だよね？」
「フ、フルネーム聞いてんだよ」
「やっぱりそこくる？　　鈴木・・」
鈴木か
「イチローじゃないんだよな、みんな期待するんだけどさ」
俺は何も期待してねえよ
「虎之助」
「へ？　　と、とらのすけ？」
「名字が平凡だから名前だけでもってうちの親がさ」
「そ、そっか」
ちょっと予想の、なんも予想してなかったけど、そっか
「次は女子、前に来てくださーい」
愛里が立ち上がって前に行った
戻りながら　紙開いて　ちょっと嬉しそうな顔した　献立レースか　よかったな愛里

「それでは、今年のうちのクラスのテーマを決めたいと思いまーす」
何になんのかな　なんでもいいよ俺は　言われたとおりにすっから
「祭りは？」「祭りはダメ」「祭りは飽きた」「祭りはないでしょ」
「戦国時代は？」「去年の三年生のは超えられないよ」「他もやると思う」
みんなすげえな　どんだけ白熱した話し合いしてんだよ　運動会にさ
「源氏物語は？」「あ、いいかも」「古文でもちょうどやるしね」「どうやる？」
「舎人が牛車引いてさ」「牛車の牛は？」「牛いる？」「牛がいなきゃ人力車でしょ」
んな細けえとこまでこだわんのか　牛連れてくんのかよ
「文箱は？」「あ、文箱ならいいかも」「あれなら楽だよな」
「混合リレーのとき、文箱を光源氏から惟光」「そこは女子じゃないと」
「それじゃ、六条御息所から舎人からの女官からの惟光、惟光からの夕顔で光源氏？」
「なんか相関性がバラバラだけど」
「女御からの舎人、女官、舎人、女官で光源氏でいいんじゃない？」
「どの女御？」「六条御息所？」「怖くない？」「紫の上でよくない？」「そうだね」
トップの紫の上とアンカーの光の君以外は名もなき人々になっちまってっけど

「それじゃ、うちのクラスのテーマは源氏物語ということでいいですか？」
みんな拍手してるよ、大半はどうでもいいんだな
「では、10 分休みの後、混合リレー出場者のくじ引きとテーマの細かいことを決めまーす」
「は〜い」「はい」「おう」「オッケ」
愛里が出てった　便所か　俺もシッコしてえ　便所行ってこよう

便所ん中でも運動会の話してるよ
「森下」
「森山」
「二組のテーマは何になった？」
「言えねえよ」
大したもんじゃねえけど　そこはな
「うちのクラスはさ」
顔近づけてくんなよ
「源氏物語、あ、これ言わないでくれる？　　森下にだけ特別だから」
特別っつうかさ　うちのクラスと被ってんだけど
「歌を書いた短冊を届けるっていうね」
「そ、そっか」
「森下は個人競技は何になった？」
「え、借り人競争」
「俺もだよ、よろしくな」
いや、よろしくも何も同じグループかどうかもわかんねえよ
つか　テーマ　四組と丸被りになっけど　いぃんかな　まあどうでもいいけどさ

教室戻ったら　愛里はまだか　なんか騒いでってけど？
「ヤバイ！」「おい、これはまずいよ」
なにがだ？
「四組も源氏物語だってさ！」「七組も！」「え？ 一組もだって」
なんだテーマか
愛里戻ってきた　あああああ　チャイム鳴った
「いったんテーマは白紙に戻しまーす」
戻すんかよ
「先に混合リレー出場者のくじ引きを行って、その後にテーマをもう一度話し合います」
運動会のクラスのテーマでさ、んな顔面蒼白になんなくてもさ
「それでは、まず男子から引いて、せーので開けてください」
せーのっているかな
「マルがついてる人がリレー出場者です」
テキト〜につかんで席着いて
「せーの！」
あ・・　〇ついてる　手ぇあげた

「おおお、森下！」「森下くん？」「森下だ」「森下くんが？」
え、なに？　俺がなに？
「俺も」
志田か
「僕も」
川口・・か
「男子は森下くん、志田くん、川口くんです、次は女子引いてください」
愛里も立って前に行った　愛里とおんなしクラスで運動会できんのだけが嬉しいよ
「あ、私」
俺の隣りの・・　佐藤か
「私も」
廊下側の席の・・　なんつうなま
「ギャーーーーーーーーーーーーッ」
え？ なに?どした？ なんだ？
「イヤーーーーーーーーーーーーッ」
あ、愛里？　どした？　え？　まさか・・
「ムリ！　ムリ、私、ムリ！」
愛里　リレーの・・
「上原さん、これはくじ引きで」
「私、本当に迷惑かけるから、絶対迷惑かけるから、ムリです」
「混合リレーは早く走らないといけないわけじゃなくて」
「ムリーー・・・」
あっ　愛里が泣いちまった　行きてえ　そばに　行きてえ
川口がなんか話しかけてる　クッソーーー　こういうとき隣の席だったらさあっ
「えーーっと、リレー出場の人たち、一回集まって話し合ってくれますか？
　こっちはこっちで、手分けしてテーマのことを話しあうので」
速攻愛里のそばに行った
しゃがんで　愛の手ぇ・・　にぎったら怒るか
「愛里」
愛里が俺を見て
「ムリですムリ、わかってるでしょ、ムリ・・」
「そっか、んっと」
どうすりゃいぃんだ？
「こうなったら」
俺の隣りの佐藤
「上原さんを徹底的に守りかつ楽に走らせるシフトを組もう」
シフト？
「そうだね」
えっと　こっちは廊下側の女子
「W 佐藤がいればなんとかなるんじゃないかなあ」

志田、W 佐藤ってなんだ？
「佐藤ユミさんは中学のとき地区大会で優勝したよね」
「うん、中学のときは陸上部、今はバド部だけど」
「佐藤アヤナさんは中体連に出たんだよな」
「うん、今は弓道部だけど」
「それで？ 志田くんは柔道部だよね」
俺の隣りの佐藤　メッチャテキパキしてんな
「運動部だからいけると思う」
「川口くんは？」
「僕は・・　すごく早いわけじゃないけど、すごく遅くもないよ」
なに基準だよ川口？　　漠然とし過ぎてわかんねえよ
「こうしたら？　　トップは私がやる、最初から引き離す」
「ユミがトップならいける」
よくわかんねえけど
「次は志田くんで、その次がアヤナ、この三人で他の走者を引き離しておいて、
　川口くん・・にも頑張ってもらって」
「うん、全力は尽くすよ」
「そうしたら、上原さん、歩いてもいいくらいになるから」
「え？」
愛里が涙で濡れた顔　やっとあげた
「できれば少しは走って欲しいけどさ　ハハハ」
お　おお　愛里が少し笑顔に　まだ笑顔まではいかねえな
「最後は森下くん、頼むから」
「おう」
つかさ　このリレーってさ　んな本意気で走るやつか？
「バトンは持ちにくいものにして欲しくないよね」
「提灯とか旗とかはやめて欲しいよね、上原さんが持ちやすいのがいいよね」
W 佐藤は　仲がいいのか
「ペンライトはダメかな」
川口？　　まさか、そのペンライトっつうのは・・
「医者が瞳孔見るやつ？　　小さすぎない？」
「瞳孔計じゃくて、K-POP アイドルのライブのペンライト」
「けーぽっぷ？」「ケーポップ？」「川口って K-POP 好きだったのか」
「僕じゃなくて、僕の妹なんだけどね」
川口が携帯出して
「こういうやつ」
「これおもしろいかも、アイドルのペンライトって」
「ただ、ここの丸いところは上原さんにはつかませないように、川口くん」
「うん、精一杯善処するよ」
「川口くん、ちょっとこれ実行委員たちに見せてきていい？」

「いいよ」
佐藤・・　あっちはユミ？　　川口の携帯持って実行委員たちに見せてなんか話してる
つかさ・・　俺がおかしいのか？　　この混合リレーってさ　速さとか関係ねえはずじゃね？
W佐藤がメッチャ本気になっちまって　志田も川口もマジになってて
愛里のためか　愛里を安心させるため　そうだ　それだ　だったら俺も全力で守っからさ
川口のペンライトが　とんでもねえことの引き金になるとは
こんときは知らなかったけどさ

テーマ

愛里はちょっとだけ落ち着いてきて
「愛里」
名前呼んだら　すがるような目で俺のこと見た
「大丈夫だよ、佐藤と佐藤と志田がさメッチャ引き離すっつってんだからさ」
「は・・い」
「川口も・・　なあ？　　がんばるよな川口」
「僕も全力を尽くすよ」
「な？　　そんで愛里はスキップして俺んとこ来ればいいよ」
「スキップ？」
「うん、そしたら、あとは俺に任せろ」
「あなたに」
「俺に任せろ」
えっ　愛里が俺の手ぇつかんだ
「はい」
メッチャ冷たくて汗かいてる
「俺がぜってえなんとかすっから」
「あなたなら・・　そうですよね」
「おう」
「それにさ、このリレーは速さ関係ねえだろ？　　去年の風林火山だって一等じゃなかったろ」
「あ・・　そうでした」
「そんでもあの三年のクラス総合優勝してたじゃん」
「そうですよね」
「どっちかっつうとさ、応援とかテーマ？　　あっち重視だからさ」
「あ、そうだ、そうだった、私、中学のときのトラウマが」
「中学んときとは違げえからさ」
愛里が俺の手ぇにぎったままホッとした顔して
俺の手　にぎってることも気づいてねえな
「川口くーん！　　ちょっとこっち来てー！」
実行委員が川口を呼んでる　なんだ？　　まあいいや
「愛里、献立レースになったんか？」
「そうなんです、よかったあ」
「よかったな」

「ちょっと待って！」
川口？　あんなでけえ声初めて聞いた
「K-POP がテーマはダメだよ」
K-POP がテーマ？
「でもね、他のクラスと絶対被らないと思う」
「被るとか被らないの問題じゃないんだよ」
「だったら何が問題なの？」
「K-POP のファンは適当なことをしたらすごく怒るんだよ、すごく怖いんだよ」
「でもさあ、運動会だから、なんとなくでいいんじゃない？」
「なんとなく！　K-POP ファンの恐ろしさを知らないの？」
川口　このクラスん中で　んなこと知ってるやつは一人もいねえよ
「一点の妥協も許されないんだよ、徹底的じゃないと・・　怖いよ」
それは・・　川口の妹のこと・・だな
「だったらさ、徹底的にやろうよ」
え？
「どうせならさ、ハンパなことじゃなくて、徹底的にやった方がおもしろいよ」
「だよな、このクラス全員の知能と知識と能力すべて使い尽くしてさ」
なんで使い尽くさねえとなんねえんだよ？　冷静になれよ　運動会だぞ？
「そうだよ、その方がやりがいもあるかも」
「そうしよう、テーマは K-POP で、徹底的にやるってことでさ」
「ちょっと待って！　お願いだからちょっと待って」
川口　あのペンライトをバトンにっつったのは川口だぞ　火種は自分だぞ
「許可を、許可を取ってくる」
川口が教室出てった
「許可って K-POP の事務所の？」「事務所の許可がないと運動会でもやっちゃダメなの？」
おそらく　川口の妹のだよ
川口が　ソンビみてえな顔して戻ってきた
「川口くん、許可は下りた？」
「条件があるって」
「条件？　なに？」
「すべて任せること」
「事務所に？」
「僕の妹に」
「え？ あの、なに？　川口くんの妹？　事務所と何か関係があるの？」
「K-POP ファンの・・　代表と言っても過言ではない」
過言だよ
「つまり・・　川口の妹がすべて考えるってこと？」
「うん・・　衣装から応援席のセット、応援タイムもすべて」
「逆にありがたいよ、なあ」「うん、私たちは全然知らないから」

全然知らねえでなんでやろうとしたんだよ
「それじゃ、ちょっと連絡してくる」
「もうここでやっていいよ」「そうだよ、手っ取り早いよ」
「それなら・・　やらせてもらうよ」
川口が無表情で打ち込んで
ピコンピコンピコンピコンピコンピコンピコンピコンピコン
川口の妹　すげえな　いっつもこんなカンジで川口にアイス買わせてんだろうな
「読むよ、リレーの衣装はソリクンの赤の衣装」
「そり君て誰？」
「人じゃないよ、曲、そういう曲があるらしい」
「その衣装はどうすればいい？」
「ソリクンの衣装は妹のペン仲間が持ってるから借りるって」
「ぺん？　ぺんってなに？」
「あとで説明するから、先に進ませてくれないかな」
川口メッチャ追い詰められた顔になってっけど
「応援タイムは、リレーの 6 人に 2 人加えて計 8 人でダンス」
「えっ？」
愛里？　立ち上がった
「ダンスはダメ！」
「でも妹がね」
「マイムマイムも踊れない人がいるの！」
誰だそれ？
「マイムマイム踊れない人はいないだろ」「いないわよ」
「いるの！　壊滅的にダンスができない人がいるの！」
「誰のこと？」
「え・・　あの・・」
愛里、知ってんならハッキリ言ってやれよ
「上原さん、この条件をのまないと、K-POP は絶対にやれないんだよ」
「え・・えぇぇぇ」
愛里　椅子にヘナ〜ッと座り込んじまったけどさ
「愛里、んな心配すんなよ、みんななんとかするって」
愛里がゆ〜っくり俺のこと　すっげえ目で見たけど　なに？
「あとは、えっとね」
「川口くん、運動会実行委員の LINE に川口くんの妹も入ってくれると助かるんだけど」
「ちょっと待って、聞いてみる」
川口がまたなんか打ちこんで
ピコンピコンピコン
「入るって、僕も入ることが・・条件だけど」
「もちろん、川口くん入ってくれないと」
川口　なんかすげえことに巻き込まれてってんな

「ノンキに眺めてますけど」
「え？　愛里、なに？」
「あなた、K-POP のダンスを踊るんですよ」
「だよな、見たことねえからさ、どうなんのかな」
「どうなるのかな？　私には破滅しか見えないんですけど」
「愛里、心配すんなって」
「心配とかそういう可愛いレベルじゃないんですよ、わかってます？」
「愛里、俺に任せろ」
「何をっ？」
「愛里は心配すんなって」
「だからーーっ」
愛里がすげえ目ぇひん剥いて俺のこと見て　そんで
「もういいです」
ため息ついたけどさ
「なんとかなるって」
「ならないと思いますけど、もういいです」
「愛里、なんか怒ってんの？」
「怒ってるんじゃなくて、事の重大さをあなたがわかっていなさ過ぎて」
「K-POP だろ？　俺も見たことねえからさ、そんでも川口がなんとかすんじゃね？」
「川口くんでも川口くんの妹でも、なんとかできないことがあるの！」
「なに？」
「もぉぉおお、なんで自覚ないかなあっ」
「なんの？」
「それじゃ言いますけど」
「おう」
「あなた、壊滅的に踊れないでしょ」
「踊れるよ」
「マイムマイムも踊れないでしょ、本番で外されたんでしょ」
「あれは次のリレーのアンカーだからっつってさ」
「それはっ　あなたがあまりに踊れないから外さないとどうにもできなくて、
　でもそれをそのまま言ったらあなたが傷つくから先生がヘッタなウソついただけです！」
「え、マジ？」
「今？　今やっとわかったの？　今の私の説明でやっと？」
「マジかあ」
「あ、ごめんなさい、でも」
「そんでも俺、リレーに出っから踊らねえとじゃね？」
「だから・・それを・・私はずっと・・」
愛里が泣きそうになってんだけど
「練習するっきゃねえな」

「マイムマイムも練習したんですよね？」
「した」
「それでもできなかったんでしょ？」
「できなかったんかなあ」
「できなかったの！　だから外されたの！」
「そんじゃどうすりゃいぃんだ？」
「どうしよぉぉぉ」
だよなあ
「とうちゃんと踊ったことねえもんな」
「おとうさん？」
「俺、小せえ頃とうちゃんとばっか遊んでてさ」
「おとうさんと・・ばかり」
「とうちゃんの真似ばっかして、とうちゃん右脚曲がんねえけどさ、左足軸にしてさ」
「おとうさんの・・　真似？」
んっと　見せるっきゃねえか
「こうやって、蹴り、すげえんだよ、あと、戦闘シーンっつうの？　こうやって突いたりさ」
愛里が口開けて見てる
「あ、ごめん、話ズレちまった」
「あの、そういうことはできるんですか？」
「うん、いっつもとうちゃんと二人でやってさ」
「インプリンティング・・」
「刷り込み？　生物がどした？」
「え・・　ちょっと」
川口と実行委員たちまだしゃべってるよ
俺たちはどうすりゃいぃんだ？
「誰がどのメンバーのパートをやるのかも妹が決めるって」
誰がどのメンバーつったって、K-POP はみんなおんなし顔に見えっからわかんねえよ
「それじゃ写真撮った方がいいよね」「全身？　顔？」
なんかすげえことになってっけどさ
「衣装は今週中になんとかするって」
「やったな」「よかった」
「振り付けは１分以内になるように妹が編集するって」
「川口くんの妹最高！」「いっそ来てくれないかな」
来てくれねえかなってさ
「それは・・　中学生だから」
中学生頼みでさ
「え？ 今授業中ってこと？」
「今日は・・早く帰ってきてるんだ」
「そうなんだ、よかったあ」

「細かいことはまた妹から送られてくると思うよ」
「わかった、ありがとう」
川口がメッチャ疲れた顔してこっちに来た
川口　俺は　今なんて声をかけていぃんかわかんねえよ
「ごめんね、僕のせいで」
「川口くんのせいじゃないよ」
「逆に？　　テーマ決まってよかったよね」
なんの逆だよ　佐藤２
「そうだ、リレーの練習しないとね」
練習？　　愛里もギョッとした顔してるよ
「練習はいらねえんじゃね？」
「森下くんはそうかもしれないけど、上原さんのためにも練習しないと」
「や、愛里は」
「します」
愛里？
「練習・・　します」
「愛里、マジ？」
「私のせいで迷惑はかけられないので」
「迷惑とかじゃないの、バトンの渡し方とか」
ペンライトか
「なんていうか、団結力を高める？」
なんでそうなるんだよ　んなたいそうなことじゃねえだろ　余興だろ？
「今日はペンライト持ってきてないよね？」
「明日なら」
明日？
「明日は俺ちょっと用があんだよ」
あさっての愛里の巻き寿司の買い出ししねえとさ
「それじゃ、あさってから？」
「あさって？」「あさって？」「あさって？」
川口と志田までなんだよ？
「あさってって上原さんの誕生日だよね」
「え・・　そう・・だけど」
「そうなの？　　お祝いする？」
「あ・・　そういうのは」
「そうだよね、突然お祝いされてもね」
佐藤１　わかってんな
「それじゃ、え、金曜日しかないよね、あと三連休だから」
「一日だけでよくない？」
いいよ、一日だけでさ　やんねえでもいいくれえだよ
「そうだね、上原さんもそれでいい？」

「うん、大丈夫・・だと思う」
もしもんときは俺がいっからさ
つか　もしもんときってなんだよ？
なんか全員並ばせられて　一人一人写真撮ってっけど
なんだ？
運動会だよな　なんでこんな大ごとになってんだ？

インプリンティング

晩メシはアジの塩焼き
「安かったからよ、南蛮漬けも作ろうと思ってよ」
「愛里の分は俺がやるよ、生たまねぎダメだからさ」
「明日の弁当か？」
「うん、あとは・・」
卵焼きと・・　とうちゃんが豚しゃぶサラダ作る豚肉
「とうちゃん、この肉、三枚くれえもらってもいっかな？」
「三枚だけでいぃんか」
「うん、愛里の弁当用だからさ」
これでシソとえのき巻いて焼くか　三個作って半分に切ればいいな
「運動会、ダイチは何やんだ？」
とうちゃん毎年楽しみにしてくれるんだよな
「借り人競争っつうのと男女混合リレー」
「そりゃ楽しみだなあ」
「リレーは愛里も出んだよ」
「そうなんか、そんじゃリレーはすっげえ楽しくなんだろうな」
運動会は俺やねえちゃんよか、いっつもとうちゃんの方がウキウキしてるくれえだな
「なんかさ、踊るらしいんだけどさ」
「おどる？」
「俺、とうちゃんと踊ったことねえじゃん？」
「俺は・・　おどったことねえかんな」
「そんでもさ、ヒーローごっこはいっつもやってたよな」
「やったな、ダイチはかっけえんだよなあ」
「とうちゃんの真似してただけだよ」
「俺は施設で見たテレビの真似してただけでよ」
「全部憶えてんだよな？」
「しょっちゅうは見れねえからよ、見れっときジーッと見て憶えてよ、一人でやってたな」
「マジで夢ん中でヒーローやってたんだろ？」
「浮浪者んときよ、天気いいから野っ原で寝ててよ、ヒーローになっててよ、
　そんでヒーローってクルッと地面の上で回んだろ？」
俺は　この話聞くのが好きで　何回も何回も聞いてる
「そしたらよ、イデッてよ、野っ原の石に頭ぶつけててよ、あ、夢かってよ」
「寝ながら転がってたっつうことだよな」

「バカだよなあ」
「俺とやってたときはさ、とうちゃん悪者の役やるとすぐ倒れてさ」
「ダイチが強えからだよ」
「ちげえだろ、俺はエイッて一回やっただけで、うわあっつってさ」
とうちゃんが嬉しそうに笑いながらアジ揚げてる
「だから俺が悪者役になるってやるとさ、とうちゃんヒーローなのに倒れてさ」
「ダイチが強えからよ」
「とうちゃんが俺に勝たせてくれようとしたんだろ」
「そんでもよ、二人でヒーローの仲間になってよ、悪者がいるつもりでよ」
「うん、とうちゃんが、ダイチはあそこの悪者やっつけろよ、とうちゃんはこっちだって、
　どこ？ どこ？ っつうと、よっく見ろよ、あそこにいんだろ？ ってさ」
とうちゃんがメッチャリアルに言うから、なんかマジでいる気になってさ
「ダイチと一緒に戦うと楽しかったな」
「楽しかったよな」
「またやりてえな」
「そんでも俺、もう高校生だからさ、とうちゃんと二人で外であれやってたらさ、
　ケンカしてるかアタマおかしいと思われちまうよ」
「そっか、そんじゃ、いつかダイチの息子とよ」
「とうちゃ〜ん、気ぃ早えよぉ、俺まだ高校生だよぉ、息子ってさあ」
そんでも　もし息子できて　その息子がとうちゃんと・・
「とうちゃん、俺の息子、とうちゃんとヒーローごっこしたらぜってえ喜ぶよ」
「どうしてこうもくだらない話を延々とできるのかしら」
「あっ　かあちゃん？」
「美里、おかえり」
「かあちゃんいつ帰ってきたんだよ？」
「あんたたちが架空の世界で悪者と戦っていたときよ」
聞いてたんかよ
「愛里さん、あきれるでしょ？」
「えっ　愛里？」
かあちゃんの後ろにいた
「愛里、気ぃつかなくてごめんな」
「え、いえ、あまりに楽しそうで声をかけづらくて」
「かけてくれよ、んなさあ」
「愛里さん、リビングに行きましょう」
「はい」
あの頃　愛里がいたらさ　俺はお姫様を守るヒーローになってさ
愛里にかっけえとこ見せてさあ
「ダイチ、肉、もういぃんじゃねえか？」
「あ、ヤベ」
豚しゃぶの肉　ガッチガチにするとこだった

「テーマが K-POP なの？」
「そうするみたいです」
「私は K-POP は全然わからないわ、J-POP もわからない、若い頃は洋楽ばかりだったから」
かあちゃんがバカみてえに繰り返し流してたから
俺もねえちゃんも世代じゃねえのに全部憶えちまってさ
自分の世代の音楽は全然わかんねえよ　つか　むしろ無音がいいよ
「私も全然興味ないんですけど、でも、実行委員と川口くんがやるみたいなので」
「川口くん？　　そういうのに興味あるの？」
「川口くんの妹が好きなんだそうです」
「そうなの、まあね、興味がある人がいればなんとかなるんじゃない？」
「ただ・・　問題があって」
「問題って？」
愛里が　え？　　俺のことジッと見てっけど？
「愛里、なに？」
あ　視線外した
「インプリンティング頼みです」
「インプリンティングって、ヒナが最初に見た動くものを親と思う、あれ？」
「その親の真似をして鳴き方や泳ぎ方を習得するって、生物で」
愛里の生物の理解力すげえよ　どんどん理解できてってるよ
「それが、何と関係してくるの？」
「まだ、未知数で、果たしてどうなるやらなので」
「なんとな〜く、何をしようとしているのかわかる気がするわ」
かあちゃんわかんの？　　俺は全然わかんねえよ
「そうです、あの、それに賭けてみるしかないかなって」
「そう、愛里さんも大変だと思うけど、よろしくね」
何をよろしくなんだ？
「はい、なんとか・・　がんばります」
何をがんばるんだ？　　リレーか？　　リレーはがんばんなくていいよ愛里

愛里の部屋の玄関
あさってが近づいてて　俺は少しずつドキドキしてて
んな大したことするわけじゃねえけど　なんとなくさ　やっぱ愛里の誕生日は俺にとって
「川口くんが」
ハ？　　川口？
「正確には川口くんの妹が」
運動会の話か
「配役を決定したそうです」
「配役？　　劇やるわけじゃねえよな？」

「メンバーが 8 人いるので、誰がどのメンバーの役をするかっていう」
「リレーの 6 人と、あと二人はまだだよな」
「決まったそうです」
「マジか」
「一人は、あなたの隣りの席の・・　あの男子」
「隣りの席？　　あ、虎之助？」
「えっ　虎之助っていうの？」
「うん、鈴木だから名前だけでもって親がそうつけたって」
「その人が、中学のとき新体操部だったそうで」
「マジ？」
「ずっと補欠だったそうですけど」
「そっか」
「その経歴と川口くんが撮った写真で妹さんが決めたって」
なんかマジなオーディションみてえになってんな
「その、トラ？」
「虎之助」
「ちょっと待って」
愛里が携帯見て
「まずこれが、リレーとダンスの衣装だそうです」
うわっ　真っ赤じゃん　真ん中の金髪は　女の子か
「それで、これがスンモ・・だそうです、メガネかけた素のスンモに似てる」
なんの話だ？　　スンモってなんだ？　　SUUMO か？
「もう一人は実行委員の女子、小学生のときバレエを習ってて、ハニだそうで」
愛里がずーーっと携帯見ながらしゃべってる
「佐藤さんが、あ、トップを走る佐藤さん、ジニで、これです」
なに言えばいぃんだ？　　んっと
「髪留めしてっから、走りやすいんじゃねえの？」
「髪留めって・・　いいけど、もう一人の佐藤さんがイエナで、これだそうです」
「んっと・・　あ、なんか、なんつうか、オカッパみてえなのが」
「無理にコメントしなくていいです」
「あ、うん」
「志田くんが、いっそ、あえて、ビニって、これ」
「あ、そっか」
「川口くんの妹はビニペンだから、ハンパな人にやられたら死にたくなるから、あえて？」
どういう意味だ？　　なにしゃべってんのか全然わかんねえんだけど
「伝わってます？」
「え？ あ、うん」
「私は意味がまったくわからないで読んでるだけなので」
「なんだ、愛里もわかんねえんか」
「伝わってなかったんですね」

「あ・・　ごめん」
「いいです、えっと、川口くんはチャニ、おにいちゃまだからって」
「おにいちゃまだから？」
「グループの最年長でリーダーらしいです」
「ああ、そういう・・」
「私は、ピリちゃんだそうで、これです」
ああ！　金髪の女の子
「ピッタリじゃん」
「そうでしょうか」
「女の子だしさ」
「この人、男です」
「えっ？」
「男性８人のグループだから」
「マジ？　これが男？　どう見ても・・」
「そこはいいんです、そして・・　あなたは・・　イ・リノ」
「いりの？」
「日本人ファンの中では入野と呼ばれてるみたいです、入口の入りに野原の野」
入野さん　日本人がいんのか
「この人です」
日本人みたえな顔・・　や、よくわかんねえけど　あれ？
「化粧してね？」
「してます、全員」
「けっ化粧すんの？」
「それは聞いてないけど」
「化粧はさあ」
「私に言われても」
「あ、だよな、うん」
化粧は勘弁してくれよ　ぜってえイヤだよ
「川口くんの妹ってすごいなって思ったのは、私のは、髪が長いからだと思うけど、
　な～んとなくそれぞれ雰囲気が似てるんです」
「そう・・なんか」
「ただ・・　あなたのイ・リノ」
「入野さん？」
「ダンスラチャだそうです」
「らちゃ？　なんだそれ？」
「ダンス担当、ダンスが激しく上手」
「へえ、入野さんはすげえ人なんだな」
「またハードルが上がっちゃって、もう」
「ハードル？　なんの？」
「あなたに言ったってどうにもならないから」

「なんだよ、言ってくれよ」
愛里が俺の顔ジーーッと見てっけど　なんか疲れた顔してねえか？
「愛里、大丈夫か？」
「大丈夫から程遠い」
「えっ　早く寝た方がいんじゃね、つか、寝ろよ」
「そういう意味じゃない」
「どういう意味？」
愛里が　ハァァッて　ため息　やっぱ疲れてんだろ？
「明日の帰りの学活で、舞台装置の説明があるそうです」
「舞台装置？」
「応援席の飾りつけ、でも川口くんが舞台装置って書いてたから」
「そんなん、あれだろ？　　後ろのボードになんか貼っけりゃいんだろ？」
愛里が恐怖みてえな顔になって
「そんなカンジじゃないみたいでぇぇ」
「俺が一年のときは、なんだっけな、あ、紅白の幕貼ってただけでさ」
「私のクラスも野菜とかのヘッタクソな絵を大きな模造紙に描いたのを貼ってただけです」
「そういうんでいんじゃね？」
「それを決めるのは、川口くんの妹！」
「あ・・　そっか」
すべて任せるが条件だったんだ
「なんでこんなことになっちゃったんだろう」
「だな、そんでも、そうするって決めたのは俺たちだからさ」
「そういうところは冷静かつ正確な判断ができるんですね」
「そういうところ？　　他は？」
「衣装は」
「愛里、俺、他は冷静じゃねえの？」
「衣装は金曜日に持ってくるそうです」
「え、あ、そっか」
「以上、川口くんがあなたに伝えて欲しいってことでした」
「そっか、え？　　川口と俺、LINE つながってるよな」
「そうですけど」
「なんで俺に直接伝えねえんだよ？」
「あなたに言ってもわからないからでしょ、私もほぼほぼわかってないけど」
「そんでもいちおう俺にも伝えてくんねえとさ」
「そんなことを気にしてる場合じゃないんですよ」
「そんじゃどんな場合？」
「いえ、あの・・　一分に収めたダンス動画は金曜日までにはできるそうです」
「そっか」
「えっと・・　それぞれの・・　チッケム？　　なんかわかんないけど、それも送られてく

るって」
「んっと、とにかく、その動画見て練習すりゃいんだよな？」
「すりゃいいって」
「え？　ちげえの？」
「そんな邪気のない目で見ないで」
「あ？ え？ どした？」
「そう・・ですね、それぞれの・・　練習ですね」
「俺、がんばっからさ」
「え？」
「愛里、俺の踊りの心配してんだろ？　だから、俺、がんばって踊れるようにすっから」
「フ・・フェ・・」
「愛里、なんで泣いてんの？」
「なんか・・　母親の気持ちみたいな」
「は、母親？」
「バカな子ほど可愛いみたいな」
「バカ？」
「なんかわかんないけど、はぁぁ、がんばってください」
「おう」
「それじゃ、また」
「愛里」
抱きしめて
「好きだよ」
愛里が　俺の身体に腕まわした
「あなたは・・　なんでも完璧にできるのに」
「なんでもじゃねえよ」
「そうなんです、よりにもよってってところで」
「ごめんな」
「え・・」
「愛里に心配かけてさ」
「それは・・」
「そんでもさ」
愛里の顔　覗き込んで
「俺はとうちゃんの子だからさ、ぜってえなんとかなるって気ぃすんだよ」
「私も・・　そこに賭けてます」
「そっか」
「インプリンティング作戦です」
なんかよくわかんねえけど
「そっか」
愛里のくちびるに　軽く　そんで
「ヒヨコはがんばりますっ」

「がんばってぇぇぇ」
「泣きべそかくなよ」
「だってぇぇ」
「愛里、俺を信じてくれよ」
「正直言っていいですか？」
「いいよ、なに？」
「あなたのことは、今のところ信じられないけど」
「へ？」
「おとうさんの未知なる力がどうにかしてくれそうで」
とうちゃん？
「それでダメなら・・　この世の中の誰もどうにもできないと思う」
そんな・・か　俺
「でも、ダメでも、あなたはあなただから」
「そ・・・っか」
「私は好きです」
「えっ　愛里」
「そこは変わらないので」
「だったら俺は」
「でも、やることはいちおうやってみてください」
「あ、おう」
「それじゃ、また」
「愛里、またな」
ドアが閉まって　鍵が閉まった
ん・・・っと　運動会だよな？　　余興みてえなさ
まあ　とにかく　家戻ろう

川口の妹

いよいよ 12 日　本当のいよいよは明日だけどさ
「ダイチ」
「とうちゃん、どした？」
「アジの南蛮漬け、ダイチのは俺が作ったの詰めてけよ」
「え？　そんでも俺の分も作ったからさ」
「ダイチは玉ねぎ入ってんのが好きだろ」
「そうだけど、そしたらこれ余っちまうけど」
「俺が昼に食っていっか？」
「とうちゃんが？　おう、食ってくれよ」
とうちゃんが嬉しそうな顔で俺の弁当箱にとうちゃんが作ったアジの南蛮漬け入れてくれた
そうだ、とうちゃんに言っとかねえと
「とうちゃん、明日のかあちゃんの弁当、俺に作らせてくんねえかな」
「美里の？」
「明日かあちゃんの誕生日じゃん」
とうちゃんの誕生日でもあってさ
「そっか、美里喜ぶだろうな、ダイチに作ってもらうなんてよ」
それは・・　わかんねえけど　とうちゃんの分も作るんだよ
「そんでさ、明日の朝は、弁当作ってる間、とうちゃんキッチンに入らねえでくれっかな」
「なんだ？　とうちゃんにも秘密か？」
「うん、秘密」
「ダイチはなんかおもしれえこと考えてんだろうな」
「んな、おもしろくはねえと思うけどさ」
「そんじゃ、明日の朝のダイチの握りメシはどうすんだ？」
「明日はいいよ」
「そっか、そんじゃ」
とうちゃんが握りメシ作って　え　ラップに包んだ　なんで？
「これは明日の分で」
明日の分？
「こっちが」
とうちゃんがまた握りメシ作って
「ダイチ、食ってけ」
「うん、ありがとう」

「こっちは冷蔵庫に入れとくからよ、明日の朝チンしてよ」
「とうちゃん・・　これは・・　持ってく」
「ダイチは弁当あんだろ」
「両方食う、明日は俺の握りメシ分の白メシ残しとくから、明日握ってくれよ」
「そっか？　そんじゃそうすっか」
「やっぱさ、俺は毎朝とうちゃんが握ってくれた握りメシ食わねえと力出ねえよ」
「そっか？」
「うん」
マジでさ
「そんじゃ、愛里迎えに行ってそのまんま行くよ」
「ダイチ、いってらっしゃい」
「とうちゃん、いってきます」
愛里の部屋に走った

学校までの道
16 歳の愛里と通う最後の日か　明日っから愛里は 17 歳で　え？　俺、年下になる？
や、関係ねえよ、同学年なんだからさ
「川口くん」
また川口かよ
「なんかおかしいです」
「そっか？」
「ゆうべもあれから LINE で画像とかリンクとかいっぱい送られてきて」
「妹にやらされてんじゃねえの？」
ねえちゃんも俺になら　容赦なくやらせっだろうな
「追い詰められ感がすごくて」
「だから妹にさ」
「それだけじゃない気がして」
「そっかな」
なんで朝から川口の話しながら歩かなきゃなんねえんだよ
「あなたから聞いてみてくれませんか？」
「え、俺？」
「私には言わないと思うから」
「聞くって何聞けばいぃんだよ？」
「どうしちゃったのか」
「なんかあったとしてもさ、俺には言わねえだろ」
「なんで？」
「LINE も送ってこねえしさ」
「川口くん、あなたのこと尊敬してるから」
「ハ？」
「雑多な情報は流さないようにしてるんだと思う」

「雑多な情報も流せねえ俺に話すと思わねえけど」
「流してもわからないっていうのもあると思うけど」
「だったら余計に言わねえよ、わかんねえ俺になんかさ」
「なんだか、いつものあなたらしくない」
「え、いつもの俺らしくねえってなに？」
「いつもなら、まわりの人のこともものすごく心配するのに」
「や、そんでも、何を心配すりゃいぃんかさ」
「もういいです、私が聞きます」
愛里がつないでた手ぇパッと離して　スタスタ早歩きして
「愛里、聞く、俺が聞く」
「何を聞いていいのかわからないのに？」
「や、んと、とにかく、なんかあったんじゃねえかって聞くから」
全然こっち見てくんねえし止まってくんねえ
「愛里、ごめん、マジ、ちゃんと聞く、川口に聞く」
「もしかしたら・・」
あ　止まった
「私たちが、川口くんに全部背負わせちゃってるんじゃないかなって」
「まあ、だよな、なんか川口頼みっつうか」
「川口くん、妹の負担を軽くするために頑張っちゃってるのかなって」
そっか　だよな　そうかもしんねえな
「俺、マジで聞く、そんで、もうちっと川口に負担になんねえようにさ」
「ですよね？」
「うん」
あっ　愛里が　俺の手　にぎった
「やっぱりあなたに話してよかった」
「あ、おう、話してもらって、よかった」
「あ、校門」
サッと手ぇ離した　その辺は　あれなんだな　なんつうか　約束だもんな

教室入ったら　川口がいた
「川口」
「森下、おはよう」
「あ、おはよっす、あのさ」
「森下、これ」
なんだ？　　ファイル？
「森下がやる人物の人となりとその他の情報、妹から」
人となり？
「上原さんはこれ」
「あ・・」
愛里が　チラッと俺の顔見てから

「うん、ありがとう」
「川口、あのさ」
「あ、ごめん、佐藤さんに渡さないと」
ファイル持って　廊下側の佐藤んところに行っちまった
人となりってさ　運動会の余興だよな　劇じゃねえよな　劇でもここまでさ
愛里と目が合った
わかった　ぜってえ聞いてみっから
愛里がうんうんて
やっぱ川口　なんかおかしいな

10 分休みんときに声かけようと思ったら　実行委員たちとしゃべってて
昼休みか　しゃあねえよな　やっぱなんかヘンだもんな

昼休みになった　速攻で川口んとこに行った
「川口、話があんだけど」
「なに？」
「私、先に行ってます」
「おう」
愛里、俺にまかせろ
「川口、なんかさ、追い詰められてねえか？」
「何に？」
「ただの運動会の余興にさ、人となりのファイル作ったりさ」
川口が俺のこと見た・・けど　ぜっんぜん表情からはわかんねえ
「ある人にとっては」
「ある人？」
「ただのじゃないこともあるんだよ」
「誰だよ？」
「僕、学食行かないと」
「川口、話そらすなよ」
「そらしてるんじゃなくて、本当に学食行かないと混んじゃって」
「俺の弁当食わせっから」
「え？　　いいの？」
いいのって　けっこうあっさり
「おう、一緒に、んっと、中庭来いよ」
「うん」
え　メッチャあっさり　まあいっか　いぃんだよ・・な

川口が　なぜかっ　俺と愛里の間に座って
「森下の弁当すごいね」
俺の弁当の中見て　マジで感心してっけど

「これは・・　南蛮漬け？」
「おう」
「森下が作ったの？」
「俺のはとうちゃんだよ、愛里のは俺が作った」
「え？　そうなんですか？」
愛里　今は南蛮漬けを誰が作ったかの問題じゃなくてさ
「何が違うの？」
そこじゃなくてさ
「川口、あ！　愛里、俺の南蛮漬けは食っちゃダメだ」
「なんで？」
「生たまねぎ入ってっから」
「そうだったの？　あぶなかった」
「上原さん、たまねぎダメなの？」
「火が通ってたら食べられるんだけど、生のだけはダメ」
今　玉ねぎの話じゃねえよな
「森下の昼食はどうするの？」
「俺は・・」
あ！　とうちゃんの握りメシ
「これがあっから」
「足りる？」
「足りる」
「なんかありがとう、お弁当食べさせてもらっちゃって」
「や、それはいいけどさ」
「森下、すごく美味しいよ」
「そっか、とうちゃんは料理上手えんだよ」
その話じゃなくてさ
「この・・　エノキとシソを豚肉で巻いてるのもお父さん？」
「それは俺が作った」
「森下、料理すごく上手だね、美味しいよ」
「そっか」
なんだ？　この昼食パーティみてえなカンジ？　ちげえだろ
全部食うまで待つっきゃねえか　だな　なんか愛里と美味え美味え言い合ってっからさ
食った
「ごちそうさま、森下って本当に料理が上手だね」
「でしょ？」
「森下と結婚したらしあわせだろうね」
「川口くん結婚したくなっちゃった？」
愛里、俺は川口とは結婚しねえよ　つか　や、それじゃねえだろ
「僕のこと心配してくれてるんだよね」
「え？」

急にくるか？
「僕の妹ね、小学 5 年から不登校になっちゃっててさ」
「えっ？」「え？」
「4 年生の後半からよく学校休むようになって、いじめられてたみたいでね」
小学校でイジメ・・
「うちの親は、ムリして行かなくてもいいってスタンスだからよかったんだけど」
なんだよそれ　イジメってさ
「ずっと暗くてさ、部屋の中で泣いてたりしてたんだけどね」
部屋ん中で一人で泣いてるって・・
「動画サイトでたまたま K-POP の動画を見てハマッちゃって」
それか
「SNS で同じペン、あ、ペンってファンっていう意味なんだって」
「そ・・っか」
「同じグループのファンとやり取りするようになって、それから少し明るくなってきて、
　去年、SNS で知り合った大学生のお姉さんがライブに誘ってくれて、
　不登校になってから初めて外に出てね、うちの母親なんて泣いて喜んでさ」
そりゃ・・そうだよ　よかったな　誘ってもらってさ
「それから本当に明るくなってきて、来年アメリカンスクール受けたいって言いだしてね、
　僕が勉強教えてるんだけど、勉強のときだけは僕のいうこと聞いてくれるんだよ」
「そ・・っか」
ヤベ　声がちっと涙声になっちまってる
愛里は　涙流しながら川口のこと見てて
「妹にとっては、あの K-POP グループは特別な存在だからさ、
　僕がふと思いついたペンライトをバトンにっていうことから」
それで妹の許可取るっつったんか
「そしたらね、妹が張り切っちゃって、あんなに張り切ってる妹は初めて見るからさ、
　なんか、クラスのことなのに、私物化してるみたいで申し訳ないんだけど」
「申し訳なくなんかねえよ！」
「森下？」
「川口の妹のおかげで、うちのクラスは助かってんだよ、ありがてえよ」
「そんなふうに言ってもらうと嬉しいけど」
「マジでさ、あんなファイルまで作ってくれてさ、俺はなんもわかんねえから、
　メッチャありがてえよ、配役までさ、そんなんうちのクラスの誰もできねえよ」
「森下の写真見たとき、僕の妹大興奮してたよ、踊る彫刻！ って」
「彫刻は・・　動けねえんじゃ・・ね？」
「イ・リノはそう言われてるんだってさ」
「そう・・なんか」
「僕、ちょっと後ろめたかったんだよ、自分の妹のためにみたいなことしてるんじゃないかって」

「そんでいいだろ、そんで川口の妹がちっとでも楽しくなるんなら最高だろ」
「でもやっぱりクラスのことだから」
「川口の妹がいなかったら、あちこちのクラスと被りまくってる源氏物語だぞ」
「そうだけどさ」
「牛車っつって牛の話してたんだぞ」
「私も・・　そう思う、川口くんの妹が、えっと、名前なんていうの？」
「萌」
「モエちゃん？　　モエちゃんのおかげで、うちのクラス、希望が見えてきたと思う」
愛里　いいこと言うなあ
「希望は大げさだと思うけどさ」
「大げさじゃねえよ、みんな、なんかやる気出てきててさ、なあ愛里」
「はい、私も、あの、ピリちゃんがんばるから」
「上原さんの写真見たときも、ピリちゃんはこの人しかいないって大喜びしてたよ」
「あの金髪の女の子みてえな人だろ？」
「うん、すごくきれいで男とは思えないんだけど、中身はちょっと天然らしいよ」
え・・　ちっと・・　愛里に似てねえか？
「天然のところは違うけど、私、がんばるから」
違ってはいねえ・・けどさ
「帰りの学活の後、装置の話をしたいんだけどいいかな？」
帰りの学活の後？　　それは・・
「おう、全然いいよ、つか装置決めねえとさ」
「私も何かできることがあったらやるから、何ができるかわかんないけど」
「ありがとう」
川口がニッコリして
「森下と上原さんに聞いてもらってよかったよ、気持ちが楽になった」
「そっか、なんつうか、そういうことはさ、もっと早く言えよ」
「言ってもよかったのかな」
「ったりめえだろ、なんつうか、あれだ、友だちなんだからさ」
「お弁当までご馳走になって、嬉しかったよ」
「おう、また、いつか食わせっからさ、あ・・　んと、明日はちっと・・だけどさ」
「わかってるよ」
川口がニッコリして　立ち上がって
「それじゃ僕は先に戻るね」
「おう」「うん」
川口が校舎ん中に入ってって
愛里と顔見合わせたら
「あなたって」
「ん？ なに？」
「すごく・・」
「愛里？　　どした？　　俺、なんかした？」

「お弁当を食べさせてあげるなんて・・」
愛里が涙ぬぐって
「そんなこと、ふつう思いつかない」
「や、ただの流れでさ」
「流れかなとは思ったけど」
思ったんかよ
「でも、ちゃんと自分の分のおむすびまで持ってたから」
「今日はたまたま持ってきてただけでさ」
明日の分でさ　言ってみれば愛里のおかげでさ
「それでも、あなたがおむすび持ってたから、川口くん気楽に食べれて」
だとしたら・・
「とうちゃんのおかげだよ」
「奇跡の父子です」
「なんだよそれ」
愛里の手ぇにぎったら
「がんばりましょう、川口くんの妹のためにも」
「おう、がんばんねえとな」
どうがんばればいぃんか　今はわかんねえけどさ
そんでもさ　小学校でイジメなんてさ　ぜってえ許せねえ
ぜってえ　川口の妹が喜ぶようにしてえよ　マジでさ

ぶちかます

帰りの学活が終わって　担任が教室出ていった
川口が立ち上がった
「この後、装置の話し合いしたいから、ちょっと残ってくれる？」
「装置？」「なに？」
実行委員の女子が
「クラス席の飾りつけを決めたいから話し合いをしたいの」
「俺は塾があるから」「私も塾」「僕はカテキョが来るからさ」
「それでも、早めに話し合いをした方が準備ができるでしょ」
「ちょっとやり過ぎじゃないかな」「ただの運動会なんだからさ」「そこまではねえ」
それは・・　俺もそう思ってた　あの話聞くまでは
「うちの運動会は遊びみたいなものなんだからさ」「わざわざ放課後使う？」
「なんかちょっとついていけないよな」「うん、実行委員だけでやればよくない？」
川口が下向いてて　実行委員たちも困った顔してて
「急に言われてもこっちも予定があるから」「うちの塾は小テストだし」
俺は・・　なんか　なんつうか
バーーーンて机叩いてた　立ち上がってた
「ちょーーっと待て！」
みんながフリーズして俺のこと見てっけど
「俺たちはなぜこの高校に通ってんだ？」
みんなが顔見合わせてっけど
「工業高校や商業高校や他の高校じゃなくて、この進学高校に」
意味わかんねえみてえな顔してっけどっ
「なぜ塾やカテキョ使ってんだ？　いい大学入るためか？　いい大学入ってどうすんだ？
　一流企業に就職するためか？　医者や弁護士や官僚や政治家、どっかの社長になるためか？」
そうかもしんねえし　まだわかんねえかもしんねえけどさ
「それはなぜだ？　金儲けしてえからか？　名誉が欲しいからか？　親の跡継ぎてえからか？
　それはそれでいい、大いにいいことだ、でもな」
メッチャ熱くなってんのはわかってけど
「そんだけのために、おまえらの優秀な知能、膨大な知識と能力を使うのはもったいねえんだよ」

「え？」「え・・」「え？」
「昨日、クラスのテーマ決めっとき、源氏物語が出たよな」
「え・・うん」「うん、でもあれは・・」「あれは・・ね」
「あんとき、おまえら、牛車には牛がいねえととかさ、六条御息所から夕顔に文箱じゃ、
　相関性がバラバラだとかさ、んなことあったりめえみてえに話してたよな」
「それは・・源氏のあれは」「みんなわかって・・」
「あたりめえじゃねえんだよ！　　源氏物語知ってるっつうことはあたりめえじゃねえよ」
「え？」「でも」「有・・名な」
「この世の中には源氏物語なんて知んねえ人もいっぺえいんだよ！
　俺のとうちゃんは知らなかったよ、ねえちゃんが高校生になるまで知らなかったんだよ」
「え・・」「ウソ・・」
「俺のとうちゃんは駅の便所に捨てられてて」
「えっ」「え・・」「う・・そ・・」
「施設で育って、小学校んときは捨てられたっつうのと施設の子っつうんでイジメられて、
　小学校もろくに通えねえで、かあちゃんと出会ったときは、
　ひらがなとカタカナっきゃ、あと自分の名前っきゃ読み書きできなかったんだよ、
　その名前だって、捨てられてた森下駅が名字で、
　名前は役所の人が適当につけた名前なんだよ」
鼻すする音があちこちからすっけど　同情されてえわけじゃねえ
「俺たちはどうだよ？　　親からりっぱな名前もらってさ、教育っつう財産もらってさ、
　それだって俺たちの親が俺たちのために一生懸命稼いでくれてっからでさ、
　それを有効利用しねえともったいねえじゃん、こんなに財産もらってんだからさ」
川口　俺は言うぞ
「川口の妹は小学校んときイジメにあって不登校になってんだよ」
「えっ？」「え？」「そんな・・」
「なのにさ、川口の妹は、俺たちのために一生懸命俺たちのクラスのテーマ考えてくれてさ、
　細けえことまで考えてくれてさ、本当は俺たちがしなきゃなんねえのにさ、
　見返りもなんも考えねえで一生懸命やってくれてんだよ、俺たちのために！
　イジメで不登校になった女の子が、年上の俺たち高校生のために！」
あちこちからすすり泣きが聞こえっけど　泣かせるために言ってんじゃねえ
「どうする？　　俺たち、ハンパなことやって終わんのか？
　それとも、俺たちの知能と知識と能力結集して、その女の子が一生懸命考えくれてっこと、
　形にしてさ、その子が無邪気に喜ぶような、そんくれえなこともできねえんなら、
　俺たちは親からもらった財産ドブに捨てるようなもんだろ、今それができねえなら、
　必死こいて勉強していい大学入っていい職についても、なんもできねえよ！
　今、俺たちにできることがあんだよ！　　まだ高校生の俺たちにもさ」

「森下・・」「森下くん・・」「も・・」
「大丈夫だよ、一回くれえ塾休んでも、カテキョ断っても、んなさ、おまえたちはさ、
　そんくれえでダメになるようなヤツらじゃねえよ！　　自分に自信持て！」
え？　　拍手？　　や、拍手されてえわけじゃ
「やろう！」「うん、やる！」「やるよ、森下！」「やりたい！」
「あの・・」
愛里？
「川口くんの妹はモエちゃんていう名前で、だから、あの・・」
「ねえ、今回のうちらの目標」
俺の隣りの佐藤が　立ち上がった
「モエちゃんにどれだけ “いいね” もらえるか！」
「おお！」「いいね！」「それだ！」「最高！」
みんな・・　川口　あ、俺のこと見てニッコリして・・っけど　鼻水タダ漏れになってる
「んっと、あの、まあ、そういうことで」
そ〜っと座った
「森下」
えっ　虎之助　顔グッチャグチャだぞ
「感動したよ」
「そ・・っか」
その前に顔拭けよ
「俺もスンモがんばるよ」
「おう、がんばれ」
スンモって　どれだ？
「補欠だったけどさ、新体操で踊りはちょっと自信あるから」
「おう」
俺は・・　踊れねえって愛里に言われて　俺は踊りはどうなるんだ？
どうなるんだじゃねえよ、やんねえとさ

塾やカテキョに連絡するやつらと便所行きてえ人んために 10 分休憩して
装置の話し合いが始まった
川口の妹の指定は、テーマカラーは黒と金
そこにダンサー 8 人の赤の衣装でカンペキ・・らしい
「後ろのボードを黒に塗ればいいかな」「あれは使いまわすから塗っちゃいけないんだよ」
女子たちがスマホ見て　すげえな　速攻検索すんだな
「あ！　　これは？　　賃貸用壁紙、シールみたいに貼るだけですぐはがせるって」
「こっちのは？　　ちょっと高いけど夜の摩天楼の壁紙」
「予算いくらだっけ？」
「一クラス、学校から一万円で同窓会から一万円の寄付だから計二万円」
二万？　　運動会に二万も？
「文化祭より多いよね」「うちの高校の同窓会、運動会に力入れてるからさ」

なんか　すげえな
「上原さん、どっちがいいと思う？」
「え？　　わ、私？」
「文化祭のときもセンスあったから」
「え・・　私なら・・　摩天楼が・・」
「それじゃ摩天楼に決定」
愛里が　両手で口押さえてんな　後ろからでもわかる　怖くなってんのか
大丈夫だよ　愛里のセンスは最高だからさ
「あとは・・　飾り付けどうする？」
「金と黒のテープぶら下げるとか？」
女子がまた検索してる
「風船は？　　黒と金の風船ある」「ハートのもあるね」「星もある」
「あの・・」
愛里　なに？
「この、爆発星っていう立体的な星の風船と、黒と金色の丸い風船を・・」
実行委員に見せてる
「こういうカンジで、大きさの違うのをオブシェみたいに立体的に、上から流れるように」
正直俺は何を言ってんのか全然わかんねえけど　ぜってえきれいだよ
「これを摩天楼の壁紙と合わせたらいいかなって」
愛里　いいに決まってんじゃん　ぜってえいいよ　俺が言っても説得力ゼロでもさ
「ステキ！」「いいね」「これはレベチ」
「川口、モエちゃんに送って見せてくれないかな」
「うん、わかった」
ピコンピコン
「読むよ、最高、センスよ、あ、よって良いって意味ね」
「よかったあ、モエちゃん気に入ってくれたね」
「でも、これだけの風船買ったら予算オーバーかも」
「あのさ」
志田？
「俺の父親、花問屋だろ？　　こういうグッズの卸の社長と仲がいいから格安でって聞いてみるよ」
「志田くん、お願いね」「志田、頼んだ」
「風船に入れるヘリウムガスは？　　いくらするんだろう」
「俺の親父、イベントでけっこうこういうのやってるから頼んでみる、まあ大丈夫だよ」
あれは・・　牛車の牛がどうのっつってた男子か
すげえな　みんな　親の人脈ハンパねえな　さすがこの高校だな
「装置決定！」
みんな拍手してるよ　俺はまだよくわかんねえけど　よかった　マジよかった
ピコン
「あ、妹から」

川口が携帯見て
「衣装は明日、家に届くって、男性のだからちょっと大きいかもって」
「大きいのは調節すればいいもんね」
「あさって持ってくるよ」
ピコン
「ダンス用の動画の編集ももう少しで終わるから」
ピコン
「明日には送るって」
「モエちゃんにありがとうって言っておいて」
「うん、伝えておくよ」
「それじゃ、装置は決定っていうことでいいよね」
拍手か　よっしゃー！
俺と愛里も帰るか
「愛里」
「森下」
「あ、川口、あのさ、俺、モエちゃんのこと言っちまったけど」
「あんなふうに言ってもらって嬉しかったよ」
「そっか」
「それじゃ僕も帰るね」
「川口くん、さよなら」「川口またな」
「森下、上原さん、ありがとう、また明日ね」
川口　いろいろ　なんつうか・・

帰り道
「なんだか裁判のシーンを見てるみたいでした」
「裁判？ なに？」
「あなたが大演説をぶちかましてたとき」
「ぶちか、や、俺は、んなつもりじゃなくてさ」
「あなたの声はすごく通るから、おそらく廊下や隣りのクラスまで聞こえてたと思う」
「マ・・ジ？」
「でも、その裁判には糾弾されてる悪い人は誰もいなくて」
「だから、俺は裁判とか、んなつもりじゃなくてさ、熱くなっちまっただけでさ」
「だろうなとは思ったけど」
「思ったんなら止めてくれよぉ」
「どんなこと言うのか聞きたかったから」
「愛里ぃぃ」
「私は、おとうさんのこと言ってるときのあなたがとっても・・」
「愛里、泣くなよ、今泣くことねえだろ」
「ちょっと思い出しちゃって、そうだなあって納得しちゃったから」
「俺も、なんつうか、自分たちの運動会なのにさ、どっか他人事で、ただの運動会だ

ろって」
「私もそうです」
「そんでもな、川口の妹の話聞いたらさ」
「あなたはモエちゃんが小学校でいじめられて不登校になったって聞いてスイッチ入ったんですね」
「スイッチ？」
「おとうさんもだったから」
「ん・・　まあ、そっかな、かもしんねえけど」
「あなたの話を聞いてたら、これはモエちゃんのためにやるっていうより、
　モエちゃんが私たちのモチベーションになってくれたのかもって」
「かもしんねえな、つか、だな」
「装置の風船選んでるとき、楽しかったから」
「ぜってえ愛里のはきれいだよ」
「まだできてないですよね、あなたは画像も見てないし」
「俺は愛里の、なんつうの？　　センス好きだからさ」
「あんな大演説ぶちかましてたのに」
ぶちかますって言わねえでくんねえかな愛里
「装置の話のときは気配消してましたよね」
「俺、ああいうのムリじゃん、センスねえもん」
「当日の朝の仕込みはあなたがいないと、高いところに風船つけたりするから」
「そういうんは得意だからさ、肉体労働系？」
愛里が俺のこと見上げてっけど
「ん？　　愛里、どした？」
「学年トップのモリシタダイチに」
「あ？ なに？」
「自信持てって言われて、みんな目がキラッキラしちゃってて」
「みんな、すげえがんばってっからさ」
「みんなに、なんでこの学校に通ってるんだって言ってたけど」
「んなこと言った？」
「憶えてないの？」
「ちっと熱くなっちまっててさ」
「あなたはなんであの学校に入ろうと思ったの？」
「それは」
「言えませんよね、家からいちばん近くてギリまで寝てられるからなんて」
「全然言えっけど」
「市中引き回し、獄門打ち首になります」
「なんでっ？」
「レベチ過ぎだから」
「なにが？」
「アジの南蛮漬け美味しかった」

「え？　　ああ、マジ？」
「川口くんも美味しい美味しいって喜んで食べてましたね」
「ああ、うん」
「すっごい贅沢」
「アジはすげえ安く売ってたんだってさ、とうちゃんが買ってきてさ」
「あなたのお弁当、あたりまえみたいに食べられるから」
「え・・」
急襲で泣きそうになってます　愛里さん
「着きましたよ」
「おう」
エレベーターに乗って
愛里と一緒に二階で下りて
「私は少し勉強して、夕食頃行きます」
「わかった」
「それじゃ、また」
「愛里」
抱きよせて
好きだ　メッチャ好きだ
明日のために　俺は・・　買い出しに行かねえと！

16 歳最後の

明日の愛里ととうちゃんとかあちゃんの弁当用の食材は全部買ってきた
卵はいつもよか高けえやつにして、カニカマもいつもよか高けえのにした
スポンジとホイップクリームも買って、イチゴもいっちゃん高けえやつでさ
祝いだもんな　全部俺が稼いだ金で買った　でねえとさ　意味ねえじやん
そんで　あれも買った　ロウソク　フーッのやつ

晩メシは牛丼
豆腐とネギの味噌汁とキャベツときゅうりと千切り生姜とミョウガの浅漬けみてえの
「とうちゃん、朝、握りメシ持たせてくれただろ？」
「全部食ったんか」
「それがさ、川口に弁当食べさせたからさ」
「川口くんつうのは、昼メシ買えねえんか」
「じゃねえけど、話あってさ、弁当食わせることになって」
「ダイチの弁当なら喜んだろうな」
「とうちゃんのアジの南蛮漬け美味えっつってたよ」
「そんで、ダイチは握りメシだけだったんか？」
「とうちゃんの握りメシ持ってってよかったよ」
「そんじゃ、牛丼いっぺえ食ってよ」
「三杯は食える」
「そっか」
とうちゃんが嬉しそうな顔して味噌汁の味噌溶いてる
「ただいま」
「美里、おかえり」「かあちゃん、おかえり」
「おじゃまします」
「愛里、晩メシは牛丼」
「わあ、嬉しい」
「アイリちゃん、おかえり」
「おとうさん、ただいま」
ピコン
愛里の携帯か
「あ、川口くんからです」
「運動会のこと？」
「多分・・」

愛里が LINE 開いて
俺は浅漬けみてえなんを器によそって
「あ・・」
なんか声が聞こえっけど
「愛里さん、それはなに？」
「あの、おかあさん、ちょっと」
愛里がかあちゃん引っ張ってリビングの方に行った
「アイリちゃんと美里はすげえ仲いいな」
「うん」
「美里もヒトミ行っちまってから話し相手いなくなっちまって」
「かあちゃんはねえちゃんとばっか話してたもんな」
「アイリちゃんが来てくれてからは、楽しそうでよ」
「だよな」
リビングの方から　なんか笑い声がしてる
いいなあ　いいよ　もうファミリーだよ

「美味しい」
明日の俺の弁当も　美味えっつってくれますか　まだ作ってねえけど
「無敵の弁護士」
かあちゃん？　　どした急に　ドラマのタイトル？
「総理大臣になって欲しい人 NO.1」
なんだそれ？
「ダイチ」
「あ？ なに？」
「あんたの中にはボリューム調整機能はないの？」
「なんの話だよ？」
「廊下にいてもハッキリ聞こえるって」
「だからなんの話だよ？」
「あの・・　これ・・です」
愛里が携帯見せて
え？　　えっ　えーーーーっ　俺が　熱くなっちまって　あの　なんで？
「川口くんから送られてきて、川口くんに回ってきてるってことは、全校に」
「え？　　ハ？　　なんで？」
「途中から撮られてて、おそらく廊下から」
「ハァァアア？」
「見ますか？」
「や、それは、いい」
「無敵の弁護士ですってよ」
かあちゃん　それのことかよ・・
「総理大臣になって欲しい人 NO.1 て　ハハハハ」

「あの、これは、あなたのことをからかってるんじゃなくて」
愛里　いいよ　もう　別の話にしてくれよぉ
「この動画見た人たち、みんな感動してたらしくて」
「俺は感動させてえわけじゃなくてさ、うちのクラスのみんながさ」
「たしかにね、源氏物語を知ってるってことは、あたりまえじゃないわよ」
かあちゃん・・　もうやめてくれよぉ
「あたりまえだと思って生きていることが、実はとってもありがたいことだって、
　あの高校に通う子たちは、なかなかわからないかもしれないわ」
「そうですね」
「カズオ」
「え？　あ？　ん？」
とうちゃん　カンペキスイッチ切ってたな
「源氏物語、もうわかってるわよね」
「げんじものが・・　あ！　　ヒトミと一緒にやった、ひでえ男の話だよな？」
一瞬　かあちゃんも愛里も　黙っちまった
「あ？　　ちげえのか？　　光さんつう、ひでえ男の話じゃねえんか？」
「そうね、そのとおり、そうなのよ」
「あれはなあ、ひでえな、子ども誘拐したりよ、あっちこっちでよ、
　だれのこと好きだったんかわかんねえよ、だれのことも好きじゃなかったんかもしんねえな」
「愛里さん」
「はい」
「独特だけど、的を得てるでしょ？」
「はい、私は、やっぱりおとうさんしかいないと確信しました」
とうちゃんしかいねえ？
「インプリンティング？」
「はい」
なんだ？　　なんの話になってんだ？

愛里とかあちゃんはリビングでしゃべってて
俺ととうちゃんは後片付けしてて
「とうちゃん、俺、シャワー浴びたら明日の仕込みすっから」
とうちゃんが顔近づけてきて
「アイリちゃんの弁当か」
小せえ声で
「美里のもだな」
とうちゃんのもだよ
「うん、だからガス台んとこは掃除しなくていいよ、俺やっからさ」
「そっか」
とうちゃんは　源氏物語の現代語訳全巻読んでて　ねえちゃんと一緒に読んでたんだ

けど
俺も　ねえちゃんが読んでとうちゃんが読んだあと読んでたけど
小学生だったから意味がよくわかんなくて　中学になってもっかい読み直してさ
とうちゃんは葵の上がお産で死んだとこ読んで突っ伏しちまって　ねえちゃん心配してさ
「とうちゃん、これは作り物だからね、本当のことじゃないから」つってさ
「そんでもよ、せっかく赤ちゃん生まれたのに・・なあ」
ねえちゃんが言うには、かあちゃんの大出血と重なっちまったんじゃねえかって
「あ！」
「ダイチ、どした？」
「監督の奥さん、葵さん、源氏物語の葵の上の葵だ」
「そうなんか？」
「かあちゃんが書いてた報告書に名前、葵の上の葵が書いてあった」
「そっかあ、やっぱヒトミはすげえな」
「ねえちゃん？」
「あれは作りもんだってよ、ほんとの葵さんは赤ちゃん生んで元気にしててよ」
「そっか、だよな」
「全然関係ないわよ」
かあちゃんっ
「監督はあんなゲス男じゃないしね」
だよな　監督は奥さんのことメッチャ好きでさ
「ダイチ、愛里さんのこと送ってあげて」
「おう」
愛里と二人で家の玄関出た

愛里の部屋の玄関
「あの、おかあさんに、あの動画を見せたのは」
「かあちゃん見たがってたじゃん」
「それもあるけど、私が感動したから」
「え？」
「こんなにすごいことを言う人が、私にお弁当を作ってくれて、私を、あの、なんだなって」
「愛里ぃぃ」
抱きよせて
「今はゴールデンレトリバーみたいだけど」
「ワン」
「キャップが　ハハハ」
「愛里、キスしていい？」
「なんで聞くの？」
「だってさ」

愛里のくちびる　柔らかくて　俺はとろけそうで　あ　あ・・　ヤベ
くちびる離したら
「いいって言う前にしましたよね」
「16 歳の愛里との最後のキスっつうかさ」
「なにそれ」
「俺は愛里のこと、愛里が 15 歳んときから好きだったからさ」
「そう・・ですか」
「16 歳の誕生日んときは、なにしてた？」
「だから、友だちがサプライズにならないサプライズして、ママはジビエコースで」
「あ・・　そっか」
「明日は、なんともな〜く、ふつうに過ごさせてください」
「俺はサプライズとかできねえっつったじゃん」
「はい、すごく安心します」
「明日、愛里の 17 歳の誕生日に、一緒にいれんのが嬉しいっす」
「プッ　グフッ」
「なんで笑うの？」
「なんか、可愛かったから」
「俺、マジでそう思ってっから」
「そうですか」
「マジ」
「はい、私もです」
「マジ？」
「はい」
「愛里ぃぃ」
「16 歳最後のはもうしましたよね」
「もっかい、愛里、もっかい」
「やだあ、そんな言い方」
愛里のくちびるに　軽く
愛里が俺のこと　上目遣いでちっと睨んで　その目が俺は好きでさ
「それじゃ・・　また」
「愛里、そんじゃまたな」
愛里が玄関のドア閉めて　鍵閉めて
俺は　　明日の弁当の仕込みだ！

勉強して　シャワー終わって
キッチンで　しいたけ煮て　卵焼きも作って　三つ葉も茹でて
きゅうりとカニカマは明日の朝切ればいいな
鍋には稲荷寿司用の揚げ煮てて　唐揚げ用の鶏肉も下味つけた
ポテサラも作った　あとは・・　明日の朝タコさんウィンナーと　ケーキだ
おーーっし　できた

部屋戻って
愛里から LINE 来てた
『16 歳の私からの最後の LINE です w』
愛里　すげえ嬉しいんすけどぉぉ
『私の 16 歳はすごくいろいろあって』
『あなたと出会えて』
『しあわせな 16 歳でした』
愛里・・　涙出てきちまって
『ありがとう』
『おやすみなさい』
こんな LINE くれんなんてさ　俺こそメッチャしあわせでさ
『愛里』送信
『おやすみ』送信
ピコン
『16 歳の私からの最後の』
ピコン
『おやすみなさい』
『16 歳の愛里への最後の』送信
『好きだよ』送信
ピコン
『16 歳の私からの最後の』
ピコン
『私も好きです』
愛里－－－－
ピコン
『16 歳の私からの最後の』
ピコン
『』
愛里からさ　愛里からハートもらえっとか　去年はまだ全然考えられなくてさ
『16 歳の愛里に最後の』送信
『』
ハート送れるなんて　考えられなくてさ
しあわせだーーーー！
寝よう
明日の朝は　なんつうか　勝負だ！

ハッピーバースデー

いつもよか早く起きて　顔洗いにバスルーム行くと
「ダイチ、おはよう」
とうちゃんが風呂場から顔出して
「とうちゃん、おはよう」
「俺は掃除してっからよ」
「とうちゃん、終わったら呼ぶよ」
「がんばれよ」
「うん、ありがとう」
顔洗って
キッチンに
炊飯器のタイマー　あと３秒　３・２・１　炊けた
酢飯は炊き立てじゃねえとさ
握りメシ一個分くれえの白メシ残して
寿司桶ん中に入れて　ゆうべ作っておいたすし酢かけて　サッサッと混ぜる
稲荷寿司分の酢飯には白ごまも混ぜて
唐揚げ揚げて　タコさんウィンナー炒めて　カニカマときゅうり切って
酢飯も冷めたな
巻き寿司できた　三本　切って
きれいなのは愛里とかあちゃんとうちゃん　俺の分は端っこにすれば無駄がねえ
稲荷寿司もできた　これを半分に切って　上に紅ショウガ刻んだのとガリ刻んだの乗っけて
可愛くね？　　よくわかんねえんだけど　俺は食えりゃいいからさ
弁当箱４つ並べて　巻き寿司とミニ稲荷を並べて　おかず入れて
次は・・　あれだ
スポンジをグラスで　このグラス、かあちゃんのシャンパン用で高けえらしいんだけどさ
大きさ的にちょうどいぃんだよな　二枚抜いた
クリーム塗って　薄く切ったイチゴ乗せて　フルーツ入れに入れて
もう一枚にクリーム塗ってきれいにならして　この・・上・・に　フゥゥ息止めてた
そんで真ん中にちっと絞ってイチゴ乗っけて　できたあ！
こんだけじゃねえんだよ
とうちゃんとかあちゃんの弁当箱にも　愛里のやつの真四角ミニバージョン入れて
いちおうなんつうの？　　とうちゃんもかあちゃんも誕生日だからさ　バースデーケーキ

全部のフタ閉めて　かあちゃんととうちゃんのフタの上にはメモ
『かあちゃん誕生日おめでとう
　俺からの誕生日祝い弁当です　ケーキにロウソク立ててフーッしてください
　しなくてもいいけど　愛里が誕生日はロウソクにフーッつったから入れておきます』
かあちゃんには赤のロウソク
『とうちゃん　たんじょう日おめでとう
　俺が作ったとうちゃんへのお祝いべんとうだよ
　ケーキにロウソク立てて火つけてフーッてしてください
　愛里が　たんじょう日にはロウソクにフーッて言ったからさ』
とうちゃんには水色のロウソク
全部弁当袋に入れて　とうちゃんのはかあちゃんがくれたハンカチで包んで
箸入れた　んっと、愛里のには小せえフォークもだ
できた！
「とうちゃん」
あ、便所掃除してた
「とうちゃん、もういいよ」
「そっか？　　そんじゃ、こっちももう終わっからよ」
とうちゃんがキッチンに来て　手ぇ洗って
「ダイチの握りメシな」
とうちゃんが握りメシ作って
「ダイチ、ほれ、食ってけ」
「うん、ありがとう」
はぁぁぁ　労働のあとのとうちゃんの握りメシはますます美味え
そうだ
「とうちゃん、これがかあちゃんの」
「ちゃんと渡しとくからよ」
「そんで、こっちがとうちゃんの」
「俺？　　俺は今日は仕事ねえよ」
「誕生日だろ」
「え？」
「俺からの誕生日祝い」
とうちゃんが　ハンカチで包んである弁当箱見て
「そっか・・」
顔上げて
「ありがとな」
え　とうちゃんの目に　見ねえことにしよう　とうちゃん見られんのイヤだからさ
「そんじゃ、俺、愛里んとこ行って、学校行くからよ」
「ダイチ、いってらっしゃい」
「とうちゃん、いってきます」
フルーツ入れん中のケーキが動かねえようにしながら　愛里の部屋に向かった

ドアホン鳴らすと
愛里がドア開けて
「おはようございます」
「愛里、誕生日おめでとう」
「え？　あ、はい、ありがとうございます」
「愛里の 17 歳の誕生日に、俺がいっちゃん先におめでとう言いたかった」
「なにそれ」
笑ってる愛里が可愛くてさ
「愛里」
そっと　軽く
「17 歳の愛里に初キス」
愛里が俺の腕ペシッて　たまんねえ

愛里と二人で　学校に向かって　俺は　とにかくフルーツ入れん中のケーキが動かねえように
初めての 17 歳の愛里と手ぇつないでさ
「17 歳の私と初めて手をつないでるとか思ってますよね」
「え？　あ、思ってる」
「私、昨日とそこまで変わってないから」
「だってさ、俺にとっちゃ、初めての愛里の誕生日だからさ」
「まあ、そうですね」
「全部が記念っつうかさ」
「グフッ　小学生みたい、しかも低学年」
「いいじゃん、俺ずーーっと楽しみにしてたんだからさ」
「子ども」
「だってさ、こうやって愛里の誕生日に一緒にいられんなんてさ」
俺は　今　メッチャ
「しあわせだーーー！」
「声が大きい」
「あ、ごめん」
「もうっ」
怒ったみてえに言ったけど　愛里の横顔は微笑んでてさあ

ロッカーん中に　そ〜っと弁当入ってる袋入れて
あ　そうだ
「愛里、先行っててくんねえかな」
「はい」
購買のおばちゃんとこに走って
「おばちゃん」
「ダイちゃん、おはよう」

「おはよう、あのさ、おばちゃんライター持ってるよな、煙草吸うからさ」
「ダイちゃん」
おばちゃんがまわりチロチロ見て
「校内では吸ってないよ」
「昼休みまでライター貸してくんねえ？」
「ダイ・・ちゃん、ダメだよ、タバコは」
「ちげえよ、今日、愛里の誕生日でさ、小せえケーキ持ってきてっから、
　ロウソク立ててフーッてさせてあげてえんだよ」
「あらまあ、ダイちゃん優しいねえ、そりゃ喜ぶよ」
おばちゃんがポケットからライター出して
「返すのはいつでもいいよ、もうひとつ持ってるから」
「おばちゃんありがとう」
「ダイちゃん、おばちゃんからも何かあげるよ」
「マジ？」
「何がいいかい？」
「んっとさ、自販機の小せえサイズのお茶」
「お茶？　　コーヒーとかジュースじゃなくて？」
「お茶がいいな」
「それじゃ」
おばちゃんが小銭入れて　お茶のボタン指さして
「これかい？」
「うん」
ガタンて　お茶が出てきて
「はい、おばちゃんからカノジョさんに」
「ありがとう」
「ちょっと待って」
おばちゃんがまた小銭入れて　お茶のボタン押して　ガタン
「これはダイちゃんに」
「俺は誕生日じゃねえよ」
「こういうのはさ、二人で飲むからいいんだよ、喫茶店気分でさ」
「おばちゃ〜ん、ありがとう、マジありがとう」
「またいつでも、なんかあったらおいで」
「うん、マジありがとう」
ライター　スボンのポケットに入れて　ロッカーにお茶入れて　教室に走った

教室入ったら　愛里は川口としゃべってて
「あ、森下おはよう」
「川口おはよっす」
「見てください」
愛里　それは・・　なんだ？　　黄色い・・

「モエちゃんから私への誕生日プレゼントだそうです」
「あ、そ、そっか」
「えっと、川口くん、なんだっけ？」
「ピリちゃんのポガリのキーホルダー」
ポガ・・　ポカリじゃねえのか？　　つか、それはなんだ？
「ピリちゃんのキャラクターはヒヨコなんだって」
「そ、そっか」
「あと・・」
川口がスクールバッグから　ぬいぐるみ？　　ウサギ・・か？
「これは森下に」
「俺は誕生日じゃねえよ」
「昨日の森下の動画を見てね、妹が感動して」
え、おい、妹に見せたんかよ
「森下がやるイ・リノのキャラクターあげたいって」
「え・・　あ・・」
けっこうでけえな
「正確には僕が買ったんだけど、おにいちゃまのリービットあげてって言われてね」
「あ、んっと、そっか、あの、ありがとう」
「可愛いですね」
愛里
「あ、だな」
「似合いますよ」
愛里　メッチャ笑いこらえてんじゃん
「あ、肝心なのを忘れるところだった、これは僕から上原さんに誕生日プレゼント」
シャーペンの替え芯か　小せえ透明な袋に入れてリボンまでついてっけど
「ありがとう、あと 2 本しかなかったから助かる」
愛里の感覚的には　必要な文房具を買ってきてもらったみてえなカンジだな
「喜んでもらえて嬉しいよ」
確かに喜んでっけど
あ　チャイム鳴った

10 分休み
愛里んとこに佐藤と佐藤が行って　なんかしゃべってる
あ、志田がなんかパンフレット？　　みてえなの持って愛里んとこ行った
愛里　便所行かねえで大丈夫か？
俺は　シッコ　漏れそうっす

あああ　スッキリした
「森下」
森山

「昨日の森下の動画」
森山んとこまで回ってんのかよ
「うちのクラスのみんなも感動しててさ」
「そ、そっか」
「うちは他のクラスと被るから縄文時代になったんだ」
なんか　どんなんかわかんねえけど
「そっか」
「あのさ、これ」
なんだ？　　割り箸にリボンついてっけど
「上原さんに渡してくれないかな」
「愛里に？　　これ？」
「前に誕生日に割り箸がいいって言われたからさ」
それは・・　そういう意味じゃねえぞ森山
「この割り箸、けっこう高級なのだからさ」
「そ・・っか、渡しとく」
「森下、将来は総理大臣目指してるの？」
「ハア？」
「森下ならなれそうだな」
「俺は、総理大臣にはならねえよ、なれねえし、興味ねえよ」
「そうなんだ、残念だな」
なにが残念なんだよ
「あ、チャイム鳴った、それじゃ森下またな」
「おう」
ったくよ、便所出てからの森山との遭遇率高すぎだろ

いつもどおりにロッカーから弁当入った袋、と、おばちゃんからもらったお茶持って
「それどうしたんですか？」
「購買のおばちゃんがくれた」
「そうなんですか」
あっ　違げえよ　愛里の誕生日にってくれたんだよ
「愛里、このお茶は」
「なに？」
あれ？　　頭真っ白になった　んっと？
「お茶なんだよ」
「わかるけど」
おかしい　ヘンだ　俺　なんか吐きそうになってんだけど
落ち着け　ただの弁当だろ　サプライズでもなんでもねえだろ
中庭のいつもんとこに座って
愛里が弁当のフタ開けた

「巻き寿司！」
なんかめまいしてんな
「これは・・　お稲荷さん？」
「え、あ、うん、ミニ稲荷」
「可愛い」
愛里の声が遠くに聞こえる　なんだ？ どした？
「唐揚げにポテサラにタコさんウィンナー、私の好きなものばかり」
「そ・・っか」
「誕生日だから？」
「え？　あ・・うん」
なんか　メッチャあっさりネタバレ的な　や　ネタなんてねえし
「嬉しい」
愛里が嬉しいっつってくれてんのに　なーーんも感じねえ　どした？
「巻き寿司、美味しい」
「そっか」
美味しいっつってくれてんのに
「これって・・　カニ？」
「カニカマ」
「カニカマ？　カニみたい」
高けえカニカマ買ってよかった　って思いながら　なんか胃が痛てえ　どした？
「お稲荷さんも美味しい、中に白ゴマが入ってて酢飯がまろやか」
「そっか」
「食べないんですか？」
「あ、ちっと」
胃が痛くて　なんか目の前クラクラして
「どうしたの？」
「なんか・・　胃が」
「痛いの？」
「ちっと」
「えっ　大丈夫？」
「あ、全然、あの、あれだ、腹へりすぎて、なんつうか」
「お腹が空きすぎて痛くなったの？」
「すぐ、すぐ収まっから」
愛里に心配させてどうすんだよ？　んっと　えっと　あ、あれだ
「愛里、これ」
フルーツ入れのフタ開けて　よかった　崩れてねえ
「ケーキ？　作ったの？」
「や、市販のスポンジくり抜いて、市販のクリーム塗ってイチゴ挟んで上にも乗っけただけ」
「なんか・・　すごくきれい」

「かあちゃん監修だからさ」
「おかあさんが？」
「夜中に練習してたら」
「練習？」
「俺、こういうのやったことねえから、一回だけ」
「市販のスポンジをくり抜く練習？」
「つか、クリーム？　どうすりゃいぃんかわかんなくて、グルグルって絞ってたら、
かあちゃんが来てさ、白いウンコみてえだっつって」
「プッ」
「笑ってっけど、俺こういうのやったことねえからさ、そんでかあちゃんが」
「デコッてくれたの？」
「画像見せて口で指示しただけ」
「ハハハ　おかあさんっぽい」
「あ！　ちっと待って」
手提げから　愛里のはピンクのロウソク
「これを・・　この真ん中に立てて」
ズボンのポケットからライター出して
「ライターなんて持ってたの？」
「購買のおばちゃんに借りた、今朝、あ、そんで、おばちゃんが愛里の誕生日だからってお茶」
「ああ！　それでくれたんですか」
「うん」
やっとまともに説明できた
「愛里がさ、誕生日にはロウソクフーッだっつってたじゃん、だからさ」
「え？」
ロウソクに火ぃつけて
「あ、ちっと待って、動画撮る」
「動画？」
「やっぱ、なんつうか、記念？」
ピッ
「フーッしていいよ」
「その前に歌ってください」
「なにを？」
「ハッピーバースデーの歌」
「え、お、俺が？」
「はい」
「え、んっと、そんじゃ、ハッピバースデー・トゥユー」
声裏っ返っちまってる　咳払いして
「ハッピバースデー・トゥユー、ハッピバースデー、ディア愛里、ハッピバースデー・トゥユー」

愛里がフーッてロウソク消した　ピッ
「愛里、誕生日おめでとう」
「学校でこんなことできるなんて思わなかった」
愛里が笑ってる　よかったあ
ピコン　え？　　あれ？　　かあちゃん？
「愛里、かあちゃんから」
「おかあさん？」
動画？
なんかまわりに人がいる　ハッピーバースデーの歌　みんなが歌ってる
「ハッピーバースデー・ディア美里さん、ハーッピーバースデー・トゥユー」
かあちゃんがフッてロウソクの火消した
「ダイチ、あんたのせいで、私は自分の誕生日に浮かれてるおばさんみたいになってるけど？」
え？
「取締役、こっそりやろうとしてもタメですよ」「祝いたいじゃないですか」「そうですよ」
「まあ、そういうことで、あんたのメモ通りにはしたから」　ピッ
かあちゃん　やってくれたんだ
「おかあさんにも誕生日のお弁当作ったんですか？」
「え？　　あ、うん」
「なんか感動する」
「マジ？」
ピコン　え？　　かあちゃんかな　や、メールだな
とうちゃん？　　とうちゃから？　　添付ファイル？　　クリックしたら・・　動画
キッチンのカウンターの上に　弁当乗っかってて　ミニケーキにロウソク
フッて消えた
「ダイチ、ありがとな」　ピッ
とうちゃん　　こんなん撮ってくれた
「すごい・・」
愛里が　え？　　泣いてる？
「こんなこと・・　できるのは・・　あなただけで・・」
「や、俺は愛里ととうちゃんとかあちゃんに誕生日の弁当作っただけでさ」
「あなたの、だけ・・は、違う場所にいるのに、一緒に同じものを食べて・・
　誕生日の・・　ケーキの、ロウソク、一緒にフーッができて・・　こんな・・」
愛里が涙でいっぱいの目で俺のこと見て
「こんなしあわせな誕生日、生まれて初めて」
「えっ　マジ？」
「ありがとう」
俺も　涙・・
「よかったあ、愛里が喜んでれて」
「最高です」

「よかったあ」
必死に笑おうとしても　涙が止まんなくて
俺　メッチャ緊張してたんだ　俺ができることはこんくれえでさ
そんでも俺　必死に　美味くなるようにって作ってさ
ただの弁当で喜んでくれんのかなって　なんか自信なくなってて
そんでも　今　なんか
「急に腹へってきた」
「美味しいですよ、私が作ったんじゃないけど」
「愛里の保証付きなら美味えな」
「なにそれ、ハハハ」
よかった　とうちゃんもかあちゃんも　動画まで撮って送ってくれて
「このケーキ美味しい」
「全部市販のだけどさ」
「私のパフェみたいなカンジですね」
「愛里のパフェはこれの一億倍美味えよ」
「全部市販のものを使うだけですけど」
「そんでもさ」
「だから、このケーキも、私には一億倍美味しいです」
愛里・・　泣くだろ俺　つか　泣いてんだけどさ
「このお茶は、おばさんのチョイスですか？」
「お茶っつったのは俺、寿司にはお茶かなって」
「正解です」
「そっか」
「はい」
愛里の手ぇにぎったら　愛里もにぎり返してくれて
「愛里、俺はこんなことっきゃできねえけど」
そんでもさ
「愛里の誕生日は、俺にとっては 365 日ん中でいっちゃん特別な日なんだよ」
「はい」
「すげえ大切な日なんだよ」
「伝わりました」
「え？」
「あなたのお弁当食べたらわかる、すごく・・　わかる」
愛里・・
「そっか」
「はい」
「伝わったんか」
「はい」
「そっか」
「はい」

「愛里、お　ウグッ」
「ケーキ、一緒に食べて」
愛里がいたずらっ子みてえな顔で笑ってる
「美味えっす」
「でしょ？」
「おいっす」
「これからも、私の誕生日はこのお弁当がいいな」
「えっ？　　こ、これからも？」
「そろそろ戻りましょう」
「愛里、これからもっつうことは、これからも？」
「ライター返さなくていいんですか？」
「返す返す、愛里、あのさ、これからもって」
「これからもはこれからもでしょ！」
愛里ぃぃ
「購買に行きましょう」
「おう」
愛里と二人　購買に向かって歩いた

誕生日の午後

購買の前にはもう誰もいねえ
「おばちゃーん」
おばちゃんが奥から出てきた
「ダイちゃん、うまくいったかい？」
「ロウソクフーッできたよ」
「そりゃよかったね、あら、ダイちゃんのカノジョさん」
「上原です、お茶をありがとうございます」
「いいんだよぉ、誕生日おめでとう」
「ありがとうございます」
「おばちゃん、これ」
ライターをケース越しに
「森下」
え？　あっ　生活指導主任
「そのライターはどうしたんだ？」
「これは」
「あの、このケースの下に落ちていて」
愛里？
「そうなんだよぉ、さっきその辺り掃除したら落としちゃってさあ」
おばさん
「そうなのか、おばさんもそろそろ煙草やめた方がいいよ、健康のために」
「先生だって、ちょっと前まで私と一緒に裏門出たところで吸ってたじゃないさ」
「え、いや、今はもう」
「電子タバコっていうの？　あんなの吸ってるくらいならビシッとやめなよぉ」
「え、あ、えーっと、あ、森下」
「はい」
「学年主任から聞いたよ」
「何をですか？」
「実力テスト、また一番だそうだ」
「そうすか」
あれ、ケースん中にあんぱん一個売れ残ってる
「先生、このあんぱん売れ残ってんすけど」
「あ、そう」
「売れ残るとおばちゃんが回収して業者が廃棄しねえとなんねえんすよ」

「そうだね」
「先生、買ってあげてください」
「え？」
「廃棄なんてもったいねえっすよね、環境問題っすよね」
「あ・・まあ・・　それじゃ、買うよ」
「あらあ、先生、毎度あり」
おばちゃんが俺の方チラッと見てニヤッと笑った
「そんじゃ、おばちゃん、いろいろありがとな」
「こっちこそだよ、ありがとね」
愛里と二人で　なんともなく　そんでも早歩きで購買離れた
「すごいです」
「なにが？」
「生活指導主任に残ったあんぱん売っちゃって」
「愛里こそさ、ケースの下に落ちてたって、メチャ助かった」
「悪いことしてたわけじゃないけど、いろいろ詮索されるのイヤだし、それに」
愛里が俺を見上げて
「おかげで私はしあわせにしてもらったから、なんか必死で」
「ありがとな」
「だからあっ　校内で手をつなごうとしないで」
「あ、はい」
「あ！　　モエちゃんにもお礼言わないと」
「川口の妹？」
「誕生日プレゼントもらったから」
「そっか」
「急ぎましょう」
「おう」
ロッカーに空の弁当入った手提げ入れて　教室に戻った

廊下の踊り場
川口が携帯かまえてる
「上原さん、それじゃ撮るよ」
「うん」
ピッ
「モエちゃん、上原愛里です、誕生日のプレゼントありがとう
　ピリちゃんのパート、がんばるからね、またね」
ピッ
「あなたもお礼しないと」
「え、俺？」
「目つきの悪いウサギもらったでしょ」
「上原さん、あれはリービットっていうんだよ」

「早くしないと昼休み終わっちゃうから」
「あ、わかった」
「森下、撮るよ」
「おう」
どうすりゃいぃんだ？　　ピッ
やっぱこういうときは
「川口の妹さん、森下大一と申します」
「あ、森下、土下座するなら言ってくれないと」
川口がへっぴり腰で携帯向けてっけど
「ウサギを」
「リービットっていうんだよ」
「ありがとうございます」
お辞儀して
「入野さんを仰せつかり、精一杯がんばる所存ですので」
　　「硬くない？」「がんばってるからさ」
「ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたしますっ」
ピッ
「どうだ？」
俺の尊敬と感謝と決意は伝わったんじゃねえかな
「歌舞伎の口上みたいだったよ」
カブキ？
「二人ともありがとう、妹に送るよ」
川口が嬉しそうな顔で妹に動画送ってる
あ　チャイム鳴った
「戻りましょう」
「おう」「そうだね」
階段駆け下りて　教室に戻った

帰りの学活が終わった
実行委員の女子が前に出てきた
「今日は、報告と鉢巻きの話し合いをしたいと思います」
みんなおとなしく席についてるよ
「志田くんのお父さんが、卸業者の方に話をしてくださって、その卸の方が、
　うちの高校の卒業生だそうで、風船は寄付してくれるそうです」
「おお！」「ヤッター！」「すごい！」
「それで、志田くんのお父さんが」
志田のお父さん大活躍だな
「その卸からクラッカーを人数分買って寄付してくれるそうです」
「クラッカー？」「クラッカーって？」
「パーティのときにパーンってやるクラッカーです」

「え、あの円錐の？」「小さいやつ？」「いつ使えばいいんだ？」
「それが！」
実行委員、いよいよタプレット持ってきてるよ
「こういう、長い形で」
すげえ　金色のデケー筒
「パーンってやると、こういうカンジで」
おおおお　すっげえ　金色のテープがメッチャ遠くまで飛んでる　家ん中じゃできねえな
「しかも！　　このテープは飛び出しても筒についてるからかき集めて掃除しなくていい」
「おお！」「すごい！」「それなら楽だね」
「これを応援のときに振って、ダンスの最後にパーンってやればいいと思うんだけど」
全員拍手してる
「それじゃ、次は鉢巻きなんだけど、モエちゃん指定のテーマカラーが黒と金と赤だから、　黒と金と赤で作った方がいいと思うんだけど、どうですか？」
「ねえ、どうせならラメ入りの生地がいいんじゃない？」「あ、いいかも」
「少し高いけど、こういうの」「あ、いいと思う」
なんか女子だけで盛り上がってっけど
「風船を寄付してもらえるなら予算があるから、これを買った方がコンサートっぽいよね」
なんか　すっかりコンサートの準備みてえになってっけど
「川口くん、モエちゃんに聞いてみて、その画像川口くん送って」
川口が妹に LINE して
ピコンピコンピコンピコン
「読むよ、メッチャいい、赤だけにした方がいい・・だってさ」
「そうだね、統一感出るもんね」「それじゃ、この生地の赤ね」
「あ、ただね、ダンサーたちは踊るときはつけないでって、衣装のジャマになるからって」
こだわりがすげえな　かあちゃんみてえだな　気ぃ合うかもしんねえ
「私たちが買ってきて縫うよ」「私たち去年も鉢巻き縫ったから」
すげえ　なんかみんな積極的になってる　メッチャ嬉しい
「それじゃ、今日はこれで、明日は衣装が来るんだよね？」
「うん、持ってくるよ、あと、ペンライトも」
そっか　バトンの受け渡しの練習か
「それじゃ、お疲れ！」
みんな席を立って　走って教室出てった　塾とかカテキョか
がんばれ　日本の未来のために！　・・かどうかはわかねえけど
「愛里」
愛里のそば行って
「帰ろう」
「私、お花を買わないと」
「駅の構内のあそこか？」

「はい」
「そんじゃ行こう」
愛里と二人　バスに乗って花屋が入ってる駅に向かった

駅ビルん中の花屋
愛里が真剣な顔で花を選んでる　携帯見ながら選んでっけど
花を選んでるときの愛里はますますきれいだ　写真カシャッカシャッ
「やだ、なんで撮るの？」
「きれいだから」
愛里が一瞬俺を睨んだけど　また花の方に意識集中して
「よかったあ、あった」
スッとした棒みてえなの選んで
「これもあった、あああ、ホッとしたあ」
なんか小せえ白い花ついたの選んで
「これ！　これがないと」
あれは・・　麦の穂じゃね？
会計んとこに　俺も
「俺が出す」
「これは私が払います、私が払いたいから」
愛里がそう言って　スクールバッグから白い封筒出した
「先週のバイト代です、今回からは一時間 1,000 円で一日 4,000 円」
「そっか」
「3,800 円になります」
愛里が嬉しそうな顔で封筒から千円札 4 枚出して
「200 円のお返しです」
200 円手にとって
「瓶貯金、してますか？」
「してるよ」
「それじゃ、これも入れてくれますか？」
「え、そんでもこれは愛里の」
「たまにしかできないけど、私も瓶貯金に参加したいから」
愛里　たまんねえよ　俺
「わかった、ぜってえ入れる」
愛里が花束持ってニッコリしてさ

改札向かって歩いてると　あ　ガチャ
「愛里、ガチャやったことある？」
「あります、小学生のときに友だちと」
「そっか」
「どれにするかとか、欲しいの出てくれないかなとか、楽しかった」

「やんねえ？」
「今？」
「うん、今」
「やる！」
「マジ？」
「高校生にもなって一人では恥ずかしいけど、あなたと一緒になら」
「そっか、そんじゃ愛里が好きなん選んでよ」
「あなたが選んで」
「俺が選んだら、戦隊モノか、ほれ、このウンコのとかさ」
「私が選びます」
愛里が中腰になってズラーッと並んでるガチャを小走りで見て　可愛いな
「あ！　　これ！」
そばに行くと
「純喫茶メタルチャーム、レトロで可愛い」
「んっと、クリームソーダ、プリン、ゼリー、カフェラテ、オムライスか」
「私はプリンがいい、昭和ってカンジで、あなたは？」
「俺は・・・　クリームソーダかな」
どれでもいいんだけど　愛里がプリン欲しいっつうんなら　俺は予備にプリン当たりてえな
「それじゃ」
「これは俺が出す、なんつうか、誕生日の、イベントみてえなさ」
「ガチャが？」
「なんかウキウキしてワクワクしてドキドキすんじゃん」
「あああ、最高」
「マジ？」
「こういうのが・・」
「愛里、や、泣くほどのもんじゃねえからさ」
「だって・・　こういう・・　小さなしあわせ感が・・　嬉しい」
「そっか」
よかった　マジよかった　俺が考えてたガチャ一緒にやるっつうこと
どうなんかなって思ってたけど　よかったあ
「そんじゃ、小銭入れっからな」
「はい、なんかドキドキしてきた」
「入れたぞ」
「当たりますように！」
愛里がガシャッて回した
黄色のカプセルが出てきた
「次はあなたの番」
「おう」
小銭入れて　ガシャッて回すと　俺のも黄色

「せーので開けましょう」
「おう」
「せーの、あ、硬たっ　開か・・ない」
「俺が開けるだけやっから」
「お願いします」
愛里のプセルのフタ開けて　愛里に渡して
「それじゃいきますよ、せーの」
俺のは・・　オムライスかあ
「あぁ、オムライス」
「愛里も？」
「あなたも？」
「うん、ほれ」
愛里が俺のをジーッと見て　自分のもジーッと
「あ！」
「どした？」
「これ、おかあさんとおとうんさにあげるアレンジメントのリボンの真ん中につければ」
「リボンの真ん中？」
「9 月 13 日の夕食はいつもオムライスなんでしょ？」
「うん、あ、それで？」
「ふたつあるし、可愛いと思う」
「そっか」
俺にはよくわかんねえけど　有効利用の手を考えてくれたんだな
「そんじゃ、俺の」
愛里に渡して
「愛里のカプセル、捨てっから」
手を出したら
「これは・・　思い出にとっておきたいから」
「中身ねえのに？」
「あなたとガチャやった思い出」
う　ぉぉおおおおおおお　たまんねえええええ
「そっか、そんじゃ俺もとっとく」
「早く帰らないと、私、これでアレンジメント作らないとだから」
「そっか、だな」
愛里には花だけ持たせて　愛里のスクールバッグと俺のと弁当箱入った手提げ持って
二人で改札抜けた

ウエディングブーケ

玄関のドア開けて
「ただいま」
「ダイチ」
とうちゃんがキッチンから出てきて
「おかえり」
「とうちゃんただいま」
「ダイチの弁当、美味かったよ」
「とうちゃん、ロウソクフーッの動画送ってくれてありがとう」
「あれは美里がよ」
かあちゃん？
「ダイチが誕生日祝いの弁当作ってくれたよって渡したらよ、俺のもあんだろ？
　ふたつっとも中見て、ダイチが書いてくれたん見てよ、
　こりゃダイチにロウソクフーッてしたの見せねえとなんねえっつってよ」
「え、マジ・・」
「俺も動画撮ってダイチに送ってやれって」
そうだったんか
「俺はあんなん撮ったことねえから、うまく撮れてっかどうかわかんねえけど」
「とうちゃん俺とねえちゃんの小せえ頃の動画いっぺえ撮ってんじゃん」
「そんでもな、ロウソクフーッはな」
「すげえきれいに撮れてた」
「そっか？」
「うん」
「俺は・・　自分の誕生日のケーキもロウソクフーッてすんのも初めてでよ」
「あ・・」
そっか　だよな
「ダイチがケーキ作って」
市販のスポンジと市販のクリームだけど
「やらせてくれたんだなって思ったら・・」
とうちゃんが　目ぇシバシバさせて
「嬉しかった」
とうちゃん・・
「俺、これからもずっととうちゃんの誕生日のケーキ、誕生日の弁当作っからさ」
とうちゃんが俺の顔　すげえ優しい目で見てて

「とうちゃんが生まれてきてくんなかったら、俺も生まれてこれなかったからさ、
　とうちゃんの誕生日は、俺にとってもすげえ嬉しい日だからさ」
「んな・・　んなこと・・」
「マジだよ、とうちゃん」
とうちゃんが　俺の頭クシャクシャッて撫でて　キッチンに行っちまった

俺は　部屋に入って　愛里からもらった 200 円　一個は瓶貯金の中
もう一個はガチャのカプセルに入れて　クローゼットの中の宝箱に入れた
俺の大切な思い出だからさ
カード書かねえと

とうちゃんと晩メシ作ってて　つってもオムライスはとうちゃんで
俺はサラダ、とうちゃんのキャベツとニンジンとレーズンのサラダみてえの
「ダイチ、困ってっことがあんだよ」
「え？ どしたの？」
「ケーキがよ、半額のが売ってなくてよ」
「半額じゃねえのでもいぃんじゃね？」
「こーんなでっけえのっきゃなくてよ」
とうちゃんが手で　それは・・　でけえな
「あとは大福とか団子とかでよ」
それは・・　違げえもんな
「そんでよ、しゃあねえから、プリン買ってきたんだけどよ」
「プリン？」
「それは二個で 105 円になっててよ」
「そんでも・・　プリンは・・」
「美里とアイリちゃんにそのまんま出すっきゃねえよな」
「えっと・・　ちょっと待って」
プリン・・　んっと・・　あ！　昭和のプリン　あれにすりゃいんじゃね？
「とうちゃん、プリン、ガラスの、なんかねえかな」
「ガラスのは、これっきゃねえな」
「それはでけえな、んっと、この白いデザート用の皿か」
「その皿の上に置けばいぃんか」
「や、んっと容器から出した方がいんじゃね？」
「スプーンで出すんか？」
「それじゃグチャグチャになっちまうな、んっと」
検索　プリンの出し方　あった！
「とうちゃん、皿の上にプリン逆さにして置いて、それ持ってクルッて一回転すんだってさ」
「これ持って回るんか？」
「これ見て」

とうちゃんに動画見せて
「回ってんな」
「回ってんだよ」
「そんじゃ、やってみっか」
「俺もやる」
皿にプリン逆さに置いて
「とうちゃん、せーのでさ」
「おう」
「せーの！」
クルッと一回転　どうだ？　　ゆ〜っくり容器持ちあげた
「おおおお、とうちゃんできた！」
「俺のもできた」
「そんじゃさ、この上にホイップクリーム絞ってさ」
「ダイチやってくんねえか」
「あ、おう」
あんま絞り過ぎっと、白いウンコ乗ったプリンになっちまうから　こんくれえか？
「ダイチ、うめえな」
「そっかな、あんまよくわかんねえけど、そんでこの上にイチゴ乗せて」
とうちゃんがかあちゃん用のイチゴ乗せて　俺は愛里用のイチゴ乗せて
「おおお」「こりゃ・・」
「とうちゃん、これなら、なんつうか、特別感あんじゃね？」
「だな、これならな」
冷蔵庫に　そ〜っと入れて
なんか　プリンでメッチャ疲れたな
「ただいま」
かあちゃんだ
「美里おかえり」「かあちゃんおかえり」
「ダイチのせいでとんでもない騒ぎになっちゃったわよ」
「え？ 俺のせい？」
「ラウンジの隅でこっそりやろうと思ったんだけど、ライターがないから、
　誰かライター持ってないって聞いたら、取締役何をするんですか？ って聞くから、
　息子がねってサラッと言っちゃったら、それじゃお祝いしましょうってみんなが」
それであの動画か
「こんな歳になって自分の誕生日を祝ってはしゃぐイタイおばさん状態になったわよ」
「そんでも、動画送ってくれて嬉しかったよ、ありがとう」
「ちゃんとやったっていう証拠は送らないとね」
「愛里が、とうちゃんとかあちゃんの動画見て」
「やだ、愛里さんも見ちゃったの？」
「違う場所で三人が一緒に祝ってるみてえで嬉しいっつってた」
「そう、まあ愛里さんが喜んだのならよかったわ」

「俺も嬉しかったよ」
「あんたの巻き寿司、カニカマがいつもと違ってカニみたいだったわよ」
「いつもよか高けえの買った」
「来年も高い方ので作ってよ」
「え・・」
「着替えてくるわ」
来年も？　マジ？
「とうちゃん、かあちゃん来年もっつってくれた」
「美里もダイチに祝いの弁当作ってもらって嬉しかったんだろうな」
「とうちゃんも？　嬉しかった？」
とうちゃんは　ちっと泣きそうな目で俺を見て
「夢みてえでよ」
よかった　愛里ととうちゃんとかあちゃんの誕生日の弁当作って　マジよかった

あとは　卵焼いて巻けばいいだけだな
「おじゃまします」
「愛里」
玄関とこで　愛里がちょちょっと手で俺に来いって
「なに？」
愛里が　なんかベールみてえなんがかかった花？
「ここ」
愛里が指さしたのは　とうちゃんのジーパンカットしたので作ったリボンの結び目に
ガチャで取ったオムライスのが二個ぶら下がってる
「可愛いでしょ？」
可愛いでしょっつってる愛里が可愛い
「おとうさんとおかあさんは？」
「とうちゃんはキッチンで、かあちゃんはリビング」
「おとうさんとおかあさん二人一緒にいて欲しいんですけど」
「そっか、とうちゃん、愛里だよ」
「アイリちゃん」
とうちゃんがキッチンから出てきた
「おかえり」
「あ、ただいま」
「とうちゃん、リビングにちょっと」
「そっか」
愛里ととうちゃんと俺でリビングに行った
「あら、愛里さん、誕生日おめでとう」
「あ・・　おかあさんもおめでとうございます」
「ありがとう」
「あの・・　おかあさん、これをこっち側に向けて持ってもらえますか？」

「お花？　作ってくれたの？」
「はい、おとうさんはおかあさんと向き合って」
「俺？　んっと、ここでいぃんか？」
「はい、それで、おとうさん、このベールをおかあさん側にそっとめくってくれますか」
「この、ここでいぃんか？」
「はい、あなたは携帯で動画」
「あ、おう」
「それじゃ、ベールアップです」
「ベールアップ？」「べ・・？」　なんだ？
「おとうさん、ゆっくりめくってください」
とうちゃんが白いベールみてえなんをかあちゃん側にめくって
「おめでとうございます」
愛里が拍手した
「愛里さん、これ・・は」
「結婚式のときに、新郎が新婦のベールをめくるベールアップをイメージして」
「結婚式？」
「今日はおとうさんとおかあさんの結婚記念日なので」
「あ・・　ああ、そういうことね」
ベール取った花は　俺でさえ息飲むほどきれいで
「愛里さん、これ、すごくきれいで雰囲気があってステキね」
「それはおかあさんのウエディングブーケのミニチュア版っていうか」
「え？」
「ビースラに載ってるブーケ、私は Shin 様のところで写真撮ったのを見ただけですけど」
「ウエディングブーケ？」
「あれは誰がお花を選んだんですか？」
「多分・・　シンシンよ」
「さすが Shin 様！　花言葉を調べたんです、カラー、本物は大きいのですけど、
　これはミニカラー使いましたけど、華麗なる美・乙女のしとやかさ・清浄で、
　モッコウバラはいろいろあるけど、あなたにふさわしい人」
かあちゃんは　黙って愛里のこと見てて
「麦の穂は、希望・繁栄で、おとうさんとおかあさんにピッタリだなって」
少し斜めに挿さったスッとした花に小さな花と葉っぱがついたのが少しだけ巻きつくように
それがちっと下まで垂れ下がってて、間には麦の穂がスッと顔出してさ
すっげえきれいだな　そんで自然なカンジでさ
かあちゃんは　こういうブーケ持ってたんか
「私ね・・　自分がどんなブーケを持っていたのか憶えてないの」
「え？」　え？
「あのときは、ブーケ持たされてたことも意識にないの」
「え、あの・・」　んなこと・・

「一日中バタバタしていて、その前からずっとバタバタして、カズオの住民票とか、
　妊娠のこともあったから産婦人科とか、仕事もあったし」
かあちゃん　せっかく愛里がこんなきれいなの作ってくれたのにさ
「写真を見たときも、じっくり見るヒマもないし、シンシンに頭にきてばっかりで、
　その後もじっくり見たことなくてね」
「そう・・ですか」
愛里が下向いちまったよ
「私はもともと結婚式とかウェディングドレスとか興味のない女だったのよ、
　カズオに、どうする？ って聞いたら、ねーちゃんのウェディングドレスが見たいって、
　まあね、あのときはカズオもまだ 20 歳で、そういうの見たいのかなって、
　適当にレンタルのを着て誰かに写真でも撮ってもらえばいいかって、
　シンシンに電話したら・・　ああいうことになっちゃったんだけど」
なんか　空気が　通夜みてえな
愛里が　すげえ困った顔してる
「かあちゃ」
「でもね」
俺の言葉さえぎって
「そんなの、自分への言い訳なの」
え？
「本当は、心の奥の奥では・・　ウェディングドレス、着たかったの、カズオのために、
　カズオのお嫁さんになりたくて・・　カズオと結婚したかったから」
え・・
「カズオに・・　きれいって言われたとき、なに泣いてるのよシャキッとしなさいよって
　心の表面ではそう思ってたんだけど、本当は・・　嬉しくて・・
　カズオにウェディングドレスの私を見てもらえて、きれいだって言ってもらったのが、
　ああ、カズオのお嫁さんになったんだなって・・」
俺は・・もう・・　愛里も・・　とうちゃんは　かあちゃんのこと　夢見てるみてえな目で
「そうなのね」
かあちゃんが　愛里が作った花を手にとって
「私はあのとき・・　こんなきれいなブーケを持ってたのね、こんなに・・」
かあちゃんが　そのままベッドルームに走ってった
とうちゃんが追いかけて　ドアが閉まった
「愛里」
愛里が　俺の腕ん中に飛び込んで　泣いてる
「ありがとな、こんな・・　こんなきれいな花、かあちゃんの花嫁の・・」
愛里の背中さすって
「んな話・・　俺も初めて聞いた、愛里のおかげだよ」
「わた・・し・・　おかあさん・・の・・圧倒され・・て」
「うん、そっか」

俺もだよ
「おとうさんのこと・・あんな・・に・・すごく・・　感動・・し・・」
「とうちゃんのお嫁さんになりたかったってな」
「はい、なんか、もう・・　全部がステキ過ぎてぇぇぇ」
「そっか、そっか」
愛里の頭撫でて
「愛里・・　愛里」
愛しくて愛しくてたまんなくて
愛里のくちびるに　涙で濡れてる頬に手ぇあてて　そっと
「愛里さん」
「うっぉおおわあああ」
あわてて　愛里から離れた
「ありがとう」
かあちゃんが愛里のこと抱きしめた
「こんなステキな結婚記念日のお花、本当にありがとう」
愛里が　かあちゃんの腕ん中でコクンコクンて
「これね、お礼ってほどのものじゃないんだけど」
かあちゃんが古びた茶封筒を愛里に渡して
「これ・・は？」
愛里が中の雑誌出して
「えええええええっ　ビースラの幻の伝説のビースラのぉおおっ」
「まだいっぱいあるのよ、シンシンがお友だちにもあげてって、あげられるわけないでしょ、
　他人のウェデイングの写真なんて、もらって嬉しい人なんていないわよ」
「私はハァハァ」
愛里　息荒くなってる
「クラックラするほど嬉しいです」
「そう？　　裏にシンシンのサインが入ってるけど」
「エーーーーーッ　Shin 様のサイン入りーーーーっ？」
「ブレイクする直前のだけどね」
「まっまっまさか、こんな貴重なものをいただけるなんてーーー！」
愛里が胸に抱いて喜んでるよ
俺の誕生日祝い弁当もガチャも影薄〜くなって消えちまってんな
そんでも　愛里がこんなに喜んでっからさ　よかったよ　愛里の誕生日だもんな

9 月 13 日恒例のオムライス
「美味しい」
「昔ながらのってカンジでしょ」
「はい、私はこういうのが好きです、フワッドロじゃなくて」
「私もなの」

とうちゃんは　愛里とかあちゃんのこと嬉しそうに見ながら食ってる
「あ・・」って　とうちゃんが小せえ声で言って
スエットパンツのポケットから消しゴム出した
「アイリちゃん、これは俺からの」
「あ！　おとうさんの誕生日消しゴム！」
愛里が嬉しそうな顔で受け取って
「ダイチがよ、これがいっちゃん消しやすいっつってよ」
「はい、私もこれを使ってます、でも、おとうさんのはもったいなくて使えないかも」
「また来年もやっからよ」
「はい」
愛里がニッコリした　来年も　来年もだよ　そんさきもでさ
あ　俺もカード　部屋に走ってって　カード持ってきて
「かあちゃん、誕生日おめでとう」
かあちゃんが封筒から出して
「これは・・　確か触ったものをすべて凍らせる女よね」
「え？　や、俺的にはプリンセスっつうつもりでさ」
「フッ」
かあちゃんが中見てる
　“かあちゃん誕生日おめでとう
　　俺はかあちゃんのことを本当に尊敬していて　かあちゃんに導かれてるって思ってる
　　これからもかあちゃんはかあちゃんでいてください　大一”
「これはとうちゃんに」
「こりゃ・・　握りメシがいっぺえついてんな」
「とうちゃんつったら握りメシだからさ」
「そっか？」
とうちゃんがニコニコしながら　裏に書いてある俺からの言葉読んでる
　“とうちゃん　たんじょう日おめでとう
　　とうちゃんが生まれてきてくれて俺は本当にうれしいよ
　　とうちゃんの息子でいられてしあわせです　大一”
「そんで・・」
ちっとドキドキすんな
「これは愛里に」
「カードも？」
「うん」
愛里が封筒からカード出して
「このカード・・」
やっぱキノコはダメ・・っすか
「どこで買ったんでんすか？」
「え、あの、前に愛里と行った店、ヤッさんたちの奥さんの買った・・」

「あそこにあったの？」
「え、あった・・けど」
「この作家さんのは活版印刷で」
活版印刷？　　ドイツのグーテンベルク？
「手描き風の植物がリアルだけど可愛くて」
「え、マジ？」
「オンラインでは見つけられるけど、なかなか店頭にはなくて」
「あったけど」
「キノコ！　　可愛い」
よ　かっ　た
　“愛里　誕生日おめでとう
　　愛里が生まれてきてくれて　俺は心からありがとうって思ってる
　　これからもずっと愛里の誕生日を祝わせてください　森下大一”
「ありがとう」
「や、よかった」
マジ　ホッとしたぁ

とうちゃんがかあちゃんの前に　俺が愛里の前に
「プリン？」
「ごめんな、小せえケーキが売ってなくてよ」
「いいわよ、お昼にケーキ食べたから、たまにこういうのいいわね」
「昭和レトロみたいなプリンですね」
とうちゃんと顔見合わせて　よかったな　とうちゃん
「ほら、カズオも」
かあちゃんがスプーンでとうちゃんにも食わせて
「あの・・　あなたもどうぞ」
「俺はいいよ、愛里全部食っていいよ」
「え、でも、なんか縁起物みたいなのだから」
「縁起物ってさ　ハハハ」
「こっち半分どうぞ」
「あ、おう」
愛里と二人　端っこから　そんで真ん中のとこがテロからンて倒れて
俺は　それをすくって　愛里の口に入れた
「ん・・　入れるなら入れるって」
「誕生日だから」
「どういう関係が」
「愛里さん」
「あ、はい」
「このジーンズのリボンの結び目のオムライス可愛いわ」
「それは、あの、一緒にガチャで」

「あら、二人でガチャしたの？」
「はい、誕生日イベントで」
「へえ、おもしろいこと考えるわね」
「あ、や、なんつうか」
俺にはそんくれえっきゃ考えらんねえだけで
「このチャーム、私とカズオがもらってもいいの？」
「はい、ですよね？」
「おう」
「それじゃ、このお花をたっぷり鑑賞したあとでいただくわね」
「はい」
テーブルの上の　愛里が作ったウェデングブーケ
「あ、その下のは、おかあさんのウェディングドレスに見立てたもので」
「そうだと思ったわ、このジーンズのリボンは地下道での写真のときのジャケットね」
「おとうさんのいらなくなったジーンズをカットして」
「いちばんいい活用方法よ、捨てろって言っても捨てないんだから」
「まだ残りもありますけど」
「捨てていいからね」
「でも・・」
「この白の部分がウェディングドレスね」
「はい、あの丸くカットして縫ったのは、大一さんです」
「あらそう、まあなかなかうまく縫えてるんじゃない」
「おかあさんなら、細かく気を使ったことはわかるって、大一さんが」
「そうね、息を止めて縫ったのが目に浮かぶわ」
すっ　げえ
「二人ともありがとう」
とうちゃんもペコッて頭下げてさ
はぁぁぁぁ　よかった　なんか　よかった　そんで　なんか
ドッと　なんか　きてんな

オーバーヒート

シャワー終わって　部屋に入って
バタンとベッドの上　なんかダリィな　なんだこのカンジ
勉強してっときも　なんか頭痛くて　なんか・・このカンジ・・
ちげえよ　ちっと疲れただけだ　喜び疲れっつうかさ　いっぺえしあわせでさ
明日の愛里の弁当は・・　愛里の弁当・・　あれ　なんも浮かばねえ　んっと・・
明日の愛里の弁当は・・あい・・り・・の・・

え・・　なんか　熱？　　何時だ　01:24　まさか・・　んっと　とにかく体温計
リビングのボードの中の・・
「ダイチ？」
とうちゃん
「ごめん、起こしちまった？」
「どした？」
「や、なんもねえよ」
「熱あんじゃねえか？」
「まだ計ってねえから」
とうちゃんが俺のおでこに手ぇあてて
「ダイチ、熱っちいよ」
「解熱剤飲んで寝っからさ」
「頭冷やすの持ってくからよ」
「自分でやっからとうちゃんはもう寝てよ」
「ダイチ、早く寝てろ」
とうちゃんは俺が熱出すといっつもすげえ心配すっけど
心配すっから　寝よう
ベッドで寝てたら　とうちゃんがタオルにくるんだアイスノン持ってきてくれて
「薬飲んだか？」
「熱計ってっから」
ピピピッ　39 度 2 分　マジかよぉ
「水持ってくっからよ」
なんでだよぉ
「ダイチ」
とうちゃんが水持ってきてくれた
「ほれ、薬飲めや」

「うん、とうちゃんもう寝てよ」
「とうちゃんのことはいいからよ」
「俺も寝れば治っからさ」
薬飲んで横になったら
「ダイチはがんばったもんな」
「なんもしてねえじゃん」
「アイリちゃんの誕生日のよ」
「んな、弁当作っただけだよ」
「美里や俺のことまでよ」
「ただ弁当作っただけじゃん」
とうちゃんが　俺の頭撫でて
「ありがとな」
とうちゃん　んなさ
「なんかあったら、すぐとうちゃん呼べよ」
「あ、うん、わかった」
「ちゃんと寝てろよ」
「うん、寝る」
とうちゃんが　心配そうな顔のまんま　ドア閉めた
なんで熱出してんだ俺　なんなんだよこれ

アラーム
あっ　ヤベ　愛里の弁当
起き上がったら　あ・・っと　めまい　熱どうなんかな
ピピピッ　38 度 2 分か　こんくれえなら
顔洗わねえと
ドア開けたら　とうちゃんがキッチンから出てきて
「ダイチ、寝てろ」
「もう大丈夫だよ」
とうちゃんが俺のおでこに手ぇあてて
「まだ熱っちいよ」
「こんくれえならさ、現場じゃねえしさ」
「ダイチ、アイリちゃんの弁当は俺が作っからよ」
「そんでも」
「とうちゃんのいうこと、きいてくんねえか」
「え・・」
とうちゃんのその顔と言葉には　弱えんだよ俺
「学校にはかあちゃんから電話してもらうからよ」
かあちゃんのこと、かあちゃんて　とうちゃんの中で俺はすっかり小せえときの俺で
「わかった、今日は休む」
「そっか」

とうちゃんがホッとした顔して　しゃあねえよな　熱出ちまったんだから
ベッドに横になったら　やっぱ眠くて・・

ドア・・開く・・お・・と・・
まぶた・・重てえ・・
「やっぱりね」
「あ？　　かあちゃん？」
「ゆうべカズオが言ってたのよ、あんたが熱出すかもれないって」
「とうちゃんが？」
「熱を出す前の顔をしてるって」
「え、マジ？」
「オーバーヒート」
「なに？」
「愛里さんの誕生日でオーバーヒート起こしたのね」
「俺は弁当作っただけじゃん」
「あんたの意識ではそれだけでしょうけどね」
「なんだよそれ」
「あんたは小さい頃から、これだと思うことには全神経、全細胞フル稼働させちゃうから」
「ハ？」
「昭和のプリン、作ったでしょ、ゆうべ」
「あれは・・　とうちゃんがプリン買ってきて、そのまんまじゃなって作っただけでさ」
「愛里さんがガチャでいちばん欲しかったのはプリンだったんでしょ」
「え？　　あ、そうだった」
「愛里さん言ってたもの、それで昭和のプリンを作ってもらって嬉しかったって」
「俺・・　全然んなこと意識してなかった、マジ」
「それよそれ」
「それ・・？　　なに・・？」
「あんたは大切な人の言葉や見たものすべてをインプットしちゃうの」
かあちゃんは・・　なに言ってんだ？
「そして、何かが起爆剤になって、点と点をパパパッて無意識につなげちゃうのよ」
あれ・・　前にも誰かに・・　誰だっかな・・　いいけど
「そんなことを無意識でやっちゃうからオーバーヒート起こすのよ」
「なんかよくわかんねえよ」
「いいわよ、わからなくて」
「だったらなんで言うんだよ」
「あんたの状態を、いちおう説明しただけよ」
「なんだよそれぇ」
「カズオは愛里さんにお弁当持っていって、学校まで送るって出ていったわ」
「マジ？」
とうちゃ〜ん　ありがとう

「学校にも電話しておいたわよ」
「かあちゃん、ありがとう」
「私も会社に行くから」
「うん、いってらっしゃい」
「ダイチ」
「ん？ なに？」
「よくやった」
え？
ドアが閉まった
なんだ？　今の？
眠む・・

ん・・　うわ　メッチャ汗かいてる
今何時だ？　14:25　マジ？　すげえ寝てた　なんかスッキリしてんな
いちおう熱計ってみっか
ピピピッ　36 度 7 分　やった　平熱
着替えっか　つか　シャワーだな
ドア開けたら　とうちゃんがキッチンから飛び出してきて
「ダイチ」
「とうちゃん、熱下がったよ」
「そっか、あ・・　そっか」
メッチャホッとした顔してる　心配してくれてたんだな
「ダイチ、うどん食うか？」
「うん、シャワーしたら食う」
「そんじゃ作っとくからよ」
「ありがとう」
シャワー　ヒゲも剃んねえと

とうちゃんのうどんは　熱出した後は格別に美味えな
「とうちゃん、メッチャ美味えよ」
「そっか？　ずっと寝てっから起こすのもなあ」
「起きたら午後になっててビックリした」
「二回くれえ頭冷やすの替えに行ったんだけどよ」
「え？ マジ？　全然気ぃつかなかった」
「すげえよく眠ってたからよ、起こさねえようにな」
マジ爆睡だな
「ダイチ、それ食ったら寝ろや」
「や、もう熱は下がっ・・」
とうちゃん心配してんだもんな
「わかった」

部屋戻った・・ら　シーツ換えてある
俺がシャワーしてる間に換えてくれたんだな
メッチャ汗かいてたもんな
換えたばっかのシーツの上に横になると　なんか・・　腹いっぱいになったら・・
目が・・勝手に・・閉じ・・て・・

ん・・　あ？　　あれ？　　目ぇ開いてるよな　真っ暗だけど
何時だ？　　20:10　ハ？　　ウソだろ
部屋の灯りつけて　ん・・・っと？　　顔洗うか　寝すぎて逆に頭ボーッとしてんな
ドア開けたら
「ダイチ？」
リビングから　かあちゃんの声
「ああ」
「起きたの？」
「うん」
「ちょっとこっちに来て」
なんだ？
リビング入る・・と　え？　　な　なんだ？
ソファの真ん中にかあちゃん、その横に愛里　そんで端っこの床にとうちゃん
すっげえ真剣な顔で俺のこと見てんだけど
なに？　　なんだ？
「ちゃんと聞きなさいよ」
え？　　な、なんかあったんか？
「頭はしっかりしてる？」
えっ？　　なに？
「寝すぎでボーッとしてるんじゃない？」
「あ、や、大丈夫」
この異様な光景で一気に目ぇさめたから
「まず私から」
なんだよなんなんだよ　メッチャ心臓バクバクすんだけど
「今日、衣装が渡ったそうよ」
「衣装？　　あ、運動会の？」
「これよ」
う・・わっ　真っ赤　つか、なんつうの、戦隊モノみてえな　これ着んのか
「この所有者さんは 172cm だから、あんたには小さいの」
「え？　　そんでも、なんとか着れなくはねんじゃね？」
「ツンツルテン」
「そんでも、リレーと応援タイムんときだけだからさ」
「モエちゃんは」
愛里　今日はじめて顔見れたよ

「サイズ感もこだわってて、私のは 170cm の人ので、丈はまあいいんですけど、
　ウエストがブカブカで、男の人のなので、そこはちゃんと調整しないとで」
「愛里さん、それは私がやってあげるから心配しないで」
「はい、ありがとうございます」
「さて、ダイチ」
なんで、んなすっげえ、なんつうか重要な仕事の会議してるみてえな顔なんだ？
「あんたのをどうするかよ」
「え・・　あ、ホームセンターで赤のジャージ買えばいぃんじゃね？」
「ホームセンター」「ホームセンター」
かあちゃんと愛里が同時におんなしようなトーンで繰り返したけどさ
「赤ってさ、けっこう売れ残ってっから、安く買えんじゃね？　　俺探して買っ」
「あんたは！」
「え？ あ？ な、なに？」
「まず、赤でも他の人の赤と色合いが違ってたらダメでしょ」
「それは似たようなん選んで」
「川口くんが、ていうかモエちゃんですけど、言うには、このグループの衣装は、
　ハイブランドのものをアレンジしているそうで」
ん・・と？
「その中では、このソリクンの赤の衣装はまあまあブラントロゴがあまり見えないって」
なんか・・　愛里の言ってることが全然頭に入ってこねえ　どしたんだ俺？
「この衣装を持ってる男性コスプレイヤーは、すごくこだわっていて、
　生地や小物もかなりの再現度で、だからモエちゃんがお願いしたそうで、
　モエちゃんはファンのお兄さんやお姉さんに可愛がられているから特別に貸してくれたって」
ヤベエ　ひとっつも頭に入ってこねえ　俺・・　どっかおかしくなってんのかな
「作るしかないわね」
「え？　　えっ　つ、作る？」
「幸い、この肩用バックルベルトはサイズ調整できるものだから使えるわ、
　しかも、本物、ALEXANDER MCQUEEN、こだわりがわかるわね」
「え・・ちょ・・」
やっぱ熱出して頭どっかおかしいんかな　ひとっことも理解できねえ
「これは私が作るわ」
「え・・　えっ　か、かあちゃんが？」
「明日から三連休だし」
「あ、や、だったら俺作るよ」
「ホームセンターのものとブランドものを同列に扱うあんたには任せられないわ」
「そんでも、俺の衣装だからさ」
あ　そうだ
「愛里に生地選んでもらってさ」
「私は明日はバイトです」

「あ、そっか、そんじゃあさっては？」
「あさってとしあさっては佐藤さんたちと応援タイムの振り付けの練習しに行きます」
振り付けの練習？
「振り付けって、俺はまだなんも知んねえけど」
「おとうさんに動画は送りました」
「とうちゃんに？」
「おかあさんのタブレットにも動画を入れてもらったので」
「え、ちょ、俺まだ見てねえけど」
「まずはおとうさんです」
「とうちゃん？　とうちゃん？　なんでとうちゃん？」
「あなたが寝ている間に、おとうさんに動画を見せました」
「んと、なんでとうちゃん？」
「おとうさんは道を見出しました」
「道？　なんの道？」
「おとうさんの道でダメだったら、あなたの道はこの世に存在しません」
やっぱ俺、熱で頭おかしくなってんのかな　何言ってんのか全然わかんねえ
「ダイチ」
「とうちゃん」
「俺にまかせてくんねえか」
「え、まかせ、んと？」
「俺、わかったからよ」
「とうちゃん、何が？」
「カズオ、愛里さんを送ってあげてくれる？」
「え？　あ、俺が」
「あんたは熱出したばかりなんだから家にいなさい」
愛里がとうちゃんと玄関に・・
俺が寝てる間に　何があったんだ？
「かあちゃん、俺、全然わかんねえんだけど」
「何が？」
「かあちゃんや愛里が言ったこと」
「つまり、あんたの衣装は私に任せなさい」
「マジでいいの？」
「連休は何の予定もないし、急な無茶ぶり仕事が来ても断る口実になっていいのよ」
「そっか、そんじゃお願いします」
「夕食はカレーよ」
「あ、うん、食うけど」
「明日はカレーうどんね」
「あのさ、なんで応援タイムの振り付けはとうちゃん？」
「愛里さんの感覚を信じなさいよ」
「愛里の感覚は信じてっけど、なんでとうちゃんが出てくんのかがわかんねえんだよ」

「愛里さんがそれがいいって思ったんだから」
「そこがよくわかんなくてさ」
「私はお風呂に入ってくるわ」
なんかよくわかんねえまま
俺は　カレー食うか

空を飛ぶ

とうちゃんのカレーは　相変わらず美味え
つうことは　味覚はヤラレてねえっつうことだな
「ダイチ」
「とうちゃん、愛里のことありがとう」
「こんくれえよ」
「とうちゃん、運動会の応援タイムの振り付けさ、とうちゃんからって」
「アイリちゃんがよ、動画、みっつ見てくれっつってよ」
みっつ？
「俺が見たまんま、なんっつったけかな、こうだと思ったまんまっつったかな」
見たまんま　こうだと・・　思った？
「それをそのまんまダイチに教えてやってくれっつったんだよ」
「そんで、とうちゃんはどう思ったの？」
「どう思ったもなんもよ、あれはあれだろ？　　あの」
「ダイチ」
かあちゃん　風呂終わったんか
「お風呂入ってきたら？」
「俺、食ったばっかだから、とうちゃん先入ってくれよ」
「俺はここ片付けっからよ」
「俺やっとくよ、この皿洗って流し洗うだけだからさ」
「そんでもよ、熱出したばっかでよ」
「カズオ、入ってきて」
「あ、そんじゃ」
とうちゃんが俺の方見たから　俺はうんうんつって
とうちゃんがキッチンから出てった
かあちゃんが冷蔵庫から炭酸ミネラルウォーター出して
「あんたが小さい頃はカズオの真似ばっかりしてたわね」
「真似？」
「お米研ぐのも、見てて憶えちゃって」
「とうちゃん楽しそうに研いでっからさ」
「ただ、困ったのはね、あんたが二歳半？ それくらいのときに、右脚引きずって走るのよ」
「とうちゃんの真似してたっつうこと？」
「真似っていうより、走るイコールカズオの走り方だと思ってたのね」
だよな　とうちゃんのしか見てなかったんだろうな

「ヒトミが、ダイチ、違うよ、こうだよって走って見せても直らないの」
「俺は憶えてねえけど」
「そしたら、カズオがあんたの腰を両手で持ちあげてね、ダイチは空飛んでるなあって」
そんなんぜってえ楽しいじゃん
「ほれ、もっと前に進めってね、そうするとあんたは手足をバタバタさせて、
　カズオが、いいぞダイチ、もっと脚動かすともっと進むぞって、
　最初はバタバタしてるだけだったけど、手をこうやって動かして、
　両脚も高く、なんていうの？　ももを高くあげて？　空中で走ってる気になってね」
聞いてるだけでワクワクすんな　たまんねえな
「それに合わせてカズオがあんたを持ちながら前に進むのよ、そうするともっとね、
　それをずっとやってて、毎日毎日やってて、少しずつ下におろして、足が地面に届くくらい？
　そうやってるうちにふつうに走れるようになったのよ」
「マジか」
「前よりもっと速く走れるようになって」
「俺が憶えてんのは、幼稚園の運動会はいっつも一等だったってくれえかな」
「カズオは、脚を怪我する前はきっとすごく足が速かったんだと思うのよ、
　まあ、怪我した後？　私は後しか見てないけど、それでも速かったからね」
そんなことしてくれたんか　とうちゃん
「インプリンティング」
「え？」
「あんたはカズオを親と認識してカズオのやることをそのまま真似して、
　泳いで飛んで獲物を捕まえて、一人前の鳥になって」
「俺もとうちゃんも獲物捕まえてねえし、しかも鳥じゃねえし」
かあちゃんが鼻でフッと笑って
「それじゃ、私は寝るから」
「かあちゃん、おやすみなさい」
「おやすみ」
そっか　とうちゃんはそんなことしてくれて　空を飛ぶなんてさ
とうちゃんのあのでっけえ手でつかんでもらってたら　俺は安心して飛んでたんだろな

キッチンの掃除終わって　部屋に戻って
愛里に
『愛里』送信
『今日はなんもできねえでごめんな』送信
ピコン
『そんなこと心配しないでください』
ピコン
『具合はどうですか？』
『もうバリバリ元気っす』送信

ピコン
『クラスのみんなも心配してました』
そっか
ピコン
『今日はリレーの練習の予定だったけど』
あっ　そうだ　そうだった
ピコン
『水曜日とか木曜日とかに適当にってことになりました』
そっか
『なんかみんなに迷惑かけてごめん』送信
ピコン
『リレー班はそれどころじゃなくなったから』
ピコン
『休み明けまで振り付け憶えないとって』
休み明けまでに？　　え？　　俺は？　　とうちゃんにっつったけど
『俺は動画も見てないんだけどさ』送信
『見てえんだけど』送信
　　え？　　沈黙？
ピコン
『それじゃ送りますけど』
ピコン
『一人で勝手に練習しようとしないでください』
ん・・と？
『俺が練習しねえと俺はできねえよな？』送信
ピコン
『おとうさんに教えてもらえば』
ピコン
『あなたはきっと憶えられます』
ピコン
『それ以外の道は』
ピコン
『NOTHING』
それ以外の道はねえ？　　大文字で書くほどねえってこと？
ピコン
『あなたが熱を出したのは』
ピコン
『私のせいなんじゃないかって』
愛里　なに言ってんだよ
『愛里のせいじゃねえよ』送信
『1 ミクロンも愛里のせいじゃねえよ』送信

ピコン
『あんなに夢みたいな一日を作ってくれるために』
ピコン
『すごく神経使ったんじゃないかって』
『俺は弁当作っただけじゃん』送信
ピコン
『自覚ないとは思いましたけど』
や、自覚とかじゃなくてさ
ピコン
『おかあさんにそう言ったら』
ピコン
『おかあさんは』
ピコン
『なんでもない』
え？　なに？
『かあちゃんがなに？』送信
ピコン
『ちょっと恥ずかしいから』
『愛里言ってくれよ　お願いします！』送信
ピコン
『これはおかあさんが言っただけですからね』
『かあちゃんが言った　わかった　なに？』送信
ピコン
『愛里さんのことが好き過ぎて熱が上がったのよって』
かあちゃん　いいこと言うなあ
『そうです好き過ぎて熱上がりっぱなしです』送信
ピコン
『今のはウソくさい』
『臭くねえよ』送信
ピコン
『なにそれ www』
ピコン
『それじゃ、私はそろそろ寝ます』
そっか　あ！　じゃなくてさ
『愛里　動画は？』送信
ピコン
『忘れてました』
ピコン
『送りますけど』
ピコン

『見ても何も考えないでください』
どういうことなんだ？
ピコン
『タイトルは S-Class です』
S-Class？　2 組じゃねえの？　2-Class　正確には Class2 か
ピコンピコン
『これは MV です』
ピコンピコン
『これはダンス部分の動画です』
ピコンピコン
『これはあなたがやるイ・リノだけの動画です』
ピコン
『心配なので』
ピコン
『見たら LINE くれますか』
『わかった』送信
『すぐに見てすぐに LINE する』送信
ピコン
『それじゃまた』
ん・・と　これが MV か
な・・んだ　これは？？？？
火柱立つし馬出てきて　場所が次々どこだ？　なんでタコなんだ？
意味わかんねえ　何の歌かもわかんねえ　一言で言えば・・　カオスだ　俺の頭ん中も
えっと　んっと　ダンス部分のやつ
あれ？　俺の担当の入野さんはどれだ？　そんで誰がどれだ？
あ・・　終わった　前のよか短けえのか　一分にするっつってたもんな
そんで　これが俺の担当の入野さんだけの
え・・・・・っと？　この人　体幹すげえな　あ、終わっちまった
なんか・・　なんだ？　全然憶えられる気ぃしねえ
ピコン
『見ましたか？』
あ　LINE すんの忘れてた
『見た』送信
ピコン
『どうでしたか？』
どうでしたかって　なんつうか
『全然わかんねえ』送信
『わかったのは』送信
『入野さんの体幹はハンパねえ』送信
ピコン

『今はそれでいいです』
マジか？　いいか？　連休明けまでってさ
ピコン
『おとうさんが教えてくれます』
とうちゃんがって・・
ピコン
『そうしたらあなたは絶対憶えられると思います』
愛里　ずっとそう言ってっけどさ
『なんでとうちゃんなの？』送信
ピコン
『うまく説明できないんだけど』
ピコン
『私の感覚がそうだって』
愛里の感覚？
ピコン
『ダメだとしたら私の責任だから』
や、ちげえよ
『愛里の責任じゃねえよ』送信
だよな　俺が愛里の感覚信じねえとさ　俺は愛里の感覚信じてんだよ
『愛里』送信
『愛里の感覚がそうだっつうなら』送信
『きっとそうだ』送信
『俺はとうちゃんに教えてもらう』送信
『とうちゃんは俺に空飛ばせて』送信
『走ること教えてくれた人だからさ』送信
ピコン
『空の部分はよくわからないけど』
あ、だよな
ピコン
『おとうさんは道を見出したのは確かなので』
そっか　とうちゃんが　そっか
ピコン
『私はおとうさんを信じてます』
だよな　とうちゃんは信じられる人だよ
ピコン
『それじゃ私は明日はバイトにいってきます』
あれ？　愛里の弁当
『愛里　弁当持ってくよな　作るから』送信
ピコン
『明日は先生が家の近くのお蕎麦屋さんに連れて行ってくれるって』

マジ？
ピコン
『だからお弁当の心配はしないで大丈夫です』
『そっか』送信
ピコン
『あなたはおとうさんが憶えてる間』
ピコン
『おとうさんの代わりにお家の掃除や洗濯をしてあげてください』
ん・・っと？　とうちゃんが俺の代わりに憶えて？　俺がとうちゃんの代わりに？
いやいやいや、そこは考えねえでいい
『わかった』送信
ピコン
『それじゃ　おやすみなさい』
『愛里　おやすみ』送信
なんかわかんねえけど　まあ　とにかく　シャワー浴びて寝よう

とうちゃんの指導とかあちゃんの衣装

土曜日の午前中
かあちゃんは生地買いに行くって出かけた
愛里はバイトに行った
とうちゃんは家の掃除と洗濯したら
「そんじゃ、やってくっからよ」
つって出てった
俺が愛里の部屋の掃除終わった頃に
「ダイチ、できた」
つって迎えに来て
今　俺ととうちゃんは野っ原に座ってる
「ダイチ」
とうちゃんが　かあちゃんのタブレットの画像指さして
「この人たちはよ」
「この人たちは？」
「戦隊モノのヒーロー軍団だ」
「戦隊モノ・・の　　ヒーロー軍団？」
「そんで、これはよ」
動画指さして
「戦闘シーンだ」
これが　　戦闘シーン・・
「これ、見てみろ」
とうちゃんが動画 ON にして
「最初はよ、みんなパラッバラなとこ向いててよ、なんつうんだ？
　俺たちは知り合いじゃねえよみてえにしてっだろ」
あ　なんで揃ってねえんかなと思ってたとこだ
「ヒーローっつうのはよ、戦闘しねえときはフッツーの人のふりしてんだよ」
そんじゃ・・　知り合いじゃねえふりして顔背けてたっつうことか
「そんでも、この女の子」
「それは愛里だよ」
「愛里ちゃんが口笛吹くとよ、ジワ〜ジワ〜ッと集まってきてよ」
集まってきてる
「そんで、愛里ちゃんが親方なんかなあと思わせといてよ、後ろっから」
「それは志田だな」

「シダさんがヨギソー！ っつったらよ、みんながパワー注入してよ」
「パワー注入？」
「ほれ、カニみてえな恰好してガクンカクンてよ」
「これは・・　バワー注入してたんかよ！」
「そんでこの、シダさんがポンプみてえに下がれとかよ上がれってよ」
「あ、マジだ、この、手ぇユラユラはなんだ？」
「パワー注入してっときだから煙出んだろうな」
「煙だったんかよ！」
「そんで、シダさんが親方なんかなあと思ったら、この」
「それは佐藤さん」
「佐藤さんが真ん中で、なんつうんだ？　身体ならすっつうかよ」
「そんじゃ真の親方は佐藤さんっつうこと？」
「そこがよ、すげえ軍団なんだなあ」
「すげえっつうのは？」
「親方ヤラレちまったらどうもなんねえだろ？」
「あ、だよな」
「集合させる親方、変身しろっつう親方みてえによ、変えってから敵はわかんねえよな」
「あ、そういうことか」
「そんでこの、佐藤さんか？　パワー注入してっときの親方なんだろうな」
「つことは・・　このゆ〜っくり動いてんのは？」
「急にパワー入れたら爆発しちまうだろ、ほれ、首んとこ指で直してよ」
「あああああ、そういうことかよ」
「そんでコリコリコリっつって真ん中に」
実行委員だな
「それが敵の目ぇ引いてるうちに、この、ダイチだ」
「一人外れっからなんでかなって」
「横から来た敵を回し蹴りすんだな」
「とうちゃん、ここは英語で、Kick it kick it kick it って、蹴ろ蹴ろ蹴ろっつってる」
「やっぱダイチは外国語わかるかんなあ、蹴ってるもんなあ」
「そんでもさ、この、俺つつうか入野さんは、なんですぐに連隊に戻らねえんだ？」
「敵を油断させてんだな」
「油断？」
「俺は戻んねえよってふりして、ほれ、サッて後ろに戻ってよ」
「あ・・　あああああ　そうだったんか」
「その間にこの、誰だ？」
「それは・・　虎之助」
「その人がよ、親方でみんなおんなしに腕振り回したり足蹴りしたりよ」
虎之助が攻撃の親方か？
「そんでまたこの」
「佐藤さん」

「ピョレピョレ光線の親方だな」
「ピョレピョレ光線？」
「ほれ、手ぇ十字に合わせて片っ方ギコギコって光線出してんだよ」
これは・・　光線出してたんかよ！
「ほれ、この、佐藤さんか？　　目ぇイッちまってっだろ」
「あ、イッちまってる」
「そんくれえパワー入れてんだな、メッチャすげえ光線出てんじゃねえか？」
「この、もう一人の佐藤さんが右手で頭たたいて左手で耳ポンポンしてんのは？」
「自分の頭ヤラレて耳キーンてなるくれえの、すげえ光線出してたんだな」
「それかよ！　　意味やっとわかった」
「そんで、ダイチはピカッポンチョの親方だ」
「ピカッポンチョ？」
「ピカッポンチョっつうでっけえ爆弾」
「爆弾・・！」
「重てえんだろうな、ポンポン投げねえもんな、よっこらしょってよ」
「とうちゃん、この、手を直角にしたり真っ直ぐにすんのはなに？」
「ヒーローっつうのはワザ決めた後にポーズつけんだろ」
決めポーズだったんかよ！
「こんな爆弾、一人二個、全部で１６個か？　　敵は全滅すんだろ」
「だからなんか、とうちゃん、こっちの動画でさ」
俺の携帯の中の MV ってやつ見せて
「火柱立ってるしさ、爆発起きててさ」
「ピカッポンチョはハンパじゃねえな」
すげえんだな　俺は　見えなかった　そんでも今は見える気いするよ
「そんで、この二人が」
愛里と実行委員だな
「手ぇパンッつうのが合図でよ」
「合図？」
「あれだ、ダイチ憶えてっか、前にテレビで見た、あの、から、空手か、それのよ」
「空手の型？」
「ダイチ、録画したの何回か見てすぐ憶えちまっただろ？」
「うん、全部の動きに意味があっからさ」
「それとおんなしだな」
「空手の型とおんなしだったんか！」
「全員でよ、なんつう名前の型なんかはわかんねえけどよ」
「指で突いたり足替えて蹴って、すっげえスピードで攻撃してるっつうこと？」
「だな、どっからも入る隙がねえもんよ」
「すげえワザだな、これじゃ敵はどっこも攻撃できねえもんな」
「そんで最後は、なんつうか、ヒーローがやんだろ？　　やっつけたよっつう顔」
「あああああああ」

俺は　地面にバタンて
「とうちゃーん、やっとわかったよ」
「そっか？　　よかったな」
「あれ？　　そんじゃ、この、さっきの火柱立ったりしてる動画はなんだ？」
「それは、あれだ、よくヒトミが見ててよ、今度これ見に行くっつったりよ」
「あっ　予告編？」
「それじゃねえかな」
「だから場所コロコロ変わったり服コロコロ変わってたんか、予告編だもんな」
「こういうこと起きんだろうな、タコ星人出てきたりよ」
「タコ星人とも戦わなきゃなんねえのか」
「すっげえ強えヒーロー軍団だから頼まれんだろうな」
「大変だな、そんでもやっつけねえとさ」
「だな、ダイチたちがやっつけねえとな、地球守んねえとよ」
「地球守って戦ってる場面だったんか！」
「やっぱダイチは頭いいなあ、すぐわかんだな」
「とうちゃんのおかげだよ」
「俺は見たまんまダイチにしゃべっただけでよ」
「俺、これならできる」
「そっか、とうちゃんダイチの動きだけは憶えたからよ」
「えっ　もう憶えたんか」
「ただな、回し蹴りんとこだけはよ、脚がな」
「それは俺できっからさ」
「そっか、そんじゃ、やっか、ダイチはとうちゃんの後ろでよ」
「わかった」
「最初はな、知らねえふりしてよ」
「うん」
「そんで・・　集まって」
とうちゃんが解説しながら俺の前で動いてくれっと　スッと頭に入ってきて
身体がパッパッと動く　動きの意味がわかったからメッチャ動ける
とうちゃんの後ろで　とうちゃんの動くとおりに　何回も
メッチャ　メッチャ楽しい！
「ダイチ、憶えたか」
「憶えた」
「そんじゃ、ダイチだけでよ」
「おう！」
もう身体に入ってる　とうちゃんの動きは俺の身体に
「ダイチ」
とうちゃんが曲止めた
「回し蹴りんとこよ、入野さんはこんくれえの高さだけどよ」
「おんなしにしてっけど」

「俺、思ったんだけどよ、もっと高く飛んだ方がメッチャやっつけられんじゃねえかな」
「あ、だよな、やってみる」
こうか？
「高さはいいけどよ、早さはさっきとおんなしによ」
「わかった」
こうかっ？
「すげえ！　ダイチ！　そんなら敵の頭、吹っ飛んじまうよ」
「マジ？　おっし！」
「あとよ、目がよ」
「目？」
「ほれ、入野さんの目ぇ、敵がちゃんと見えてっだろ」
「あ・・　見えてんな　すっげえ目してるもんな」
「こんくれえちゃんと敵見ねえとよ、知らねえうちにとっ捕まっちまえからよ」
「だよな、わかった」
最初っから
俺は　ふっつうの高校生で　ふっつうの暮らししてて　そんでも
とうちゃんと二人集まれば　パワー注入されて　どんどん注入されて
どんな敵がどこから来ても　蹴り飛ばして
身体中のエネルギー込めて　光線出して　ぜってえ逃さねえ
このクソ重てえ爆弾　食らわせて　食らわせて
そんで来る敵来る敵全部やっつけて　俺は守る　地球を　守る　愛里を！
どうだ！
終わった　ハァハァハァハァ
「とうちゃんハァハァどうだった？」
「ダイチ」
とうちゃんが　パーッと輝いた目ぇしてて
「敵がバッタバタ倒れてくのが・・　見えた」
「え、マジ？」
「ダイチはすげえなあ、すげえヒーローだなあ」
「とうちゃんもだよ」
「俺は・・」
「とうちゃんがすげえヒーローだから、俺もすげえヒーローになれんだよ」
「そっか？」
「そうだよ」
「そんじゃ、そろそろ家戻っか」
「うん」
今何時だ？　え？　もう 4 時過ぎてんじゃん　なんか薄暗れえなと思ったよ
「晩メシの買い出しもしねえとよ」
「今晩はカレーうどんじゃねえの？」
「アイリちゃんのイチゴとかよ、パンもか？」

「あ、だよな」
とうちゃんと二人　家に向かって
「とうちゃん、明日も見てくれねえかな」
「見てえよ、ダイチのヒーローはかっけえからよ」
「とうちゃんのヒーローがかっけえからだよ」
とうちゃんが俺の頭クシャクシャッて
「ダイチとひさしぶりに戦隊ごっこしたみてえな気ぃすんな」
「だよな、メッチャ楽しかった」
「俺も楽しかった」
それから・・

俺は　二日間とうちゃんとワザを磨いて
かあちゃんは・・　月曜日の夕方
「ダイチ、ちょっと来て！」
「おう」
「着てみなさい」
かあちゃんが手に持って見せてんのは・・
「かあちゃん、この上着の下、赤ちゃんのオムツみてえになってっけど」
「借りたのはただのコスプレ用だったからふつうのシャツ形態だったけど、
　あんたは激しい動きをするから、シャツの裾が飛び出さないようにしてあげたのよ」
「これ・・は、どっから着んの・・？」
「このジッパーを下げて、ここから、ほら、またいで、ここに足を入れて」
「え・・」
「袖を通して、それでジッパーをあげる」
着た・・けど・・さ
「ほら、股下から胸元まで余裕があるでしょ、腕を大きく上げても大丈夫よ」
「かあちゃん、これ着てさ、シッコ行きたくなったらどうすりゃいぃんだ？」
「ジッパー下げて脱いで」
「スッパでシッコすんの？」
「着る前にオシッコ行っておきなさい！」
「カズオ！」
え、とうちゃん呼ぶんか？
「見て！　ダイチの衣装できたのよ！」
とうちゃんがキッチンからリビングに入ってきて　俺の恰好見て
「なんか・・」
とうちゃん　これはダメだってかあちゃんに言ってくれよぉ　ヒーローがこんなさ
「懐かしいな」
懐かしい？
「あ！　ダイチが赤ちゃんときに着てたロンパースみてえだな」
　　リビングの中に　　沈黙の・・

「ダイチ、ズボンも履いてみなさい」
「え、あ、うん」
このビラビラは　なんなんだ？
「ダイチ」
とうちゃん　助けてくれよぉ
「かっけえよ」
マジで言ってんの？　　とうちゃん？
「そうでしょ？　　あとはこのバックルベルトをつけて・・　ほら」
「ダイチ、んっと、なんつうんだ？　　あ、ヒーローに見えっから大丈夫だ」
見えっから大丈夫？　　とうちゃ〜ん、よくわかんねえんならそう言ってくれよぉぉ
「愛里さんにも見てもらいましょう」
「えっ　愛里に？」
「そうよ」
「や、愛里には、んな・・」
かあちゃん　さっさと愛里に電話してるよぉぉぉ
「ダイチ」
とうちゃんが　俺のそばに来て　小せえ声で
「それよ、チンコ安定していんじゃねえか」
「チンコが安定する？」
「回し蹴りんときとかよ」
「そ・・か・・な」
ドアが開く音
「おじゃまします」
愛里・・
「愛里さん！　　こっちよ！」
愛里がリビングに入って　え　後ろに下がってっちまってる
かあちゃん、愛里がドン引きしてんじゃん！
「愛里さん、こっちこっち」
「あ・・　はい」
「どう？　　ダイチの衣装」
「え・・　あの・・　思ったまま・・　言えばいいですか？」
「言ってちょうだい」
言ってくれよ　このチンコは安定すっけど赤ちゃんのロンパ　そこは見えてねえか
「すっごい、かっこよくて」
え？
「そうでしょ？」
「再現度が完璧過ぎてビックリしちゃった」
「おかげで肩がゴリッゴリ」
「おかあさん、すごい！　　まさかここまで完璧にできるとは想像してませんでした」
「なんなら借りてきたものより完璧だと思うわよ」

「はい、オリジナル画像みたいで、本気でビックリしちゃって」
マ・・ジ・・か
愛里がかっけえっつうんなら　かっけえんだ　そっか
このズボンの下は　ぜってえ見せらんねえけどさ
「この肩のハーネスは借りてきたものですか？」
「それがね、取り外しができないものだったから買ってきたの」
「ALXANDER MACQUEEN を？」
「さすがにそこまではね、似たようなのがあったのよ、そしてオリジナルのより幅広にしたの」
「あ、比率を考えたらその方が、だからより本物みたいに見えたんですね」
かあちゃんと愛里の言ってることがひとっ欠片もわかんねえ
着替えよう
部屋に戻って　ズボン脱いで・・
これは　マジで誰にも見せらんねえな
「ダイチ」
「うぉわあああああ、　あ、とうちゃん？」
とうちゃんが俺の股間見て
「安定してんな」
「え、あ、うん、とうちゃん、ちょっと着てみてくれよ」
「お、俺？」
「うん、客観的に見てみてえんだよ」
ザッと脱いで　とうちゃんに渡すと、とうちゃんがロンパース着て
「これは、マジでチンコ安定すんな」
「そう・・だけどさ」
「チンコプラプラさせてたらよ、攻撃に集中できねえだろ」
「え？　あ！　そっか」
「これは戦闘服だな」
「あああああ、戦闘服だったんかよぉ、フッツーのジャージだと思ってたからさ」
「フッツーのジャージだと思わせてよ、チンコ安定させる戦闘服着てんだよ」
「とうちゃん、やっと納得できたよ」
「そっか？　ダイチはこれ着て戦うんだな」
「とうちゃん、せっかくだからさ、ズボンも履いてみてよ」
「いぃんか？　そんじゃ」
とうちゃんがズボンも履いて　俺はバックルベルトをとうちゃんの腰につけて
「え、とうちゃん、メッチャかっけえ」
「そっかあ？」
「とうちゃん、ポーズやって、ヒーローポーズ」
「こっか？」
「かっけえ！」
「ダイチ」

かあちゃん？
「え？　カズオ？」
「あ、んっと、あの」
とうちゃんがあわてて脱ごうとして
「やだ、似合ってる」
「へ？」
とうちゃんも止まってる
「あら？　なんでここに来たんだったかしら？」
とうちゃん固まったまんまだよ
「まあ、あとでいいわ」
ドアが閉まって
とうちゃんがメッチャ情けねえ顔で俺を見た
「ダイチ・・」
「とうちゃん、かあちゃん似合ってるっつってたよ」
「そんでもよ、ダイチのために作ったのを俺が・・」
「俺が着てみてっつったんだからさ」
「そんでもよ」
「とうちゃんマジヒーローに見えたよ」
「そっか？」
とうちゃんが情けねえ顔のまま笑って
「そんでもよ、ダイチ、これはチンコは安定すんな」
「だな、チンコ安定服だな」
「バカなこと言ってないで！」
ドアの外から　聞いてたんかよぉぉぉ
「ちゃんとクローゼットに下げておきなさいよ！」
「わかったよ！」
あ、そうだ
「かあちゃん！　ありがとう！」
「あんたの幼稚園のお遊戯会を思い出しながら作ったわよ！」
お遊戯会って　まあな　高校生になってもあんま変わんねえっつうことか

そんなこんなで　敬老の日の連休は終った

MV:https://youtu.be/JsOOis4bBFg?si=IdHEhOSYJMsNojUm
ダンス動画：https://youtu.be/bW7yoIReiWA?si=YJhiLh8jZ7s4hLho
LEE KNOW – S-Class:https://youtu.be/dJSfOG-tIxs?si=u49XC-PqHdOp0GYE
（ 最初と最後の 30 秒ずつくらいというザックリとした設定 ）

リノの衣装：https://img-cdn.jg.jugem.jp/846/2918953/20241009_2011442.jpg?_ga=2.257086475.1833552290.1715551146894.1683863438

クラスＴシャツ

火曜日の朝
学校に行く道　愛里と手ぇつないで
「今日からみんなで練習ですね」
「おう」
俺はもう 100 パーワザは身についてる
昨日　愛里に見せよっか？ つったら「怖いからまだいいです」てさ
やっぱ女の子は戦闘シーンは怖えんだろうな
そんでも愛里も一緒にやるんだよな　いや　愛里は戦わねえでいいよ　俺が守っからさ
「なんですか？」
伝わんねえか？　　俺のこの強い念つつうかさ
「やだ、なに？　　黙って見てたら気持ち悪い」
「愛里ぃぃ、気持ち悪りぃってさぁ」
「あ！　　言うの忘れてました」
「ん？ なに？」
「クラスのＴシャツ作ってるそうです」
「Ｔシャツ？　　あの真っ赤なんがあんだろ」
「あれはリレーのときと応援タイムのときだけで、他の競技のときと、
　ダンサー以外の人たちはずっとクラスのＴシャツ着るから」
「へえ」
「モエちゃんがデザインしたって」
川口の妹　大活躍だな
「まだ予算があったけど、ちょっと足りないから、一人 500 円ずつ徴収するって」
「ごひゃくえんーーーっ？」
「そんな大きい声出さないで」
「んな、500 円も払ってさ、ヘンなＴシャツだったらさ」
愛里が俺のことジーーッと見てっけど？
「愛里？」
「あの煤けてダサい赤だったＴシャツを着てるあなたにとって、ヘンなＴシャツってなに？」
「え、や・・」
ロンパースみてえの
「安心してください、あなたのあの赤Ｔ以上にダサいＴシャッはこの世に存在しないから」

「愛里、なんか怒ってんの？」
「え？　怒ってないです」
「なんか俺に怒ってるみてえな気ぃすんだけど」
「あ、ごめんなさい、ちょっと、ていうか、けっこう緊張してて」
「なんで？」
「放課後の練習」
「んな緊張することねえって、ただの練習なんだからさ」
「あなたがどれくらいできてるのかが・・　今、私は不安と恐怖の中です」
「俺はカンペキだからさ」
「あなたのカンペキっていう角度がどっち方向なのかわからない」
どっち方向？
「あのマイムマイム見ちゃったから」
「あれはフォークダンスじゃん、これは違えじゃん」
「おとうさんに賭けるしかないです」
「とうちゃんはすげえよ、マジで」
「そうだと、私も思ってますけど、見るまではまだ・・」
「だから見せよっかっつったじゃん」
「いいです、どうせ・・　今日の放課後には見るんだから」
「おう」
「私も佐藤さんたちと練習したけど、すっごくむずかしくて」
「わかんねえんなら教えよっか？」
「あ、大丈夫です、ただ・・　口笛がうまく吹けなくて」
「そこは効果音があっからさ」
「効果音？」
「吹く真似だけすりゃいぃんだよ」
「あ、そっか、でも、いちおうがんばってはみます」
愛里はえれえなあ　戦闘シーンなんてバスッドスッつうのは全部効果音なのにさ
「あ、校門」
約束どおり校門とこでは必ず手ぇ離すしさ

学活んとき　実力テストの結果が渡された
愛里がゆ〜っくり開いて見てる
「えっ？」
愛里？　どした？　なんかあったんか？
愛里が　なんかオドオドしてっけど
「森下、今回も１位？」
「おう、虎之助、練習はしたんか」
「やったよ、連休中、川口と志田と三人で」
「そっか、マスターしたか」
「むずかしいね、俺は振り付け憶えるのは慣れてるけど、それでも大変だった」

「マスターは、したんだな」
「うん、川口もこれなら大丈夫なんじゃないかってさ」
「そっか」
軍団だからな　一人でも攻撃方法間違えっと敵にヤラレっからさ

一時間目が終わって　速攻愛里んとこ
「愛里、なんかあったんか？」
「え？」
「学活んとき、えって声出してたからさ」
「それは・・」
「なに？　　言ってくれよ」
「あなたの世界では」
俺の世界？　　ここだけど？
「消しゴムのカスくらいのことで」
「消しゴムのカス？　　なんの話？」
「え・・　それじゃ、廊下に一緒に来てください」
「あ、おう」
愛里の後ついて来たのは　廊下に貼り出してる実力テストの結果の前・・だけど？
「あなたはいちばん右端ですね」
「ああ、んで？」
「軽くああとか」
「一位っつうのは学活んときに渡ってわかってっからさ」
「こっちへ来てください」
ずーーっと貼り出してる紙沿いに・・
「このいちばん左端を・・」
100.　上原愛里
「愛里！　　すげえ！　　やったじゃん！」
「これで・・」
泣きそうな顔　嬉し泣きか
「あとは下がる一方ですぅぅぅ」
「愛里、んなことねえよ」
「あなたに言われても逆に説得力が全然ない」
「これはさ、愛里が、やればできるっつうことでさ」
「アメリカでママに頭にきて勉強ばかりしてたからぁぁ」
「つことはさ、勉強したらちゃんと結果が出るっつうことだろ？」
「写真撮っておきます」
「写真？」
「ここに私の名前が貼り出されるのは、これが最後だからぁ」
愛里が携帯向けて
「愛里」

俺は愛里の手首にぎって
「やめろ」
そのまんま下げた
「え？」
「最後じゃねえよ」
「でも・・」
「行ったり来たりはあっかもしんねえけどさ、俺も一年とき気ぃ抜いて三位だったことあっから」
「次元がちがうでしょぉぉ」
「違わねえよ、これからも俺が教えっからさ」
愛里が泣きそうな顔のまんま俺を見てっけど
「俺がそばにいんだろ？　俺は愛里の専属カテキョだぞ」
「あ・・　そうですよね」
「そうだよ、俺のこと信じろよ」
「はい」
「かあちゃんがさ」
「おかあさん？」
「できねえ人にできるできるっつうのは残酷だって」
「そう・・ですよね」
「愛里はできっから、ここに、できるっつう証拠あんだろ」
「証拠・・」
「俺も、愛里ができねえと思ってたら、できるなんて言わねえよ」
「あ・・　なんか、ちょっとホッとした」
「おう」
「森下」
森山　あっ　愛里がサッと教室の方に走ってっちまった
「相変わらずすごいね、一位」
「え、ああ」
俺も戻ろう
「俺は今回下がっちゃってさ」
「そっか、中間がんばれよ」
「そうしないとヤバイよ」
「そんじゃ」
「トイレ行くなら俺もつき合うよ」
なんで森山と連れションしねえとなんねえんだよ
「や、教室戻っから」
「あれ、渡してくれた？」
「あれ？」
「プレゼント、割り箸」
あっ　忘れてた

「んっと、俺さ、金曜日、熱出して休んじまったんだよ」
「大丈夫？」
「あ、もう全然、あとで渡しとく」
「頼むね」
「あ、おう」
ヤッベ　森山からの割り箸、ロッカーに入れたまんまだった
「あ、チャイム鳴った、それじゃまたね」
「おう」
なんで 10 分休みになっと森山と遭遇すんだ？　　まあいい　教室戻ろう

昼休みの中庭
「ハンバーグ美味しい」
しあわせだよ愛里　愛里の美味そうな顔見てんのがさ
「こんなこと言っていいのか、わかんないんだけど」
「なに？　　言ってくれよ」
「あなたが熱を出した日、衣装が渡って振り付け動画も渡って」
「うん」
「おかあさんに、おとうさんに振り付けをあなたに教えてもらおうと思うって言ったら」
「愛里の勘はすげえよ、とうちゃんに教わったからメッチャわかりやすかった」
「はい、それは・・　結果は見ないとまだ不安ですけど」
「大丈夫だって」
「それで、おかあさんが、衣装はおかあさんが縫うって言ってくれて」
「あ、うん」
ロンパース
「振り付けを憶えるのと衣装を縫うのを同時にやったら、またオーバーヒート起こすって」
「だからそれはさ」
「ダイチはやるとなったら、全神経全体力フル稼働してやっちゃうからって」
「そりゃそうだろ、やるって決めたんならさ」
「おかあさんはあなたのこと心配してたんです」
「え？」
「あなたは、お姉さんと違って、全部自分でやろうとするって」
「ねえちゃん？」
「お姉さんは自分の限界を知ってるから、速攻でおかあさんにお願いって来るけど」
ねえちゃんの限界？　どこだ？　家事はできねえ　そこはかあちゃんには行かねえよな
「あなたは限界超えても超えてる意識もなくて、そこまでいくと誰も止められないって」
「そっかなあ、そんなにはやってねえよ」
「そういう無自覚なところを心配してて」
「無自覚？」
「限界超えてもやっちゃうし」
「や、俺、んなたいそうなことしたことねえよ」

愛里が　なんか　なんつうか悲しそう？ な目？ で俺のこと見て
「私は、頼りないけど」
「んなことねえよ、愛里がいてくれっから俺がんばれんだよ」
「がんばらなくてもいい」
「え？」
「元気でいて欲しい」
「元気だよ、ほれ、もう熱もねえしさ」
「おとうさんもおかあさんも、あなたには元気でいて欲しいんです」
え・・　それは・・
「愛里・・　俺、なんかの病気？」
「え？」
「それを・・　愛里もとうちゃんもかあちゃんも知ってるっつうこと？」
「バカみたい、違いますよ、発想が極端すぎる」
あ、よかった
「おとうさんも、あなたの力になれるって張り切ってたし」
とうちゃん　とうちゃんはいつでも俺の力になってくれてるよ
「おかあさんも、幼稚園のお遊戯会で王子様の衣装作った話をしてくれて」
「んな昔のことをさあ」
「嬉しいんだと思う、あなたのことサポートできて」
「俺は・・　かあちゃんにはサポートされっぱなしだよ、愛里の部屋んときもさ」
「私にも、サポートさせてください」
「愛里」
「あなたに守られてばかりじゃなくて、私もあなたのこと・・　ちょっとでも」
「愛里がいてくれっから」
「モチベだけじゃなくて、なんていうか、あ、たとえば、あたながお弁当作れなくても」
「愛里の弁当はぜってえ俺が作っから」
「話を聞いて」
「あ、うん」
「そういうときは、一緒に購買でサンドイッチ買ったり一緒に学食行ったりすればいい、　一緒にいられればそれでいいの、私、ほんとに」
「え・・」
「午前中のテスト結果のときも、すっごいネガになってる私を、あなたは一言でホッとさせてくれて」
「それはほんとのことだからさ」
「あなたは本当のことを言って私をホッとさせてくれるから、だから・・」
えっ　愛里が　　俺の手ぇにぎった
「そばにいてくれるだけでしあわせですから」
ヤベ　涙・・・
「ムリしないで、お願い」
「あ・・　おう」

涙声になっちまって
「あ、忘れてた」
愛里が携帯出して
「クラスＴシャツ、午後の二時間のときに渡すらしいんですけど」
切り替え早えな　俺まだ鼻水たれてっけど
「こういうデザインだそうです」
黒に　胸んとこに　あれ？　　これミスプリントじゃね？　　Ｓがひっくり返ってっけど
「愛里、このＳんとこさ」
「私たちは２組だけど、ここに２っていうのはダサイって」
「へえ」
俺にはよくわかんねえけど
「私たちの応援タイムのタイトルはS-Classで、そのＳを反転させて２みたいにしたって」
「へえ、そうなんか」
「S-ClassのＳって、スペシャルっていう意味だそうです」
スペシャル　だな　あのワザはスペシャルだ
「そろそろ戻りましょう」
「おう」
この連休中　愛里と二人っきりでゆっくり話すってあんまできなかった
俺はとうちゃんとワザの訓練で　愛里も他の女子と練習に行ってて
この昼休みの弁当食ってる時間が　そばにいてくれるだでしあわせだって言われてさ
俺は　しあわせだーーー！

午後は運動会の話し合いと、桶たち軍団はワザの練習、他の人たちは応援の練習っつうことで
「クラスＴシャツ渡すから、男子から、500円持って前に来て受け取ってください」
前の席の男子たちから立って前に行ってんな
金、用意しておかねえと　あれ？　　つうことは・・
「森下、そろそろ行かないと」
虎之助
順番に並んで
「森下くんは金曜日休んで、サイズは上原さんはＬって言ったんだけど」
愛里ぃぃ　わかってんな
「おう、Ｔシャツはで大丈夫」
「それじゃ、500円ね」
千円札出して
「おつり？」
「愛里の分も」
「え？　　あの、森下くんが、上原さんの・・分も？」
「おう」
「あ・・　それじゃ、わかった、ちょっと待って、えっと、上原さんのサイズは・・」

「M だよ」
愛里は身長高けえけど細せえから M なんだよ
「え？　あ、ほんとだ、レディースの M は・・　はい、これ」
「おう、ありがとう」
席に戻る途中で愛里に　えっ　メッチャ睨んでっけど
「愛里、これ、愛里の分」
メッチャ睨んだまま
「ありがとうございます」
愛里のは俺が金払うに決まってんだろ
これはさ　ある意味　愛里とペアっつうことじゃね？　クラス全員おんなしだけどさ
二人っきりんときはさ　ヤッベ　川口の妹に大感謝！

軍団の初訓練

ヒーロー軍団は体操着で校庭に集まった
「それじゃ、どうする？　まず女子から見せる？」「そうだね」
女子三人と愛里が位置について　音が始まって・・
愛里　後ろから前に歩いてくる　あれは・・　天使だ
もう愛里っきゃ見えねえ
フシュ〜シュ〜ッて一生懸命口笛吹こうとしてるくちびるがもうきれいでさ
動きがさあ　きれいでさ　指が細くて長えから手ぇ動かすと　なんつうか　天使の羽だよ
この軍団に愛里がいれば悪なんて塵みてえに消えちまうよ
だってさ　天使がいんだからさ　最強じゃん　神々しくて　ヤベ　涙・・
終わって　戻ってきた愛里が　俺の顔チラッと見て　え？　驚いた顔してっけど
泣くだろ　んな輝いてるきれいな天使見たら　誰だって泣くだろ
「次は男子ね」
「どうする？　俺たち三人で練習してたからさ」
「そうだね、森下は一人でやってもらおうか」
「え、ちょ、なんで俺は一人なんだよ？」
「四人でやる感覚に慣れてないからさ」
「そんでも本番は八人だろ」
「もういいから！　三人でやってよ！」
なんで俺は一人でやんだよ
男子三人が位置について　音が始まって・・
あれ？　これは・・　虎之助　すごくね？
バネもあって柔軟性あってキレもよくてさ
川口もがんばってはいる　いるけど　なんつうか　初期型ロボットみてえだな
志田は・・　重量感は武器だな　そんでもちっと動きにキレがねえっつうかさ
「それじゃ森下」
「おう」
チラッと愛里を見たら　メーーッチャ不安な顔してる　言葉言わなくてもわかる
不安って　なんつうの？　オーラ？　ビンビン出てっけど
んっと・・
俺はこの辺りにいんだよな
音が始まった
知らねえふりしてたのが　口笛で　中央近くに　そんで　ヨギソー！ でエネルギー注入！

コリコリからの・・　回し蹴りだーー！
　　「おおおお！」「わあ！」「すごっ」
そんで敵を油断させて隊に戻って　ピョレピョレ光線！
そんでもってーーーっ　ピカッポンチョ爆弾だーーーー！
そんでもって高速の型！　　どうだ、まいったか・・で終わりと
「すごーーーい！」「かっこいい！」「本物みたいだな」
愛里　俺はとうちゃんの教えを受けて　え？　愛里？　手で顔おおっちまってっけど？
「愛里？　　どした？」
「よかっ・・た」
「マジ？」
「すご・・く・・　あ・・　ホッとしちゃって」
「とうちゃんのおかげだよ」
「はい」
「愛里のおかげだしさ」
「あのマイムマイムを見たら・・」
え？
「これは・・　奇跡」
え、んっと？
「森下くん、すごい！」「森下、もうカンペキだよ」
「とうちゃんに教わったのを、そのまんまやっただけだよ」
「森下のお父さんてダンサー？」
「ちげえよ、主夫でたまにパートの仕事やってんだよ」
「なんか・・　すごいね」
「おう、とうちゃんはすげえんだよ」
「森下はいいとして」
虎之助　虎之助もすげえよ　見直したよ　つか　あんま意識になかったけどさ
「全体的にキレが足りないかもしれないよな」
「キレ、わかった」「どうすればいい？」
「まずサトユミさん」
俺の隣りの席の佐藤か
「全体的にはいいんだけど、手を十字にするときに、なにか足りないんだよなあ」
「なに？　　何をどうすればいい？」
「森下、何かアドバイスない？」
え？　　俺？　　正直・・　見てなかった
「んと、ちっともっかいそこんとこやってみてくねえかな」
「わかった」
隣りの席の佐藤　ピョレピョレ光線の親方・・なのにさ
「佐藤、目がイッてねえな」
「目？　　どこに行けばいいの？」
「ここんとこの動画」

虎之助がサッと出してくれた
「ほれ、目ぇイッちまってっだろ」
「目が・・　いく？　　どういう意味？」
「ピョレピョレ光線出す気あんのか？」
「ピョレピョレ・・コーセンって、なに？」
「ビームだよ、こっから、こうやってさ、ビーム出して敵をやっつけんだよ」
「敵？　　他のクラスってこと？」
「佐藤の目の前に敵がいて、ピョレピョレ光線でやっつけんだよ」
「えっと、ああ！　　そういう気迫が足りないってことだよね」
「おう、それだよ」
「例えが独特だけど、わかった、やってみるね」
「サトアヤさんはさ、この振りのとき中央にくるわけだけど印象が薄くなるんだよ」
廊下側の佐藤
「ここ？」
自分の出したピョレピョレ光線で頭ヤラレて耳キーンしたよのやつか
「森下、どう思う？」
「佐藤は、その細い目がさ」
「え、ちょっと、それはひどくない？　　私、けっこう気にしてるんだけど」
「佐藤のその目は武器だろ」
「え？　　武・・器？」
「その目にもっと力入れてさ、キッと横眼で見られたらイチコロでヤラレっだろ」
「え・・　イチコロ？」
「んなすげえ武器持ってんだからさ、使わねえ手はねえだろ」
「やだ、一瞬でコンプレックス無くなっちゃったんだけど」
「親に感謝しろよ、んな武器もらってさ」
「やめて・・　泣くから」
「泣いてる場合じゃねえよ、その目を有効活用だよ」
「わかった、意識してやってみる」
「羽生さんは、動きに無駄がなくてきれいだけど、もう少しキレがあってもいいと思うよ」
羽生っつうのは・・　実行委員か
「上原さんは・・　森下、どう思う？」
「愛里は、天使だ」
「すごい！　　森下くん、そんなことまで知ってる！」
知ってるに決まってんだろ　愛里は天使だよ
「ピリちゃんは天使って呼ばれてるんだって」
愛里が天使なんだよ
「それじゃ上原さんは、その持ち味を生かすってことでいいね」
「おう」
愛里はそのまんまが天使できれいで神々しいんだからさ
「川口はさ、練習のときも言ったけど、なんか動きがカクカクしてるんだよ」

「妹にも言われた、おにいちゃまはブリキのロボットみたいって」
「ブリキのロボットって、どういうこと？」
「大昔のオズの魔法使いに出てくるブリキ男」
「モエちゃん　アハハハ　ピッタリ」
「あとね、柔らかい動きのときはタコみたいって言われて」
「川口がタコになってちゃダメだろ、俺たちがタコ星人と戦うんだからさ」
「タコせいじん？」「え？　　なに？」
「川口、川口には妹を守りてえっつう強え気持ちがあんだろ」
「うん、いちおうあるつもりだけどね」
「ピカッポンチョ爆弾投げてみろよ」
「ピカッ・・なに？」
「これだよ、ピカッ　ポンチョーーー！」
「あ、そこの振り付けね」
「妹を悪いヤツらから守るつもりで爆弾投げてみろよ、本気でさ」
「本気で・・」
「そうだよ、本気じゃねえとやっつけらんねえよ」
川口がフーーッて息吐いて　虎之助がピカッポンチョ爆弾ときの音出した
川口が　メッチャ本気でピカッポンチョ爆弾投げてる　メッチャ本気で
「そうだよ！　　それだよ」
「森下、独特だけど教え方がうまいな」
「虎之助、これはとうちゃんの教えだ」
「お父さんすごいよ」
「すげえんだよ」
「次は志田だけど、動きが、ごめんな、ちょっと鈍いんだよな」
「なんかよくわかんなくてさあ」
「志田、柔道やってんだろ、小内返とか小内刈とかやってるつもりでやってみろよ」
「ああ！　　そういうカンジ？」
「そうだろ、戦ってんだぞ、一瞬で敵にヤラレっだろ」
「すごくわかりやすい！」
「森下すごいよ、俺はなんて言っていいのかわからなかったからさ」
「鈴木くん、それで、今からどうする？　　個人練習？」
「フォーメーションを憶えないとな」
なんだそれは？
「お互いにぶつからないように自分の移動場所を憶えることをやって」
虎之助　ここの親方だな　すげえ頼れんな
「まずは音に合わせて移動の練習しよう」
あの動画を・・　上から見たとして　俺はこっちからこっち　おいおい　志田ちげえよ
「志田はそっちだろ」
「あ、そうか」
「森下くん、他の人のも憶えちゃってるの？」

「あの動画を上から見たとして想像すりゃわかんだろ」
「え、上から・・」
「森下、すごいよ、そういうことなんだよ、新体操でもそうなんだよ」
これは体操じゃなくて戦闘シーンだから命がけなんだよ
「もう時間になるから、次は明日の放課後かな」
「そうだね」「明日までそれぞれで憶えなきゃね」
「明日はフォーメーションやってから、振り付けどおりで全員でやらないと」
「でも、そうなったら、誰が間違いとか指摘できるの？」
「俺がやるよ」「私も交代でやる」
虎之助と実行委員　力強えな
「ねえ、録画して、それを見せながらの方がわかりやすくない？」
「そうだな、それじゃ、俺と羽生で録画しようか」「わかった」
ここには・・　誰一人として脇役はいねえ　みんな　ヒーローだな
「あ、リレー班は、今日の放課後リレーの練習ね」
リレーの練習？　　あ、バトンの渡し方か
「僕、ちゃんとペンライト持ってきたから」
それが発端だよな
「それじゃ、お疲れ」「お疲れ様」「お疲れ〜」「またね」
なんか　いい軍団だな
これなら敵をやっつけられんな

リレーの練習

放課後の校庭では　秋の大会に向けてそれぞれの運動部が練習してる
西側の端っこのここは　旧体育館の解体工事の音がメッチャ聞こえる
あそこで　ヤッさんたち働いてんのかな
ヤッさんたちは土木だから内装解体で出た木っ端とか集めて運んでんだろうな
「森下くん」
「え？　　あ、なに？」
「どうしたの、ボーッとして」
「なんでもねえよ」
「これがペンライトなんだけどね」
川口がみんなに　なんだあれは？　　球体ついた・・　何に使うんだ？
「スイッチを押すと光るんだけど、色を変えるには携帯と連動させなきゃいけなくて」
色？　　何のために色変えるんだ？
「今はバトンの受け渡しの練習だから光らせなくてよくない？」
「そうだね」
あの球体ついた棒のために　こんな騒ぎになったんかよ
「それじゃ、並んでみよっか、あ、真っ直ぐじゃなくて、全走者の肩が左・右・左・右一線に」
メッチャ本格的だな　愛里わかったかな
「上原さん、左側に、右肩が森下くんの左肩と一直線になるように」
「え、んっと・・」
「愛里、気にすんな、どう渡されても俺は取るから」
「え？」
「愛里が手ぇ出したとこで俺は取るから、あんま気にすんな」
「はい」
「あ、ごめんね、私、陸上部の練習みたいになっちゃってた」
「とにかく渡してみない？」
W 佐藤がリレーの親方だな
「まず手を振って、走ってるみたいにね」
愛里が一生懸命手ぇ振ってるよ
「あんまりこっち見ないでください」
「あ、おう」
「1・2・3・4 ハイって言って渡す」
「ねえ、このペンライト、片方丸いからどうする？　　途中で持ち替える？」

「できればそうした方がいいよね」
愛里が　え？ え？ って顔して
「愛里、持ち替えねえでいいからな、俺はそんくれえつかめっからさ」
「でも」
「この手だ、この手」
手を開いて見せたら
「あ・・」
ホッとした顔した
「川口！　　しっかり持ち替えて、愛里に棒の方渡せよ」
「うん、わかったよ」
「それじゃ、いくね」
「あ、ちょっと待って、どこで持ち替えればいいかな？」
「受け取ったら速攻で」
「わかった」
「それじゃ、1・2・3・4 ハイ！」
「1・2・3・4 ハイ」「1・2・3・4 ハイ！」「1・2・3・4 ハイ」
「えっと、1・2・・」
「愛里、どんなんでも大丈夫だから」
「あ、それじゃ、はい」
「おう」
俺は愛里がそのまんま渡した球の方つかんで持ち替えた
「次は、少し走って渡す練習ね」
「走・・る？」
「愛里、もらう方はさ、こんくれえの距離までバトン持ってる人が来たら」
俺は愛里から離れて見せて
「もう走り始めんだよ」
「え?　なんか、ちょっと、わけが・・」
「愛里は走らなくていい、川口が来てバトンもらったら走ればいい」
「でも」
「川口！　　愛里は走らねえからバトンしっかり渡してくれ」
「うん、わかった」
「それじゃ遅くなっちゃいませんか？」
「愛里は俺にバトン渡すことだけ考えればいい、あとは俺に任せろ」
「あ、はい」
「パートごとにやってみる？　　私から志田くん、そこでいったん区切って、
　次は志田くんからアヤナってカンジで」
「そうだね、その方がわかりやすいかも」
「それじゃ、30m くらい離れて走って渡してみよっか」
佐藤と志田以外はいったん脇に退いた
「よーい、スタート！」

おお、やっぱ佐藤のフォームはきれいだ
「ハイ！」
志田に渡って　志田がペンライト持ち替えた・・けど、あわわして
あっぶねえ　落とすとこだった
「そのペンライト、落とすと壊れちゃうよ」
「あ、ごめんな」
「僕はいいけど、本番使えなくなったら困るからさ」
「そうだよな、気をつける」
「次は志田くんからアヤナ」
志田、けっこう速えな
「ハイ！」
佐藤の持ち替えも早えな
「次は、アヤナから川口くん」
こっちの佐藤もフォームきれいだ
「次は川口くんから上原さん」
「それじゃ、上原さん、いくよ？」
「あ、うん」
川口の走り方・・　なんかに似てねえか？　　なんだ？
「あの、えっと・・どっちの手で」
「上原さん、左手を出して受け取って、右手に持ち替えるの」
「あ、はい」
「川口くん、もう一回やってくれる？」
「うん」
あ！　　川口　鹿が逃げるときの走り方みてえなんだ　ピョンピョンてさ
「上原さん！　　ハイ！」
愛里が左手出して　そのまんま右手に持ち替えた
「そうそう！」「上原さんできた！」
W 佐藤　人を育てるのもうめえな
愛里がちょっとホッとした顔になったよ
「それじゃ、次は、上原さんから森下くんね」
「おう」
愛里が走ってきた　一生懸命走ってるよ
俺は　あんま走らねえで愛里を待ってて
「はい」
「おう」
球体んとこつかんで持ち替えた
「え・・っとね、上原さん、ちょっと走ってみよっか」
「え？　　うん」
愛里が一生懸命走ってるよ
「森下、上原さんさ」

志田　なんだよ
「時代劇の武士の奥方様が、旦那様って廊下走ってるみたいな走り方だよな」
志田っ　なんだその　まあそうかもしんねえけど　愛里は一生懸命走ってんだよ！
「上原さんの体型って、本当は走るのに向いてるんだよね」
「え、私は走るの苦手で」
「ちょっと、こう、両手を振ってみてくれる？　　そうそう、もっと早く、そう、それ」
「あ、腕を振ればいいの？」
「あと、脚ね、ももをもっと上にあげて、こんなカンジで」
「こう？」
「そう、それくらい、それで走ってみて」
「え、全然・・　前に、進まない」
「その場で足踏みじゃなくて、ももをあげて走るの」
「走る？　　え、どう・・すれば・・」
俺は　愛里んとこに駆けてって
「愛里、ちょっとごめん」
愛里の腰を両手でつかんだ
「ヒャッ！　　やだ、ちょっと！」
「佐藤と佐藤、右脚と左脚持ってくれ」
「わかった」「私こっちね」
そんで　持ち上げた
「ちょ、なに？」
「佐藤と佐藤、交互に愛里の脚動かしてくれ」
「うん、右脚はこうね」「左がこう」
「愛里、脚に合わせて腕振れよ」
「脚に？　　こう？」
「そうだ、そんじゃ前に進むぞ、少しずつ早くすっぞ」
佐藤と佐藤も愛里の脚をちこっとずつ早く動かして
「あ・・　なんか意味が」
「わかってきた？」「これだからね」
「そんじゃ、少しずつ地面に下すぞ」
「はい」
「そのまんま走れ！」
「はい！」
できた　愛里　できてる
「上原さん、前よりよくなったよ」「ももが上がるようになってる」
「なんか、やっと意味がちょっとわかった気が・・」
よかった　よかったよ愛里
「上原さん、もう一回走って、森下くんにバトン渡してみない？」
「うん」
愛里が　前よか　もも上げて　腕振って

「はい！」
「おう！」
「いいね！　すごくよくなった」「だよな」
「ただね、川口くんが・・」
「僕？　どこがダメ？　教えてくれたら直すよ」
「どこって・・　森下くん、なんとかできない？」
「あれは・・　まあ、あれでいぃんじゃね？」
「まあ・・　そうだね、遅くはないからね、すごく速くもないけど」
「え？　僕、見放されたの？」
「川口くんには川口くんのスタイルがあるから」
「それって、いいカンジに聞こえるけど見放してるよね」
「いいから！　川口くんはできるだけ早く走って上原さんにバトン渡せばいいの！」
「うん、わかったよ」
「森下くんは・・　走らなくてもいいよね」
「俺は、大丈夫だと思うけどさ」
「だよね、瞬間移動してるんじゃないかって言われてるもんね」
「瞬間移動？」
「始業式のときに森山くん助けたときも、あっという間にピュッて」
あれかよ
「フッツーに走ってるよ、俺は」
「ハハハ、まあそうだけどね」
「それじゃ、もう一回バトン渡す練習して終わりね」
「はい」「うん」「オッケ」「おう」「うん」

練習終わって　解散
俺は　なんとなく　旧体育館の方へ
「私、先に着替えます」
「あ、おう、俺もすぐ行くからさ」
「はい」
旧体育館は　仮囲いと足場のシートで全然見えねえけど
あっちが仮設事務所かな　その隣りが仮設休憩所と道具置き場か
「森下」
え？
「あ！　監督！」
「体操着なんか着てると、高校生みたいだな」
「高校生っすよ」
「運動会の練習でもしてたの？」
「おいっす」
「俺たちも出場することになってるんだよ」
「え？ あ？ は？」

「一般の部ってあるだろ、PTA とか同窓会とかの余興リレーみたいなの」
「それに出るんすか？」
「俺の父の同期が同窓会会長でさ、今年は解体工事が始まるから、
　PTA や生徒さんたちのご理解をいただくためにもゼヒって言われちゃってさ」
「マジッすか！　　ヤッさんたちも出るんすか？」
「ヤッさんとシゲさんは今違う現場に行ってるから、重機の宇野と足場の元木と末永」
足場の人たちはあんま知らねえな
「俺とショーさん」
「ショーさん出るんすか？」
「この忙しいのにさ、作業中断して運動会だよ、人探すの一苦労でショーさんに頼んだ」
「楽しみっすよ」
「現場のおっさんたちが走ってもね、まあ宇野や元木は若いけどさ」
「俺、応援するんで」
「いいよ、応援してもらうようなものじゃないしさ」
「応援しますよ、やっぱ、なんつうか、古巣っつうか」
「まだ旅立ってもないだろ、というか、夏休みにバイトしただけだろ」
「そんでも、やっぱ愛着あるんで」
「10 月にはヤッさんとスギさんもこっちの現場に入ることになってるよ」
「マジっすか？」
会いてえな
「それじゃ、俺は今から本社に戻って事務仕事があるから」
「あ、おいっす」
「運動会で会おう」
「ハハハ、そうっすね」
ウソみてえだな　つい半月前までは　俺も一緒に現場にいたのがさ
早く着替えねえと
愛里が待ってる

割り箸と代用バトン

ロッカー開けて
あっ　森山から預かってた割り箸
「愛里、これさ、森山が愛里にって」
「割り箸？　　なんで割り箸？」
「愛里が割り箸欲しいっつってたからって」
「私そんなこと言ってないです」
言ったんだよ　全然違げえ意味だったんだけどさ
「あ、わかった」
そうなんだよ　あんときさ
「私、一年のとき、ママがしょっちゅうお箸入れ忘れて購買に割り箸買いに行ってたから」
それで俺は愛里と初めて近距離で初めて口聞けてさ
「森山くん、からかってるんです」
「や、ちげえと思うよ、愛里の誕生日にってさ、俺が愛里に渡し忘れたんだけどさ」
「誕生日に割り箸っておかしいでしょ？」
そう・・だけどさ
「私がコクられたことも気がつかなかったことをまだ怒ってる？」
「それはねえよ、それは全然ねえよ」
「森山くんをかばうんですね」
「かばうとかじゃなくてさ」
「最近、あなた、森山くんとよく話をしてますよね」
「あれは森山から話しかけられてっだけでさ」
「あなたが話をしてるってことは・・　悪い人ではないですよね」
「悪りぃやつじゃねえよ」
なんか変わってっけど
「それじゃ、これは、親切でなのかなあ」
「まあ、うん、じゃねえの？」
「でも、１、2、3・・5膳も」
「箸袋も花ついて可愛いじゃん」
「だったらこれ、あなたの家で使ってください」
「へ？」
「このまま私のロッカーに入れておいても永遠に使わないと思う」
「俺が箸入れ忘れっかもしんねえじゃん、この前忘れたしさ」
「私のはちゃんと入れてくれてました」

「うん、まあ、それは」
「はい、これ」
「そんじゃ、もらっとく」
森山　なんつうか　ごめんとありがとうだな

帰り道
愛里がずっとなんか考えてる　どしたんかな
「愛里？」
「え？」
「なんか考えてんのかなって」
「あの・・」
愛里が立ち止まった
「お願いがあるんですけど」
「いいよ、なに？」
愛里が俺の顔ジッと見たけど？
「愛里？」
「話がちょっとズレますけど」
「うん」
「あなたもおとうさんも、お願いがあるって言うと、内容も聞かないでいいよって言いますよね」
「そりゃ愛里からお願いって言われたらさ、やりてえじゃん」
「とんでもないことでも？」
「とんでもねえことって？」
「たとえば、えっと・・　空を飛んでくれとか」
「いいよ」
「あ、ウソですウソです、本当にやりそうで怖い」
「俺は空飛んだことあんだよ」
「えっ？」
「つっても、とうちゃんが手で俺のことつかんで、ダイチは空飛んでんなあっつったって」
「あ・・　そういうこと」
「俺は憶えてねえんだけど、小せえ頃、走っとき、とうちゃんみてえに右脚伸ばして走ってて、
　そんで、とうちゃんが俺のこと両手で持ち上げて、俺は空飛んでる気になったらしくて、
　手足バタバタ動かして、そんで空走ってる気になって両脚動かすようになって」
「あ！　今日あなたが私にしてくれたあれって」
「あんときは意識してなかったけど」
「意識してなかったの？」
「咄嗟にやったんだけどさ、きっと、とうちゃんにしてもらったことそのまんまだな」
「あなたは・・　おとうさんという、なんていうか、親木？」

「おやぎ？」
「そこから養分や成分を吸収して、おとうさんとはまたちょっと違うあなたになったのかも」
「とうちゃんとは　ちょっと違う？」
「おかあさんの成分も入ってるから」
「かあちゃんの成分？　　そっかな」
「ありますよ」
「マジ？」
「はい、あ！　　お願いを忘れてました」
「おう、いいよ、なに？」
「リレーのバトンの受け渡しのやり方を教えて欲しくて」
「今日できたじゃん」
「みんなは、前の人が走ってくると走り出してだけど、私は走ってなくて」
「愛里はいいよ、そのまんまでさ」
「私も少しは力になりたいです」
「なってんじゃん、走り方も憶えてさ」
「サトユミさんもサトアヤさんも志田くんも、リレーの練習のために部活休んでくれて」
「うん、そんでもそれはチームのためでさ」
「最初に私がパニクッたから」
「それはしゃあねえじゃん」
「だから、サトユリさんもサトアヤさんも私を安心させるためのシフトを考えてくれて」
「あの二人、陸上部だったからさ」
「なんかさっきから」
「え？ あ？ なに？」
「教えてくれる気がないならいいです」
「ある、教える気ぃある、メッチャある」
「だって、なんかいろいろ、ああ言えばこう言うみたいな」
「愛里があんま真剣に考えちまってってからさ」
「だってみんな真剣になってますよね？」
「あ・・　うん、なんか・・な」
クラス対抗混合リレーってさ　もっと娯楽みてえなはずなんだけどな
「私は早く走るとかムリだけど、せめてスムーズにバトンの受け渡ししたいです」
「そっか、わかった、教える」
「ありがとう」
あああああ　このニッコリした顔見れんなら　なんでもやるよ
「でも、校庭でやるのは、ちょっと恥ずかしい」
「んっと、あ、そんじゃ家の近くの野っ原は？」
「あ、はい、あそこなら誰も見ないから」
マンションに着いて　二人でエレベーター乗った
「あ、バトンどうしよう」

「俺が、なんか代用できるもの考えっから」
「はい、ありがとう」
二階で下りて　愛里の部屋に向かって
愛里が鍵開けて
その手をつかんで
「愛里」
抱きしめて
「好きだよ」
愛里が俺の顔見上げて　なんかポ〜ッとした目で俺を見てて
その顔が　すげえ可愛くて
「愛里」
「あ、えっと、着替えて、あそこに行けばいいですか？」
　　キスしたかったんだけどなぁぁぁっ
「だな、30 分くれえしたらでいっかな、バトンの代わり探すからさ」
「はい」
「それじゃ」
愛里が　俺の腕ん中からスルッて抜けて
「またあとで」
「おう」
部屋ん中に入って　鍵閉めた
さてと、俺は・・　ペンライトの代用探さねえと

んっと？　まずは持つとこは・・　トイレットペーパーの芯か
そんで　丸いとこは新聞紙丸めてラップで固定して　芯にガムテでくっつける
玄関のドア開けて
「ただいま」
とうちゃんがキッチンから出てきて
「ダイチ、おかえり」
「とうちゃん、戦闘シーン、バッチリだった」
「よかったなあ」
「とうちゃんのおかげだよ」
「ダイチはなんでもすぐ憶えっからよ」
「とうちゃん、今日トイレットペーパー交換した？」
「トイレ・・　や、まだしてねえな、下痢か？　下痢してんのか」
「じゃなくてさ、こんくれえの筒みてえのが必要でさ」
「筒・・　ラップの芯なら」
「あんの？」
「さっきラップ切れてよ、新しいのにしたから、ゴミ箱に入ってる」
「おおおお、それだ！」
「なんかすんのか？」

「愛里とリレーのバトンの受け渡しの練習すんだけどさ、バトンの代わりが必要でさ」
「そっか」
とうちゃんがキッチンに入ってって
「ダイチ、あんぞ」
「とうちゃん、ありがと、あとさ、新聞紙あっかな？」
とうちゃんが流しの下の扉開けて
「ここによ」
ヨッシャーー！
新聞紙クシャクシャにして柔らかくして球作って　これをラップ二重にして包んで
芯がちっと長げえな　カッターで・・　こんくれえか
そこにこの球をガムテでつけて
「できた！」
「変わった形してんだな」
「俺のクラスのバトン、こんな形なんだよ」
「そっか、早く見てえな、ダイチが走ってっとこよ」
とうちゃんにとって運動会で走るっつうのは特別なことだもんな
「そんじゃ俺、着替えて野っ原で愛里と練習してくるよ」
「晩メシまでには戻ってくんだろ？」
「うん、愛里連れて戻ってくる」
「アイリちゃんと運動会の練習なんてよ、楽しいな」
とうちゃんがニッコニコしてそう言うと　俺もメッチャ楽しくなってくる
普段着に着替えて　あ・・　赤Ｔと緑のジャージになっちまったけど　いっか
野っ原に向かって走った

愛里と二人　夕暮れの野っ原
「そんじゃ、俺が川口として、愛里んとこに走ってくから」
「はい」
「当日は線引いてあっから、そこに川口が来たら走り出せ」
「線？」
「愛里が立ってっとこから 30m、だいたいこんくれえんとこ」
俺は愛里から離れて　だいたい 30m くれえんとこに立った
「あ、それくらいのところに川口くんが来たら走ればいいんですか？」
「うん、ちょっと待ってろよ」
俺は愛里から 30m くれえんとこの地面に足で線描いて
「ここな」
「はい」
「そんじゃ、俺はもっと離れたとっから走っから」
「はい」
愛里からずっと離れて
「行くぞ！」

「はい！」
走って　愛里のそばに　俺が描いた線んとこに着いたら愛里が走り出した・・けど
「愛里、後ろ見なくていいよ」
「でも、見ないといつバトンをもらえばいいのか」
「左手出して、手のひら真上じゃなくて、こんくれえ、なんつうか横にすっと渡せっから」
「これくらい？」
「うん、もっかい行くぞ」
俺は　愛里から離れて　走って
「愛里！　　スタート！」
「え？ はい！」
愛里が走り出して　俺は愛里の手にバトン渡した
「あ・・　こういうこと？」
「こういうこと」
「あなたがスタートって言ってくれたからわかりやすかった」
「川口に言っとくよ、テイクオーバーゾーンに入ったらスタートって言えって」
「テイク・・？」
「この 30m の間でバトンの受け渡しすんだよ」
「そうなんですか」
「そんじゃ、もっかいやるぞ」
「はい」
愛里から離れて　そんで走って
「愛里！　　スタート！」
愛里が走り出して　俺は愛里の左手にバトン渡した
「愛里、できたじゃん」
「でも、これって・・　信頼関係がないとできませんよね」
「まあ、うん、だな」
「私・・　そこまで川口くんを信じられるかな」
愛里　真剣にさ
「なんで笑うの？」
「や、なんつうか、信じてやれよ」
「そうですね、なんとか・・　信じてみます」
「不安だったら見てもいいからさ」
「え？　　どっち？」
「俺が今教えたのはマジなやつだけど、そこまでマジじゃなくていいからさ」
「でも、サトユミさんとサトアヤさんと志田くんは真剣ですよね」
「うん、まあ」
そっか　愛里のこと安心させようと思って W 佐藤と志田が真剣になってることが
逆に愛里を不安にさせてんのかもしんねえな
「愛里、佐藤たち言ってたじゃん、三人で引き離すから愛里は歩いてもいいくれえだよって」

「そうですけど・・」
「三人のこと信じてやれよ」
「そうです・・ね、でも・・」
愛里が不安そうな顔で俺を見て
「これくらい」
愛里が両腕広げて
「離れてたのが、私で、これくらい」
その腕を狭めて 1cm くれえの隙間にして
「近づいちゃったら」
「俺がいんだろ」
「あ・・」
「俺を信じろ」
愛里が　やっと　ホッとした顔した
「そうですね、あなたがいるから」
「俺がいんだよ、愛里にはさ」
「あなたのことは、信じられます」
なんか　胸んとこキューーーンてして
「愛里」
抱きしめた
「練習なのに・・　私は全然汗をかいてなくて」
俺の腕ん中で
「あなただけ汗かいちゃってて」
「汗臭せえ？」
臭くても離さねえよ
「臭くないけど」
愛里が俺の胸に頭つけて
「ありがとう」
「おう」
愛里がちょっと身体離して
「このバトン」
俺が作ったラップの芯と新聞紙のバトン見せて
「私とあなたの秘密練習の秘密兵器みたい」
なんて　可愛いこと言うんだよぉぉ
「愛里」
愛里のくちびるに　俺は　なんか　すげえ　なんか　メッチャ　ヤベッ
俺の　バトンが　ヤベエことになっちまって
「どうしたの？　お腹痛くなっちゃった？」
「や、なんもねえよ」
「だって、前かがみに」
「んと、そろそろ晩メシだからさ」

「あ、そうですね」
あ　なんとか　うん
「そんじゃ、帰っか」
「はい」
愛里と手ぇつないで
夕暮れん中　家に帰った

信頼関係

水曜日の朝
学校に向かってる愛里と俺
「私、今日、川口くんとバトンの受け渡しの練習しようと思ってて」
「川口と？」
「まだ信頼関係が築けていないので、応援タイムの練習の後やろうかなって」
「そんじゃ俺もやる」
「あなたとの信頼関係は築けてますから」
「そんでもさ、川口から愛里、愛里から俺の流れで練習した方がいいじゃん」
「でも川口くんとの信頼関係構築にあなたまで巻き込むのは」
「巻き込んでくれよ、つか、俺も入れてくれよ」
「プッ　グフッ」
「え、なんで笑うの？」
「入れてとか、子どもみたいだから」
「だってさ、俺、愛里と川口が練習終わるまでボケ〜ッとしてなきゃなんねえじゃん」
「先に帰ればいいでしょ」
「愛里置いて帰んねえよ、んなさ、ぜってえ置いてかねえ」
「だったら、私が何かで居残りするたびにあなたもいるの？」
「いる」
「ずーーっと？」
「ずーーっと」
「私が女子の友だちと帰りにカフェに行くときもついてくるの？」
「それはいいよ、愛里が友だちとどっか行くのはさ」
「だったら川口くんと行くときもいいってこと？」
「なんで川口とカフェ行くんだよ」
「友だちだから」
「川口はさ、やっぱいちおう男じゃん」
「お互い男とか女とかの意識ないから」
「そんでもさ」
「私はあなたが他の女子とカフェに行っても平気です」
「なんで俺が他の女子と、つか、なんで平気なんだよ？」
「何かの打ち合わせなのかなって」
「なんで何かの打ち合わせで他の女子とカフェ行かなきゃなんねえんだよ？」
「知らないけど」

「愛里、俺はどんな打ち合わせでも他の女子とカフェには行かねえから」
「そうですか」
「ぜってえ行かねえから」
「わかりました」
「おう」
「今日、川口くん塾かなあ」
「俺聞いてみっからさ」
「はい、お願いします、あ、校門」
サッと手ぇ離した

教室入ったら　川口がいた
「川口」
「森下、おはよう」
「おはよっす」
「川口くん、おはよう」
「上原さん、おはよう」
「川口、今日応援タイムの練習の後、ちっとつきあって欲しいんだけどさ」
「森下と？」
「や、俺と愛里と」
「どこに？」
「信頼関係を築くの」
「信頼関係？」
愛里　それじゃわかんねえよ
「あのね、も・森下くんが、作ってくれて」
愛里がスクールバッグん中から　俺が作った代用バトン出して
「やだあ、縦に入れておいたから頭の方ちょっとつぶれてキノコみたいになっちゃった」
「キノコ？」キノコ？
愛里が棒んとこにぎって　潰れた頭んとこモフモフ　その手つきが　ちっと
あ　川口と目が合った
川口　草食動物みてえな走り方するくせに　ドロッドロの肉まみれかよ
「なんで見つめ合ってるの？」
「や、べつに」「見つめ合ってはいないよ」
「これをバトン代わりに」
愛里が　まだ頭ちっとつぶれた棒を　俺と川口の前に突き出して
「上原さん、バトンなら僕持ってるから」
「でも、落として割れたら怖いから」
「愛里、本物使った方がいんじゃねえかな、なんつうか、慣れるっつうかさ」
「僕もそう思うよ」
「べつに本格的な練習じゃないし、信頼関係を築く練習だからこれでいいでしょ」
愛里がまたモフモフ部分を　さ、触るな　もうそれ以上は

また川口と目が合った　おんなしこと考えんなよ　川口っ
「あ、川口くん、塾は？」
「休むことにしたよ、金曜日も多分遅れちゃうから、今週は休むって伝えてある」
塾っつうのも大変だな
「ただね、数学のこの辺りの解き方が曖昧なんだよ」
「私に見せられても」
え？　　愛里が俺を見た・・けど？
「あなたが教えてあげればいいんじゃないですか？」
「え？　　俺？」
「それは森下に悪いよ」
「や、俺でいぃんならいいけどさ」
「いいの？」
「あ、まあ、おう」
「それじゃ、どこで教えてもらおうかな」
「リレーの練習終わったら図書室行けば？」
「行けばって、愛里は？」
「私は先に帰ります、まだ川口くんのところまでは到達していないので」
なんで俺と川口だけで図書室で　愛里は先帰んだよ？
「でも、図書室ってあまり話はできないんだよ」
「そうなの？　　それじゃ・・」
カフェとか言わねえでくれよ　俺と川口でカフェってさ
「私の部屋？」
ハ？
「いいの？」
いやいやいや　よくねえだろ
「うん、いいよ」
愛里　よくねえよ
「あ、あのさ、俺ん家は？」
「森下の家？」
「近けえしさ」
「私の部屋と同じ距離ですよね」
「んっと、あ、晩メシ食ってけばいぃじゃん」
俺ハ　ナニヲ言ッテンダ？
「いいの？」
「あ、お、おう、とうちゃんに言っとくから」
「あのね、おとうさんの料理、美味しいの」
「うん、この前のお弁当のアジの南蛮漬け美味しかったよ」
とうちゃん・・　俺・・　なんか　ごめん　つか　なんでこんな流れになった？
「ちょ、あの、俺さ」
「森下、ありがとう」

「あ・・　んと、とうちゃんに連絡してくる」
走って　廊下の隅で　とうちゃんに電話
「ダイチ、どした？　なんかあったんか？」
「とうちゃん、今日、晩メシに」
ハァァァ　ため息出る
「川口連れてっていっかな」
「そっか、わかった、なに食いてえ？」
「なんでもいいよ、とうちゃんが作ろうと思ってたもんならさ」
「そっか、いっぺえ作っとくからよ」
「ありがとう」
「そんだけか？」
「うん、そんだけ」
「そっか、よかった」
「そんじゃ、切るよ」
「ダイチ、友だちがメシ食いに来てくれんなんてな」
「え？」
「嬉しいな」
そう言えば・・　んなこと今まで一度もなかったな
「うん、とうちゃんのメシ楽しみにしてんだよ」
「そっか、そんじゃな」
「うん」
ピッ
とうちゃんが　なんか　嬉しそうだから　まあ・・　いっか

そんで・・
放課後
応援タイムの練習は終わった
まだ二回目なのにさ　みんなすげえ頑張って　キレがよくなってきたな
俺の隣りの席の佐藤はもう少し気合入れねえとピョレピョレ光線が届かねえよ
廊下側の佐藤の目つきは鋭くなってきて　あれなら敵もイチコロだ
なんつっても志田の足さばきが早くなってきてさ　さすが柔道部だな
「それじゃ、また明日ね」
「うん」「はい」「おう」「またね」
みんな帰った
「そんじゃ、始めっか」
「はい」「うん」
俺は川口にテイクオーバーゾーンに入ったら愛里にスタートっつって、
走り出した愛里にバトン渡すっつう説明した
「そんじゃ、川口走ってこい」
「上原さん、いくよ」

「うん」
川口が走ってきて
やっぱ鹿が逃げてるみてえな走り方なんだよな　そんで遅くはねえんだよ早くもねえけど
「上原さん！　　スタート！」
愛里が川口の方見てゆっくり走って
「愛里、川口の方見ねえで左手だけ出して走ればいいから」
「でも、なんかつい見ちゃう」
「上原さん、ちゃんと渡すから」
「うん」
「そんじゃ、もっかい」
どうしても愛里は後ろ見ちまうな
まあいっか　走りながらバトン受け取れるようにはなってきたからさ
「そんじゃ、川口、愛里、俺の流れでやっか」
「はい」「うん」
川口が走ってきて　愛里が後ろ見ちまうけど少し走りながらバトン受け取って
俺は愛里が来るのを待ってて
「走ってください」
「え？」
「私を信頼してないんですか？」
「してるよ、愛里のことはメッチャ信頼してるよ」
「だったら、ふつうに走って」
「ふつうに？」
「はい」
「そんじゃ、もっかい」
川口が走って
「上原さん！　　スタート！」
少し走り始めた愛里にバトン渡して　愛里が走って
「スタート」
俺は左手出して前向いて走った
「待って！」
え？
「早や　ハァハァすぎハァハァてハァハァ　追いつけない」
「あ、ごめん」
「やっぱりハァハァあの・・」
「俺は愛里に合わせて走っから大丈夫だよ」
「ごめんなさい」
「いいって、こっからは俺のこと信じてくれ」
「はい、信じてます」
「そんじゃ、もっかい！」

川口が「上原さん！　スタート！」愛里にバトン渡して　愛里が走って
俺は愛里のこと見ながら　ゆっくり助走つけて
「はい！」
愛里からバトン受け取って走る・・と
「いんじゃねえか？」
「そうだね、けっこうスムーズになったよね」
「これなら、まあ、私でも、なんとか」
「愛里、ちゃんと要領わかってきてっから大丈夫だよ」
「そうですか？」
「おう」
「よかった」
愛里がホッとした顔になった
愛里は　なんにでも一生懸命でさ　余興みてえなリレーにこんなに一生懸命でさ
「それじゃ、終わりにしようか」
「あ、おう」
「私は更衣室で着替えるから、玄関集合で」
「おう」「うん」

誰もいねえ教室で　川口と二人　着替えてて
「僕の母親に、今日の夕飯は森下のところでご馳走になるって言ったらね」
そっか　お母さんにちゃんと連絡したんか
「すごく驚いてすごく喜んでさ」
「ただのフッツーの晩メシだよ」
とうちゃんのはすげえ美味えけど
「僕は友だちの家で食事をご馳走になったことないから」
「俺もねえよ」
「そうなの？　森下は友だちからしょっちゅう誘われてるのかと思ってたよ」
「小学生んときの誕生会みたえなやつならあっけどさ」
「僕はそういうのもなかったからさ」
「マジ？」
「友だちの家で一緒に勉強したりするとかもなかったから」
「俺もねえな、あ、教えてくれっつって行ったことは何度かあったな」
「僕も今日は一緒にっていうよりは教わるんだけどね」
「一緒にみてえなもんじゃん」
「そう言ってもらえると嬉しいよ」
「教えるってさ、教える側も憶えんだよ、つか、一人でやるよか頭に入るっつうかさ」
「そうだね、僕も妹に教えるとき、復習してるみたいな気になるよ」
「そっか、妹はどうしてる？」
「最近張り切ってるよ、応援タイムのことでね」
「よかったな」

「うん」
「そんじゃ行くか」
川口と二人で教室出て　愛里が待ってる玄関に向かった

友だちを連れて来る

マンションのエレベーターが二階に着いて
愛里の部屋まで　川口もついてきて　先に五階行っててていいっつったんだけどな
愛里が部屋の鍵開けて
「それじゃ、私は夕食の時間までには行きます」
「愛里も一緒に勉強しねえの？」
「あそこはほぼ期末テストくらい先のだから」
「そんでもさ」
「洗濯もしたいし」
「そっか、そんじゃあとで」
「はい」
ドアが閉まって　鍵が閉まった
「毎日部屋まで送ってるの？」
「おう」
「同じマンションなのに？」
「危ねえじゃん」
「ここセキュリティしっかりしてるよね」
「そんでも何があっかわかんねえじゃん」
「森下って・・」
命懸けて惚れた人にはさ　そんくれえすんだろ
「心配性のお母さんみたいだね」
「ハア？」
「僕にはできないな」
「やんなくていいよ！　　ほれ、乗れよ」
「うん」
心配性のお母さんてなんだよ

玄関のドア開けて
「とうちゃん、ただいま」
「ダイチ」
とうちゃんがキッチンから出てきて
「おかえり」
「とうちゃん、川口だよ、川口、俺のとうちゃん」
「はじめまして、あ、じゃない、おじゃまします」

「メシ作ってっからよ」
「ありがとうございます」
「とうちゃん、俺と川口、勉強すっからさ」
「そっか」
「手伝えねえでごめんな」
「んなこといいからよ、もうほっとんどできてっから」
「うん、ありがとう、川口、こっち入れよ」
「おじゃまします」
俺の後ろついてきてリビングに
「川口、とうちゃんと前に会ったんか？」
「夏休みの現場で、上原さんに頼まれて写真撮ったから、まあ僕が一方的に見ただけだけど」
「あ、そっか」
川口がローテーブルんとこに
「ここに座ればいいの？」
「俺の部屋、二人で勉強すんのには狭めえからさ」
「閉塞感がなくていいね」
「川口、なんか飲む？」
「それじゃ、コーヒーを、なんなら自分で行くけど、前にいただいたことがあるから」
「へ？　いつ？」
「森下が知恵熱出して、上原さんにコクッてたとき」
あ・・　あんときか
「俺さ、着替えてノート持ってきてから、コーヒーでいっかな」
「もちろんいいよ」
「そんじゃ」
部屋戻って　着替えて　数学のノート・・は　これだ
「川口、これな」
「ありがとう」
そんでキッチンに入って
「とうちゃん、晩メシはビーフシチュー？」
「ダイチの友だち来んならよ、ご馳走にしねえとな」
「ありがとう」
とうちゃんにとっては最大級のおもてなしだよ　メッチャ感動する
コーヒーいれてリビングに

「ありがとう、やっとわかったよ」
「そっか」
「森下の説明はすごくわかりやすいよ」
川口が教科書とノートをスクールバッグにしまいながら
「森下は家庭教師のバイトしないの？　こんなに教え方うまいからさ」

「俺は愛里専属のカテキョだから」
「ああ、そういうことか」
玄関のドアが開いた音
「おじゃまします」
愛里だ
「アイリちゃん、おかえり」
「おとうさん、ただいま、あ、洗濯物ありがとうございます」
「風呂掃除したついでによ、ネットに入ってたんは日干しにしといたからよ」
ネットに入ってた？　それって・・　下着？
「型崩れしないできれいに畳んでもらって」
「そんなんいいからよ」
なんで　とうちゃんには洗わせるんだ？　俺にはダメってさ
「森下？　どうしたの？」
「え？　あ、や、なんもねえよ」
「ただいま」
かあちゃんの声
「おかあさん、おかえりなさい」「美里、おかえり」
「あら？　お客様？」
「川口くんです」
「あら、そう」
かあちゃんと愛里がリビングに入ってきた
「おじゃましてます」
「川口くん、お久しぶりね、夕食食べていくでしょ？」
「はい、ご馳走になります」
「にぎやかでいいわね、私は着替えてくるわね」
かあちゃんがベッドルームに入ってった

かあちゃんと愛里はいつもどおり並んで
俺と川口が並んで　とうちゃんはキッチンの椅子持ってきて座ってる
川口の、俺とおんなし大盛りだ　とうちゃんの歓待っぷりがわかるな
「いただきます」
どうだ川口　とうちゃんのビーフシチュー
「あ、美味しい」
だろだろ
「いっぺえ食ってくれよ、まだあっからよ」
とうちゃん嬉しそうだな
「これは、毎日食べても飽きない味ですね」
「そっか？」
とうちゃんマジ嬉しそうな顔してる
「川口くんのご家族は、運動会にいらっしゃるの？」

「いえ、うちは中学から来てないです」
「お昼はどうするの？」
「運動会のときは学食が開いてるので、学食で」
「あら、そう」
購買も行事んときは開いてるよな
「川口くん、よかったら私たちと一緒にお昼食べない？」
「え？」　えっ？
「どうせなら一緒の方が楽しいじゃない？　　川口くんがよければだけど」
「いいんですか？」
かあちゃんっ　それはさ　今年の運動会は俺と愛里がつき合って最初の運動会でさ
「もちろんよ、愛里さんもいいわよね？」
なんで俺に聞かねえんだよっ
「はい、おとうさんとおかあさんがよければ」
俺は？
「カズオもいいわよね？」
俺はっ？
「いっぺえ作っからよ」
とうちゃん　ニコニコしてっけどさ
「だったら遠慮なく」
「そうよ、高校生が遠慮なんかしないで」
「はい、ありがとうございます」
川口も嬉しそうな顔してビーフシチューペロッと食ってっけどさ
美味えだろ　とうちゃんのメシはさ　そんでもさぁぁぁ
なんで運動会の昼メシも一緒になんだよ？

「それじゃ、ご馳走様でした」
「また来てね」
「ありがとうございます」
「ダイチ、下まで送ってあげなさい」
「へ？」
「せっかく来てくださったんだから、下まで送ってあげなさい」
「おう」
「森下、いいよ」
「下までだからさ、送る」
「ありがとう、それじゃ、おじゃましました」
「またね」
玄関ドア閉めて
川口と二人で廊下歩いて
「上原さんて」
「愛里？」

「森下のお父さんとお母さんを、お父さんお母さんて呼ぶんだね」
「ああ、うん」
「すごい溶け込んじゃっててさ、家族みたいだよね」
「そっかあ？　まあ、そっかなあ」
「なんだかホッとするよ」
「なにが？」
「森下の家」
「マジ？」
「うちはどうしてもさ、妹のことがあるから、そんなにではないけど、やっぱりさ」
「そ・・っか」
「あ、でも暗いとかではないよ」
「おう、わかってるよ、妹も張り切ってんだろ？」
エレベーターに乗って
「うん、母親も父親も喜んでるよ」
「よかったな」
「森下のおかげだよ」
「俺はなんもしてねえじゃん」
「大演説してくれただろ」
「あれは・・」
「前にも言ったけど、僕の妹、あの動画を見てすごく感動しててさ」
「そっか」
「自分が役に立つってことが嬉しいんだと思う」
「立ってるよ、メッチャ立ってんじゃん」
「ありがとう」
一階に着いた
「それじゃ、今日はありがとう」
「おう」
「また明日ね」
「また明日な」
川口の後ろ姿見送って　家にダッシュで戻った

玄関ドア開けたら　あれ？　愛里のサンダルがねえ　とうちゃんのギョサンもねえ
「かあちゃん、とうちゃんと愛里どこ行ったの？」
「愛里さんも帰るっていうからカズオが送っていったのよ」
「そっか」
「川口くんが来てくれてにぎやかだったわね」
にぎやかってさ
「かあちゃん、なんで川口のこと、運動会の昼メシに誘ったの？」
「にぎやかでいいじゃない」
「今まで、ねえちゃんときも、誰か誘ったことなんてなかったじゃん」

かあちゃんが　フッて息吐いて
「今日、カズオから電話があったの」
「とうちゃんから？　　会社に？」
「珍しいでしょ？」
「なんで電話？」
「ダイチが友だちを連れて来るって」
え？
「友だちに夕食をご馳走してくれって電話があったって」
「なんで、んなことで？」
「あんたもヒトミも、幼稚園のときから、友だちを連れてきたり、親子遠足でも、
　運動会でも、友だちを誘って一緒にお昼を食べたり遊んだりしたことないでしょ？」
「それは・・　とうちゃんやかあちゃんいりゃよかったし、とうちゃんと遊ぶの楽しくてさ」
「私もそうは思ってたけどね、カズオは自分のせいじゃないかって言ったことがあるのよ」
「なんで？　　とうちゃんのせいって、どういうことだよ？」
「カズオは小学校のときいじめられて友だちがいなかったでしょ？」
「そんでも、それとは関係ねえじゃん」
「施設の中でも、まあ軽いイジメがあったみたいだし」
「でもさ、そういうの全然関係ねえよ」
「カズオの中ではそれが大きな、なんていうの？　　トラウマ？」
「んなさ」
「あの人、自分だけのことだと全然気にしないんだけど、駅のトイレに捨てられて、
　施設育ちで少年院出て、浮浪者で脚も不自由だったっていうことが、
　あんたやヒトミに迷惑をかけてるんじゃないかって、どこかで思ってるのよ」
「んな、んなさ、迷惑なんてかけてねえよ、ひとっ欠片もかけてねえよ」
「だから嬉しかったんじゃない？　　川口くんが遊びに来てくれて夕食までって」
それで・・　俺が電話したときも　嬉しそうな声で・・
「わざわざ私に電話してくるくらいって、どれくらい嬉しかったかわかるでしょ」
とうちゃん・・
「川口くんも運動会のときはご家族がいらっしゃらないっていうから、
　これはカズオのトラウマを払拭するチャンスかなってね」
そっか・・　そういう・・
「川口くんも喜んでくれてるみたいだしね」
「うん」
「さっきの夕食のときだって、カズオ嬉しそうだったでしょ」
「う・・ん」
「もう、いちいち泣かないの」
「あ、うん」
涙　指でぬぐって

「そういうことよ」
「かあちゃん、ありがとう」
「あんたのためじゃなくて、カズオのためよ」
「うん、だから、ありがとう」
「それに」
かあちゃんがフッて笑って
「川口くんて、な〜んかジャマにならない子でしょ」
「ジャマにならねえ？」
「なんていうかのかな・・　あ！　観葉植物みたいな空気」
観葉植物・・ってさ
「私も一緒にいて疲れるような子はダメだけど、川口くんならね」
「そっか」
玄関ドアが開いた音
「ダイチ、戻ってたんか」
「おう」
「アイリちゃん、送ってきたかんな」
「ありがとう」
「川口くんもちゃんと帰れたんか」
「うん」
「いっぺえ食ってくれたな」
「美味えっつってたじゃん」
「いつでもよ、俺に電話しねえでもよ、遊びに連れてくればいいからよ」
「うん、連れて来るよ」
「そんじゃ、俺は後片付けしてくっから」
「俺も手伝うよ」
「そっか？」
「とうちゃん、運動会の昼メシ、川口の分も頼むよ」
「おう、いっぺえ作っから心配すんな」
「うん・・　あり・・がとう」
「ダイチ、どした？」
「や、とうちゃんが、運動会の昼メシ、川口の分も作ってくれっから・・」
「んなよ、ダイチの友だちだからよ」
とうちゃんが　俺の頭クシャクシャッて撫でて
「とうちゃんも嬉しいよ」
「うん・・　俺も・・　嬉しい」
川口　なんか　ありがとな
ジャマみてえに思ってごめん　ジャマじゃねえよ　すげえありがてえよ
かあちゃんは観葉植物みてえっつったけど　あれは　褒めてっから　かあちゃんなりにさ

愛里との LINE

勉強して　シャワー終わって
『愛里』送信
『今日はありがとう』送信
『愛里のおかげでとうちゃん嬉しそうだった』送信
あれ？　　既読つかねえな　寝ちまった？
ピコン
『今シャワーから戻ったところです』
そっか
ピコン
『私のおかげって？』
『川口のこと晩メシに誘ってくれてさ』送信
ピコン
『あなたが誘ったんですよ w』
え？　　あ、そっか　そんでも
『なんかきっかけ作ってくれたっつうか』送信
ピコン
『私から見たら』
ピコン
『あなたがあなたの家に来ればって誘って』
ピコン
『あなたが夕食食べないかって川口くんに言ってました』
それはさ　なんつうかさ
『愛里の部屋に川口が入るのが』送信
『なんかイヤだった w』送信
w つけたけど　マジでさ
ピコン
『引っ越しのときも入ったじゃない wwww』
そうだけどさ　それとはなんか違げえっつうか
ピコン
『おかあさんが運動会の昼食に川口くんを誘ったのは』
ピコン
『ちょっとビックリしたけど』
ピコン

『なんか楽しくなりそうですね』
どうする？　愛里に言う？　そんなん言われても愛里が困っかな
ピコン
『どうしたの？』
ピコン
『あなたはイヤなの？』
ピコン
『本当の気持ち言ってほしい』
本当の気持ち・・か
『かあちゃんが川口を誘ったのは』送信
『とうちゃんのためでもあってさ』送信
ピコン
『おとうさんのため？』
『俺もねえちゃんも小せえ頃から』送信
『運動会や遠足で他の友だちとメシ食ったり遊んだりしたことなくて』送信
『それはとうちゃんやかあちゃんといるのがよかったし』送信
『とうちゃんと遊ぶ方が楽しかったからだけで』送信
『そんだけなんだけど』送信
『とうちゃんは自分のせいで俺やねえちゃんに友だちいねえんじゃねえかって』送信
『とうちゃんのせいで家に遊びに来たり一緒にメシ食ってくれねえんじゃねえかって』送信
『そう思ってたらしい』送信
ピコン
『なんで？』
ピコン
『意味がよくわからない』
だよな　そんでもとうちゃんはさ
『かあちゃんから聞いたんだけど』送信
『とうちゃんは施設でも小学校でもいじめられて友だちいなかったから』送信
『駅の便所に捨てられてたとか施設育ちとかで』送信
『だから俺やねえちゃんが』送信
『とうちゃんが施設育ちで少年院上がりで浮浪者で脚不自由だってことで』送信
『家に遊びに来てくれたり一緒にメシ食ってくれる友だちいねえんじゃねえかって』送信
『なんかそう思ってるみてえでさ』送信
『だから今日川口が家に来て一緒に勉強して晩メシ食ったのが嬉しかったらしい』送信
　　愛里　この沈黙は　なんか考えてんだな
ピコン　あ、きた
『おとうさんは知らないんですね』
ピコン
『あなたが伝説的にモテて』

ピコン
『あなたと友だちになりたい人がいーーっぱいいて』
ピコン
『あなたの家に招待されたら』
ピコン
『王子様の舞踏会に招待されたくらいの特別感で』
ピコン
『あなたが史上最高の人気者だってこと』
愛里
ピコン
『ていうか』
ピコン
『おとうさんメチャクチャイケメンで』
ピコン
『私のお花の先生もすっごくイケメンて言ってて』
ピコン
『なんでもできて優しくて強くて』
ピコン
『会ったら男でも女でも誰でも』
ピコン
『おとうさんのこと好きになっちゃう魅力があって』
ピコン
『あのおかあさんがお嫁さんになりたかったって言うくらいで』
愛里　俺・・　今・・　泣いてんだけど
ピコン
『正直言っていいですか』
『いいよ』送信
ピコン
『私なんだか悔しくて涙が出ちゃって』
愛里
『俺は愛里の言葉に感動して涙出てます w』送信
ピコン
『本当のことだから』
『ありがとな』送信
ピコン
『今度べつの誰かを家に呼んだらいいんじゃないですか？』
『べつの誰かって誰？』送信
ピコン
『サトユミさんとかサトアヤさんとか志田くんとか鈴木くん』
応援タイムのメンバーじゃん

『佐藤たちはいいヤツだけど』送信
『俺は家に呼んでまでしゃべる話題ねえし』送信
『逆にきごちなくなっちまうよ』送信
ピコン
『あなたが好きなら森山くん？』
森山のことは好きでも嫌いでもねえよ
『森山とはますますしゃべる話題ねえよ』送信
ピコン
『最近いつも話をしてるでしょ』
『あれは森山が話しかけてくるだけでさ』送信
『しかも大したことしゃべってねえしさ』送信
ピコン
『そうですね』
ピコン
『あまりわざと仕込むのもヘンですよね』
『うん　そこまでしなくていいよ』送信
それにさ
『正直俺とうちゃんとしゃべってんのがいっちゃん楽しいんだよ』送信
ピコン
『わかります』
ピコン
『おとうさんとは小学生同士みたいな会話してるし』
小学生？
ピコン
『ああいうバカみたいな話できるのって』
バカみてえ？　　あ、そっか、愛里もかあちゃんと一緒に聞いてんだよ
ピコン
『すごく仲が良くないとできないですよね』
『うん　とうちゃんとはなんでもしゃべれる』送信
ピコン
『私も正直』
ピコン
『女同士の話でなんでも話せるのは』
ピコン
『あなたのおかあさんです』
マジ？　　マジッすかあ？
ピコン
『おかあさんと話してるとすごく楽で』
ピコン
『言葉でうまく表せないこともわかってくれちゃうし』

ピコン
『おかあさんは私みたいな小娘を相手にして』
小娘ってさ　ハハハ
ピコン
『大変かもだけど』
『かあちゃんは愛里がいるようになってから』送信
『ねえちゃんも俺も聞いたことねえようなことも話すようになったから』送信
『かあちゃんにとっても愛里は心が許せる相手なんだと思う』送信
ピコン
『だったら嬉しいけど』
ピコン
『私はおかあさんにもおとうさんにもお世話になっちゃってて』
ピコン
『甘えちゃってます』
あ　そういえば・・　ネットん中のものの洗濯
『愛里ちっと聞きてえことあんだけど』送信
ピコン
『はい　なんですか？』
なんつうか　んっと
『とうちゃんにはネットの中のもの洗わせてんの？』
ピコン
『ネットの中のもの？』
『晩メシ前になんかそんな話してたからさ』送信
ピコン
『はい　お願いしてます』
えーーーっ　なんでだよ？
ピコン
『夏休みの後半くらい？　ついでだからって言ってくれて』
ピコン
『基本自分で洗ってるけど　たまにってカンジで』
マジでかあああ
『なんでとうちゃんはよくて俺はダメなの？』送信
　　あれ？　返信が・・
『愛里？』送信
ピコン
『あなたは私と同じ高校の同級生の男子ですよね』
そうだけどさ
『俺は仕事は仕事って割り切ってやってっけど』送信
ピコン
『私の世話をするのは仕事？』

や、じゃなくてさ
『仕事じゃねえけど、そういうとこはちゃんと割り切れるっつうかさ』送信
ピコン
『私は割り切れないの！』
『そんでももう俺は愛里のカレシじゃん』送信
ピコン
『カレシに下着洗われるとかますますムリ！』
えぇぇぇ
ピコン
『あなたと私がまったく違う学校になって』
ピコン
『全然関係ない者同士になって料金払って家政夫してもらうときなら』
ピコン
『好きなだけ洗ってください』
怒ってる　愛里怒ってるよぉぉ
『愛里ごめん』送信
『俺　とうちゃんには洗わせて俺には洗わせてくんねえのが』送信
『なんか壁感じて淋しかっただけでさ』送信
ピコン
『おとうさんは　どっちかというと　お母さんみたいで』
お母さんみてえ？
ピコン
『むしろ　おかあさんに下着を洗ってもらう方が緊張するかも』
なんか・・　わかる気すんな
『愛里わかった』送信
『俺はそれ以外のことならなんでもすっからさ』送信
『なんでも言ってくれよ』送信
ピコン
『はい』
『愛里　まだ怒ってる？』送信
ピコン
『怒ってません』
ピコン
『バカみたいとは思ったけど』
バカみてえって　まあ　そうだな
『愛里　ごめんな』送信
ピコン
『こんなことで』
ピコン
『壁を感じて淋しいとか』

ピコン
『笑う wwww』
笑ってくれてよかったああ
ピコン
『それじゃ　私はそろそろ寝ます』
ピコン
『おとうさんのこと　いろいろ話してくれてありがとう』
『俺こそ聞いてもらって嬉しい　ありがとう』送信
ピコン
『おやすみなさい』
『愛里　おやすみ』送信
つまり　あれだよな
愛里は俺のこと男として意識してるっつうかさ
とうちゃんのことはお母さんみてえっつったもんな
お母さんみてえって　どういうことだ？　まあいいけど　愛里が安心して下着洗わせられんなら
カレシにはますますムリってさ　なんつうの？　恥じらい？
そういうのがあんのが愛里の古風で可愛いとこでさ
俺も愛里の下着洗えるとか洗えねえとかにこだわるのはやめよう　うん　やめよう
そしたらさ・・
もし　もし愛里と俺が結婚したら・・・
そんときは　どうなるんだ？
んなこと今考えてもしゃあねえよ
寝よう

練習とピクニック用品

木曜日の放課後の応援タイムの練習
「森下」
虎之助　練習の親方　指示は的確だしさよく見てるしさ
「今のを録画したんだけと、どう？」
ん・・と
「佐藤」
「え？」「どっち？」
「俺の隣りの席の佐藤」
「あ、私？　　なに？」
「佐藤はピョレピョレ光線ときの親方なんだからさ」
「親方？」
「あと、ここのエネルギー注入してるときもさ」
「えっと、親方？」
「もっと引き連れてんぞっつうカンジ出せよ」
「ああ！　　こことここのフォーメーションのリーダーの雰囲気ってことね、わかった」
「あと、佐藤」
「他に何かあるの？」
「こっちの佐藤じゃねえよ、廊下側の佐藤」
「森下くん、名前で呼んでくれない？」「うん、そうして欲しい」
「んなことできねえよ」
「紛らわしくてめんどいじゃん」「名前呼んでくれた方が話が早いよ」
「佐藤と佐藤、カレシはいんのか？」
「なにそれ？　　そういうこと聞く？」「それはちょっとじゃない？」
「いたとしたら、そのカレシに失礼だろ」
「い・ま・せ・んっ」「いないですっ」
「いねえんなら、これから運命の人と出会うっつうことだろ」
「え？」「運命？」
「佐藤と佐藤を、命賭けて惚れてるっつう人が現れるっつうことだろ」
「え・・」「命賭けて？」
「佐藤と佐藤の名前を呼んでいいのは、その運命の男だけだ」
「え・・」「え・・」
「俺が名前呼んだら、その運命の男に失礼だっつってんだよ」
「そんな・・　深い意味が・・」「あったの」

「ったりめえだろ」
「なんか・・　森下くんて」「モテるのがわかるね」
「常識だ常識！」
「え、どこの？」「私はわかんないけど」
顔見合わせてんじゃねえよ
「命賭けて惚れた人の名前を呼ばせてもらえねえで、せつねえ思いした人もいんだぞ」
「え、何かの作品にあった？」「私、小説はあまり知らないから」
「実話だよ！」
「それって、森下くん？」
「や、俺は・・　すぐ呼んだ」
チラッと愛里を見たら　メーーッチャ無表情で俺のこと見てっけど
「だったら、ね？」「うん、廊下側の佐藤でいいよ」
「おう、んで、廊下側の佐藤は目力出てきていぃんだけどさ、緩急つけた方がいいな」
「緩急？」
「ほれ、この動画の佐藤がやる人の目、ずっと力入ってはねえだろ？」
「あ、うん」
「この頭ヤラレて耳キーンんときなんかさ」
「耳・・　キーン？　　あ、真ん中にきたとき？」
「最後笑ってっだろ」
「ああ！　　笑ってる」
「ここだっつうときに目力入れてイチコロにすんだよ」
「なんか恋愛アドバイスもらってる気分だけど、わかった」
「森下は相変わらず独特だけど的確だよ」
「虎之助の方がすげえよ、細けえとこまでちゃんと見てっからさ」
「俺は万年補欠だったから、そういうの見て指摘することだけは得意なだけでさ」
「ここでは虎之助が親方だよ」
「森下にそんなこと言われると、なんか嬉しいな」
「本気で言ってんだよ」
「それじゃ明日も頑張るよ」
「おう」
「今日はこれで終わろうか」
「そうだね」
虎之助と実行委員もいいコンビネーションになってきてんな
「どうする？　　明日、衣装着て練習してみる？」
え？　　衣装？
「そうだよな、実際に衣装を着て踊って慣れないとさ」
あれを持ってこなきゃなんねえのか？　　ロンパース
「それじゃ、みんな、明日衣装持ってきてね」
「わかった」「おけ」「うん」
どこで着替えりゃいぃんだ？　　ぜってえ他のやつには見せらんねえ

「森下くんはもう作ってあるんだよね？」
「あ、まあ・・　かあちゃんが・・」
「あの衣装を作れるお母さんてすごいよね」
「私ならムリ」「私も」「早く見たいね」
んな　見ねえでいいから
「それじゃ、お疲れ！」
「お疲れ！」「また明日ね」「それじゃな」
愛里のそばに走ってって
「愛里、帰ろう」
「私は騙し討ちにあったんですけど」
「あ？ なに？」
「切り替えが必要だから呼び名決めようって、突然名前呼ばれたんですけど」
「あ・・　それはさあ、前も言ったじゃ〜ん」
「コクられる前に名前呼ばれるって、どうなの？」
「愛里ぃぃ、だからさあ」
「私はあのときは運命の人だとか命賭けて惚れてるとか言われてなかったけど？」
「今は知ってっだろ？」
「まあ・・　それは」
「愛里」
「呼びたいから呼んでみた的に呼ばないで」
メッチャ　可愛いっっっ
「愛里」
俺のことキッと見上げてさぁ
「着替えてきます」
「おう」
俺も教室で　川口や志田や虎之助と一緒に着替えて
明日はどうする？　　一緒には着替えらんねえよ
愛里と玄関で待ち合わせて　帰った

愛里のこと部屋まで送って
家の玄関ドア開け・・たら
とうちゃんが玄関脇のクローゼット開けてて
「あ、ダイチ、おかえり」
「ただいま、なにやってんの？」
「運動会の敷物出そうと思ってよ」
「ああ、ねえちゃんの子ども用毛布か」
とうちゃんがいっちゃん上の棚から引っ張り出して
「これよ、5人じゃ小せえんじゃねえかと思ってよ」
「そう・・だな、去年はかあちゃんだけ座ってたよな」
「俺とダイチは地べた座ってよ、ケツんとこに新聞紙敷いてな」

「小せえ頃は足りてたんだよな」
「ダイチが小学生んときは、美里とヒトミが座ってたな」
「そんじゃこれでいんじゃね？」
「そんでも今年はよ、川口くんとアイリちゃんがいんだろ？」
「あっ　そうだ」
「アイリちゃんと美里が座ってギュウギュウかもしんねえな」
「そしたらさ、俺ととうちゃんと川口は新聞紙敷けばいんじゃね？」
「そっか、そんじゃ明日新聞紙取ってくっからよ」
「玄関先で何をやってるの？」
「かあちゃん、おかえり」「美里、おかえり」
「ただいま、何してるのよ？」
「運動会んときの敷物、この毛布と新聞紙にすっかって、とうちゃんと」
「新聞紙、また新聞紙」
なんだよその芝居の台詞みてえな言い方
「この世から新聞紙がなくなったら、あんたたちはどうするのかしら？」
この世から新聞紙なくなるとか　んな仮定の話されてもさ
「ほら」
でっけえ紙袋から　なんか　カバン？
「なに？」
「開けてみなさい」
これは・・　なんだ？　　このマジックテープ外して
「うぉおお、毛布？」
「レジャーシートよ」
「これが？　　フッカフカして布でできてんじゃん」
「裏が防水になってるでしょ」
「あ、ほんとだ」
「今日、会社で気がついちゃったのよ、うちにはレジャーシートがないって」
「そんでもさ、この毛布と新聞紙でさ」
「愛里さんを新聞紙の上に座らせるの？」
「新聞紙には俺ととうちゃんと川口がさ」
「川口くんを招待したのに新聞紙の上には座らせられないでしょ」
「そんなん気にしねえと思うよ」
「私が気にするの」
「あ、はい」
「私もねえ、こういうのに興味なかったからね、不便さを感じたこともないし」
だよな、かあちゃんて、小学校も中学んときも、なぜか来賓席に呼ばれてさ
お茶出してもらったりしてたよな、PTA 役員でもねえのにさ
とうちゃんは隅っこの方に立って見ててくれてさ
「お弁当は何に入れるつもりだったの？」
「それは、なあ、とうちゃん」

「いっつもみてえに、タッパーに入れてよ、握りメシはホイルに包んで」
「スーパーの袋？」
「今年は保冷バッグがあっからよ」
「やっぱり」
やっぱり？　ずーーっとそうだったじゃん
「取り皿は？」
「取り皿？　かあちゃんはタッパーのフタに置いて食ってんじゃん」
「川口くんと愛里さんは？」
「え？　あ・・　んっと・・」
「考えていなかった・・と」
「そんでもさ、テキト〜につまんでさ」
「川口くんと愛里さんが初めて合流するお弁当を、直箸」
「んっと、そんじゃ俺、明日、学校の帰りにコンビニで紙皿買ってくっからさ」
「買ってきました」
「紙皿？」
「ピクニックランチボックスと取り皿セット」
すっげえ　でっけえ　二段？
「全部会社の近くの駅ビルの中にある雑貨ショップで買ったのよ」
「そ・・そうなんか」
「レジャーシートにピクニックランチボックスって」
かあちゃんがこんなん買ってきたのが驚きだよ
「まるでピクニック楽しみにしてる浮かれたおばさんみたいだったわよ」
「んな、んなことは、ねえよ、なあ、とうちゃん」
「え？　あ、うん」
「アーーーーッ」
「か、かあちゃん？」
「お箸買ってくるの忘れちゃった、20 個くらい入ったフォークとスプーンの袋があって、　こんなには要らないわって思って、なんでお箸を」
かあちゃんも慣れねえことすっからパニクッてんな
「み、美里、割り箸ならあっからよ」
とうちゃんがキッチンに走ってって　なんか引き出し開けた音がして　戻ってきた
「これ、こんだけあっからよ」
「それは、すでに使った割り箸よね？」
「まだ使えっからよ」
「川口くんと愛里さんに使用済みの割り箸で食べろっていうの？」
「んっと、そんじゃ、んっと、家で使ってるの持ってくか？」
「それってどうなの？　私はよくわからない、カズオ、あんたはもっとわからないだろうけど」
「あ、そんじゃ、爪楊枝でよ」
「爪楊枝ぃぃ？」

ダメだ、かあちゃん、こっち系全然興味ねえからちっと壊れてきてる
「か、かあちゃん、俺が明日割り・・」
あれ？　あ！　割り箸！
「かあちゃん、ちょっと、これ」
スクールバッグに入れっぱなしだった
「割り箸、5膳」
かあちゃんの前にジャジャーンてカンジで見せた
「どうしたの、それ？」
「愛里が知り合いからもらって、そんで俺にくれた」
「愛里さんがもらったのをあんたにくれたの？」
「愛里は使わねえからって」
「愛里さ〜ん、助かったわ、しかも、これ、和紙、あら？　梅？　季節的には」
「かあちゃん、季節とか言ってらんねえだろ？　あるだけでもさ」
「そうね、使用済みの割り箸よりはずっといいわ」
あ　かあちゃんが少し落ち着いた
森山　感謝だよ　つか　愛里か

晩メシの前に　かあちゃんが愛里にレジャーシート？　見せてた
「タータンチェックでステキですね」
そっか、愛里が喜んでんならこれでよかったんだな
「ダイチとカズオはね、新聞紙を敷こうとしてたのよ」
かあちゃんだって去年までは　んなこと気にしてなかったじゃん
「新聞紙・・ですか」
愛里の反応からすっと　新聞紙はダメっつうことだな　ぜってえ新聞紙には座らせねえから
「愛里さんからもらった割り箸を使わせてもらうわね」
「私から？　割り箸？　え？」
すっかり忘れてるよ
「愛里、森山からもらったじゃん」
「え・・　ああ！　全然使ってください、誕生日プレゼントってわけわかんない」
「誕生日のプレゼントに割り箸をもらったの？」
「そうなんです、しかも梅の模様って意味わかんなくて、梅は春ですよね」
愛里もそこに引っかかんのか　かあちゃんと一緒だな
「男の子だから、お花が可愛いと思ったんじゃない？　ねえ、ダイチ」
「え？　あ、俺？」
なんで俺に振るんだよ？
「俺は・・　あんま、よくわかんねえけど」
「そうね、あんたに聞いてもね」
だったらなんで俺に振ったんだよ？
慣れねえピクニック用品買ったストレスぶつけてねえか、かあちゃん？

晩メシは生姜焼き
「去年は愛里さんはどこでお昼を食べてたの？」
「パパの同期の人がキャンピングカーに乗ってきて」
キャンピンクカー？
「学校の敷地の端に止めて、その中で」
「そう、すごいわね」
「知らないおとなと知らない三年生と車の中でイクラや西京焼きって」
愛里がメッチャ顔歪めて
「走ってないのに車酔いした気分でした」
「あら、ハハハ」
そっか　だから探しても見つからんなかったんか　キャンピングカーん中じゃさ

晩メシ終わって
かあちゃんと愛里はリビングでしゃべってて
俺ととうちゃんは後片付けしてて
「ダイチ」
「ん？　　なに？」
「あんなリッパな箱によ」
箱？　　あ、ランチボックスか
「俺は・・　なに入れりゃいぃんだ？」
「なにって、弁当入れりゃいぃんだよ」
「そんでもよ、あんなリッパな箱でよ、俺が作ったもんなんか入れていぃんかな」
かあちゃん・・　とうちゃんが怯えてるよ
「とうちゃん、いぃんだよ、とうちゃんの弁当が食いてえんだからさ」
「そっか・・な」
「下んとこに握りメシ入れてさ、上んとこにいつもの卵焼きとかタコさんウィンナーとかさ」
「そんなんでいぃんか？」
「んっと、あれじゃね？　　握りメシとかさ、ホイルに包んでスーパーの袋や保冷バッグだとさ、
　なんつうか、潰れちまうこともあっからさ、でっけえ敷物も持ってかなきゃなんねえだろ？」
おっちゃんたちの握りメシ潰れたことねえけどさ
「そっか、アイリちゃんや川口くんにぶっ潰れた握りメシ食わすわけにはいかねえもんな」
「うん、そうだよ、おかずはいつものでさ」
「ダイチの好きな手羽先の唐揚げか」
「俺、あれ大好きだよ」
「卵焼きとタコさんウィンナーと、アスパラのベーコン巻き」
「ねえちゃんもそれっきゃ食わなかったじゃん、うちみんな好きじゃん」

「そっか、そんじゃ作っからよ」
「俺も手伝うよ」
「ダイチは早く行かなきゃなんねえんだからよ」
「んな早くでもねえよ」
「運動会の弁当はとうちゃんに任してくれよ」
「うん、そんじゃ頼むよ」
「今年と来年、あと二回だもんな」
「あ、そうだな」
「俺は運動会に出たことなんてねえけどよ」
とうちゃん・・
「ヒトミとダイチには楽しませてもらったな」
「んな・・　あと二回もあんだからさ、まだ終わってねえよ」
「運動会なんて一生縁がねえと思ってたからよ、それがな、毎年見れてよ」
とうちゃんが夢ん中にいるみてえな顔になって
「パーンてピストルの音とかな、音楽かかってよ、見てっだけでワクワクしてよ」
「今年は、とうちゃんに教えてもらった戦闘シーンもあっからさ」
「だな、楽しみだな」
「おう」
あ・・
「とうちゃん、明日、あの衣装着て練習すんだってさ」
「そっか、いよいよか」
「うん、あれ・・　あそこんとこ、他のやつに見られたくねえよ」
「あれは、チンコ安定させっからよ」
「そうだけどさ」
「俺も着させてもらってわかったんだけどよ」
「なに？」
「あれは、チンコもタマもちゃんと入れねえと痛てえかもしんねえ」
「えっ？　　タマも？」
「ズレたらよ、ゴムんとこがな」
「あ・・　気をつける、メッチャしっかり入れっから」
「ダイチの・・　入り切んのかな」
「え、大丈夫だった気ぃするけど」
「何が入り切るの？」
かっ　かあちゃん
「や、なんも、べつに」
「愛里さんを送ってあげなさい」
「おう」
どっから聞いてた？
そんで・・　なんか目ぇキョロキョロさせてる愛里はどっから聞いてた？
まあいい　そこんとこには触れたくねえし

愛里と二人で玄関出た

毛布とふんどし

シャワーから戻って
『愛里』送信
ピコン
『はい』
『なんか呼んでみたくなった w』送信
ピコン
『なにそれ？ www』
ピコン
『それじゃ私が話してもいいですか？』
いいに決まってんじゃ〜ん
『いいよ』送信
ピコン
『夕食終わったあとに　おかあさんから聞いたんですけど』
ピコン
『おかあさんはピクニックとか行事とか興味なくて』
そうなんだよ
ピコン
『あ、一緒に行ったり見たりするのは楽しいけどって言ってましたから』
愛里かあちゃんのことフォローしてさ　まあそれもわかってんだけどさ
ピコン
『親子遠足や運動会のことはおとうさんにまかせていて』
ピコン
『敷物やお弁当に関してもおとうさんにまかせていて』
ピコン
『敷物はおねえさんが幼稚園のときは新聞紙で』
それは俺は憶えてねえんだけどさ　赤ちゃんだったもんな
ピコン
『あなたが幼稚園に入ってからは　おねえさんの子ども用毛布を使うようになって』
ピコン
『何度も洗って古くなったから新しいのを買ってきて』
ピコン
『こっちは捨ててって言ったら　運動会のとき敷物になってたって w』
『俺は特別感出て嬉しかった w』送信

ピコン
『特別感？』
『俺んときは新しい敷物にしてくれたんだって w』
ピコン
『おかあさんはそれを見たとき呆れたけど』
ピコン
『そういうのはカズオの領域だからねって言ってました』
とうちゃんの領域？
ピコン
『その毛布は買ったときはティファニーブルーの純毛でふちが白のサテンだったけど』
ピコン
『色あせて擦り切れて』
ピコン
『去年見たときはくすんだネズミ色みたいで擦り切れすぎて穴も開いてたって』
『そんでも全然座れっからさ』送信
あ　んっと
『愛里には座らせねえから　今年はかあちゃんが買ってきた新しいのだから』送信
ピコン
『おかあさんが言うには』
ピコン
『ここまでくると私もヘンな愛着が湧いちゃってって w』
マジ？
ピコン
『ダイチやヒトミの親子遠足や運動会はずっとこれだったなって』
ピコン
『強く捨てなさいって言えないのって』
ピコン
『愛里さんは私みたいになっちゃダメよって言われました』
どういうことだ？
ピコン
『明日は衣装を着て練習ですね』
ピコン
『あなたの衣装を見たら』
ピコン
『みんなビックリするでしょうね』
あそこな　あそこ見たらビックリしちまうよ
ピコン
『再現度カンペキだから』
入野さんのはああなってねえと思うけどな
ピコン

『私は帽子をかぶらないとで』
あ　だよな
ピコン
『帽子をかぶって走れるのかな』
『大丈夫だよ』送信
『ゴムついてんだろ？』送信
ピコン
『そうだけど』
『そんじゃ明日応援タイムの練習のあと』送信
『走る練習もしてみよっか』送信
ピコン
『そうですね』
ピコン
『正直不安』
『俺がいる』送信
『愛里のあとには俺がいる』送信
ピコン
『なんかすごく安心する言葉』
マジでさ　俺がいっからさ
ピコン
『それじゃ私はそろそろ寝ます』
ピコン
『おやすみなさい』
『愛里　おやすみ』送信
かあちゃんは愛里にはなんでも話してるんだな
あのねえちゃんの毛布に愛着あるなんて聞いたことねえもんな
俺も遠足や運動会っつったらあの毛布って感覚あるもんな
にしてもさ　あのかあちゃんがレジャーシートやランチボックス買ってきたりさ
なんか今年の運動会はすげえ大ごとになってんな
寝よう

そんで　金曜日　やっと金曜日　まだ運動会の日じゃねえよ
帰りの学活で　担任が明日の運動会の注意事項と明日は秋分の日でもあるから
日・月・火と休みになるけど気を引き締めてみてえなことしゃべってっけど　誰も聞いてねえ
担任が早々に引き上げた途端　男子の実行委員が前に出てきた
「今から、クラス鉢巻きを渡します」
前から渡ってきた
うおっ　すっげえキラッキラした赤
「この後校庭で、応援タイムチームは最終練習、他のみんなはカボジャゴの練習」

かぼちゃ？
「虎之助、かぼちゃってどういうことだ？」
「カボチャじゃなくてカボジャゴ、韓国語でレッツゴーっていう意味なんだってさ」
へえ　すげえ細けえとこまで凝るんだな
「これは明日使うクラッカーです」
なんかすげえ筒だな
「どっち方向に向けるかもあとで練習しよう」
どっち方向？
「それじゃ応援タイムメンバーが着替えるから、みんな校庭に集合してください」
着替え・・　俺はどこで・・　便所か
「森下どこに行くの？」
「あ、ちっと、便所」
衣装入った袋抱えて便所に　んっと　先にシッコしといた方がいいな
かあちゃんが、着る前にシッコしとけっつったんもんな
おっし　個室　全部閉まってる　早く出てくれよ　開いた
「森下」
森山・・か
「森下のクラスもこれから練習？」
「あ、おう」
「俺のクラスも体育館で、バスケのキャプテンがいるから体育館使えることなってさ」
「そっか」
「それじゃ、お互い頑張ろう」
「あ、おう」
急いで中入った　うわっ　臭っせえ　森山っ　んなとこでウンコしてんじゃねえよ
ウンコする場所だけどさ　なんで森山のウンコの匂い嗅ぎながらロンパース着てるんだ俺？
チンコもタマもしっかり収めて　校庭に走った

もうみんな着替えて集まってた　他のみんなもいるな
「悪りぃ、遅くなっちまって」
「キャーーーーーーーー！」「キャーーーーー！」「おおおおお！」
キャー？　　何があった？　　なんかあったんか？
振り向いた愛里　あぁぁぁ　メッチャ可愛い　真っ赤な衣装がメッチャ可愛い
赤い帽子がメッチャ似合ってる　なんかもうメーーッチャ可愛い
「森下かっこいいな」「森下くん、すごい似合ってる」
「え、そっか」
「それじゃ、始めようか」
虎之助は　何着ても虎之助だな　あんま変わんねえな
「あ、ちょっと待って」
実行委員

「音響チーム」
音響チーム？
「応援チームがカボジャゴ・カボジャ・ゴーー！　って言ったら曲をかけてね」
「うん」「わかった」
曲かけるだけで二人もいんの？
「あと、撮影班」
撮影班？
「動画と写真撮る場所とタイミング、この練習で憶えてね」
「おけ」「わかった」「実際に撮ってみた方がいいかもな」「そうだね」
4 人もいんのかよ？　　いつこんなん決まったんだ？
「虎之助、撮影班てなんだ？」
「森下が休んでるときに、川口の妹さんのためにって決まってさ」
ああ、そういうことか
「応援タイムとリレーを撮るんだってさ」
「リレー？　　リレーは関係ねえだろ」
「この衣装で走るだろ？」
「あ・・　そうなんか」
なんかわかんねえけど　すげえことになってんだな
「それじゃ応援チーム」
実行委員　メッチャ指導力あんな
「そっちのタイミングでカボジャゴ始めて」
「わかった」
「こっちはスタンバイしてね」
応援タイムチーム　ちゃんとスタンバッてるよ　俺もだけど
「せーの！」
「カーボージャーゴー！　　カーボージャー・ゴーーー！」
すげえそろってんな　や、それどころじゃねえ　戦闘シーンだ
愛里のフヒュー・ヒューって口笛でみんな集まって・・
ヨギソー！ の親方志田　余裕出てきてんな
エネルギー注入してからの・・　実行委員のコリコリコリが合図で
俺が回し蹴りだあ！
「キャーーー！」「おおおお！」
なんだ？　　なんかおかしいんか？　　思わず応援チーム見ちまったよ
「キャーーーーー！」「こっち見たーーー！」
どした？　　頭おかしくなってねえか？　　みんなヘンなスイッチ入ってんのかもしんねえ
そんで・・　ピョレピョレ光線　佐藤！　　スカートみてえなビラビラでちっと足取られたな
そんで　ピカッポンチョ爆弾だ！　　そんで高速空手の型だ！　　どうだ！ ・・で終わりと
「キャーー！」「おーーー！」

拍手か　まだ完璧じゃねえんだけどな
「撮影班、どう？」
「動画見て、だいたいの動きはわかってたからいけそうだな」「そうだね」
「応援チームはあっちの芝生で、クラッカーの方向を決めよう」
移動してった　なんか見られてっと調子狂うっつうか　狂ってちゃいけねえんだけど
「サトユミさん、途中で衣装に足を取られそうになってたけど」
虎之助もきっちり見てんな　さすがここの親方だ
「この巻きスカートみたいなのがちょっとね、でも大丈夫、コツがわかったから」
「サトアヤさんと志田、上着の裾が出そうになっちゃってるね」
「そうなの、余裕はあるんだけど、ちょっとあぶないかも」
「僕のはもともとお腹が見えるけどね」
川口の上着はなんであんなに短けえんだ？
「森下くんのは全然出てないね、あんなに激しく動いてたのに」
「え、あ、まあ、うん」
「森下のってさ、もしかしてオールインワンタイプになってる？」
「なんだそれ？」
「レオタードみたいなさ」
「なんのことかわかんねえんだけど」
「新体操の衣装でも、上下に分かれてる場合、上はレオタードみたいなんだよ」
何言ってんのかわかんねえ
「ちょっと見せて」
虎之助が　俺の
「お、おい、虎之助！」
ズボンのとこ引っ張って
「やめろって！」
見・・ら・・れ・・た
「やっぱりそうだ、森下のおかあさんすごいよ」
「え？　踊ってもトップスが出ないようにしてあるの？」
「うん、今見たらそうだった」
「だから踊ったあともかっこいいままなんだね」
かっけえってさぁ　このズボンの下はなあ　赤ちゃんのロンパースみてえでさ
「僕にも見せて」「俺も見たい」
か、川口っ志田っ　おいっ　やめろーーーー！
「ほんとだ、すごいね」「何かに似てるなあ、なんだっけなあ」
志田　それ以上考えるな
「あ！　赤ふんどし！」
ふんど・・し？
「やだあ、志田くん」
「男らしいじゃん」
男・・らしい？

　「私たちはどうすればいいのかなあ」
男らしい　そっか　これは
　「ギュッとタックインしておくしかないよね」「だよね」
ロンパースじゃなくて　ふんどしか　そっか　ふんどしだ
志田　さすが日本の武道やってるだけあんな　そうだよ　ふんどしだよ
チンコもタマもキュッ収めて戦う男の姿だ！
「それじゃ、もう一回やって終わりにする？」
「ちょっと待った」
「森下くん、なに？」
「応援タイムの練習が終わったら、この恰好のまんまリレーの練習だ」
「そうだね、これで走らなきゃならないからね」「だよね」
愛里をチラッと見たら　ホッした顔で俺を見てた
愛里の不安は俺がぬぐうからさ　俺がいっからさ
俺はふんどししめた漢だからさ

鉢巻きとバトン

校庭の西側の隅っこで　赤い衣装着た６人が集まってる
「本番は鉢巻きするから、今もやった方がいいね」「だよね」
このキンキンラキンの真っ赤な鉢巻きが　この衣装だとあんま違和感ねえな
「私はどこに巻けばいいの？」
愛里　だよな　帽子被ってるもんな
「帽子のここに巻けばいいんじゃない？」
隣りの席の佐藤が愛里の帽子に鉢巻き巻いた
「可愛い！」「可愛いね」「こういう帽子あるもんね」
メーーーッチャ可愛いぃぃぃ
「男子さ」
なんだ？　　隣りの席の佐藤？
「そういう巻き方だと髪の毛がボワッて上にあがってカッコ悪いよ」
どうすりゃいぃんだよ？　　川口と志田と３人顔見合わせたけどさ
「額のところに巻いて横の髪は出して」
なに言ってんのかわかんねえ　川口も志田もわかんねえんだな
「巻いてあげるから」
え？
「私、志田くんやるから、アヤナは川口くんで、上原さんは森下くんね」
俺のは愛里？　　マジ？　　そっかあ　愛里が巻いてくれんのかあ
「あの、ちょっとしゃがんでください」
「おう」
片ひざつけばいぃんかな
「ひざつかないで、衣装が汚れるから」
「え、あ、おう」
メッチャハンパな態勢でケツ出してるみてえな恰好になったけど
愛里の指が・・　俺の髪を・・　ヤベ
「サトユミさん、こういうカンジ？」
「うん、かっこいい」
鉢巻きひとつ巻くんでも　なんかいろいろあんだな
「私、ちょっと走ってみる」
隣りの席の佐藤　あのヒラヒラの布つけてじゃ大変だな
「スタンディングスタートだとさ、私の利き足左だから右足が引っかかりそう」
「そうだね、右足出すときジャマになりそうだよね」

元陸上部二人　ガチだな
愛里は？　愛里も走ってみてるよ　帽子の上になんか乗ってるみてえな走り方になっちまってる
「愛里、帽子は気にすんな」
「え？　あ、はい」
「ゴムついてるしさ、最悪脱げたっていぃんだからさ」
「はい」
川口は・・相変わらず鹿みてえだな　逆に見てて楽しくなってくんな
志田は　豪快だ　よし
「それじゃ、バトンの受け渡しやろうよ」
「うん」「はい」「おう」
佐藤から志田、志田から佐藤、おっし　いいな　そんで佐藤から川口で、川口から愛里やっぱ愛里後ろ見ちまうけどそれはいいな　そんで愛里から俺
「いいね」「いいよね」「もう一回やって終わろうか」「そうだね」
佐藤がバトン持って定位置に走っ　あっ！　転んだ！
「佐藤！　大丈夫か？」「佐藤さん大丈夫？」「ユミ！」
「大丈夫、衣装が引っかかっ　あああああ！」
どした？
「どうしよう！　割れちゃった！」
え？　あ　ペンライトの上の丸い球が・・　割れて欠けちまった
「どうしようどうしよう、ごめんね、ごめ・・あぁぁぁ」
「佐藤、泣かなくていい、佐藤が悪いわけじゃねえよ」
「でもぉ、割れちゃったぁぁ」
「川口」
え？　川口　魂抜けたみてえな顔して突っ立ってる
他のみんなはパニックってる
どうする？　ん・・・っと
「佐藤、ちっと貸せ」
佐藤の手からペンライト取って　地面でカンカン割って
「森下くん！　なにやってるの？」「もっと壊れちゃうよ」
「このまんまじゃ危ねえだろ」
「でも・・」「えぇぇ」
「割れたとこつかんじまったら手ぇケガすんぞ」
「そう・・かもしけないけど」「えぇぇ」
割れたカバーの欠片外して、星みてえなとこだけ残して・・と
「割れてんのよか持ちやすいし渡しやすくなんだろ」
「あ・・　そうだね」「そうだな」
「川口」
まだボーーッとしてるよ
「川口！」

「あ、うん」
「川口の割っちまって悪いけど、リレーのこと考えたらこれっきゃねえと思う」
「うん、僕はペンライトに思い入れはないから、渡しやすい方がいいよ」
「そっか、そんじゃこれでもっかい練習してみっか」
「森下くん・・　ありがとう」
「佐藤、気にすんな、んなビラビラついたので走んのは大変だからさ」
「あ・・」
「泣くなって、ほれ、練習すっぞ」
「うん・・　がんばる」
佐藤も張り詰めてたんかもしんねえな　元陸上部だっつうんで背負っちまってたっつうかさ
「みんな！」
愛里と他の 4 人が俺の方見た
「もっと気楽にやんねえか、んな真っ赤な衣装着て走るなんてさ、おもしれえじゃん」
「そうだね」「ハハハ、確かにな」「うん」
「そんじゃ、バトンの受け渡しの練習始めっぞ」
「はい」「うん！」「おっす！」
今まで丸いのでやってたから　みんな戸惑ってもたついてっけど　しゃあねえよな
「そんじゃこれくれえにすっか」
「そうだね」「うん」
佐藤が川口んとこに行った
「川口くん、ごめんね」
「謝ることじゃないよ、佐藤さんはその衣装で走らなきゃいけなくて大変だしさ」
「でも、私がしっかりしなきゃいけないのに、みんなに迷惑かけて」
佐藤がこっち向いた
「みんな、ごめんね」
「佐藤が謝ることなんてないよ」「ユミは悪くないよ」
「私のせいでバトンの受け渡しもスムーズにならなくなっちゃて」
「それはさ」「それはなんとかなるから」
「本当にごめんなさい」
頭下げてっけどさ
「あの」
愛里？
「私は・・　なんていうか、リレーに当たっちゃったとき、すごくパニクッて、
　そしたら、サトユミさんが、私のことを守るシフトにしようって言ってくれて」
愛里が　一生懸命しゃべってて
「走り方も教えてくれて」
「それは森下くんが」
「うん、あの、だから、サトユミさんやみんなのおかげで、うまく言えないんだけど」
「大丈夫」「上原さん大丈夫だから」「うん」

「このメンバーじゃなかったら、私、なんていうか・・」
愛里が一生懸命言葉探して
「二度と学校に来れなかった」
「えっ？」「え？」「マ、マジ？」「え・・」
「っていうくらい、リレーにはトラウマがあって」
「あ・・それくらいってことね」「あ、そうか」「ビックリしたぁ」
「でも、このメンバーだから、私もがんばろうって思えたから、だから、あの・・」
愛里が俺のこと見て　俺は愛里に微笑んだら　愛里はホッとした顔になって
「ありがとう」
「上原さん！」
佐藤が愛里に抱きついて
「上原さん！」
窓際の佐藤も愛里に抱きついて
「よかっ・・た、上原さんが・・そう思ってくれて」「うん、よかった」
「サトユミさん、サトアヤさん、ありがとう」
「ううん、私も上原さんと一緒でよかった」「私も」
よかった　愛里がそう思ってくれて　佐藤と佐藤もそう思ってくれてさ
「森下」
志田が俺の肩にしがみついてきて
「よかったな」
「おう」
「本当によかったよね」
川口、いつの間に俺の肩抱いてたんだ？
なんか涙ぐんでっけど　二人で俺の上着引っ張んのはやめてくれ
股に食い込んで痛てえよ

解散して　あとはもう本番やるっきゃねえっつうことでさ
旧体育館　解体の音がしてる
「外はあんまり変わらないですね」
「うん、おそらくまだ中の解体やってんだと思う」
あれ？　作業服着た人がこっち見てる　菱谷建設の人か　え？　あれって
「ショーさん？」
「え？　あれ？　えっ　ダイちゃん？」
「ショーさん！」
ショーさんが走ってきた
「ダイちゃん、会いたかったよ」
「俺もだよ、ショーさん」
あ、そうだ
「ショーさん、愛里だよ」
愛里が小さくお辞儀して

「愛里ちゃんか、財布と手提げ袋とカード、ありがとうな」
「いえ」
愛里の顔が無表情になってる
「ショーさん、愛里、人見知りだからさ」
「そうか、ビックリするよな、こんなおじさんに話かけられてさ」
「あ、いえ」
「ほら、これ」
ショーさんがケツポケットから
「使わせてもらってるよ」
財布か　マジで使ってくれてる
「どこか・・　切れたりしてませんか？」
「丈夫でさ、カードもいっぱい入れられるから、ほら」
ショーさんが中見せて
「ポイントカードも入ってるよ」
「ポイントカードって　フフ」
愛里が俺を見上げて
「おとうさんも持ってますよね」
んなとこまで見ててくれてたんか
「うん、持ってる、スーパーや商店街の」
「ダイちゃんと愛里ちゃんはいいカップルだな」
シヨーさんがニッコニコして俺と愛里見てる
「だろ？」
「だろって　ハハハ」
あ、そうだ
「ショーさん、俺、この前監督に会ったんだよ」
「監督もダイちゃんに会ったって言ってたんだよ」
「ショーさんも明日の一般リレーに出るんだろ？」
「そうなんだよ、明日はこの現場は休みでみんな他の現場に行くんだけどな」
「この現場は休み？」
「運動会の間にうるさくしたら申し訳ないって、監督がそういう日程組んだんだ」
「そうなんか」
監督やっぱすげえな　配慮っつうかさ
「若いのに混じって俺みたいなおじさんが走るなんてさ」
「ショーさん、走るのは得意なの？」
「若い頃はまあまあな、俺の女房には敵わなかったけどな」
「奥さん、地区大会で優勝したんだっけ？」
「よく憶えてるなあ」
「この学校の卒業生だったんだよね」
「そうなんだよ、この校舎は 10 年くらい前に建て替えてさ」
「マジ？」

ねえちゃんときはもうこの校舎だったもんな
「あのときは、女房が、私の青春が壊されるって、ハハハ」
「そんじゃ、この体育館は・・」
「これは女房が通ってたときのものでさ、当時はまだまだきれいだったんだけどな」
この校舎も　いつか　建て替えるときが来んのかな　俺と愛里の・・
「ダイちゃんも愛里ちゃんもかっこいいね」
「これは応援タイムの衣装でさ」
「衣装でリレーの練習してる生徒さんがいるなって、思わず見ちまってたよ」
「この格好で走んだよ」
「この学校は代々そうだよね、仮装してリレー走るよな」
「ショーさん見たことあんの？」
「高二のときだったかな、俺の学校が休みで、カナちゃんを見に来たんだよ」
「そっか」
　　「ショーさーーん」
「あ、ショーさんごめんな、仕事中だったよな」
「俺は仮設休憩所掃除したら上がりだから、今のはリレーの練習に呼ばれたんだよ」
「ショーさんたちも練習すんの？」
「いちおうな、監督がけっこう張り切ってるからさ」
「そっか、そんじゃ明日は応援すっからさ」
「俺もダイちゃんたちを応援するよ」
「ショーさんに見てもらえんの嬉しいよ」
「そうか？　　ハハハ　それじゃまたな」
ショーさんが旧体育館の裏に走っていった
「愛里、待たせてごめん」
「あなたって・・」
「ん？　　なに？」
「同級生と話してるより、ショーさんと話してる方が、なんていうか、通じてますね」
「通じてる？」
「会話の行き違いがないっていうか」
「え？　　俺、会話行き違ってんの？」
「それが、意味は違うのになんか最終的には通じ合うっていうか」
「え？　　どういう？」
「早く帰りましょう、この格好でいるのは恥ずかしいです」
「あ、そっか」
愛里が走り出して　俺は愛里の手ぇにぎって
「学校内なのに！」
「明日の借り人競争の練習だよ」
「あなたはどんなお題を引くんでしょうね」
「カノジョだったら速攻で愛里んとこ行く」
「ハゲのおっさんならおもしろいのに」

「ぜってえカノジョつつうの引く」
「メガネ男子なら川口くんと手をつなげますよ」
「なんで川口推しなんだよ」
「川口くんと・・グフッ　手をつないでるあなたを　ハハハハ」
「想像すんなよ」
「だって　ハハハハ」
愛里が笑ってる　真っ赤な帽子に鉢巻きのリボンつけて　可愛いなあああ
愛里と応援タイムも一緒でリレーも一緒ってさ
「最高だあああああ！」
「やだ、大きな声出さないで」
「あ、はい」
俺と愛里は青春ん中にいんのかな　青春がよくわかんねえけど
そんでも　しあわせだあああ

運動会の朝

朝起きて　顔洗って　制服着て
体操着は入れた　クラスＴシャツと鉢巻きも　衣装はこっちの手提げに入れた
おっし
キッチン行って
「とうちゃん、おはよう」
「ダイチ、おはよう」
「とうちゃん、俺、設営手伝わねえとなんねえからもう行くよ」
「そっか、そんじゃ、ダイチ、握りメシ食ってけ」
とうちゃんがでっけえ握りメシを俺の手にのっけてくれた
「とうちゃんの握りメシでピカッポンチョ爆弾、盛大に投げっから」
「楽しみにしてっからよ」
「うん、頑張るよ」
玄関に　これは敷物だよな
「とうちゃん、俺がこれ持ってって敷いとくよ、去年とおんなし場所でいぃんだよな」
「美里があそこがいいってよ」
「わかった、そんじゃ、いってきます」
「ダイチ、いってらっしゃい」
着替え入ったスクールバッグと手提げと敷物持って　愛里の部屋に向かった

校門入ると　校庭ではそれぞれのクラスがボードに飾り付けしてる
本部のテントも設営されて　運動会だな
「愛里、俺、敷物あっちの木の下に敷いてから行くからさ」
「それじゃ私は先に着替えて、そのまま装置の設営に行きます」
「俺も着替えたらすぐ行く」
「はい」
校庭グルッとまわって　ここだ　にしても　この敷物でけえな
「森下」
「うわっ、あ、おう、川口、おはよっす」
「登校してきたら、森下の姿が見えたからさ」
「敷物敷いて場所取りしてんだよ」
「だったら、僕のクーラーボックスもここに置いてもいいかな」
「クーラーボックス？」
「僕の母親がね、昼食をご馳走になるんだから飲み物用意したらって」

「んな気ぃ使わねえでいいよ」
「でも用意してきちゃったからさ」
「あ、そっか、ありがとう」
「上原さんにチラッと言ったらね」
愛里に？
「いろいろ指定されて」
指定？
「森下のお母さんはコーヒーのホット、絶対にホット」
たしかに　かあちゃんは　去年も近くのカフェで持ち帰り用にして買ってきたな
「森下のお父さんと森下は水、森下はコーヒーも飲む」
「おう」
「水はどの銘柄なのって聞いたら」
銘柄？
「水道水って、ちょっと意味がわからなかったんだけどさ」
「水道水は水道水だよ」
「うん、だから、うちの水道のアルカリイオン水だけど入れてきた」
「んな、わざわざんなことしねえでもさ、あっちの水飲み場の水でいぃんだよ」
「でも、もう持ってきちゃったからさ」
「そっか、なんか悪りぃな」
「あと、上原さんは紅茶」
川口がクーラーボックスのフタ開けた
すげえ　なんか真っ白の　なんつうんだ？ 保温ポット？　三本入ってる
「あと、カップも持ってきたから」
「これは・・　オシャレなカフェの持ち帰り用カップか」
「そう見えるんだけど、使い捨てではないんだよ、プラスティックだから丈夫だよ」
「あ・・　へえ、なんか・・　すげえな」
「あと、氷もさっきコンビニに寄って買ったきたから」
「氷？」
「アイスにしたくなった場合ね」
「あ・・　そ、そっか」
なんか　すげえな
「上原さんて森下の家の人たちの好み、全部把握してるんだね」
「好みっつうか、まあ、なんか・・　ごめん」
「僕は細かく指定されるのは慣れてるからさ」
「あ？　ん？」
「妹にいつも細かく指定されて買いに行くから」
「あ、そっか」
「そうだ、森下に見せないと」
今度はなんだ？　ワインとかじゃねえよな
スクールバッグん中から　黒い箱　すげえ高そうな箱　まさか　ワイングラス？

「これ、なかなか開かなくてさ」
かあちゃんがすげえ高けえワイングラス買ってきて　とうちゃん怖がってさ
食器棚のいちばん上に箱ごと入れててさ　それみてえな箱だな
「開いた、ほら」
「え？　　これ・・は　ペンライト？」
しかも丸いとこ壊れてねえやつ
「昨日、妹に、ペンライトが壊れたって話をしたらね、私のを使ってって」
「えっ　これ、妹の？」
「うん、ここまできたら完璧にして欲しいって」
「そんでも、もし、また壊れたら」
「11 月にまたライブがあるらしくて、その前にグッズの先行販売があるから」
何言ってんのか　わかんねえ
「そのとき新しいのを買うからいいってさ」
「え、あ、そ、そっか」
「それじゃ、僕たちも着替えないとね」
「お、おう」
なんか・・　疲れたな

クラス T シャツと下は体操着に着替えて
俺らのクラスの席に行った
おおお　すげえ　摩天楼の真ん中に　金色でＳが反転されて-Class って貼ってある
男子たちが風船にヘリウムガス入れて　すげえなあのボンベ
「あの」
「愛里、なにすればいい？」
「この上のところにつけてくれますか？」
「おう」
「森下くん、椅子いる？」
「いらねえよ」
手ぇ伸ばせばできっからさ
「ここか？」
「すご〜い、森下くんだと楽々だね」「もっと上までできちゃうよね」
「そこにお願いします、あと反対側も同じように」
「おう」
愛里が　みんなに指示して　指示っつうか「ここはまとめて置いた方が」ってさ
やっぱ愛里のセンスは最高だな　メッチャかっけえじゃん
「できた！」「すごいな」「かっこいい！」
装置部門はダントツ一位だよ
「川口くん、昨日は本当にごめんね」
佐藤　まだ気にしてんのかよ　佐藤のせいじゃねえって
「佐藤さんは悪くないよ、それにね、ほら」

「え？　新しいペンライト？」
「妹が、これでやって欲しいって」
「モエちゃんが？　ていうことは、これはモエちゃんの？」
「うん」
「えぇぇ、そんな悪いよぉ」「今までのでいいよ」
「ここまできたら、完璧な状態でやって欲しいんだってさ」
「そうなの？　でも、また壊れたらどうしよう」「モエちゃんに申し訳ないよ」
「11 月にまたライブがあって、グッズが先行発売されるから、これは壊れてもいいって」
「だったら、リレー班でお金出し合ってモエちゃんにお礼ってことで買おうよ」
「そうだな」「それがいいよね」
「そんなことしなくていいよ」
「森下くん、どう思う？」
俺？
「あ、うん、そうしたらいぃんじゃねえか？」
「だよね、このテーマができたのはモエちゃんのおかげだもんね」
「だったら、俺も入れてよ」
虎之助
「リレー班っていうより、応援タイムのチームで贈りたいよ」
いいこと言うなあ　虎之助
「私も入りたい」
実行委員女子もか　団結力できてんな
「なんか、余計なこと言っちゃったよね」
「川口くん、余計なことじゃないよ」「モエちゃんがここまでやってくれるんだから」
「川口、それっていくらすんだ？」
「本体は 7,800 円」
「なっ　ウグッ」
え？　愛里が俺の口　手で押さえた　なんか　メッチャ嬉しい
「あの、だったら、一人 1,000 円ずつってことで」
手でギュウッて俺の口押さえながら
「川口くんは 800 円出してくれる？」
提案してっけど
愛里　愛里　口だけじゃなくて　鼻も押さえてっから息が　息が
「ブッホォオオ」
「やだ、手につばがついちゃった」
「あハァハァごめハァハァん」
「何ハアハアいってるの？」
「鼻も押さえてっからハァハァ息できなかった」
「えっ？　そうなの？　やだ、言って！」
「なんか、嬉しかったから」
「えぇぇぇ、アタマおかしいでしょ」

「森下くんと上原さんて、おもしろいカップルだよね」「だよな」
「マジ？」
「私と、あの、それはいいから、モエちゃんのペンライトのこと」
「あ、そうだね、それじゃ、あとで 1,000 円ずつ集めて川口くんに渡そうね」
「本当にそんなことしてくれなくてもいいよ」
「私たちの気持ちだから、モエちゃんにプレゼントしたいから」
「わかった、ありがとう」
あの　すげえ箱に入った 7,800 円のペンライト持って走んのか
かあちゃんの高けえワイングラス持って走るみてえな気持ちだな
とうちゃんが怖がる気持ち　なんかすげえわかる
「それじゃ、いったん解散ね」
「開会式まであと 20 分くらいだから、トイレに行くやつは行っておいて」
「うん」「わかった」「おう」
みんなが　それぞれ散ってって
「愛里、こっちに敷物敷いたから」
「はい」
愛里のこと連れてって
「やっぱりこのレジャーシート、ステキ」
「そっか」
「このクーラーボックスは川口くん？」
「なんか、いろいろ持ってきてくれた」
「そうですか」
「愛里に聞いたっつってた」
「川口くんがお母さんに、飲み物を持っていったらって言われたっていうから」
「そっか」
「あなたとおとうさんは水道水って言ったら、え？ なに？ どういう意味？ って戸惑ってたけど」
「そっか」
「でも・・　ペンライトが 7,800 円てビックリしちゃった」
へ？
「7,800 円を持って走るって、ちょっと怖い」
「だったらなんで俺の口押さえたんだよ？」
「だって大きな声出しそうになったから」
「咄嗟に反応しちまっただけでさ」
「そんなことしたら川口くん、お金受け取りにくくなるでしょ」
「まあ、うん、そうだな、そんでもあれは、わざとじゃねえから」
「わかってます」
「そっか、なんか、ごめんな」
「なんで謝るの？」
「や、なんか愛里に気ぃ使わせちまって」

「あなたの生態はだいぶわかってきたから」
生態？
「ごめんなさい、鼻まで押さえちゃって」
「あれは、嬉しかった」
「だからあ、鼻と口押さえられて息ができないのに嬉しいって意味がわからない」
「愛里が、すげえ親しいカンジになってくれてんだなって」
「え・・」
「息できなくても、嬉しかった」
愛里が横向いて　俺の腕ピシャッて　たまんねえ
「それじゃ、私もちょっと・・行くので」
「俺も便所行ってくる」
「私が曖昧にしようとしたのに、あなたは」
「なに？」
「いいです、行ってきてください」
「おう」
「始まりますね、運動会」
「始まんな、運動会」
「ドキドキしてきちゃった」
「大丈夫だって、愛里には俺がいっから」
愛里の手ぇにぎったら
「はい」
愛里もにぎり返してくれて
「それじゃ行きましょう」
「おう」
二人で校舎ん中に入った

競技スタート

開会式が終わって
一年生の競技が始まった
あの木陰の方見たら　とうちゃんとかあちゃんはもう来てた
あ　かあちゃんと目が合った
なんか手で　下指さして　これ？　　クーラーボックスか　指で　大きなクエスチョンマーク
そっか　わかんねえよな
「愛里、とうちゃんとかあちゃんとこ行ってくる」
「え？　　今？」
「クーラーボックスがなんなのかわかんねえみてえだからさ」
「森下、お父さんとお母さんのところに行くの？」
「川口、飲み物もらったっつってくっから」
「それじゃ僕も挨拶するよ」
川口と二人で　木陰に向かった
とうちゃん　上から下までかあちゃんチョイス着せられたんだな
「ダイチ、これは？」
「川口から飲み物もらったんだよ」
「あら、そうだったの」
「おはようございます」
「川口くん、おはよう、飲み物を持ってきてくれたの？」
「母が、お弁当をご馳走になるから飲み物をって」
「そんなこと気を使わなくていいわよ」
「持ってきちゃったので」
「そうね、重たかったでしょ」
川口がクーラーボックス開けて
「これが、お母さん用のコーヒー、ホットです」
「あら、このボトル、もしかして中身も？」
「はい」
「ここのは飲みやすいのよ、ありがとう」
「こっちは、お父さん用の水です」
「お、俺？」
「水道水です、アリカリイオン水ですけど」
「あ、なんか、あの、ありがとな」

「これがカップで、これを使ってください」
「カップまであそこのなのね」
あそこってどこだよ？
「そんじゃ、行くから」
「あんたはいつ出るのよ？」
「俺はもっと後、愛里は、今の次の次で、献立ゲームっつうのに出る」
「あんたはなんていう競技？」
「借り人競争」
「ああ、あれ、ハゲのおっさん探しておいた方がいいかもよ」
マジで探しとくかな
「川口くんは？」
「僕も借り人競争です」
マジか
「お題がいろいろ大変だから頑張ってね」
「ありがとうございます」
「そんじゃ、昼休みに愛里も連れてくっから」
「はいはい、いってらっしゃい」
「ダイチ」
とうちやんが小せえ声で
「がんばれよ」
「うん、とうちゃん、がんばるよ」
川口と二人でクラス席の方に歩いてた・・ら
「森下くん！」
「あ？ なに？」
「一年生が探してる」
「俺を？」
「早く！」
「え、あ、おう」
走って戻ったけど？
「森下先輩！」
だれ・・　だ？
「借り人競争！　来てください！」
「俺？　あ、おう」
どういうお題だ？　180cm 以上とかか？　バスケ部に一人いるけどな
「これは、本気出していいんか？」
「本気出してください！」
「おっし」
手ぇつないで　全力で　ほぼ一年生ぶら下がってっけど　走った
「一年借り人競争女子第三組、一位！　5 組！　お題は、憧れの先輩！」
え・・

「あの、森下先輩は上原先輩とつき合ってるって知ってますけどぉ」
「ああ、まあ、一位になったな」
「ありがとうございます！」
勘弁してくれ　全力で走っちまったよ
それから　俺は・・　次々と借りられてさ
「一位！　１組！　カレシにしたいNO.1！」「一位！　７組！　誰が見てもイケメン！」
誰だ　このお題考えたんは・・　実行委員会の２年と３年だな
そんで　一年生が続けざまに・・　これは　そうか　そういうことか！
「愛里、これはさ」
「あなたを借りると、みんな一位になりますね」
笑ってっけど
「これは陰謀だ」
キョトンとしてた顔して俺のこと見てっけどさ
「俺の体力を削いで、応援タイムの戦闘シーンで全力出せねえようにしようとする陰謀だ」
「本気で言ってるの？」
「応援タイムの優勝は学年関係ねえし総合優勝並みに特別だからさ」
愛里が俺の顔ジッと見てる　不安になったんか
「俺は現場で鍛えてっから、こんくれえなんともねえからさ」
「あなたって・・」
「マジで大丈夫だから」
「バカなの？」
「へ？　ハ？」
「一年生の女子は、あなたと手をつないで走りたいからで」
「なんでだよ？　会ったこともねえよ」
「あああ、話通じない」
「え、なに？　愛里、なに？」
「いいです、思いっきり借りられてください」
「もうその手には乗らねえよ」
「その手とか、バカみたい」
「や、俺はさ」
「森下センパーーーイ！」
きた
「お題はなんだっ？」
「え、あの、ワイルド系王子様・・です」
「川口、いってこい！」
「僕？　僕は違うよ、どう見ても違うよ」
「メガネ取ればけっこう・・　ワイルドだろ」
「森下、本気で言ってる？」
「本気だ！　行け！」

「え、森下先輩に・・」
「川口は野生だ！」
鹿は野生だろ　いちおう
「あなたが行ってあげて！」
「愛里、そんでもさ」
「早く行ってあげて！」
「あ、え、そんじゃ」
愛里が言うなら　しゃあねえか
「そんじゃ行くぞ」
「はい！」
手ぇつないで
「あのぉ、本気で走ってくれないんですか？」
「合わせてんだよ」
「え？　　私の速さに？」
「おう」
「え、嬉しい！」
嬉しいか？　　こんな遅くてさ　早く席戻りてえよ
３位　スキップみてえだったな
「ありがとうございます！」
「おう・・」
もう　たくさんだ！　　もう陰謀には引っかかんねえかんなっ
水飲み場で顔洗って　水飲んで
まあ　いいウォーミングアップにはなったか　だな　逆効果だったな　陰謀は失敗だよっ

次のが始まった
「どうしよう」
愛里？
「油淋鶏とか出たら」
「油淋鶏は出ねえよ、去年さんざん出てたからさ」
そんでも簡単だけどな　名前が難しそうな雰囲気出してっけどさ
「あ、よかった、えっと・・　カレーが出たらどうしよう」
「カレーは簡単じゃん」
「だってスパイスとかわかんない」
「そういうの出ねえよ、カレー粉と薄力粉とバターでルーはできっからさ」
「あ、それだけ？」
「具はコンソメで似て、塩で味つけ、胡椒入れることもある」
「あとは・・　えっと・・」
「愛里、大丈夫だよ、調理師学校みてえなお題は出ねえから」
「借り人競争の方がよかったかもぉぉ」

「愛里、愛里の味覚はすげえから、ぜってえ大丈夫だよ」
「ほんと？」
「うん、俺が保証する」
「あ・・　なんかちょっとホッとしました」
「楽しくやりゃいぃんだよ、これで命取られるとかじゃねえんだからさ」
「あ、そうですよね」
「そうだよ」
「ですよね、個人競技だからビリでもいいですよね」
個人でもその順位はクラスに加算されっけど
「おう、ビリでもいいよ、楽しかったらさ」
「なんかすごく気が楽になってきました」
「そっか」
「それじゃ、そろそろスタンバイするみたいだから」
「愛里、楽しくな」
「はい」
愛里が献立ゲームに出る子たちと一緒に走ってった

献立ゲームが始まった
愛里は第三グループか
え？　なんか　みんな　次から次へと戻らされてっけど
そんなに難しいお題なんか　これは・・　どうなんだ？　いや、愛里は楽しきゃいいよ
あ、やっと一位が決まった
「女子二年献立ゲーム！　第一グループ一位！　四組！　お題はサバの味噌煮！」
サバの味噌煮であんな戻ってたんか？　ウソだろ
第二グループ始まった
また次々戻らされてっけど　愛里は？　ちっと緊張した顔してっけど　大丈夫だよ愛里
「第二グループ一位！　二組！」
隣りの席の佐藤　けっこう戻ってたけど一位になったか
「お題はクリームシチュー！」
クリームシチュー？　佐藤　クリームシチューでさ　まあ一位になったからいいけどさ
愛里のグループが位置に着いた
愛里が走ってお題が置いてある台に着いた　なんだ？　お題はなんだ？
魚取った　アジって書いてあったな　アジだと・・　アジフライか　アジの南蛮漬け
アジの南蛮漬けなら愛里は何度も　あっ！　愛里のには生玉ねぎ入れてねえんだよ
野菜んとこ行った　ピーマンと唐辛子取ったな　やっぱアジの南蛮漬けか？
こっからだと背中しか見えねえな　玉ねぎは・・　ムリか
調味料んとこ行った
あとはもう・・　愛里の舌にまかせるっきゃねえ！
愛里が　ゴールに向かって　お題の紙とカゴの中のもの見せてる　どうだ？ どうなんだ？

ピョンピョン跳ねてる！　マジ？　嬉しそうな顔でピョンピョン跳ねてる
「第三グループ一位！　二組！　お題はアジの南蛮漬け！」
マ・・ジ？　玉ねぎ取ったっつうこと？　マジ？
「上原さんすごい！　イッパツ！」「すごいなあ」
愛里・・　俺は・・　涙・・　ヤベ　こんなんで泣いてたら　袖でぬぐって
戻ってきた！
「愛里！　おめでとう！」
「あなたのおかげです！」
「そんでも、玉ねぎはさ」
「前に川口くんにあげたお弁当におとうさんが作ったアジの南蛮漬けが入ってて」
「え？」
「そのとき、あなたが、そっちは生玉ねぎが入ってるから食べるなって」
それを・・　憶えてたんか
「だから、ふつうは入れるのかなって」
「入れる」
「あのときのことがあってよかった！」
よかった　マジよかった
「調味料はちょっと・・でしたけど、お砂糖とお酢とお醤油まではすぐわかって、
　でも、あなたのは、もっと、なんていうか、出汁が効いてる？　それで出汁も」
「そっ・・か、そっか、うん、出汁も入れる」
「あなたのおかげです！」
「愛里の舌がすげえんだよ、そんで・・」
「やだ、なんで泣くの？」
「なんか感動しちまって」
「もう」
愛里が俺の腕ペシッて　ニコニコしながらペシッて
よかったあ　マジでよかったあ
とうちゃんとかあちゃんの方見たら　立ち上がってて
「愛里、とうちゃんとかあちゃん見てる」
「え？　あ！」
愛里が手ぇ振って　かあちゃんが指でいいねサインしてて　とうちゃんはニコニコしてて
「やっぱり献立ゲームでよかったです」
「よかった、マジよかった」
「あなたのお弁当食べてなかったら、永遠にわからなかった」
「そっ・・か」
「やだ、また泣かないでよ」
「うん」
愛里が俺のこと見上げて
「ありがとう」

「愛里が・・　すげえんだよ」
抱きしめてえけど　んなことしたら怒られっからやんねえけどさ
気持ちは抱きしめてっからな　愛里

夢を叶える

各学年女子の第一個人競技は終わって
一年生の応援タイム
どこのクラスも「まっつり～まっつり～」ってさ
いっそ合同でやれば迫力あんじゃねえのかな・・って
去年の俺たちを見て上級生たちも思ってたんだろうな
ある意味恒例行事なんかもしんねえな
そんで　一年生男子の第一個人競技も終わって
いよいよか　出発地点に集合だ
川口は第一グループか
「よーい、スタート！」
川口走った　おお　今んとこ一位でお題の台の前に行った
ん？　本部の方見た　なんだ？　ハゲたおっさんか？　今の校長ハゲてねえしな
ハゲのおっさんは・・・　あっちの通りの向こうをハゲたじいちゃん歩いてっけど
え？　なんでだ？　真っ直ぐ粉の台に走って　いなかったんか？　お題はなんだ？
一位でゴールしたけど　お題どおりじゃねえと格下げされんだよな
「借り人競争二年男子第一グループ！　一位は２組ですが、お題がいないので二位となります！」
あぁぁ　んな難しいお題だったんか
川口　顔真っ白の粉だらけで席に戻ってった
俺は　次の次だ　カノジョって出ねえかな　出てくれ！
第二グループが走った　あ　速攻で７組に向かって　女子連れて
「第二グループ一位！　４組！　犬を飼ってる女子！」
んなことよくわかったな
　「あの二人つき合ってるからな」「ラッキー問題だよな」
そっか　だから速攻で　んなことはいい　次だ
「よーい、スタート！」
台に向かって
お題引っつかんで　これは・・　これは・・
俺にとっては・・　これだ！
「とうちゃーーん！」
後ろに向かって走った　木陰に向かって走った
「とうちゃーーーん！」
「ダイチ？　なんだ？」

「お題！　早く！」
「あ、おう」
とうちゃんと手ぇつないで　俺がとうちゃんの右だから
とうちゃんの右脚少し引きずっても俺の左脚と一緒だから走れる！
「とうちゃん、行くよ！」
「おーーーっし！」
走った　走った走った走った
「ダイチ！　飛ばすぞ！」
「おう！」
とうちゃんがメッチャスピード出して　俺も一緒にスピード出して
パーーーン
とうちゃんと一緒にゴール！
「第三グループ一位！　２組！」
俺はちっとハアハアしながら
「とうちゃん、一位だよ！」
とうちゃんもちっとハアハアしながら
「だな、一等賞だな」
嬉しそうな顔でさ
「お題はーー」
とうちゃんがワクワクした顔でアナウンス聞いてる
「世界でいちばん大切な人！」
「え？」
とうちゃんが俺の顔見た
「ダイチ、これ・・」
「世界でいっちゃん大切な人」
「ダ、ダイチ、アイリちゃんだろ、まちがえちまっ」
「間違えてねえよ」
「そ、そんでもよ」
「とうちゃん、俺さ、友だちいっぺえいるんだよ、みんないいヤツでさ」
とうちゃんオロオロした顔してっけどさ
「そんでもさ」
そんでもさ　とうちゃん
「世界でいっちゃん大切でたった一人の俺の親友は、とうちゃんなんだよ」
「ダイ・・チ」
「それにさ、俺、とうちゃんと一緒に運動会で走りたかった」
「え？」
「幼稚園ときも走らせてもらえねえでさ、だからずっと、とうちゃんと・・」
涙・・　出て・・きて
「運動会で・・　とうちゃんと走りたかった！」
「ダイチ」

とうちゃんが泣きそうな顔で笑って
「そうだな、ダイチととうちゃんで一緒に走れたな」
「う・・ん」
「俺も・・　生まれて初めて、運動会で走れた」
「とうちゃん」
とうちゃんに抱きついて　俺　子どもみてえに　俺
「ダイチ、ありがとな」
とうちゃんが　俺のこと抱きしめながら　俺の頭撫でて
「ダイチは、とうちゃんの、たった一人の大切な親友で、大切な息子だよ」
「とうちゃーーん」
あ・・れ？　なんか　俺の声　エコーかかってるみてえな
え？　なんかシーーンとして　あれ？　なんか　みんなこっち見てる
えっ　なんで俺ととうちゃんの間にマイク向けてんだ？
そんでマイク向けてるこいつも泣いてんだけど？
「んっと、あの、これは？」
「あんまり感動的だったのでぇぇ」
「や、それは、あの、んっと、とうちゃん、戻ろっか」
「あ？　おう、だな」
とうちゃん　何が起こってっかわかってねえな
なんだよこれ？　なんでマイクで　や　んなことはいい　とうちゃんと走れたんだから
「そんじゃ、とうちゃん、またあとでな」
「うん、またな」
木陰に戻った　とうちゃん
かあちゃんが俺のこと見てて
お・う・あっ・あ？　よくやった？　かあちゃん　また泣くからやめてくれよぉ
クラス席に戻った・・ら
え？　拍手？　みんな泣いてっけど
「森下！　感動したよ！」「森下くん！　泣いちゃった！」「感動をありがとう！」
や、そういうんじゃなくてさ　俺の個人的なことでさ
愛里の横に　え・・　愛里も涙
「あなたは・・」
「愛里、あのさ」
愛里がいっちゃん大切じゃねえってことじゃなくてさ
「すごい」
「え？」
「おとうさんの・・運動会で走りたいって夢と・・あなたの・・　おとうさんと・・」
愛里が泣いて　俺の胸に
「愛里」
抱きしめて
「あなたが・・　あれを引いて・・　よかった」

「愛里」
「嬉しい」
「愛里、ありがとな」
「私はなにもしてない・・　あなたが・・　あれ？」
愛里がパッと顔あげた
「どした？」
俺の耳元で
「みんなが・・　見てる」
「え？　　あ、なんで見てんだよ？」
「感動的なラブシーンだったからつい」「ドラマ見てるみたいでつい」
ついって
「あの、私、ト、トイレに」
「あ、おう」
ん？　　川口が　こっち見てる　真っ白い顔でニッコリって
「川口！　　怖えよ！　　顔洗えよ！」
「あ、忘れてた、森下の番になっちゃうからと思って、そのまま見ててさ」
つか、誰も気ぃつかなかったんかよ
「俺も、水飲みに行くからさ」
川口と二人で　水飲み場に向かった

川口が水で粉落として
「まだ前髪んとこついてっぞ」
「思い切り顔を突っ込んだからさ、取れた？」
「おう、取れた」
川口がタオルで顔と前髪拭いて
「川口、お題はなんだったんだよ」
「誰にも言わないでくれる？」
「言わねえよ」
「ズラの人」
「へ？　　それはわかんねえよな」
「でも、教頭がズラだからさ」
「マジ？」
「森下は知らなかったの？」
「全然知らねえ」
「けっこうみんな知ってるんだけどさ」
「マジで？」
「見ればわかるよね、生え際がものすごく不自然でさ」
「俺、ボワッとしか見たことねえな、なんなら名前も憶えてねえ」
「ある意味すごいね」
「だったらなんで教頭連れてかなかったんだよ？」

「本人は誰も気づいてないと思ってるからさ」
「生え際不自然なんだろ？」
「そうだけど、みんな知ってるけど、それを公にさらすのもどうかと思って」
そっか　そういう気遣いだったんか
「川口、漢だな、人の恥部を」
「恥部って言ったらかわいそうだけどさ」
「まあそこを触らねえでやって、自分が粉まみれになるなんてさ」
「僕はただ、そういうことをして騒動に巻き込まれたくなかっただけだよ」
「みんな知ってんだろ？」
「でも、マイクでズラの人って言われるんだよ？」
「そっか、マイクで」
え？　　俺ととうちゃんの会話もマイクで・・
「森下とお父さんのやり取りは感動したよ」
「や・・　あれは」
「競技が一時中断されて、全員聞いてたからさ」
一時・・中断？
「本部席の人たちも泣いてたよ、教頭もだけどね」
「あ・・そっか」
「言えないよ、世界でいちばん大切でたった一人の俺の親友はとうちゃんだなんてさ」
「それはマジでそう思ってっから」
「うん、それは伝わったよ、でもあんな感動ドラマのセリフみたいなこと」
感動・・　ドラマ？
「ここにいる全員の前でって、森下じゃなきゃ言えないよ」
「や・・　俺は・・」
ここにいる全員の前で言ったつもりはなくて
「森下はやっぱりすごいよ」
「川口・・　それは・・　褒めてんのか？」
「事実を言ってるだけだよ」
「あ・・　そう・・なんか」
「僕はトイレに行くから」
「あ、おう」
クラス席に戻ったら　愛里はもう戻ってた
「愛里」
愛里の隣りに座って
「三年生男子の借り人競争始まりますよ」
「そっか」
第一グループがスタートした
最初に台に着いた人が　クルッと後ろに走ってって　なんてお題なんかな？
え？　　えっ？　　エーーーーーッ　かあちゃん引っ張ってきてんだけどぉおおっ？
「おかあさん借りられましたね」

なんでだ？
なんで俺のかあちゃんなんだよ？　会ったことねえじゃん
一位になった　マジか
「三年生男子借り人競争第一グループ！　一位６組！　お題は美魔女！」
「美魔女ってピッタリ！」
愛里　喜んでっけどさ
自分の母親連れてかれた俺としてはさ
「三年生だから前以て傾向と対策を練っていたんでしょうね」
「傾向と対策？」
「こういうのが出たらこの人とかって目をつけてるっていうか」
目ぇつけてるってさぁ
「美女っていったらおかあさんですよね」
愛里　美　魔女だよ魔女
「おかあさんみたいな美女は存在しないから」
「いるだろ」
「どこに？　だれ？」
キョロキョロ見てっけど
「愛里」
愛里がメッチャ顔しかめて俺のこと見てっけど
「そんでも俺は貸さねえ、ぜってえ貸さねえ」
「私は、どんなお題でも行きません」
「だよな、愛里には俺がさ」
「体力を削がれたくないです」
「へ？」
「リレーまで、あ、その前に応援タイムがあるけど、体力温存しておかないと」
「あ・・　そっか、うん」
次のグループが走った
あ　本部席に　あれは　教頭・・だよな　手ぇ引っ張ってった
「第二グループ一位１組！　お題はズラの人！」
え・・
「三年生は容赦ないよな」「みんな知ってるけどね」
なんか・・　シーーーンとして　みんな拍手していぃんかどうか困ってる
そっか　こういう空気になんのか
川口　粉に顔突っ込んで正解だったかもしんねえ
今トイレに行ってて見てねえのもさ

女子力

女子第二個人競技が始まった
一年はフルコースか　これは男女だけどさ
「去年、俺これだったわぁ」「俺も、地獄だった」「私、卵の殻むけなくて死んだ」
「私と組んだ男子、炭酸飲んでる途中で私の顔にブワッて吐いたんだから」
そんなだったか？　　俺もまあけっこう頑張ったけど　そこまで地獄ではなかったけどな
一年生の通過儀礼的なもんなんだろうな
次は二年女子の借り人競争か
「今のところ、二年では 4 組と同点一位なんだよ」「三年生の一位とも競ってる」
マジか
「この競技は一位取らないとね」
うちのクラスのメンツは・・　わりと速そうだけどな
廊下側の佐藤もこれに出んのか
「サトアヤさん、がんばって」
愛里　チーム仲間を応援して　可愛いなあ
「いってくるね」
これが終わったら三年女子で　そんで昼休みか　腹減ったな
午後は団体戦で　そんでいよいよ戦闘シーンだな
また便所で着替えんのか　そんでももう見られちまったしな　べつにいっか
「森下くん！」
「佐藤、どした？」
「来て！」
「なんで？」
「借り人！」
「や、べつのヤツにしてくれよ」
「森下くんじゃなきゃダメなの！」
「なんでだよ？」
「ほら！」
佐藤がお題の紙を　ハ？　　“二年二組の森下大一をおんぶして走る”？
「ハァアアアア？　　なんで名指しなんだよ？」
「あっ！」
あって　実行委員男子
「あってなんだよ？　　何があっなんだよ？」
「いいから行ってあげてください！　　サトアヤさん困ってるから」

愛里　んな　愛里に言われたら
「おう」
佐藤んとこ行って
「俺のことおんぶできんのか？」
「やってみる、あ・・　これ・・　なんか・・」
俺の足着いちまってんだけど　なんなら子どもにおんぶされてるおとな状態で
これは・・　これっきゃねえ！
佐藤の前にしゃがんで
「佐藤！　乗れ！」
「でも、お題は私が」
「いいから！　乗れ！」
「あ、わ、わかった、私、重たいからごめん」
「そりゃそうだろ」
佐藤をおぶって立ち上がった
「ハア？」
「佐藤はアスリートだから、見た目よか筋肉で重てえんだよ！」
「見た目より？」
「そんでも俺には、羽根布団みてえなもんなんだよーーー！」
「うううううれれれれれれししししいいいい」
走った走った走ったあああああっ
一位だ　おっし
佐藤がお題を係に見せて
「えっと、これは、森下大一をおんぶってなってますけど」
「俺の目を見ろ！」
俺は今日何回ここに来たっ？　そんでおまえは俺ととうちゃんにマイク向けたな？
「あ・・　わっかりました、二年女子借り人競争第一グループ一位２組！」
俺の方をチラッと見てっけど　俺の目を見ろっ
「お題は・・　二年二組の森下大一・・　おんぶして走る！」
機転が利くな
「森下くん、ありがとう！」
「この競技、一位死守しねえととなんねえらしい」
「そうなんだよね、でも、あんなお題ビックリしちゃって」
「実行委員に聞くっきゃねえな」
「森下大一って名前見たとき怖くなったもん」
「あれは、ぜってえあの実行委員のしわざだ」
クラス席戻って
「どういうことなんだ？」「なにあのお題？」
俺と佐藤に詰め寄られてタジタジしてっけど？
「これには深いわけがあるんだよ」
「どういうわけだよ？」「森下くん名指しするほどのわけってなによ？」

実行委員がハァァァッてため息ついて
「実行委員の女子たちがさ、後輩に頼まれたとか友だちに頼まれたとか言って、
　これはどう見ても森下だろっていうお題ばっかり書いててさ」
「ハア？」
「これじゃ森下疲れるなと思ってて」
「思ったんなら止めろよ」
「ムリだよ、俺にも書いて確率アップしろって言ってさ」
「だからってなんで書くんだよ？」
「女子の圧すごいから！　すごいんだよ、すっごい」
「だからって森下くんの名前書くことないじゃん」
「森下をおんぶなんてできないからあきらめるだろうと思ったんだよ」
「佐藤が引いちまっただろ！　この競技は一位取らねえとっつってただろ！」
「俺は一年生のを書いたんだよ、本当に、本当だよ」
「え？」
「おそらく女子が・・」
工作したのか　俺らの戦闘シーンを潰す気だったんか
「本当にごめん」
「や、結果的に一位になったからいいよ」
「森下くんがもんのすごい目力で係の人に圧かけてやっとだけどねっ」
「こんなことになるなんて思わなくて」
「もういい、終わったことをゴチャゴチャ言ってもしゃあねえ」
「森下、さすが懐大きいな」
「かあちゃんがいっつもそう言ってんだよ」
「お母さんて、あの美魔女の？」
「え？　あ・・　まあ」
まさかな　味方を使って体力削ぎ落し作戦されるとは思わなかったな
悪の軍団　策略だけはすげえな
そんでも俺の体力は、んな簡単に削げねえんだよ　現場はんなもんじゃねえっつうの
トン袋抱えて往復してさ　ネコにガレキ積んで何往復もしてさ
甘く見るなよ　現場仕事！
席に戻ったら　愛里が胸んとこで小さく拍手して迎えてくれたぁぁ
「愛里ぃぃ」
「最初はどうなるのかと思ったけど、あなたがサトアヤさんをおぶるなんて」
「あれっきゃねえなって」
「あなたがサトアヤさんをおんぶしてる姿、頼もしかった」
「え、マジ？」
愛里のことなら何億回でもおんぶすっから
「この競技は一位を取らないとですから」
「俺は愛里が行ってあげろっつったから行っただけでさ」
「え？」

「正直、ほんとは、愛里以外おんぶしたくねえよ」
愛里が俺の顔見てっけど
「でも、サトアヤさんのことおんぶしましたよね」
「したけどさ」
「おんぶされる側だったはずなのに」
「そうだけどさ」
愛里がまた前の方向いて
「そういうところが、あなたらしくて」
愛里が前向いたまま
「好きで　あっ！　　一位！」
「えっえっ　愛里、えっ？」
「２組また一位！」
「愛里、今なんつった？」
「２組また一位」
「や、その前の」
「ほら！」
　「第二グループ一位２組！　　お題はズラの人！」
これは・・　女子たち　本意気で勝ちにいってんな
教頭の心ザリッザリにしても　勝ちにいってんな
「え？　　ズラ・・」
川口　粉まみれになったのにな　もうこれで二回もマイクで公にされてんだよ教頭のヅラ
「第三グループ一位２組！　　ナマズ顔！」
生物の先生も借り出されたんか
「やっぱりナマズに似てるって、みんな思ってたんですね」
愛里　水族館で話したもんな
「だな」
「ちょっとかわいそう、でも勝たないとだから」
「う・・ん」
「うちのクラスの女子たちすごいね」
川口　俺はかける言葉もねえよ
「お題がダイオウイカでも捕まえてきそうだよね」
マジで捕まえてくっかもしんねえな
実行委員が女子の圧がすげえっつってたけど　なんかわかる気ぃすんな
女子が本気になると　怖えな　まあわかってんだけどさ　かあちゃんとねえちゃんでさ
うちのクラスの男子たち
みんな怖えもんでも見てるような顔になってるよ
女子たちはニッコニコして声あげて応援してっけど
これは・・　勝たねえと　勝つけどさ
戦闘シーン　ますます気合入れねえとだ！

で・・
結局全グループ　うちのクラスの女子が一位だった
けっこうすげえお題だったのに全クリだよ
借り出された人たち　心からダクダク血ぃ流れてんだろうな
教頭なんて魂抜かれた顔して座ってるよ
教頭　俺はそのヅラ　帽子として認識しますから大丈夫っすよ　大丈夫じゃねえか

三年女子の借り人競争んとき　実行委員男子は俺に隠れろっつった
俺は後ろの木のに隠れて　なんで俺が隠れなきゃなんねえんだよ？
「森下大一くんは？」「トイレです」
「森下くんは？」「トイレに行ってます」
俺はメッチャシッコ近けえヤツみてえになってんじゃん
それか下痢してるみてえなさ

「それではお昼休みに入ります！　一時間後に一般リレーからスタートします！」
午前の部が終わった
こんなだったか？　うちの高校の運動会　もっと娯楽みてえなカンジだったはずだけどな
俺には　血みどろになったヤツらが累々と積み重なってる戦場に見える
「おとうさんとおかあさんのところにいきましょう」
愛里　愛里だけがこの戦場の中の心のオアシスだよ
「川口くんも行こう」
「うん」
あああぁ　腹減った

運動会の昼休み

とうちゃんがランチボックスの留め具外して
一個目のフタ開けた
かあちゃんサイズの握りメシ
塩だけのと、ゴマかかってるのは梅おかか入ってて、こっちはネギ味噌塗って焼いたやつ
俺ん家の運動会の定番握りメシだ
二個目のフタも開けた
鶏手羽の唐揚げと卵焼きとアスパラのベーコン巻きとタコさんウィンナー　え？
これは・・　ちくわのきゅうり詰め　今まで入ってたことねえよ
そっか　今年は愛里と川口がいるから　とうちゃん気合入れたんだな
ちくわのきゅうり詰めにとうちゃんの気合感じる　とうちゃんすげえよ
つかさ、メッチャ爪楊枝刺さってんだけど　どれにも爪楊枝刺さってる
なんでだ？
「とうちゃん、この爪楊枝・・」
「私が、取り箸も用意しなきゃって言ったら」
かあちゃん　だよな　今までは俺らだけだったから　そのまんま食ってたもんな
「ちょっと・・　混乱したみたい」
それで爪楊枝か　スーパーの試食が頭に浮かんだんだろうな
「美味しそう」
愛里がニッコニコして見てる
「あ、ちょっと写真撮っていいですか？」
可愛いなあ　弁当の写真撮るなんてさ
「次は、おとうさんとおかあさん、お弁当の前で、もうちょっと近づいて」
運動会でとうちゃんとかあちゃんのツーショットなんて撮ったことなかったな
「次はあなたも入ってください」
「俺も？」
「森下家勢ぞろいってことで」
「あ、おう」
「おとうさんとおかあさんの間に入って」
「おう」
こういう写真も撮ったことなかったな
「上原さん、次は上原さんも入ってよ、僕が撮るから」
川口　気ぃきくなあ
愛里がかあちゃんの横、俺がとうちゃんの横に座って

「次は川口くんが入って、私が撮る」
や、愛里がいねえと
「そんじゃ俺が撮っから」
「でもそれじゃ」
「僕はいいよ」
「ああもう！」
かあちゃん
「全員を誰かに撮ってもらいましょう」
誰かに？
「すみません！」
「はい」
あれ　この声は・・　振り向くと　森山！
「写真を撮っていただけます？」
「もちろんです」
なんか・・　どうなんだ？
「あれ？　　その割り箸」
そうだよ森山
「割り箸がなにか？」
「かあちゃん、その割り箸、森山が、んっと、愛里にプレゼントした・・やつ」
「あら、そうなの、使わせていただきます」
「森下家の皆さんに使ってもらえるなんて光栄だなあ」
光栄って　苦肉の策でこうなっただけでさ
「ちょっと写真撮っていいですか？」
つって箸の写真撮ってっけど
「上原さん、早速使ってくれたんだね」
愛里が　チラッと森山見て　顔背けた
「森山さん？」
「はい」
「この梅の花は森山さんが選んだのね？」
かあちゃん　余計なこと言わねえでくれよ
「そうなんですよ、可愛いから女の子向けにピッタリかなって」
「そうね、可愛いわ」
森山ニーーッコニコしてるよ
「それじゃ、撮りますよ！」
愛里がかあちゃんの横、俺がとうちゃんの横、川口が俺の横
「川口、もっと森下に寄って」
「え、うん」
「もう一枚撮りま〜す！」
なんかすげえノリノリで撮ってくれてっけど
「はい、あ、川口、俺と森下のツーショット撮ってくれる？」

なんで俺が森山とツーショなんだよ？　川口に自分の携帯渡してっけど
「いいよ」
森山と並んで立って
「森下、もう少し、笑って・・あげて」
「あ、おう」
顔くしゃってすれば笑って見えんだろ　どうだ？
「撮ったよ」
「ありがとう、待ち受けにする」
なんで？
「森山さん、イチゴでも持っていく？」
かあちゃんが気ぃ使ってるよ
「それが、いちごアレルギーなんですよ」
「あら、そうなの、それじゃバラ科の果物は全部ダメなのね」
「そうなんです、ああ、わかってくれる人がいるなんて嬉しいなあ」
イチゴがダメなら　愛里とは永遠にデートできねえよ　そういう運命だったんだな
「ほんじゃ、これよ」
とうちゃんが爪楊枝が刺さった鶏手羽の唐揚げを森山に渡してる
「ありがとうございます」
試食コーナーのおばちゃんがよくこうやって渡してくれるよな
俺ととうちゃん必ずもらうんだよ
「森山さんはどなたとお弁当食べるの？」
かあちゃんっ　誘わねえでくれっ　これ以上誘わねえでくれっ
「母と姉が来てるんです、甥っ子も」
「そう、にぎやかでいいわね」
「来なくてもいいって言ったんですけどね」
ぜってえ来て欲しかった顔だな
「写真、撮ってくださってありがとう」
「またいつでもなんでも申し付けてください！」
鶏手羽持ってニッコニコして　いなくなった
「あの子もいい子ね」
マジ？
「ちょっとズレてるけどいい子よ」
かあちゃんが言うなら　そうなんだな
「でも、家に置くなら川口くんね」
「僕？　置く？」
かあちゃんっ　観葉植物って言うなよ　ぜってえ言わねえでくれよ
「なんていうのかしら、空気を乱さないのよ」
「ああ、よく親戚にも言われます、観葉植物みたいって」
親戚にも　言われてんだ　観葉植物って
「存在感が薄いんですよ、僕」

「でも、観葉植物がないと、殺伐とした部屋でしょ」
「え？」
「いるだけで、ホッとさせてくれるんじゃない？」
川口が　嬉しそうな顔してかあちゃん見てる
かあちゃん　やっぱすげえ　そういう意味か　そういう意味だったんか
「ダイチ」
「とうちゃん、なに？」
「こっちが」
イチゴ　ホイルで箱みてえなの作ってふたつに分けてある
そっか　去年まではかあちゃんのだけだったけど　今年は愛里がいるもんな
「ダイチのだからよ」
「そっか、ありがとう」
「僕には同じイチゴに見えるんだけど、何か違うの？」
「こっちは、とうちゃんが稼いだ金でかあちゃんに買ったイチゴで、
　こっちは俺が稼いだ金で愛里に買ったイチゴ」
「それじゃ僕は食べない方がいいね」
「いいよ、俺の食えよ」
「でも上原さんに買ったんでしょ」
「そんじゃ、こっち食えばいいからよ」
「でもそれは」
「ああもう！」
かあちゃんが仕切ってる部分グシャッてして
「川口くん、みんなで食べましょう、こういうのはみんなで食べた方が楽しいから」
「はい、ありがとうございます」
「おとうさん、鶏手羽の唐揚げすっごく美味しいです」
愛里　もう食ってたんか
「いっぺえあっからよ」
俺は　とうちゃんの気合の入ったちくわのきゅうり詰め食って
「とうちゃん、下に敷いてあるマヨ、わさび醤油マヨ、効いてメッチャ美味え」
「そっか？　　みんなで食うからよ、とうちゃん頑張ってみた」
「メッチャ美味えよ」
「こういうのいいですね、シンプルだけど家庭的で」
愛里　わかってくれんだな
「あんたは何回も走ってたわね」
「ああ・・　それな」
「あんまり何回も走るから、最後におんぶして走ってたときは、宅配便の配達員に見えたわよ」
宅配便てさ　笑ってっけどさ　いろいろあったんだよ
「愛里さんはアジの南蛮漬け、よくわかったわね」
「いつも食べさせてもらっていたので」

「私なら調味料なんてわからないわ」
かあちゃんけっこううるせえじゃん　塩気が強えだのなんだのって　俺のにだけどさ
「川口くんのお題はなんだったの？」
「ヅラの人です」
「あら、何回か出てたけどね」
かあちゃん　えぐらねえでやってくれよ
「僕はあの勇気はないです」
「そうね、ハゲと違って隠してるんですものね、もう知れ渡っちゃったけど」
かあちゃん　教頭の魂抜けたみてえな顔見たら　んなこと言えねえよ
「でもみんな知ってたけどね」
「マジ？　　かあちゃんも知ってたの？」
「わかるでしょ、生え際があんなに不自然なんだもの」
俺だけか？　　知らなかったんは
「愛里、知ってた？」
「私は・・　あの人が教頭なんだって今日知りました」
「えっ？」
「全体集会でも前に出て話さないから、興味もなかったし」
愛里に認識されるっつうのは　けっこうハードル高けえんだな
一年とき　俺のこと知らなかったって　そりゃそうだな　教頭が誰かも知らねえんだからさ
よかったあ！　　今はメッチャ認識されててさ
「何か考えてますよね？」
「あ？ や、なんか、楽しいなってさ」
「そうですよね、運動会のお昼がこんなに楽しいの初めて」
とうちゃんが　メッチャ嬉しそうな顔してる　よかったあ
「今年はいろいろ楽しいわね」
「はい」
「ダイチの涙のスピーチも聞けたしね」
「か、かあちゃん、あれは」
「カズオが運動会で走ってる姿も見れたし」
かあちゃん・・　だよな　ヤベ　また泣きそうになる
「川口くんが真っ白な顔で走るのも見れたしね」
かあちゃん　川口をオチに使わないでやってくれよ
「僕も粉まみれで走るのは初めてでした」
動じねえ　さすが観葉植物だ
そんで・・

気ぃついたら・・
とうちゃんと俺と川口は　川の字で寝てて
つか　とうちゃんと俺がリみてえになって　端っこで川口がノみてえに寝てた

「あ・・」
愛里とかあちゃんが笑って見てる
「男って子どもみたいよね、お腹がいっぱいになるとすぐ寝ちゃって」
「この敷物にしてよかったですね」
「本当にね、男が三人寝ても大丈夫ね」
とうちゃんも川口も起き上がって　三人でボーッとして
とうちゃんは朝早くから弁当作って　つか、けっこう緊張してて　寝ちまったんだな
俺は　宅配便で　じゃねえよ　そんでもひと寝したらすっかり回復した
で？　川口はなんで眠ってたんだ？
「かあちゃんと愛里はなにしてたの？」
「校長と教頭にご挨拶に行ったのよ」
「私も初めて教頭の顔をちゃんと見ました」
「なんで校長と教頭？」
「今の校長はヒトミがここに通ってたときに教頭だったのよ」
「へえ」
「おかあさんすごいんですよ、教頭に、教頭は中身のダンディさがにじみ出てますねって」
「ハ？」
「教頭はもうすっごい喜んじゃって、おかあさんにお茶を出して」
毎年恒例の光景だな
「お菓子までくれちゃって」
「ほら、フォションのマドレーヌ５個」
す　げえ　狩りだ　もうほぼ狩りだよ
「川口くんが持ってきてくれたコーヒーと一緒にいただきましょうよ」
「今入れます」
川口がクーラーボックス開いて　かあちゃんにコーヒー注いで
「ハァァ美味しい、ここのコーヒーは本当に飲みやすいのよ」
「僕もここのコーヒーが好きなんです」
だからさ　ここってどこだよ？
「ダイチ、水もらうか？」
「とうちゃんも」
二人で川口が持ってきた水飲んで
「ダイチ、これは、高級な水なんか？」
「やっぱここのだからじゃねえか？」
ここがどこか全然わかんねえけど
「水は僕の家の水道水だよ、アルカリイオン水」
「ダイチ」
とうちゃんが小せえ声で
「アルカなんとかって、なんだ？」
「水道水を浄水して、電解してアルカリにした水だよ」
「そりゃ、なんかすげえ水なんだな」

「とうちゃん、うちのもだよ」
「あ？　うちってうちか？」
「米炊くときとかコーヒー淹れるとき、レバー右にすんだろ？　あれだよ」
「俺、なんもわかんねえまま、美里に言われたとおりやってただけでよ」
「俺もずっとそうだったから、今や違いがわかんねえよ」
「俺は、あすこの水飲み場の水でいいな」
「俺もだよ、水飲めりゃいいからさ」
「あのアルカリイオン浄水器、けっこう高かったんだけど？」
かあちゃん
「や、だから料理とかはアルカリイオン水でやってっからさ」
「川口くん、こういう子なの」
「僕は森下のこういうところがすごいと思います」
今度はこういうかよ？　こういうって　なんだよ？
「サバイバル能力っていうか」
サバイバル？
「そうでしょうね、なにせホームレスの息子だから」
そっか　俺は　とうちゃんの息子だから　サバイバル能力あんのか
「とうちゃん、俺、とうちゃんの息子でマジよかったよ」
「そっか？」
「ほら、こういう会話、何億回も聞いてるのよ、私は」
「おとうさんと、あの、走ってるとき」
愛里　なに？
「走り方も全部そっくりでシンクロしててビックリしました」
「そうだよね、僕も驚いたよ」
「なにもかも似ちゃったの」
かあちゃん　それはメッチャな褒め言葉だよ
「あら、愛里さん、このマドレーヌ、イチゴと食べると美味しいわよ」
ぜってえ浸らせてくれねえよな　かあちゃん
「ダイちゃん！」
え？
「あ！　ショーさん！」「たっちゃん」
「探したよ」
「ショーさん、昼メシ食った？」
「監督が弁当手配してくれたんだよ」
監督、さすがだな　あ、そうだ
「かあちゃん、ショーさんだよ」
「ああ！　主人と息子がお世話になりまして」
「世話になったのはこちらの方です、ダイちゃんには・・　あ、急ぐんだよ」
「ショーさんどしたの？」
「監督がダイちゃんとカズを連れてきてくれってさ」

「え？　なんかあったの？」
「とにかく急いで仮設休憩所に」
「え？　あ、おう、とうちゃん」
「俺も？」
「カズもだってさ」
「そっか、そんじゃ」
ショーさんに連れられて　仮設休憩所に向かって走った

ネコにネコ

仮設休憩所の扉開けたら
「森下、カズオさん、待ってたよ」
「監督、どしたんすか？」
「人が足りないんだよ」
「どこの現場っすか？」
「ここ」
「んっと、明日っから来ればいいんすか？　そんでも平日は学校があって」
「違うよ、一般リレー」
「ハ？ え？ んっと？」
「足場の二人が急遽別の現場に行くことになってさ、朝からもう行ってるけどな」
「んっと・・？　そんで、俺ととうちゃんは？」
「代わりに走ってくれないか」
「へ？　俺ととうちゃん、菱谷建設じゃねえっすけど」
「古巣なんだろ？　まだ巣立ってもいないけどさ」
「ん・・と？」
「一緒に働いた仲間だからさ」
とうちゃんと顔見合わせちまった
「そこに二人の作業服置いてあるから、すぐに着替えて」
「え？　もう決定？」
「決定だよ、早く着替えて」
「あ、おいっす」
着替えた
新品の紺の上下の作業服と新品の黒の作業ブーツ、そんで新品の真っ白なヘルメット
「似合うな」
「監督・・　これって、最初っから俺ととうちゃんに走らせる魂胆だったんじゃねえすか？」
「魂胆なんて人聞き悪いな、急遽だよ」
「そんでも、この作業服と作業ブーツ、サイズぴったりなんすけど」
「奇遇だなあ」
俺は　ショーさんの方を見た・・ら
「俺も今知ったんだよ、ほんとだよ、元木くんたち来ないなとは思ってたけどさ」
「ショーさん、練習してるっつってたよな？」
「あのときは元木くんたちがいたんだよ」

「元木たちは森下とカズオさんの代役だよ」
「監督ぅぅ、出すなら出すって前から言ってくれりゃいいじゃねえっすか」
「森下の競技スケジュールがわからなかったからさ、すぐ次が競技じゃ悪いだろ」
「悪いだろって、今急に」
「ダメなら棄権しようと思ってたからさ」
「棄権？」
「頼み込まれて出るだけだから」
「んな、ここまで衣装そろえて棄権って」
「衣装じゃないよ、ちゃんとした作業着だよ」
「そうすけどメッチャかっけえっすけど」
「現場作業員に対するイメージを変えたいんだよ、汚い、臭い、底辺っていうイメージをさ」
たしかにそれは　それが変えられたら・・
「そして、森下とカズオさんが走れば、こんなイケメンもいるのかってさ」
「そうだな、俺みたいなおっさんばかりじゃな」
「ショーさんかっけえよ、マジでさ」
「俺も森下くんとカズオさんに走ってほしいよ」
重機の宇野さん
「ネコ持たせたら誰よりも早い二人だしさ、俺より早いもん」
「ネコ？」
「俺たちのバトンはこれ、監督がさ」
ネコの上に　でっけえ招き猫
「監督、これって・・　ネコにネコっつうダジャレっすか？」
「笑えるだろ」
「ハハハ、メッチャおもしれえ、さすがこの高校の卒業生っすね」
「ここの運動会は笑い取らないとさ」
「監督、走ります、なあ、とうちゃん」
「あ、おう、俺なんかでいぃんならよ」
「謝礼は、その作業着一式」
「えっ　マジで？　　すげえ！　　なあ、とうちゃん」
「んな、リッパなよ」
「今度現場に入るときはそれ着てくれよ」
「今度？」
「まあ当分はないだろうけどな、でも他の現場のバイトはできないよ」
「へ？」
「胸に菱谷建設って刺繍してあるだろ」
おおお　かっけえ
「それじゃ、そろそろスタンバイだ」
「はい！」「おいっす」「おう」「はい」
監督と宇野さんとショーさんと俺ととうちゃん

お揃いの作業着一式着て　仮設休憩所を出た

「それでは午後の部を始めます！」
PTA の役員たちや同窓会のおじさんおばさんたちと　ここにいる俺
「午後の部第一競技は一般リレー！」
まさかこれに出るとは思わなかったよ　思うわけねえじゃん在校生なのにさ
「第一組！　　教師チーム！」
これは文系の先生ばっかだな、ふっつうの恰好してサンダル履いてる　バトンは出欠簿か
「第二組！　　PTA 役員チーム！」
男の人は背広で女の人はエプロンしてお玉もってる　バトンはアタッシュケースか
「第三組！　　同窓会役員チーム！」
おじさんたちは詰襟でおばさんたちはセーラー服か　昔のここの制服なんだろうな
バトンは　すげえ　同窓会旗だよ　んなでっけえの持って走ろうっつうのはさすが卒業生だな
「第四組！　　今回は特別に、只今旧体育館を解体して多目的ホールを建設する
　菱谷建設の皆さんに出場していただきました！」
まばらな拍手
「ここで、菱谷建設取締役の菱谷薫さんに一言いただきます」
監督が「え？」って声漏らしてる
「ちなみに菱谷さんはこの高校の卒業生であり、在校中剣道全国大会個人の部の優勝」
マジか　すげえな
「卒業生代表の挨拶をなさった先輩でもあります、それでは菱谷さんお願いします」
「監督がんばってくだせえよ」「監督がんばって」「監督」
監督がうるせえなみてえな顔で俺たちのこと見てからマイクに向かった
「菱谷建設の現場監督です」
キーーーンてマイク音
「まあ今のように、不快な音は誰でも嫌です、解体中の音は授業のときにはうるさい、
　でも、これはみなさんの安全のためであり、将来の皆さんの子どもが使える多目的ホール、
　それを作るための工事です、みなさんの未来のための工事です」
いいこと言うなあ
「どうぞご理解ご協力のほど、よろしくお願いします」
監督が頭下げたから　俺たちもなんか頭下げて
このリレーはトラックじゃなくて真ん中のグラウンドに線引いてあって
真っ直ぐ走ってカラーコーンをグルッと回って走って次の人にタッチか
ぶっつけ本番だよ　もっと前に言ってくれればいいのにさぁ
それぞれのチームの選手一人一人紹介してるよ　長えから誰も聞いてねえと思うけどな
「菱谷建設チーム！　　重機担当宇野勝！　　現場監督菱谷薫！　　土木作業員森下大一！」
俺はそういう位置づけでいぃんか？

「土木作業員森下一男！　なお、この二人は夏休み中現場に入っていた精鋭だそうです！」
精鋭？
「森下ーーー！」「森下くーーん！ がんばってーー！」
「おとうさーーーん！　がんばってーーー！」
愛里がとうちゃんを応援してくれてる　優しいなあ愛里
「アンカー、土木作業員兼寮管理人緒方正！　以上で紹介を終わります！」
「それでは位置に着いて、用意スタート！」
宇野さんがネコ持って走った　早え　おしおしおしっ
監督にバトンタッチ！
「監督！　よろけねえでくだせえよ！」
「うっるさーーい」
監督も走った　マジになって走ってる
戻ってきた！
「森下！　頼んだぞ！」
「おいっす！」
んなさ、ネコにガレキ積んで走るなんてしょっちゅうやっててさ
俺はこんなん楽勝なんだよーーー！
「森下くーーん！」「森下ーーー！」「キャーーーーー！」
とうちゃんが待ってる
「とうちゃん！　頼んだよ！」
「おう！」
とうちゃんが走った　早えメッチャ早え
「おとうさーーーん！」
愛里
「森下パパーーーーーー！」「森下家ーーー！」「菱谷建設ーーー！」
なんかいろんな声がすっけど　みんなが応援してくれてるよ　とうちゃん！
戻ってきた！
「そんじゃ、たっちゃん！」
「わかった！」
「たっちゃーーーーーん！」
え？　なんか女の人の声しねえか？
「たっちゃーーーーーーん！」
メッチャ向こうから走って来てんだけど　すげえきれいなフォームだな
「たっちゃーーーん！」
ショーさんが怖えもんでも見たように目ぇひん剥いて　走った　つか逃げた？
借金取り？　借金取りなんか？
「たっちゃーーーーん！」
メッチャ早えんだけと　あっ　ショーさんのこと追っかけて　あっちゅう間に　え？
追い越した？　追い越す？　メッチャきれいなフォームのまま追い越して

パーーーーーン！
ぶっちぎり一位で着いたけど？　なんだ？　これは　なんなんだ？　あっ
「ショーさん！　早くゴール！」
ショーさんがおどおどしながらゴールして　そんで　あっ　どっかに走って逃げた？
そんであの女の人が追っかけてる　なんなんだ？
係が監督になんか話してる
「それでは、結果発表です！　一般リレー一位！　菱谷建設！」
「おおおおお！」「菱谷建設！」「森下ーーーー！」「森下くーーん！」
「監督」
監督のそばに行って
「あの女の人は・・　なんすか？」
「おそらく・・　ショーさんの奥さんじゃないかな」
「えっ　ショーさんの奥さん？」
「宇野が追いかけて行ったから、俺も行ってくるよ」
「え、あ、んっと」
「また連絡する」
「あ、おいっす」
そう言って走ってく監督の後ろ姿　ボーッと見てるだけで
「ダイチ」
「ん？」
「着替えねえとよ」
「あっ　だよな」
仮設休憩所の扉開けたら　あっ　あの女の人とショーさんと監督がいる
「森下、どうした？」
「あ、んと、着替えに・・　きました」
「そうか、そこの隅で頼むよ」
「おいっす」
とうちゃんと二人、部屋の隅っこで　でっきるだけ音立てねえようにして
「探したのよ、ずっと探してたの」
やっぱ・・　奥さん・・なんかな
「たっちゃん、どうしてここにいるの？」
ショーさんは黙ったまんまで
「私ね、今日は同期に誘われて、体育館も解体されるから見るなら今のうちって、
　たまに母校の運動会見に行こうよって、そしたら、たっちゃんがいるんだもん」
「俺がどこにいようと」
やっとショーさんが口開いた
「関係ないだろ」
「関係ないってなに？」
「他人なんだから」
「私は納得してない！」

「名前書いて判も押しただろ」
「たっちゃんが私に苦労させないようにって離婚したの見え見えだったから！」
すげえな　奥さんわかってたんか
「あれから私は弟のところに行って世話になってたの」
奥さんの実家って　医者っつってたよな
「弟の病院の受付を手伝ったりしてたけど、世話になってるだけじゃダメだなって、
　まずは私の生活をなんとかしようって医療事務の資格も取って、弟の紹介で別の病院で働いて」
メッチャ建設的思考の人だ
「そしたら、私は薬剤師の免許があるからって、提携してる薬局を紹介してくれて、
　アパートも借りられたし、今は一人なら食べていけてるの」
「そう・・か」
ショーさんの声が　なんか少しホッとしたみてえな声で
「工場が倒産したって聞いた元従業員の子たちがね、駆けつけてくれたの、
　たっちゃんのことも探し回ってくれて、でも全然見つからなくて」
見つかんねえよな　ショーさん浮浪者になってたんだもんな
「あの子たち、毎月私に仕送りしてくれるのよ」
「え？」
「そんなことしなくていいのよって言ったら、社長が見つかるまではって」
すげえ・・
「奥さんは母さんみたいものだから、母親に仕送りするのは息子の役目だって」
そこまで・・
「たっちゃんが育てた息子たちが、私を助けてくれてるの！」
ヤベ　俺まで泣きそうになってて
ショーさんの鼻すする音が聞こえて
「たっちゃん、息子育てたじゃない、ちゃんと育てたじゃない、いい子たちばっかり」
ショーさんが声殺して泣いてて
「もうどこにも行かないでよ！　　私と一緒に暮らしてよ！」
「それは・・」
ん・・っと　なんか　部屋出るタイミング失くしちまったな
あ　監督と目ぇ合った
「奥さん、ショーさん、もしよかったら、ショーさんのいる独身寮でゆっくり話しませんか？」
「独身寮にいるんですか？」
「管理人をやってもらっています」
「そうなんですか？」
奥さんがショーさんのこと見て
「だったらそういうことを、なんで私の弟のところにでも」
「奥さん、今は」
「あ、すみません、まだちょっと・・」

「独身寮に住んでいる社員が車の中で待機してますから」
宇野さんいねえと思ったら　車ん中にいたんか　だよな　ここにはいらんねえよな
「それじゃ、私は友人に、あの、話をしてきますので」
「はい」
「この人、逃げないように見張っててください」
ショーさんの奥さんて　なんかおもしれえな
「わかりました」
監督もちっと笑ってる
「見張ってますよ」
ショーさんの奥さんが扉開けて出てった
んっと
「監督、そんじゃ俺ととうちゃんは」
「森下、カズオさん、ありがとう、おかげで一位になったよ」
「あ、おいっす」
「あとのことは」
監督がショーさんの方　チラッと見て
「心配しないでくれ」
「おいっす」
仮設休憩室の扉閉めて
「とうちゃん、そんじゃ俺、クラス席に戻っから」
「そっか、そんじゃ、俺は美里と一緒に見てっからよ」
「うん」
とうちゃんは木陰のかあちゃんのいる方へ
俺はクラス席のある校庭に戻って・・

運動会の歓声や　この光景が　別世界みてえだな
「あ、いた！」
愛里！
「あんまり遅いからどうしちゃったのかなと思って」
探しに来てくれたんか　俺のこと　愛里
「何かあったんですか？」
「ショーさんの奥さんが見っかった」
つうか　見っけられたんだよな
「あの走ってた女の人？」
「うん」
「なんかそうかなって」
「マジ？」
「ただの知り合いなら、こんな大勢の前で、しかも競技中に追いかけたりしないから」
この空間の中で　今　ショーさんの話ができんのは　やっぱ愛里だけだ
「よかったですね、あ、よかったんですか？」

「うん、よかった」
愛里と歩きながら　愛里といると　やっとこの空間に慣れてきてさ
「あなたとおとうさんが、ショーさんと向こうに行ったとき、おかあさんが」
「かあちゃん？」
「これは、監督、次のリレー、ダイチとカズオに走らせるつもりかもよって」
えっ　かあちゃん　予測してたんか
「まさかと思ったら本当にそうだったから」
かあちゃん　怖えよ
「あなたがいない間に運動部の部活対抗リレーは終わりました」
今は・・　文化部か
「志田くんが柔道部で出て、二人で畳かついで」
「柔道部恒例だもんな」
「それが、野球部とぶつかっちゃって、バタンて倒れて」
「マジ？　ケガは？」
「大丈夫って言ってたけど、志田くん、みんなに叱られてました」
「叱られた？」
「志田一人の身体じゃないんだぞって」
「ハハハ、なんだよそれ」
クラス席に戻った・・ら
「森下！」「森下くん！ かっこよかった！」
みんなが拍手して出迎えてくれた
「なんか現場の服ってかっこいいな」「すっごいかっこよかったよね」
「現場って、ニッカポッカとか地下足袋のイメージだったからさ」
ニッカポッカって　今は着てる人の方が少ねえよ　つか禁止されてる現場の方が多いよ
そっか　こういうイメージだったんだな　それを監督は変えたかったんか
「ねえ、なんで一輪車に招き猫？」
「それは」
「千客万来とか福を呼ぶっていうゲン担ぎ？」
あれ？
「や、だから、現場では一輪車のこと、ネコっつうんだよ」
「へえ、そうなんだ」
「そんで、だから・・」
なんか説明してるうちに
「ネコの上にネコっつう」
虚しくなってきてんだけど
「ああ！　ダジャレだったの？　そうか、なるほどね」
感心されてるよ　監督　感心されてちゃダメっすよ　笑い取れてねえっす
ただの内輪ウケになっちまってましたぁ

応援タイムと志田

一年生の混合リレーが終わった
だいたいのクラスは太鼓のバチをバトン代わりにしてアンカーが小太鼓叩きながら走ってた
去年もけっこうやってたやつだ
一クラスだけ、お母さんみたいな恰好した女子がお弁当持って走って、
背広着たお父さん役か？ に渡して、その男子がバスの運転手の恰好した女子に渡して、
おそらく先生の恰好した子に渡して、女子の制服着た子に渡して、
アンカーは制服着た男子で弁当開けて食いながらゴールするというストーリー仕立てにしてた
つまりは弁当忘れた男子に届けるって設定だよな
昼休みに弁当食った後にやるってこと忘れて考えたんだろうな
なっかなか握りメシが食いきれねえで、みんなから「ガンバレ！」って応援されてさ
弁当食ってるうちに次々追い抜かれてたけど、俺的にはあのクラスがいっちゃんおもしろかった
やっぱうちの高校のリレーは笑い取らねえとな　笑いか「おお！」つう工夫だ
そんで 10 分休みで　10 分休みの後は二年と三年の応援タイム
今　俺と川口と志田と虎之助は教室で着替えてる
「森下のって、こうなってたんだね」「新体操のもこうなんだよ」
俺はもう便所でコソコソ着替えんはやめた
「森下のってさ・・」
なんだ志田？
「なんか・・　圧倒されるよなあ」「あ・・　たしかに」「そうだね」
「なにが？」
「なんでもない」「なんでもないよ」「気にしないで」
なんだよ？
「俺なんてさ、こんなアイドルの衣装着て踊るなんて一生ないと思ってた」
志田　それは俺もだ　んな全身真っ赤な服着るなんてさ
「俺の父親も、ほら、パーティーグッズの卸の人も見に来ててさ」
「言ってみればスポンサーだもんな」「そうだよね」
「そんじゃ行くか」
「ッツーーーー」
志田がサルみてえな恰好んなって顔しかめてる
「志田、どした？」

「部活対抗リレーのとき転んじゃってさ」
愛里がそう言ってたな
「どっか痛てえんか？」
「足首ちょっとさ」
「見せろ」
志田の左足首が　なんかちっと腫れてねえか？
「志田、腫れてんじゃねえか？」
「これくらい大丈夫だよ、部活でしょっちゅうだからさ」
「サポーター持ってねえんか」
「あるけど」
「いちおうやっといた方がいいぞ」
「ずっと洗ってないから臭いんだよな」
「そんでもさ」
「わかった、途中でロッカー寄って付けるから」
「おう」
サポーターつけた志田と一緒に　クラス席の方に歩いてたら　愛里もいた！
やっぱメッチャ可愛いぃぃ
「応援チーム、こっちこっち」
実行委員男子
「ボードの後ろに隠れて」
「なんでだよ？」
「俺たちが、この暗幕で隠すから」
「ハ？」
「この幕の後ろに隠れて前に登場して、スタンバイしたら幕を下げる」
なんか・・　すげえな
「１組が終わる前にスタンバイだから」
「わかった」「はい」「うん」「おけ」
「そろそろ行くよ」
暗幕の後ろで中腰になりながら前の方に出て
「スタンバイして！」
それぞれが　知らねえふりで　立って
　「次は二年二組！」
幕が下ろされて
　　「キャーーーー！」「キャーーー！」「キャーーー！」
な、なんだ？
「カーボージャーゴー！　　カーボージャー・ゴーーー！」
愛里の口笛
「ピュ　ヒュ〜」
あ　鳴った！　　一瞬だけ鳴った！　　これは幸先いいな
ヨギソー！ で志田が出て　エネルギー注入　みんな気合入ってんな

廊下側の佐藤　なんか怪しい空気感出してすげえ
首カキンて直して　コリコリコリからの　　回し蹴りだあああああ！
「キャーーーーーー！」「おおおおおお！」
今日のは５人の首はぶっ飛んだな
そんでピョレピョレ光線だーーーー！
隣りの佐藤！　　後ろから見ても光線出てんのが見えるみてえだぞ！
そんでもって　ピカッポンチョ爆弾だあああ！
見える　俺には見える　16 個のピカッポンチョ爆弾が大爆発してんのが見える！
そんでもって　高速空手の型攻撃！　　８人の息がピッタリ合ってて
ひとつの塊みてえになってんのがわかる！　　これは・・　無敵だあああああ！
ピカッポンチョ！ ピカッポンチョ！ で　どうだ、まいったか！
パーーーーーン！　　うおっ　爆弾みてえな音！
金色のテープが　ブワアアアッて降ってきた
え？　　シーンとしてっけど？
ゴワアアアアアアッて拍手の波が押し寄せてきた
「キャーーーーーーーー！」「おおおおおおおおお！」
とうちゃん！　　俺　やったよ！　　戦闘シーン完璧にできたよ！
木陰んとこで　とうちゃんが見てる　あ　両手グーにして振ってる！
とうちゃん！　　悪の軍団やっつけたよ！
とうちゃんのおかげだよ　とうちゃんが教えてくれたから・・　ヤベ　鼻水手の甲で拭いて
「やったやったやった！」「カンペキ！」「あああああ！　　最高！」
他のメンバーたちも肩組んで大喜びしてる
愛里も嬉しそうな顔してさ　愛里　メッチャ天使だったよ今も天使だよ
「志田？」「志田くん！」
え？　　振り向いたら　志田が足首つかんでうずくまった恰好で倒れてる
「志田！　　足首か？」
「ん・・　最後の振りのところでグキッて・・」
高速空手の型攻撃か
「志田、椅子に座れ」
志田を担ぎ上げて椅子に座らせて
「足見せろ」
スニーカー脱がせてサポーター取ったら　赤黒くなって腫れてる
「志田、足先動かせるか？」
「う・・ん」
足先は動くな
「えっ　折れた？」「骨折？」
「これはねじったときに毛細血管が切れて内出血起こしてんだよ」
アイシングしねえとな　アイシングっつったって・・　あ！
「川口！　　氷持ってきてたよな」

「取ってくるよ」
川口が木陰の方に走ってった
「誰かタオル持ってねえか？」
「私、持ってます」
「愛里、ありがとう」
んっと
「足を上にあげときてえから、なんか、あ！　その暗幕たたんでこっちの椅子の上に乗せてくれ」
「わかった」
志田の足を暗幕たたんで高くしたのを置いたもひとつの椅子の上に置いて
「氷持ってきたよ」
「ありがと、志田冷やすかんな」
コクンて
氷の袋に愛里のタオル巻いて志田の腫れた足首の上に置いた
「あ・・　冷やすと・・　ちょっと楽だ」
「そっか、炎症起こしてっからさ」
「ごめんね、なんか俺・・」
「いいよ、んなこと」
「でも、こんな足じゃ、リレー・・」
あ　リレーがあった
「志田は・・　どうしてえ？　やめてえか？」
「走りたいけど・・　これじゃみんなに迷惑かけるからさ」
「迷惑なんかじゃねえけどさ」
「鈴木、俺の代わりに走ってくれないかな」
「俺？」
虎之助？
「障害走でも一位だったし、応援タイムのメンバーだから衣装着てるしさ」
虎之助が　珍しく険しい顔して
「志田は走りたいんだろ？」
「走りたいけど・・　この足じゃ迷惑かけるからさ」
「他のメンバーはどう思ってるの？」
「私は・・　志田くんにムリはして欲しくないけど」「私も志田くんが痛い思いするのは」
「走って欲しいの欲しくないの、どっち？」
虎之助　どした？
「それは、一緒に走りたい、ずっと一緒に練習してきたんだから」「うん、私も」
愛里もコクンで頷いてる　川口も
「志田、もし走りたいなら走った方がいいよ」
「でも、この足じゃさ」
「後悔するよ」
「え？」

「俺がそうだったから」
虎之助が？
「俺、中学の新体操、一年のときセンターの三人の一人に抜擢されたんだよ」
えっ？　万年補欠って言ってなかったか？
「でも、大会前日のリハで、軽く捻挫しちゃってさ、できないことはなかったんだけど、
　監督に聞かれたんだ、鈴木どうする？ って、それってさ、自分から辞退しろってことでさ、
　俺は、もし本番で何かあって他のメンバーに迷惑かけたらって辞退した」
みんなが虎之助の方を見てて
「でもさ、本当はやりたかった、すごく練習したし、チームメンバーとも仲良くなってたし、
　なんか、それで心が折れちゃって、俺はマネージャー的なことに徹することにしたんだ」
それで・・　あんなにキレッキレで　そんで指導もうまかったんか
「俺の場合は地区大会だったから辞退して正解だったと思うけど、
　このリレーは運動会だろ？　楽しく走ればいいんだろ？　走りたいならさ」
「でも・・俺が走りたいなんて言ったら・・みんな・・が・・さ」
「志田、泣くな、泣くようなことじゃねえよ」
「森下・・」
「志田、出ろ」
「え・・」
「走んなくていいよ、歩いていいよ、歩けねえならハイハイしてもいい、
　なんなら途中で棄権したっていいよ、なあ、みんな」
「そうだよ、私なんて、そのぶっとい手が目印になっちゃってるもん」
隣りの席の佐藤
「私は、バカじゃないのくらい強い力でバシッて渡してもらうのに慣れちゃったから」
廊下側の佐藤
「私なんて」
愛里
「リレーに当たって悲鳴あげちゃったんだから」
みんなが笑った
「それでも、このみんなだからやろうって思えたから」
愛里　愛里の言葉はいっつも沁みる
「周回遅れになるくらいの方がおもしろいかもしれないよ」
川口　その飄々としたカンジが今はメッチャ癒しだ
「そうだよね、周回遅れでもいいじゃん」「そうだよ」「逆に私は気が楽かも」
愛里　可愛いなあ
「志田、つうことで、走らねえとな」
「う・・ん、ありがとう」
「だっから、泣くなっつうの」

「俺・・　みんなと走りたい」
「志田くん、私が最初に引き離すから、安心して歩いていいよ」
「サトユミさん、ありがとう」
「私もメッチャ走るからどれだけ遅れたっていいよ」
「サトアヤさん」
「僕も僕なりにがんばるよ」
「私も、なんとか走るから」
「川口、上原さん・・」
「志田、もう泣くな、最後は俺だ、俺にまかせろ」
「森下・・　本当にありがとう」
「志田、ちっと立ってみろ」
志田がゆっくりと立ち上がった
「ちっと歩けるか？」
「うん、なんとか、歩くのはできる」
「おっし、そんじゃギリまでアイシングして、サポーターつけて、歩け」
「うん、わかった」
他のクラスがどんな応援タイムやったんかわかんねえけど
三年生が今やってっけど　んなことはどうでもいいよ
みんなで走れればさ　や　参加するだけでさ

男女混合リレー

スタートとゴール地点側には　第一走者、第三走者、第五走者のグループが並んでて
佐藤と佐藤と愛里がいる
こっち側には第二、第四、アンカーのグループで　志田と川口と俺
俺が見たところ　やっぱどこのクラスもトップは速えやつ出してんな
そんで第二走者はそんなでもねえか　ちっとホッとする
第三走者はまあまあ速そうな女子たちだ
第四走者は・・　未知だ　あ　森山がいる　だったらそんなでもねえか
第五走者は　女子だから　わかんねえな　速そうな女子はトップにいるもんな
そんでアンカーはやっぱ速えやつばっかだな
混合リレーってさ　笑い取るんじゃねえの？　笑いも取りてえけど勝ちてえんか
俺らはそんなんじゃねえよ　チームみんなで走ることが重要課題なんだよ

俺はあぐらかいて　その上に志田の足載せてサポーターの上から氷袋包んだタオルで冷やしてる
「森下、ごめんな」
「ギリまで冷やしてた方が楽じゃん」
「うん、ありがとう」
そろそろだな
佐藤がいる第一走者たちが立ち上がって位置に着いた
「それでは、二年男女混合リレーを始めます！」
佐藤がメッチャ真剣な顔でスタンディングスタートのポーズをとった
「よーーい　スタート！」
パーンッていう音と同時に佐藤がすげえ勢いで走り出した
すげえ　メッチャ早え　今まで見た中でいっちゃん早え　やっぱ本番は違げえな
衣装のヒラヒラの布が後ろにたなびいて　他の走者たちをグングン引き離してる
志田にできるだけ楽させてやろうって気持ちがビンビンに伝わってくる
「志田、佐藤来るぞ、位置につけ」
「うん」
志田が立ち上がってラインのとこに立った
佐藤が志田のギリまで来てペンライト渡した
この佐藤が息切らしてハアハアしてる　そりゃなるよ　あんだけ全力疾走でさ
志田は左足引きずって　なんとか前に進もうと走り歩きしてる
あ　後ろの走者たちが追いついてきた　まあいいよ

おいおい　後ろの走者たちがダンゴ状態になっちまってそのまんま進んできて
「あっ！」「あっ」「あ・・」
志田が跳ね飛ばされて　受け身取った！　そんでペンライト上に掲げた
ペンライトは無事だって知らせてんのか　よくやった志田！
他の走者たちとはだいぶ離れちまったけど　いいよ　周回遅れになってもさ
立ち上がった　大丈夫か？　え？　あっ　走った！　すげえ勢いで走ってる！
「志田くん走ってる！」
志田　足首あんな腫れてんのに今まで以上の勢いで
志田が　どんだけ俺たちと走りたかったんか　俺たちと一緒に　後悔しねえために
メッチャ伝わってきて　走ってるだけで伝わってきて
廊下側の佐藤がスタンバッてて
「スタート！」
佐藤が走り出した　志田がパシッてペンライト渡して　そのまんまグラウンドに倒れ込んだ
愛里が志田のそばに寄って　なんか話しかけて
「アヤナ！　すごい！」
え？　お・・　おおおお　どんどん間ちぢめて　こんなに速く走れたんか！　すげえ！
佐藤の目が　今までといっちゃん迫力ある目になってて　かっけえよ佐藤
もう少しで最後尾のヤツを抜けそうだ抜けるか？
「川口！　スタンバイ」
「うん」
佐藤　もう少しで最後尾のヤツを抜け・・あ、ゾーンに入った
「川口くん！　スタート！」
川口が走り出した
ペンライト受け取って
これは・・　ただの鹿じゃねえ
サバンナの大火事で炎から全速力で逃げてる　鹿だ
背中に炎が見えるみてえで　川口すげえよ　離されてねえよ
川口の顔は　命かけて走ってる野生の鹿だ　観葉植物なんかじゃねえ！
愛里がラインとこで待ってて
「上原さん！　スタート！」
え？　愛里が前向いて走り出した　後ろ向いてねえよ　川口がペンライト渡して
愛里が一生懸命走ってる　すぐ前の走者のすぐ後ろを　離されねえように離されてなくて
あんなに真剣に必死に　愛里が走ってる
悲鳴あげるほどイヤがってたのに　オドオドしてばっかだったのに
今は　堂々と　あのきれいな目に力入れてますますきれいになって
長い髪が後ろに宙に浮くほど　必死に走ってる　ヤベ　涙・・
「佐藤、これ持っててくれ」
佐藤に氷袋包んだタオル渡して

「うん、ウワッ　臭さっ！」
俺はラインとこに立って　愛里を待ってて
愛里　俺はここにいんぞ　愛里　俺はここで待ってっぞ
愛里がゾーンに入ってきた
「モリシタダイチーー！」
え？
「スタートーー！」
「おう！」
俺は前向いて　愛里のスピードはこんくれえで
左手にパシッて　棒の方を渡された　愛里　ちゃんと持ち替えてた・・！
ドスン
え？
振り向いたら　愛里が転んで倒れてた
「愛里！」
「行って！」
「そんでも」
「走って！」
「あ、おう」
「走ってーー！　　優勝して！」
「ゆ、優勝？」
「優勝！　　してーーーーーーー！」
愛里が　　愛里が　優勝しろっつうんなら
俺は　　俺は　俺はーーーーーーーーーっ
「うぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ」
愛里が優勝しろっつうんなら俺は走る走る走る走る
「うぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ」
佐藤の思い　志田の根性　佐藤の迫力　川口の命かけた　みんなのすべてを
愛里の願いを　俺はーーーーーーーーっ　無駄にはしねえええええっ
俺はーーーーーーっ　俺はーーーーーーーーーっ
パーーーン
ハァハァハァハァハァいきハァハァハァハァ息ハァハァハァハァ
どうハァハァハァなったハァハァハァハァ
「森下くん！」
佐藤
「森下くん！」
佐藤
「なハァハァんでハァハァ泣いハァハァて」
なんか　クラックラする
「9 人ごぼう抜き！」
「え？ ハァハァハァ」

「しかも、すごい差つけて！　人間じゃないよ！」
「そんハァハァで」
どうなった？
「二年男女混合リレー！　一位！　2組！」
あ　勝った
「キャーーーーーーー！」「おおおおおお！」
愛里が　え　泣きながら　俺の方に
「愛里、ケガは？」
「え？」
「転んでケガしなかったか？」
愛里は　泣き顔のまんま　首を振って
え　俺に抱きついてきた
「愛里、どした？」
「あなたが・・　すご過ぎて・・　ビリから・・　一位になるなんて」
「愛里が優勝しろっつったから」
「え？」
愛里が顔あげて　俺を見上げた
「愛里言ったじゃん、優勝してって」
「だから・・　なの？」
「愛里にそう言われたらさ、優勝するっきゃねえじゃん」
「あなたって・・」
愛里がまた俺の胸に顔つけて　今度は声出して泣いて
「愛里？」
「エェェェェン」
子どもみたいに泣いてさ
「私・・　ヒック　自分でヒックなに言ったのか・・　わかんなかったあ」
「へ？」
「なんかもう・・　わけわかんなくなっててぇぇ」
「上原さん言ってたよ、ねえ」「うん、優勝してーって言ってたよ」
「無茶ぶりにもほどがあるって思ったけど、無茶ぶりされてやっちゃうから」「ビックリだよね」
あ・・　なんか頭・・
「森下くん、どうしたの？」
「なんかクラックラして」
「酸欠じゃない？」「息して走ってた？」
「わかんねえ」
「少し横になった方がいいよ、あっちの芝生で」「上原さん、これ、氷包んであるから頭に」
「うん、わかった」
愛里に引っ張られて　後ろの芝生んとこに行った

愛里が芝生の上に正座して
「ここに頭をつけてください」
「え？」
愛里の膝枕？
「い、いいんすか？」
「緊急事態ですから」
「お、おう」
メッチャ　しあわせだあああ
「冷やしますよ」
俺のデコんとこに氷包んだタオル乗っけた
冷たくて気持ちいい・・けど
「このタオル、臭せえな」
「志田くんのサポーターの匂いがついちゃったみたいで」
「俺がちゃんと洗うから」
「洗っても、なんか・・　そのタオルで顔を拭く気にならない」
「大丈夫だって」
「捨てます」
「もったいねえじゃん」
「だって、なんかやだ」
「そんじゃ俺もらってもいい？」
「いいけど」
「ヤッタ」
マイタオルにしよう　俺の初のマイタオル　愛里のタオル
「どうですか？　　まだクラクラしますか？」
「だいぶ収まってきた」
そんでも　できれば　ずっとこうしていてえけど　そうもいかねえよな
起き上がって
「愛里、ありがとな、もう大丈夫だよ」
「よかった」
「クラス席戻ろう」
「え・・　あの・・」
「どした？」
「足が・・　しびれちゃったあ」
「え、マジ？」
「さわらないで！　　やだ、絶対さわらないで！」
んっと　愛里の前にしゃがんで
「愛里、おんぶすっから」
「えぇぇぇ」
「ほれ、早く」
「ムリムリムリまず立てないから」

んっと　そんじゃ　これっきゃねえ！
「えっ　やだ！　　お姫様抱っことか」
「足がしびれた愛里を搬送してるだけだよ」
「搬送って荷物みたいに、ていうか、そのタオル、私の足につけないで！」
「つけねえよ」
愛里が　両腕を俺の首にまわして
「ありがとう」
「愛里なんて羽のひとひらみてえに軽いからさ」
「そうじゃなくて、いろいろ、なんか、いろいろ」
「俺は、愛里に感動した」
「私に？　　なにを？」
「全部」
「わけわかんない、あれ？」
「どした？」
「しびれが治りました」
「そっか」
「もうしびれてないです」
「そっか」
「下ろしてください」
「もう少しだからさ」
「おろしてってば」
「イヤだ」
愛里が俺の顔　睨んで
「そうですか」
怒ったみてえな顔でそう言って
俺の胸に頭つけた

結果発表

クラス席に戻ったら
「森下！」「森下くん！」
拍手ってさ
「すごかったよ、ごぼう抜きっていうけど 9 人なんてさ」
「すげえのは志田だ、あの足であんだけ走ったんだからさ」
「そうだよね、ていうか、6 人共すごかった」「だよね、ドラマ見てるみたいだったもん」
「私なんて泣いちゃった」「俺も感動したわ」
あれ？
「志田は？」
「僕が保健室に連れて行く途中で志田のお父さんが来て」
そっか　お父さん見てるっつってたもんな
「保健室の先生が救急外来に電話してくれて、お父さんが車で連れて行ったよ」
「そっか、なんもねえといいな」
「保健室の先生は、すぐにアイシングしてたから内出血は治まったみたいだって」
「そっか、よかった」
「志田、保健室の先生に叱られてたよ」
あの足で走ったんだもんな
「サポーターは洗いなさいって」
あ　それ？
「だよね、あれ臭かったもん、アイシングしてたタオルまですっごく臭くなっちゃってて」
佐藤　ハッキリした物言いは清々しいほどだな
「森下くん、あれで頭冷やしたんだよね？」
「おう」
「もしかしたら髪の毛臭くなってるかも」
「え、マジ？　　川口どうだ？」
川口に頭近づけて
「おっ・・」
川口が後ろに飛びのいた　そんなか？
「帰ったらシャンプーした方がいいと思うよ」
「森下くん、ごめんね、あのとき冷やさなきゃって考えしかなくて」
「いいよ、冷やして正解だったからさ」
愛里に膝枕してもらえたからさ
「みんな！　　そろそろ応援タイムと総合の結果が発表されるよ」

「ドキドキするぅ」「私もぉ」「俺も」「だよな」
俺はやることやったから結果はどうでもいいけどな
あ　なんかシッコしてえ　このふんどし部分でキュッと押さえられてっから
「俺、便所行ってくる」
「ダメだよ、森下くんいないと」「そうだよ、森下がいないとさ」
「や、そんでも」
シッコしてえんだけどな
「それでは」
キーーーンて音　ここにきてまだハウリング起こすか？
「まずは応援タイムの順位を発表します！」
「第三位、三年一組！」
三年生の席んとこで歓声があがった
「第二位、三年五組!！」
やっぱ三年生強えな
「本年度の応援タイム第一位は、二年二組！」
え？　うちのクラス？
「キャーーーーーーー！」「うわあああああ！」「ヤッターーーーー！」
マジか　愛里が佐藤たちと抱き合って泣いてる　可愛くて　涙出てくる
「代表者はトロフィを受け取りに本部前に来てください！」
「誰が行く？」「実行委員？」「森下じゃね？」「森下くんだよ」
俺じゃねえよ
「森下、早く行ってきてよ」
実行委員男子　俺じゃねえよ　この賞は
「虎之助！　トロフィ取ってこいよ」
「え、俺？」
「応援タイムの親方は虎之助だ！」
「そうだね、鈴木くんがずっと指導してくれたもんね」「鈴木くんだよね」
虎之助が俺の顔見てて
「虎之助のおかげで俺たちは一位になった、ありがとう」
「森下・・」
「ほれ、親方、トロフィもらってきてくれ」
「う・・ん、行ってくる」
虎之助が袖で涙ぬぐって　本部席に走っていった
愛里が俺の隣りにきて　長いまつ毛が涙で濡れててさ
「鈴木くんは、もう、万年補欠じゃないですね」
「え？」
「立派なチームリーダーですね」
愛里　いいこと言うなあ　抱きしめてえっ　怒るかな怒るよな
虎之助がトロフィ持って走って戻ってきて　みんなが拍手で出迎えて
「鈴木！」「鈴木くん！」「かっこいい！」「親方！」

虎之助が俺んとこに来て
「森下」
え　俺の胸に飛び込んで　泣いてる
「虎之助、やったな」
俺は虎之助の背中さすりながら
「愛里がさ、虎之助はもう万年補欠じゃねえってさ」
「え？」
「立派なチームリーダーだって」
「上原・・さん」
虎之助が顔上げて　愛里の方見て　愛里もニッコリして胸んとこで小さく拍手してて
「このチームは」
虎之助が　トロフィ持った手を上にあげて
「最高だーーー！」
「おう」「最高！」「やだあもう涙止まらないぃ」
ヤベエ　シッコ行きてえ
　「続いて、総合の順位を発表します！」
行ってくっかな
「虎之助、俺、便所行ってくる」
「森下がいないとさ」
なんで？
　「総合第三位！　　三年一組！」
ああ　ちっとマジでさ
　「第二位！　　二年二組！」
おお　すげえじゃん
「あぁぁ、残念」「いけると思ったのにぃ」
女子たち　女子の本気はすごかった　怖えくれえすごかったよ　充分だろ
　「本年度総合第一位は三年五組！」
冷や汗出てきた　シッコーーーー！

校内に走って便所に
あっ　この衣装じゃスッパでシッコだ
個室に入るっきゃねえな
かあちゃん！　　こんなん作っから　まあそんでも　ハァァァ　間に合った
そんでまたこれ　着るのがさ　よっこらせっと　おっし
個室出て　手ぇ洗って
「森下」
森山・・！　　原始人みてえな恰好だな
「応援タイムかっこよかったよ」
「そ、そっか」
森山のクラスは原始人がテーマなんか？

「俺たちもさ、縄文時代、けっこう忠実に再現したつもりだったんだけどさ」
や、それはどう見ても原始人だ　縄文ではねえよ　裸に毛皮ってさ
「リレーも感動したよ」
森山も出てたよな
「俺も川口には勝ったけどさ」
川口？　　ああ　おんなしグループだったな
あれは勝ったとは言えねえだろ　ただの現状維持だろ
「森下の衣装かっこいいよな」
「そっか」
「俺の衣装、この下は短パンだけだから冷えてオシッコ近くなっちゃってさ」
俺は股んとこ押さえられてシッコしたくなったよ
「あ、見て」
おいっ　毛皮の裾めくって　短パン見せる気かよ？
「ほら」
携帯？
「待ち受け、早速これにした」
俺と森山のツーショ　マジでかマジで待ち受けにしたんか　なぜだ？
「あ、行かないと、森下またな」
「あ、おう」
俺も戻んねえとだな

閉会式が終わって
うちのクラスの撮影班が三脚立てて　どんだけ本格的なんだよ　クラス写真撮って
「次は応援タイムチームだけで撮るよ！」
志田がいねえよ　どうすんだ？
「志田とは繋がってるから」
撮影班の一人がタブレット持ってきて
「みんな〜！」
志田が手ぇ振ってる
「志田、足はどうだ？」
「捻挫だってさ」
骨が折れてなくてよかった
「志田くん、一位取ったよ！」
「うん、さっき聞いた、よかったあ」
「川口、タブレット持ってくれる？　　志田も写るようにするから」
「うん、こうでいいの？」
「もうちょっと上で右に」
「こう？」
「うん、そこ！　　それじゃ撮るよ！」
カシャッカシャッカシャッ

「オッケー！」
終わった
「一位取ったって聞いて、俺の父親も大喜びでさ」
タブレットの中で志田が嬉しそうな顔して
「パーティグッズの卸の社長もメッチャ喜んでた」
「お礼言っといてね」
「病院の先生がさ、アイシングのやり方が完璧だって言ってたよ」
「そっか、よかった」
「森下が 20 分くらい冷やして、10 分くらい離してってやってたこと伝えたんだよ」
「志田、腫れが引いたら温ためた方がいいぞ」
「先生もそう言ってたよ、すごいなあ、森下」
「志田、足痛てえのにさ、がんばってくれてありがとな」
「楽しかったよ、走ってるときは痛み忘れてたもん」
「もう今度はんなムリすんなよ」
「今度は捻挫しないように気をつけるよ」
「おう」
「それじゃまたね」
「志田くん、またね！」「また、えっと水曜日ね」「お大事に」
よかった　骨折じゃなくて　そんで志田も嬉しそうでさ

体操着に着替えて　みんなで後片付け
風船はしぼませて大きなゴミ袋に　パーンってやったクラッカーも大きなゴミ袋で
ボードに貼った壁紙もはがしてゴミ袋
なんか　なんつうか　祭りが終わったあとみてえだな
ピコン
誰のだ？
「あ、妹からだ」
川口か
「モエちゃんから？」「モエちゃんに動画と写真送るって伝えてね」
「え？」
なんかあったんかな
川口がずっと携帯見てて　そんで何か打ち込んで
「僕の妹、見に来たんだってさ」
え？
「モエちゃんが？」「どこかにいた？」
「父親の車の中から見てたって」
「モエちゃんなんだって？」「どうだったのかな？」「言ってみればプロデューサーだもんね」
「そのまま読むよ」
「読んで読んで」「プロデューサーの感想聞きたい」

「飾り付け最高にセンスよかった」
「上原さんのおかげだよな」「うん、上原さんの指示が的確だったから」
愛里がキョトってっけど　愛里のおかげだよ
「ダンスあそこまでできると思わなくてビックリ」
「よかったあ！」「鈴木くんの指導のおかげだよね」「かっこよかったもんな」
「最後に金テープがパーンてなったときはライブみたいで感動した」
「だよね、私も感動した」「音はビックリしたけどさ」
「リレー、あ、リレーも見てたんだ」
なんだかんだでやっぱ川口のことが大好きなんだな妹
「ビニ役の人が転んだときは」
ビニ？　　志田か？
「もうダメかなと思ったけど」
「みんな頑張ったもんね」「ていうか森下くんがさ」「森下な」
「リノ　人間じゃないダブリューかける３」
リノ？　　誰だ？
「あれはねえ」「人間技じゃないよな」「私も信じられないって思ったもん」
「あ！」
川口どした？
ゆっくり携帯から顔あげたけど？
「どうしよう」
「どうしたの？」「なに？」「どうした？」
「リレーのとき、ペンライトが光ってなかったよって」
へ？
「あれって光るの？」「そこまで気づかなかった」
「言われてたんだよ、リレーのときはペンライト光らせてって」
「どうしたら・・」「今さらやり直しは・・」「えぇぇぇ」
「あ、大丈夫、ダブリューがついてるから」
「あ・・　よかった」「よかったよ」
w ついてるかついてねえかで大きな差があんだな
「あとね、みんなにありがとうって」
「こちらこそだよ」「モエちゃんのおかげで応援タイム一位だもん」
川口の電話鳴った
「あ、父親からだ、ちょっといいかな」
「いいよ、もうほとんど終わりだから」「うん、いいよ」
川口が木の裏っ側に走ってった

ゴミは捨てて　ボードは用具室に運んだ　椅子も教室に戻して
終わった
運動会が　やっと終わった
「着替えないんですか？」

「俺はこのまんま帰る」
「体操着のまま歩くの？」
「すぐそこじゃん」
愛里が俺の顔ジッと見てっけど？
「え？　愛里が着替えろっつったら着替えっからさ」
「べつにいいですけど、私は着替えてきます」
「あ、そんじゃ、そんじゃ俺も」
愛里と一緒に校内に入った

着替えて　ロッカーんとこで愛里のこと待ってたら
「森下」
「川口、お疲れ」
「うん、あのさ、お願いがあるんだよ」
「なに？」
「森下の衣装、売ってもらえないかな」
「俺の衣装？」
「妹の知り合いのコスプレイヤーの中にオーストラリア人がいてね」
オーストラリア人もコスプレすんのかよ？
「森下よりは身長は高くはないけど、イ・リノのソリクンの衣装欲しがってて」
なに言ってんのかよくわかんねえけど
「妹が今日森下のを見て、その人に連絡したら買いたいって」
「んな、金なんていいよ」
かあちゃんが出したからいくらかわかんねえし
「やるよ」
「ほんと？　ありがとう」
んっと　こっちの手提げから
「ほれ」
「ありが・・　あれ？　なんかこれ、臭くなってない？」
「あっ　志田の足冷やしたタオルと一緒に入れてた」
「いいよ、クリーニングに出すから」
「わざわざクリーニングに出さなくても家で洗えっだろ」
「でもこの部分はドライじゃないとさ」
「まあ、好きにすりゃいいよ、やっからさ」
「ありがとう」
そのオーストラリア人もロンパース・・じゃねえ、ふんどし状態になんのか
「さっき、父親から電話があっただろ？」
「ああ」
「本当は泣いてたんだって」
「誰が？」
「僕の妹」

「なんで泣いてたんだ？」
「ダンスのときも、リレーのときも感激してたってさ」
「そっか」
「僕が走ってるときなんか、おにいちゃまがんばれ！ って車の中で泣きながら叫んでたってさ」
「そっか」
なんともねえカンジの LINE だったけど　そうだったんか
「家に帰っても興奮してすごく喜んでたっていう報告だったんだけどね」
「よかったな、マジでさ」
「うん、ありがとう」
「俺じゃねえよ、みんなだろ、川口もだしさ」
「あとは、11 月のライブチケットが取れるかどうかだよ」
なんかわかんねえけど
「そっか、がんばれよ」
「がんばってもなかなか取れないんだよ」
「クラスのみんなにも取ってもらえばいぃんじゃねえか？」
「それはできないよ、ファンクラブに入会しなきゃいけないから」
「入会してもらえばいいじゃん」
「入会金がかかるんだよ」
「そう・・なんか」
「ごめんなさい！」
愛里
「サトユミさんたちとおしゃべりしちゃってて」
いいよいいよ　愛里のことならいっくらでも待つからさ
「それじゃ、僕は」
クーラーボックス下げて
「川口、飲み物ありがとな」
「僕こそお弁当ありがとう」
「川口くん、またね」
「うん、上原さん、森下、またね」
「おう」
川口の後ろ姿見ながら
「終わりましたね」
「終わったな」
「なんか、いろいろだったけど、楽しかった」
「俺も」
「手は校門出てから！」
「あ、おう」
愛里と二人　並んで校門まで歩いた

運動会の帰り道と晩メシ

校門出て　すぐに愛里の手ぇにぎって家に向かって歩いた
「志田くんの足のアイシング」
「アイシング？」
「的確だったって、なんでアイシングのやり方知ってたんですか？」
「あれは、小学４年の終わりか５年ときに、かあちゃんのパソコン借りて調べた」
「え？　　小学生のときに？」
「ねえちゃんから、とうちゃんの脚は、現場の足場から落っこちたからだって聞いてさ、　怪我して脚曲んねえのは知ってたけど、なんつうか、具体的に聞いて、そんで・・」
あんときは・・　もし俺がそこにいたら　とうちゃんのこと助けらんねえかなって
なんか・・　どうにもなんねえ気持ちになっちまってたな
「あの」
「ん？」
「なんか・・　聞いちゃいけないことを聞いちゃいましたか？」
「なんで？」
「黙っちゃったから」
「んなことねえよ、小学生だったからさ、捻挫とか骨折くれえっきゃ頭に浮かばなくてさ」
それどころじゃねえ怪我だったんだけどさ
「そんで憶えただけ」
「それで志田くんは助かりましたね」
「助かったっつうか」
「すごいなって、川口くんのクーラーボックスに氷入ってるのをパッと思い出したり」
「朝さ、一個一個説明されてさ、これはかあちゃんのコーヒーだとかさ」
「私なんて忘れてたもん、なんで氷入れてるの？ って思ったのに」
「なんか思い出しただけでさ」
「あなたってそういうとこありますよね」
「そういうとこ？」
「パパパッて点と点をつなげるっていうか」
「そっかな」
「そうです」
「そっか」
「すごくかっこよかった」
「えっ　愛里、マジ？ マジで？」
「今日の運動会はモリシタダイチフェスみたいでした」

「フェス？」
「グラウンドを見ればモリシタダイチが走ってるみたいな」
「あれはさあ」
「そのレスポのバッグ」
「レ・・　なに？」
「その黒いバッグ、洗った方がいいと思う」
「なんで？」
「志田くんのサポーターの匂いがついたタオルが入ってるから」
「臭せえ？」
「今は閉めてるから臭わないけど・・　すっごく臭かったから」
「洗う、ちゃんと洗う、タオルも、酸素系漂白剤でつけ置きすっから」
「洗っても私はいりません」
「うん、俺が使う」
愛里が俺のこと見上げてジッと見てっけど？
「愛里、なに？」
「捨てればいいのに」
「なんでだよ、まだ全然使えんじゃん」
「そうでした、あなたはそういう人でした」
「そういう人って？」
「着きますよ」
「あ、おう」
「部屋まで送ってください」
「え？ マジ？」
愛里から送ってっつってくれんなんてさ
「送らなくていいって言っても、どうせあなたは絶対送るって言うから」
「ったりめえじゃん」
「不毛な会話は、あ、エレベーター来ました」
「おう」
二人でエレベーターに乗って二階のボタン押して
「それに・・　今日はあなたと二人きりになるのって朝からあまりなかったから」
「愛里」
「イヤーー！」
「え？」
「髪の毛、志田くんのサポーターの臭いがする！」
「あ、そ、そっか」
愛里からでっきるだけ離れて
「不思議」
「え、なに？ なにが？」
「あなたの長靴の匂いとか、足の匂いとか、そういうのは気にならないのに」
え？

「志田くんのサポーターの臭いは」
愛里が片手で鼻と口押さえて
「耐えられない」
「あ、ごめん」
「あなたが悪いわけじゃないけど」
「そんでもさ」
「着きました」
「あ、おう」
でっきるだけ愛里から離れて廊下歩いて
愛里が鍵開けんの　遠くから見て
「それじゃ、またあとで」
「おう」
愛里が部屋ん中入ってくの見届けて　エレベーター乗った

玄関ドア開けて
「ただいま」
「ダイチ」
とうちゃんがキッチンから出てきて
「おかえり」
「とうちゃん、ただいま」
「戦闘シーン、一位になったな」
「とうちゃんのおかげだよ」
「あれなら敵は全滅だな」
「だよな、みんなすごかったよな」
「美里も喜んでてよ」
「かあちゃん発表までいたの？」
「ダイチが途中で校舎ん中入ってってよ」
「あれはシッコしたくなってさ」
「あんとき、美里が帰ろうっつって帰ってきた」
「そっか」
あ・・　髪
「とうちゃん、俺、シャワーすっからさ」
「そっか」
「終わったら晩メシ手伝うよ」
「美里がオムライス食いてえっつってよ」
「オムライス？」
「あとはメシ炒めて卵焼くだけになってっから」
「そっか、そんじゃ入って来るよ」
んっと　この黒のバッグも洗えっつったな
制服のシャツと体操着と　愛里のタオルは・・　つけ置きだ

「オムライスは誕生日じゃなくても食べるんですか？」
「たまに食べたくなるとカズオに作ってって頼むの」
「運動会の夜がオムライスって、なんかお祭りみたいですね」
「それだわ」
「え？」
「運動会、子どもの頃を思い出しちゃって食べたくなったのかも」
そうだったんか　まあ家では年に一回っきゃ食わねえってわけじゃねえけどさ
かあちゃんが食いてえっつったときにとうちゃん作ってんだけどさ
「あ、忘れてた」
愛里　どした？
「川口くんが、おとうさんと、あの、大一さんが出たリレーの動画撮っててくれてたんです」
「あら、そうなの」
「私は夢中になっちゃって撮るの忘れてて」
「カズオのことを応援してくれてる声が聞こえたわよ」
「あとで、おかあさんの携帯に送りますね」
「ありがとう」
「愛里、俺にも」
「あ、はい」
「今年はカズオは二回も走ったわね」
「そうですよね、あ、ていうことは、森下父子フェスでしたね」
「フェス？　　ハハハ、そうね、ダイチもやたらと走ってたものね」
やたらとってさ
「愛里さんが走ってるとき、私も泣きそうになっちゃったわよ」
「え？」
「なんかもう一生懸命でそれが可愛くてグッときちゃった」
かあちゃん　わかる　わかるよ　俺も涙出た
「私は、なんかよく憶えてなくて」
「そうなの？」
「志田くんが転んだあたりからよく憶えてないんです」
「ダイチにバトン渡した直後に転んだでしょ？」
「転んだのは憶えてるんですけど、そこからは・・」
「ダイチが振り向いて、何してるの？ と思ったら、突然バカみたいに走り出して」
バカみてえってさ
「我が息子ながら、あんまりすごいから」
マジ？
「逆に笑っちゃった」
ハァァアア？
「私は、大一さんが走ったところは憶えてて、すご過ぎて泣いちゃって」
愛里ぃぃ

「みんなすごかったわね、川口くんもあんなに速いとは思わなかったわ」
「私はそこは憶えてなくて」
マジか　俺んとこは憶えててくれたんか愛里
「愛里さんのダンス、激しい振り付けなのに品があってステキだった」
かあちゃん　そうなんだよ　愛里はさぁ天使でさぁ
「ダイチのは・・　前に見たとこがあるなあって」
「前に・・ですか？」
「小さい頃カズオとヒーローごっこして遊んでたとき」
そりゃそうだろ　あれは戦闘シーンなんだからさ
「インプリンティング作戦、成功しました」
「そうね、ハハハ」
なんなんだ？　　ずっとインプリンティングつってたけどさ
「ところで、菱谷建設のリレーのとき、ショーさん？　　追いかけてた女の人は誰なの？」
「ショーさんの奥さん」
「あら、そうだったの」
「奥さんも卒業生で、同期と見に来てたっつってた」
「そうね、今年は近々の卒業生より古い卒業生がけっこう来てたわよね」
「旧体育館が解体されっから、その前にっつってたんだってさ」
「ああ、それで」
ショーさんと奥さん　あれからどうなったんかな
今頃奥さんと晩メシ食ってっかな

晩メシ終わって
かあちゃんと愛里はリビングでしゃべってて　愛里の楽しそうな笑い声も聞こえる
俺ととうちゃんは後片付けしてて
「俺はよ」
とうちゃんがガスコンロ掃除しながら
「ヒトミやダイチの運動会見てるだけでも楽しくってよ、運動会なんて見たことねえからよ」
とうちゃんはいっつもそう言ってるよな
「そんでもな、ダイチと一緒に運動会で走れるなんてよ、夢みてえだな」
「俺も嬉しかったよ」
「リレーにも出してもらえんなんてよ」
「だよな、おんなしチームでさ」
「ネコのおかげかもしんねえ」
「ネコ？」
「梁の上のネコ助けてよ、あんときはダイチに心配かけちまって、美里にも迷惑かけてよ」
「迷惑じゃねえよ、とうちゃんがいっちゃん大変だったんじゃん」
「そんでもよ、そんで脚が曲がるようにしてもらえてよ」
「だよな、あれがなきゃあのまんまだったよな」

俺はそれがとうちゃんだと思ってたから　それはそれでいいんだけどさ
「そんで、現場で働かせてもらえてよ、そんで、ダイチと走れてよ」
だよな　つうことは
「とうちゃんが助けたネコは招き猫だったんかもしんねえよ」
「なにねこ？」
「今日さ、ネコの上に乗っけてたネコあんじゃん」
「なんであれ乗っけてんのかわかんなかったけどよ」
監督　とうちゃんにもダジャレ通じてねえっすよ　つか　とうちゃんはダジャレわかんねえんだよ
「あれって招き猫っつってさ」
「まねき・・？」
「千客万来、お客様がいっぱい来ますようにとか、福、しあわせが来ますようにってネコでさ」
「んなありがてえネコだったんか、俺、なんも考えねえで」
とうちゃんがガスコンロ掃除する手ぇ止めて
「目ぇまわんなかったかな」
「何が？」
「ネコ、あんなガーーッと押して走っちまったよ」
「そんで一位になったじゃん」
「そっか、そのネコのおかげか、ありがてえな」
や、ネコのおかげっつうんじゃなくて　ガーッと走ったからっつう意味で
「俺はネコに助けられてばっかだな」
「え？」
「若けえときも、みぃちゃんのおかげで、三週間もいさせてもらえてよ」
それは　ただの口実だよ　とうちゃん　かあちゃんはさ　ほんとはさ
「ネコがどうしたの？」
かあちゃん
「招き猫の話してただけだよ」
「あれね、なんで一輪車の上に招き猫だったの？」
監督　かあちゃんにも通じてねえっす
「なんでもねえよ」
「なによ、おしえてよ」
「だから・・　現場では、一輪車をネコつつってさ・・　ネコの上にネコっつう」
何度も説明しなきゃなんねえって　辛れえっすよ監督
「まあいいわ」
切り捨てられたし
「愛里さんを送ってあげて」
「おう」
愛里と二人で　家の玄関出た

愛里の部屋の玄関
「愛里」
愛里のこと抱きよせて
「シャンプーしたからもう臭くねえよ」
「はい」
愛里が俺の胸んとこに顔つけて
愛里の髪からもいい匂いがしてて　いっつも愛里の匂いはすげえいい匂いで
ずっとこうしててえよ　ずっと
「なんか・・　不思議」
「ん？　なにが？」
「運動会で大活躍してたモリシタダイチが・・　今こうやって私のこと抱っこしてる人と」
抱っこ？　抱っこっつう認識？　これはさ
「同一人物って、なんか」
同一人物？　ん？　え？
「今もまだ・・　ちょっと慣れない」
「へ？　慣れないって、愛里、んっと？」
「いいんです、ひとり言みたいなものだから」
「え、あ、そ、そっか」
「終わっちゃいましたね、運動会」
「だな、終わったな」
「運動会で、あんなに夢中になったり笑ったり感動したりって初めて」
「俺も楽しかった、愛里と一緒にできてさ」
腕の力ゆるめて　愛里の顔見て　そんで
「愛里」
なんか・・　すげえ・・　久しぶり感・・　ハンパな・・く・・て
あ　やべえやべえやべえ　あたる　愛里に　やべえ
「んっと、あの、そんじゃ」
「はい、また」
なんか　離れたくなくて　まだそばにいたくて
「愛里」
また抱きしめちまって
「どうしたの？」
「ん・・　なんか・・　溢れたっつうか」
「溢れた？」
「好き・・が」
「そう・・ですか、あっ　ハムハムは、もうダメです」
「えぇぇ」
「キュゥゥンみたいな顔されても」
「んな顔してる？」
「してます」

「愛里ぃぃ」
「ほら、こういうところがあのモリシタダイチと全然違うから」
「あのモリシタダイチ？」
「それじゃ、また」
「あ、おう」
玄関出たら　ドア閉まって　鍵閉まった
俺は　しあわせだ　このドアの向こうっ側に　命賭けて惚れた人がいてさ
抱っこしてハムハムして
抱っこじゃねえんだけどな
家に戻ろう

フラワーカフェ

ん・・・　いま・・なん・・　何時　携帯　　13:46　え　　えっ　マジ？
マジだ　どんだけ寝てたんだよ　あっ　愛里の昼メシ！
ドア開け
「ダイチ」
「とうちゃん、おは・・ようっつうか」
「いっぺえ寝てたな」
「あ、うん、顔洗って愛里の昼メシ作んねえと」
「アイリちゃんは美里と一緒に食った」
「マジ？　　あ、そっか、そんじゃ、んっと」
「なっかなか起きてこねえからよ、熱出してんのかなって」
「熱は出てねえけど」
「昼前に部屋入ってよ」
へ？
「デコに手ぇあててみたら熱はねえから」
「とうちゃん、部屋入ってきたの？」
「気ぃつかねえくらい寝てっから、いつもんだなってよ」
「いつもの？」
「やっと起きたの？」
「かあちゃん、俺・・」
「あんたは小さいときもバカみたいに遊んだ後、死んだみたいに寝て」
死んだみてえ？
「目を覚ますとエネルギー満タンに戻ってて怖かったわ」
「んっと、愛里は？」
「出かけたわよ」
「出かけた？　　どこに？」
「カフェに行くって言ってたわ」
「カフェ？」
「お花の先生の友だちが監修したカフェですって」
「んなこと愛里言ってなかったけど」
「あんたが起きたら言おうと思ってたみたいよ」
「俺が？　　んな、かあちゃん起こしてくれよ」
「愛里さんと二人で部屋に行ったわよ」
「へ？」

「これはダメだわって」
「えっ　愛里も俺が寝てんの見たっつうこと？」
「笑ってた」
「んなさあ、起こしてくれればいいじゃん」
「半目で白目むいて口開けてて怖かったわよ」
「起こしてくれよぉぉぉ」
「愛里さん、あんたの寝顔見て、一人で行きますって」
愛里ぃぃぃ
「あんたが行ってもねえ」
「ハ？　　なに？」
「フラワーカフェよ」
「なんだよそれ？」
「ほら、わからないじゃない」
「だから、なんだよそのフラ・・」
「お花に囲まれて、お茶できるカフェ」
「行きてえよぉ」
「あんたが行ってどうするのよ」
「どう、んな、愛里と一緒にカフェ行きてえじゃん」
「あんたがこんな時間まで寝てるからでしょ」
「んなさあ」
「駄々こねてないで顔洗ってきなさいよ、無精ひげ生やして汚ったない顔」
汚ったねえって・・
「ダイチ、サンドイッチ食うか」
「とうちゃん・・　顔洗ったら、食う」
「そっか」
なんだよぉぉ　久しぶりに愛里とデート・・　顔洗おう

愛里の部屋掃除して
愛里ぃぃ　叩き起こしてくれてよかったのにさ
愛里に LINE すっか
『愛里　ごめん』送信
『俺さっきまで寝ててさ』送信
『愛里と一緒にカフェ行きたかった』送信
ピコン
『私は今』
ピコン
『デート中』
デート？　　デート？　　ウソだよなウソだろ？　　愛里
『だれと？』送信
ピコン

『優しいおじさま』
優しいおじ・・　なんで？ 愛里？ なんでだ？
ナンパか？　ナンパされたんか？　や、愛里は　んなことで
ピコン
『ショーさんです w』
ショーさん？　ショーさんて　あの・・
『現場のショーさん？』送信
ピコン
『そうです』
あ・・　ショーさん　そっか　ショーさんと　なんだあショーさんかあ
え？　つか
『なんでショーさんと？』送信
ピコン
『ショーさんは私を救ってくれました』
ショーさんが愛里を救った？
『どした？ 何があった？』送信
ピコン
『カフェに行く途中にあなたがバイトしてたところがあって』
え？　あの現場？　あさひ町？
ピコン
『もう建物が建ってて木も植えてあって』
ピコン
『囲いがあったときと全然違ってて』
ピコン
『こんなになったんだって上の方を見てたら歩道から落ちそうになって』
えっ
ピコン
『危ない！ って助けてくれたのがショーさんでした』
ショーさんいてくれてよかったぁ　あれ？　つか　なんでいたんだ？
ピコン
『顔を見たらショーさんだったからビックリして』
ピコン
『ショーさんも愛里ちゃん！ てビックリしてました w』
俺もだよ　そんでもショーさんいてくれてよかった
でねえと愛里がケガしちまったかもしんねえ
ピコン
『ショーさんに仕事ですか？ って聞いたら』
ピコン
『ここでダイちゃんに会ったんだよなって』
え？

ピコン
『なんとなく見に来たくなったって』
そっか　それでいたんか　休みでヒマだったんかな
ピコン
『だから一緒にお茶しませんかって誘いました w』
そっか　そういうことか　そっか　ハァァァ　なんかホッとした
ピコン
『ショーさんがダイちゃんによろしくって』
そっかそっか
『ショーさんに愛里のこと助けてくれてありがとうって伝えて』送信
ピコン
『ショーさんが』
ピコン
『愛里ちゃんのこと借りてるよだって w』
『ショーさんにだけ特別だからな w』送信
ピコン
『ショーさん笑ってますよ w』
なんか　愛里とショーさんがお茶するっつうのもほのぼのっつうかさ
ピコン
『それじゃまた』
『愛里』送信
『早く帰っ
いやいやいや　削除
『ショーさんとデート楽しんでくだせえ w』送信
ショーさんならな　うん
そっか　ショーさんと一緒に　そっか　愛里一人でいるよか安心だな
できれば俺も行きたかったな　しゃあねえな
あとは風呂掃除とタオルやマットの洗濯すっか

家に戻ったら
とうちゃんがたたき掃除してて
「とうちゃん、愛里のタオルさ」
「アイリちゃんのタオル？」
「昨日、俺がつけ置きしてたやつ」
「あれは洗濯してアイリちゃんとこに戻しといたからよ」
「えっ・・」
「あれはアイリちゃんのだよな」
「そう・・なんだけどさ」
愛里はフェイスタオル 6 枚持ってて　さっき洗って乾かしたの入れたら 6 枚で・・
どれが志田のサポーターの匂いしてたやつだったんかな？　　ヤベ　わかんねえ

そんでもさ　ちゃんとつけ置きしてさ匂いは取れてっからさ
怒るかな　そんでも気ぃつかねえかも？　　どうなんだ？
「アイリちゃん、もう帰ってくんのか？」
あ、そうだよ
「とうちゃん、愛里、ショーさんと一緒にいた」
「たっちゃんと？」
「あさひ町の現場あんじゃん、もう現場じゃねえけど、あそこで」
「ダイチ」
かあちゃん？
「愛里さんとショーさんが一緒にいるの？」
「うん、愛里から LINE 来て」
「あさひ町ってどういうこと？」
なんだ？　　なんかマジな顔で
「俺ととうちゃんが働いてた現場」
「それはわかるけど、あさひ町の現場にショーさんがいたの？」
「現場っつうか、もう現場じゃねえけど」
「今そこにいるの？」
「今はカフェにいるっつってた」
「カフェに」
かあちゃんが　なんか考えてっけど　なんだ？
「愛里さんに伝えてくれない？　　ショーさんを家に連れてきてって」
「ここに？」
「昨日はちゃんと挨拶できなかったから、きちんとご挨拶したいって」
「あ、うん、わかった」
携帯出して
『愛里』送信
『かあちゃんがショーさんを家に連れてきて欲しいってさ』送信
『昨日はちゃんと挨拶できなかったから挨拶してえんだって』送信
ピコン
『ショーさんにおかあさんのこと伝えたら』
ピコン
『そんな改まって挨拶なんていいよって笑ってます』
「かあちゃん、ショーさん、んな改まんねえでいいってさ」
かあちゃんが俺の顔ジーーッと見てっけど？
「かあちゃん、んな堅っ苦しいことしねえでもさ」
「愛里さんを送ってもらいなさいよ」
「愛里を？」
そうしてもらえば安心だけど
「日曜日の夕方よ、あの路線、休みの日は混雑するのよ」
「そうだけどさ、ショーさんの寮とは逆方向で乗り換えも違うからさ」

「もしも、愛里さんが」
もしも愛里が？
「痴漢にでも遭ったら」
ちっ　痴漢？
「お、俺迎えに行ってくる」
「待ちなさい！」
「そんでもさ」
「あんたが迎えに行くより、ショーさんについてもらってる方が確実よ」
「そ、そっか、えっと、そんじゃ」
愛里に LINE して
『愛里　ショーさんに送ってもらってくんねえかな』送信
ピコン
『なんで？』
『かあちゃんが日曜日の夕方で混雑してて痴漢にでも遭ったらっつってさ』送信
『俺が一緒だったらよかったんだけどさ』送信
『メッチャ心配だから』送信
ピコン
『バカみたい』
『そんでもさ心配だからさ』送信
ピコン
『ショーさんに言ったら』
ピコン
『送ってくれるそうです』
マジ？
「かあちゃん、ショーさん愛里のこと送ってくれるってさ」
「ちゃんと部屋の前までね、鍵を開けるまで」
「あ、おう」
『愛里　部屋の前まで送ってもらってくれよ』送信
『鍵開けるまで』送信
『かあちゃんがそう言った』送信
ピコン
『お願いしました』
よかったぁぁぁ
ピコン
『おかあさんどうしたんですか？』
どうしたって
『愛里のこと心配してるだけだよ』送信
ピコン
『わかりました』
「かあちゃん、愛里、ショーさんに部屋の前まで送ってもらうってさ」

「そう、よかったわ」
よかったあ　ショーさんに会ってよかったよ愛里
ピコン
『今駅に着いたので』
ピコン
『もう少しで電車に乗りますから』
ピコン
『ショーさんにあなたの過保護っぷりを話したら』
過保護っぷりってさ
ピコン
『俺の娘だったら俺もそうするからって』
だよなだよなショーさん
ピコン
『過保護の人ばっかり wwww』
『みんな愛里のことが大切なんだよマジで』送信
ピコン
『それじゃ電車に乗ります』
『待ってっから』送信
なんかホッとした
「そんじゃ俺は晩メシの買い出し行ってくっからよ」
「とうちゃん、俺も行くよ」
「ダイチ、あんたは行かないで」
「なんで？」
「話があるの」
「なに？」
「カズオ、夕食、ショーさんの分もお願い」
ショーさんの分？
「愛里さんを送っていただくんだから、一緒に夕食食べてもらえばいいじゃない」
とうちゃんがニッコリうなずいて買い出しに出てった
「かあちゃん、話ってなに？」
かあちゃんがソファに座って　フーッて息吐いた　なんだ？
「あんたが愛里さんの部屋を掃除してるとき、菱谷さんから電話があったの」
「監督？」
「あんたにショーさんから連絡は来てないかって」
「ショーさん？　　愛里といるじゃん」
「もし連絡が来たら、居場所をなにげなく聞いてくれないかって」
「だから愛里と、つか、なんで？」
「私もわけがわからないから何があったんですかって聞いたの」
なんなんだ？　　仕事でなんかあったんか？
「今日の午前中、菱谷さんの家にショーさんと奥さんが来るはずだったそうよ」

「へ？」
「昨日、二人を寮に連れて行ったけど、休みだったから若い人たちもいて、
　落ち着いて話はできないから、そういうことにしたそうよ」
「そんで、なんでショーさんから連絡来てねえかって・・」
「ショーさん来なかったんですって」
「なんで？」
「それは私はわからないし菱谷さんもわからないから捜してるのよ」
まあ・・　そうだけど
「寮の若い人たちに聞いてもいないって、しばらく待っても来なくて・・
　奥さんが弟さんに頼んで、元の工場付近を捜してもらったけどいなくて、
　監督も奥さんも、なんていうのかしら・・　ちょっと不安になったみたいでね」
「不安？」
「まさか・・　まさかとは思うけど、なんていうのかしら、自分で自分の」
「えっ　じっ」
「そうじゃなくてよかったわ」
「な、なんで、ショーさんは、んな」
「わからないわよ、わからないけど」
かあちゃん　なんか不機嫌になった
「ホームレスの男って突然いなくなるからね」
「それって・・　とうちゃんのこと？」
「一般論よ」
ぜってえとうちゃんのことだよな
「あんたと会った現場にいたとはね」
かあちゃんがフンッて鼻で笑って
「ホームレスって帰巣本能があるのかしら」
「巣がねえからホームレスなんじゃねえの？」
「カズオだって、私のところからいなくなって、またあの地下道にいたわよ」
「それは、かあちゃんのこと見てえからでさ」
「だったら堂々と私の前に、ちがう、今はその話じゃないのよ」
かあちゃんがそっちの方に持ってったんじゃん
「あんた、愛里さんとショーさんが帰ってくる頃に愛里さんの部屋にいなさい」
「なんで？」
「逃がさないため」
「に、逃がさねえって、犯人じゃねえんだからさ」
つかさ
「かあちゃん、挨拶だとか愛里のこと送ってもらえとかさ、愛里に言えばよかったじゃん」
「なにを？」
「俺にした話」
「愛里さんを巻き込みたくないでしょ」
充分巻き込んでっけどな

「それに、愛里さん、ウソつけないでしょ」
「あ・・　まあ、そうだけど」
「不自然になっちゃって、ショーさんが逃げちゃうかもしれないでしょ」
「そんで、ショーさん捕まえたらどうすりゃいいんだよ」
「捕まえるって犯人じゃないわよ」
「かあちゃんが逃がさねえとか言うからさ」
「とにかく、愛里さんの部屋に入れてもらって」
「愛里の部屋？」
「流れ的にここより自然でしょ」
そっかなあ
「それから先は・・」
「どうすんの？」
「とにかく！　愛里さんの部屋で待機してなさい」
かあちゃん　珍しくノープランだな
「早く！」
「わかったよ」
ショーさん　どうしたんだよ　なんでさ
まあとにかく　愛里の部屋に行って待つっきゃねえな

フラワークッキー

愛里の部屋のバスルーム
タオル入れてあるカゴ引っ張り出して
どれだ？　志田のサポーターの匂いしてたのは
わかんねえな　匂い嗅いでも　わかんねえ
あっ　鍵の開く音
玄関に走ってって
「え？」
愛里がポカンとして俺のこと見てっけど　いろいろあってさ
「愛里、おかえり」
「た、ただいま、なんで？」
「んっと、掃除、掃除してた」
「今？」
「ちっと、やり忘れたとこあってさ」
あ　そうだ
「ショーさんは？」
「今エレベーターの方に」
ヤベ
「ショーさん！」
振り向いた
「ダイちゃん！」
「ショーさん」
必死で手招きしたら　ん？ って顔してこっちに戻ってきた　あっぶねえ
「ダイちゃんと愛里ちゃんは・・　一緒に住んで・・」
「ちがいます、おかあさんがこの部屋の大家さんなので」
「ダイちゃんのお母さん？」
「愛里、ショーさん部屋ん中に入ってもらってもいっかな」
「俺はもう帰るから」
「ひ、久しぶりに会ったんだからさ」
「昨日会ったよな？」
「え、あ、なんつうか、せっかくここで会ったんだからさ」
「そうですね、どうぞ」
「それでも、こんなおじさんが若い娘さんの部屋にさ」
「大丈夫です、えっと」

俺のこと手で指して
「おとうさんも入ってますから」
「カズが？」
「おじさんとは思ったことないけど」
「そうだよな、カズは青年にしか見えないよな」
「掃除してくれたり洗濯してくれたりしてます」
「すっかり家族だね」
「すごくよくしてもらってます」
「そうか、みんな愛里ちゃんが可愛いんだな」
「ショーさん、ここで話してねえでさ、なあ愛里」
「はい、中にどうぞ」
「そうか？　それじゃちょっとだけお邪魔するよ」
よかっ　たぁぁ

愛里がショーさんをリビングに連れてって
「あの、座ってください」
ソファを勧めて
「俺はここでいいよ」
ショーさんはカーペットの上に座った
なんか・・　ドッキドキしてんだけど俺
「んっと、ショーさん、なんか飲む？」
「愛里ちゃんと喫茶店・・じゃないな、あれはなんていうんだっけ？」
「フラワーカフェです」
「あんなシャレたところは初めてだったよ」
「私もフラワーカフェは初めてで」
「愛里ちゃんと一緒じゃなきゃ一生あんなところには入れなかったな」
ショーさんが穏やかな顔で笑ってさ　かあちゃん言ったことほんとなんかな？
「ショーさんとおしゃべりできて楽しかったです」
「そうか？　おじさんの話なんてな、若い娘さんにはおもしろいかな」
「デートの話とか」
デート・・　奥さんとのデートか
「そんな大した話じゃないよ、今みたいにいろんなところがあるわけじゃなかったし、
　学生で金もなかったからな、バイト代入ると喫茶店や映画に行ったりな」
「お金がないときは公園で、奥さんの手作りのお弁当食べておしゃべりっていいなって」
「ただの公園だよ、子どもたちが遊んでるようなさ」
「それがいいなって」
「愛里ちゃんはおもしろいな」
愛里と　こんなに穏やかに笑顔でしゃべってるショーさんが　なんか信じらんねえんだけど
「あの話、雑草の、あれもおもしろかったです」

「あれな、うちの女房が花が好きでさ」
うちの女房・・
「工場と自宅が繋がってたからさ、カナちゃんは裏で花を育ててたんだけどな」
ショーさん・・　なんで・・
「雑草取りは俺の仕事でさ、雑草きれいに抜いたらさ、あああって叫ぶんだよ、
　そこには種が飛んできたスミレがあるのってさ、そんなことわかんないからさ、
　あわててゴミ袋に入れた雑草の中を探した探した」
「見つかってよかったですね」
「命拾いしたよ」
命・・拾い
「あ、これ」
愛里が小せえ紙袋テーブルの上に乗せて
「ショーさんが買ってくれたんです」
「愛里ちゃんにご馳走しようとしたらさ、ショーさんはカレシじゃないから割り勘てさ」
「私が誘ったから、本当は私がご馳走しなきゃなんですけど」
「そんななあ、いい歳したおじさんが若い娘さんにご馳走してもらうなんてできないよ」
「そしたら、あそこにあるお菓子を買ってあげるって」
「俺は子どもいないだろ、少しさ、娘にお菓子買ってあげるお父さん気分ていうかな」
「ほら、お花のクッキー」
愛里が袋から出して見せて
「こっちがスミレでこっちが黄色いパンジー、ショーさんが選んでくれました」
「俺が選んだっていうか、俺は花のことはわかんないからさ」
「奥さんはどの花が好きなんですかって聞いて」
「スミレはちゃんと憶えたからな、こっちの黄色いのは毎年鉢植えで育ててさ」
なんなんだ・・　この・・　温ったけえ空気・・
「花言葉が書いてるんです、スミレが・・　小さなしあわせ」
俺は・・
「黄色のパンジーは・・　つつましいしあわせ」
「小さなとかつつましいとか、なんか貧相でごめんな」
もう・・　耐えらんなくなって・・
「ダイちゃん、どうしたんだ？」「え、なんで泣いてるの？」
「なんか・・　すげえ・・　いいなって」
「え？」
「ショーさんと愛里がしゃべってんのが・・　温ったけえ・・つうか」
「そんなたいそうなことしゃべってないよ？」
「ショーさん」
俺はもう
「死んじゃイヤだよ」
「ハ？」「え？」
「生きてて・・くれよぉ」

「ダイちゃん？」
「かあちゃんとこに・・監督から電話があって」
ショーさんが今どんな顔してっか　涙で見えねえけど
「ショーさんと奥さんが・・　監督の家に来ることに・・　そんでもショーさん来なくて」
「え？　　そうだったんですか？」
愛里の声で　俺　シャツの裾で涙ぬぐって
「監督も、奥さんも必死に捜して・・　もしかしたら・・　ショーさん・・」
あ　また涙
「死んじまうんじゃねえかって」
やべえ　止まんねえよ
「俺・・　メッチャ・・　メッチャ心配で」
「ダイちゃん」
ショーさんが俺のそばに来て　俺の肩に手ぇ置いて
「最初に会ったとき、言ったろ？　　俺は死ぬことすらできない・・気の小さいヤツなんだよ」
「死ぬことなんかできなくていいよ、生きてて・・くれよ」
「あの、私なにも知らなくて、ショーさんを」
「愛里ちゃん、愛里ちゃんをダシに使ったわけじゃないんだよ、それは信じてくれよ」
「それじゃ、なんで行かなかったんですか？」
「カナちゃんは、自分の生活立て直して、持ってる資格活かしてりっぱにやっててさ、
　俺は・・　ダイちゃんに会うまでは、もうなんにも考えられなくて浮浪者・・」
シヨーさんの声も　ちっと涙声になってて
「ダイちゃんのおかげで、屋根のあるところで、布団で寝られるようになってな、
　ありがたいよ、ダイちゃんは俺の恩人だ、本当にさ」
「だったらさ」
ショーさんの顔見たら　ショーさんの目も真っ赤になってて
「俺がショーさん拾ったんだよな」
「そうだよ」
「だったら、ショーさんは俺のものだ」
「え？」
「俺が拾った大切なショーさんなんだよ」
「ダイ・・ちゃ・・」
「心配かけんなよぉ、ショーさん」
「ごめんな、ダイちゃん・・　ごめん」
「あの」
愛里
「なんで行かなかったんですか？」
「行こうとは思った、思ったんだけどな、気持ちが追っつかないっていうか」
「追いつかないって？」
「三年も離れてて、突然また一緒にっていうのは」

「奥さんのこと、好きなのに？」
「俺はまだ試用期間中だしな、これから先どうなるかわかんないし、それに」
ショーさんが　ちっと下向いて
「気がついたらあそこに行ってたんだよ、俺はここでダイちゃんに助けてもらったなって、
　ここでダイちゃんの会うまでは、どこかで野垂れ死ぬんだろうなって思ってたなって」
「ショーさん、俺に会ったじゃん、もう会ったじゃん」
「二年も浮浪者やってたからな、今のまともな生活に慣れるのにやっとでさ」
ショーさんが情けねえ顔で笑って
「まだ・・　カナちゃんと一緒にとか、正直考えられないんだよ」
「そんでも・・　死なねえよな？」
「死ねるわけないだろ、俺はダイちゃんのものなんだろ？」
「ショー・・さん」
「デートすればいいのに」
「え？」「え？」
「あっ　ごめんなさい」
「愛里、今なんつった？」
「え・・　デート・・すればいいのにって」
「俺とショーさんが？」
「じゃなくて、ショーさんと奥さんが」
「デートなんて歳じゃないよ」
「でも今日、私とカフェで一緒にお茶しておしゃべりしましたよね」
「それは・・」
「カフェに行かなくても、公園！　公園でちょっとおしゃべりするとか」
「公園で？」
ショーさん笑ってっけど
「ショーさんと奥さんが休みの日に、お弁当持って」
「弁当って、俺は少しはメシは作れるようにはなったけど、まだそんなにはな」
「どんなのでも嬉しいです、好きな人が作ってくれるお弁当」
愛里・・
「今まで作ったことないなら、余計に嬉しいと思う」
「愛里ちゃん」
「デートから始めたらどうですか？」
愛里　だよな　デートからさ
「ショーさん、今すぐ一緒に暮らすとかさ、んなこと考えねえでさ、デートすりゃいぃじゃん」
「ダイちゃん？」
「週一でさ」
「週に一度・・」
あれ？　電話　愛里のか
「あ、おかあさんから」

「かあちゃん？」
「なんて言えば・・」
「ショーさん、かあちゃんに、ショーさんここにいるっつってもいい？」
「みんなに心配かけちまったな、言ってくれ」
「愛里」
「はい」
愛里が携帯に出て
「はい、はい、今、三人でおしゃべりしてました、はい、あ、わかりました」
携帯切った
「あの、今、ショーさんの奥さんと」
「え？」
「監督さんとおかあさんが来るそうです」
「そうか、愛里ちゃん、ありがとう」
「え、いえ」
ショーさんが覚悟決めた顔してて
なんか　俺もドキドキしてきた
ピンポーーーン
来た
愛里が玄関に走ってって
ショーさんも立ち上がって　俺もショーさんと一緒に玄関に
愛里がドア開けたら
「たっちゃん」
奥さんが入ってきた　かあちゃんと監督は・・　外か
少しドアが開いてる　かあちゃん聞いてんだな
「よかっ・・」
奥さんがしゃがみ込んで泣いて
「カナちゃん、心配かけてごめんな」
ショーさんもしゃがんで
「私と一緒にいるのが・・　私が嫌いになったなら・・　それでもいい」
「カナちゃん」
「一生会わなくてもいい・・　でも・・　生きてて、死なないで、元気で生きてて」
「カナちゃん、ちがうんだよ、俺がさ」
「あの」
愛里
「ショーさんは、私と、予行練習をしてたんです、結果的にですけど」
「予行練習？」
「奥さんと久しぶりにデートするための」
「私と・・　デート？」
「あと、私も、あの、大一さんと一緒にカフェに行きたかったのに」
へ？

「ずーーっと寝てて、半目で白目で口開けて寝てて」
奥さんが涙で濡れた顔でちっとだけ笑った
「そうですよね？」
「あ、うん、そうなんす、ずーーっと寝ちまってて」
「だから一人で出かけたんですけど、一人でカフェって淋しいから、あの、
　たまたま会った、ていうか、私が歩道から落ちそうになったのを」
「え？　　大丈夫だった？　　ケガは？」
ショーさんの奥さん　こんなときでも
「ショーさんが助けてくれたので」
「ああ・・　よかった」
愛里のこと心配してくれんだな
「それで、私がショーさんに一緒にカフェに行ってって」
愛里　一生懸命　説明しててさ
「頼んじゃって、あの、ごめんなさい」
「いいのよ、そんな、いいの、こんなおじさんとカフェに行ってもらったなんて」
「こんなは余計だろ」
「だって、こんなにきれいな若いお嬢さんがたっちゃんとカフェなんて、ねえ」
「あ、ちょっと待っててください」
愛里がリビングに走ってって　あの小せえ袋持って戻ってきた
「これ、ショーさんが買ったクッキーです」
奥さんの前に差し出した
「たっちゃんが・・　クッキー？」
「奥さんの好きな花のクッキーです」
あ　そうだよ　愛里　すげえ
「私の・・　好きな花？」
「スミレと黄色いパンジーです」
「え・・　そんなこと・・　憶えてたの・・」
奥さんの目からまたポロポロ涙が落ちて　涙流したまま袋からクッキー出して
「わあ・・　きれいなクッキー」
「愛里ちゃんに連れてってもらった店にあっただけでさ」
「言われなくてもわかるわよ、たっちゃんにこんなセンスないもの」
「なんだよそれ」
すげえ　ショーさんと奥さん　息ぴったりのかけ合いになってる
「そのクッキーは、ショーさんが稼いだお金で買ってショーさんが選んだ奥さんの好きな花の」
「アイリさん？」
「あ、はい」
「これは本当はたっちゃんがアイリさんに買ったのよね？」
「え、あ、えっと」
「もらってもいいの？」

「それは、奥さんの好きな花のですから」
「ありがとう」
ショーさんの奥さん　察しがいいな　やっぱ頭いいんだな
「たっちゃん、よかった、無事で」
奥さんが立ち上がって
「それじゃ、私はもう行くから」
「カナちゃん」
ショーさんが　奥さんの手ぇつかんだ
「俺は、まだ、今すぐ一緒に暮らすのは・・」
「もういいの」
「いや、いいのじゃないんだよ」
「なに？」
「俺と・・　デートしてくれませんか」
「ハ？」
「日曜日は俺は休みで、カナちゃんも休みだろ？」
「うん、そう、休み」
「だったら、毎週日曜日、俺とデートしてくれませんか」
奥さんがショーさんの顔ジーッと見てて
「カナちゃん？」
「相変わらずデートに誘うのがヘッタクソなんだから」
「それは、久しぶりで」
「昔もそうだったわよ、棒読みみたいな言い方で」
「棒読みってさ」
この二人は　もう　大丈夫だな
「あ、ごめんなさい、なんか」
「いえ」
「アイリさん、大一さん、たっちゃんのこと、これからもよろしくお願いします」
「あ、おいっす」「は・・い」
「私とたっちゃんは、来週からデートします」
「マジッすか？」「わあ」
「大昔にして以来だから、どうなるか不安で胸がいっぱいだけど」
「不安ってなんだよ」
「初めてのデートのときガッチガチだったじゃない」
「それはさ」
「それじゃ、いろいろありがとうございます」
「あ、や、」「いえ」
奥さんがたっちゃんの方見て
「私は今日はこれで帰るから」
「送ってくよ」
「逆方向でしょ」

「いいよ、送ってく」
「ここからたっちゃんのいる寮まで時間かかるじゃない」
「大丈夫だよ」
愛里が　俺の袖引っ張った　なに？
「なんか」
俺の耳元で　小せえ声で
「私とあなたみたいな会話ですね」
俺はわかるよ　そんだけ大切でさ　ぜってえ守りてえんだよ
「それじゃ、失礼します」
「ダイちゃん、愛里ちゃん、いろいろありがとう」
「ショーさん、またな」
ショーさんが笑顔で頷いて　よかった
ドアが閉まった
「愛里」
愛里のこと抱きしめて
「ありがとう、愛里」
「私、何も知らなくて」
「いいんだよ、よかったんだよ」
かあちゃんが言ったとおり　愛里は知らねえままだったからよかったんだな
「そう言えばっていうカンジがあって」
「そう言えば？」
「私のこと助けてくれたときのショーさん、目が真っ赤で」
え？
「あれ？ 泣いてた？ みたいな」
マジか
「ダイちゃんにここで会ったって言ってたときの顔が、なんていうか・・
　ママが更年期症状のウツっぽくなったときの顔みたいで」
「更年期？」
「男の人にも更年期あるの？ って一瞬思ったんですけど、このまま一人にってどうなのって」
愛里・・　すげえ
「だから、あなたが寝坊して一人でカフェに行かなきゃで、淋しいから一緒にって」
愛里の感覚って　すげえな　メッチャ鋭いっつうか
「カフェで楽しかったのは本当だけど」
「そっか」
「あなたが寝坊してよかったかも」
「俺的には一緒に行きたかったけどさ」
「あそこはあなたには合わないです」
「んなさあ」
「その辺の公園でお弁当がいいです」

「そっか」
「ていうか、学校の中庭でお弁当でいいです」
「そっか」
愛里のくちびるに　ん？
「花の匂いする」
「ローズティー飲んできたから」
「そっか」
フラワーカフェ　俺は行けなかったけど
俺には合わねえって言われたけど
行きたかったなあっ　愛里とデートしたかったあっ

救急搬送

俺ととうちゃんは　今　おんなし秋物の服着せられて
シンシンおじちゃんの店のソファに座ってる
ついでにまたおんなし髪型にされた
シンシンおじちゃんとこ行くって聞かされたのはゆうべでさ
いつものことだけど
愛里も終わって　メッチャきれいだ　かあちゃんが座ってる椅子の隣りにいっけど
かあちゃんが　愛里が 9 月 13 日に作ってくれた花の写真をシンシンおじちゃんに見せてる
「アイリ〜ン、そうなのよ、ワタシは花言葉もしっかり調べて厳選したの」
「花屋に頼んだだけでしょ」
「フラワーアーティストよ、しかもフランスで 10 年やってきた子よ」
「やっぱりフランスですか？」
「アイリン、わかる？　すごいわあ」
「なんか華道のお花みたいなカンジもあって」
「この子、怖い、そうなのそうなのよ、あの日もね、こ〜んなシルクのリボンがかかった」
「シンシン、ハサミ持ちながらって」
「当たったら避ければいいでしょ、箱から出したのにね、ミサトッチったら、
　ぜーーんぜんこっちを見ないの、車の窓の外ばっかり見てるのよぉ」
「知らない人はいっぱいいるし機材もあるしでなにごと？ って思ったのよ」
「それでね、ほら、あんたの番よってブーケ渡しても見ないの」
「持たされた記憶がない」
「持ってるじゃない！　写真見なさいよ！」
「ブーケとヘアスタイルの雰囲気がピッタリでステキですよね」
「アイリン、でしょ？　アイリンのときにもワタシがプロデュースしてあげる」
「え？」
愛里んとき？　つうことは　俺と愛里の　マジかあ
「愛里さん、やめた方がいいわよ、また撮影班や機材用意されちゃうから」
「え・・　それは・・」
「やっだあ、そんなことしないわよぉ」
「それに、愛里さんが結婚する頃にはシンシンはヨボヨボのおじいさんでしょ」
「ひっどーーい！　ヨボヨボじゃないわよ、脂がのる最高の歳よ」
「お腹の脂？」
「え？　ワタシ太ってる？ 太ってないわよ、アイリン、ワタシ太ってる？」

「私はまだ会って二回目なので」
「太ってないわよ、太ってないの」
「ほら、カット終わったら早くシャンプーして」
「もうっ　ワタシに指示する？　　こっちよ、アイリンも来る？」
「はい」
愛里　シャンプーするとこに行っちまった
「イタッ」
かあちゃん？
「ミサトッチ、ワタシなにかした？」
「ちがうのよ、最近腰がね」
「やっだあ、ぎっくり？　　歳ねえ」
「ちがうわよ、たまに右のこの辺が痛くなるだけ」
「歳とるとねえ、あちこち痛くなるわよねえ」
「シンシンは私より年上でしょ、一緒にしないで」
相変わらずのやり取りだな
とうちゃん・・は　俺の隣りで睡魔にヤラレかけてる　つうかもうヤラレてんな
俺もなんか・・　眠む・・
遠くで　ドイヤーの音　シンシンおじちゃんと・・かあちゃん・・の・・話し・・声

「ミサトッチ！」
「おかあさん！」
え？
目ぇ開けたら　かあちゃんが椅子の下に
とうちゃんがすげえ勢いでそばに走ってった　俺も走ってって
「美里」
とうちゃんが抱き上げて　かあちゃん　すげえ苦しそうな顔してっけど
「カズッチ、ソファにソファ」
「あっ　Shin 様、タオルください！」
「タオル？」
「血が」
血？　　あっ　かあちゃんのスカートのケツんとこに　不正出血か？
「美里、美里」
かあちゃんが苦しそうな顔したまんま　手で大丈夫みてえにしてっけど
「ミサトッチ、救急車呼ぶ？」
かあちゃんは首振ってっけど
「カズ・・オ・・あそこ・・産婦人科・・」
あそこっつうのは　俺やねえちゃん生んだ病院だよな
「電話すっから」
とうちゃんがかあちゃんの手ぇ離して携帯出してっから
とうちゃんほんとはかあちゃんの手ぇにぎっててえよな

「とうちゃん、俺が話すから、かあちゃんの傍にいてよ」
「あ、うん」
「森下美里の家族です」
　「診察券番号はわかりますか？」
「とうちゃん、かあちゃんの診察券ある？」
とうちゃんが片手でかあちゃんのバッグから財布出して診察券出して俺に渡した
「107 です」
「森下美里さんですね、どうされました？」
「急に痛がって倒れて、出血もしてます」
「少々お待ちください」
あれ？　なんか　遠くから　救急車の　サイレン？　近づいてきてね？
「ワタシ・・　救急車呼んじゃったのぉ」
シンシンおじちゃん　かあちゃん呼ばなくていいっつったのに
「お待たせしました」
「あの、救急車呼んでしまったんですけど」
「それでは、救急隊員に当院の診察券を見せてください」
「はい」
「こちらでお待ちしています」
「ありがとうございます」
「とうちゃん、救急隊員に診察券見せれば、そこに運んでくれるってさ」
「そっか、わかった」
それから・・
かあちゃんは、到着した救急隊員の担架に乗せられて
一人だけ付き添えるっつうんで、とうちゃんが一緒に行って
俺は　俺の腕つかんだまま震えてる愛里の肩抱いて　ボーッと見てて
「ダイチも早く行って！」
「あ、うん、あ！　ここの支払い」
「そんなものどうでもいいから早く！」
「うん、愛里行こう」
「は、はい」
通りに出た
どうする？　電車は・・　タクシーだ
手ぇあげて　つかまえて
「愛里、乗って」
「え、はい」
運転手さんに産婦人科の住所言って　ナビに入力してる時間も
愛里が真っ青な顔してる
「愛里、大丈夫だよ」
愛里が俺の顔見上げて　泣きそうな顔で
「ほんとに？」

「大丈夫だ、かあちゃんは死なねえ、ぜってえ死なねえ」
愛里に言ってんのか俺に言い聞かせてんのか　わかんねえけど
「大丈夫だよ」
「はい」
俺にギュッて抱きついてきた愛里の肩　俺も強く抱いて
病院に向かった

病院着いて
愛里の手ぇにぎって受付に
「救急車で運ばれた森下美里の家族です」
「森下さんは今検査中です」
「父も一緒に来たんですけど」
「検査室の控室に入っていらっしゃいます」
「そう・・ですか」
とうちゃんがそばにいんなら　まずは・・な
「検査が終わりましたらお呼びしますので、そちらにかけてお待ちください」
「はい」
愛里と二人で　待合室の椅子に座って
「おかあさん・・　ゆうべも」
「ん？　　なに？」
「私と話してるとき、右の下腹部を押さえてて・・」
右の・・　ねえちゃんを生んだとき切れ目がどうのって　右の卵管って聞いた気ぃする
まさか・・　また切れたんか？
「私がどうしたんですか？ って聞いたら、排卵痛だと思うって」
排卵痛？　　かあちゃんそんなんあったか？
「私は・・　排卵痛ってよくわからなくて」
愛里が話しながら震えてて　俺は肩抱いて
「私が・・　もっと気をつけていれば」
「愛里は悪くねえよ、なんも悪くねえよ」
「でも・・」
「大丈夫だよ、愛里、大丈夫だ」
「そう・・ですよね、大丈夫ですよね」
「おう、大丈夫だよ」
「森下さーん」
あ　呼ばれた
受付に行くと
「305 号室に運ばれましたので、そちらのエレベーターで行ってください」
「ありがとうございます」
どうだったんだ？
「愛里、行こう」

「はい」
愛里と二人でエレベーター乗った

305　ここか
扉開けたら
かあちゃんが　点滴されてて　目ぇ閉じてて　眠ってんのか？
とうちゃんが　かあちゃんの手ぇにぎってて
「とうちゃん」
とうちゃんが　ゆっくり顔あげて　ボーッとした目で俺を見てて
「とうちゃん？」
「あ、ダイチ」
「どう・・なの？」
「今、先生来っから」
「そっか」
かあちゃん　今は苦しそうな顔してねえけど
「森下さん」
あ　先生　わりと若けえな
「息子さん？」
「はい」
「うちの父が取り上げた」
この先生のお父さんがそんときの先生か
「こちらは・・　娘さん？」
「俺のカノジョで、家族みてえなもんなんで」
「ご家族に検査結果を説明します」
「はい」
んっと
「愛里、かあちゃんのそばにいてやってくれ」
「はい」
「とうちゃん、行こう」
とうちゃんが　かあちゃんの寝顔見て　そんで　俺と一緒に病室出た

「エコー検査の結果」
心臓んとこ　ダクダクしてる
「卵巣嚢腫が見られます」
卵巣嚢腫？
「森下美里さんは、7月に検査に来られて、そのときは1cm程度で」
7月に？　　あ、不正出血して貧血起こしたとき
そんでもあんとき　なんともねえって
「経過観察ということでしたが、先ほどの検査では5cmほどに肥大していて」
「先生、卵巣嚢腫っつうのは、命には・・」

「明日精密検査をするので、その結果が出るまでは断言はできませんが」
え？
「卵巣嚢腫だった場合、良性なので手術で除去すれば問題はないでしょう」
手術？　手術って　あの・・
「先生、手術で、卵巣も取るっつうことですか？」
「できれば温存した方がいいので嚢腫だけ除去したいとは思っています」
あ・・　よかった
「森下さんは出血していますから、これが卵巣嚢腫からなのか卵管のしこりからなのかは」
卵管のしこり？
「明日検査してみないとわかりませんが」
「あの、卵管のしこりっつうのは？」
「森下さんは当院で最初の出産したときに、卵管に亀裂ができて手術してますから」
「それが・・　しこりに？」
「それほど深刻なものではないですが、嚢腫の肥大で癒着した部分から出血したのか、　それは明日検査するまでは明言はできません」
かあちゃん・・　んな　んな状態だったんかよ
「エコーで見る限りは体内出血はないので、今のところは点滴で炎症を抑えています」
「あの、なんでかあちゃ、母は急に、その、大きくなっちまったんですか？」
「卵巣嚢腫は数ヵ月で急に肥大することはよくあることなんです」
よくある・・
「原因はまあ様々ですが、女性器というのはデリケートなので、ばい菌が入ったり」
ばい菌？
「あ、あの」
とうちゃん
「ばいきんっつうのは、あの、汚ねえ・・」
「そうですね、汚い手で触ったり、不潔な」
「俺だ！」
え、とうちゃん？
「俺がそういう・・こと」
「不潔な手で？」
「風呂は入ってんだけどよ」
ん・・っと　とうちゃんは　その・・　なんつうか
「ご主人、これは一般論で、それが原因だとは限りませんので」
「俺が、んなことしなかったらよ」
俺が隣りにいること忘れてるよ
「それが直接の原因ではないと思いますよ」
「そっか？　そんでも、んなことしねえ方がよ」
「嚢腫だった場合、除去すれば、ふつうに」
先生が　チラッと俺を見た

「夫婦生活はできますから」
お　おぉぉぉ・・・　なんつうか・・　親のこういうこと・・
「あとは、ストレスや疲れなどで免疫力が落ちて」
ストレスや疲れ？　　あ！
「かあちゃん、二日がかりで俺の衣装縫ったんすよ」
「い・・しょう？」
「んっと」
写真ねえな　愛里に送ってもらおう
『愛里　かあちゃんが作った俺の衣装の写真すぐ送ってほしい』送信
ピコン　来た　これだ　家で着たときの写真
「この衣装っす」
先生に携帯見せて
「これ、メッチャ大変だったっつって」
先生が俺の顔と携帯交互に見てっけど
「疲れちまったんじゃねえすかね？」
「美里さんは、ホルモンのバランスが不安定になる年齢ですので」
ホルモン？
「嚢腫は、これといった原因はわかりませんが、様々な要因で肥大しますから」
「そう・・すか」
「とにかく今晩は様子を見て、明日詳しく検査してから処置方法を決めましょう」
「手術っつうことですか？」
「まあ、そうですね」
「血は？」
とうちゃん
「しゅじゅちゅんとき」
うまく言えてねえ
「血ぃ、俺は美里とおんなしだからよ」
あ　そうだよ
「俺もかあちゃ、母と同じ O 型の Rh マイナスなんで」
「輸血は必要ないとは思いますが、もしものときの情報としてはありがたいです」
「いっくらでも取ってくれよ、俺の血、いっくらでもよ」
「あ・・　まあ、そのときはそのときで、また」
先生が立ち上がった
「そういうことですので、明日の午前中に検査ということで」
「あ、お願いします」
「それでは」
先生が部屋出てって
なんか　ん・・っと
あ　とうちゃんが立ちあがった
「とうちゃん？」

「美里んとこ行かねえと」
だよな　ここで座っててもな
「俺も行くよ」
とうちゃんと二人で　かあちゃんの病室に向かった
とうちゃん走ってっけど

入院の準備

病室に戻ったら
かあちゃんはまだ眠ってて
愛里が顔あげて
「あの・・」
俺のそばに来た
「卵巣嚢腫じゃねえかってさ」
「卵巣嚢腫？」
「ハッキリしたことは明日検査しねえとだけど、卵巣嚢腫なら手術すれば大丈夫だってさ」
「手術・・」
「愛里、大丈夫だよ、輸血とかは必要ねえかもっつってたけど」
「輸血？」
「もしもんときは、俺ととうちゃんがいっからさ」
「私も」
「え？」
「私も同じ血液型ですから、私もいますから、あの」
「愛里・・　あり・・がと」
「これ、看護師さんが持ってきたんですけど」
愛里が俺に　入院に必要な物・・か
「おかあさんがずっと眠ったままだから、看護師さんに聞いたんです」
え？
「薬に睡眠薬が入ってるんですかって、そしたら、点滴で炎症が抑えられて、
　えっと、疲れとかがドッと出て眠ってるだけだから大丈夫って」
「そっか、愛里、ありがとな」
「え、いえ」
とうちゃんはもうかあちゃんのそばに座ってて
んっと　俺はどうすっかな
「あの、私、先に帰ります」
「あ、ちょ、愛里、俺も」
この入院に必要な物持ってこねえとな
「とうちゃん、俺、一回家に帰って必要な物持ってくっから」
「そっか、ありがとな」
かあちゃん　まだ眠ってる

病院の玄関出たら　愛里が振り返って病院を見上げた
「ここであなたが生まれたんですね」
「うん、何年か前に建て替えたみてえなこと、前にかあちゃん言ってたけど」
「お姉さんとあなたを生んで、今も通ってるってことは」
愛里が俺の方見て
「きっと腕のいいお医者さんなんですね」
「馴染みだからじゃね」
「あのおかあさんがここって言ったから、絶対にここで大丈夫です」
愛里　俺を安心させてくれようとしてんのか
「だな、あのかあちゃんがここっつったんだもんな」
「はい」
愛里　ありがとう　俺は　愛里が今いてくれて　マジよかった
愛里の手ぇにぎって　駅に向かった

マンションのエレベーターに乗って二階のボタン押そうとしたら
「私も手伝います」
愛里が五階のボタン押した
「手伝うって？」
「入院に必要なもの」
「そんなんいいよ、俺がやっから、愛里は少し休んでさ」
「生理ショーツとふつうのショーツの違いわかりますか？」
「それは・・　とうちゃんがやってて」
「ほら」
ほらって　まあ・・　そうだけど
「そんじゃ、愛里、お願いしやす」
「はい」
愛里　ありがとう
部屋着いて・・
愛里がベッドルームのかあちゃんのクローゼットからいろいろ出してて
俺は・・　ティッシュと？　タオルか　それとスリッパ・・は　ここだ
とうちゃんが入院してたとき、かあちゃんが病院に持ってって履いてたやつ
「ポーチありますか？」
「ぽーち？」
「化粧品入れるこれくらいの」
「入院すっから化粧はしねえんじゃね？」
「じゃなくて、化粧水とか乳液とか」
「へ？」
「ここに書いてますよね」
あ　書いてある
「あとは、おかあさんメイクしてたからクレンジングも」

ん・・と？
「おかあさんのドレッサーも見ていいですか？」
「どっこでもなんでも見ていいっす」
愛里がまたベッドルームに入ってった
すげえな　俺じゃぜってえわかんねえよ
愛里がふたつ袋みてえの持ってきた
「おかあさんさすがです」
え？
「基礎化粧品が入ったポーチとバスグッズが入ったポーチがありました」
「あ、そ、そっか」
「これが生理ショーツで、えっと、トイレの棚を見ても」
「全然いいからどこでも見ていいっす」
愛里がトイレん中入って
「多い日用のナプキンがない」
かあちゃんどっちかっつうとタンポン派だからな
「買ってきます」
「俺買ってくるよ」
「ナプキンを？」
「慣れてっから、ねえちゃんに買いに行かされてたからさ」
「それじゃ・・　病院に行く途中で買って行けばいいかも」
「だな、そうする」
「あとは・・　お箸とスプーンとストロー」
「ストローも買ってくから」
「はい、えっと・・　ここに下着とかパジャマとカーディガンも入ってます」
「愛里、ありがとう」
「いえ、それじゃ、私は部屋に戻ります」
「愛里」
俺は　抱きしめてて
「ちっとだけ」
愛里の腕が　俺の背中に
「大丈夫です」
え？
「おかあさんは大丈夫」
愛里　んな優しい声でさ
「そんじゃ、いってくっから」
「はい、いってらっしゃ、え、私も出ますから」
「そっか」
エレベーターに一緒に乗って
二階で愛里が下りて
「いってらっしゃい」

その顔見ると　なんかホッとして
「いってきます」
エレベーターのドアが閉まっ
「あ！　　飲み物を」
閉まりかけたドア　手で押さえた
「飲み物？」
「お水とか」
「わかった、買ってく」
「はい、それじゃ」
「愛里」
「早く」
「あ、おう」
手ぇ離したら　ドアが閉まった

病室の扉開けたら
かあちゃんがベッドの上で座ってた　つうか上半身起こしてた
「かあちゃん」
「生きてるわよ」
「な、んな、ったりめえじゃん、んな、死ぬような病気じゃねえんだからさ」
「死ぬほど痛かったけどね」
「あ・・　うん」
「荷物持ってきてくれたの？」
「うん、愛里が、ほぼ愛里が用意してくれた」
「愛里さんが？」
「んっと、なんだっけな、かあちゃん化粧してっからなんとかっつって」
「見せて」
かあちゃんに荷物ん中見せて
「愛里さんすごい！　　これを見つけてくれたのね」
そうなんか　やっぱそうなんだ
あれ？
「とうちゃんは？」
「私のスカート洗いに行ってる」
「スカート？」
「血がついてるから洗ってきてって言ったのよ」
「んなこと今やらせねえでもいいじゃん」
「そうでもしないと、あの人トイレにも行かないわよ」
「あ・・」
だな　とうちゃん　ずっとかあちゃんのそばにいるもんな
「さっき若先生が来て説明してくれたわ」
「そっか」

「明日検査して、おそらくあさって手術」
「うん、なんか・・　そうみてえだな」
「ねえ、充電器持ってきてくれた？」
「充電器？」
「携帯の」
「え？　や、んっと」
「もうっ　気が利かないんだから」
あれ？　この下着が入ってる奥の・・　コードって
「かあちゃん！　ある！　愛里が入れてくれてた」
「愛里さん、本当に気が利いて、すごいわ」
ベッドの横のテーブルんとこのコンセントに差し込んで
置いてあった携帯に挿して
「できたよ」
「ダイチ、カズオのこと連れて帰ってくれる？」
「面会時間終わったら帰んだろ」
「あの人帰らない」
「ここって泊まれんの？」
「お産のときはね、今は産婦さん用の病室にはそういう設備があるみたいだけど」
「この部屋、なんもねえじゃん、ソファもさ」
「お忘れですか」
「なに？」
「カズオはどこででも寝れる人」
「あ・・」
「ヒトミのときも床で寝てたから」
「そんでも、とうちゃんがなんつうかな」
「まだ手術もしてないし、明日は検査だけなんだから」
「ダイチ」
あ　とうちゃん
「荷物持ってきてくれたんか」
「あ、うん」
かあちゃんが目で俺に
「と、とうちゃん、一緒に帰ろう」
「なんでだ？」
「んっと、今日はなんもねえし、明日も検査だけだからさ」
「知ってっけどよ」
キョトンとした顔して　どうすりゃいぃんだ？
「美里、血ぃ取れた、看護師さんに洗剤もらってよ、きれいに取れたからよ」
「そう・・　ありがとう」
「ダイチ、これ家持ってて乾かしてくんねえかな」
「と、とうちゃん持ってって乾かせばいぃんじゃね？」

「俺はここにいっからよ」
な・・んて言えば・・
「カズオ、今日はもう帰って」
あ　とうちゃんが　フラレたみてえな顔になっちまった
「今日は何もないから、家に帰ってよ」
「イヤだ」
とうちゃん　小せえ声で静かに抵抗してるよ
「ここにいたってやること何もないわよ」
「なんかあっかもしんねえじゃん」
「何かあったら看護師さん呼ぶから」
「なんかあったら？　ねーちゃん、やっぱ俺、ここにいる」
脳内時間も巻き戻っちまってるよ
「夕食だって私の分しか出ないわよ」
「俺は食わねえでも平気だからよ」
だよな
「こうなると言うこときかないから、こいつは」
こいつって　かあちゃんさ
「ダイチ」
「あ？ ん？ なに？」
「カズオにおにぎりでも作って持ってきてくれる？」
かあちゃんが　折れた
「あ、わかった」
「俺のメシなんかいいからよ、ダイチはアイリちゃんの世話してあげねえとよ」
「あと、私のベッドの上の毛布も」
「わかった」
「俺のことはいいからよ」
「私がよくないの！　そこにホームレスみたいにうずくまって寝られたら　イタッ」」
「美里！」「かあちゃん」
「大丈夫、ちょっと響いただけ」
「美里、ベッド平らにすっか？」
かあちゃんが目ぇつぶって　ため息ついた
「何か飲みたい」
「水持ってくっか？」
水？　あ
「かあちゃん、これ、愛里が買ってけっつって」
ミネラルウォーターのボトル　袋から出して
「愛里さんがいてくれてよかったわ、この病院売店がないから」
とうちゃんに渡したら　コップに少し入れて　かあちゃんの前に出して
「ダイチ、もういいわよ」
かあちゃんが水飲みながらそう言って

「そんじゃ、あとでとうちゃんの握りメシ持ってくっから」
「俺のことは・・」
「とうちゃん、俺にもなんかやらせてくれよ」
「そっか？　そんじゃ・・　悪りぃな」
「悪くねえよ、そんじゃ、かあちゃん、あとでまた来る」
「はいはい」
扉閉めて
とうちゃん　どんだけかあちゃんが心配なんだよ　メッチャ気持ちわかるよぉ
俺だってもし愛里が　あ　晩メシ何にすっかな　帰りに買い出ししてかねえと
そんでも　かあちゃん調子戻ってて　よかったあ

晩メシ

買い出ししして　家戻ったら　あれ？　　鍵開いてる
ドア開けたら　愛里のサンダル　めずらしいな　一人で入ってるって
便所のドア開いてっけど　なんか音がすんな　どうしたんかな
そっと覗いたら　愛里が背中向けてて
「愛里」
「ギャーーーー！」
「あ、ごめん」
「やだもう、ビックリしたあ」
「なにやってんの？」
「トイレ掃除です」
トイレ掃除？
「私の部屋はもうやりました、あとはこっちで、もう終わるけど」
「んっと、なんで？」
「私にできることってこれくらいだから」
これくれえって
「なんで愛里が俺んとこの便所まで掃除してんの？」
「トイレ掃除を私が担当すれば、少しは楽かなって」
「楽？　　だれが？」
「あなたやおとうさん」
え？
「本格的な掃除は上手にできないし、クイックルワイパーはかけられるけど、
　せめてトイレ掃除くらい私がしたら、おかあさんの看病するのにちょっとだけでも」
愛里
「あと、私の洗濯は私ができます、それと、まあ、あなたやおとうさんの洗濯も」
「愛里」
抱きしめてて
「ちょ、私、ゴム手袋してるから」
「んなこと・・　んなこと心配しねえでいいよ」
「トイレ掃除したゴム手袋ですよ？」
「じゃねえよ、掃除とか洗濯とかさ」
「ゴム手袋外させて、手も洗いたいから」
「あ、おう」
腕離すと　愛里がゴム手外して　バスルームで手ぇ洗って　出てきた

「おかあさん、どうでしたか？」
「目ぇ覚ましてた」
「ハァァァよかった」
「愛里がいろいろ用意してくれて、すげえ喜んでた」
「私は見つけただけだから」
「充電器もさ」
「え？　充電器入れてました？」
「入ってたよ」
「無意識で入れたんだと思う」
「無意識？」
「私もちょっとテンパッてたから」
「メッチャ冷静にいろんなもの用意してくれたじゃん」
「冷静じゃなかったですけど」
「マジ？」
「今は落ち着きました」
そんでもあんなにちゃんと用意してくれたなんてさ
「さっき調べたんですけど」
調べた？
「卵巣嚢腫にはルイボスティーとかジャスミンティーがいいって」
「そっか」
「コンビニで買って冷蔵庫に入れておきました」
え？
「あ、でも、あんまり冷たいのは飲まない方がいいって」
わざわざ・・
「おとうさんは？」
「あ、とうちゃんは病室に泊るってさ」
「そうですか、え？　どこに？　折りたたみベッドとか？」
「床」
「ゆ・・か」
「とうちゃんどこでも寝れっから」
「そう・・かもしれないけど」
「毛布持ってくから」
「毛布・・だけ？」
「かあちゃんが毛布持ってこいってさ」
愛里が　なんか考えてっけど
「愛里、晩メシさ」
「あ！」
「え？ なに？ どした？」
「レジャーシート」
「レジャーシート？」

「運動会のとき敷いたあれも持って行けばいいんじゃないですか？」
「あ・・　まあ・・」
「病院の床って冷たいからあれを敷いて毛布をかければいいかも」
そうなると・・　とうちゃん　かあちゃんが退院するまで泊まんだろうな
そんなんなくても泊まるよな
「わかった、あれも持ってく」
「この説明書を読んだんですけど」
病院からもらったやつか
「付き添い食があって、有料ですけど、でもこれってお産のときだけかなあ」
「とうちゃんには握りメシ作って持ってくから」
「そうですね、あなたのお弁当なら、おとうさん喜ぶから」
弁当？　弁当・・作った方がいぃんかな　そんでも、まあそれは
「私の食事は気にしないでください」
「気にしないでっつうのは？」
「私は適当に自分でなんとかするので」
「なんとかするって？」
「コンビニとか、どこかで」
「んな、愛里のメシは俺が作るよ」
「緊急事態だから」
「そんでもメシは食うだろ」
「だから、私のことは気にしないでって」
「俺もメシ食うしさ」
「そう・・だけど」
「それに、俺、愛里がいねえとメシ作んねえよ」
「え、なんで？」
「めんどいじゃん、自分の分だけってさ」
「そう・・かもしれないけど」
「マジで」
「私に気を使わせないように・・とかだったら」
「愛里に弁当作るようになるまで、昼メシは購買で売れ残ったパンもらったりさ」
「えぇぇぇ」
「愛里がいてくれっから、俺もメシ作る気になるし食う気になんだよ」
「そうですか」
「イワシ安かったから、愛里の好きなイワシの蒲焼き俺風のやつ」
「え・・っと」
あれ？
「他のが食いてえ？」
「じゃなくて、あなたがごはんを作ってる間、私は何をすればいいかなって」
「愛里はなんもしねえでいいよ」
「でも、なにか」

「愛里は好きなことしてればいいからさ」
「好きなことって言われても、何も思い浮かばない」
「んっと、そんじゃ・・」
「あ！　洗濯します」
「そっか」
「バスルーム、入ってもいいですよね」
「あ？　え？　俺んとこの？」
「はい、洗濯機の横のカゴに洗濯物があったから」
「んなことしねえでいいよ」
「洗濯くらいはできますけど」
「それは、わかってっけど」
「それじゃ」
「あっ　ちょ、俺ととうちゃんのパ、パンツあんだけど」
「大丈夫です」
「や、それは、なんつうか」
「パパのパンツは見たことあるから」
パパの・・
あっ　行っちまった
愛里が・・　俺のパンツを・・　ダメだ考えるな　イワシさばかねえと
その前に米とがねえとだな

米といで炊飯ボタン押して　イワシさばいてたら　愛里が戻ってきた
なんか　愛里が俺のパンツ・・
「あの」
愛里の顔見らんなくて　イワシさばきながら
「ど・・どした？」
「どうして・・　あなたとおとうさんのパンツは・・」
俺ととうちゃんの　パンツ？
「あんなに擦り切れててゴムがビヨンビヨンなんですか？」
「ずっと履いてっから」
「ずっと？　ずっと同じのを毎日？」
「や、ちげえから、取っ換えてっから、シャワーした後ちゃんと取っ換えてっから」
「あんなになるまで履く理由は何ですか？」
理由？
「ん・・っと、あんくれえになっと、楽っつうかさ」
「楽？　あれが？」
「なじむっつうか」
「えぇぇぇ」
「え、なんで？　愛里、なに？」
「いいです、私が関与することじゃないから」

「や、愛里、関与してくれよ、なに？」
「もし、もしあのゴムがビロ〜ンてなっちゃってストンて落ちたら」
「ズボン履いてっから落ちねえよ」
「体育のときも、あれなの？」
「体育があるときは新しいの履けって、昔っからかあちゃんに言われてっから」
「今も・・　ああいうカンジの、履いてるんですか？」
「今？　今は・・　あ、出かけるときは新しいの履けって言われてっから」
「そう・・ですか」
「なんで？」
「なんでもないです」
「愛里、なに？　なんかあんならさ」
「やだあ！　血だらけの手でーーー！」
「あ、ごめん、んっと」
「私のことは気にしないで続けてください」
「気になんだろ、俺のパンツで、なんか愛里がドン引いててさ」
「もしも・・　あなたが、おかあさんみたいに救急車で運ばれたとしたら」
「へ？」
「そういうことはない方がいいですけど、でも」
俺が救急車で？
「あの擦り切れてゴムビヨンビヨンのパンツを見られるんですよね、看護師さんや先生に」
「そんときは・・」
「グフッ」
「え、愛里？　笑ってる？」
「だからあ！　血のついた手をこっち向けないで！」
「あ、ごめん」
「私、ジャマですよね」
「んなことねえよ、これ終わったら下味つけて焼くだけだからさ」
「あの、そのまま聞いてください」
「うん、なに？」
「私の部屋のバスルームに、フェイスタオルが 6 枚あったんです」
「そっか、え？」
あっ
「一枚はあなたがもらうって」
「あ、えっと、つけ置きして、そんで」
「だから５枚のはずなのに」
「愛里ごめん、とうちゃんがさ」
「だからっその手をこっちに向けないで！」
「あ、ごめ、あの、とうちゃんが愛里んだっつって持ってっちまってさ」
「ていうことは、あの中のどれかが志田くんのサポーターの・・」

「愛里、マジごめん、俺、とうちゃんから聞いて匂い嗅いでみたんだけどさ」
「匂いを・・　嗅いだ？」
「どれなんかわかんねえんだよ」
「私のフェイスタオルの匂いを・・　全部？」
「嗅いだけど、わかんねえんだよ」
「私のフェイスタオルの匂いを全部嗅いだの？」
「え？　あ、そんでも鼻つけてねえから」
「もういいです、明日でも新しいの買いに行きます」
「まだ使えんじゃん」
「気持ち的にイヤ」
「俺が匂い嗅いだから？」
「どれが志田くんのサポターついたのかわからないからっ」
「そんでもさ、もったいねえじゃん」
「いいんです、どうせあれはママが買ったフェイラーのタオルで」
「ふぇ・・　んと？」
「お花がドンドンドンですっごいピンクで、あれ持ってるのも恥ずかしかったし
「可愛いじゃん」
「すごい」
「え、なに？」
「しゃべりながらでもどんどん作ってくから」
「こんなんいっつもやってっからさ」
なんか　愛里ん家で家政夫してたときみてえだな
二人だけでさ　しゃべりながらメシ作ったり後片付けしたりしてさ
「ごはんが炊けたら、おとうさんにおむすび作ってすぐに持っていかないと」
「愛里のメシ作ってからにすっから」
「面会時間もあるし、おとうさん、おかあさんと一緒に食べたいと思う」
「そんでも、そうすっと愛里のメシが遅くなっちまうからさ」
「私は大丈夫です、勉強してます」
「そっか？」
「はい」
「そんじゃ、そうするよ」

炊きあがった白メシにぎって　愛里はそばにいてそれ見てて
毛布とレジャーシートも持って
愛里と一緒に部屋を出た

愛里の決意

病室の扉開けたら
「あれ？　かあちゃんは？」
「風呂入りに行ってる」
「そっか、とうちゃん、これ、握りメシ」
「ありがとな」
「そんで、毛布とレジャーシート」
「これ・・　運動会んときの？」
「これ敷いて寝れば寒くねえだろうからって愛里がさ」
「俺はこんなん敷かなくてもよ」
「愛里が心配すっから敷いてくれよ」
「そっか？　そんじゃ、ありがとな」
「あと、これも愛里がかあちゃんにって、お茶」
「そっか、アイリちゃんは優しいな」
「うん」
「ダイチ、ちっとだけ、まだここにいてくんねえかな」
「いいよ、どした？」
「便所行きてえからよ」
「あ、おう、いいよ、ゆっくりやってきてよ」
「ウンコじゃねえよ、そんでもよ、男便所は下にあっからよ」
「そっか、そんじゃ早く行ってこねえと漏れちまうよ」
「悪りぃな」
とうちゃんが出てった
かあちゃんが言ったとおりだな　マジでシッコも行かねえんだな
「あら、ダイチ」
「かあちゃん、風呂入ったって？」
「シャワーよ、これ、持って帰って洗ってくれる？」
「おう」
タオルと着替えか　お茶入れてきた袋に入れて
「愛里さんがバスセットの入ったポーチを入れてくれてたから助かったわ」
あ、そうだ
「かあちゃん、ルイボスティーかジャスミンティー飲む？」
「そんなの買ってきてくれたの？」
「愛里が、卵巣嚢腫にはそれがいいって調べて買ってきてくれてさ」

「愛里さんたら、涙出そうよ」
だよな　かあちゃん
「こんなことになって申し訳ないけど、愛里さんがいてくれてよかったわ」
「愛里に伝えとくよ」
「そうして、え・・　なに持ってきたの？」
「毛布とレジャーシート」
「レジャーシートなんか持ってきたら、カズオここに住みついちゃうわよ」
「そんでも愛里が床は冷てえからって」
「そうね、まあそうよ、あってもなくても退院まで住みつきそうだもの」
「とうちゃんて、俺やねえちゃん生んだときもずっと病院で寝泊まりしてたんか」
「ヒトミのときはね、私が、お風呂入ってきなさい！ って怒ったら入ってきたけどね、
　あんたのときは、ヒトミがいたし幼稚園もあったから、それでもヒトミもかわいそうに、
　幼稚園から帰ると夕食までずーーっとここにいたわよ」
「とうちゃん心配なんだよ」
「あんたも早く帰りなさい、愛里さん一人にしてるんでしょ」
「うん、そんでもとうちゃん戻って来るまでは」
「トイレ？」
「男便所は下にっきゃねえからって」
「我慢しないで行きたいときに行けばいいのに」
「とうちゃん心配してんだって、かあちゃんがあんな声も出ねえくれえ痛がっててさ」
「今は大丈夫よ、ほら、点滴も終わったし」
「かもしんねえけど」
「でもね、手術が終わってからが心配」
え・・
「んな、大丈夫だって、きっと腕のいい先生だからさ」
「そっちは心配してないわよ、カズオが心配なの」
「あ・・」
「あんたを生んだときも、先生や看護師さんたちが、奥様は大丈夫ですからって言っても、
　すっごい顔して私のそばに座ってて動かないのよ」
「ねえちゃんは？」
「その日はジャネットが預かってくれたの」
ジャネット？　　ああ、とうちゃんのママ友の石田さんか
「次の日、ダイチが病室に連れてこられて、それでやっと安心したのよ」
そうなんか
「ダイチ、ありがとな」
とうちゃん戻ってきた
「そんじゃ、俺帰るよ」
「ダイチ、明日は来なくていいわよ」
「なんで？」

「午前中は検査だし、手術したとしてもあさって、来ても何もすることないもの」
「そんでも、洗濯物とかさ」
「俺がやっからよ」
「そんじゃ、あさって、手術んとき来る」
「あんたは学校でしょ」
「そんでもさ」
「あんたが今やるべきことは勉強よ、手術した私の隣りでボーッと座ってて何ができるのよ」
ボーッとって・・
「愛里さんの夕食はもう終わったの？」
「あ、まだ」
「もうなにやってるの、早く帰って作ってあげなさいよ」
「わかってるよ、そんじゃ」
なんかさ　かあちゃんが入院してるって　なんかな
速く帰って愛里に晩メシ作ろう

愛里と二人きりの晩メシ
なんだ？　　なんかドキドキしてんだけど
「どうしたんですか？」
「え？　　あ、や、なんもねえよ」
「おかあさんのことが心配・・ですよね」
「かあちゃんは元気だったからさ」
「元気って、検査はまだでしょ？」
「そんでもシャワーできてたし」
「Shin 様のところで、椅子から崩れ落ちるみたいになったときは・・」
「あんときは俺も驚いたけどさ」
「あのときのあなた、すごく冷静に対処してて」
「あんま憶えてねえんだよな」
「しゃべり方もふつうで」
「フツー？　　え？　　フツーって？」
「なんていうか・・　あ、ママとしゃべるときみたいな」
「そう・・だったっけ？」
「私がパニクッちゃってて、あなたは大丈夫って言ってくれて」
「愛里メッチャ心配してくれててさ」
「頼もしかったです」
「えっ　や、んな・・」
ストレートに褒められっと照れるっつうか
「志田くんのときも・・　あ！　　明日タオル買いに行かなきゃ」
「俺も一緒に行く」
「あなたはおかあさんのところに行ってください」

「かあちゃん、来なくていいっつったからさ」
「それは気を使ってくれて」
「俺に？」
「あなたにもですけど、私を一人にしてお・・・　ウ・・」
「愛里、どした？」
愛里のそばに
「おかあさん・・自分が具合悪いときに・・私の・・こと・・」
「愛里、かあちゃんマジで元気だったからさ」
愛里のこと抱きしめて
「明日・・おかあさんのところに行ってください」
「愛里、かあちゃんはさ」
「私だったら・・あなたにそばにいてほしいと思うから」
愛里だったら？
「俺に、そばにいてほしい？」
「はい」
「そんじゃそばにいる」
「はい」
「愛里のそばにいる」
「え？」
「かあちゃんのそばにはとうちゃんがいる」
「そうです・・おとうさん・・が」
「愛里のそばには俺がいる」
「え・・フェ・・エェェン」
「愛里」
「私・・　どこか張り詰めてたみたいで・・　なんで泣いてるのかわかんないぃぃ」
「ありがとな、愛里、かあちゃんのこと心配してくれて」
「あなたの方が心配ですよね・・　私が泣いてもぉぉ」
「嬉しいよ、愛里がそんなにかあちゃんのこと心配してくれてさ」
「私が心配してもぉ」
「かあちゃん、愛里がいてくれてよかったっつてたよ」
「え？　　ほんとに？」
「うん、化粧道具とかさ、お茶とかさ、俺やとうちゃんじゃわかんねえよ」
「ウッ・・よがっだあぁぁぁ」
「あ、愛里？　　愛里」
「私・・　ジャマじゃないかなって・・」
「なんで？」
「私がいるから・・あなたは・・私の世話しなきゃいけなくて」
「愛里、んなことねえっつったじゃん、世話してるなんて思ってねえよ俺」
「あの・・　中腰のままで大丈夫ですか？」
「え？　　あ、おう、全然」

「私は大丈夫ですから、あの、戻ってごはんの続き食べてください」
「食うけど・・さ」
「私も食べるので」
「あ、おう」
椅子に戻って　愛里は横にあるティッシュで鼻かんで
「イワシ、美味しいです」
「そっか」
「おかあさんにも食べさせてあげ・・ウッ」
「愛里？」
「あ、来なくて大丈夫です、ちょっと情緒不安定になってるだけなので」
「そ、そっか」
「明日はおとうさんにお弁当持っていくんですか？」
「だから明日は行かねえって」
「おとうさんの食事だけでも持っていってあげた方がいいと思う」
「んっとさ、帰りに看護師さんに聞いたんだけどさ」
「はい」
「明日はかあちゃん検査あるから朝から絶食で、あさって手術ならそのまま絶食で」
「そう・・なんですか」
「手術当日も一日絶食で、その次の日から食えるんだってさ」
「え・・っと、それはおかあさんのことですよね、おとうさんは」
「かあちゃんが食わねえととうちゃんも食わねえよ」
「どうして？」
「ねえちゃんから聞いたんだけど、つうか、ねえちゃんがかあちゃんから聞いたんだけど、
　ねえちゃん生んだ後、かあちゃん意識不明で、そんときとうちゃん、
　ぶっ倒れるほど血ぃ取ったのに、なんも食わねえで、ずっとかあちゃんのそばにいて、
　かあちゃんの意識戻って、かあちゃんが食えるようになって、
　そんでもとうちゃん、かあちゃんのそばにいて、
　かあちゃんがメシ食えっつったら、腹減ってねえってなかなか食わねえで」
「えっ　願掛け的な？」
「つうか、食欲がバカになるっつうか」
「食欲が・・　バカになる？　　え？　　意味がわかんない」
「とうちゃん食わねえの慣れてっからさ」
「でも、そんな・・　修行僧みたいな」
「なんか全神経がかあちゃんにいっちまって食えなかったみてえだって、ねえちゃんが」
「そんな・・に」
「だから、今回もかあちゃんが食えるようになるまで、とうちゃんも食えねえと思う」
「でも、おかあさんが心配しますよね、おとうさんのこと」
「ん・・　しゃあねえよ、とうちゃんはそういう」
「私もちょっと考えてみます」
「え？ なにを？」

「まだ何も思い浮かばないので何も言えないけど」
「愛里、んな、愛里は心配しねえでもさ」
「ごちそうさま、すごく美味しかったです」
「あ、そっか」
ぜってえなんか考えてるよな　その顔はさ

晩メシ終わって
俺はフライパン洗ってて　愛里は横でメッチャ丁寧にお皿拭いてくれててさ
「あなたのおかげで、私はお皿を洗えるようになって拭くこともできるようになって」
「愛里はやればなんでもできんだよ」
「そう思いますか？」
えっ？　　メッチャ真剣な顔で俺のこと見てっけど
「マジで思ってっから」
「そうですか」
「愛里、俺、マジで言ってっから」
「そうですか」
愛里　なんかすげえマジな顔で　え？ 蛇口？　　ずっと見つめてっけど？
「愛里？」
あ　俺の顔見た　メッチャ目ぇ見開いて　どした？
「私、決めました」
「え、んと、なにを？」
「おとうさんが何か食べるまで、私も何も食べません」
「えっ　な、なんで？」
「おとうさんが食べたら私も食べます」
「や、愛里、とうちゃんはさ、浮浪者で食わねえのは慣れてっからでさ」
「食べません」
「愛里、んなことしたら、愛里がぶっ倒れちまうだろ」
「大丈夫です、私はあなたをクビにした一週間の中でほぼ食べなかったことあるから」
「とうちゃんのはそういうレベルじゃねえから」
「どういうレベルだろうと、食べません」
「愛里、ちょっとそれはさ、やめてくんねえかな」
「もう決めましたから」
「愛里ぃぃ、頼むからさあ、そういうんはさあ」
「おとうさんが食べるまで、私は食べません」
「愛里ぃぃぃぃ」
「あなたの美味しい卵サンドも美味しいお弁当も食べませんから」
「え、愛里、俺のせい？　　俺のせいなんか？」
「ただの決意表明です」
「んなさあ、愛里、それは、かあちゃんも心配すっからさ」
「おかあさんにあなたが言わなければわからないでしょ」

「そんでもさあ」
「それじゃ、私は部屋に戻ります」
「送ってくから」
「大丈夫です、片付けの続きをやってください」
「送ってく」
「どんなに説得されても私の決意は変わりませんから」
「愛里ぃぃ、頼むからさ」
「帰ります」
「送ってくから」
愛里がスタスタ玄関に向かって　俺はあわてて愛里の後追って
「あ！」
愛里が急に立ち止まった・・から、ぶつかりそうになっちまった
「生物のノート、貸してもらえますか？」
「あ、おう、貸す貸す貸す」
愛里の手ぇにぎって
「え？　　なに？　　なんで？」
そのまんま俺の部屋ん中に　んっと　これだ
「生物だけでいぃんか？」
「はい、あの、なんで私の手を、ていうか手首つかんだままなの？」
「や、なんとなく」
「逃げないように？」
「や、それは・・」
「逃げないです、逃げてもどうせあなたは追いかけてきて」
「うん、追いかける」
「私が部屋の鍵をかけたとしても」
「鍵開けて部屋まで入る」
「そうですね」
「そんじゃ、行こう」
「はい」
「愛里」
「私の決意は変わりませんっ」
かあちゃーーん　どうすりゃいぃんだよぉぉ
つか　とうちゃん　どうする？　　つか、んな話しちまった俺が悪りぃんか？
俺か？　　あ・・あぁぁぁ
そんでもさ　なんでとうちゃんが食わなきゃ愛里も食わねえんだよぉぉ
俺は　どうしたらいぃんだよぉぉ

愛里とねえちゃんからのLINE

シャワー終わって　部屋に戻って
『愛里』送信
ピコン
『はい』
んっと　メシ食ってください！ は・・
『生物』
メッチャ無難に走ってんな　俺
『わかんねえとこあった？』送信
ピコン
『わからないところが』
ピコン
『あなたのノートでわかりました』
そっか　それはいぃんだけど
『そっか』送信
『役に立ててよかったっす』送信
ピコン
『いつもありがとう』
んなこといいんだよ愛里　俺は愛里のためならさ　そんでもさ
『愛里』送信
あんなに食わねえ食わねえ言われたらさ　どうすりゃいぃんだ？
『明日何時頃出かける？』送信
『俺も一緒に行きてえからさ』送信
ピコン
『午前中には行きたいなって』
『久しぶりの愛里とデート楽しみ』送信
それはマジでそう思ってっから
ピコン
『タオル買いに行くだけなのにw』
『そんでも楽しみ』送信
カフェに行こうっつって　なんか食うっつうのは？　　それだ！
『タオル買ったらさ』送信
『ひさしぶりにカフェ行かね？』送信
あ・・れ？　　返信がねえ

『愛里？』送信
ピコン
『お茶だけならいいですけど』
『美味そうなケーキあったら』送信
『一緒に食いてえんすけど w』送信
あ・・　また返信ねえ
『愛里？』送信
ピコン
『私　言いましたよね』
ピコン
『おとうさんが食べるまで』
ピコン
『私も食べないって』
愛里　そんでもさ　そんでも
『ケーキはメシじゃねえじゃん』送信
ピコン
『何も食べないっていうことは』
ピコン
『NOTHING ってことです』
愛里ぃぃ
ピコン
『この話はこれで終わりにします』
なんかわかんねえけど　そんじゃ　そんじゃ俺がやれることは
『わかった』送信
『俺がとうちゃんになんとか食わせる』送信
ピコン
『あなたが頼りです』
マジ？　俺が頼り？　愛里が頼ってくれてるっつうこと？
『おう』送信
『まかせとけ』送信
ピコン
『ありがとう』
愛里がニッコリしてるよぉぉ
『愛里』送信
『好きだよ』送信
ピコン
『私も』
ピコン
『好きです』
愛里からの好きはさぁ　何億回もらってもしあわせでさあ

ピコン
『それじゃ　私は寝ます』
ピコン
『おやすみなさい』
『愛里　おやすみ』送信
とにかく　あれだな
とうちゃんになんとか食ってもらうっきゃねえな
どうやって？
食欲がバカになっちまってんのに？
まあいいや　寝よう

ん・・　LINE？　愛里？　え？　ねえちゃん？
『なんで知らせないの』
ハ？
『なにを？』送信
ピコン
『かあちゃんが入院したこと』
あ　忘れてた
ピコン
『かあちゃんから電話あった』
かあちゃん　ねえちゃんに言ったんか
ピコン
『あんたがさっさと知らせるべきだよね』
さっさとってさ
『急だったから』送信
『ごめん』送信
ピコン
『しょうがない』
ピコン
『今回は許してやる』
ピコン
『かあちゃん卵巣嚢腫だと思うよ』
ピコン
『明日検査って言ってたけどおそらくそう』
そうなんか　ねえちゃんが言うならそうなんだな　まだ学生だけどさ
ピコン
『今は vNOTES-C もあるから』
んっと？
『vNOTES-C ってなに？』送信
ピコン

『腟式腹腔鏡下卵巣嚢腫摘出術』
ちつしきふくくうきょうか？
ピコン
『腟の一番奥に小さい穴をあけて腹腔鏡や器具を挿入して行う手術』
そんなんあるんか
ピコン
『かあちゃんにはもし卵巣嚢腫なら vNOTES-C って言っておいた』
そっか
『わかった　あとで調べてみる』送信
ピコン
『検査の結果次第では開腹手術になるかもしれないけど』
開腹・・
ピコン
『そこまでじゃないとは思うよ』
そっか
あ　そうだ　ねえちゃんに相談してみっかな
『ねえちゃん』送信
『かあちゃんが入院すっととうちゃん食わねえじゃん』送信
ピコン
『あれはどうにもできないよね』
だよなあ
『そのこと愛里に話したら』送信
『愛里が』送信
ねえちゃん　なんかいい考えねえかな
『とうちゃんが食うまで愛里も食わねえって言いだして』送信
『どうしたらいい？』送信
あれ？　　返信がねえ　肝心なときに返信しねえってさあ
『ねえちゃん　どうしたらいい？』送信
ピコン
『大丈夫だよ』
なにが？
ピコン
『人間は水分さえ摂ってれば一週間くらい食べなくても死なないから』
んなさあっ
『そんでも心配になんじゃん』送信
ピコン
『アイリもとうちゃんのこと心配してんじゃないの？』
『そう言ってた』送信
ピコン
『とうちゃん即身仏目指してるわけじゃないから』

そうだけどさあ
ピコン
『かあちゃんの手術終わったら食べるんじゃない？』
『それまで愛里も食わねえって』送信
ピコン
『人間は一週間くらい食べなくても死なない』
そればっか言ってっけどさ
ピコン
『そんなに心配なら』
ピコン
『あんたがとうちゃんに食わせるしかないよね』
やっぱ・・　そっか
『わかったよ』送信
ピコン
『アイリママ　最近は元気になってきてるよ』
そっか　よかった
ピコン
『来月のハロウィンも 11 月の ThanksGiving にも招待されてる w』
ピコン
『しかも交通費も出してくれるからありがたい』
ねえちゃんと愛里のお母さんも　なんか仲良くやってんだな
ピコン
『それじゃね』
『おう』送信
寝よう　つか寝てたんだけどさ
いやいやいや　「腟式腹腔鏡下卵巣嚢腫摘出術」調べねえと
ん・・と　これか
スクショして　とうちゃんに・・も・・見せて・・　眠む・・
寝よう

タオル

愛里がすげえ真剣な顔でタオル選んでる
白と白で迷ってるみてえだけど　なんか違うんかな
今朝　愛里の部屋掃除して
いつもの休みの日なら　そのあと卵サンド食うんだけど
着替えてすぐに出かけるっつってさ
なんかちっと淋しいっつうかさ　愛里が俺の作ったもん食ってくれねえってさ
「退屈・・ですよね」
「え？　　全然退屈じゃねえよ、なんで？」
「なんか、下向いて退屈そうな顔してたから」
「これは」
愛里が卵サンド食ってくれなかったから
「安心してください」
「え？」
「もう決めましたから」
「愛里、俺は退屈とかじゃなくてさ」
「すぐに買ってきます」
「どれ？」
「これです、ほら、フワッフワ」
愛里が白いタオルを俺に差し出して
「触ってみて」
俺は　そっと触って
「あ、マジでフワッフワだ」
「ね？」
嬉しそうに俺を見上げてる顔が　メッチャ可愛くて
「愛里」
「はい？」
いつか　将来　俺のタオルも選んでください
「なに？　　どうしたの？」
「え、あ、んと、何枚？」
「これは二枚で一組だから・・　三つ買います」
「そんじゃ買ってくるよ」
「これは日用品だからママからのお金で買います」
「俺が買う」

「でもタオルは」
「愛里のものは俺が買うっつったじゃん」
愛里が俺の顔　黙って見てっけど
「愛里のものは俺が買う」
「そんなことしてたら、あなたがバイトしたお金なくなっちゃいますよ」
「俺は愛里のためにバイトしてんだからさ」
「え・・」
愛里が下向いた
「愛里？」
「それじゃ・・　あの・・　ありがとうございます」
「おう」
「あなたは、なにか欲しいものはないんですか？」
「今んとこ、なんもねえな」
「それじゃ、私のタオルを買うだけで終わっちゃうけど」
「うん、そう言ってたじゃん」
「えぇぇ・・　申し訳なさすぎる」
「なんで？　　俺は楽しいよ」
「楽しいですか？　　タオル買うだけで？」
「愛里とデートじゃん」
「タオル買うだけの・・　デート？」
「愛里と一緒ならなんでも楽しいじゃん」
「なんでもって」
「そんじゃこれ三つな」
「あ、はい」
愛里　俺はさ　マジでしあわせなんだよ
こうやって愛里のもの　俺が稼いだ金で買えるってさ
一年のときからずっと
「レジはあっちです」
「あ、おう」
「あ、ちょっと待って」
愛里がまたタオル売り場に戻ってった
他にも欲しいもん見っけたんかな
あ　戻ってきた
「これ」
白地に細い灰色の線入ったやつ？　　かあちゃんが好きそうなやつだな
「あなたの体育用に」
「俺の？」
「運動会であなたが使ってたタオル、ガッサガサだったから」
「あんくれえになっと、汗よく吸うからさ」
「え・・　それじゃ・・　いつ捨てるの？」

「かあちゃんのチェック入って、もう雑巾にしろって言われるまでかな」
「それじゃ・・　これは・・　いらない・・ですか」
「愛里がこれ使えっつうんなら買う」
「ほんと？」
「ったりめえじゃん」
「だったら、これは私が買います」
「俺の体育用のだろ？　俺が買うよ」
「あなたの体育用のタオルは、私が買います」
ツンとしてさ　メッチャ可愛い
「ほら、これ」
愛里がバッグん中から白い封筒出して見せた
「私のバイト代で買います」
「愛里、んなさ、愛里がバイトして金でって」
「ママから送ってきたお金じゃ、ママが買うことになっちゃうでしょ」
「愛里」
俺　なんかメッチャ感動してます
「今まで使ってたのは雑巾にしてください」
「あ、おう、する、雑巾にする」
俺のタオルの捨てどきは　これからは愛里が決めてくれんのか
「愛里、ありがとう」
「私こそです、三つも買ってもらっちゃって」
「俺、一生大切にする」
「大切にしてないで使って」
「おう、使う、メッチャ使う」
「はい」
愛里と一緒だと　タオル買うんでも　メッチャしあわせだあ！

愛里が早く帰りてえっつったから　カフェには寄らずに帰ってきた
「真っ直ぐあなたの家に行ってもいいですか？」
「いいよ全然いいよ」
つうことで　愛里は俺ん家に一緒に来て
「愛里、タオル洗うから」
「洗う？」
「新しいのはすぐに洗うと吸水性もよくなるし店とかでついた汚れも落ちっから」
「そうなんですか」
「とうちゃんがかあちゃんに教わったんだってさ」
「私、いっつもママが買ってきてたから知らなかった」
「家庭科のパジャマの生地も洗ってアイロンかけて持ってこいって言われたじゃん」
「パジャマのときは、ママがやってたから」
そっか　そうだよ　パジャマもペアじゃん

「あのパジャマ着てますか？」
「え？　あ、や、まだ」
「私も着てないです、一生着ないのかな」
「それはさ」
それは　いつか　俺と愛里が一緒に
「電話鳴ってますよ」
「あ、うん」
かあちゃん？
「かあちゃんから」
「早く出て」
「おう」
「かあちゃん？　どした？」
「いちおうあんたにも知らせようと思ってね」
知らせる？　な、なんだ？　検査でなんか・・
「やっぱり卵巣嚢腫だったわよ、卵管からは出血してなかったわ」
「そっか」
よかったあ
「手術はヒトミが言ってたやり方と同じことを提示してくれたの」
「膣式なんかっつうやつ？」
「それだとお腹に傷もできないし、退院も早いんですって」
「そっか」
ねえちゃんすげえな
「愛里さんにも伝えておいてね」
「わかった、伝える」
「心配かけたけど大丈夫よってね」
「うん、伝える」
「手術は明日、若先生ったらもうスケジュール組んでたわ」
かあちゃん笑ってる　よかった
「カズオがそっちに向かってるから」
「とうちゃん？　なんか必要なもんあんのか」
「違うわよ、お風呂に入ってきなさいって言ったの、どうせ明日は絶対帰らないだろうから」
だよな
「無精ひげ生えちゃって、着替えもしてないし」
「とうちゃんになんか持たせるもんある？」
「ないわよ、あ、洗面台の下にホテルの歯磨きセットあるでしょ」
「あるけど」
「あれ持たせて、歯も磨いてないんだから、歯くらいは磨かせないと」
「わかった、持たせっから」
「カズオ用のフェイスタオルもね、私のは使わないのよ」

「うん、わかった」
「それじゃ」
よかった　よかったっつうか　深刻な病気じゃなくて
「おかあさん・・　検査の結果が出たんですか？」
あ、そうだ
「かあちゃんさ、卵巣嚢腫で卵管からは出血してねえって」
「よかったあ、よかったっていうか」
「うん、よかった、なんか手術も腹に傷つかない方法があって、それでやるって」
「ああ！　よかった、お腹に傷がついたら辛いですよね」
「その方法だと退院も早えんだってさ」
「なんかホッとしました」
「愛里」
愛里のこと抱きしめて
「おとうさん、帰ってくるんですか？」
「え？　あ！」
用意しとかねえと
「帰ってくるっつうか、風呂入りに戻ってくるだけみてえでさ」
「あの・・　ダメモトで」
ダメモト？
「おとうさんにお弁当作ってあげたら・・」
「そんでも、とうちゃんは」
「いちおう、ダメモトで」
そっか　もしとうちゃんが食ったら　愛里も
「だな、作る」
んっと・・　まずはメシ炊いて
冷蔵庫ん中に・・　いろいろ入ってっけど・・　浮かばねえな
「愛里なら何食いてえ？」
「私ならって？」
「弁当」
「ん・・　こういうカンジのときなら、おむすびと・・　えぇぇ浮かばない」
「そんじゃメシ炊いて、あとは卵焼きとタコさんウィンナーっつうのは？」
「それがいいかも、軽いカンジで」
「唐揚げも作れっけど」
「唐揚げは・・　今はどうかなあ、そこまで本格的じゃない方が気軽かも」
「そっか、そんじゃ卵焼きとタコさんウィンナーと握りメシにすっからさ」
米といで　炊飯ボタン押した　あとは・・　歯磨きセットとタオルか

卵焼きは作った　タコさんウィンナーも
あとは・・　もう少しでメシが炊ける
「ただいま」

とうちゃん！
「とうちゃん、おかえり」「おとうさん、おかえりなさい」
「汚ったねえから風呂入ってこいって言われてよ」
とうちゃんが　情けねえ顔で笑おうとしてて
「かあちゃんから電話あったよ」
「そっか、明日・・」
「手術だろ？」
「俺は横で聞いててもなんかよくわかんなくてよ」
「んっと、ちっと待って」
ねえちゃんとの LINE 開けて
「腟式・・腹腔鏡下卵巣嚢腫摘出術つってさ、腟の一番奥に小せえ穴開けて」
「ちつっつうのは？」
「んっとさ・・」
「子宮までの道みたいな部分です」
愛里
「中学のときに習ったから」
そっか　つか愛里の方がわかるよな
「赤ちゃんが通る産道にもなるそうです」
「赤ちゃんが・・通る？」
「はい」
「赤・・ちゃん」
とうちゃんが　メッチャ不安そうな顔になってる
ねえちゃんのときのこと思い出しちまったんか
「とうちゃん、そこにちこっと穴開けて悪りぃもん取るだけだよ」
「ちこっと・・か？」
「うん、ねえちゃんがその方法がいいっつってた」
「ヒトミが？」
「ねえちゃんがそれがいいっつうんだから大丈夫だよ」
「そっか、ヒトミがそう言うんならな」
「そうだよ、ねえちゃんが言うんだからさ」
「そっか」
とうちゃんの顔が　少しホッとしたみてえになって　よかっ・・た
「そんじゃ、俺、風呂入ってくっからよ」
「うん、着替え置いとくからさ」
「ありがとな」
とうちゃんがバスルームん中に入ってった
「おねえさんと話したんですか？」
「ゆうべ LINE きてさ、あ！　愛里のお母さん、元気だって言ってたよ」
「ママのことはいいですけど」
「んなさあ」

「おとうさんの着替え、T シャツと下はスエットの方が楽かも、あとは」
「愛里、選んでくんねえかな」
「私が？」
「俺が選んだら、かあちゃん、なんだそれってぜってえ言うからさ」
「それじゃ選びます」
愛里がベッドルームに入ってって　　俺はバスルームの洗面台の下から歯磨きセットとこっちの棚の下の　とうちゃんが使ってるタオル
「あの」
愛里がとうちゃんの着替え持った手だけドアから出して
「愛里、ありがとう」
んっと、T シャツとジッパーついた上着とスエット　かあちゃん好きそうなやつだなあ
「とうちゃん！　　着替え置いとくから」
「ありがとな」
「持ってきたタオルとか、俺あとで洗っとくからさ、代わりの出しとく」
「悪りぃな」
「いいよ、今洗濯機使ってからさ」
愛里と俺のタオル乾燥してっからな

バスルームから出たら　愛里が立ってた
「愛里、どした？」
「おとうさんのお弁当」
「あ、そっか」
愛里と二人でキッチン入って
とうちゃんの弁当箱に卵焼きとタコさんウィンナー入れて
「メシは、あと 5 分だな」
愛里が炊飯器の前に立って
「なんか・・　ドキドキしてきちゃった」
「メシ炊けんのが？」
「おとうさん、食べてくれるといいですね」
マジでさ　愛里が食ってくれっかどうかもかかってっからさ
「食ってほしいな」
「はい、食べて欲しいです」
愛里と二人で　なんか炊飯器の前に立ってた

メシ粒

米が炊けた
思わず愛里と顔見合わせた
「おむすびを」
「おう」
「ダイチ！　そんじゃ戻っからよ！」
えっ
「とうちゃん！」
玄関に走ってって
「サッパリした」
とうちゃんニッコリしてっけど
「んっと、とうちゃん、もうちっといてくれよ」
「早く戻んねえとよ」
「もうちっとだけ」
「なんかあったんか？」
なんかって　なんつったらいぃんだ？
これは　もう
「愛里がさ」
本当のこと言うっきゃねえ
「とうちゃんがメシ食わねえと、愛里もメシ食わねえっつうんだよ」
「あ？ んと、え？」
「とうちゃがメシ食ってくんねえと、愛里も食わねえって」
「アイリちゃん、どっか具合悪りぃんか？」
「じゃねえんだけどさ」
「なんでアイリちゃんはメシ食わねえんだ？」
「俺もよくわかんねえけど、とうちゃん頼むよ、メシ食ってくれよ」
「俺は・・」
とうちゃんキョトンとした顔してさ
「腹へってねえからよ」
食欲がバカになってるやつだ
「そんでもさ、とうちゃんが食ってくんねえと愛里も食わねえんだよ」
「な、え？」
「とうちゃん、俺のこと助けてくれよ」
「ダイチを？　お、おう、なにすりゃいぃんだ？」

「だからさ、とうちゃんが」
　「アッ　ツーーーーーーー！」
愛里？
「愛里！」「アイリちゃん」
キッチンに入ってったら　愛里が両手バタバタ動かしてて
「愛里、どした？」
「手が、手が熱くて」
手？　　メシ粒くっついてて
「愛里、水で流さねえと」
「ごはん落としちゃって」
「え？　　あ・・」
愛里の脚元に小せえメシの塊落っこちてる
「おむすび作ろうとしちゃって」
「おむ・・　えっ？　　愛里が？」
「パニクッて、おとうさん行っちゃうと思ってパニクッて」
「愛里が握りメシ？」
「作れないのに、なんかパニクッちゃって」
「アイリちゃんはダイチに握りメシ作ってやりたかったんか」
「え、いえ、そうじゃなく、あああああっ、おとうさん！」
とうちゃんがしゃがんで床に落ちたメシ食ってる
「なにしてるんですかっ？」
「もったいねえからよ」
「もった、床に」
「こんくれえなんともねえよ」
「えぇぇ、でも床に」
「美里が稼いでくれっから」
とうちゃんが床に散らばったメシ粒ひとつひとつ拾いながら口ん中に入れて
「メシ食えんだからな、ありがてえな」
「え？　　あの」
「アイリちゃん、手ぇ水で冷やした方がいんじゃねえか？」
「おとうさん、今・・　なんて言いましたか？」
「手ぇ冷やした方がよ」
「その前」
「あ？　　俺・・　なんか言ったか？」
無意識で言ってたんか
「おかあさんが・・　稼いでくれるから・・」
「だな、美里が稼いでくれっからよ」
「そうです、そうです」
愛里がしゃがんで　とうちゃんと向かい合った
「おかあさんが働いて稼いだお金で買ったお米だから」

「だな、ありがてえよ」
「食べましょう」
「あ、そっか、アイリちゃんメシ食わねえってよ」
とうちゃんが俺のこと見上げて
「なあ？」
「あ、うん」
「アイリちゃん、ダイチが心配してっからよ、メシ食ってくれよ」
「おとうさんが食べるなら私も食べます」
「え？ 俺？」
「おとうさんが食べないなら私も食べません」
とうちゃんが　わけわかんねえって顔でまた俺のこと見上げっから
「とうちゃん、頼むよ、食ってくれよ」
「あ・・　んっと、そっか、アイリちゃん、俺も食うからよ、アイリちゃん食ってくれよ」
「ほんとに？　　ほんとに食べますか？」
「食う、食うから、アイリちゃん、メシ食ってくれよ、ダイチが心配してっからよ」
「ほんとに食べますか？」
「食うよ、アイリちゃん、なに食いてえ？」
愛里がチラッと俺を見上げて
「おむすび」
「そっか、そんじゃダイチ、アイリちゃんに」
「私のはおとうさんが作ってください」
「俺？　　俺の握りメシが食いてえんか」
「はい、あの、あなたは」
「おう、とうちゃんの作っから」
「はい」
なんかわかんねえけど　とうちゃんも愛里もメシ食ってくれることになったよ

とうちゃんが愛里の握りメシ作って
俺はとうちゃんの握りメシ作って
「ダイチも食うか」
「あ、うん」
とうちゃんが俺の分もにぎってくれて
「ほれ、ダイチ、握りメシ」
「うん、ありがとう」
三人で握りメシ持って
「アイリちゃん」
とうちゃんが俺の方見て　なんか　いくぞ！ みてえな目ぇして
「俺も食うからよ、アイリちゃん食ってくれよ」
とうちゃんが　握りメシ一口食って
「ほれ、食った、食ったから、アイリちゃん食ってくれよ」

そっか　とうちゃんの中では愛里にメシ食わせるっつうのが使命みてえになってんだ
「はい」
愛里がとうちゃんの顔ジーッと見たまま一口食って
「アイリちゃん、食ってくれたな」
とうちゃんが嬉しそうな顔で俺のこと見て
「ダイチ、アイリちゃん、食った」
「おう、とうちゃん、もっと食わねえとさ」
「そっか、だな、アイリちゃん、ほれ、もっと食ってくれよ」
「はい、おとうさんも」
愛里ととうちゃんが向き合ったまま握りメシ食ってて
俺は　なんか　ちっと泣きそうになってて
愛里はとうちゃんを　とうちゃんは愛里のこと心配してさ
「アイリちゃん、もっと食うか？」
「え、あ！　　卵焼きとタコさんウィンナー」
「食いてえんか、そんじゃ作っからよ」
「とうちゃん、作ってあんだよ」
俺はとうちゃんに卵焼きとタコさんウィンナー入った弁当箱渡して
「あ・・　食わなかったんか」
それは　とうちゃんに作ったんだけど
「アイリちゃん、ほれ」
「おとうさんも食べてください」
「わかった、食う、食うから、アイリちゃん食ってくれよ」
「それじゃ、一緒に」
「一緒にな、一緒に、うん」
愛里ととうちゃんが卵焼きつまんで　口に入れて
「アイリちゃん、美味えな」
「はい、美味しいです」
「よかったなあ、アイリちゃんが食ってくれてよ」
「よかったです、おとうさんが食べてくれて」
「一緒によ」
「はい、一緒に」
すげえよ　愛里　とうちゃんにメシ食わせるなんてさ
とうちゃんも愛里にメシ食わせてくれてさ
「おとうさん、明日もごはん食べてください」
「明日は、美里の手術だからよ、戻ってこれねえな」
え？　　とうちゃんと愛里が　困った顔して　俺の方見た
「あ、俺が握りメシ作って持ってくよ」
「ダイチは明日っから学校あっからよ」
「帰ってきてから作って持ってくからさ」
「そんでもよ」

「おとうさんが食べないなら、私も」
「あ、んと、アイリちゃん、食うから、ちゃんと食うからよ、アイリちゃんもよ」
「おとうさんが食べるなら」
「そんじゃ、ダイチ、悪りぃけどよ」
「悪くねえよ、持ってくからさ」
「そっか、そんじゃアイリちゃんもな、ちゃんと食ってくんねえとよ」
「はい」
「そんじゃ、俺、美里んとこ戻っからな」
「おとうさん、ごはん食べてくれてありがとうございます」
「アイリちゃんが食ってくれてよ、よかった、よかったなダイチ」
「あ、うん」
とうちゃんが　かあちゃんの替えのタオルやなんや入った袋持って
玄関とこに俺と愛里も一緒に行って
「そんじゃな」
「とうちゃん、ありがとう」
とうちゃんがメシ食ってくれたから　愛里もさ
「よかったな」
とうちゃんがホッとした顔で
「おとうさん、ちゃんとごはん食べてくださいね」
「食う、食うからアイリちゃん、メシ食ってくれよ」
「はい」
「そんじゃ、またな」
とうちゃんが玄関のドア閉めた
「愛里」
「よかったですね、おとうさん、ごはん食べましたね」
「愛里」
俺は抱きしめて愛里を
「ありがとう」
「私は実質何もしてないですけど」
「愛里がとうちゃんにメシ一緒に食おうっつってくれたから」
「流れ的にそうなっただけで」
「とうちゃんが食わねえなら愛里も食わねえって、こういうことだったんか」
「それは・・　何も具体的には考えてなくて」
「え？」
「ほぼ願掛けに近いカンジで」
「が、願掛け？」
「私が食べなかったら、あなたが、なんかどうにかしてくれそうな気がして」
「え、俺？　　俺、なんもできなかったじゃん」
「できてましたよね、私のことをダシに使って」
「ダシ？ ダシって」

「おとうさんの母性に訴えかけたっていうか」
とうちゃんの・・　母性？
「おとうさんはあなたが困ってたから、なんとかしてくれようとして」
「それは、うん、とうちゃんはそう思ってたみてえでさ」
「すごいですよね、おとうさんの母性」
「母性っつうか、まあ・・　とうちゃんだけどさ」
「あなたもおかあさんも、おとうさんはおとうさんのままで好きだから」
「そりゃ・・　とうちゃんはとうちゃんのまんま好きだけどさ」
「おとうさんが食べなくても、それがおとうさんだからって」
「まあ、そう・・だけど」
「でも、私だったら心配になっちゃうから」
だよな　んっとは心配しねえとなんねえのに　俺は・・
「私だったら、もし、私が入院したとして、あなたが何も食べないで」
え？
「それって心配になっちゃうから、あなたは元気でいてくれないと不安になっちゃう」
俺？
「あなたがごはん食べて元気でいてくれないと、私、安心して入院してられないです」
「そ、そっか、わかった、俺はちゃんとメシ食うからさ、なんも心配しねえでいいよ」
「私の話じゃないけど、きっとおかあさんも」
「かあちゃんも、とうちゃんがメシ食ったら安心して入院できっからさ」
「明日の手術、大丈夫ですよね」
「ねえちゃんのカンジだと大丈夫だから」
「そうですよね、お姉さんがそう言うなら大丈夫ですね」
「うん、あのさ、愛里、明日の弁当は・・」
「お願いします」
「食ってくれんの？」
「おとうさんが明日も食べるって言ってくれたから」
「マジ？ マジで？」
「はい」
よかったぁぁぁ　とうちゃんありがとう
「正直、私、明日あなたのお弁当なしで、午後の授業のときフラッとしないかなって」
「愛里、もう二度とこんなことしねえでくれよ」
愛里のこと抱きしめて
「俺、メッチャ心配になって、そんで・・　淋しかった」
「淋しい？　なんで？」
「愛里は俺の弁当好きっつってくれんのに、食わねえって」
「だからそれは」
「愛里が俺の弁当食ってくれねえって、なんか、なんつうか、トラウマみてえなさ」
「トラウマ？」
「家政夫クビになったとき、作ってったら突っ返された」

「えええっ？」
愛里が俺の腕からパッと離れて
「あのときのことまだ言うの？」
「や、そういうんじゃねえんだけど」
「あのときは、ついでのお弁当だと思ったからアタマにきて、だから」
「あ、愛里、愛里、あんときのことはもう」
「あ・・　そうですよね、誤解でした」
「なんか、ごめんな、俺がヘンなこと言っちまったから」
「私はあなたのお弁当が大好きです」
「うん」
「自分がいちばん好きなものを断つ、あ、やっぱり願掛けだったかも」
愛里　俺は
「なんだよそれ」
今　すげえ情けねえ顔で笑ってんだろうな　嬉しくて泣きそうだからさ
「おとうさん、私が床に落としちゃったごはん食べてましたよね」
「ああ、うん」
俺もこぼしたメシ粒拾って食ったりすっけど
「ビックリしちゃった、床ですよ床」
それは言わねえ方がいいな
「おかあさんが稼いでくれたお金で買ったからって」
「あ、うん」
「なんか・・　ちょっとその気持ちがわかって」
「え？」
「私も・・　あなたがいっぱい汗を流してあんなに汚れて臭くなって」
ん・・っと？
「そうやって稼いだお金で買ってくれたタオル」
「タ、タオル？」
「今日買ってくれましたよね」
「あ、うん、買ったけど」
「簡単に捨てるなんてできないなって」
え・・
「擦り切れて薄〜くなっても使っちゃうと思う」
愛里　俺は・・　なんかすげえ感動してて
「あの・・」
「え？ あ？ なに？」
「タコさんウィンナー食べていいですか？」
「あ、おう、おう、卵焼きもまだあるしさ」
「はい、なんかお腹空いてきちゃった」
「握りメシもっと作っからさ」
「あなたの梅干とおかかのが食べたい」

「おう、まかせろ」
よかったあああ　愛里が　愛里が腹減ったって　俺の握りメシ食いてえってさ
とうちゃーーん　食ってくれてありがとう
つか　食ってくれよ　かあちゃんのためにさ
俺のためにもさ
愛里も心配してっからさ
「美味しい」
タコさんウィンナー食って嬉しそうな顔してる愛里見てると
しあわせだあああ

あんときのこと

俺は後片付けてして、そんで明日の弁当の米研いでて
愛里は俺の横で見てる
「愛里」
「はい」
愛里がジッと見てっから
「俺、明日はさ」
なんかちっと照れてて
「とうちゃんの握りメシ朝作って学校持ってって、帰りそのまんま病院行く」
砥いだ米　釜に移して水張って
「そうですか」
炊飯器にセットして
「よかったらさ、愛里も一緒に来てくんねえ？」
「明日はやめておきます」
「なんか用あんの？」
タイマーかけた
「手術したばっかりで他人がお見舞いに来たら」
「他人？」
「おかあさん気を使っちゃうと思う」
「愛里は他人じゃねえよ」
「血はつながってないですよね」
「そういうんじゃねえっつうかさ、かあちゃんは愛里のこと娘みてえにさ」
「パパが手術した日、まあ、パパはただのいぼ痔だったけど」
「愛里、いぼ痔はメッチャ痛てえんだってよ」
「パパのいぼ痔のことじゃなくて、おかあさん、病室には入ってこなかったんです」
「それは・・　やっぱ、いぼ痔の手術の後じゃ・・　入れねえよ」
「そういうところが、おかあさんてすごく気遣いのある人だなって」
「つか、愛里のお父さんとかあちゃんはほぼ初対面だったしさ」
「私はおとうさんと会ったこともなかったのにお見舞いに連れていかれましたけど」
「それは・・」
あんときは　とうちゃんに会わせてえって思って
俺のとうちゃんを愛里に見て欲しいっつうか　とうちゃんに愛里を見て欲しいっつうか
「会ってよかったけど」
「マジ？」

「はい、まさかこういうカンジになるとは、あのときは想像もできなかったけど」
「こういうカンジ？」
愛里が　俺のことチラッと見上げてっけど
「愛里、こういうカンジって？」
「そろそろ部屋に戻ります」
「え、あ、そんじゃ送ってく」
「あなたは、この後は勉強ですか？」
「明日の弁当の下ごしらえしてからかな」
「見てもいい？」
「弁当の下ごしらえ？」
「あ、ジャマですよね」
「ジャマじゃねえよ、全然」
愛里の手ぇつかんじまったけど
「それじゃ、下ごしらえが終わるまで、います」
「愛里」
抱きしめちまってっけど
「下ごしらえは？」
「する・・　する・・けど」
ヤベエ　俺が　ヤベエ　けど　なんかもう・・
ピコンピコンピコンピコンピコンピコンピコンピコン
「え？」「え？」
俺の携帯と愛里の携帯に　なんだ？
「川口くんから」
「俺のもだ」
『運動会の写真と動画送ります』
『明日でもよかったんだけど、明日は学活のときに上映会するって』
上映会？
『撮影班と実行委員から連絡があったから先に送った方がいいかなって』
上映会ってなんだ？
まあいいや
『ありがとう』送信
「これ、お昼のときみんなで撮った写真ですね」
「うん、いっぺえあんな」
「この動画・・　え、やだあ、私の献立レースの」
「俺には来てねえけど」
「いいです、見なくて」
「欲しいよ、俺にも送ってくれよ」
「え、やだ」
「愛里ぃぃ」
「それじゃ・・　送りますけど」

きた！　おおお　愛里が走ってる　一生懸命な顔が可愛いなあ
「あなたのは？」
「俺の？　おんなしじゃね？」
「あ、この動画、私には来てない」
「これ？　あ、とうちゃんと走ってるやつだ」
「川口くんに頼んだんです」
「愛里が？」
「あなたが走るとき、私は冷静に撮影する自信がないからって」
へ？
「川口くん、なんで私にも送ってこないの？」
「俺が送っから」
「ちょっと今見たい」
「そんじゃ」
再生押して・・
とうちゃんと走ってるよ　走ったよ　え？
「あっ　あああああ」
「あなたのスピーチもちゃんと撮ってましたね」
こんなカンジだったんかよぉ　ヤベエやつじゃん俺
「あなたの・・　こっちのは・・」
「あれだ、一般リレー」
「それ、ショーさんにも送ってあげれば？」
「ショーさん携帯持ってねえんだよ」
「そうなんですか、え？　だったらどうやって奥さんとデートの約束するのかな？」
「ショーさんの独身寮の固定電話じゃねえかな」
「なんか昭和でいいですね、昭和知らないけど」
愛里　可愛いなあああ
「でも、会社の人たちも見たいですよね、あ！　監督に送るとか？」
「俺、監督の LINE 知らねえんだよな」
どうすっかな　かあちゃんはメールのやり取りしてっけど　メールはパソコンだよな
「明日のお昼休みに行ったらいいんじゃないですか？」
「明日？　そっか、そんじゃ愛里も一緒に来てくれよ」
「私？　私は・・」
愛里が困った顔して俺のこと見た
そっか　人見知りだった　休憩室にはいっぺえいっからな
「俺がちこっと行ってくっから」
「はい」
「そんじゃ明日の弁当の下ごしらえすっかな」
「何にするんですか？」
「なんだと思う？」
冷蔵庫から鶏肉出して　生姜すって

「もしかして、唐揚げ？」
「他のがいい？　　他のもできっからさ」
「唐揚げ嬉しい」
「そっか、よかった」
鶏肉切ってつけ汁に漬け込んで　おっし
「他になんか食いてえもんある？」
「ん・・　おまかせします」
「そっか、そんじゃ、あとは明日の朝やっから」
「明日のお弁当楽しみ」
楽しみって　嬉しいなあああ
「それじゃ、帰ります」
「送ってく」
愛里と二人で家を出た

愛里の部屋の玄関
「それじゃ、また」
「ん・・　あのさ」
俺は　なんか　まだ離れたくなくて
「とうちゃんのこと、ありがとう」
「おとうさんのこと？」
「メシ食うようにしてくれて」
「私はなにもしてないです、あなたが」
「愛里がメシ食わねえっつって、俺のこと困らせたから」
「困らせ・・　ごめんなさい」
「じゃねえよ」
愛里のこと　抱きしめて
「愛里が困らせてくれたからさ、俺が本気で困ったから、とうちゃんもさ」
「あれしか考えられなくて」
「愛里がとうちゃんのことまで考えてくれて嬉しい」
愛里が　俺の腕ん中で
「なんか・・　淋しいですね」
「え？」
「おとうさんとおかあさんがいないと」
「とうちゃんとかあちゃんは一緒にいっから安心だよ」
「そうだけど、あなたはあの家で一人だから」
愛里
「俺には愛里がいっから」
「え？」
愛里が顔あげて　俺のこと見て
「えっと、あの」

身体離し　た？　　なんで？
「それじゃ、あの、また」
「愛里、俺、なんか悪りぃこと言った？」
「いえ、そうじゃなくて、なんか、あの・・　あとで」
「あ、うん、そんじゃ」
愛里がドア閉めて　鍵閉めて
なんだ？　　どれだ？　　俺　なんか言ったんかな？
ピコン　愛里だ
『ごめんなさい』
ピコン
『なんかドキドキしちゃったから』
ドキドキ？
ピコン
『俺には愛里がいるからって』
え？
ピコン
『嬉しかったです』
マジーーー？
『愛里　俺マジでそう思ってっから』送信
ピコン
『はい　それじゃまた』
『そんじゃあとでまたな』送信
ピコン
『はい』
『愛里　好きだよ』送信
ピコン
『はい』
この塩加減もさ　好きっす
家に戻るか

シャワー終わって　部屋に戻ったら　愛里から LINE きてた
『なんか今日は　あなたが私の家に家政夫として来てたときのこと思い出して』
マジ？
『おとうさんとおかあさんの気配がないからかもだけど』
とうちゃんとかあちゃんの気配？
『私ひとりの家にあなたが来て』
『最初はパニクッたけど』
俺もだよ愛里　俺はちげえ意味だけどさ
『あなたがいたから淋しくなかった』
え

『さっきあなたが　あなたには私がいるからって言ってくれて』
あれはマジだよ　マジでさ
『すごくストレートに言ってくれて嬉しかった』
『あなたはいつもストレートだけど』
『ストレート過ぎて wwww』
愛里の笑ってる声が聞こえてくるみてえだよ
『それだけ言いたくて』
愛里　メッチャ嬉しい　俺がいたから淋しくなかったってさ
俺には愛里がいっからっつったのが嬉しいっつってくれてさ
『愛里』送信
『俺はもう愛里がいねえ
んっと　人生・・なんだけど　それって言ってみりゃプロポーズになっちまうよな
まだだよな
『俺なんて考えらんねえよ』送信
『愛里は俺にとってすげえ大切な人で』送信
愛里は　他人つったけど　血はつながってねえけど　そういうんじゃなくてさ
『とうちゃんやかあちゃんにとっても』送信
なんつったらいぃんかな
『もう他人じゃねえんだよ』送信
『血がつながってっとかそういうんじゃなくてさ』送信
ピコン
『森下家にいると』
ピコン
『すごくホッとして』
ピコン
『楽に息ができます』
愛里　すげえ嬉しい　マジで嬉しい
ピコン
『酸素ファミリー』
ハハハ　おもしれえな
『植物かよ www』送信
『森下だけに？　　森林浴的な？ www』送信
ピコン
『ダジャレがダサ過ぎて』
へ？
『笑う wwwwww』
愛里が笑ってくれんならさ　ダサくてもなんでもいいよ
『俺はダセえけど』送信
『そんでも愛里にはずっとそばにいてほしい』送信
ピコン

『あなたはダサくないです』
え？　マジ？
ピコン
『ていうか正確には』
ピコン
『あなたの本体そのものはダサくないです』
本体？　本体ってなんだ？
ピコン
『私はあさってくらいにおかあさんのお見舞いに行きます』
そっか
『愛里　ありがとう』送信
ピコン
『それじゃ　おやすみなさい』
『愛里　おやすみ』送信
なんか　すげえしあわせだ！
そんでも　明日のかあちゃんの手術・・
ぜってえ大丈夫だ　うん　寝よう

運動会の写真と上映会

連休明けの学校の廊下には　ズラーーッと運動会の写真が貼ってある
一年のときもだったな
俺が写ってんのけっこうあったけど　そんなん買ってもさ
愛里が写ってるの必死で探してさ　５枚あってさ　一人のはなかったけどさ
すげえ欲しかったけど　今買ったらただのファンみてえじゃんてさ
俺は上原愛里とぜってえつき合うつき合って写真撮るって　誓ったんだよな
あ！　愛里の献立レースんときの写真ある
すげえ真剣な顔して選んでるときのだ　これはぜってえ買おう
「見て見て」
愛里が上の方指さして
「あなたとおとうさんが走ってる写真」
とうちゃんと走ったんだよな　嬉しかったな
「すごい、おんなじ顔しておんなじ恰好で走ってる」
愛里が嬉しそうな顔で笑って
「私、これ買います、おかあさんにも見せないと」
「俺が買うよ」
「でも、私も欲しいから」
「そんじゃ俺が二枚買う」
愛里がチロッと睨むみてえな目で俺のこと見てっけど
「愛里、他に欲しいのは？」
「あとは・・」
「応援タイムんときのもリレーもあっけど」
「それは学活のときにクラスの撮影班が見せてくれるみたいだから」
あ　そういえば
「愛里、上映会ってなんだ？」
「動画撮ったのをみんなで見る的な？」
みんなで見る？
「一般リレーのは・・　一階ですよね？」
「だな、本部席の写真とかそういうのは一階じゃね？」
「あとで見てきます」
「俺も行くよ」
「はい」
愛里が腕時計見た

「8 時 55 分ですね」
かあちゃんの手術は 9 時からだよな
「あと 5 分で・・」
愛里が　ちっとだけ心配そうな目で俺のこと見上げてて
「大丈夫だよ」
愛里が　俺の制服のシャツ　ギュッてつかんで
「そうですよね」
「そうですよ」
腕まわして愛里の肩抱きよせた
「あっ　もう！　　学校の中でそういうことやめて！」
愛里の怒ったみてえな顔が可愛くて
「なに笑ってるの？」
「可愛いから」
上目遣いで睨む顔も　いつもの愛里でホッとすんだよ
「学活が始まっちゃうから教室入らないと」
「おう」
ぜってえ大丈夫だって　わかってけど　そんでもなんかさ
そんでも・・　そんでもさ　かあちゃんのそばにはとうちゃんがいる
だから　やっぱ大丈夫だ

昼休みの中庭
愛里に弁当渡しても　え？　　なんで開けねえの？　　なんか考えてっけど？
「愛里、どした？」
「おとうさんに電話したらどうですか？」
「とうちゃん出ねえんじゃねえかな」
「あなたの声を聞いたらホッとするかも」
「かあちゃんはまだ麻酔で眠ってんじゃね？」
「おかあさんじゃなくておとうさんが」
「とうちゃん？」
「なんか、なんていうか・・　おねえさんを生んだときとはちがうって」
え？
「おとうさんには、あなたがいるって」
とうちゃんには・・　俺が？
「あ、ごめんなさい、私、余計なこと」
「余計なことじゃねえよ、電話してみっから」
「そうですか」
携帯出して　とうちゃんに・・　出ねえな　あ、出た
「ダ、ダイチ、どした？」
俺の心配してるよ
「かあちゃんの手術、どうだった？」

「しゅ・・じゅつ？」
なんかボーッとしてんな　夢ん中に入っちまってたんかな
「かあちゃん手術したんだろ」
「あ！　　した」
「どうだった？」
「先生がよ、成功だっつってた」
「成功？」
愛里の顔見たら　メッチャホッとした顔してる
「悪りぃもの全部取れたってよ」
「そっかあ、よかったな、とうちゃん」
「よかった、マジよかった」
とうちゃんの声も　ホッとしたみてえになってきた
「血もよ、いらなくてよ」
「そっか、出血しなかったんだな」
「そんでも、いちおう取っといてもらってたんだけどよ」
「え、どんくれえ？」
「ん・・っと、400 つってた」
成人男子のふつうの量だな　今回は無茶しねえでよかったよ
「明日も取ってもらうことにしてよ」
「明日はいらねえんじゃね？　　もう手術終わったんたからさ」
「そんでも、もし・・　なんかあったら、新しい血の方がよ」
とうちゃん　やっぱメチャ心配なんだな
「そんじゃ、今日俺も採血してもらうよ」
「ダイチが？」
「おんなし血液型だしさ、俺のもあれば安心だろ？」
とうちゃんがさ
「ありがとな」
「学校終わったらそっち行くからさ」
「そっか、うん」
「握りメシ持ってくから、とうちゃん食ってくれよ」
「俺は・・　今日は」
「とうちゃんが食わねえと愛里も食わねえからさ」
「えっ　アイリちゃん、また食わなくなっちまったんか？」
愛里のこと見たら　開けてねえ弁当箱を俺の方にスーーッて押してきて
「今もまだ弁当に手ぇつけてねえよ」
「そりゃ、んっと、俺も食うからアイリちゃんもちゃんと食ってくれってよ」
「とうちゃん、マジ食ってくれよな、愛里、弁当も開けてくんねえからさ」
「あ、おう、食う、食うからよ」
「それにさ、明日も採血すんならメシ食って元気な血にしとかねえとさ」
「そっか、だよな、元気にしとかねえとな」

「そうだよ」
「ダイチ」
「ん？ なに？」
「ありがとな」
「んなこといいよ」
「ダイチの声聞いたらよ、なんつうか・・　戻ってこれたみてえなよ」
やっぱ　過去に頭飛んじまってたんだな
「そんじゃ、夕方行くよ」
「うん、わかった、待ってっからよ」
電話切って　愛里のこと見たら
「お腹空いたあ」って　弁当開いて　唐揚げ食ってさ
「美味しい」
「そっか」
「あなたもちゃんと食べないと」
「俺は食うよ、メッチャ食う」
「採血するなら元気じゃないと」
「おう」
愛里が俺の肩に顔埋めて
「よかった」
小せえ声で
「愛里、ありがとな」
「私は何もしてないけど」
「電話してよかったよ、とうちゃん、脳みそ過去に戻ってたみてえだったからさ」
「そうですか、それでも戻ってきたんですよね？」
「うん、戻ってきた」
「よかった」
「かあちゃんの手術も成功で嚢腫は全部取れたってさ」
「あぁぁぁ、よかったぁぁ」
「うん、よかった」
マジで　よかった　なんか　ホッとした

弁当食い終わって　一階の一般リレーの写真貼ってるところへ
「あった！　あなたと・・　こっちはおとうさん、こっちはみんなで並んでるので」
「森下」
「あ、監督！　どしたんすか？」
「運動会の写真ができたって連絡あってさ」
「ここんとこ全部菱谷建設っすよ」
「会社の記録用と、それぞれに買ってやらないとな」
監督が真剣な顔で写真見てるよ
ん？　愛里が俺の背中指でツンツンて

「愛里、どした？」
「あれ？　愛里さん？」
「あ・・　はじめまして」
「日曜日、ショーさんとデートしてくれてありがとう」
「え・・　いえ」
愛里がどんどん俺の背中に隠れてって
「監督、愛里はすげえ人見知りなんで、あんま話しかけっと怖がっ　イデッ」
愛里が俺の背中つねった　たまんねえええ
「そうなの？　ごめんね」
「いえ」
愛里が俺の背中から　小せえ声で俺に
「動画・・」
「動画？」
「リレーの」
「あ、そっか、監督、俺の友だちが動画撮っててくれたんすよ」
監督に動画見せて
「これはありがたいな、俺にも送ってくれる？」
「エアドロで送るんで」
「他のみんなも見たがってたんだよ」
「ショーさんにも見せてあげてくだせえよ」
「もちろんだよ」
「ショーさんに送りたかったけど、ショーさん携帯持ってねえっすもんね」
「会社名義で買うって言ったんだけどな」
「買ったんすか？」
「自分で稼いで買うってさ」
「そうなんすか」
「まだ分不相応だとか言って、持ってもらった方が便利なんだけどな」
「奥さんとは？」
「寮の電話でかけてるらしいよ、宇野くんが言うには夜に１分だけ」
「１分？」
「元気か、そうか、元気だよ、おやすみだってさ」
そっか
「まだ照れてるみたいだな」
監督が笑ってる
「そんでも、つながってるって嬉しいっすよね」
「そうだな」
よかったなショーさん
「それじゃ、俺はそろそろ戻るよ」
「おいっす」
「来週からは、ヤッさんとスギさんもこっちに入るよ」

「マジっすか？　会いてえな」
「ヤッさんたちも森下に会えるって楽しみにしてるけどさ」
「昼休憩んとき顔見に行くんで」
「そうか、それじゃな」
「おいっす」
1ヵ月前までは　毎日あたりめえみてえに会ってたんだよな
「あの・・　ごめんなさい」
「え、なにが？」
「背中つねっちゃって」
「メチャ嬉しかった」
「つねられて嬉しいって感覚がわかんない」
「可愛いじゃん」
「私のやることをなんでも可愛いじゃんで片付けようとしてますよね」
「ちげえよ、マジ可愛かったから」
「なんかよくわかんないけど、いいです」
愛里が写真指さして
「これとこれとこれ買います」
「俺が買うって」
「そんなに買ってたらお金なくなっちゃいますよ」
「こんくれえじゃなくなんねえよ、1年ときからバイトしてたんだからさ」
愛里が俺の顔チラッと見上げて
「そろそろバイトしないんですか？」
「ん・・　かあちゃんが退院して落ち着いてからじゃねえとな」
「そうですよね、私、今週土曜日バイトなんですけど断った方がいいかな」
「愛里は、んなこと気にしねえでバイトしろよ」
「そうですね、私がいても何かできるわけじゃないし」
「そういうんじゃねえよ、愛里がかあちゃんのことでバイト休んだら、
　かあちゃんが気にしちまうからさ」
「あ、そうですよね、それじゃ土曜日はバイトしてきます」
「おう」
愛里と二人で壁の写真見ながら　階段上って教室に戻った

帰りの学活の時間
黒板の前のでっけえスクリーン下げて「上映会」が始まった
なんか　すげえオープニングだな　これって本物の摩天楼の映像じゃね？
愛里の・・つうか　口笛が流れて　おっ　すげえ　パッと俺たちの映像になった
すげえな　映画みてえだな
アップと全体　よくこんなん作れたな
あ　俺だけ？　空中回転キック
　「キャーーー！」「おおお！」「かっこいい！」

え、ちょ、今度は俺のキックが背景で他のメンバーが戦ってんのを　二回はやってねえよ
おおお　佐藤のピョレピョレ光線ときの目がすっげえイッちまってる
佐藤　最高のピョレピョレ光線だよ
正面では見れなかったからさ　みんなすげえ気合入ってピカッポンチョ爆弾投げてるよ
窓際の佐藤の目がいいな　これは敵はヤラレんな
高速空手の型攻撃　揃ってんじゃん　メッチャ揃ってんじゃん
あっ　ここか　志田が足やっちまったの　そんでも顔には出してねえよ　すげえよ
おおおお　金テープ　こんなにすげえカンジだったんか
　「すごーーい！」「最高！」「また感動しちゃったあ」
撮影班　ハンパねえな
「次はリレーです」
リレー？　　リレーは走ってるだけだろ
え？　　いつ撮った？　　一人ずつ　立ってるとこが　なんつうか　劇画？　　加工か？
“Yumi Sato Woman of the speed of light”
隣りの席の佐藤　光速の女・・か　だよな　メッチャ速かったよ
“その速さは江戸の飛脚もびっくり仰天”
「ハァアア？　　飛脚？」
隣りの佐藤　顔メッチャゆがめてっけど
「飛脚って、ふんどししめたハゲでしょ」
佐藤　ハゲではねえよ　マゲだよ
「なにこれ？　　ディスッてるの？」
江戸の飛脚は江戸から京都を三日で走る抜けるほど速えんだよ
あ　志田んとこ見れなかったな
“Ayana Sato Queen of Suspense”
窓際の佐藤　サスペンスの女王？
“追い詰められる者たちを恐怖で震え上がらせる走り”
あ　窓際の佐藤が　すっげえ怖え顔で振り向いて　隣りの佐藤と顔見合わせてる
「森下くん、これってさ、絶対ディスってるよね」
「や、それなりに？　　なんとか？　　速えっつうのを表現・・したっつうかさ」
「たとえが悪すぎだよ」
「あ・・まあ・・」
俺はわかんねえよ　俺はなんも知らなかったんだからさ
あ　川口んとこ見てなかった　ま　いっか
“Airi Uehara Angel of the earth”
愛里　地上の天使　ピッタリじゃん　マジそれ
“走る姿に魅了されない者はこの世にはいない”
いいこと言うなあ
「そうだけどさ、なんかさぁ」
「佐藤、なんかなに？」
「あ、森下くんの番」

俺の番て
“Daichi Morishita Prince of Perfect”
完璧の？　　Perfect は形容詞だろ　名詞は Perfection じゃね？
こういうの間違えっと愛里に叱られっぞ
“奇跡を魅せる神”
「なんかさぁ」
佐藤
「納得するけど、上原さんと森下くんだけディスられてないよね」
「そっか？」
「だって、志田くんは手負いの熊で、川口くんなんて倍速再生カンガルーだよ？」
倍速再生カンガルー・・　うめえこと言うな　俺は鹿だと思ったけどカンガルーか
スタートだ！　　つか　なんだこの BGM？　　あのグループの歌なんかな？
BGM 付きじゃさ　臨場感なくなんじゃね？
やっぱ佐藤メッチャすげえ
志田もさ　ここで転んでそんでこの気力でさ　ちっとグッとくんな
窓際の佐藤もかっけえな　この最後部との距離をこんな縮めるってさ
川口も　うん　鹿みてえだけど　すげえ燃えてた
愛里がバトン受け取って　走ってる　ヤベまだ泣きそうになってる
おおお　愛里が髪なびかせてるとこがスローモーションになった
いいな　これ　うん　メッチャいい
俺にバトン渡して　そのまんま倒れたときだ
　『行って！』
「ヤメテ・・」
愛里が声出して　下向いちまってっけど
　『走って！』
　『優勝！　　してーーーー！』
また BGM かかった
俺が走ってる　ここんとこ　ほぼほぼ憶えてねえんだよな
けっこう抜いてたんだな　まあ抜いたんだけどさ
ゴールに近づいて　つかさ　なんでスローモーションになるんだよ？
テープ切った・・とこもスローかよ
メンバーみんなが俺んとこに走ってきて
愛里が俺のそばに来て　俺に抱きついて泣いてる　たまんねえ
う・・ぉぉお　それぞれが走ってる場面が交差してすげえな
そんで　最後は俺の身体がテープ切ったとこ大写しで　終わった
　「最高！」「また泣いちゃった！」「編集最高！」
ここまで映画みてえにするとは思わなかったな
「応援タイムと動画とリレータイムの動画と写真は円盤化したから」
円盤化？
「応援タイムのメンバーには無料で配るよ」

無料？　マジ？
「リレーのもメンバーには無料で、応援タイムとリレーの動画欲しい人は申し込んで」
俺と愛里はどっちもタダか
「それじゃ、申し込む人はこっち来て」
え、マジ？　クラス全員？
「終わった人は帰っていいよ」
俺と愛里は申し込まなくていぃんだよな
「愛里、帰ろう」
愛里が俺のこと恨めしそうな顔で見上げてんだけど？
「愛里、どした？」
「あそこまでやる必要あります？」
「映画みてえだったな」
「フッツーに動画撮るだけでいいのに」
「そんでも撮影班があんなすげえカンジで作ったんだからさ」
「まあ・・　そうですけど」
「ごめんね」
川口？　なんで川口が謝んだ？
「僕の妹のためにああいう編集してくれたんだってさ」
「モエちゃんのために？」
「K-POP フゥンならああいうカンジが好きなんじゃないかって、撮影班がさ」
「えぇぇぇ、ごめんね、私、文句言っちゃって」
「いいんだよ、僕もまさかあそこまで凝るとは思わなくてビックリした」
「モエちゃんのためだったら、うん、そうだよね」
「まあ好きそうだけどね」
「モエちゃんに今日見せるの？」
倍速再生カンガルーって言われてんのをか
「うん、もらったら仲間にも見せるって言ってた」
仲間にも見せんのか　倍速再生カンガルー
「仲間って？」
「衣装貸してくれたりした人とかさ、まあいろいろ」
「そう・・だよね、衣装貸してもらって助かったもんね」
「仲間にだけだから安心して」
「うん、モエちゃん、、喜んでくれるといいね」
「喜ぶよ、楽しみにしてたから」
自分のにいちゃんが倍速再生カンガルーって言われて・・
「それじゃ上原さん、さようなら」
「川口くん、さようなら」
「森下、さようなら」
「あ、おう、川口、またな」
撮影班もさ　せめて川口のことは　もっとなんかこう　なんつうか・・

「どうしたんですか？」
「あ、や、なんもねえよ」
「川口くん、倍速再生カンガルーとか言われて」
「だよな、もっとさ、なんつうかさ」
思いつかねえけどさ
「私のこともおちょくって」
おちょくる？　どこが？
「まあ、モエちゃんが喜んでくれたらどうでもいいです」
「あ、うん、だな」
俺と愛里も教室出た

校門の前
「駅まで行くんですよね」
「うん」
「いってらっしゃい」
愛里の手ぇにぎって
「そんじゃ、いってくる」
「はい」
「すぐ帰ってくっから」
「おとうさんのそばにゆっくりいてあげてください」
「そんでもさ」
「手を離してくれないと私帰れないんだけど」
「あ、そ、そっか」
愛里の手ぇ　ゆっくり離して
「それじゃ」
愛里が家の方に向かってった
そんじゃ　俺も行くか

かあちゃんの病室

病室の扉　そ〜っと　少しだけ開けて覗いたら
かあちゃんはまだ眠ってて
とうちゃんは母ちゃんの横に座って　かあちゃんの手ぇにぎってて
かあちゃんのこと見てるとうちゃんの目が　夢ん中にいるみてえで
かあちゃんのこと　好きが溢れてて　俺が泣きそうになるくれえ溢れてて
なんか　なんだか　とうちゃんが　俺とおんなしくれえの歳みてえに見えて
眠ってるかあちゃんの顔も　20 代のかあちゃんに見えて
俺は　なんだか　タイムスリップして　かあちゃんがねえちゃん生んだときの
そのときの空間に来ちまったみてえなカンジがして
あんときもこうだったんかな　俺はまだ生まれてもねえし見たこともねえけど
なんか　俺　この空気に　二人の　二人だけの空気に圧倒されて　静かなのに圧倒されて
この中に入っちゃいけねえんじゃねえかなって
「森下さんのお見舞いですか？」
え？　あ　看護師さん
「森下さん、点滴換えますね」
看護師さんが中に入ってったら　一瞬であの空気が消えて
「ダイチ」
「と・・　とうちゃん」
「どした？　んなとこで突っ立っててよ」
「あ、や、とうちゃんの握りメシ持ってきた」
「悪りぃな、ありがとな」
「や、全然」
「中入ってこいや」
「あ、おう」
看護師さんが点滴交換してても　かあちゃんはまだ眠ったまんまだ
「それじゃ、何かあったら知らせてくださいね」
とうちゃんがコクンてうなずいて　俺は・・
「ありがとうございます」
看護師さんが出てって
俺は　んっと
「とうちゃん、これ」
とうちゃんの膝の上に握りメシ入った袋を置いた

「アイリちゃんは・・　食ったんか？」
「とうちゃんが食うっつったら、弁当食ってくれた」
「そっか、そっか、よかったな」
「うん、んっと、とうちゃんも食えよ」
「俺は・・」
とうちゃんが　かあちゃんの方見て
意識がかあちゃんにいっちまって食欲ゼロか
「食べなさい」
「え？」「え？」
かあちゃんが　ゆ〜っくり目ぇ開けた
「ねーちゃん！」「かあちゃん！」
あ　とうちゃん　ねーちゃんて　やっぱ意識が昔にいってんだな
「そんな深刻な声出さないでよ、眠ってただけなんだから」
「かあちゃん、今意識戻ったの？」
「意識って、看護師さんが来たときに目が覚めただけよ」
「そっか、どっか痛てえとかねえの？」
「ないわよ、大手術したわけじゃないんだから」
「そんでもさ」
「カズオ、気分転換に表のベンチでおにぎり食べてきたら？」
「そんでも俺は」
「ここにずーーっと座ってジーーッと見てたって意味ないでしょ」
意味ねえとか　かあちゃんさぁ
「あ、うん、あの」
「ついでにトイレにも行ってきて」
「そんでもよ」
「ダイチがいるでしょ」
「とうちゃん、握りメシ食って便所行ってきなよ」
「え、あ、んと、そんじゃ」
「俺いっからさ、ゆっくり食ってゆっくりウンコしてきなよ」
「あんたもウンコって」
かあちゃんがフッて鼻で笑った　笑った　よかった
「そんじゃ、ちっと行ってくっからよ」
「おう」
とうちゃんが何回もかあちゃんのこと振り返って見ながら部屋から出てった
「かあちゃん、なんか飲む？」
「17 時までは飲めないのよ」
「そっか」
「愛里さん」
「愛里は明日来るっつってた」
「そうじゃなくて」

なに？
「カズオが食べないなら自分も食べないって言ったんですって？」
「あ、まあ、うん」
「ダイチが困ってたって、カズオがね」
「うん」
「おにぎりを食べて見せたらやっと食べて、よかったって言ってたわよ」
「うん、とうちゃんのおかげで愛里も食った」
「愛里さん、すごいわね」
え？
「私がこういうふうになると、カズオは・・　ヒトミを生んだあとも、
　目を開けたらベッドの横で倒れちゃって何がなにやらだったわよ」
かあちゃん　愛里が何やろうとしてたんかわかったんだな
「あとで聞いたら、もう無理ですって言われるまで血を摂って、なんにも食べなくて、
　トイレもほっとんど行ってないって、バカじゃない？」
「そんだけ心配だったんだよ、記憶失くすくれえだったんだからさ」
かあちゃんが　寝たまんま俺のこと横目でジロッと見た
「カズオまで倒れちゃったら、ヒトミはどうするのよ」
「んなこと俺に言われてもさ」
「こうなっちゃうとね、もうどうにもできないと思ってたけど、愛里さんがね」
「うん、愛里が・・　愛里だったら心配になっちまうって」
「愛里さんだったら？」
「もし愛里が入院して、俺がなんも食わねえでそばにいたら安心できねえって」
え？　かあちゃんがギュッて目ぇつぶっちまった
「かあちゃん、どっか痛てえの？」
「ちがうわよ」
「マジで？」
「愛里さんがいてくれてよかったわ」
あ　目ぇ開けた　なんか　ホッとして
「まあいろいろ巻き込んでしまって申し訳ないけど」
「俺も愛里がいてくれて心強えよ」
「あんたは」
かあちゃんが　フッて鼻で笑った
「愛里さんのこと守るとか言っておいて、愛里さんに守られてるじゃない」
「うん、なんか、マジそう思う」
「そこは素直に認めるのね」
「マジそうだからさ」
「あんたはもう帰っていいわよ」
「まだとうちゃん戻ってきてねえから」
「大丈夫よ、少しくらい、看護師さんだっているんだから」
「そんでもそこはとうちゃんの気持ち大切にしてえからさ」

「カズオの気持ち？」
「かあちゃんのこと、すげえ大切、大切なんてもんじゃなくてさ」
「死ぬようなことじゃなかったんだから」
「かあちゃんにちこっとでもなんかあったら」
今の俺には　すげえわかる
「自分のこと切り刻まれて血ぃ流すよか辛れえんだよ」
「あんたも大げさなんだから」
笑ってっけどさ
「とうちゃんにとっては、かあちゃんは世界なんだよ」
「世界！　　まったく」
「かあちゃんにもしものことがあったら、とうちゃんの世界は壊滅する」
かあちゃんが　かあちゃんの目が怒ったみてえに俺のこと見て
「私だって同じよ」
えっ？
「今日の手術の最終結果は明日の午前中には出るそうよ」
「あ、そ、そっか」
「あんたからカズオに言ってくれない？　　もう献血しなくていいって」
「俺もさっきしたよ」
「あんたが？　　なんで？」
「多い方がいっかなって」
「いっかなって、もう必要ないわよ」
「そんでもさ」
「病院は大助かりね、O 型の Rh マイナスなんて希少だから」
「なんか、お礼言われた」
「でしょうね」
扉が開いて
とうちゃんがちっとハァハァしながら入ってきた
「とうちゃん、もう戻ってきたの？」
「握りメシ食った、便所も行った」
なんか　子どもみてえに報告してっけど
「もっとゆっくりしてくればいいでしょ、お日様を浴びるとか」
「かあちゃん、もう夕方だよ」
かあちゃんがギロッと俺を睨んだ　ヤベ
「ずっと病室の中にいないで外の空気吸ってきなさいよ」
「俺はずっと外にばっかいたからよ、屋根があるとこにいれんなんてありがてえよ」
とうちゃんニッコニコして　かあちゃん黙っちまった
「んっと、そんじゃ俺、そろそろ帰るよ」
「ダイチ、ありがとな」
「明日も握りメシ持ってくっからさ」
「んな、毎日んなことしねえでもよ」

「とうちゃん食ってくんねえと愛里が食わねえからさ」
「あ、そっか、そうだな、アイリちゃんがな」
チロッとかあちゃんのこと見たら　いつものフッて顔してさ
「そんじゃ、かあちゃん、また明日な」
「はいはい」
とうちゃんが嬉しそうな顔して　かあちゃんの横に座って
かあちゃんの顔見てるよ
扉閉めて
この中は　また昔に戻ってんのかな　タイムスリップしたみてえにさ
とうちゃんとかあちゃんの時間は　いっつも若けえときに戻れんのかもしんねえな
好きが溢れててさ　一緒にいた年月分もっと溢れててさ
今なら　俺もわかる　そういうカンジっつうの？
運命の人とならさ　ずっと　あ　早く帰って晩メシのしたくしねえと
愛里が待ってっから　愛里が待ってる
帰ろう

電車の中
『愛里』送信
ピコン
『おかあさん　どうでしたか？』
『目覚ましてた　元気だったよ』送信
ピコン
『よかった　よかったです』
『愛里がいてくれてよかったっつってたよ』送信
ピコン
『私が？　　なんで？』
『愛里のおかげでとうちゃんメシ食ってっから』送信
ピコン
『それはあなたのおかげですよね』
『愛里が食わねえっつうと』送信
『とうちゃん食う w』送信
ピコン
『私の名前を使っておとうさんを脅さないでください』
ピコン
『なんか申し訳なくなっちゃう』
『かあちゃんもとうちゃんには　食って元気でいて欲しいからさ』送信
ピコン
『そうですよね』
ピコン
『だったらいくらでも使ってください』

いくらでもって　愛里は・・
『かあちゃんが』送信
『俺が愛里を守るっつっといて』送信
『愛里に守られてるって w』送信
w つけたけどさ　マジでさ
ピコン
『それは過剰評価です』
ピコン
『あなたを守るとか』
ピコン
『荷が重たすぎる』
ハハハ
『愛里がいてくれるだけで』送信
『俺は守られてっから』送信
ピコン
『私は神棚じゃないです』
ヤベ　声出して笑いそうになっちまってる
『愛里大明神様』送信
ピコン
『ぜ〜んぜんご利益なさそうな名前』
「ハハ・・」あ　ヤベ　声出しちまったよ
『愛里　晩メシなに食いてえ？』送信
ピコン
『あなたのナポリタン』
俺の　ナポリタン
『オーダー承りました w』送信
ピコン
『よかった』
ナポリタンそんなに食いたかったんか
ピコン
『あなたがあなたらしくなってる』
え　俺が　俺らしく
愛里は　LINE のやり取りだけで　わかってくれんのか
『愛里』送信
言葉　出ねえ
ピコン
『はい』
なんか　いろいろ　思いが溢れて　言葉出ねえ
ピコン
『どうしたの？』

言えるのは　結局これだけで
『好きです』送信
これに　すべてが詰まってて
ピコン
『私も好きです』
愛里　愛里　愛里
『』送信
ピコン
『イチゴ？ wwww』
『買ってくっから』送信
ピコン
『はい　お願いします』
『愛里』送信
ピコン
『はい』
『愛里』送信
ピコン
『なに？』
『呼びたかった』送信
ピコン
『なにそれーーー』
ピコン
『まじめにかまえてて損しちゃった』
ハハハ　損てさ
『愛里の名前呼べるしあわせ』送信
『浸らせてくだせえ』送信
ピコン
『浸ってないで』
ピコン
『早く帰ってきて』
ピコン
『お腹空いてきました』
そっか
『おう　速攻で帰っから』送信
『つか』送信
『俺　今電車の中で』送信
『電車ん中走っても』送信
『電車以上は早く帰れねえ』送信
ピコン
『バカなの？ wwww　マジ笑う wwww』

笑ってくれよ　愛里が笑うと俺はしあわせだからさ
ピコン
『電車の中は走らないで w』
『はい！』送信
ピコン
『子どもみたいで笑う www』
しあわせだ　愛里　俺は
『しあわせだーーー！』送信
ピコン
『そうですか』
その塩加減もさ
『そうですよ』送信
ピコン
『あなたの家で待っててていいですか？』
『いいよいいにきまってんじゃん』送信
ピコン
『それじゃ　あとで』
『おいっす』送信
なんか　なんか　よかったあああ

ナポリタン

「ナポリタ〜ン！」
愛里が嬉しそうな顔でナポリタン見てさ
「いただきます」
「おう」
愛里の好きなサラダも作ったから
「あっ！」
「ど、どした？」
「私・・　ナポリタンなのに、知ってたのに」
「あ、うん、どした？」
「白のトップス着てきちゃったぁ」
「すげえ可愛いよ」
「そこじゃなくて！　シミ！　つけちゃう絶対つけちゃう」
「ついたら俺が取るからさ」
「やだぁ、つけたくないです」
「んっと、そんじゃ、あ、タオル、首んとこにこう下げてさ」
「赤ちゃんみたいでイヤです」
「そんでもさ」
「着替えてきます」
「そしたらスパゲティ伸びちまうけど」
「ですよね・・　それじゃ・・　ゆっくり食べます」
「あ！　俺のＴシャツ着ればいいじゃん」
「あなたの？」
「いっくらシミつけてもいいからさ」
「それじゃ・・　お借りします」
「おう」
「あ、ちょっと待って」
「なに？」
「あの赤Ｔはイヤ・・です、借りるのにいろいろ言って申し訳ないけど」
「あの赤Ｔ以外な、おっし」
部屋に走ってて　どれだどれだ　愛里に・・　あ　これじゃね？
「愛里、これ」
「これ・・　クラスＴシャツ」
「ちゃんと洗ってあっからさ」

愛里がチラッと俺のこと上目遣いで見て
「それじゃ・・」
ズボッと上から着た
「やっぱり大きいですね、私のはピッタリなのに、あなたのは」
「愛里、いいから食えよ」
「あ、はい」
愛里が　スパゲティクルクルッてフォークに巻いて
「美味しい」
メッチャ嬉しそうな顔してさ
「そっか」
愛里が俺の作ったメシ食ってくれてんのが　俺は嬉しいっす
「よかったですね、おかあさんの手術成功して」
「うん」
「おとうさんも、おむすび食べてくれて」
「愛里のおかげだよ」
「私は・・　ただ、私だったら心配になっちゃうと思っただけで」
「かあちゃんもそうだったみてえでさ」
「それはそうですよ」
「昔のことでブツブツ文句言ってさ」
「昔のこと？」
「カズオまで倒れちまったらヒトミはどうすんだってさ」
「そうですよ、そういうこと考えてくれないと安心して療養できないですよ」
「俺はちゃんと考えっから、愛里に心配させねえから」
「おとうさんの話ですよね？」
「あ、うん、とうちゃんの・・こと」
「おとうさんて・・　自己犠牲・・　ちがう、おかあさんのためなら自分はどうでもいいみたいな」
「そりゃそうだろ、大切な人になんかあったら、自分のことなんか考えてらんねえよ」
「自分のことを・・　考えてられない？」
「大切な人のためならさ、自分の命だってどうでもよくなんだよ」
「命？」
「その人がもし・・　この世からいなくなったら」
俺は・・　とうちゃんのこと話してんのか・・　自分の気持ち伝えてんのか・・
「世界は壊滅しちまうんだからさ」
愛里が　ジッと俺のこと見てっけど　黙って俺のこと見てっけど
「愛里？　　どした？」
「それは・・」
それ？
「おかあさんにとっても同じですよね」
「え？　　かあちゃん？」

「おとうさんがもしこの世からいなくなったら」
とうちゃんが？
「おかあさんの世界は壊滅しますよ」
「えっ？」
「えって、そうでしょ？」
「や、んなこと考えたことねえから」
「考えたことがない？」
「あ、んと、ごめん」
「私に謝らなくてもいいですけど」
「そんでも、かあちゃんの世界が壊滅するっつうのは・・」
「私がずっと感じてたこと言っていいですか？」
「あ、うん」
「私が勝手にそう思ってるだけだから当たってるのかどうかはわかんないけど」
「愛里、言ってくれよ、聞きてえよ」
愛里が俺の顔チロッと見て　フォークでゆっくりスパゲティ巻きながら
「おとうさんて・・　今もずっと片思いしてるって思い込んでるっていうか」
「へ？」
「たとえ、もし、もしも、おかあさんがおとうさんに関心がなかったとしても」
愛里は　何が言いてえんだ？
「おかあさんがおとうさんのこと嫌いだとしても、それはどうでもいいみたいな」
「それは、とうちゃんはかあちゃんのそばにいるだけでしあわせだからさ」
「おかあさんも同じでしょ」
「え？」
あれ？　なんか・・　どっかで・・
「そばにいるだけでしあわせって、すごく好きってことですよね」
「うん、メッチャ好きだから、だからそばにいてえって」
「おかあさんがおとうさんにそばにいてって言ったんですよね」
「ああ、うん」
「むしろ、最初にそう言ったのはおかあさんですよね」
「そう・・だけど、あんときは、かあちゃんもまだ」
「あなたは好きでもない人に、そばにいてって言いますか？」
「言わねえよ、ぜってえ言わねえ」
「たとえそのとき気持ちが弱ってたとしても？」
「俺は、んなことで好きでもねえ人に、んなことぜってえ言わねえから」
「ほら」
「ほら？　ほらっつうのは？」
「おかあさんは、ああいう性格だし」
ああいう？
「すっごい照れ屋さんだから」
「照れ屋？　かあちゃんが？」

「えええええ？　わかってないの？」
「照れ屋だと・・　思ったことは・・」
「やだもう、全然わかってないって」
「え、愛里、ごめん、俺」
「なんかおかあさんがかわいそう」
「えっ　愛里、俺、悪りぃとこあったら直すからさ」
「そういうことじゃなくて」
「そんじゃ、なに？　愛里、なに？」
「もういいです」
「んなさ、バツッと切んねえでくれよ」
「だって、もうなんて言えばいいのか」
「頼むからさぁ、俺、わかるよう努力すっからさ」
「努力とかの問題じゃないんだけど・・」
「そんじゃなに？　どうすればいい？」
愛里が両手で口んとこふさいで　目だけ動かしてて
「愛里？」
「今、どう言えばいいのか考えてるの」
「あ、うん」
「え・・・っと　まあ・・　それはそれで」
「それはそれ？」
「おとうさんは、おかあさんに片思いしてるみたいに好きで」
「あ・・えっと、うん」
「おかあさんは、そういうおとうさんを丸ごと好きで」
「ん・・　そんで？」
「それでいいと思います」
「んっと、そんじゃ、今まで愛里が話してたことはどうなんの？」
「どうなるのって、まあ、おとうさんもおかあさんも、お互いそのまんまで好きなわけだから」
「あ、うん、そんで？」
「なにかあったら」
「な、なにか？」
「今回みたいなこと、もうあって欲しくないけど、あったら」
「あったら？」
「あなたがなんとかすればいいんじゃないですか」
「お、俺？」
「はい」
「俺に丸投げ？」
「丸投げって、だって、他に誰がいるの？」
「や、そんでも、俺がどうにかできることなんかな」
「今日みたいに、おむすび作って持って行ってあげたり」

「そんだけ？」
「けっこう重要ですよね、おとうさんが食べてくれるって」
「あ、まあ、うん」
「おとうさんがちゃんと食べてくれたら、おかあさんも安心だし」
「そんでもさ、とうちゃんは愛里が食わねえからって思い込んでて」
「どう思っても食べてくれればいいじゃないですか」
「そんじゃさ、もしまたとうちゃんが食わねえってなったら」
「私も食べない」
「え？」
「有効手段だってわかりました」
「愛里ぃぃ、それはもうやめてくれよぉぉ」
「私だってやりたくないけど」
「だったらさ」
「あなたのナポリタン、美味しい」
「そっ・・か」
「アーーーーッ！」
「え、ど、どした？」
「落としちゃったあ」
「え？」
「T シャツにスパゲティ、やだもーーっ」
愛里が T シャツの裾つかんで広げてて
俺は愛里んとこ駆けよって　T シャツの上に落ちたスパゲティつまんで
「エーーーーッ　食べる？ それ食べる？」
「汚くねえじゃん、T シャツ洗ってあんだしさ」
「だって私が食べてたのを・・　あ、ついてる」
「あ？　なに？」
「プッ　鼻のここにケチャップついてる」
「マジ？」
「手で拭かないで！　えっと・・　あ、これで」
愛里が後ろに置いてあるティッシュ一枚出して　俺に渡した
「口の両脇にもついてますよ、フフッ子どもみたい」
「愛里もついてんぞ」
「え？　どこ？」
俺は・・
「ここ」
愛里のくちびるに
「もう！　やめて！　ケチャップだらけの」
「ご褒美」
「ご褒美？　なんのですか？」
「とうちゃんに握りメシ作って持ってったご褒美」

愛里が俺のことジッと見て　そんで
「ブフッ」
「なんで笑うの？」
「だって、なんか・・　ゴーちゃん思い出しちゃって」
「ごうちゃん？」
「隣りで飼ってたゴールデンの」
「なんで今ゴールデンなんだよ」
「ボールを投げて走って持ってきたからご褒美くださいみたいで　ハハハ」
「笑うなよぉ」
「だ〜って　ハハ・・　あ・・」
愛里の　くちびる　柔らかくて　すげえ　そんで・・　あ・・　ヤベえ・・俺の・・
ヤベえ・・　俺の・・　理性が壊滅
「ハァハァハァ」
しそうだった　ヤベーーー
「また息止めてたんですか？」
「や・・　じゃねえけど」
「あなた、私に食べろ食べろって言ってるくせに」
「え？　あ？」
「私が食べるのをジャマしてますよね」
「あっ　ご、ごめん、つい」
「あなたも食べてください、まだ残ってますよ」
「あ、おう、食う」
席に戻って
「あなたにもしものことがあったら」
「俺？」
愛里が俺のこと見てて　そんで　視線そらして　なんか考えてっけど
「愛里？」
「あなたに・・　もしものことがあったら・・」
「愛里、んな心配すんなよ、俺、体力だけは自信あっからさ」
愛里が　上目遣いで俺のこと見て
「俺、病気したことねえしさ」
「ときどき熱を出しますよね」
「え？　あ・・　あれは・・」
「知恵熱」
「あ・・　すいません」
「まあ、それは、しかたないですけど」
「俺、熱出さねえようにすっから」
「そういうのって、自分の意志でなんとかできるものなんですか？」
「あ、や、なんつうか、気をつけます」
「けっこう心配になるから」

「え、マジ？」
愛里が　俺のこと　心配してくれんの？
「マジって、心配しますよね？」
「嬉しいっす」
「なにが？」
「愛里が俺のこと心配してくれて」
愛里が　俺のこと睨んでっけど　やっぱ嬉しいからさ
「私は・・　嬉しくない」
「俺は嬉しい」
「そうですか」
ツンとする顔もさ　好きです

俺が後片付けしてんのを横で見てたときも　愛里の部屋まで送ったときも
愛里はなんか元気ねえっつうか　あんましゃべんなくて
「愛里、どした？」って聞いても「どうもしてないです」っきゃ言わなくて
どうしたんかな　なんか考えてんのかな
とにかく・・　勉強して　シャワーだ

シャワーして　風呂掃除して　洗面台も　ついでに便所掃除もした
明日の朝は愛里の部屋の風呂と洗面台掃除しよう
帰ってきたら・・　あ、ちっと遅くなっけど　愛里のベッドルームと　掃除機かけねえとな
部屋に戻ったら
愛里から LINE 来てる　いつもよか早えな
『なんかよくわからなくて』
なにがだ？ どした愛里？
『自分でもなんなのかわからなくて』
『あなたにどうしたって聞かれても』
『なんなのかわかんないから言えなくて』
なにがあった？
『でも　やっと　なんとか言語化できそうだから』
『送ります』
なんのことだ？
『私は今までずっと自分のことだけでいっぱいいっぱいで』
『人のことを考える余裕なんてなくて』
んっと？　　なんでこんなこと
『パパが倒れたって聞いたときも』
『ただのいぼ痔だったけど』
『いぼ痔だって知らなかったときは』
『パパにもしものことがあったらどうしたらいいのって』

そりゃそうだよ　そりゃそう思うよ
『パパの心配じゃなくて』
『学校のこととか生活のこととか』
『自分のことばっかりで』
そりゃ不安になるよ　すげえ不安になってたもんな
『パパがいなくなるってことより経済的なことばっかりで』
『なんか　ひどいなって　でも正直それだけで』
だって愛里はまだ高校生なんだからさ
『夕食のとき　もしもあなたがいなくなったらって考えたら』
え？
『現実的な部分では』
『あなたがいなくても経済的に困ることはないし学校も続けられて』
『何も困ることはなくて』
だよ・・な　俺はまだ愛里のこと養うこともできねえからさ
『でも　あなたがいなくなったらって考えたら』
『なんかもう　考えるだけで悲しくなっちゃって』
え？
『悲しいとか　そういうレベルじゃなくて』
『息が苦しくなっちゃって』
愛里・・
『こんなの初めてだから』
『なんか辛くて』
『逆にあなたのこと好きにならなかったら』
え？　愛里　んな
『こんな辛くならなかったのかなって』
愛里・・　俺は・・
『でも　やっぱり』
『あなたといるとしあわせだから』
愛里・・　涙出てきて・・
『あなたがいないとか考えられなくて　考えたくないし』
『だから』
『おやすみなさい』
愛里　愛里　俺　今メッチャ・・
『愛里』送信
『俺はぜってえいなくなんねえ』送信
『愛里があっち行けっつっても　いなくなんねえ』送信
『愛里が俺のこと好きじゃなくなっても』送信
『そばにいる　死んでもそばにいる　死なねえし』送信
既読　ついた
ピコン

『絶対死なない？』
『ぜってえ死なねえ』送信
ピコン
『それはムリですよね人間だから』
そう・・だけどさ　そんでもさ
『俺は愛里よか先にはぜってえ死なねえ』送信
ピコン
『私が 100 歳まで生きちゃったら？』
『俺は 101 歳まで生きる』送信
ピコン
『私は 100 歳までは生きたくないです w』
w ついた　よかった
『俺は愛里よか一秒長く生きる』送信
『だから心配すんな』送信
ピコン
『ほんとに？』
ピコン
『私より一秒長く生きる？』
『マジで』送信
『死にかけてても意地で一秒長く生きる』送信
ピコン
『意地って w』
『愛里　電話していい？』送信
ピコン
『ダメ』
『なんで？』送信
　あ・・れ？　　返信がねえ
『愛里　電話すっから』送信
電話　発信音　出ねえ
ピコン
『今ダメ』
ピコン
『泣いてるから』
泣いてる？
ピコン
『なんか　ホッとして』
ピコン
『なんか　嬉しくて』
ピコン
『涙が出ちゃって』

愛里
『愛里の泣き声聞きてえなあ w』送信
ピコン
『イヤです w』
『いっつも聞いてっけどなあ w』送信
ピコン
『あなたほどは泣きません』
あ・・
『そうっすね　俺は泣き虫っすから』送信
ピコン
『自覚ある wwww』
『あります w』送信
ピコン
『明日は私も一緒におかあさんのところに行きます』
『愛里　ありがとう』送信
ピコン
『それじゃ　おやすみなさい』
『愛里　おやすみ』送信
愛里　愛里ぃぃぃぃ　俺のこと　好きって　俺がいなくなったらって
んなこと考えてたんかよ
なんかもうさあ　たまんねえよ　たまんなすぎんだろ
愛里　心配すんな
俺はマジで愛里よか一秒長生きすっから
なんかあったときも　メシ食うから　元気でいっからさ
なんか　興奮して寝れねえな　寝ねえとな　明日も学校だしな
寝よう

ハチミツトースト

愛里の部屋のドアホン鳴らしたら
ドアが開いて
「愛里」
「おはようございます」
「おはよう、愛里、あのさ」
「はい」
「俺、マジで、ぜってえ愛里よか一秒長く生きっから」
愛里が真顔で　俺の顔ジッと見て
あ　泣きそうになっちまったんか　そんでも俺はマジでそう思っ
「そうですか」
え　クルッと背中向けた　え？
あ　またこっち向いた
「ごめんなさい」
「え、な、なに？」
愛里が　メーーーッチャ困った顔になって
「キッチンの床が」
キッチンの床？
「悲惨なことになってしまいました」
どういうことだ？
キッチンに行くと　床にトースト一枚落ちてて　そんで　なんか薄茶の・・
「ゆうべハチミツトーストの画像見ちゃったら食べたくなって、さっき作ろうとしたら」
俺はかがんで　これはハチミツか
「トーストにハチミツ塗ろうとしたら熱くて、アッツーって・・放り投げちゃって」
「こんなんすぐ片付けられっから」
「朝の忙しいときに仕事増やしちゃって」
「こんなん仕事に入んねえよ、つか仕事じゃねえし」
トースト拾って　キッチンペーパーの上に置いて　あとは
「そんじゃ愛里、ハチミツトーストまだ食ってねえの？」
「はい、もうこんなになっちゃったら」
「俺が作っからさ」
「え？　　いいの？」
「作るっつうほどのもんじゃねえし」
床拭いて　おっし

「イチゴのヨーグルトがけは食ったんか？」
「まだです」
「そんじゃ持ってくから愛里座ってろよ」
「え、なんか・・　朝食は自分でできるって言っちゃったのに」
「いいって、つか、たまに愛里に朝メシ作りてえじゃん」
「でも、なんかあああああ！　ちょ、それ、床に落としたのにーーー！」
「こんくれえなんともねえよ」
「えぇぇ」
これは・・
「愛里、トーストにはハチミツだけ？」
「ハチミツトーストだから」
「そっか」
「なんですか？」
「俺なりの、作ってもいっかな」
「なんでもいいです、私は作れないから、もう作らないし」
「おっし」
切り目入れた食パン焼いてる間に　イチゴのヨーグルトがけ用意して　紅茶もだな
焼けた　そんでこの上に・・　よっしゃ
「愛里、できたよ」
「わあ！　切り目が入ってる」
「喫茶店のトーストってそういうのじゃん、厚切りの方がいぃんだけどさ」
「ゆうべ見た画像のも厚切りだったけど、朝からあんなには食べられないから」
愛里が一切れ口に入れた
「わ・・　美味しい」
「そっか」
「なんだろう・・　塩気？」
「バターと塩」
「塩？」
「バターも塩っ気あっけど、ちっと塩かけるとハチミツの甘えのと合うっつうかさ」
「これはヤバイやつですね」
「ヤバイ？」
「しょっぱいのと甘いのって無限ループの組み合わせじゃないですか」
ハハハ　無限ループって　可愛いなあ　じゃねえよ　風呂掃除しねえと
「どこに行くんですか？」
「風呂掃除してくる」
「そんなに汚してません」
「そんでもさ」
「たまには・・」
愛里が　立ち上がってキッチン行って　なに？ どした？
戻ってきた　イチゴのヨーグルトがけ？　まだここにあんじゃん

「朝食一緒に食べてください」
「え？」
「えっと、あなたがバタバタ掃除してたら」
バタバタ？
「落ち着いて食べれないし」
「あ、ごめん」
「ごめんとかじゃ・・なくて、なんか、朝は一緒に食べたことないなって」
一緒・・に　一緒に？
「たまには・・　なんか・・　そういうのも」
「おう、食う、朝メシ、一緒に食う」
「そうですか、ただのイチゴのヨーグルトがけだけど」
「さっきトースト食ったからさ」
「あああああ、そうだった！　床に落ちたの食べちゃって」
「甘かった」
「私はお塩なんて思いつかないから」
「美味かった」
「床に落ちたの・・　食べるかなあっ」
「愛里のお父さんが稼いだ金で買ったパンじゃん」
「え・・」
「もったいねえじゃん」
愛里が俺のこと上目遣いで見て
「おとうさんの真似しちゃって」
「そうっすよ、俺はとうちゃん目指してっから」
「だからって床に・・　あ！　ゆうべのごはんもさっきのも、私が落としてばっかり」
「いっくらでも落としていいよ、俺やとうちゃんが食うからさ」
「おかあさんは、床にごはん落としたりパンを落としたり・・しないですよね」
「かあちゃん作んねえもん」
「ですよね、それに、おかあさんは私みたいにおっちょこちょいじゃないから」
「かあちゃんけっこうおちょこちょいだよ」
「ウッソ〜、ちがいますよ」
「マジマジ、道歩いてるときにスッ転びそうになったりさ」
「それは・・　急いでたんですよね、おとうさんに指輪拾ってもらったときって」
「今でも歩道から落っこちそうになったりさ」
「え・・」
「とうちゃんが気ぃつけてっけど」
「でもそれは、おかあさんはいつもいろいろ考えなきゃいけないことがあって」
「若けえときだけどさ、使用済みのタンポン」
「タッ・・」
「まあこれはねえちゃんから聞いたんだけど」
「おねえさん？」

「ペーパーホルダーの上に置き忘れちまって」
「えっ」
「とうちゃん見っけて」
「えぇぇ・・」
「それからかあちゃん気ぃつけるようになったらしい」
「あなたは・・　見たことがあるんですか？　　あの・・　使用済みの」
「ねえよ、ねえちゃんもかあちゃんに言われてっから、気をつけろって」
「もし・・　もし私が・・　使用済みの・・　置き忘れたら・・」
愛里が　なんかメッチャ真剣な顔で
「あなた、どうしますか？」
「どうもしねえけど、捨てっけど」
「私に言わないんですか？」
「なにを？」
「置き忘れてたって」
「んなこと言う必要ねえじゃん」
「言ってくれなきゃ気をつけられないですよね」
「愛里」
「なんですか？」
「生理んときはすげえ辛えんだろ？」
「そうですけど」
「んな、使用済みのナプキン置き忘れるなんてどうでもいいじゃん」
愛里が　なんか目ぇかっ開いてっけど？
「なんか・・」
「あ？ なに？」
「そんなふうにベッタベタに」
ベッタベタ？
「甘やかされたら、私、ダメ人間確定ですよ」
「んなことねえよ、甘やかすとかじゃねえよ」
「床に落としていいとか、使用済みナプキン置き忘れていいとか」
「そんなんフッツーのことじゃん」
「フッツー？　　ふつうって・・　それはふつうじゃないと思う」
「なんで？」
「だって、そんなの、すっごいだらしない女ですよね」
「だらしねえ女じゃねえよ、全然ねえよ」
愛里が　口開けて俺のこと見てっけど
「愛里？」
「あなたは・・」
「俺？」
「私が・・　何をしたら・・　イヤだなあって思う？」
「何しても思わねえ」

「なんで？　あるでしょ、ひとつくらい、これはイヤだって」
「ねえよ」
「ウソ、あるなら言って、言ってくれないと気をつけられないから」
「ねえもん」
「えっと・・えっと・・　あ、それじゃ」
愛里が立ち上がって　俺のそばに来て
「これは？」
右手の指　ピトッて俺の頬に　つけた
ドッキドキしてんだけど　俺
「ハチミツでベトベトになった指を頬っぺたにつけたら？」
「へ？」
「こんなことされたら？」
なんだよそれ
「え？ 笑ってる？　なんで？　やだ、気持ち悪い」
「メッチャおもしれえじゃん」
「おもしろい？　私ならキレるけど」
「んなことするなんてさ、おもしれえよ」
愛里が真顔になって　なんか言おうとして　そんで目ぇ閉じて
「とにかく」
とにかく？
「顔を洗ってきてください」
「俺、顔洗ってきたけど」
ヒゲも剃ってきたしさ
「私がつけたハチミツがついてるからっ」
「あ、そっか」
指で愛里につけられたハチミツ　ついてる
「あああもーーーっ　ヤメテーー、舐めないで！」
「甘え」
「早く顔を洗ってきて！」
「おいっす」
立ち上がって空になった器と皿を
「私がやるから」
「いいって、愛里は手ぇ洗ってこいよ」
「あ・・」
愛里が自分の指見て　そんで　俺のこと見上げて
「怖い」
「え、怖え？　俺の言い方怖え？」
「あなたの・・　甘やかし加減が、底無しで」
「甘やかしてねえじゃん」
「自覚ないし」

そのちっと怒ったみてえな顔が可愛くてさ
「愛里」
「顔近づけないで、ベタベタしてるんだから」
「あ、そっか」
「あ、ごめんなさい、つけたのは私なのに」
「いいよ、俺は愛里のそういう塩加減好きっす」
「塩？　私はお塩は使わなかったですけど？」
そういう　ちっとズレてっとこもさ
柔らかくて　甘え・・　愛里の・・
くちびる離すと　俺のことメッチャ睨んでて
「ベタベタがつくからやめてって言ったのに」
「頬っぺたくっつけてねえよ」
「そう・・ですけど　えっ？　アーーーッ　もうこんな時間ですよ」
「あ、ヤベッ、俺、掃除機かけねえと」
「そんなのいいから、早く顔を洗って学校行かないと」
「そんじゃ、帰ってきてからやっから」
「はい、えっと、それじゃ手を洗ってきます」
愛里がバスルームに駆けてって
俺は　キッチンで後片付けして　そんでついでに頬っぺたも洗って
「これ、使ってください」
愛里が　タオル差し出してくれてて
「これって、この前買ったばっかのじゃん」
「はい、あなたが買ってくれたタオルです」
「俺が使っていいの？」
「いいです、志田くんのサポーター以外ならなんでも」
「ハハハ、顔洗ったんで臭くねえっすよ」
愛里のタオル　フワッフワで　愛里の匂いがして　ヤベ
「早く！　行かないと」
「おう」
愛里と二人　愛里の部屋を出て
エレベーターに乗って
愛里の手ぇにぎって
「愛里は？」
「私？　なんですか？」
「俺のイヤなとこ」
「あなたの？」
「あったら言ってくれよ、俺直すからさ」
「え・・んっと・・・」
え？　愛里真剣に考えてる　あんのか　やっぱあんのか
「なんて言えばいいのか」

「いいよ、そのまんま言ってくれよ」
「空気のイヤところって考えたことあります？」
「空気？」
「ないですよね」
「考えたことねえな」
「そういうことです」
「そういうこと？」
「あ、着きました」
「愛里、そういうことって？」
「今日もおとうさんのおむすび作ってきたんですよね」
「作った、持ってきた」
「よかった」
「愛里、そういうことって、なに？」
愛里が横目使いで　俺のこと見上げて
「全部好きです」
えっ
「あ、愛里、全部って、俺のこと全部？」
「床に落ちたトースト食べちゃっても、それはそれであなたかなって」
「愛里ぃぃぃ　マジっすかぁ」
「おかあさんにあんなに警告されてたのに」
警告？
「こっちの世界に来ちゃダメよって」
こっち？
「でも・・　来ちゃったから」
来ちゃった？
「おかあさんだって来ちゃったんだし」
なんの話だ？
「こっちの世界は・・　好きです」
「俺は愛里が好き」
「そうですか、急ぎましょう、遅刻しちゃう」
「おう」
なんかさ　なんか　すげえしあわせな朝だあ
一緒に朝メシ食ってさ　愛里と話してさ
全部好きってさあ　俺のこと　なんかもう　なんかもう
「しあわせだーーー！」
「大きい声でやめて！」
「あ、ごめん」
愛里と手ぇつないだまま　学校に向かって走った
校門の前で　サッと手ぇ離されたけど
そういう愛里もたまんねえんだよ

ロッカーんとこで　珍しく川口もいた
「森下、上原さん、おはよう」
「川口くん、おはよう」
「川口おはよっす、なんか今日は遅くね？」
「今朝届いたからさ」
届いた？
「川口くん、何が届いたの？」
「今は時間がないから、10 分休みのときに渡すよ」
渡す？
「早く行かないと学活始まっちゃうからさ」
「おう、だな」
愛里と俺、そんで川口とで　教室に向かって走った

フォトブック

10 分休み
シッコ行きてえ
「森下、あのさ」
「川口、悪りぃ、俺、便所」
「うん、わかった」
教室飛び出して　便所便所べんじょーーーーっ　あ　メッチャ混んでる
なんだ？ どした？ 今日はなんでこんなにシッコしてえ現象起きてんだ？　俺もだけどさ
これ・・　次の授業間に合うか？　ん・・・っと
一年生の便所行くか　賭けだな　そっちも混んでたら・・　そんでも　行くっきゃねえ
階段駆け下りて　お　おおお　空いてる
ハァァァ　間に合った
「え？」　となりの一年生　そりゃ、え？ だよな　二年生がさ
「森下・・先輩？」
「そうだけど」
なんで俺のこと知ってんだ？
「なぜここに？」
「二年の便所混んでてさ」
「そうなんですか」
「おう」
ジッパー上げて　手ぇ洗って
「僕、一年の運動会実行委員長だったんです」
「へえ、そうなんか」
「マイク、向けちゃってすみません」
マイク？
「森下先輩とお父上の感動シーン」
お、お父上？
「実行委員会の顧問の先生からは褒められました」
褒められた？　なんで？　まあどうでもいいけどさ
「近年でいちばん盛り上がった運動会になったって」
「そっか」
「森下先輩けっこう走りましたよね」
「ああまあ」

便所から出ても　なんでこいつは俺にくっついて
「森下先輩と何度も話せたんで、女子に羨ましがられちゃって」
「なんで？」
「森下先輩と話せるなんてなかなか」
あっ　チャイム鳴っちまったよ
「そんじゃ」
階段駆けあがって
なんで 10 分休みでシッコすっと　いっつも誰かにつかまるんだ？
廊下走って　教室ん中飛び込んで　ギリ　セーーーフ
あれ？　　机ん中になんか入って・・　あとだ

おっしゃ　昼休み
「愛里、行こう」
「見ました？」
「なに？」
「川口くん、あなたの机の中に入れたって言ってたけど、川口くん・・　いない」
「学食混むから急いで行っちまったんじゃね？」
「これです」
愛里が手に持って見せて　なんだ？　　なんか小せえ・・　本？　　そんな厚くねえな冊子？
「フォトブック作ってくれたそうです」
「フォト・・なに？」
「えっと・・　お弁当食べながら説明します」
「おう」

愛里とふたり　中庭で弁当
「わあ！　　オムライス」
愛里が嬉しそうにさ
「あ、これ、見てください」
さっきの　あれ？　　表紙っつうの？　　これって　とうちゃんが作った運動会の弁当
「愛里、これって・・　なに？」
「モエちゃんが作ったそうです」
「モエちゃん？」
「川口くんの妹」
あ　そっか
「モエちゃんが川口くんのフォトファイルを見て、その中から」
「川口が妹に頼んだっつうことか」
「そういうのじゃなくて、ただ勝手に見てたって」
「えっ　か、勝手に？」
「モエちゃんは川口くんの携帯、いつも勝手に見るそうです」

勝手に・・　妹が・・　俺は・・　もし　ねえちゃんが・・
「それはぜってえダメだろ」
「どうして？」
「んな、にいちゃんの携帯勝手に見るってさ」
「川口くんは気にしないって、いつものことだからって」
「い、いつものことぉぉお？」
ねえちゃんに俺の携帯見られたら・・　ぜってえイヤだ　そんだけはぜってえ
「見られて困るものはないしねって」
俺だってねえけど　そんでもねえちゃんに見られんのはイヤだ
「それで、モエちゃんが運動会の森下家の部分を」
「森下家の部分・・つうのは？」
「ほら、表紙はおとうさんのお弁当で」
「それは・・　うん、わかる」
「開くと、おとうさんとおかあさんのツーショ、こっちはあなたも入った家族写真」
そういや撮ったな
「まあ・・　こっちには私も入ってますけど」
「ったりめえじゃん、愛里は家族みてえなもんじゃん」
「こっちは川口くんも入った写真、森山くんが撮ったからなんかノッペリしてるけど」
愛里は森山には厳しいな　だよな　うん
「これはみんなでお弁当食べてるときで」
川口　こんなん撮ってたんか
「これは・・　あなたとおとうさんが昼寝してる写真」
「川口、こんなんまで撮ってたんかよ？」
「これは私が撮りました、川口くんも、こっちの横に寝てて」
「いねえじゃん」
「モエちゃんが、おにいちゃまはジャマってカットしたそうです」
容赦ねえなモエちゃん　そんでも俺ととうちゃんが二人で寝てんのは嬉しいっすよ
「あとは、あなたとおとうさんが走ってるのとか、おかあさんが走ってるのも」
マジ森下家だな
「他にもいろいろ・・　ほら」
「うん、あのさ・・　川口の妹は、なんでこんなん作ったんかな？」
「おにいちゃまがお弁当一緒に食べさせてもらったお礼って」
「んな、川口だって飲み物いっぺえ持ってきたじゃん」
「川口くんが言うには、モエちゃん、そういう気分に浸れて楽しそうだったって」
「そういう気分？」
「なんていうか・・　モエちゃん、学校に行ってないでしょ？」
「ああ、うん」
「学校行事も参加してないから、川口くんが森下家の中にいることで・・
　川口くんなんて言ったかな、あ、モエちゃんもその中にいるような気分になった？」
「そっか、そういう、そっか」

「モエちゃん、こういうフォトブック作るのが好きで、ライブのときのとか作って、
　仲間のおねえさんたちにあげたりしてるそうです」
「そんでもさ、こういうの作るって金かかんじゃねえの？」
「そうなんです、私もお金払うって言ったんですけど、川口くんがいらないって」
「んなさ、愛里のは俺が払うからさ」
「そこじゃなくて」
「そんじゃ、どこ？」
「川口くんのお母さんが出してくれたって」
「えっ？　　それはやっぱ金払わねえとさ」
「ですよね、でも、お礼だって」
「お礼って、んなことしねえでもさ」
「川口くんにお弁当食べさせてくれて、一緒に昼寝までしてくれて」
それは・・　一緒にっつうか　気ぃついたらってだけで
「モエちゃんが楽しそうに作ってたからって」
「そんでもさ、それとこれは別っつうかさ」
「私もどうなのかなって思ったけど、今回は川口くんのお母さんとモエちゃんの気持ちを」
気持ち？
「そのまま、ありがとうございますって受け取った方がいいかなって」
「そっか、うん、愛里がそう言うんなら、だな」
愛里は人の気持ちをメッチャ大切にしてくれっからな
「私、こういうのがあるって知りませんでした」
「俺は全然知らなかった、んな本みてえにさ」
「これっていいですよね、場所を取らないし、写真を厳選してるから同じような写真ないし」
「ああ、うん」
「あなたが赤ちゃんのときのアルバムってありますか？」
「俺のは・・　かあちゃんが USB か CD-ROM に保存してんじゃねえかな」
「さすがおかあさんですね」
「さすが？」
「私のなんて、もう・・　生まれてから１週間のだけで、こ〜んな分厚いアルバム一冊」
愛里が赤ちゃんときの写真見てえな　可愛いだろうな　ぜってえ可愛いよ
「ほっとんど同じような写真ばっかり、そういうのが積み重なっちゃって」
「それって、愛里のお父さんが持ってんの？」
「ママがアメリカに行くときに送ったみたいですけど」
「見てえな」
「ほとんど同じような写真ばっかりだし、見返したりしないし、あんな量どうするんだろう」
「こういうのにすればいぃんじゃね？」
「私が赤ちゃんのときの写真なんてどうでもいいです」

「どうでもよくねえよ、俺は見てえし、大切にしてえしさ」
「アメリカにありますけど？」
「なんつうか、そのうち・・さ」
いつか　それを俺がさ　ちゃんと整理してこういうのにしてさ
「川口くん、あなたの机の中には二冊入れたって」
「え、なんで？」
「あなたの分とおとうさんとおかあさんの分だそうです」
「んな、一家に一冊でいんじゃね？」
「気を使って・・くれたみたい」
「気？　なんで？」
「え・・　なんか・・　私もけっこう載ってるから」
「あ！　そっか、だよな」
俺は永久保存してえしさ、とうちゃんとかあちゃんもな
「今日おかあさんに持っていけばいいですよね」
「あ、そっか、だな」
「モエちゃんて」
愛里がパラパラめくりながら
「こういう才能ありますよね」
「こういう？」
「プロデュース？ なに？ アートディレクターみたいな？」
俺には・・　よくわかんねえけど
「応援タイムのプロデュースもすごかったし、このフォトブックの写真のチョイスもステキで」
「そ・・っか」
「モエちゃん、推しの画像でカレンダーとかアクスタも作ってるって」
「あく？ なに？」
「こういうのです」
愛里が携帯でなんか検索して・・
「ほら」
「これは・・・　何に使うんだ？」
「飾って推しを眺めるんです」
「眺める？」
「私は、ちょっとその気持ちはわからないけど」
これは・・　愛里の写真を・・　お・・おお・・　飾っときてえな
「ジッと見てるけど、あなたは興味あるんですか？」
「え？　あ、なんつうか、いんじゃね？　そういうのもさ」
「ズラーーッとあるって」
ズラーーーッと愛里　いいな
「私なら・・　こういうカレンダー作りたいな」
カレンダー　愛里の写真ばっかのカレンダー　メッチャ欲しい

「あなたの」
「お、お、俺？」
「お弁当のカレンダー」
「べん・・とう」
「あ、ダメだ、お腹空いてきちゃって勉強に集中できない」
なんだよそれ　メッチャ可愛いな
「弁当は毎日俺が食わせるんで」
「はい、写真より本物のお弁当がいいです」
「そっか」
愛里の手ぇにぎって
「はい」
愛里も　ちっとにぎり返してくれて
「なんか・・　いい思い出を形にしてもらったカンジ」
いい思い出　愛里がそう思っててくれんなんてさ
「おう」
川口　ありがとな　川口のお母さんと妹もありがとうございます
川口には直接言った方がいっか　だな

教室戻ったら　川口がいて
「川口」
「あれ？　　上原さんは？」
「便所行くつって」
「便所？　　上原さんが便所ってワード言ったの？」
ワード？
「トイレっつったけどおんなしじゃん」
「そうだけど、でもすごいね」
「なにが？」
「森下は、トイレに行くって言えるカレシってことだよね」
「そりゃ言うだろ、突然どっか行っちまったら心配になっからさ」
「そういうことじゃないんだけど」
「あ、写真のあれ、ありがとう」
「押し付けたみたいでごめんね」
「押し付けてねえよ、あんなん作ってもらってありがてえよ」
「そう言ってもらうとホッとするよ」
「あの・・さ、川口の妹って、川口の携帯、勝手に見んのか？」
「そうだね」
「川口は・・　それは・・　なんつうか」
「興味持たれないより興味持ってもらう方が嬉しいからさ」
え？
「僕に興味があるっていうより、学校生活に興味があるんだと思うけどね」

「そうなんか」
「前は、おにいちゃまの携帯何も入ってなくてつまらないって言われてたけどね」
「男の携帯なんてそんなもんじゃね？」
俺のだって愛里に会う前はさ
「最近は森下や上原さんとのやり取りや写真があるから楽しいらしいよ」
「え？　あ、そうなんか」
「夏休みの現場の写真も楽しんでた」
「マジ？」
そっか　現場に興味持ってくれたんか
「おにいちゃまの世界も広がったねって」
「世界？」
「妹はほとんど家の中にいるからね」
「あ・・　そっか」
「まして現場なんて僕も今まで行ったことないからさ」
「今あっちで解体してっから写真撮ってくりゃいんじゃね？」
「妹は解体に興味があるわけじゃないよ」
「そっ・・か」
「森下はまた現場でバイトしないの？」
「今のは・・　公共事業ってことになってっから、バイトで雇ってくんねえだろうな」
「そうなの？」
「最低で一ヵ月、しかも丸一日入れねえとさ」
「調べたんだね」
「え、あ、まあ」
「何の話をしてたの？」
愛里
「解体」
川口　ちげえだろ
「かいたい？」
「ちげえよ、川口の妹が、なんか現場の写真見てたって」
「モエちゃんが？　なんて言ってた？」
「今まで見たことのない世界だからおもしろいって」
「それじゃ、また現場で働いたらどうですか？」
「へ？」
「川口くんにまた写真撮ってもらって」
「や、写真撮るために現場でバイトってさ」
「写真撮るためじゃないけど」
「ダメらしいよ、最低一ヵ月丸一日働けないと入れてもらえないって」
「調べたんですか？」
「え、まあ、ちっと」
「土曜日なら丸一日働けるんじゃないですか？」

「それはムリだろ、週一じゃ現場の進行状況もわかんねえしさ」
「そうなんだ」
「愛里、んな、考えなくていいからさ」
「でも、現場で働いてたときのあなたは生き生きしてたから」
「へ？　い、今は？」
「ふつうっていうか」
「フ、フツー？　フツーつつうのは？」
「ん・・　平常運転のモリシタダイチ」
平常運転の森下大一？　ナンダソレハ？？？
「チャイム鳴りましたよ」
「あ、おう」
席戻ったけど
平常運転の森下大一って　どういう意味だ？　愛里
今の俺は生き生きしてねえっつうこと？
やっぱ　俺は学校辞めて現場で働いた方がいぃんかな
ちげえよ　それじゃ夏休み終わりくれえの状態に戻っちまうよ
俺にっきゃできねえことがあんだよ　まだわかってねえけど
とにかく　授業に集中だ

マグロ

かあちゃんの病室の　扉の前
こん中は　またタイムスリップしたみてえになってんのかな
とうちゃんとかあちゃん二人だけの　あの空気に
入ったら　壊しちまいそうで
「どうしたんですか？」
「え、や、んっと」
「ダイチ！」
え？　　振り向いたら
「とうちゃん」
「アイリちゃんも来てくれたんか」
「はい」
「とうちゃんどこ行ってたの？」
「便所」
「ああ、そっか」
「ダイチ、なんで入んねえんだ？」
「あ、入るよ」
扉開けたら
かあちゃんが　でーーっけえ口開けてあくびしてて
なんつうか　現実だな　タイムスリップしてねえよ
「やだ、タイミング考えてよ」
「んな、あくびしてんなんてわかんねえよ」
「愛里さんも来てくれたの？」
愛里が　かあちゃんのこと見てて　なんも言わねえで　見てて
え？　　愛里　涙？
「あ・・ごめんなさい、悲しいとかじゃないんだけど勝手に」
「愛里さん」
かあちゃんがベッドの上で両手広げて　愛里がそん中に飛び込んでった
「心配かけちゃったわね」
かあちゃんが愛里のこと抱きしめたまま　愛里の背中さすって
「具合は・・どうですか？」
「午前中に正式な結果が出たの、ただの嚢腫で、他にはどこも異常なしって」
「あああ、よかったぁぁ」
「土曜日には退院よ」

「そんなに早く？　　よかった」
かあちゃん　愛里の顔見てニッコニコしてる
「ダイチ」
とうちゃん？
「俺、ちっと洗濯してくっからよ、ここにいてくんねえか」
「とうちゃん、俺がやるよ」
「せっかく来たんだからよ」
「二人で行ってきなさいよ、愛里さんがいてくれるから」
かあちゃん　愛里もうんうんて
「カズオ、ヒゲも剃ってきて」
「あ、うん」
そっか　とうちゃんは便所以外の時間はかあちゃんのそばにいんだな
とうちゃんがベッド脇の棚ん中からスーパーの袋出して
「そんじゃ、アイリちゃん、すぐ戻ってくっからよ」
「ゆっくりで大丈夫です」
「なんかあったらよ、すぐに」
「何かあったら看護師さん呼ぶから」
かあちゃん　とうちゃんの気持ちも察してやってくれよ
とうちゃんと二人で　洗濯室に向かった

洗濯機と乾燥機が置いてある向かい側の　これはモップや雑巾洗うシンクだな
とうちゃんが顔洗ってヒゲ剃ってる
「とうちゃん、鏡見ねえで大丈夫？」
「こんくれえできっからよ」
とうちゃんが石鹸の泡ついた顎を手で触りながら剃っててさ
小せえ頃もよくそばで見てたけど　なんつうか男っつうカンジでさ　かっけえんだよな
俺の初めてのヒゲ剃りはとうちゃんに教わったもんな
「美里がよ、土曜日に退院できるってよ」
「さっき言ってたよな」
「よかったな、もうなんも悪りぃもんねえってよ」
「うん、だな」
「そんでもよ」
とうちゃんの手が止まった
「月曜から仕事行くっつうんだよ」
「土曜日に退院して、そんでもう仕事？」
「美里が先生にな、月曜から仕事行きてえって」
かあちゃん　ムリ過ぎんだろ
「先生が、美里の仕事なら月曜からでもいいってよ」
「マジ？」
「俺は稼げねえからよ、美里、早く働かねえとって思ってんだろうな」

「とうちゃん、かあちゃんは日雇い仕事してんじゃねえからさ」
「そんでも、こんな休んじまったからよ」
「傷病手当が支給されっから大丈夫だよ」
「しょお・・？」
「んっと、休んだ分の給料の 2/3 がもらえっからさ」
「つことは・・」
とうちゃん　頭ん中で計算してんだな
「1/3 はもらえねえんか？」
「まあそうだけどさ」
「俺の昔の給料なら、一万もらえねえってこったろ？」
「まあ・・　とうちゃんの給料で考えっと、そうだけど」
「一ヵ月二万は・・　やれねえことはねえけどよ」
「できんの？　　すげえよとうちゃん」
「俺一人ならよ、部屋追ん出されてもどうにでもなっけどよ」
究極の状況考えてたんか
「美里とダイチ、ヒトミも・・っつうのは、な」
一ヵ月二万は　一人暮らしでも・・　俺はできる自信ねえな
「だから美里は早く働こうとしてんのか」
「ちげえよ、かあちゃんの給料は三万じゃねえしさ、そういうんじゃなくてさ」
ん・・っと　あ　これだ
「かあちゃんはマグロだからさ」
「えっ　み、美里が・・　マグロ？」
ビックリした顔で俺のこと見てっけど？
「ダイチには・・」
今度は心配そうな顔になってっけど？
「美里がマグロに見えんのか？」
「ちげえよ、マグロみてえだっつってんだよ」
「や、美里はマグロに似てねえよ」
「じゃなくてさ、小学校の理科で、とうちゃんも一緒に勉強したじゃん」
「勉強？」
「回遊魚、マグロは泳ぐことで海水に溶けた酸素取り入れてっから」
「ん・・と　あっ　そうだな、止まると死んじまうんだよな」
「かあちゃんは仕事してっと生き生きするっつうかさ」
「仕事しねえと・・　死ん・・じまうん・・かな」
「死なねえけど、仕事してる方が元気になんじゃね？」
「そっか、ダイチがそういうならな」
「先生の許可も出てんだからさ」
「だな、先生がいいっつったんだもんな」
「そうだよ」
あれ？　　とうちゃんがヒゲ剃る手ぇ止めて

「美里が・・」
なんか考えてる
「マグロなら、俺は・・　ん・・っと、あ、海ん底の砂っ粒だな」
「砂粒？」
「あのきれいなマグロ通らねえかなってよ」
とうちゃんが顔を上の方に向けて
「あ、来た、やっぱきれいだなあ、キラッキラしてんなあ」
夢見てるみてえな顔してて
「ちがいます」
「うわああっ」「うぉおおっ」
「おとうさんは砂粒ではないです」
あ、愛里？　聞いてたんか
「おとうさんは海水だと思う」
海水？
「俺はしょっぺえっつうこと？」
「そういう意味じゃなくて、おとうさんがいないとおかあさんは、あ、じゃなくて」
じゃなくて？
「こんなこと言いに来たんじゃなくて」
「愛里、なんかやってほしいことあんの？」
「いえ、おかあさんが呼ん」
あ　とうちゃんが走ってちまった
「で・・ますって、どうしよう、おとうさんじゃなくて、あなたのことなんだけど」
「俺？」
「はい」
なんだ？

かあちゃんが　とうちゃんのこと　ジーーッと見てる
「ついてる」
「あ？　え？」
「ここ、あごのところに、なに？　クリームみたいな」
とうちゃんがパッとあごに手ぇあてて
「あ・・　ヒゲ剃っててよ」
「剃り切りってきなさい」
「あ、うん」
とうちゃんがあわてて病室出てった
「まったく、生きるの死ぬのの状態じゃないのに」
「とうちゃんはかあちゃんのことすげえ心配してんだよ」
「あさってには退院できますけど」
んな好戦的な顔で言わなくてもさ
「ダイチ、あんた今度の土曜日にバイトする気ある？」

「土曜日って、かあちゃん退院すんじゃん」
「そうよ」
「そんじゃ俺もいねえとさ」
「あんたがいなくても退院できるわよ」
「じゃなくてさ、とうちゃん手伝わねえとさ」
「カズオはあんたがいなくても家事はできるわよ」
「とうちゃんはかあちゃんのそばにいてえからさ」
「こういう病院という異空間から抜けたら」
異空間？
「カズオも平常に戻るから」
そっか　とうちゃんにとって　病院っつうのはトラウマなんだな
「丸山さんから連絡が入ったのよ」
つことは　家政夫の仕事か
「本当はカズオに来た話なの」
「とうちゃんに？」
「でも最悪あんたでもいいそうよ」
「最悪ってさ」
「菱谷さんのお宅」
「ひし・・　あ、監督？」
「掃除を頼みたいって」
「そっか、え、監督んとこっつったら、やっぱとうちゃんじゃねえの？」
「私が退院する日に、家政夫の仕事に行くと思う？」
「あ・・　だよな」
「丸山さん、私が入院したこと知らないから、受けちゃったんですって」
「そっか」
「あんたでもいいかどうか聞いてもらったら、いいって、奥様がね」
なんかもう話決まってんじゃん
「愛里さんの許可も得たわよ」
「許可とか・・　私もあさってはバイトがあるって言っただけで」
「だよな、うん」
「それじゃ、午前 10 時から 4 時間」
「わかった」
あ　とうちゃん戻ってきた
「カズオ、土曜日はダイチはバイトでいないから」
「あ？　　そっか」
「私の退院、カズオだけで大丈夫よね」
「おう、ダイチ、かあちゃんのことは心配しねえでいいからよ」
「あ、うん」
俺は　とうちゃんのことが心配だっただけでさ
「ねえ、炭酸ミネラルウォーター買ってきてよ」

とうちゃんと顔見合わせた
「どっち？　とうちゃん？　俺？」
「どっちでもいいわよ」
「そんじゃ俺買ってくるよ」
病室出て　病院の向かいっ側のコンビニに走った

かあちゃんがいっつも飲んでんのは・・　あった
あとは　なんか買ってくもんあんのかな　炭酸ミネラルウォーターだけでいいんかな
余計なもん買ってってもな
ピコン　え　愛里？
『コットンも買ってきて欲しいそうです』
コットン？
『コットンっつうのは？』送信
ピコン
『化粧水用のコットン』
化粧水用っつうのは・・
かあちゃんが使うコットンはとうちゃんが買ってっから　あんま知らねえんだよな
んっと・・　ここか　どれだ？
写真撮って
『どれ？』送信
ピコン
『いちばん左でガマンするって w』
ガマンてさ
『ゲットしました！』送信
あとは・・　入口近くに花があるけど　俺が花っつうのも　そんでも　どうなんだ？
いちおう買ってくか？　どれだ？　ん・・っと　このピンクの　これは・・　バラか？
ほんとは愛里が選んでくれっといぃんだけど　愛里はいろいろやってくれてっから
そんなんまではな　いちおうこのピンクの買ってくか

扉開けたら　愛里とかあちゃん
「とうちゃんは？」
「洗濯物を乾燥機に入れに行ったわよ」
「そっか」
「あの・・　それは？」
愛里の視線が　テンテンテン　花か
「これは、なんつうか、俺からの見舞いっつうか」
「へえ、あんたが花！」
「や、いちおうこういうのあった方がいっかなって」
「あ！　あぁぁぁ、そうですよね、私、そこまで頭がまわらなかったです」
「愛里さん、いいのよ、愛里さんにはいろいろ助けてもらってるんだから」

「でも・・」
「ダイチ、花瓶は？」
「花瓶？　ねえけど」
「あんたは、花だけ買って」
「かあちゃんが飲み終わった瓶に入れりゃいんじゃね？」
「私、ナースステーションで借りられるか聞いてきます」
愛里が俺の手から花スッと取りあげて部屋から出てった
「愛里さんに余計な手間をかけさせちゃったじゃない」
「ん・・　なんか、ごめん」
かあちゃんが　鼻でフンて笑って
「あんたが花を買ってくるなんてね、愛里さんの影響ね」
「ん・・　まあ、うん」
「あんた、私のことマグロって言ったんですって？」
「え？　や、それはさ」
「たしかに打ち上げられたマグロみたいよ、ドデーンと寝てるだけ」
「そういう意味じゃなくてさ」
「愛里さん、私がマグロならカズオは海水ですねって」
さっきもそう言ってたな
「マグロは海水があるから生きていられて」
え
「自由に泳げますよねって」
愛里・・　そういう意味だったんか
「もうね、そうねとしか言えなかった」
俺は・・　ちっと感動してて
「愛里さんて、無邪気に急所を刺すってカンジよね」
「刺すとか、んなさ」
「だってヤラレちゃったんだもの」
俺も　ヤラレてる　愛里に感動してる
「コットン買ってきた？」
「おう、これ」
「なんで二個も買ってきたのよ？」
「安売りになっててさ、二個だと一個買うよか」
「あああもう」
「なに？　どうせ使うんだからさ」
「もういいわ、お金はこのテーブルの中の私のバッグから取って」
「いいよ、これは、なんつうか、俺からの見舞い」
「あら、へえ」
「なんだよ？」
「あんたが愛里さん以外にお金を使うなんてねえ」
「こんくれえはさ、とうちゃんだって愛里や俺にも奢ってくれたりしてるしさ」

「あんたもカズオも稼ぐようになってねえ」
「ん・・　まだまだだけどさ」
「こうなったら、あんたとカズオに稼いでもらって、私は仕事辞めちゃおっかな」
「えっ　マジ？」
「ウソよ、私が家の中にいて何したらいいのよ、家事なんてできないしやりたくないし」
あ・・　だよな　そんでも
「かあちゃん、月曜から仕事って、マジ大丈夫なんか？」
「私じゃないと決裁できないことがあるから」
「そっか」
「ここでベッドに横たわって、あれはどうなったとかこれはどうするって考えてるより」
んなことしてたんかよ
「会社に出た方が 100 倍楽よ」
マジでマグロだな

愛里が　看護師さんからすげえ小せえグラス借りてハサミも借りて
メッチャ可愛い花作ってきた
「スプレーバラだから短く切って小さなブーケみたいにしてみました」
「愛里さん、すごく可愛い、あの貧相な花が」
ちょ、貧相？
「こんなにステキになるなんて」
あ　とうちゃん戻ってきた　乾燥も終わったんだな
「カズオ、見て、愛里さんがこんなに可愛いアレンジを作ってくれたのよ」
ん・・と？
「俺が入院してたときもよ、花持ってきてくれてよ」
そう・・なんだけどさ
「俺はこういうのわかんねえからよ、アイリちゃんいてありがてえな」
「いえ、このお花は、だ、大一さんが、買ってきて」
「ダイチが？　花？」
とうちゃんまで驚かなくてもいいじゃん　そりゃそうだろうけどさ
んっと　そろそろ帰らねえとな　あ　そうだ
「とうちゃん、これ、握りメシ」
「ありがとな」
「おかあさんの食事は・・　流動食ですか？」
「朝はかなり柔らかい食事だったけど、お昼からはふつうになったわ」
「よかったですね」
「そうなんだけどね、ここのは病院食にしては美味しいんだけど・・　ねえ」
「そうですよね、おとうさんの食べたいですよね」
かあちゃんが愛里のこと見て　ちっと困った顔してニコッとした
「そんじゃ、そろそろ帰っから」
「明日は来なくていいわよ」

「そんでも、とうちゃんの握りメシ」
「カズオの食事も頼んだから」
あ　そうなんか
「俺は、んな、いいっつったんだけどよ」
「食べてもらわないと私が困るの」
「あ・・　うん、うん」
愛里がメッチャホッとした顔でニッコリしてる
愛里のおかげだよ　マジでさ

帰りの電車の中
俺の隣りに座ってる愛里は　ホッとしたみてえな顔で微笑んでて
「愛里、ありがとな」
「え？　なにが？」
「いろいろ、あ、花も、やってくれて」
「あなたがお花を買ってきたから、ビックリしちゃった」
「まあ・・　だよな」
「でも、こういうのいいなって」
「こういうの？」
「あなたがコンビニでお花を買ってきて、私が、これをどうステキにアレンジしようかって」
「すげえ可愛かった、マジで」
愛里が俺のことちょっと見上げて　また前向いて
「あなたが、高いお店の高いバラの花を買う人じゃなくてよかったって」
「そんなん買えねえもん、わかんねえしさ」
「だから、よかったです」
「だから？」
「私の出番があるでしょ」
愛里ぃぃ　なんて可愛いこと言うんだよ
「俺ん中では愛里は出っ放しだよ、ずーーっと出番ばっかだよ」
「なにそれ」
愛里　笑ってっけどさ　マジでさ
「もう着きますね」
「おう」
愛里の手ぇにぎって　席立って　電車下りた

おままごと

愛里の部屋の前
「俺さ、買い出し行って、それから愛里の部屋掃除すっから」
「その間、私はあなたの家に行っててていいですか？」
「いいよ、全然いいよ」
「おかあさんに頼まれたことがあるので」
「かあちゃん？　なに？」
「退院の・・　準備みたいな」
「んなこと愛里にさせらんねえよ、俺がやっからさ」
「あなたやおとうさんには任せられないって」
「へ？」
「退院するときの服とか靴とかメイクの」
「あ・・　うん、お願いします」
「それじゃ、あとで」
「おう」
ドア閉まって
かあちゃんも愛里になんでもかんでも頼んでさ
まあ・・　服とか靴は・・　だな　愛里しかいねえよな
俺は　買い出しだ

今日は何にすっかな
お　タコ安いじゃん　タコ飯にすっか　そんで明日の弁当にタコの唐揚げ　だな
あとは　鶏肉も安売りになってんな　これとキャベツ炒めてポン酢炒めか
そんで弁当には鶏肉サラダにしてさ
イチゴも買った　いっちゃん高けえやつ　豆乳ヨーグルトも買ったし食パンも
レジで　愛里用の財布から金出して
やっぱさ　なんつうの？　ちびっと予行演習みてえなさ
いつか　愛里のことまるっと養えるときのためっつうかさ
俺は　かあちゃんみてえに稼げっかな
かあちゃんみてえに稼ぐっつうことは　マグロになんなきゃダメっつうことでさ
そしたら　家のことキッチリできねえよ　両方できねえとさ
いやいやいや　両方やる　俺はやる　ぜってえやる　帰ろう
入口んとこの花のコーナー　あるのは知ってたけど　花買おうなんて思ったことねえよ
愛里は　俺が高けえ店の高えバラ買うようなヤツじゃなくてよかったって

愛里が欲しいっつったら全然買うぜってえ買う　そんでも
私の出番があるからってさ　たまんねえよ
かあちゃんが愛里は無邪気に刺すっつったけど　マジそうだな　ヤラレっぱなしだよ
ヤラレてばっかいねえで帰らねえと

家の玄関ドア　鍵が開いてる　愛里が来てんだな
ドア開けたら
「あ、おかえりなさい」
愛里が　いた
「愛里、ただいま」
クゥゥゥゥゥゥッ　たまんねえ
「愛里」
抱きしめちまうぞ　抱きしめてっけど
「くっ・・」
愛里が俺のこと突き放して
「もう！　ギュゥゥゥッて、息できないっ」
「あ、ごめん、好きが溢れちまった」
愛里が俺のこと睨んでっから
「マジだけど」
「そう・・ですか」
そんで　しゃがんで
「愛里、なにやってんの？」
「おかあさんの靴を・・　あ、これがいいかな」
靴？　そんでも
「かあちゃん入院すっとき、靴履いてたよ」
「あれはパンプスだから退院のときはちょっと辛いって、こっちのフラットシューズが」
なに言ってんのかわかんねえけど
「そっか、それか」
「服もスエット素材のワンピに・・　あなたの顔、死んでますね」
「え？　聞いてるよ」
「いいです、あなたに説明しなくてもいいことなので」
「そっか、うん」
「明日おとうさんがいつ取りに来るかわからないから」
「明日とうちゃんが取りに来んの？」
「おかあさんが、取りに行かせるからって」
「俺が学校帰りに届けりゃいんじゃね？」
「おとうさんに、お風呂に入って欲しいからって」
「あ・・　そっか」
おといシャワーしに戻ってきたけどな
かあちゃんは毎日風呂入れっつうもんな　俺も毎日シャワーしてっけどさ

「このバッグに入れて、ここに置いておけばいいかなって」
「愛里、なんか、ありがとな」
「なにがですか？」
「かあちゃんのこと、愛里にいろいろやってもらっちまってさ」
「私は嬉しいですけど」
「え、マジ？」
「あの美的センスの塊のおかあさんに信頼されてる気分で」
「信頼するよ、愛里ならさ、ぜってえするじゃん」
愛里が　俺のことチロッと上目遣いで見て
「そうですか、えっと・・」
俺の言葉は信頼できねえっすか？　愛里さん
「おとうさんの着替えはバスルームに置いておきました」
「ありがとう」
「おとうさんの下着が見つからなくて」
「クローゼットの引き出しん中、いっちゃん下」
「引き出しまでは・・　なんか踏み入れられない」
「とうちゃんなんも気にしねえよ」
「あなたが出してくれますか？」
「おう」
「新しい下着でって、おかあさんが」
んなさ、かあちゃんが退院するときにとうちゃんが新しい下着とかさ
「どうでもいいとか思ってます？」
「え？　や、思ってねえよ」
「おかあさんが退院するときに、おとうさんがあの擦り切れて薄くなっちゃってゴムが」
「新しいの、うん、ちゃんと出す」
「お願いします」
俺だけかな　こういうやり取りがしあわせでさ　なんつうか　結婚してるみてえなさ
「なに？」
「あ、や、んっと、愛里の部屋掃除してくっから」
「やらなくていいです」
「え？　なんで？」
「非常事態ですから」
「非常事態？」
「おかあさんが入院しているという状況だから、私のことまで気にしなくていいです」
愛里
「予行演習だからさ」
「なんの？」
愛里と　結婚したときの
「なにがあっても、どんなときでも、俺はちゃんと家ん中のことすっから」
「そう・・かもだけど、私のことまでは」

「愛里の世話は俺がするって約束したじゃん」
「そう・・だけど」
「こんくれえなんともねえからさ」
「でも、こんなときに迷惑かけちゃうって」
「迷惑じゃねえよ、んなこと言うなよ」
「え・・」
「愛里、俺は頼りねえかもしんねえけど、少しは、なんつうか、信頼してくれよ」
愛里が　顔あげて　真っ直ぐな目で俺のこと見上げて
「信頼してます」
んな目で見られっと　ヤベ　泣きそうになって
「んと、そんじゃ、やってくる」
「お願いします」
「おう」
フッツーの顔して家から出たけど
信頼してるって言われただけで泣きそうになるってさ　そんでもさ
愛里に信頼されてんだよーーー　俺はーーーー

掃除機かけて　フローリングの拭き掃除もして　次は風呂だな
浴室のドア開けた・・らっ　あっ　下着が　干して　あんだけど
これ　取らねえと　風呂掃除・・
どうする？
愛里にLINE？　や　俺がすげえ意識してるみてえでさ
なんか　かあちゃんのと違って　すげえ可愛い・・　やべえやべえやべえ
これは愛里のじゃねえ愛里のじゃねえよ家政夫の仕事んときなんも考えねえでやってんじゃん
愛里のだよ　ん・・っと　いったんドア閉めよう　落ち着け　俺の　落ち着け
あれ？　なんか・・　音？
「あの！」
愛里？
「な、な、なに？」
「お風呂・・　掃除・・　しました・・か？」
「や、まだ、今しようと思ってた」
「中・・　見ました・・か？」
「あ、や、見、見てねえけど」
ガッツリ見ちまいました
「ハァァァ」
ホッとしたみてえに　見たって言わねえでよかったぁぁぁ
「私、あの、下着・・干してたの、忘れちゃってて」
「あ、そっか、うん」
「すぐ、取り込む？　えっと、処理・・しますから」

「あ、おう、そんじゃ、俺は洗面台掃除してっから」
「はい」
愛里が浴室に入ってった
これは・・　予行演習にはまだ早えんかな　そんでもさ慣れねえとさ
「もう大丈夫です」
「あ、おう」
愛里がバスルームから出てった
んなことでいちいち反応すんなよ　俺の
とうちゃん　20 歳でかあちゃんのさ　ヤバかったっつってたもんな
風呂掃除しよう

愛里が　すんげえしあわせそうな顔で
「美味しい」
タコ飯食ってるよ
「この細く切った生姜が効いてて、最高」
「そっか」
メッチャ嬉しいっす
「なんか、おかあさんの退院の準備したり」
「愛里、マジでありがとう、俺じゃどうもなんねえからさ」
「いえ、そういうことじゃなくて」
そういうことじゃねえ？
「メイクの、あ、おかあさんすごいんですよ、ポーチの中にメイク用品を」
なんでメイクすんだ？　帰ってくるだけじゃん
「こんな小さな容器に必要なものすべてをきれいに入れてあって」
俺は見たことねえけど
「旅慣れてるってカンジでかっこいいなって」
旅慣れてはいるよな　出張行くからさ
「あ、そういうことじゃなくて、私がそういうの用意してる間に、
　あなたが私の部屋の掃除をしてくれて」
「んなことはさ、なんつうことねえから気にすんなよ」
「そうじゃなくて」
そうじゃなくて？
「あなたがごはん作ってくれてて、その間に私はあなたのノートで課題させてもらっちゃって」
「そんなん全然いいよ、俺のノートが愛里の役に立つんならさ」
「すごく立ってます」
「そっか」
「それで、こうやって二人でごはん食べたり、そしたらフッて思い出しちゃって」
「なにを？」
「なんでそんなこと思い出したのかわからないんだけど思い出しちゃって」

「うん、なに？」
「おままごと」
「おままごと？」
「幼稚園でやりませんでしたか？」
「やった・・けど」
「お父さん役？」
「そうなんだけどさ、メシ作ろうとしたら、お父さんはそんなことしねえって」
「あ・・」
「俺メッチャ混乱しちまってさ」
愛里と幼稚園ときの話してんなんてさ
「ねえちゃんに言ったら、ねえちゃんときもそうだったって」
なんか　楽しいな
「そんなんな、やれる方がやりゃいぃじゃん」
「あなたとおままごとしたかった」
「えっ？　　マ、マジ？」
「私、あんまり好きじゃなくて」
え？
「好きじゃないっていうか、ちゃんとできなくて」
愛里が幼稚園の頃　ぜってえ可愛いよな　俺　ぜってえ好きになったよ
「おもちゃの、切れる野菜とかあるでしょ？」
「マジックテープついてるやつな」
「私、手でバリッてはがしてお鍋に入れて、そしたら愛里ちゃん切ってよって」
見たかったあ
「でも、ママは包丁使ってるときはキッチンに入っちゃダメって、だからわからなくて」
「俺がいたら俺がやった」
「はい、今そう思いました」
愛里とままごとやってたら　混乱しなかったんかもしんねえ
「愛里ちゃんのお母さん役って子どもの心配ばっかりしてるって言われて、
　ママの真似してただけなのに、え？　　あれ？」
愛里が口に手ぇあてて　眉間にシワ寄せて　なんか考えてっけど？
「愛里、どした？」
「私・・」
メッチャ深刻な顔で俺のこと見て
「お母さんになったら・・　ママみたいになっちゃうのかな、ええっイヤだあ」
「愛里は子どもの世話しねえでいいよ」
「え？　　私がしなかったら・・　どうするの？」
「俺がやったから」
「私の、子どもの世話を？」
「ったりめえじゃん」
俺の子どもでもあるわけでさ

「子ども・・」
愛里がなんか考えてて
「あ、全然想像できない」
「いいよ、まださ」
「そうですよね、進路だってまだ全然決められないのに」
俺も　まだ　どんな仕事したらいぃんかわかんねえんだよ　愛里
「おとうさんとおかあさん、一緒にごはん食べてるんですよね」
「病院は早えから、もう食ったんじゃねえかな」
「よかったですね」
「愛里のおかげだよ」
「私はなにも、でも・・　おかあさん、おとうさんのごはんが食べたいでしょうね」
「かあちゃんはとうちゃんのメシが好きだからな」
「もし私が入院したら、やっぱりあなたのごはん食べたくなっちゃうと思う」
愛里　俺は　好きが溢れて　溢れすぎて
「どうしたんですか？」
「あ、や、つかさ、入院すんなよ」
「私だってしたくないけど、しなきゃいけなくなったら」
「愛里が入院したら、俺は弁当作って食わせる」
「え？」
「流動食だっておかゆだってなんだって作って、俺のを食わせる」
愛里が　驚いたみてえな顔で俺を見てっけどマジでさ
「そんなの・・」
え？　泣きべそ？　反射的に愛里のそばに行って抱きしめて
「愛里？　どした？」
「想像したらぁ・・　しあわせすぎるぅぅ」
なんだよ　可愛いなあ　可愛すぎんだろ
「でも入院したくないぃぃ」
「入院なんかすんなよ」
「でも、しなきゃいけなくなっちゃったらぁぁ」
「俺がいっから」
愛里のこと抱きしめたまま　愛里の頭撫でて
「俺がいっからさ、心配すんなよ」
「はい・・　入院しないように気をつけるけど」
「そっか」
「はい」
少しだけ　腕の力緩めて　愛里の顔　愛里のくちび
「あ、ダメ！　今はごはん食べたい」
「あ、はい」
「プッ」
「なに？ なんで笑ってんの？」

「タコみたいな口したから」
「してねえよ」
「しました」
「そうっすか」
「ほら、また」
口　手で押さえちまった
「こっちのタコは美味しいです」
「そうすか」
「はい」
「しあわせ」
「そっか」
「はい」
俺もしあわせだよ　愛里
まだ俺と愛里は　とうちゃんとかあちゃん　愛里のお父さんとお母さん
みんなに守られてっから　こうしてられんだけどさ
だから　まだ　ままごとみてえかもしんねえけどさ
そんでも　いつか　ままごとじゃなくて　ほんとにさ
「この鶏とキャベツのもサッパリしてて美味しい」
「そっか」
ちびっとだけ　俺が稼いだ金で買ったのを　愛里が美味そうに食っててさ
ちびっとだけ　予行演習　俺ん中だけで　やってんだよ　愛里

一般常識としての

ピコン
・・ん・・　愛里・・か？
ねえちゃん
何時だよ？　　01:34　放っとこ
ピコンピコンピコン　うっせえなあ
え　これ　運動会んときの応援タイムの写真　なんでねえちゃん持ってんだ？
『笑い過ぎて死んだ』
『動画見たけど』
『あんただけ戦隊ものの戦闘シーンでワロタ』
あれは戦闘シーンだっつうの
んなこと言うために LINE してきたんかよ
『かあちゃん　そっちの土曜日に退院だって？』
かあちゃん　入院してるときにねえちゃんと電話すんなよ
『うん』送信
ピコン
『アイリのお母さんにポロッと言ったらメチャ心配してた』
愛里のお母さん　ありがとうございます
ピコン
『アイリのお母さんも卵巣嚢腫で片方切除したんだって』
え？
ピコン
『アイリが生まれる 3 年前』
そう・・だったんか
ピコン
『開腹手術だったから全身麻酔で術後も辛かったって』
んな辛れえ経験してたんか
ピコン
『そんな大変なときに　うちのアイリがご迷惑かけてないかって』
『かけてねえよ　愛里に助けてもらってるよ』送信
ピコン
『アイリに何やらせてんのよ』
『入院のときに必要なものとか退院のときのものとかさ』送信
ピコン

『それくらいあんたがやれよ』
『かあちゃんのメイクとか服とか靴とかなんすけど』送信
ピコン
『前言撤回』
ピコン
『あんたがやったらかあちゃんまた倒れる』
なんだよそれ　まあそうだけどさ
ピコン
『アイリ　運動会のこと言ってなかったらしい』
え？　なんでだ？
ピコン
『最近アイリから連絡が来なくて淋しいって言ってたよ』
そっか　そんでもそれはきっと
『運動会のあとにかあちゃん入院したからだと思う』送信
ピコン
『私もそう言っておいた』
そっか　だよな
ピコン
『かあちゃんから送られてきた動画と写真送ったら喜んでたよ』
『ねえちゃん　ありがとう』送信
ピコン
『アイリにたまにお母さんに連絡してあげてって言いな』
『わかった』送信
ピコン
『アイリのおかあさんの更年期障害けっこう重いから』
ピコン
『気持ちの浮き沈みもけっこうあるからさ』
そっか　辛れえよな　それはさ　俺にはわかんねえ辛さだよな
ピコン
『アイリ食べるようになったって？』
ピコン
『とうちゃんが食べたから LOL』
『愛里のおかげだよ』送信
ピコン
『人間は水分摂ってれば 1 週間くらい食べなくても死なないけどね』
ねえちゃんさ　そうじやなくてさ
『愛里はとうちゃんが食わねえとかあちゃんが安心して入院してらんねえって』送信
ピコン
『かあちゃんもその話してたよ』
そうなんだ

ピコン
『アイリってさ　すごいよね』
ねえちゃん　そうなんだよ　愛里はさ
ピコン
『片方卵巣のない状態で受胎して生まれたって』
え？
ピコン
『そういうことはよくあるけどさ』
ピコン
『むしろ生殖器が健康になって受胎しやすくなるけどさ』
ピコン
『アイリはきっと強い子だよ』
ねえちゃん・・　まさかねえちゃんの LINE でウルウルする日が来るなんてさ
ピコン
『あんたの夢叶ったね』
俺の夢？
ピコン
『戦隊もののヒーローになること』
ピコン
『I ‘m dead asf』
笑い過ぎて死ぬってなんだよっ
せっかくウルウルしてたのにさ
ピコン
『see ya』
ねえちゃん　なにが言いたかったんだよ　こんな夜中にさあっ
寝よう

朝　起きて顔洗って
おっし　弁当はできた
え？　　ピンポーン？
玄関にダッシュ
「愛里」
「おはようございます」
「おはよう　どした？」
「朝食をこっちで食べれば手間がはぶけるかなって」
「手間なんかじゃ全然ねえけど、愛里の部屋掃除するしさ」
「今日は私の部屋はいいです」
「なんで？」
「こっちの部屋を、明日おかあさんが帰ってくるから」
「うん、こっちもやっけどさ」

「帰ってきたとき、すっごくきれいになってると嬉しいと思う」
「え？」
「あ、今もきれいですけど、シーツとか換えたり？」
愛里　かあちゃんのこと　そんなに考えてくれててさ
「イチゴとヨーグルトと食パン持ってきました」
「そっか、そんじゃ、トースト、んっとハチミツのやつ？」
「ふつうで、あ、私がやります」
「いいってそんくれえ、愛里は座ってろよ」
「でもそれく・・　ファァァ」
愛里が手で口ふさいで　あくび？
「ごめんなさい、夜中にママから電話来ちゃって」
「そっか」
ねえちゃんから聞いたからかな
「なんかもう・・ファァァ、やだあ」
あくびして涙目になってる愛里　メッチャ可愛いよ
「ママがベラベラしゃべり続けて止まらなくて」
「久しぶりだからじゃね？」
「おかあさんのこと、お姉さんに聞いたみたいで」
「ねえちゃんから聞いた」
「ママが、お母様やお父様や大一さんはお元気？ みたいなこと聞いたら、
　お姉さんが、最近母が卵巣嚢腫で入院したけど、もう退院できますって、
　あのお姉さんだからサラッと言ったと思うんですけどファァ・・もうやだあ」
しゃべりながらあくびって可愛いっす
「ママも卵巣嚢腫で手術したことあるそうなんです」
ねえちゃんから聞いてっけど
「そっか」
「開腹手術で片方取ったって」
「そっか、すげえ辛かっただろうな」
「それを延々と聞かされて」
え・・　あれ？　　開腹手術っつうことは・・
「愛里は、お母さんの腹の傷痕見たことねえの？」
「小さいとき一緒にお風呂入って見てましたけど、これなあにって聞いたら、
　悪いものを取ったのよって、そんなに大きい痕じゃないから盲腸かなって」
だよな　小せえ愛里には言えねえよな
「それで、そんな大変なときに、愛里ちゃん、森下さんにご迷惑かけてない？ って」
「かけてねえよ、全然かけてねえよ、つか愛里に助けられてんじゃん」
「助けるまではやれてませんけど」
「ねえちゃんなんて、俺がかあちゃんの服とか用意したらかあちゃんまた倒れるってさ」
「それはないと思うけど」
「マジでさ」

「それで、話がだんだんなんか・・　愛里ちゃん、ママがアメリカに行く前に約束したわよね」
愛里の前に　イチゴのヨーグルトがけ置いて
「少しずつ自分のことは自分でできるようにするって」
「愛里はちゃんとやってるよ」
「全然やれてませんよね」
「やってんじゃん、洗濯も便所掃除も、皿やカップだって洗えっしさ」
「それはママがアメリカ行く前に習得したことで」
トーストも焼けたから　愛里の前に
「ありがとうございます、よく考えたら、そこから進展がないんです」
「進展・・つうのは？」
「お風呂掃除とか洗面台の掃除とか」
「それは俺がやっからいいよ」
「掃除機もまともにかけられないし」
「俺がやるって」
「でも、最大の難問は、料理がまったくできない」
「それは俺が作っからさ」
「でも、一人暮らしって、いちおう自分が食べるものくらい作れないと」
「んなさ、そこはべつにいいじゃん、俺がいんだから」
「でも、ママに言われたんです」
「メシ作れって？」
「せめて、ごはんの炊き方くらいは憶えた方がいいわねって」
それはさ　それは・・
「愛里、それは愛里がやりてえことなんか？」
「やりたいとかやりたくないじゃなくて、やらなきゃいけないことですよね」
「愛里」
愛里の前に座って
「俺は？」
「あなた？　　あなたは作れますよね」
「じゃなくてさ、俺がいんだけど」
「ちゃんと見えてますけど」
「じゃなくてさ、俺が作っからさ」
「今は、そうでも」
「メシは俺が作っから、んなこと考えねえでいいよ」
「でも社会人になったらどうするの？」
「俺が作る」
「えっと、んっと、一般的な、一般常識としての社会人」
「一般常識の社会人てなんだよ？」
「え・・　自分のことは自分でできるみたいな」
「かあちゃん、独身のとき、ほっとんどメシ作らなかったっつってたけど」

「それは・・　おかあさんはバリバリ仕事ができたから」
「愛里の言う一般常識の社会人なら自分のメシは自分で作るんだろ？」
「そう・・だけど」
「そんじゃ、かあちゃんは一般常識の社会人じゃねえじゃん」
「なんで私・・」
「え？」
「あなたにこんなに追い詰められなきゃならないの？」
「あ、や、追い詰めてねえよ、ごめん、じゃなくてさ」
「なんか・・　被告人みたいな気分になっちゃった」
「愛里、ごめん、そういうんじゃなくてさ」
「私はただママに言われて」
「ごめん、愛里、んと、なんつうかさ、愛里のお母さんはかあちゃんのこと気づかってくれて、
　そんでそういうこと言ったんかもしんねえけど、そんなん考えなくていいって」
「でも、なんにもできないっていうのはやっぱり」
「そんじゃさ、そんじゃ、愛里が掃除もメシもメッチャできるようになったらさ」
「メッチャは・・」
「俺どうすんの？」
「あなた？」
「俺いらなくなっちまうじゃん」
愛里が口開けて俺の顔見てっけど　そうじゃん
「さっきまでは・・」
さっきまで？　　なに？
「凄腕の怖〜い検事みたいだったけど」
「あ？」
「なんで突然バカになっちゃうの？」
「へ？」
「あなたは私の家政夫じゃないですけど」
「わかってるよ、んなさ」
「私が料理とかメッチャできるようになったら、俺はいらなくなっちゃうとか」
「そうじゃん」
「その発想が、もう、なんかもう」
「え、なに？」
「それじゃ聞きますけど」
「おう」
「私は、えっと、あなたとしかつき合ったことがないですけど」
「俺だって愛里としかつき合ったことねえし、他とはもうぜってえつき合わねえよ」
「そういうことじゃなくて、一般的な、一般常識的なカレシって」
「一般・・常識的な・・　カレシ？」
「カノジョが料理とかそういうのでできたらいらなくなるものなんですか？」

「それはちげえだろ」
「あなたが言ったのはそういうことです」
「や、俺が言いたかったのはさ」
なんつうか・・
愛里の言う愛里の将来に　俺がいねえみてえで
「なんですか？」
なんつうか・・
「俺の場所」
「あなたの場所？」
「空けといてくれよ」
「え？　どういう意味？」
「んっと、なんつうか、えっと・・　あ！」
「あ！　って？」
「愛里が、メシの炊き方とか、マジで知りたくなったら」
「マジ・・で」
「俺が教えっからさ」
「そう・・です・・よね」
「おう、だから、んな心配すんなよ」
「正直・・言っていいですか」
「いいよ」
「そこまで言っておいてなんだとか怒らない？」
「怒んねえよ、なに？」
「ごはんの炊き方を・・　心の底から知りたいとは・・　今は・・全然思えない」
愛里　んなさ
「愛里」
「え、なんでここで抱っこ？」
「抱っこじゃねえよ」
「それじゃこれはなに？」
愛里が　メッチャ可愛くて　メッチャ　たまんねえから
「抱っこ」
「なにそれえ！」
「メシは俺が炊く」
「は・・い、お願いします」
「一生俺が炊く」
「さすがにその前にはなんとか」
「俺が炊く一生炊く」
「そうですか」
「おう」
「離してください」
「イヤだ」

「イチゴ食べるのっ　またギリの時間になっちゃうっ」
「あ、そっか」
腕離したら　愛里が俺のこと上目遣いで睨んでイチゴ食ってるよ　可愛いなあ
「俺は、愛里がいねえとどうもなんねえよ」
「どうもなりますよね、あなたはなんでもできますけど？」
「かあちゃんの退院ときの服とか靴とかさ」
「それは一生に一度くらいの緊急事態だったからで」
「俺がコンビニで買った花、すげえきれいにやってくれたじゃん」
「まあ、あれは・・」
「これからも」
一生
「お願いします！」
「やるから、あなたも早く食べて、またギリで走るとかイヤだから」
「おう」
トースト二口でバクッと
「そこまで急がなくても」
「急いでねえよ、俺のデフォルト」
「え・・　あ、そう言えば昨日も落としたトースト、あっという間に」
「そうっすよ」
「落としたのを・・　もういいけど」
愛里が　俺のこと上目遣いでジーーッと見てっけど
「愛里、なに？」
「落としたトースト食べたあとは絶対キスしたくない」
「えっ　や、んっと、今は？　　今は落としたのじゃねえよ」
「口にパンくずついてるからイヤ」
「えっ？　　マジ？」
触ってみてっけど　どこだ？
「ウソです」
「なんだよぉ、愛里ぃぃ、からかったんかよぉ」
「ごちそうさま」
愛里が皿とイチゴ入ってた器持って
「愛里、俺がやっからいいよ」
「これを洗うのは習得してますから」
「そっか」
愛里のあとを　俺も皿持ってキッチン入って
「それも洗うので置いてください」
「俺のはいいよ」
「あなたは、えっと、テーブル拭いてください」
愛里　なんかなんつうかさ　結婚生活みてえなさ　一般常識としてっつうの？
かあちゃんが皿洗ってんの見たことねえけどさ

「どうしたの？」
「あ、や、拭いてくる」
な〜んか新鮮だなあ　こういうのさあ
俺は愛里に家事やって欲しいとは全然思ってねえけどさ
愛里にテーブル拭いてって言われっとキューーンてさ
なんでも言ってくれよ　なんでもやっから
「そんなに汚れてた？」
愛里
「全然汚れてねえよ」
「私のとこばっかりずーっと拭いてたから」
「や、これは、ちっと考えごとしてて」
「ほんとのこと言って」
「ほんとのこと言ってっけど」
「私、小さい頃からトースト食べるときポロポロこぼしてテーブルにパンくずが」
「マジで全然きれいだったよ」
「できるだけお皿の上で食べるようにしてるけど」
「うん、愛里の食べ方メッチャきれい」
「ママがトーストを三角に切るようになったのは、そういうのを回避するためで」
そんで家政夫んときのノートに細かく指示書いてたんか
「あなたも三角に切ってくれますけど」
「あ、ついクセで、家政夫んときの」
「私が気をつけるので、あまり気を使わなくていいです」
「気ぃ使ってねえけど」
「そうですか」
「愛里、俺マジで気ぃ使ってんじゃねえよ」
「そろそろ行きましょう」
「おう」
愛里と俺の弁当も持って　家を出た

レンチンごはん

午前中の 10 分休み
え？　あれ？　愛里が　窓際の佐藤んとこに行った
珍しいな　愛里から他の子んとこって　なんか用があんのかな
あ　笑った　可愛いなあ　こういうカンジで愛里見るのってさ
一年んときみてえで　え？　佐藤が　こっち向いて手招き？　俺？
じゃねえのか　俺の隣りの佐藤呼んだんか
楽しそうに話してるよ　愛里　友だちできたんだな　よかったなあ
リレーの絆かもしんねえな　あ　ヤベ　便所

昼休みの中庭
「タコの唐揚げ美味しい」
愛里のその顔見れっからさ　俺はしあわせっすよ
「あ、そうだ、放課後、サトアヤさんの家に行くことになりました」
「佐藤ん家？」
「サトユミさんも一緒に」
そっか　女子三人でっつうのも楽しいよな
「サトアヤさん、お姉さんと二人暮らしで」
「えっ　お父さんとお母さんは・・」
「サトアヤさんが中学三年のときに」
し・・ん・・
「転勤で」
あ・・　そっか　よかった　そっか
「お母さんもついていくことにして、お姉さんとサトアヤさんは学校があるからって」
「そうなんか」
「今は大学生のお姉さんとマンションに二人で住んでるそうです」
わりといるよな　ここの生徒　下宿してるとかさ
「その話は運動会の応援タイムの練習のときに聞いてたんですけど」
俺がとうちゃんと特訓してたときか
「午前中の 10 分休みに、サトアヤさんに、ごはん炊ける？ って聞いたら」
愛里の関心は今そこなんだな
「たまにって」
「たま？　そんじゃなに食ってんの？」
「レンチンごはんとか」

れんちんごはん？　あ、パックに入ってるやつか
「私、レンチンごはんをなめてました」
「ん・・と？」
「こしひかりのレンチンごはんがあるって」
「こ、こしひかり？」
俺ん家の古米そんで古古米は・・　そういうんじゃねえな
「あと、なんだっけ、とにかく有名なお米のもいろいろあって」
愛里は　ブランド米が食いてえんかな
「玄米とか炊き込みごはんとかいろいろあるそうなんです」
「そう・・なんか」
「ママはそういうの使ったことないからわからなかった」
「俺ん家も使ったことねえけど」
「そうですよね、これは・・」
愛里が弁当箱ん中のメシ指さして
「どこのブランドのですか？」
「ブランドとかそういう米じゃねえけど」
「え？　ウソ」
「マジ」
「すごく美味しいんだけど」
「古米はさ」
「コマイ・・って？」
「古い米、新米じゃねえやつ、古古米も使ってっけど」
「ココマイ？」
「メッチャ古い米、だから安く買えんだよ」
「え・・　私、すごいブランドのだと思ってました」
「ちげえ・・んだけど」
「こんなに美味しいのに？」
「え、マジ？」
「はい」
メッチャ嬉しいんすけどぉぉお
「ママが前に、なんとかっていう俳優が取り寄せてるなんとかっていうお米を」
一生懸命しゃべってる愛里は可愛くってさ
「ママも取り寄せちゃって」
米を　取り寄せる？
「愛里ちゃん、どう？　いつものと違うでしょって言われても違いがわからなくて」
取り寄せるくれえの米って　どんなんなんだ？
「わかんないって言ったら、すっごいガッカリしちゃって」
愛里のお母さんはそんくれえこだわってるっつうことか
「でも、あなたのごはん、あなたの家のごはんは美味しいって思うんです」
マジっすかあ

「なにか秘伝のワザとかあるんですか？」
「んな、変わったことやってねえけど、古古米んときは酒入れるくれえかな」
「お酒？　お米に？」
「古米臭が消えて甘みが出るからさ」
「コマイシュウ・・」
「あとは浸水時間長げえ方が」
「あの」
「ん？ なに？」
「ちょっと・・　上級者向け過ぎて・・　もういいです」
「あ、うん」
「えっと、なんだっけ、あ、そういうことで、サトアヤさんの家に行きます」
「帰るとき、連絡してくれよ」
「はい」
「佐藤ん家って遠いんか」
「ここからバスで駅に行って・・電車で・・20 分？ とか言ってました」
けっこう遠いな
「迎えに行く」
「ハ？」
「遠いじゃん、佐藤ん家の近くの駅まで迎えに行く」
「いいからそんなの、そこまで遅くならないし」
「そんじゃ俺ん家の、あの駅まで迎えに行く」
「あなたはおかあさんが帰ってくるための準備をしてください」
「そんなん愛里が佐藤ん家行ってる間にできっから」
「でも」
「迎えに行く、危ねえじゃん」
「私はそこまで子どもじゃないですけど」
「子どもじゃねえから危ねえんじゃん」
子どもも危ねえけどそんでもさ
「愛里は女の子なんだからさ」
「え・・」
「危ねえだろ」
「そう・・ですか、それじゃ・・　お願いします」
「おう」
「あなたって・・」
「ん？　なに？」
「ときどき・・　オスが出ます」
オスぅぅぅっ？　いやいやいや
「俺は、愛里を獣みてえなオスどもから守りてえだけでさ」
「そういうところが」
愛里が俺のことチラッと横目で見て　そんで

「なんか・・」
また前向いちまった
「愛里、愛里はもっとちゃんと自覚してくんねえとさ」
「私は自分が女子だという自覚はありますけど」
「ちげえよ」
わかってねえなあ
「愛里はすげえきれいなんだからさ、危ねえだろ、狙われるっつうかさ」
愛里が　え？　　ゆ〜っくり俺の方見た・・けど？　　俺は間違ってねえよ
「いつものあなたに戻りました」
「いつもの？　　いつものって？　　俺は俺だけど？」
「さっきのドキッがバカみたい」
「ドキッ？　　ドキッてなんだ？」
「なんでもないです」
愛里がパクッて白メシ口に入れて
「ごはん美味しいです」
「そっか」
「コマイですよね」
「ここんとこ使ってんのは古古米」
「そうですか、その違いはわかりませんけど」
「古古米っつうのはさ」
「いいから、美味しいから」
「そっか」
「お米を美味しいって思える日が来るなんて思わなかった」
「マジ？」
「お取り寄せのといつものお米の違いもわからなかったんだから」
「炊き方じゃねえかな、炊き方変えれば」
「炊き方知りたいと思わないって言ったでしょ」
「だよな、愛里は知らねえでいいよ」
「そう・・でしょうか」
「俺が炊くからさ」
「そう・・ん・・」
愛里が　口元に手ぇグウにしてあてて　なんか考えてんだけど
「愛里、どした？」
「まあ・・　私なりに？」
愛里なり？
「できることを考えるしかないかなって」
「できること？」
「今言えることは・・」
言えること？
「今のところ、ごはんの炊き方を知りたいとは思わない」

「なんだよぉ、んなことさあ」
「なんでニッコニコしてるの？」
「俺がやっからいいって」
「は・・い」
「おう」
なんかさ　なんつうかさ　米炊く話っつうだけなのにさ
愛里としゃべってっと　メッチャ楽しいな

帰りの学活終わって
「愛里」
「はい」
「気をつけて行けよ」
「サトアヤさんたちと一緒だから大丈夫です」
「そんでもさ」
「気をつけます」
「帰るときはぜってえ連絡してくれよ」
「します」
「そんじゃ、なんつうか、佐藤たちと仲良く楽しんでな」
「なにそれえ、親みたい」
「え、や、なんつうかさ」
「楽しんできます」
「うん、そんじゃな」
愛里が　佐藤たちんとこに走ってって
俺は　俺も帰ろう　帰って掃除してそんで買い出しだ

愛里の部屋は掃除した
俺ん家も掃除した　かあちゃんのベッドシーツも換えた
帰ってきたら　かあちゃんの荷物がなくて　とうちゃん帰ってきたんだな
ベランダに洗濯物干してあってさ　俺がやんのに　とうちゃんらしいけど
おっし　買い出ししねえとな
愛里はなに食いてえかな　明日の弁当もだな　愛里がバイトすっからさ
スーパー行こう

スパゲティ安売りしてんな
そんでもおといナポリタン作ったばっかだしな　そんでもこれはメッチャ安いよな
これは買っといて　そんで　あ　肉売り場　安売りしてんな
もうちっと遅く来たらもっと安くなってんだろうな
そんでもなあ　それじゃ晩メシ遅くなっちまうもんな　だな　んーーっと　これだ
牛肉の切り落としで牛丼　そんで
ピコン　え？　愛里

『今日の夕食はサトアヤさんのところで食べます』
え？
ピコン
『ちょっと帰りが遅くなるけど』
ピコン
『帰るときはちゃんと連絡します』
そ・・っか
『わかった』送信
『三人で楽しくメシ食ってくだせえｗ』送信
そっか　そんじゃ・・　牛丼はまた今度だな　も少し安くなったときに買うか
どうする？　俺一人ならべつにな　あ　そんでも愛里の明日の弁当のは買わねえとな
あとは・・　イチゴ　いっちゃん高けえやつ　ツヤッツヤしてんじゃん
あとは・・　帰っか

冷凍してあった白メシに卵と納豆混ぜたやつかけてキッチンカウンターで食って
そのまんま　明日の愛里の弁当の下ごしらえ　米も研いでタイマーかけた
愛里がいねえ晩メシって　こんなんだったかな
かあちゃんが出張で　とうちゃんが家政夫の仕事で遅くなったときは・・
とうちゃんとメシ食ってたもんな
一人で晩メシって　あったか？　あった　愛里ん家に家政夫しに行ってたときだ
あんときは　なに食ってた？　忘れちまったな
愛里がいる晩メシがあたりめえになってて　なんか　調子狂うっつうか
そんでもな　愛里は佐藤たちと楽しく食ってんだからさ
なんつうの？　そういう女子同士でっつうのも愛里は久しぶりだもんな
俺もたまには男友だちと・・　いねえな　まあ川口がいっけど　一緒に晩メシはなあ
晩メシ食わねえとしても　川口と二人きりでなに話すんだよ
ずっとそうだったよな　友だちと遊びに行くとか　ねえな　ほぼなかったな
とうちゃんと遊ぶのがいっちゃん楽しいからさ
にしても・・　愛里遅せえな　遅くねえか　もうすぐ８時だぞ
佐藤ん家から電車乗ってって　佐藤ん家って駅からどんくれえなんだ？
迎えに行くか　佐藤ん家まで　佐藤ん家知らねえじゃん
愛里に LINE して佐藤ん家聞いて　そんで
ピコン　愛里だ愛里
『今電車に乗りました』
そっか　よかった　そっか
ピコン
『あと 20 分くらいでそっちの駅に着きます』
あと 20 分て　メッチャ遅くなんじゃん
『愛里　途中の駅まで迎えに行く』送信
ピコン

『大丈夫です』
ピコン
『途中までサトユミさんもいるし』
そっか　そんでも途中ってさ
『途中っつうのは？』送信
あれ？　　返信ねえ　どした？　　なんかあったんか
『愛里　どした？』送信
『なんかあったか？』送信
ピコン　動画？
え　隣りの席の佐藤と愛里
「森下くーん、私は上原さんが下りる駅の二駅手前で下りるから心配しないでいいよ」
そっか　二駅手前・・
ピコン
『ということです』
ピコン
『サトユミさんメチャ笑ってますよ』
そんでもさあ
ピコン
『それじゃ』
『駅で待ってっから』送信
ピコン
『はい』
ハァァァ　愛里ぃぃ　心配すんだろぉぉ
佐藤がいてくれてよかったけどさ
駅に行っとかねえと　あと 20 分て・・　ちっと早えけど遅くなるよかいいからさ
佐藤の住所聞いとかねえとな　また遊びに行くときはさ　佐藤ん家まで迎えに行く
身が持たねえよ
玄関の鍵閉めて　ダッシュでバス停向かった

レンチン容器

改札の前　もう 10 分以上待ってっけどそろそろだよな
ピコン
『もうすぐ着きます』
そっか　案内板の・・　いっちゃん上のあの電車だな
『改札んとこで待ってる』送信
ピコン
『はい』
着いたな　階段から人がいっぺえ下りてきたもんな
愛里が　階段から　下りてきた
俺の方見た
メッチャ手ぇ振ったら　愛里が走って改札抜けて
「愛里、おかえり」
「ただいま」
「楽しかったか？」
「はい、すごく楽しかったです」
「そっか」
子どもみてえな顔でさ　可愛いな
「電車の中で、あなたから何回も LINE が来て」
「心配だったからさ」
「サトユミさんが、過保護なお父さんみたいって」
おとうさぁぁあんっ？
「それで、動画撮ってお父さんを安心させてあげようよって」
「俺、お父さんじゃねえけど」
「それじゃ、お母さん？」
「カレシのつもりなんすけど」
愛里が俺の顔見てフッて笑ってさ
俺のことからかうくれえ楽しかったんだな　よかったなあ愛里
あれ　なんか袋持ってんな
「その袋、持つよ」
「軽いから」
「持つ」
「はい」
「佐藤たちと買い物行ったんか」

「サトアヤさんの家の近くのスーパーに」
「スーパー？」
「サトアヤさんのおかげで私の世界が広がりました」
世界？
「あ、バスが来てます」
「おう」
愛里の手ぇにぎって　バスに乗って
愛里と並んで座って　俺は愛里の手ぇにぎったままで
「愛里、晩メシ何食ったの？」
「カルボナーラとミートソースと、えっとポルチーニ茸のパスタ」
「そんなに食ったんか」
「三人でシェアしたんですけど」
そんでもスパゲティ三皿ってさ　佐藤たちどんだけ食うんだよ
「あとは・・　カレーとおむすび」
すげえな
「愛里、それ、全部食っちまったの？」
「全部って、三人でシェアしたから」
「腹パンパンじゃね？」
「そこまででではないです」
「それってさ、佐藤が作ったんか」
「作ったっていうか・・」
「食いに行ったんか」
「サトアヤさんの部屋で、温めた・・みたいな？」
温めた？　冷凍しといたんかな　かもしんねえな　お姉さんと二人暮らしだもんな
愛里が来るからご馳走にしてくれたんかな　だよな　佐藤ありがとう

愛里の部屋の前
「それじゃ、ここで」
「え？　上に来ねえの？」
「ごはん食べてきたし」
んなさあ　今日はこれで愛里に会えねえってさあ
「なんでタコになってるの？」
「や、なってねえけど」
「今もなってますよ」
「今日は学校帰ってきてから愛里にあんま会えなくてさ」
「口とがらせながら言う？　子どもみたい」
笑ってっけど
「それじゃ、ちょっとだけ入りますか？」
「入ります！」
「やだあ　アハハハ」

ヤッタ
愛里の部屋に入って
「私、着替えてきていいですか？」
「いいよ、全然いいよ」
愛里がベッドルームに入って　俺は　愛里なんか飲みてえかな
「愛里！　　なんか飲むか？」
「紅茶が飲みたい」
「おう」
キッチン入って湯沸かして
おそろいのマグカップ出して　いいな　なんかさ　こういうのいいな

愛里と二人　リビングのローテーブルんとこに座って紅茶飲んでさ
「私、スーパーってほとんど行かないし、行ってもアイスコーナーとか、
　お菓子の材料のところくらいで、グルッと回って見たことなくて」
愛里がマグカップ両手で持って表情クルックル変えながらしゃべってさ
「今日サトアヤさんにあちこち連れてってもらって、カルチャーショック？」
カルチャーショックってさ　なんだよ可愛いな
「ちがう、浦島太郎状態？　　じゃなくて、未知の世界？」
愛里にかかるとスーパーがメッチャ楽しい場所に思えてくんな
「こんなものがこの世界に存在したの？ みたいな」
愛里の感覚は・・　前にかあちゃんが言ってたな　Brand new 真っ新でさ
「米研ぎスティックって知ってますか？」
「ああ、そういうのあるよな」
「サトユミさんのお家は共働きで、お母さんがチャチャッと研ぐのに使ってるって」
共働きか　もし愛里が仕事してえってなっても家事は俺がやっからさ
「サトアヤさんは、たまに炊くときは無洗米って」
無洗米か　買ったことねえな
「お米を洗わないってどうなのか私はわかんないけど」
愛里は自由研究みてえなことやってんだな
「なんでニヤニヤしてるの？」
「なんか可愛いなと思ってさ」
「私は真剣にリサーチしてるんです」
「あ、はい」
「まだニヤニヤしてる」
だってさ　スーパーを真剣にリサーチとか　可愛すぎんだろ
「あ！　　これ」
愛里がスーパーの袋ん中に手ぇ突っ込んで
「パックごはんです」
「パックごはん買ったんか」
「サトアヤさんが使ってるのと同じのを買いました」

「なんで？」
「ビックリしちゃって」
え？ ビックリ？
「サトアヤさんのところで食べたら、私のパックごはんに対するイメージがガラッと」
イメージって　パックはパックでさ
「これは、サトアヤさんおススメで、こしひかりの有機米で」
これか　こしひかり
「チンして食べたら、ママのごはんより美味しかったの」
「愛里、それって一パックいくらすんの？」
「え・・っと、400 円」
「よっ　そんだけで 400 円？」
「これよりは安いのもあって、安いのには中華丼とかカレーかけて食べるって」
「安いっつうのは、いくらすんの？」
「えっとね・・　130 円くらいって言ってました」
こんな小せえので 130 円もすんのか
「安い方をチンしてカレーかけて食べてみたんですけど」
え？
「少なくとも、ママのカレーより美味しかった」
あれ？　んっと
「愛里がカレー食ったって・・　それ？」
「はい、三人で」
「三人で一パック？」
「味見だから」
「そんだけじゃ腹空いてんだろ」
「他にも食べたから、あ！　そうだ、ビックリしますよ、私はしたけど」
愛里が　またスーパーの袋から
「これ！　おむすびメーカー、知ってますか？」
「見たことはあっけど」
「これにね、チンしたこしひかりの有機米を入れて、中に明太子入れてギュッてしたら、
ちゃんとおむすびになっちゃったからビックリして」
握りメシ・・　愛里はなんでそんなん買ったんだ？
「あとこれもすごいんです」
またスーパーの袋から　なんだ？　長細せえ・・　タッパー？
「これ見たことあります？」
「ねえな」
あんのかもしんねえけど記憶にねえな
「これはパスタをレンチンする容器なんです」
「バスタを・・　レンチン？」
「この中にパスタを入れて、水を入れて、フタをしてチンするとパスタができる」
「そう・・なんか」

「ここを開けてお湯を切るだけで」
愛里は　なんでそんなんも買ってきたんだ？
「私にもやらせてくれて、私でもできたからビックリでした」
「そ・・っか」
「それに・・　これ」
愛里がスーパーの袋から出したのは　レトルトの・・
「私、レトルトって不味いんだろうなって思ってたんですけど、これは美味しかったです」
なんでレトルトなんか買ってきたんだ　愛里
「ミートソースとカルボナーラとポルチーニ茸のをかけて試食したんですけど」
パスタ食ったって　そういうこと？
「カルボナーラなんて、ママの、卵の固まったツブツブ入ってるのより 100 倍美味しかった」
「あの・・さ、なんでそれ買ったの？」
「これはサトアヤさんのところで食べなかったけどどんなかなって」
「や、レトルトだけじゃなくて、その容器とか握りメシ作るやつとか」
「これがあれば私にもできるなって」
愛里に・・も・・　できる？
「あ、そうだ、忘れるとこだった、これを言わないと」
「え、な、なに？」
「月曜日はお弁当はいらないです」
え？
「サトアヤさんとサトユミさんと三人で学食で食べることになりました」
「学食って・・　学校の？」
「はい、私が学食を使ったことがないって言ったら、月曜日一緒に行こうって」
どういう・・
「あなたは学食使ったことありますか」
「え・・　一年とき、一回か二回」
「私はずっとママのお弁当だったから」
弁当に・・　飽きたんか？
「お弁当を持って、ミカリンたちと学食で食べたことはあるけど使い方はわからなくて」
「使い方が・・　知りてえの？」
「そうです」
なんだそっか
「そんじゃさ、俺が一緒に行って教えっから、そんで、学食で弁当食えばいいじゃん」
「ん・・　一度どんなのか食べてみたいし」
「そんじゃ俺も一緒に食うよ」
「それじゃ意味がないから」
意味が　ない？
「愛里、なんでだよ」
なんか・・　俺

「なんで学食なんかで食いてえんだよ、俺が弁当作んのにさ」
「でも、一度くらいは食べてみないとって」
「学食のメシなんて美味くねえよ、高けえしさ」
「え？　高いの？　サトユミさんたちは安いって」
「高けえよ、カレーが 460 円てさ、ラーメン 450 円、定食なんて 680 円すんだぞ」
「すごい、一回か二回で値段憶えてるの？」
「高いけえから憶えちまっただけだよ、他にもあっけど全部高けえよ」
「でも、一般的なお店よりは安いですよね」
愛里・・　俺
「意味わかんねえよ」
「意味？」
「んな、突然、学食で食いてえとかさ」
「一度は食べてみた方がいいかなって」
「食う必要ねえじゃん、俺が弁当作んだからさ」
「そうだけど、そういうことじゃなくて」
「んな、レンチンでパスタ茹でるとかレトルトとか、どういう意味だよ」
「どういう意味って、簡単にできるから」
「バスタ食いてえなら俺が作っからさ、俺が茹でっからいらねえだろ」
「だから、自分でも、これを使ったら自分でもできるから」
「愛里のメシは俺が作るっつったじゃん」
「そうだけど、そういう・・」
「パックのメシとか、そんなん食うなよ」
「食うなよって、それじゃダメなの」
「なにがダメなんだよ、俺の、俺ん家のメシ美味えっつってくれたじゃん」
「そうだけど」
「飽きちまったんか？」
「え？」
「俺のメシ、飽きちまったんか？」
「そんなこと言ってないでしょ」
「だってさ、んな、レンチンの容器買ってきたりパックのメシとか」
愛里が　俺のこと　黙って見てて
「愛里、俺はさ、愛里のメシは俺が」
「もういいです」
「え？」
「帰って」
「えっ　愛里、じゃなくてさ、俺はただ」
「あなたにはわからない」
俺には　わからない？
「帰ってください」
「愛里、あのさ」

「帰って！」
愛里が　ベッドルームに走ってって　ドア閉めて　鍵　閉めた
「愛里」
ドアの外から声かけたけど　返事はねえ
「愛里、あの、なんつうか、ごめん」
音は　なんも　聞こえねえ
「俺、愛里のこと怒らせるつもりなかったんだけどさ、ごめんな」
なんつうか
「俺が、勝手に、なんか、感情的になっちまって、ごめん」
俺は・・　なにやってんだ
「俺の弁当いらねえとかさ、学食で食うとか・・　なんか、なんつうか・・
　愛里に拒否られてるみてえな気になっちまってさ、ガキみてえだけど・・
　俺は、愛里に弁当食ってもらうと嬉しくてさ、愛里に美味えっつってもらうと・・
　そんでもな、愛里だって、俺のメシだけじゃなくて、他のだって食いてえよな、
　そういうのわかってあげれねえで、ごめんな、なんか俺、すげえ自分勝手だった」
ピコン　愛里
『やっぱりわかってない』
え？
ピコン
『帰ってください』
愛里　んな・・さ
「愛里」
ピコン
『帰って』
「愛里、顔見て話ししてえんだけど」
ピコン
『私は見たくない』
え・・
ピコン
『帰って』
ピコン
『あなたがいたら私シャワーできない』
そ・・か
「そんじゃさ」
でっきるだけ明るい声　必死に出して
「マグカップ洗ったら帰っから」
ピコン
『私がやります』
「こんくれえ・・」
情けねえけど

「やらせてくれよ」
涙出そうになってて
返信は・・　ねえ　洗ってもいいってことかな
愛里と俺のマグカップ　キッチンに持ってって
どうしてこうなっちまったかな
これで紅茶飲んだときは　こんなんじゃなかったのにさ
洗ったマグカップを　きれいに拭いて　水滴一粒も残んねえくれえきっちり拭いて
棚の上に入れた
帰るか
もっかい愛里のベッドルームのドアの前に行って
「愛里　おやすみ」
返事は・・ねえよな
帰る・・っきゃねえか

おむすびメーカー

部屋に戻って・・
なんか・・　どうしたら・・　なんか・・　落ち着かねえのに　動けなくて
玄関に立ったまんま　何をどうすりゃいぃんか　全然わかんなくて
愛里を　怒らせちまった
愛里が怒るには　理由があって　俺はそれを
“やっぱりわかってない”
わかってねえんだな
愛里のことわかってあげらんねえって　そんなん　最低じゃん
そんでも俺　なにがどうなってんのか　全然わかんなくて
なんで愛里が　レンチンの容器やレトルトや学食って　わかんなくて
俺が作ったもんじゃねえの　たまに食いてえんかなって
“やっぱりわかってない”
愛里　おしえてくれよ　俺の悪りぃとこ愛里がイヤだと思ってっとこ
俺のイヤなとこ・・　愛里は　ねえっつったけど　そんでもほんとはあんのかな
ウゼえんかな俺　過保護なお父さんて　そういうのウゼえんかな
そんでもさ　やっぱ心配になんだよ　暗いとこ愛里一人でさ
愛里のこと大切だからさ　すげえ大切だから　すげえ・・　そんでも・・
ダメだ　一人で考えてても頭ん中グルグルしてるだけで
シャワーしよう

シャワーしても　髪の毛ガッシガシ洗っても身体ゴッシゴシこすっても
全然サッパリしねえ
明日の愛里の弁当の下ごしらえ・・は　やった　もうやってた
明日・・　愛里は俺の弁当食ってくれっかな
なんか・・　なんか俺　なんだこれ　愛里にフラレたみてえな気になっちまってて
寝よう　勉強する気になんねえよ
部屋に戻って　ベッドに　え　愛里から LINE 入ってる　シャワーしてたときか？
なんか・・　怖え　見んの怖え　そんでも　そんでもさ
『さっきはごめんなさい』
え？
『あなたがなんだかすごく怒ってて』
怒ったんじゃねえんだよ愛里　ごめん　そうじゃねえんだよ
『私も自分が考えてることをうまく説明できなくてイライラして』

愛里の考えてること
『ちゃんと伝えたいけど伝えられるかわからない』
おしえてくれよ愛里　俺　ちゃんとわかるようにすっからさ
『おとうさんが食べないと　おかあさんが安心して入院していられないって』
うん　愛里がそう言ってくれて　とうちゃんに食わせてくれた
『私も　もし入院したとき　あなたが食べないと安心していられないって』
うん　俺は食うって約束した
『だったら　あなたは？』
俺？
『もしあなたが入院して　入院するとか考えたくないから』
『あなたが熱を出して寝込むほどの熱を出して』
『そんなときでもあなたは私のお弁当やごはんのことを考えて』
え？
『熱でフラフラしてても作ろうとする　と思う』
そんくれえさ　熱くれえはさ
『あなたがどうしてもムリなら　おとうさんに頼むかもしれない』
それは・・　やっぱさ
『だったら　もし今　あなたが熱を出して倒れたら？』
や　今は
『おかあさんが入院して　おとうさんが付き添ってて』
『そしたら　あなたは熱があるのに私の食事の心配をする』
それは　するだろ　熱くれえならさ
『私がコンビニのお弁当食べるって言っても絶対作ろうとする』
だってさ　俺がいんのにコンビニ弁当ってさ
『私は　あなたに　具合が悪いときには安心して休んでほしい』
え
『私のお弁当や食事のことを心配しなくていいようにしたい』
『早く治ってほしいから』
『早く治って　早く私のお弁当とごはんを作ってほしいから』
え・・　あ・・　涙・・
『あなたが寝ている間できるだけ私が自分で作れるようになったら
　あなたは少しは安心して寝ているんじゃないかなって』
愛里・・
『サトアヤさんに教えてもらったのもそのためで
　Better than コンビニ弁当だから　あなたも少しは安心できるかなって
　私がパスタは茹でられておむすびもいちおう作れたら安心できるかなって』
愛・・里・・
『学食に行ってみようと思ったのは　私のお昼は心配しないで欲しいから
　あなたがもし欠席しても　サトアヤさんやサトユミさんと学食で食べてるって
　そう思ったら　あなたは安心するんじゃないかなって

　私としても突然二人に一緒に学食でって言うのは勇気がいるから予行演習で
　それはサトアヤさんもサトユミさんもわかってくれてます』
俺は・・　グッチャグチャに・・　泣いてて
『だから　あなたは　熱が出たときはちゃんと寝て休んでください』
『あなたのためじゃないんです』
『私が早くあなたのお弁当とごはんを食べたいからです』
『ちゃんと休まないと長引いて　私はその間レンチンパスタですよ』
愛里　愛里・・
『スパゲティもおむすびも　私はあなたのがこの世でいちばん好きだから』
声が・・　声出ちまうほど　涙止まんねえ
『そういうこと言いたかったんだけどうまく言えなくて
　今もうまく伝えられてるのかわからないけど』
伝わったよ　愛里　伝わ・・　やべえ　涙止まんねえ
『それじゃ　おやすみなさい』
愛里　寝ちまったかな
そんでも
『愛里　ありがとう』送信
『そんで　ごめんな』送信
『愛里の気持ちなんもわかんねえで駄々こねてさ』送信
愛里　俺は　この気持ち　どう言えばいいんかわかんねえけど
『俺は熱が出たらひたすら寝るまだ寝てんのかよくれえ寝る』送信
『そんときは　そんときはさ』送信
『愛里の弁当なんか作ってらんねえよ　学食で佐藤たちと食ってくれよ』送信
『愛里の晩メシも愛里が作って食ってくれよ』送信
『俺は早く治して　愛里の弁当とメシ作りてえんだからさ』送信
あ　既読ついた
ピコン
『ありがとう』
ありがとうって　それは俺だよ　つか
『起こしちまった？』送信
ピコン
『シャワーして今戻ってきたところです』
そっか　よかった
ピコン
『会いたい』
えっ　マジ？
『行く』送信
ピコン
『ちがう　ウソ　ちょっとそう思っただけで　来なくていいから』
『行く』送信

ピコン
『私もうパジャマだし　いいから』
『俺は会いてえよ』送信
『あんなカンジのままはイヤだ』送信
ピコン
『それじゃ　はい』
ギョサン履いて　部屋飛び出して　階段駆け下りて
愛里の部屋に走った

ドアを開けてくれた愛里は
前にかあちゃんが買ったイチゴの模様がついたワンピースみてえのに赤いカーディガン
メッチャ　可愛い
「あなたの・・　その・・　上に着てるの」
「これ？　　中学んときのジャージ、今夜はちっと冷えっからさ」
「そう・・ですか」
「風邪ひいてらんねえじゃん、熱出したら愛里の弁当作れねえからさ」
愛里が　俺の顔見て　そんで　え？　　泣きべそ？
「愛里」
抱きしめて
「ご・・めんなさい・・なんか・・うまく言えなくて・・なんか・・あんな」
「愛里、伝わった、ちゃんと伝わった」
愛里が　俺の胸んとこに頭つけて
「愛里、俺こそごめんな、拒否られてる気ぃすっとかさ、ガキみてえにさ」
「私・・　ほんとにこういうのってうまく言えなくて・・」
「ちゃんと伝えてくれたじゃん」
「文字だと、なんとか・・」
ゴルゥギュルルルル　あ　ヤベ　俺の腹
「お腹空いてるの？」
「あ・・　なんか鳴っちまった」
「夕食食べなかったんですか？」
「食ったよ、納豆と卵かけメシ」
「えぇぇ、それなら私だってできると思う」
「メッチャ簡単、納豆と卵グチャグチャッて混ぜてメシにかけるだけ」
「なんでちゃんと食べなかったの？」
「俺一人だからさ、めんどいじゃん」
愛里が　口あけて俺のこと見てっけど
「愛里、そこは心配すんなよ」
ゴルゥギュルルルル　あ・・
「なにか・・　軽く食べた方が」
「今から作んのはめんどいからさ」

「あ・・」
「ん？　どした？」
「軽くなら・・　簡単にできます・・けど」
「え？」
「パックごはんとおむすびメーカー」
その手か

メシができた
愛里が「熱つっ」て言いながらピリピリってフタはがして
「具は・・　私のところには何があるんでしょうか」
「いれねえでいいよ」
「そうですか、それじゃこれを、ここに・・　スプーンでいいかな」
愛里が湯気の出てる白メシを型ん中に入れて
「入った、それで、これでギュッ、あとは、えっと・・　ラップ」
俺は　動きてえの我慢して　愛里に任せてる
「ここに、サトアヤさんはお塩をパラパラッて、その上にこれをパカッて」
そっか　佐藤も考えたな　手につかねえもんな
「それでこのラップでちょちょっと巻いて、できました」
「おお」
「拍手しないで」
「愛里の作った初握りメシだからさ」
「作ったってほどじゃ、えっと、どうぞ」
愛里が　握りメシ　俺の手の上に乗せて
「いただきます」
優しい味だ　愛里のさ
「どうですか？」
「美味え」
「コンビニのおむすびよりは美味しいですよね」
「おう、美味えよ」
「ちょっと手作り感ありますよね」
「ある」
「まさかこんなに早く使うとは思わなかったけど」
「あざーす」
「だって、なんかヒキガエルみたいな音だったから」
ヒキガエルってさ　ハハハ
「愛里、ありがとな」
「いいです、チンでギュッでパカッだけだから」
それだけじゃなくてさ
「これが私のギリです、あなたみたいに素手でとかムリ、三角とか絶対ムリ」
「今作ってくれたの三角じゃん」

「おむすびメーカーに感謝です」
愛里　真面目な顔で　可愛いな　あれ？　　そんでも
「俺、愛里が買ったメシ食っちまった・・よな」
「いいです、また買いますから」
「俺買ってくるよ」
「いいの、これは、なんていうか、私の非常食・・みたいな？」
「非常食」
「はい、まあ、備えあれば憂いなし的な」
「そっか」
「使わないで済むのがいちばんみたいな」
「使わねえで済むようにする」
「努力ではどうにもならないときがありますから」
「おいっす、そんときはガッツリ寝る」
「そうしてください」
「愛里」
抱きしめて　愛しくて愛しくて愛しくて　たまんねえ
「明日は」
俺の腕ん中で
「あなたもバイトですよね」
「うん」
「共働き？」
えっ　と、共働き
「あ、ちがう、ただ単に私とあなたが同じ日にそれぞれバイトするだけですね」
「いいじゃん、共働きでさ」
「でもちょっとニュアンスが違うから」
「共働き、共働きっすよ」
愛里が　ちょっと身体離して　俺の顔見上げて
「お互い稼ぎましょう」
たっまんねえ
「おう、稼ごうな」
「まあ、私のはそういうカンジじゃないけど」
「バイトなんだからさ、金稼ぐんじゃん」
「ちょっとだけですけど、はい」
「愛里」
愛里の　柔らけえ　くちびる　愛里の・・
「え？」
愛里がくちびる離して
「なんか、今、お腹のところに」
「腹？」
「硬い、なんだろう」

「硬い？　あっ」
ヤッベ　腰引くの忘れてた
「あって、なあに？」
「や、なんも・・ねえよ」
「なんで前かがみになってるの？」
「や、べつに」
「お腹痛くなっちゃった？」
「や、じゃねえよ」
「私のおむすび？　あたった？」
「ちげえよ、愛里、ちげえから」
「ほんとに？」
「マジ、ほれ、もう大丈夫」
「だったらいいけど」
「おう、大丈夫だから」
「具合悪いときはちゃんと言ってください」
「言う、そんでガッツリ寝る」
「はい」
なんか　なんつうか　まだ一緒にいてえけど　そんでも
「んっと、明日の朝、俺の方が早く出っからさ」
「はい」
「愛里の弁当、持ってくっから」
「はい、ありがとう」
「おう、んっと、そんじゃな」
「おやすみなさい」
「愛里、おやすみ」
ドア閉めて　愛里が・・　鍵閉めた
なんか　なんつうか　パックごはんとおむすびメーカーありがとう
俺は愛里の初の握りメシ食えました
これが最初で最後でいぃんだけどさ
家戻ろう

行先変更

ん・・・で・・・・わ・・・でん・・わ・・　電話？
監督？
「あい、森下っす、おはよっす」
「おはよう、森下、今日は俺の家に来る予定になってたよな」
「おいっす、10 時からっつうことで、ちゃんとその前に着くようにするんで」
「変更してくれないかな」
「時間すか？　　あ、日にち？」
「場所」
場所？ え？
「現場に入ってくれないか」
現場？
「どこのっすか？」
「旧体育館」
「え？　　公共事業んときは単発は」
「派遣通してはダメだけど、直接雇用ならできるよ」
「マジっすか？」
「丸一日で日給 2 万円」
「マジっすか？　　やりますっ」
あ　そんでも
「あの、監督の家の掃除は・・」
「俺が明日やるってことで手を打ってもらった」
「そう・・っすか」
「詳しい話はあとで、それじゃ頼むよ」
「おいっす」
おおおお　ヤッタ　現場　日給 2 万
さっさと顔洗わねえと

作業服に着替えねえとな・・って　とうちゃんのクローゼットん中だ
ベッドルームに入って
ズボンは・・　愛里がとうちゃんに選んでくれたやつ
シャツは・・　夏んときのでいぃんかな　あれ　奥の方に・・　ちっとだけ厚手の
これだ　袖口んとこ擦り切れてっけど　とうちゃん　よく取っといてくれたよ
かあちゃんに捨てろって言われたろうにさ　ぜってえ言われたよな

おっし　愛里の弁当だ

愛里の弁当はできた
俺は・・　現場だから握りメシでいいな
水は　凍らせてねえけど、ペットボトルに入れて
握りメシ食ってかねえとな　力出ねえかんな
とうちゃんのが食いてえけどさ　しかたねえよな
愛里の弁当　どうすっかな　愛里まだ寝てるよな　こそっと部屋ん中に入れとくか？
いちおう LINE しといた方がいいよな
『愛里　俺のバイト先変更になった』送信
『監督から電話あって学校の旧体育館の現場に丸一日入ることになったよ』送信
『早く出るから愛里の弁当玄関の中に入れておくよ』送信
おっし
保冷バッグん中に握りメシと　いちおう夏んときのシャツと手ぬぐい入れた
そんでゴム長　ヤッさんたちにもらったゴム長　また履けるよ
家の鍵閉めて　愛里の部屋にダッシュだ

そ〜っと鍵穴に　あれ？　開いてる？　愛里　閉め忘れたんか？
や　ゆうべ閉めてた・・よな
そ〜っとドア開けたら　愛里！
「おはようございます」
「LINE で起こしちまった？」
「大丈夫、見送りたかったから」
クゥゥゥゥ　たまんねえ
「あ、これ、弁当」
「ありがとう」
「愛里」
抱きしめちまった　ポワンとした顔が可愛すぎっだろ
「念願の現場ですね」
「念願てさ、うん、まあな」
「どうして現場になったのかはわからないけど」
「俺もよくわかんねえんだけどさ」
「がんばってきてください」
「おう、愛里もな」
「はい」
少し腕の力緩めて　愛里・・
「やだ！　まだ顔洗ってないから」
「そんなんいいよ」
「私がイヤ」
「え、そんじゃ」

頬っぺたに　キス
「顔洗ってないのに」
「汚くねえよ、きれいだよ」
俺のこと睨む愛里が可愛いっす
「そんじゃ、いってくる」
「いってらっしゃい」
いってらっしゃいって　たっまんねえ
「いってきやす！」
愛里の部屋のドア閉めて　エレベーター乗って　現場近けえっていいな

現場着いて・・
んっと　監督室は・・　こっちか
扉開けて
「失礼します」
「森下、来てくれてよかったよ」
「俺こそ仕事もらえて嬉しいっす」
「森下が俺の家に来るって、ゆうべ奥さんから聞いてさ」
「ほんとはとうちゃん指名だったんすけど代打で俺っつうことで」
「お母さんが入院してるんだって？」
「今日退院するんすよ」
「そうか、よかった」
「おいっす」
「今日森下にやってもらいたいのは、カズオさんが言うところの下っ端仕事」
「おいっす」
「月曜からショーさんいなくてさ」
「え？　なんかあったんすか？」
「別の現場に行ってもらってる」
「あ、そうなんすか」
「現場監督の、まあ今のところは見習いやってるよ」
「えっ　げ、現場監督？」
「資質があるなって思ってさ」
ショーさん　現場監督になんのか　すげえ！
「小さい現場だけど、ヤッさんとシゲさんにも行ってもらってるよ」
「そうなんすか」
今日は会えねえんか
「ベテラン勢がいたら心強いだろ」
「そうっすね、ヤッさんたちならショーさんもメッチャ心強えっすよ」
「そういうわけで、下っ端仕事にまわす手がなくてさ」
「おいっす、しっかりやるんで」
「俺も時間があればやるんだけど、その時間がなかなかなくてさ」

「俺がやるんで」
「トイレと休憩室、すごいことになってるから頼むよ」
「おいっす」
「あと、木っ端運び出したあとの、裏側の片付けも頼む」
「おいっす」
ん？　監督が　俺のこと　目が・・俺を　上から下？　で？　下から上？
「監督、なんすか？」
「なぜそれを着てきたんだ？」
なぜ？
「作業すっから作業服で、ゴム長はヤッさんたちにもらったやつっす」
「あのさ、運動会のとき、うちの作業服あげたよな」
「あんときは、ありがとうございます！　すげえ嬉しかったっす」
「なんであれを着てこなかったの？」
「あ　全然頭になかったっす」
「せっかくあげたんだから着てくれよ」
「あんな立派で新品なの、作業すんのに着れねえっすよ」
「あれは作業服だよ」
「あれで便所掃除は・・　できねえっす」
「あ、そう」
「おいっす」
「それじゃ、一日よろしく」
「おいっす！」
頭下げて　監督室出た
そんじゃ・・　便所掃除だ

10 時休憩
校舎が見える地面に座って
こっから見る校舎は　なんか違って見えるな　いっつもあそこに通ってんだな
水　凍らせてねえからちっとぬるくなってんな　そんでも　んな暑くねえから
俺のこと憶えててくれた人何人かいたな
重機リーダーと宇野さん　あとは・・　名前知らねえけど顔はよく見てた人たち
知らねえ人もけっこういたな　やっぱ現場ごとで入る人が変わんだろうな
「森下」
「あ、監督」
「休憩室で休まないの？」
「俺は下っ端っすから」
「そんなことは関係ないよ」
「やっぱみんなゆったり休みてえじゃねえすか」
「ゆったり？」
「まあ俺一人分だけでもっつうか」

「へえ」
「重機動かしたり、俺は中入れねえけど、埃だらけん中で解体して」
「中に入らないのに中が埃だらけだってわかるのか」
「出てくるとみんな埃だけらけになってっから」
「そういうのに気がつくわけだ」
「見りゃわかりますよね」
監督　鼻でフッて笑ってっけど
「トイレ、きれいになったってみんな喜んでたよ」
「そうすか？　　よかったっす」
「昼休憩のとき、監督室で食べないか、話したいこともあるから」
「おいっす」
「それじゃ、あとで」
俺の肩ポンて叩いて　監督が戻ってった
そんじゃ　そろそろ便所掃除すっか

昼休憩
監督室の扉開けて
「失礼します」
「森下、お茶でいいよな」
「俺は水でいいっすよ、持ってきたんで」
「うちの奥さんが森下の分もって、大きいポットに入れてくれたんだから飲めよ」
「そうなんすか？　　ありがとうございます」
監督が弁当入れを机の上に置いた
「監督、奥さんの弁当っすか」
「まだ優大に手がかかるんだからいいって言ってるんだけどさ」
んなこと言いながら嬉しそうにフタ開けてさ
「コンビニ弁当ばかり食べて身体壊されたら困るって」
「しあわせっすよね」
「まあ、そうだな」
「熱出したらしっかり休んでほしいとか早く元気になってほしいとか」
「え？」
「たまんねえっすよね」
「誰の話？」
「え？　　や、誰・・っつうか」
「ああ、そうか、ノロケか」
「んなぁ、ノロケじゃねえっすよぉ」
「ヤッさんたちは、夏中毎日森下のノロケを聞かされてたわけか」
「俺は、んな」
監督がフッて鼻で笑いながら弁当箱のフタ開けてる
愛里も今頃俺の弁当食ってっかな

「森下、おかず持ってきた？」
「や、俺は握りメシだけっす」
「うちの奥さんが森下の分もって、ほら、こんなに大きなタッパー持たされてさ」
「マジッすか」
「急に仕事に来いって言われて、お弁当用意できないだろうからって」
すげえ気配りがあるっつうかさ　あの奥さんそういうカンジだもんな
「食べてくれよ、俺一人じゃこんなに食べきれないよ」
「そんじゃ、いただきます」
卵焼き　塩味のやつか　出汁が効いてて美味えな
「どう？」
「美味えっす、なんつうかすげえ品のある味で」
「卵焼きに品？」
「なんつうか、実家に江戸時代の合わせ貝がある人の品つうか」
「おもしろいな、伝えておくよ」
「マジでありがてえっすよ、赤ちゃんもいるのに、俺の分まで気ぃ使ってもらって」
「俺は思いついたらすぐやらないと気がすまないから、その尻ぬぐいしてくれてるよ」
「奥さん大変すね、赤ちゃんのケツ拭いて監督のケツまで拭いて」
「今うまいこと言ったと思ってる？」
うまいこと？
「思ったことそのまんま言っただけっすけど」
監督がジッと俺のこと見てっけど？
「マジで、奥さんすげえっすよ」
情けねえ顔で笑ってっけど？
「そうだな、俺も優大も世話になってるよ」
「女の人はすげえっすよね」
監督が　なんかニヤッとした顔で俺のこと見ながらハンバーグ食って
そういえば・・
「監督ハンバーグ大好きなんすよね」
「好きだよ、よく知ってるな」
「奥さんが言ってたんすよ、子どもみたいでしょっつって」
「ハンバーグはおとなだって好きだろ」
「まあ、そうっすけど」
「まったく森下はよく憶えてるな、そんなことまでさ」
「一回行っただけなんで、逆に印象に残ってるっつうか」
「なるほどな」
「おいっす」
「森下は明日はデート？」
「まだなんも決まってねえっす」
「そうか」
「なんすか？」

「ショーさんは、明日奥さんとデートだってさ」
「マジっすか？」
「独身寮の電話で奥さんと打ち合わせてるのを聞かれちゃったらしくてさ、
　寮のみんなが大喜びで、俺にまで言ってきたよ」
よかったなあショーさん　奥さんとデートできるなんてさ
ずっと惚れてたんだもんな　メッチャ気持ちわかるよショーさん
「ショーさん、独身寮でなんて呼ばれてるか知ってる？」
「ショーさんじゃねえんすか？」
「父さん」
「父さん？」
なんか　すげえピッタリすんな
「誰かがショーさんて言うところを父さんって言い間違えたのから始まったらしくてさ」
ショーさん・・
「それからはみんな父さんて呼んでてさ、現場でも独身寮の子たちからは父さんって呼ばれてる」
この現場でも　息子ができたんだ
「森下、泣いてる？」
「や、泣いてねえっす、ちっとゴミが」
「若いのに古典的なごまかし方するんだな」
「へ？」
「まあいいや、ショーさんの話に戻すけどさ」
「あ、おいっす」
「よく見てるんだよ、人もそうだし作業の流れも、下っ端仕事しながらさ」
ショーさんやっぱすげえよ　話聞いてただけでいい社長だってわかったもんな
「こんな優秀な人材を使わない手はないなって」
「そんで現場監督っすか」
「合ってると思うんだよ」
「メッチャ合ってますよ、ショーさんは、なんつうか」
んっとさ　あ　そうだよ
「監督とおんなし考え方の現場監督になりそうだなって」
「やだねえ、これだから森下は」
「え？　　俺、考え浅せえっすか？」
「俺もそう思ったからだよ」
「なんで怒るんすか」
「森下がイッパツで俺が考えてたこと言っちゃうからだよ」
「やっぱそうなんすか、監督とおんなし路線の現場監督育成っすね」
「育成しなくてもショーさんなら、そうだな、俺よりうまく管理できそうだな」
ショーさん　すげえ　この監督がんなこと言うなんてさ
「うちの会社には何人も現場監督やってるのはいるけど、他業種に転職したり、
　現場で実績積んで建築士目指そうとしてたり、それはそれでいいんだけどな、

　現場監督が最終目標っていう人はなかなかいなくてさ」
「そうなんすか」
「俺は現場あってこそだと思ってるから、現場監督に誇りを持って欲しいんだよ」
これだから俺は　この監督を尊敬できんだよ
「ショーさんには、そのうち施工管理士や建築士の資格も取らせようと思ってる」
「やっぱそういうの必要なんすか」
「必要ではないけど、あるに越したことはないからさ、賃金も変わってくるしね」
ショーさんすげえよ　すげえ
「で、この現場の下っ端仕事は誰がやるのかって話になるんだよ」
「そうっすね」
「俺も時間があるときはやろうとはしてるよ、時間ないんだけどさ」
「ああ、そうっすよね」
「今のところ解体が主で土木の出番はそのあとだから、ヤッさんたちもやってくれるけどさ」
「そうなんすか」
「森下やってくれないかな」
「えっ　お、俺？」
「一週間に一度でいい、今日みたいに土曜日だけとかさ」
「マ、マジっすか？」
「学校優先で、行事があるときはもちろん休んでいいよ」
「マジッすかあ？」
「正式には森下のお母さんとの交渉になるけど、森下の意向を聞いておきたくてさ」
「やりてえっす」
「ただし、日給は1万5千円、今日は急だったから2万で釣ったんだけど」
「そんなん、1万5千円もって、メッチャありがてえっす」
「なんだ、だったら今日も1万5千円にすればよかったな」
「いいっすよ、仕事内容からすっと2万は高すぎっす」
「高すぎって、ふつうはもっと上げてくれって言うけどな」
「夏休みんときの仕事量よか全然少ねえっすから」
「査定が厳しいね」
「事実っつすよね」
「いいよ、2万ていう契約で来てもらったんだから、今日は特別だ」
「マジっすか？　　あざっす」
「それじゃ、来週から三ヵ月、そのあとはまたってことでいいかな」
「おいっす」
「話変わるけどさ」
「はい？」
「明日、俺の家の掃除、もちろん仕事でってどうかな」
「明日は・・　んっと」
愛里に

「ちっと相談してからでいいっすか」
「愛里さん？」
「あ、そうっす」
「ダメなら俺がやるから」
「三時休憩のときに聞いてみるんで」
「そうしてくれ、ダメならダメでいいからさ」
「おいっす」
すげえ　現場でバイトできる　週一でもできる　ヤッタ

午後は木っ端をネコに入れて運ぶのもやらせてもらえた
鼻がムズムズすんな　あれ？　　鼻ん中真っ黒じゃね？　　鼻ぬぐった指に・・
手も汚れてっからわかんねえな
携帯のカメラ機能で　あ　メッチャ真っ黒
それよか愛里に LINE しねえと
『愛里　明日監督の家の掃除やらねえかって聞かれたんだけど』送信
『俺は愛里優先だから　ダメなら監督やるからいいって』送信
『いちおう聞いてみてくれって言われたからさ』送信
ピコン
『私はあなたの保護者じゃないです w』
『そんでもさ　日曜日どっか行きてえとかあったらさ』送信
ピコン
『稼いできてください w』
愛里ぃぃぃ　たまんねえな
『わかった　稼いできやす w』送信
ピコン
『私は今日は終わったので　今から帰ります』
そっか
『どうだった？』送信
ピコン
『楽しかったです　また新しいことも学べてしあわせでした』
そっかそっか
ピコン
『あなたはまだ仕事ですよね』
『17 時には終わるから帰りは 17:30 かな』送信
ピコン
『前の現場より近くてよかったですね w』
『マジそれ w』
ピコン
『ケガしないように気をつけてください』
『便所掃除と休憩室の掃除と現場まわりの掃除なんで』送信

『ケガする確率メッチャ低い w』送信
ピコン
『ちょっと待て　その油断が事故の元』
『なんだよそれ？ www』送信
ピコン
『何かの標識で見たことあったから』
『油断しねえで気ぃつけて働きます！』送信
ピコン
『本当に気をつけてくださいね』
ピコン
『あなたが入院とかしたら』
ピコン
『私はずーーっとレンチンパスタとバックごはんになっちゃうから』
『ぜってえそうならねえようにすっから』送信
ピコン
『はい』
あ　そうだ　俺のこの真っ黒な鼻穴見せよう
カシャッ　送信
ピコン
『ヤメテ！』
ピコン
『道路で声出して笑っちゃったじゃない！』
そっか　ウケたか
『俺がちゃんと仕事してる証拠写真 w』送信
ピコン
『そうですね　すごく仕事してますね』
ピコン
『その鼻のまま帰ってくるの？』
『終わったら顔洗うからさ』送信
『なんならこのまんま帰って愛里に見せっかな w』送信
ピコン
『鼻の穴を見せるとか wwww』
ピコン
『ちゃんと洗ってきてください』
『わっかりやした！ (｀・ω・ｔ) ゞ』
ピコン
『なにその顔文字 www』
『敬礼で変換したら出てきた w』送信
ピコン
『あなたも』

寿司？
ピコン
『伝わりませんよね、こっち？』
『イラブチャー？』
ピコン
『いいです気にしないでください』
『気になるんすけど』送信
ピコン
『マグロで変換したらお寿司しかなくて』
ピコン
『魚らしいのは青いのしかなかっただけです』
マグロ？
ピコン
『それじゃ　またあとで』
『愛里　またな』
ピコン
『』
塩味　たまんねえな
監督に言わねえと　明日も働けるって

おかえり

便所掃除終わった
あとは・・　顔洗わねえと　鼻の穴真っ黒だもんな
バシャバシャ水で洗ったけど　取れたかな　わかんねえな　手ぬぐいも汚れてっからさ
そんじゃ　監督室行くか

「失礼します」
「森下、お疲れ」
「お疲れっす」
「これ、今日の日給」
監督が封筒差し出して
「中を確認したらここにサイン、言わなくてもわかってるよな」
中に　一万円札二枚
「監督、明日の家政夫代、いらねえっす」
「やってくれるんじゃないの？」
「やります、そんでも、今日の仕事内容で２万はもらえねえっすよ」
「出所が違うよ、こっちは会社で明日は俺個人」
「そんじゃ、来週は１万にしてください」
「森下、この２万は契約料」
「契約？」
「今朝、森下に電話したときから、実は狙ってたんだよ」
「狙って？ なんすか？」
「週一で現場に入ってもらおうって」
「あ・・」
「絶対入るとは思ったけどな」
「それは・・　はい」
「こっちとしても森下には入って欲しい」
なんつうか・・　なんつうかメッチャ
「ありがてえっす」
そんなん言ってもらえて　それに・・
「俺、二学期になってからバイト全然できなくて」
「二学期はけっこう行事が多いよな」
「そうっすね、それと、かあちゃん入院しちまったりで、なんかバタバタしてて」
俺　なんで　んなこと監督に言ってんのかな

「そろそろバイトしてえなって、家政夫の単発の仕事いっぺえ入れっかなとか」
「現場は選択肢にはなかったのか」
「公共事業の現場は単発はダメだと思ってて」
「他の現場は？」
「他の現場っつうのは？」
「うちの会社じゃなくて、単発で入れるところはいくらでもあるよ」
「そう・・すよね、そんなん頭になかったっす」
そんなん　頭になかった　だってさ
「俺、監督の現場が好きなんす」
「俺の現場？」
「甘えてんのはわかってんすけど、そんなん選べねえで働かなきゃなんねえ人はいっぱいいて、
　どこがいいとかイヤだとか、そんなん言ってらんねえで生活のために稼いでて・・
　そんでも、俺・・　監督の現場で働くと、いろんなこと経験できていろんなこと知って、
　なんつうか、賃金以上のものもらえるっつうか、愛里が・・　俺は現場で働いてっと、
　なんか生き生きしてるっつって、でもそれって、監督の現場だったからで」
顔上げたら　監督が　眉間にシワ寄せて俺のこと見てて
「あ、すいません、なんか」
「森下って怖いやつだなあ」
「こ？　え？」
「あやうく感動させられそうになったよ」
「へ？　あ？　んと？」
「明日は 10 時からだよな」
「あ、おいっす、10 時前には行きます」
「そうか、それじゃ頼んだよ」
「おいっす」
「あ、それと、これ」
監督が箱から・・
「作業用革手袋」
「え？　　あの」
「木っ端片付けるのに、軍手じゃ怪我するよ、今だって傷だらけだろ」
「あ・・　こんくれえは」
「怪我されたらこっちが困るんだよ、来週からはこれ使ってくれ」
「えっ　これ、革っすよね、メッチャ高けえじゃねえすか」
「ホームセンターなら 1,000 円以内で売ってるようなやつだよ」
「せっ　1,000 円！」
「革手袋で 1,000 円は安い方だろ」
「そんでも、俺みてえなバイトで、せん・・」
「会社で大量に仕入れてるからふつうに買うよりはずっと安いんだよ」
「あの、そんじゃ・・　もらっていぃんすか」

「必ず、来週から、これを、使ってくれ」
なんで　んな日本語わかんねえヤツに言うみてえな言い方すんのかな
「必ず、だぞ」
「あ、おいっす、ありがとうございます」
「あとはこれ」
箱？
「防塵マスク、使い捨てのやつだけど」
「え？」
「森下にはトイレ掃除と休憩室の掃除、木っ端積み出した後のちょっとした掃除」
「あ、おいっす」
「と思ってたのに、木っ端をネコに積んで運ぶまでやるからさ」
「あっ　俺はやっちゃいけねえやつだったんすか」
「いけなくないよ、むしろ助かるけどさ、やるならこのマスクつけてくれ」
「俺、週一だけなんすけど」
「だから使い捨て、なんなら本格的な方がいい？　　このゴーグル付きの」
「や、んな、ありがとうございます」
「できれば作業服もあれをさ」
「あれは・・　もったいねえっす」
「あ、そう、いいよ、革手袋とマスクさえしてくれれば」
「おいっす」
「それじゃ、明日」
「おいっす、失礼します！」
監督室出て　お・・　おおお　革手袋もらった　防塵マスクまで　すげえ
週一でバイトもできるし　最高だあ

マンションの前
歩いてすぐの現場って最高だな
『愛里』送信
『帰ってたきたよ』送信
ピコン
『おかえりなさい』
『愛里は部屋にいんの？』送信
ピコン
『帰ってきてあなたの家に一度行って』
ピコン
『今は私の部屋にいます』
そっか
『そんじゃ行く』送信
エレベーター乗って　二階でおりて　愛里の部屋に走ってって
ドアホン鳴らしたら

ドアが開いて
「おかえりなさい」
「愛里」
抱きしめて
「ただいま」
「コホッコホッゲホッ」
「愛里？　どした？」
「ちょっと・・コホッ埃が」
「あ、ごめん」
「大丈コホッ夫コホッコホッ思い切りコホッ吸っちゃっただけで」
あっ　愛里の白い服が
「愛里、ごめん、服、汚しちまった」
「え？　あああああ」
「愛里ごめんマジごめん」
「大丈夫です、コフッ洗えば」
「俺洗うから」
ん？　愛里が　顔だけ近づけてきて　え　もしかして　キ・・ス？
「鼻の穴」
鼻の穴？
「グフッ　まだ黒い」
「マジ？　洗ったんだけどな」
「埃だらけになって働いてきたんですね」
「解体してっからさ、粉塵がすげえんだよ」
「やっぱり」
やっぱり？
「生き生きしてますね」
愛里
「おう、愛里が言ったとおりっす」
「よかったですね」
「うん、あ、んっとさ、来週から土曜日は現場入ることになった」
「え、公共事業だからダメって」
「直接雇用なら週一でもいいんだってさ」
「夢が叶ったんですね」
「夢ってさ　ハハハ」
「それじゃ、土曜日はお互いバイトデーですね」
「おう、共働き」
「違うでしょ　ハハハ」
愛里も　花の教室　楽しかったんだな　メッチャ笑うもんな
「おかあさん、午前中に帰ってきたそうです」
「そっか」

「病院にいたときより顔色もすごくよくなってて」
「そっか」
「早く顔を見せてあげてください」
「うん、わかった」
「今夜はビーフシチューだそうです」
「生姜焼きじゃねえの？」
「病院で、ずーーっと薄味の和食で、コッテリしたものが食べたいって」
「なんだよそれ　ハハハハ」
「お父さんもお祝いしたいのかも」
あ、そっか、ビーフシチューはとうちゃんのご馳走だもんな
「私は、えっと、着替えてから行きます」
「愛里、マジごめんな、その服持ってきてくれよ、すぐ洗うからさ」
「はい、それじゃ」
「おう、あとでな」
愛里の部屋のドア閉めて
エレベーター乗って　俺ん家に向かった

玄関のドア開けたら
「ダイチ」
とうちゃん
「おかえり」
「とうちゃん・・」
これ言うのも　久しぶりな気ぃする
「ただいま」
「現場行ったんだってな」
とうちゃんの顔見たら　なんか・・　俺・・　なんか知んねえけど・・
「ダイチ、どした？　なんかあったんか？」
「とうちゃんの・・顔・・見たら・・　なんか・・ホッとして」
とうちゃんが　俺の頭クシャクシャッてやったら　すっげ　メッチャ埃
「懐かしいな」
懐かしい？
「俺も解体んとき、仕事終わって髪触っとメッチャ埃出てよ」
「解体現場ってさ、埃がすげえんだな」
「俺は解体んときは手ぬぐいで顔んとこやってたもんな」
「手ぬぐい？」
「メットの耳んとこに引っかけてよ」
「その手があったんか、俺、鼻ん穴真っ黒になっちまってさ、ほら」
とうちゃんが覗き込んで
「そんなんでもねえんじゃねえか？」
「帰るとき顔洗った、そんでも愛里はまだ黒いっつって」

「玄関で鼻の穴覗かせてるなんて」
あ　かあちゃん
「かあちゃん、ただいま」
愛里がかあちゃんの顔色すげえよくなってるっつってたけど　マジだな
「ハァァァ」
え？　なんでため息？
「まさか退院して早々、その汚ったなくて臭っさいのが玄関に立ってるのを見るとはね」
「監督から朝電話あってさ」
「愛里さんから聞いたわよ」
「そんで来週から土曜日、週一現場で」
「監督からメールが入ってたわよ」
監督　すげえな　もうかあちゃんに知らせたんか
「早くお風呂に入ってきなさい」
「あ、うん」
「そんな埃まみれで臭っさい臭い嗅がされたら、また入院しちゃう」
「入ってきます！」
かあちゃんだな　かあちゃんがかあちゃんらしくなってるよ

シャワーで流したら　すっげえ　流れる湯がメッチャ濁ってんな
鼻の穴　どこまで埃入ってんのかな　鼻うがいすっか
かあちゃんがたまに使ってる・・　これか
顔傾けて　えーーっつってやるんだよな
「えーーー」　お　おおお　すげえ　汚れ出てくる出てくる
フゥゥゥ　メーッチャサッパリした

シャワー終わって着替えて　キッチンに入ったら
とうちゃんのビーフシチューの匂いがして　たまんねえ
「とうちゃんのビーフシチュー食いたかったあ」
「そっか？　いっぺえ作ったからよ」
「俺なんかやることある？」
「もうできてっから」
そっか
「これはよ、美里の退院祝いと、ダイチにご苦労さんのビーフシチューでよ」
「俺も？」
「美里が入院してっとき、ダイチが家ん中のことやっといてくれてよ」
「そんなん大したこっちゃねえよ」
「今朝病院から戻ってきたときよ、家ん中ピッカピカに掃除しといてくれててよ」
「愛里に言われたんだよ、退院したとき部屋がきれいだと嬉しいと思うって」
「そっか、ありがてえな、んっとは俺がやんねえとなんねえのによ」
「とうちゃんはとうちゃんしかできねえことしてたんだよ」

「俺にっきゃ？　なんだそりゃ？」
「かあちゃんのそばにいること」
「んなよぉ、そんなんなあ、俺はそれっきゃできねえからよ」
「俺や愛里がついてても、かあちゃん安心して入院してらんなかったよ」
「俺はなんもしてねえんだけどよ」
「そこはさ、なんつうの？　とうちゃんの愛がいっちゃんの薬っつうかさ」
「ダイチ〜、とうちゃんのことからかってっだろ」
「マジでさ」
「ほらほらほら、またくだらない話してないで」
かあちゃん　くだらねえってさ　くだらなくはねえじゃん
「愛里さんが来たわよ」
愛里！
「あの、これ」
さっき俺が汚しちまった服
「おう、ちゃんと洗っとくからさ」
「お願いします」
「愛里さんがね、アレンジメントを作ってきてくれたの」
「作ったっていうか、バイトの合間にちょっとだけ」
「どこ？　俺、見てえよ」
「リビングに」
俺と愛里・・と、かあちゃんでリビングに行った
これは・・　メッチャ可愛いな
ピンクの小せえ花を　でっけえ葉っぱが包んでるみてえでさ
「今日は、季節が終わりだなっていうお花をアレンジする授業でバーベナを」
「季節が終わるお花を？」
「はい、先生なんて言ったかな、あ、去り行く季節を愛でる・・的な」
「それはステキね」
花の季節とか　全然わかんねえけど
「赤と白と紫と黄色もあったんですけど」
花のことしゃべってる愛里の目はキラキラしててさ
「先生から花言葉を聞いて、ピンクのバーベナは家族の融合だって、だからピッタリかなって」
家族の融合ってさ　愛里はそういうとこまで考えてくれるんだよな
「ゲーラックスの葉っぱを少しだけ内側に巻くようなカンジにして、
　なんていうか・・　おとうさんとおかあさんみたいでいいなって」
「私とカズオ？」
「おとうさんがおかあさんをそっと守ってるみたいな」
愛里　俺は感動してるよ
「愛里さんのアレンジメントは・・」
かあちゃんがメッチャ穏やかな顔で愛里の花見てて

「つくづく美しい」
「他の生徒さんのはもっと華やかで、私のは・・」
「込めている気持ちが美しいのよ」
かあちゃん　なんていいこと言うんだ　俺　泣きそうになんじゃん
「心がほぐれるわ、ああ家に帰ってきたんだなってホッとする」
「あ・・　よかったです」
「シンシンなんてね、こーんな大きいバラのアレンジメントを送ってこようとしたの」
「え？　そんなに大きな・・」
「画像を送ってきて、これをお見舞いに送りたいんだけどどうかしらって」
「置くところが・・」
「でしょ？　ジャマでしかないわよ」
シンシンおじちゃんも心配してたんだな　だよな　おじちゃんの店で倒れたんだもんな
あっ　そうだ　そうだった
「かあちゃん、あんときのシンシンおじちゃんとこの代金、いらねえって言われてさ」
「ちゃんと振り込んだわよ」
「へ？ いつ？」
「入院中に決まってるでしょ」
入院してっときに　んなことやってたんかよ
「シンシンはいらないって言ったけどね、借りは作りたくないのよ、ましてシンシンに」
「んな　敵じゃねえんだからさ」
「シンシンはあのオカマの身ひとつで稼いでるのよ」
オカマ・・は、いらねえと思うけど
「時間と労力への対価はしっかり支払わないとね」
「あ、うん、そうだよな」
「バラの代わりに松阪牛の A5 ランクのお肉送ってもらうことにしたけどね」
ハァアア？
「ステーキ用を 4 人前、届いたら焼いて、私はミディアムレア」
とうちゃんは・・　ステーキ焼いたことねえよ　つうことは・・　俺か
なんつうかさ　なんつうか　かあちゃんだよ　かあちゃんが帰ってきたよ
「かあちゃん」
「なによ」
「おかえり」
かあちゃんが　キョトンとした顔で俺を見て
「ただいま」
俺は　なんか　なんかわかんねえけど　涙出そうになって
とうちゃん手伝いにリビングを出た

おしりふきシート

愛里を部屋に送って
帰ってきたら　とうちゃんは・・　かあちゃん入る前の風呂掃除か
俺は・・　勉強すっか
「ダイチ」
かあちゃん？
「なに？」
「あんた、明日は監督のお家で家政夫よね」
「うん、今日の分を明日にって」
「監督の赤ちゃんて、今・・　何ヵ月？」
「んっと・・　盆休みんときに生まれたから一ヵ月半・・くれえかな」
「生後一ヵ月半って・・　どういう状態？」
「俺に聞かれてもわかんねえよ」
「子どもが生まれたらどうするのよ」
「えっ　んなことしてねえよ！　マジでしてねえよ！」
「将来よ」
「あ、しょ・・将来、そっか」
「高校生のあんたに聞いてもね」
「俺は将来子ども生まれたら、とうちゃんに教えてもらうからさ」
「なんでもかんでもカズオ頼み」
「そんじゃどうすりゃいぃんだよ？」
「カズオはね、小児科の先生に、ほら、月ごとに健診があるでしょ」
でしょって言われても　あんまわかんねえけど
「先生にいーーっぱい質問していーーっぱい聞いてきて、先生ウンザリしたと思う」
とうちゃん　すげえ
「ただね、その頃はまだ読み書きできなかったから、母子手帳はひらがなとカタカナだけ」
読み書きできねえのに一生懸命にさ
「先生にもひらがなとカタカナで書いてもらって」
先生　ありがとうございます！
「妊娠中の両親教室でも熱心だったわ、もうよくない？ くらい聞いてた」
そっか両親教室で　俺も行く　まだだけど
「ママ友もいっぱい作ってたわよ」
「両親教室で？」
「スーパーで」

「スーパー？」
「ジャネットもそうだったでしょ」
リサイクルショップ教えてくれたアメリカ人か
「カズオのすごいところはね、私より一年二年先に生んでる人とか、何人も子どもがいるとか、
　中にはお孫さん連れてるおばあちゃんとかに声をかけるのよ」
経験者っつうことか
「カズオは若かったし、なんていうの？　　お姉さま心をくすぐるのね、本人意識してないけど」
「そんじゃかあちゃんメッチャ妬いたんじゃね？」
「やいた？　　なにを？」
「ジャネットさんの電話登録しただけでメチャ妬いたって、ねえちゃん言ってた」
「あれは妬いたわけじゃないわよ、買ったばかりの携帯に私以外の」
やっぱ妬いたんだな　ねえちゃんが言ってたとおりだ
「それはどうでもいいのよ、つまりは自分でリサーチしなさいってことよ」
話そらした
「美里、風呂できた」
とうちゃん　今とうちゃんの話してたんだよ
「ありがとう」
かあちゃんがソファから立ち上がって　俺のそばに来て
「カズオに頼ってばかりじゃダメよ」
「わかってるよ」
「あ？ 俺？　　なんだ？」
「なんでもないわよ」
かあちゃんがリビング出てった
つうかさ　俺はまだ子どもできてねえし　まず第一に　そういうことしてねえし
「美里と、なんか楽しそうにしゃべってたな」
とうちゃんがニコニコしながら乾いた洗濯物をカーペットの上でたたんでっから
「まあ、うん」
俺も手伝って
「美里が退院してよかったな」
「うん」
それはマジでそう思うよ
「ダイチ、これ」
とうちゃんのちょい厚手の作業着？
「よく見っけたな」
「とうちゃんのクローゼットの奥にあった」
「美里には捨てろって言われたんだけどよ」
やっぱ言われたんだ
「まだ着れんじゃねえかなって、こそっとよ」

「取っといてくれてよかったよ、俺すげえ助かった」
「ダイチに着てもらえんならな」
とうちゃんが嬉しそうな顔でたたんでる
「とうちゃん、俺やねえちゃんが赤ちゃんときってさ、大変だった？」
「たいへん・・つうのは？」
「赤ちゃんの世話っつうか」
「俺はなんもわかんねえからよ、マジでなんもわかんねえから」
「え、ちゃんと育ててくれたじゃん」
「それはよ、育ってくれたっつうかよ」
育ってくれた？
「ヒトミんときなんてよ、俺、マジでなんもわかんねえからよ」
「え・・　そんじゃ・・　どうやって」
「どうやって・・　憶えてねえな」
「へ？　　んと、俺を風呂に入れたときに俺がウンコしたって」
「そういうのはな、なんか知んねえけど、そういうのはメッチャ憶えててよ」
ニッコニコしてっけど
「あ！　　あとあれだ！」
あれ？
「ヒトミがウンコして」
ウンコのことは憶えてるっつうことかな
「ケツ拭くやつあんだろ、なんつったかな・・　おしりふき・・シートだ」
「あ、うん」
スーパーのトイレットペーパーとか置いてるとこにあるな
「あれで拭くとよ、プルルルッてすんだよ」
とうちゃんが言いながらやって見せてっけど　プルルル？
「いろいろ教えてくれたばあちゃんがいてよ」
「ばあちゃん・・　あ、スーパーで会った孫を連れたばあちゃん？」
「へ？　　ダイチはなんで知ってんだ？　　あのばあちゃん、ダイチが生まれる前にはよ」
「かあちゃんが言ってた」
「あ、そっか、美里にはな、この人は誰でこの人はっつって話してたからよ」
言わねえとかあちゃんが妬くからだな
「そんで、そのばあちゃんがよ、ケツ拭くやつが冷てえんじゃねえかってよ」
あのシートって　んな冷てえんか
「ばあちゃんときは、こんくれえのガーゼを湯に入れて絞って拭いてたってよ」
「そんじゃメッチャガーゼ用意しねえとなんねえじゃん」
「あとは、古着とか古いタオルな、こんくれえに切ってよ」
「とうちゃん、古着切って使ってたんか」
「ねーちゃんが、そういうのはやめてって」
だよな　かあちゃんは　古着でケツは・・　許さねえな
「そんで、最初は、あのケツ拭くやつを湯で温っためて絞ってよ」

「ウンコのたびに？」
「シッコんときも拭かねえとかぶれるって先生がよ」
オムツ換えるたびにかよ
「そんでも、んなことやってっと、ヒトミがウンコのまんまだろ？」
「あ・・うん」
「そんで、これだ！ ってよ」
「え？　なになに？」
「あれ入ってる上によ、ホッカイロ貼った」
「おおおお！」
「そうすっと上の方は熱くなってっから、すぐ使えっだろ？」
「とうちゃん、すげえよ！」
「美里が寝てるとき、腰痛てえってホッカイロ貼っててよ、古いの捨ててあって」
「それ貼ったんか」
「まだ温ったかかったから試しによ、そしたら、これはいいかもしんねえなってよ」
「そんで、ねえちゃんは？　プルルは？」
「しねえんだよ、すげえ気持ちよさそうな顔してよ、よかったなあ」
「俺んときも？」
「やったな、そんでもダイチはすっげえいっぺえウンコすっからよ」
え？
「背中んとこまで出ちまってるときもあってよ、そんときは洗面台んとこで洗ってよ」
そんなにウンコ出してたんかよ
「気持ちいぃんだろうな、ケツ流してたらシッコもな」
とうちゃんニーーッコニコしてしゃべってっけど
なんか俺・・　シモの締まりがねえっつうか
「とうちゃん・・　俺、なんかすげえ世話かけちまって」
「あ？　なにが？」
「背中までウンコとかさ」
「ダイチはいっぺえミルク飲んでよ」
「ねえちゃんよか？」
「全然ちげえんだよ、ビックリしてよ」
「マジか」
「ダイチはでっかくなんだろうなと思ったら、なったな」
「あ、うん、なった」
とうちゃんが　よっこらしょって立ちあがって
「そんじゃ、俺、しまってくっからよ」
「あ、うん」
「作業服はダイチんとこに入れとくからよ」
「俺が持ってくよ」
結局　ん・・っと　ウンコの話で終わったな
勉強すっか

おっし　次はこの問題集の・・
「ダイチ」
「かあちゃん、なに？」
「これ」
え？　　あ　鼻うがいの・・
「あんた　使ったの？」
「あ・・ん・・　鼻ん中真っ黒で・・つい」
「あげる」
「マジ？」
「あんたの鼻の中に突っ込んだのなんて絶対使いたくない」
「ハァァアア？　　可愛い息子の鼻ん穴じゃん」
「赤ちゃんのときはね、今は・・　鼻毛の生えてるモッサイ男子高校生よ」
「鼻毛ちゃんと切ってっけど」
「鼻毛カッターで？」
「うん」
「カズオはね、最初指で抜いてたの」
「えっ　痛てえじゃん　涙出るほど痛てえよ」
「それにそんなのじゃ取り切れないでしょ？」
取り切るまでやったら失神すっかもしんねえ
「それで鼻毛カッターを買ってあげたの」
「そうだったんか」
「最初は鼻の穴の中にグッて入れそうで怖いって言ってたけどね」
「俺も最初は怖かった、今は慣れたけど」
「あんたとカズオに一本ずつ買ってあげたわよね」
「とうちゃんのが古くて壊れちまったから、今は俺ととうちゃんで俺のを使ってる」
「そういうことは言って、新しいのを買うから」
「使えてっからさ」
「まあ、あんたとカズオが気にならないいわよ、もうどうでも」
「かあちゃん、俺ととうちゃんの鼻毛のことは気にしねえでいいからさ」
「気にするでしょ、二人で鼻毛出してたら」
「出してねえって、気ぃつけてっしさ」
「そうねえ、愛里さんの前で鼻毛出してたら・・　ねえ」
「出してねえって」
「あんたが鼻毛出してても愛里さん気にしないと思うけど」
「え？」
「それじゃ、おやすみ」
「かあちゃん、おやすみなさい」
かあちゃん　出てったけど　何しに入ってきたんだ？
まあいいや　続きやんねえと

勉強終わって　明日は赤ちゃんいるとこに行くんだからってかあちゃんに言われて
もっかいシャワーして　部屋に戻ってきた
『愛里』送信
ピコン
『はい』
たまんねえ　俺はやっぱまだ慣れてねえよ
愛里って呼ぶと　はいって言ってもらえる　このしあわせにさ
『明日も仕事入れちまってごめんな』送信
ピコン
『稼いでくるんですよねｗ』
そうっす　愛里のために稼いできやーーっす
『稼いでくるよｗ』送信
ピコン
『赤ちゃんがいるんですよね』
『いるよ』送信
俺は掃除するだけでさ
ピコン
『赤ちゃんの世話って』
ピコン
『私は永遠にできないと思う』
いいよ　俺がやっからさ
ピコン
『うまく言葉が浮かばないんだけど』
ピコン
『あの軟体動物系の』
軟体動物って　ハハハ　愛里おもしれえ
ピコン
『言葉が通じない存在と』
ピコン
『コミュニケーション取るなんて不可能』
『愛里だって』ちっと笑い出ちまって　送信
『軟体動物系の言葉通じねえ存在だったときがあったんじゃんｗ』送信
ピコン
『憶えてません』
『可愛かったろうな』送信
ぜってえ可愛かったよな
ピコン
『写真を見た限り』
ピコン
『その辺に転がってる赤ちゃんたちと同じでした』

『その辺には赤ちゃん転がってねえだろ wwww』送信
ピコン
『イワシの群れの中の一匹みたいな？』
ちげえよ
『愛里は竜宮の使いみてえだよ』送信
ピコン
『カメ？』
じゃねえよ　ハハハ　ヤベエ笑い止まんねえ
『ちげえよ wwww』送信
あれ？　　返信がねえ　これは・・
ピコン
『イヤだ！　　深海魚！』
調べたんだな
ピコン
『イワシの方が一億倍いい！　　美味しいし』
そっか　そんでもさ
『そんじゃ愛里は』送信
なにかな　すげえきれいで唯一無二って
ピコン
『私を魚に例えるのはもういいです』
『愛里はぜってえ可愛かったって言いたかっただけっす』送信
ピコン
『親バカ』
『俺は愛里の親じゃねえんすけど w』送信
ピコン
『ママが』
ピコン
『愛里ちゃんはまだ首がすわらないときにしゃべったのよって』
マジ？
ピコン
『ママって言ったのって』
『すげえ！』送信
ピコン
『思い込みです』
ピコン
『あーとかうーとか言ったのをそう思い込んだだけです』
『マジで言ったかもしんねえよ』送信
ピコン
『あのママですよ？　　カンペキに思い込みです』
ハハハ　愛里のことがメチャ可愛いんだよママは

ピコン
『パパから聞いたのは』
ピコン
『私が最初に言った言葉は　イヤ』
ハハハ
『すげえハッキリ意思表示したんじゃんｗ』送信
ピコン
『あなたの最初の言葉は？』
俺は・・　なんだっけ？　　あ、かあちゃん言ってたな
『うんと』送信
ピコン
『うんとってなに？』
『ウンコ』送信
ピコン
『ほんとは？』
『マジで』送信
ピコン
『wwwwwwww』
愛里に笑ってもらえたんたなら言ったかいがあったっすよ
ピコン
『それじゃ　明日　赤ちゃんの世話がんばってください』
『俺は掃除だけだよ』送信
ピコン
『あれ？　　ほんとに？』
『マジで』
ピコン
『そうですか』
『愛里はなにすんの？』送信
ピコン
『忘れてました』
ピコン
『あなたのノート借りてもいいですか？』
『いいよ　今持ってくか？』送信
ピコン
『あなたの家のリビングかあなたの机の上に置いてもらえれば』
『俺の机の上に置いとくから』送信
ピコン
『ありがとう』
ピコン
『それじゃ　おやすみなさい』

『愛里　おやすみ』送信
愛里と話してっとずっと話してたくなる
そんでも寝ねえとな　つか・・眠む・・ひさしぶりの・・げん・・ば・・

優大くんの世話

監督の家のドアホン
ピンポーーーーン
「森下」
「ポピンズ紹介所から来た森・・」
「挨拶はいいから入ってこいよ、鍵は開いてるから」
「はい」
ドア開けて
「失礼します」
あれ？
「奥さんは？」
「出かけたよ」
「そうっすか」
「美容室とそのあとは友だちとランチ」
「いいっすね」
「仲のいい友だちがいてさ、たまには外でランチしないかって誘われたって」
「もう出かけられるんすね」
「一ヵ月検診で先生が長時間じゃなければいいってさ」
「よかったっすね」
「でもそこは女の子でさ」
奥さんのこと女の子って　監督メッチャ惚れてんな
「髪がこんなだからって」
「こんな？」
「妊娠９ヵ月頃から美容室に行ってないからって」
そっか　女の人はそういうの気になんだな
「だったら美容室に行って、その足で友だちと会えばいいだろってね」
「メッチャいいじゃねえすか」
「それがさ、俺が優大の世話をするからって言っても、こんな不安そうな顔してさ」
監督が眉をメッチャ八の字にして見せて
「俺だって、今じゃオムツ換えるしミルクだって飲ませられるのにさ」
「そうなんすか」
「休みの日や仕事から帰ってきたときだけなんだけどな」
監督がオムツ換えてる姿って　想像できねえな
「昨日、森下にここで掃除してもらうのを変更して現場に入ってもらっただろ」

「おいっす」
「俺が日曜に掃除するよって言ったら、出かけるのをやめるって言うんだよ」
「え？ なんで？」
「優大の世話と掃除を一人でできないってさ、俺は子どもじゃないんだよ」
なんか　なんつうか　こういうこと俺に言ってる監督は　子どもみてえでおもしれえな
「それで、昨日の夕方、森下が掃除に入ってくれるって電話したら、やっと安心してさ」
「よかったっす」
「よかったよ、俺は信用されてないけどさ」
「掃除は俺がキッチリやるんで、監督は優大くんの世話に集中してください」
「そうするよ」
「優大くんの顔、ちっと見てもいいっすか？」
「もちろんだよ」
監督と一緒にリビングに入ってったら　優大くんは寝てた
「すげえ大きくなってますね」
「そう？　　俺は毎日見てるからわからないけど」
「二週間くれえっきゃ経ってねえのに、すげえな赤ちゃんて」
「へえ、そうなんだ」
「そんじゃ、俺、掃除します」
「よろしく」

まずは風呂だ
作業着に着替え・・　ヤベ　赤Ｔといつものジャージ持ってきちまった
そんでも　奥さんいねえし　掃除するだけだからな
風呂のエプロン取ったら　前にとうちゃんが徹底的にやったんだな　埃溜まってねえよ
排水口はきれいだけど　この中が・・　ぬめりついてんな
あとは・・　壁と鏡だ
洗面台もきれいにした　奥さんきれいに掃除してっけど　やっぱ水垢はな　取りましたっ
次はキッチンだな
レンジフード外して油汚れ取って　これを乾かしてる間に流しの掃除
あとは・・　玄関のたたきがちっと汚れてたんだよな
やっぱ監督も埃だらけで帰ってくんだろうな
たたきを掃いて　水拭きして
「森下ーーー！」
え？
「な、なんすか？」
リビングに走ってったら
監督が優大くんを肩に乗せてっけど？
「監督、何してんすか？」
「ミルク飲ませたあとのゲップを出してたんだけどさ」

「そういうふうにゲップ出すんすか」
勉強になんな
「ゲップが出たときに一緒に吐いちゃってさ」
「え？」
「着替えてくるから優大を見ててくれ」
「あ、おいっす」
監督が優大くんを小せえベッドに置いてリビング出てった
「優大く」あ　俺　手ぇ汚ねえんだよ　触れねえな
あっ　泣き始めちまった　どうする？
「監督ーーー！」
「今行くーーー！」
監督が着替えてリビングに走ってきた
「泣いちまって」
「オシッコかな」
監督がオムツを開けて
「ほら、ほらな、当たったよオシッコだよ」
「そうっすね」
あれ？
「監督、さっき着てたシャツは？」
「洗濯機の横のカゴに入れたよ」
「ダメっすよ、ゲロはすぐに洗わねえと」
「そうなの？」
「洗ってきます」
バスルームに走って　洗濯機の横の・・　あった
ん・・と　ティッシュでゲロ取って　ぬるま湯で洗って　取れた
いちおうつけ置きしとくか　そんであとで洗濯機で洗えばいいからさ
たたきが途中だったよ　やらねえと

そろそろ昼だな
「監督、昼メシはどうするんすか？」
「葵は作っていくって言ったんだけどさ、適当にやるからいいって言ったんだ」
「適当に？」
「Uber でも取るよ」
ウーバー？
「森下の分も取ろうか？」
「俺はとうちゃんの握りメシ持ってきたんで」
「カズオさんの？」
「よかったら一個食いますか？　　二個持ってきたんで」
「いいの？」
「全然いいっすよ」

仕事用の黒い袋ん中から　握りメシ出して
「監督、食ってください」
「ありがとう、カズオさんのおにぎりは嬉しいな」
そう言われっと　俺も嬉しいな
「森下、どこに行くの？」
「俺はキッチンで食いますから」
「なんで？」
「雇い主と家政夫は一緒にメシ食わねえことになってるんで」
「そんなのいいよ、俺と森下なんだからさ」
「そうすか？　　そんじゃ」
労働の後のとうちゃんの握りメシは格別に美味えな　ホッとすんな
「うんちが出ないんだよ」
「ブホッ　あ、すいません、んっと・・　監督のっすか？」
「違うよ、優大だよ」
「え？　　ウンコ出ねえとダメっすよね」
「機嫌がいいなら大丈夫らしいんだけど、ゆうべから出なくてさ」
「えっ」
犬なら　ウンコ出ねえと危ねえって　とうちゃんが・・
「今朝、綿棒浣腸したんだけどな」
「め、めんぼう、なんすか？」
「綿棒の先 2〜3cm くらいにワセリン塗って、お尻の穴に 2cm ほど入れて」
お・・うぅぅ
「お尻の穴を開くようにゆっくり回して」
「そ、それ、監督がやったんすか」
「葵が友だちから教えてもらったんだけどさ、怖いから俺にやってくれって」
「そう・・なんすか」
「俺は精密機器の扱いに慣れてるからってさ」
「ああ・・　確かにケツの穴は精密・・つうか繊細っつうかっすよね」
「出ないんだよ」
「えっ、病院行かねえでいぃんすか？」
「すぐには出ないこともあるらしいんだけどさ」
たしか・・　みーちゃんは・・　メシ食うようになったら出たつってたな
「監督、今ミルク飲んだから出んじゃねえっすか？」
「だといいんだけどさ」
赤ちゃんていろいろあんだな
午後どうすっかな　午前中でやることやっちまったな
晩メシはどうすんのかな？　　決まってんなら買い出し行ってさ
「監督、晩メシはどうするんすか？」
「さあ、葵が帰ってきてから作るんじゃないかな」
「よかったら俺作るっすけど」

「え？　森下が？」
「依頼された仕事、午前中で終わっちまったんで」
「現場でもそうだけどさ、仕事が早いよな」
「なんか食いてえもんありますか？」
「ん・・　そうだな・・　カレーかな」
「そんじゃ、ちっと冷蔵庫見て、足りねえ材料買ってくるんで」
「おそらくあると思うよ、葵は宅配サービス使ってるから」
「宅配サービス？」
「これも友だちに教えてもらって、食材の宅配と日用品の宅配使ってるんだ」
そんなんがあるんか
「まだ優大は連れていけないだろ、それにしばらくは抱っこして大きい荷物はさ」
とうちゃんは　俺やねえちゃんを前んとこに入れて買い出ししたっつうけど
女の人はな　赤ちゃん抱っこして米なんて持てねえだろうな
「冷蔵庫の中見て、あとは適当にやってくれるかな」
「おいっす」
冷蔵庫開けたら　マジだ　ビッシリきれいに並べて入ってる
野菜室にも野菜いっぱい入ってて　冷凍庫には肉や・・　この白くて平べったい容器は？
白メシだ　こんな容器があんだな
「それはさ」
監督
「もしも葵が風邪ひいたり？　まあ食事を作れないときに、俺がチンすればいいだけにしてる」
チン？　自家製レンチンごはんってことか？　これは・・
「ほら、こっちのジップロックには牛丼の具とかチンしてごはんにかけるだけ」
そっか　愛里にも　俺が作って冷凍しとけばいぃんじゃね？
そんで古くなったら　それは俺が食って新しいの作っておけばさ
「どうした？」
「え？　あ、や、すげえ勉強になりました」
「勉強？　ただの食材だよね」
「ただのじゃねえっす、奥さんすげえっす」
「森下っておもしろいよな」
「なにがっすか？」
「冷蔵庫の中を見て勉強になるとかさ」
「マジっす、やっぱリサーチって大事っすね」
「なんの話だよ」
監督は笑ってっけど　俺はすげえ目を開かされた
俺ん家では　残ったおかずや白メシ冷凍すっけど
それは　とうちゃんや俺が食って片付けるためっつうかさ
とうちゃんはかあちゃんには、俺やねえちゃんにも、レンチンしたのは出さねえもんな
そんでもさ　こういう方が　市販のよか・・　いいよ　すげえいいよ

「それじゃ、頼んでもいいのかな」
「監督、何カレーがいいすか？」
「何カレー？　ふつうのでいいよ」
「肉は？」
「肉は入れてくれよ、肉なしのカレーなんてさ」
「牛か豚か鶏どれがいぃっすか？」
「なんでもいいよ」
「俺ん家は豚肉なんすけど」
「豚肉？　へえ、食べてみたいな」
「辛さは？」
「辛さ？」
「甘口・中辛・辛口」
「それがさ、俺は辛口で葵は甘口なんだよ」
「二種類作ればいいすか？」
「そんないいよ、甘口でいいよ」
「奥さんは中辛は食えますか？」
「うん、それくらいなら食べてるよ」
「そんじゃ、甘口寄りの中辛にします」
「あ、そう、うん、頼むよ」
監督がキッチンから出てった
肉は・・　豚肉の薄切りあった　野菜もそろってる
ルーは・・　甘口と辛口　これはとうちゃん流にすればいいだけだな
とうちゃんのはちっと辛口寄りの中辛だけどさ
そんじゃ　作るか

カレーは半分だけルー入れて煮込んでて　もう少ししたら残りのルー入れればいいだけだ
トマトとブロッコリーとセロリのサッパリ系の和風サラダも作った
あとは・・　明日の監督の弁当　奥さんが作るんだよな
出かけた次の朝に弁当はキツイんじゃね？　まだ本調子じゃねえんだもんな
いちおう作っとくか　卵焼きは・・　俺はあんな上品なの作れねえな
あ！　唐揚げ　漬けとけば明日の朝揚げるだけだからさ
それと・・　さっき作ったサラダと　あとは・・　ウインナーとかさ
唐揚げの下準備はできた
これは冷蔵庫に・・　待て　一回揚げた方がよくね？
明日の朝もっかい揚げればいいだけにしてさ
そうしとこう
揚げた　冷めたら冷蔵庫だ
そんで　そろそろ残りのルー入れて
「森下ーーーーー！」

え？
「おいーーーっす！」
リビングに走ってったら　監督が　んな顔見たことねえな
「うんち・・　出たよ」
おおお！
「よかったっすね！」
「それがさ、どうする？」
「どうするっつうのは？」
「溢れててさ」
「溢れてる？　んっと、拭かねえとじゃねえすか？」
「そうだな、森下、そのカゴの中のオムツと」
これか
「その棚の上のおしりふきシート持ってきて」
おしりふきシート？　棚の上？　どこだ？
「監督、どこっすか？」
「その白い箱」
「え？　これ？」
え　電源ついてたんか　なんだこれ？
「早く！」
「あ、おいっす」
「さてと、まずは・・」
これは・・　すげえな　ウンコまみれだな
「新しいオムツを下に・・　これはどうなんだ？」
「どうしたんすか？」
「森下、おしりふきシート取って、何枚か取ってかなり取って」
「あ、はい」
この白い箱のここをスライドさせれば　開いた　あれ？　温ったけえ
シートも温ったけえ　なんだこの箱は？
「森下早く！」
「おいっす、これ」
「え・・っと、こうなると・・　どこから拭けばいいんだ？」
「とにかく外っ側から拭いてっちまえばいいんじゃねえっすか？」
「そうだな、まずは・・　これは・・　拭いても」
え？
「一回抜く、抜いて新しいオムツの上で、それでもう一枚、森下」
「おいっす、新しいオムツっすね」
監督が優大くんのケツを軽くあげてウンコだらけのオムツを・・　抜いた
「よし、できたぞ」
「おいっす」
「これは・・」

「な、なんすか？」
「お尻の裏まで・・　すごいことに」
え　もしかして　もしかすっと
「監督、優大くんの服についてねえっすか？」
「服？　　優大ちょっとごめんね」
監督が優大くんの身体を
「あーーーっ　ついてる」
「洗面台！」
「え？ なに？」
「洗面台でケツ洗うんすよ」
「お尻を洗う？　　わざわざ？」
「俺が赤ちゃんとき、背中までウンコはみ出しちまって、とうちゃんケツ洗ったって」
「そうなの？　　そうだな、それしかないな」
監督が優大くんをそのまんま持ち上げて
「森下、行くぞ」
「おいっす」
バスルームに走って
俺は洗面台の蛇口ひねって　温度は・・　こんくれえか
「監督、どうぞ」
「森下、ガーゼ取って」
「どこっすか？」
「その棚の中、着替えも」
「おいっす」
ガーゼ取って監督に渡して　着替えは・・どこに　あ！ そうだ
バスタオル床に敷いて　そこに　すげえ　服を開けたら　下着も全部　このまんま着せられるな
「洗った、洗ったよ」
「んっと、そんじゃバスタオルっすね」
棚ん中からバスタオル取って
「広げてくれ」
「おいっす」
「ちゃんと受け止めろよ」
「おいっす！」
監督が優大くんを俺が広げたタオルの中に　んっと拭かねえと
「森下、その着替えの上に、お尻からそ〜っと」
「おいっす」
ケツからそ〜っと置いて　ハァ　無事着地
「あとは・・　俺ができる」
「おいっす」
そんじゃ・・　俺は　そっか　ウンコついた服洗わねえと

ウンコをティッシュで　ドロッとしてっから全部は取れねえけど
そんで　これもぬるま湯で洗って　監督の服と一緒につけ置きだな
「できたよ」
「そうっすね」
「森下がいてくれてよかったよ」
「俺もなんかよくわかんねえから手際悪くて」
「俺一人だったら、葵はもう二度と外出しないよ」
「あ・・　そんなら、よかったっす」
監督と優大くんと俺とでリビングに戻った

監督は優大くん抱いたままソファにドスンと座った
疲れたんだな
「監督、このマットもウンコついてるんすけど、洗っていいんすか？」
「二枚あるから」
ウンコまみれのオムツとウンコついちまった新しいオムツは・・
「監督、これは燃えるゴミでいぃんすか？」
「そのバケツの中に捨てて」
バケツ・・　あ、これか　クルクル丸めてあんな
これもそうしねえとな　こうか？　おお　できた
この白い箱
「監督、これはなんすか？」
「おしりふきウォーマー」
「ウォーマー・・つうことは、温っためるんすか」
「もう涼しいからって、それも友だちに教えてもらって買ったらしいよ」
「こんなんあるなんてすげえっすね」
「そう？　俺はよくわからないけどさ」
「とうちゃんは上にホッカイロ貼ってたっつって」
「ホッカイロ、なるほどね、さすがカズオさんだな」
監督の声の疲労感ハンパねえな
「そんじゃ、俺、洗ってきます」
「たのむよ」
バスルーム行って
これはすぐ取れたな　つけ置きしてたのと一緒に洗濯機に入れて
一回のウンコでこんだけ洗濯しなきゃなんねえって　赤ちゃんてすげえな
存在の大きさっつうかさ
カレー仕上げねえと

おっし　残りのルーも入れて　弱火で少し煮込んで　できた
「森下ーーー」
「おいーーっす」

リビングに行くと
「トイレ行きたいから、ちょっと変わってくれないか」
「何をっすか？」
「優大の背中トントン」
背中トントン？
「こうしないとなかなか寝なくてさ」
「あ、おいっす」
監督の隣りに座って　優大くんを腹んとこに置いて
「すぐ戻ってくるから」
「ゆっくりでいぃっすよ」
「オシッコだよ」
監督が走ってリビング出てった
背中をトントン　優大くん温ったけえな　背中を・・トン・・トン・・
優大くんの体温が・・気持ち・・いい・・な

冷凍ごはん容器

ん・・・あ・・寝・・て・・あれ・・　あれ？　いねえ　え？　俺の肩に監督　なんで？
監督も抱いてねえ　優大くんが　いねえ！
「か、監督！　監督！」
「ん・・　あ、寝てたよ」
「優大くんが！　い、いねえんす」
「あれ？　いない！」
「ま、まさか、誘拐・・」
「森下が来てから鍵は閉めたよ」
「そ、そんじゃ一人で歩いて」
「まだ歩けないよ、首もすわってないんだから」
「そ、そうっすよね、そんじゃ、どっかに転がって」
ローテーブルの下覗いても　いねえ　いねえよ
「いないな」
監督も覗いてっけど
「ベッドルームに寝かせたわよ」
「えっ？」「えっ？」
ガツッガツッ
「イッ・・テー」「イタッ」
「シーーッ」
「葵！」「お、奥さん」
「ほら、見て」
奥さんが俺と監督の前に携帯差し出して
「あんまりおもしろいから撮っちゃったの」
俺が口開けて寝てて　監督が俺の肩に頭置いて寝てて　優大くんがなぜか
俺と監督のひざの上で仰向けになって　寝てる
「監督、なんで俺の隣りで寝てたんすか」
「トイレから戻ってきたら、森下が優大を腹に乗せたまま寝てて」
あ・・　俺が寝てどうすんだよ
「優大も寝てたから、そ〜っと抱きあげたら目を覚ましちゃってさ、
　あわててここに座って背中トントンして・・　そこから記憶ないな」
「よく寝てたわ、私が帰ってきても起きなかったもの」
「葵、写真撮るヒマがあったら起こしてくれよ」
「だってこの光景、可愛いでしょ」

「可愛いって、肝が冷えたよ、優大がさ」
「ごめんなさい、でも、おかげで今ぐっすり寝てるから」
「そうか、まあ、それならよかったけど」
「薫さん、優大を着替えさせたの？」
「着替え？」
「朝着せたのと違うのを着てるから」
「あ！　そうだよ、そうだった」
着替えさせたっつう意識も吹っ飛んでたな
「うんちしたんだよ」
「出たの？」
「出たよ」
「ああ、よかった」
奥さん　メッチャホッとした顔してる　だよなウンコ出ねえとさ
「後ろまで漏れちゃってさ」
「そんなに？」
「森下と二人でお尻洗ったり着替えさせたりで、なあ」
「大一さん大変だったでしょ、薫さんはそういうのやったことがないから」
「俺も初めてで、なんつうか、監督の指示のもと、手伝ったっつうか」
「薫さんの指示？」
「森下！ おしりふきシート！ とかガーゼと着替えはそこの棚だとか」
「まあ、そんなことを、ごめんなさいね」
「的確な指示っすよ、さすがっす」
「なにがさすがだよ、バタバタだったよ」
「監督すげえ一生懸命だったじゃねえすか、奥さんを外出させてえからって」
「え？　私を？」
「違うよ、やることをやっただけだよ」
監督が立ち上がって
「トイレ」
俺の頭　小さくコツンて叩いてリビング出てった　照れてんだな
んっと　俺は・・　そろそろか　や、洗濯が終わってんな
「俺、洗濯物、乾燥機に入れてくるんで」
「そんなことしなくていいのよ、それはお願いしてないから」
「いいんすよ、すぐっすから」
バスルームに走ってって
バスタオルはバサッバサッて
「カズさんと同じやり方をするのね」
奥さんが覗いてた
「ベランダで干して最後に乾燥機低温でかけるとフワッとするんすけど」
「カズさんもそう言ってたわ、でもね、めんどうですぐに乾燥機に入れちゃうの」
「いいんすよ、俺もめんどいときはそうしてるんで」

んっと・・　この優大くんの服は
「奥さん、優大くんの服は浴室乾燥っすか？」
「乾燥機に入れて大丈夫よ、肌着も入れていいの」
「優大くんの着替え、下着も中にセットされてて、すげえ楽だったっす」
「あれはカズさんが教えてくれたのよ」
とうちゃん？
「おばあちゃんに教わったって言ってたわ」
おばあちゃん？
「大一さんのおばあちゃまかしら？」
「俺んとこはどっちのばあちゃんもいねえから」
「あら、それじゃどこの・・」
「あ！　スーパーで知り合ったばあちゃんかもしんねえっす」
「え、スー・・パー？」
「とうちゃん、子育ての先輩に片っ端から声かけていろいろ教えてもらったって」
「そうだったの」
「奥さん、このマットは」
「それは浴室乾燥するの」
「おいっす」
監督のシャツも浴室乾燥だな
あとは・・　洗面台だ
「すごくきれいになってるのに洗うの？」
「優大くんのウンコ流したんで」
「それくらいいいのに」
「やっぱ顔洗うとこっすから」
「まあ、ありがとう」
「仕事っすから」
「それじゃ、ここはおまかせするわね」
「おいっす」
奥さんがバスルーム出てった
おっし　これでカンペキだ

そんじゃ俺はそろそろ
「大一さん」
キッチンから奥さんが呼んでる
「ど、どしたんすか？」
「カレーが」
「辛れえっすか？」
「え？」
「監督は辛口で奥さんは甘口だっつうんで、甘口寄りの中辛にしたんすけど」
奥さんが　両手口にあてて　目だけおっぴろげてっけど？

「やっぱ甘口と辛口ふたつに分けた方がよかったっすか？」
両手口にあてたまま首振ってっけど？
「んっと、あの・・　カレーは・・　ダメッすか」
「そうじゃないの」
あ　やっとしゃべってくれた
「カレーまで作ってもらってて、ビックリして」
「午後はなんもやることなかったんで」
「え？　　依頼したお掃除は・・」
「午前中で終わっちまったんで」
「そんなに早く？」
「こんくれえならそんなもんすよ」
「まあ・・　それで、カレーを？」
「晩メシできてたら楽かなって」
「本当に、ありがたいわ」
「食材もそろってたんで」
「ちょっと味見してもいい？」
「おいっす、辛かったら言ってもらえば直すんで」
奥さんがスプーンでカレーを口に入れて
「美味しい！　　ふつうの甘口よりずっとずっと美味しい」
「マジッすか」
「これは・・　どうやって」
「甘口のルーと辛口のルー、適当に調整して入れただけっす」
「適当で、この味？」
「んっと」
残ったルー見せればわかっかな
「こっちはこんくれえ使って、こっちはこんくれえだけ」
「えっ・・　削ってる」
「一個じゃ多いときは適当に削って入れるんす」
「市販のルーでこういうことができるなんて」
「とうちゃんはいっつもこうやってっから」
「大一さんはカズさんからしっかり受け継いでるのね」
「受け継ぐって　ハハハ　まあそうっすね」
愛里が　ハンバーグを代々受け継がせろっつったな
奥さんが冷蔵庫開けて
「サラダまで！」
「明日の監督の弁当にも入れられるくれえは作ったっす」
「お弁当？」
「あと、これは唐揚げ、明日の朝もっかい揚げればちょうどいいっすよ」
「なんだか・・もう・・」
え？　　泣いて・・る？

「あ、あの、余計なことしちまって」
「そうじゃないの、ごめんなさい、ちょっと感動しちゃって」
感動？
「夕食もできてるし、明日のお弁当のおかずまで」
「ひさっしぶりに出かけて、帰ってきてからメシ作んのは大変かなって」
「私は専業主婦だから」
「専業主婦は、世界でいっちゃん高けえ給料もらうべき仕事だって」
「え？」
「俺のかあちゃん言ってるんすよ」
奥さんがくちびる噛んで目ぇシバシバさせてっけど
「そんで、監督も、奥さんにはたまには外出させてえんすよ、だから俺にも声かけて」
「正直ね、不安だったの、薫さんがお掃除と優大の世話をするなんて無理だもの」
「俺、掃除と洗濯はできるんで、また外出してえときは、平日と土曜以外なら」
「ありがとう」
あ　そうだ
「あの、ちっと聞いていぃっすか？」
「なあに？」
「この、冷凍庫の、これって」
「冷凍ごはん容器？」
「どこに売ってるんすか？」
「私は通販で買ったけど、ホームセンターとか、そういうところにあるんじゃないかしら」
「そうすか、そんじゃ探します」
あのホームセンターなら置いてっかな
「ちょっと待ってね」
奥さんが食器棚の前でかがんで　下の扉開けて
「これ」
冷凍ごはん容器
「大一さんにあげる」
「えっ？　　や、いいっすよ、俺、探してくるんで」
「いいのよ、私、5 個セットを二組も買っちゃったの、だからワンセット持っていって」
「マジッすか？」
「ほら見て、すのこも入ってるでしょ、余分な水分を下に落とすからベタつかないの」
おおお　すげえ
「炊き立てのごはんを入れてすぐにフタをして冷凍すると炊き立てみたいになるのよ」
「マジッすかあ」
「私はお昼はこれを食べてるの、ずっと冷凍したままだと古くなっちゃうでしょ」
「そうっすよね」
「すごく便利、一人分なんて炊かないし、優大の世話をしながらだから」
「ゆっくりメシは食えねえんすね」
「みんなそうみたいよ、今日会った友だちも、上は幼稚園で下は二歳でね、

　一歳くらいで歩き始めると、キッチンで立ってお昼を食べてたって」
「そうなんすか」
「友だちとランチなんて久しぶりだったけど、なんだかね、心から楽しめなかったの」
え？
「頭のどこかで、優大はどうしてるかしら、薫さんは大丈夫かしらって、
　そんなことばっかり考えちゃって、フフ、そばにいた方がよっぽど楽ね」
「おいおい、信用ないな」
「あら、薫さん聞いてたの？」
「聞こえたんだよ」
「監督、奥さんから、こんなすげえのもらいました」
「ごはんを冷凍するやつ？」
「すっげえ嬉しいっす」
「高校生男子がそんなのもらって嬉しいかな」
「最高っすよ」
「あ、そう」
「おいっす」
「森下、もう時間過ぎてるよ」
「あ、そうっすね」
「着替えた方がいいんじゃないか？」
「え？　　あっ」
赤Ｔと緑のジャージだった
「き、着替えてきやすっ」
バスルームに走ってって　ヤッベエ　清潔感ねえじゃん
そんでもまあ掃除だったからさ　あ・・　優大くんのこと抱いた背中トントンした
しゃあねえよ　緊急事態だったからさ

玄関で
「ポピンズ紹介所の森下大一、これでご依頼の仕事終了しました」
「本当にありがとうございます」
「森下、それじゃまた土曜日に現場で」
「おいっす」
「大一さん、これね」
手提げの紙袋？
「プリンなんだけど、皆さんでどうぞ」
「えっ？　　んな、冷凍ごはん容器もらったっすから」
「外出してスイーツを買うなんて、久しぶりで楽しかったわ」
「そう・・すか」
「ここのは美味しいんですって、そういうことにも疎くなっちゃってて」
「葵、俺の分は？」
「薫さんたら、子どもみたい」

「俺だってプリン食べたいよ」
「ちゃんと買ってきました」
「だったらいいけどさ」
監督は・・　奥さんの前だと子どもみてえになんだな
「森下、なに見てるんだよ」
「え、なんか、監督可愛いなって」
「森下に可愛いって言われても嬉しくないよ」
「へへ、そんじゃ、失礼します」
「ありがとうございます」「世話になったな、ありがとう」
ドア閉めて
愛里　おみやげもらったよ　冷凍ごはん容器　あ　プリンも
ピコン　え？　　あ　監督
これは・・　奥さんが撮った写真だ
優大くん寝かせようとして俺が寝るってさ　監督もだけど
ここで反省してねえで　帰ろう

治一郎

帰りの電車ん中
『愛里』送信
『俺は仕事終わって今電車の中』送信
ピコン
『おかえりなさい』
おかえりなさいってさぁ　たまんねえな
ピコン
『お仕事どうでしたか？』
なんつうか・・　あれ送ろう
『こうでした』送信
奥さんが撮った写真も送信
ピコン
『最高 wwwww』
愛里の笑った顔が浮かぶ
『奥さんからおみやげもらったよ』送信
この冷凍ごはん容器を　んっと　紙袋の上んとこに置いて　カシャッ　送信
ピコン
『治一郎！』
治一郎？
『治一郎ってだれ？』送信
ピコン
『その紙袋　治一郎のですよね』
紙袋？　　あ　治一郎って書いてある
ピコン
『治一郎をくれるなんて』
ピコン
『センスがいいですね　なにげないし』
プリンつったけどな　すげえの想像してねえか？
つかさ　そこじゃなくてさ　メインは冷凍ごはん容器でさ
まあ帰ってから見せよう　そんで　なんつうんだ？　　プレゼンだな
『愛里は今どこにいんの？』送信
ピコン
『私の部屋です』

そっか
『そんじゃ着いたら行く』送信
ピコン
『もしかしたら』
ピコン
『驚くかもしれない』
驚く？
『サプライズっつうこと？』送信
ピコン
『ある意味サプライズです』
ある意味？
ピコン
『百聞は一見に如かずなので』
ピコン
『見たらわかります』
『そんじゃサプライズされに行く w』送信
ピコン
『はい』
サプライズってさ　愛里は可愛いなあっ

愛里の部屋のドアホン鳴らして
どうだ　ヘン顔 100 連発
「やめて」
へ？　　いつもは俺のヘン顔で笑うじゃん
つか　なんで小声？
ドア開いた
「愛」里？　　なんで後ろ手でドア閉めた？
「愛里、どした？」
くちびるに指あてて　シーッ？
「この中では」
なんで小声なんだ？
「抱っことか、ハムハムは禁止です」
「なんでだよっ？」
「シーーーーッ」
「ここでやれなきゃ俺どこでやればいぃんだよっ？」
「シーーッてばっ　永遠にじゃないからっ」
「なんで声出さねえの？」
「とにかく」
あ　声出した
「入ってください」

「おう」
愛里がドア開けて　え？　　玄関に・・　靴　あれ？　　男物のスニーカーも・・ある
なんだ？　　何が起こってる？
「森下くーーん」「森下くーーん」
ハ？
愛里の後ろからリビング入ったら
「佐藤？　　と　佐藤？」
「森下」
「えっ？　　あっ　か、川口？」
な、なんだ？　　なんの集会だ？
「遊びに・・きてくれました」
「上原さん、ちゃんと勉強もしたよ」
「うん、あの、あなたのノート・・借り・・ました」
「おう、それはいい・・けど」
「あのね」
隣りの佐藤
「私とアヤナで上原さんに LINE して遊びに行ってもいい？ って」
「ユミ、ちがうよ、一緒に勉強しない？ って言ったんだよ」
「そうだった、上原さんがいいって言ってくれたから来ちゃった」
そんで・・　川口は　なんでだ？
「僕？　　僕のこと見てるよね」
「え？　　や」
「僕は拉致されてさ」
拉致？
「駅に着いたら川口くんがブラブラしてたから」
「ブラブラしてないよ、僕もあの駅で下りて家に帰ろうとしてただけで」
「上原さんのところに一緒に行こうって連れてきたの」
「意味がわからなかったよ」
俺もわかんねえんだけど
「森下くんがバイトでいないっていうから、川口くんでもいっかなって」
川口でもいっかな？
「勉強するなら教えてくれる人いた方がいいかなって」
あ・・　そういう・・　そっか
「上原さんにはわかりにくいって言われたけどね」
愛里が　そっか　だよな　愛里は俺じゃねえとさ
「森下くんバイトだったんでしょ？」
「おう」
「赤ちゃんの世話なんてすごいね」
赤ちゃんの世話？
「じゃねえよ、俺は・・」

「さっき上原さんが写真見せてくれたの」
「写真？」
「さっき森下くんが上原さんに送ってきたやつ」
「へ？」
愛里？　あれを見せたんか？　あ　顔背けた　愛里こっち見てくれよ
「赤ちゃんの世話ってどういうことするの？」
「俺は掃除を依頼されただけでさ」
「でも、赤ちゃんと一緒に寝てたよね」
あれは・・
「赤ちゃんがウンコしてさ」
「えぇぇぇ、絶対ムリ」
「オムツ取り換えたの？」
「お父さんが取っ換えたんだけど、ウンコが溢れかえっちまってて」
「エーーーッ？」「エーーーッ？」
あ　愛里がやっと俺のこと見た　すげえ顔して見てっけど
「赤ちゃんて溢れかえるほどウンチするの？」
「前の晩からウンコ出ねえから、朝に綿棒浣腸したんだってさ」
「メンボーカンチョーって・・　なに？」
「んっと、綿棒の先にワセリン塗って、それをケツの穴ん中に」
「イヤーーー！」「ムリムリムリ」
「森下が綿棒浣腸をしたの？」
川口まで入ってきた
「や、監督がやったって」
「カントクってだれ？」「お父さんじゃないの？」
俺は　なんで　佐藤たちに　優大くんのウンコの話　してんだ？
「それで？　綿棒取ったら・・　ブシャーーッ？」
「エーーーッ　爆発？」
「浴びちゃうよね全身に浴びちゃうよね」
佐藤と佐藤は　どういう想像してんだ？
「森下くん浴びたの？」
「浴びてねえよ、監・・お父さんがオムツ換えようとしたら、背中まで」
「背中まで？　ウンチまみれ？　どうするの？」
隣りの佐藤　そんなに赤ちゃんのウンコに興味あんのか？
「洗面台でケツ洗って着替えさせた」
「すごーーい、森下くんそんなことできちゃうんだ」
「俺じゃねえよ、監・・お父さんが洗って、俺はサポートしただけ」
「そんな過酷なことしてきたんだもんね、そりゃ寝ちゃうよね」
「寝ちゃう、あの光景が物語ってるよね」
また写真の話に戻んのかよ
ピンポーーン

まだ誰か来んの？ 愛里　愛里もポカンとしてんな
そんじゃ
「俺が出る」
立ち上がって　ドアホンの室内機の前に
え？　　とうちゃん？　　なんで？
ドア開けて
「とうちゃん、どした？」
「夕方、アイリちゃんから美里に電話あってよ、友だちが遊びに来てえっつうんだけど」
「今来てるよ」
「部屋に入れてもいいかってよ」
え？
「美里は、んなこといちいち聞かなくてもいいっつったんだけどよ」
愛里・・　わざわざかあちゃんに聞いたんか
「そんでよ、美里がメシ食ってってもらったらいぃんじゃねえかっつってよ」
「かあちゃんが？」
「そんで持ってきた」
え？　　あ　廊下の床に　うちでいっちゃんデッケー鍋と炊飯器
「とうちゃん、これ一人で持ってきたんかよ」
「さっきは炊飯器持ってきてよ、そんで今カレー持ってきた」
カレー？
「ダイチ、俺の腰にぶら下がってる袋取ってくんねえか」
「え？　　あ、これか」
「サラダみてえの作ったからよ」
「とうちゃん、俺手伝ったのにさ」
「せっかく友だち来てくれてんだからよ、メシ食ってってもらいてえもんな」
「とうちゃんとかあちゃんの分は取っといてあんの？」
「美里と俺はラーメン食いに行くからよ」
「ラーメン？」
「美里がラーメン食いてえって、俺にご馳走して欲しいっつってよ」
「デートじゃん」
「デートっつうかよ、退院祝いっつうかな」
とうちゃんメッチャ嬉しそうだな
「あ、監督の奥さんからプリンもらったんだけどさ」
「友だちと食えばいぃんじゃねえか？」
「いちおうとうちゃんとかあちゃんにもだと思うんだけどさ」
「プリンは子どもが好きだからよ、みんな喜ぶじゃねえか？」
とうちゃんには　高校生も子どもなんだな　だよな俺がとうちゃんの子どもだからさ
「そんじゃ、もらっちまっていっかな」
「おう、俺はかあちゃんに餃子もご馳走すっからよ」
「とうちゃ〜ん、かっけえ」

照れて頭ボリボリ掻いてっけどさ　いつもながら　マジかっけえよ
「そんじゃ、ここ置いとくからよ」
「とうちゃん、ありがとう」
ん・・っと　どうする？　　まずはカレー入った鍋からだな
鍋持って　玄関の中入って
「川口！」
「どうしたの？」
「表に炊飯器あるから持ってきてくんねえか」
「うん、わかった」
佐藤たちと愛里も来た
「なになに？」「何があったの？」
「みんなで食ってくれって、とうちゃんがカレー作ってくれた」
「カ・・レー・・」「カレー・・」
え？　　なんだ？　　この微妙なカンジ
「カレー嫌れえなんか？」
「う、ううん、ちょっとタイミング・・よすぎて」
タイミング？
「だろ？　　とうちゃんはタイミングいぃんだよ」
「そう・・だね、ていうか、こんなに作ってくれたの？」
「おう、みんなにメシ食ってもらえって、かあちゃんがさ」
「え？ 森下くんのおかあさんが？」
「作ったのはとうちゃんだよ」
「ん・・？」
「とうちゃんとかあちゃんが、なんつうか、みんなを歓待してるっつうことだよ」
「えええ、嬉しい」「夕食ご馳走になるとか、本当にいいの？」
「おう」
愛里の顔見たら　なんか泣きそうな顔になってんだけど？
晩メシは・・　ダメだったんか？　　愛里どうなんだ？
「も・・森下・・これ・・」
川口
「どこに・・」
「キッチンの炊飯器置き場にコンセント挿してくれ」
「わ・・かった」
んな重てえか？

愛里と佐藤と佐藤はローテーブルの前に座って
俺と川口がダイニングデーブル
「おっいしい！」「美味しい！」
決まってんだろ　とうちゃんのカレーなんだからさ
「いつものとはちょっと違いますね」

いつものと違う？　なんだ？　一口・・　これは・・　甘口寄りの中辛
「これってスパイスから作ったの？」
「や・・　市販のルー・・」
いつもの　うちのカレーは・・　ちっと辛口寄りの中辛で・・
きっと　とうちゃんは　子ども向けにって　そんで　この味は・・
俺が監督んとこで作ったんと　おんなしだ　まったくおんなし
俺・・　とうちゃんに少し近づけた　ヤベ涙・・
「森下？　そんなに辛・・くはないよね？」
「え？」
「なんか指で涙をぬぐってるみたいだったから」
「ゴミ、ゴミついてた」
「相変わらず森下のお父さんの料理は美味しいね」
「そっか、よかった」
え？　愛里　俺のこと見てる
「愛里、どした？」
「なんか・・　このカレー、あなたの味がして」
愛・・里　やめて・・くれ　泣く・・から
「水、取ってくる」
キッチンに走った

フーーーー　水飲んで平常心に戻った
カレーで泣いてどうすんだよ　そんでもさ
カレーまだ残ってんな　白メシも
「おかわりしてえ人いるかーー？」
「お腹いっぱーい！」「森下くんの盛り付け二杯分だよ」
とうちゃんがいっぺえ作ってくれたからつい・・な
どうすっかな　ジップロックに小分けにして冷凍・・
カレーはじゃがいも抜かねえとだな　食えなくはねえんだけど
「森下くん」
窓際の佐藤
「どした？　水？」
「もしよかったら・・なんだけど」
「なに、どした？」
「私のお姉ちゃん、今日バイトで遅くなるんだよね」
「そっか、がんばってんだな」
「それで・・　お姉ちゃんの分もらっていってもいいかな」
「あ？　おう、いいよ」
「ありがとう」
「白メシは？」
「ごはんもいいの？」

「いっぺえあっから」
「それじゃ、もらう」
「おう」
んっと　白メシはラップ・・　あ　これは　実演プレゼンのチャンスだ！
「愛里！」
「はーーい！」
来た来た来た
「あのさ、奥さんからおみやげもらってさ」
「治一郎ですよね」
「そっちじゃなくて、これ」
袋から出して　愛里の前に
「これは・・　なに？」
「冷凍ごはん容器」
「そう・・ですか、よかったですね」
全然把握してねえな
「これはさ、炊き立ての白メシ入れてフタして冷凍すっとさ」
ヤベ　愛里の顔がどんどん・・
「ほれ、ここ、このすのこ、これが水分を下に落とすからベタベタになんなくて」
全然興味ねえ顔だ　無表情になっちまってるよぉ
「これ、よさそう」
窓際の佐藤？
「私とお姉ちゃん、前はガバッとごはん炊いて小分けにして冷凍してたんだけど、
　ラップに包むと、な〜んか冷凍くさくなるしパサパサしたりベタッとしてたり」
佐藤　そうなんだよ
「それでパックごはん買うようになったんだけど、やっぱり高いのがね」
そこだよ　佐藤　一パック 400 円は高すぎんだろ
「昨日お母さんから電話があって、食費かかり過ぎって言われちゃった」
佐藤のお母さん　そうっすよね　一パック 400 円の白メシは高けえっすよね
「この容器なら、いけるかも」
佐藤　ナイス！
「ほら、ここに、冷凍しても炊き立ての美味しさを楽しめるって」
佐藤！　もっと言ってくれ！
「だったらこれを」
愛里が息吹き返した！
「サトアヤさんにあげたらどうですか？」
いやいやいや　それじゃ意味ねえんだよ
「いいよ、私はお姉ちゃんに買わせるから、写真だけ撮らせて」
「おう、写真ならいっくらでも撮っていいぞ」
「一枚でいいよ、森下くん、バイト帰りに上原さんに買ってきたの？」
「買ったんじゃなくてもらったんだけどさ」

「私は・・　使わないです」
「使うんじゃない？」
佐藤　そうなんだよ使うんだよ
「私はパックごはん勧めちゃったけど、こっちの方がいいと思うよ」
佐藤！　力強え味方だよ
「でも、私はごはん炊けないから」
それは
「俺が炊く」
「え？　だって、あなたにもしものことがあったときの非常食で、それをあなたが炊くって」
「俺が炊いて冷凍しとけばいいだろ」
「だけど、そしたらまた手間が増えるだけでしょ」
「手間じゃねえよ、メシ炊くときに入れて冷凍しとけばいいじゃん」
「でも、何もなかったら、ごはんは・・　冷凍庫の中で・・　えぇぇ、どうなるの？」
「俺が食うよ、そろそろヤベエかなっつうときに食って、また入れとく」
「でもそれは、なんか違うっていうか」
「なになに？　なんの話？」
隣りの佐藤も来た　後ろから川口まで
「森下くんが上原さんに冷凍ごはん容器買ったんだって、あ、もらったのか」
「あ！　知恵熱出したときのため？」
へ？　なんで佐藤が知恵熱って？
「森下は上原さんに自分が作ったごはんを食べて欲しいんだね」
か、川口　たまに核心つきやがるな
「知恵熱出したときでもさ」
川口　知恵熱っつうのはやめろ
「冷凍したものでも自分のごはん食べて欲しいんだよ」
「だよね、上原さん言ってたじゃん、知恵熱出したりしたらって」
愛里が？　愛里　知恵熱っつったの？　愛里　こっち向いてくんねえかな
「これを使えば、森下くんが知恵熱出したときでも森下くんのごはんが食べられるんだよ」
すげえありがてえ言葉だけど　知恵熱っつうのはやめてくんねえか
「それじゃ・・　これは、必要ってこと？」
「必要だよ、しかも森下くんが炊いたごはんて、コシヒカリ超えるんじゃい？」
古古米っすけど　気持ち的には負けねえ自信あるっす
「それじゃ・・　お願いします」
「おう、まかせろ」
なんつうか　みんな　援護射撃ありがとう！
「プリン食うか？」
「食べる！」「食べたい！」「治一郎」
愛里はよっぽど治一郎さんを・・　んっと　フタ開けて　え　三個？

三個っつうことは・・　愛里と・・佐藤と・・佐藤・・で
「僕はいいよ」
「あ、そっか、そんじゃ愛里と佐藤と佐藤」
「いいの？　　森下くんがもらったのに」
「俺はこっちの容器もらったから、食ってくれよ」
「いただきまーす」「いただきます」「いただきます」
愛里たちがプリン持ってリビングに戻ってった
「川口、悪りぃな、プリン食わせらんなくて」
「僕は、あのプリンは死ぬほど食べてるから」
「そんなに好きなんか？」
「妹が」
「あ、そっか」
「あの K-POP の、森下がやったイ・リノいるでしょ」
入野さんか
「日本に来たとき食べたんだってさ」
「なんで、んなことわかんだよ？」
「ライブ配信中に食べたらしいよ」
なんの話か全然わかんねえ
「だから一時は入野治一郎っていうワードがトレンド入りしたらしいよ」
入野治一郎
男らしい名前だ　さすがあの体幹の武道家だけはあるな

追いプリン

愛里と佐藤たちは　リビングでプリン食いながらしゃべってて
俺は食器と鍋と炊飯器の釜洗って炊飯器拭いて
「森下って」
「うわああ」
「なんで驚くの？」
「か、川口、いたんかよ」
「いたよね？　　僕は森下が洗った食器を拭いて、頭の上の扉開けるから気をつけてって」
んなこと言われたか？
「森下ヒュッて頭を下げて、あれって無意識？」
「憶えてねえけど」
「森下ってすごいよね」
「なにが？」
「まずは釜に水を張って」
「やるだろ、でんぷん質がこびりついちまうじゃん」
「グラスを洗ってサラダが入った器を洗ってカレー皿を洗って」
「洗うだろ」
「その後、釜に行くのかなと思ったらカレーが入ってた鍋」
洗うじゃんよ
「食器は油分の少ない順に洗って、それに少し洗剤を足してカレー鍋」
なに言ってんだ？
「そのスポンジをギュギュッとすすいで洗剤つけてからの釜ってさ、効率的だよ」
「んなこと考えて洗ってねえよ、いつもみてえに洗ってただけだよ」
「身についてるってこと？　　すごいよね、僕にはできないなあ」
なに見ててなに考えてたんだよ　いいけどさ
ん・・と　この鍋と炊飯器　どうやって持ってくかな
「森下くーーん」
「あ？　　なに？　　どした？」
「今、上原さんと話してたんだけど、明日のお昼は上原さんうちらと学食だから」
あ・・　そうだった
「おう」
「川口くんはどうするの？」
「僕はいつも学食」
「だったら、うちらと一緒に食べる？」

「いや、僕は・・」
な、なんだよ川口　なんで俺の顔見んだよ？
「だったらいっそ森下くんも一緒に学食で食べる？」
「その方がにぎやかで楽しいかも」
愛里がキョトッてんだろ
「それじゃ意味ねえだろ」
「なんで？」
「俺が休んだとき、愛里が佐藤たちと学食で昼メシ食う練習なんだろ？」
「あ、そうだった」
「そしたら森下くんはどうするの？」
「俺は・・　テキトーに食うよ」
「適当ってどういうこと？」
「え・・」
愛里が　メッチャ心配そうな顔で俺のこと見てる
「んっと」
あ！
「現場の、旧体育館の現場の監督と食う」
テキトーに言っちまったけど　べつにどこでもいぃんだけどさ
「ああ！　　運動会で走った仲間？」
「え？　　ああ、おう」
愛里が　ホッとしてる
「監督と食うから」
どうなんだ？　　行くだけ行ってみっか
「上原さんのことはうちらに任せて」
「おう、頼むよ」
「ワーー」「ヒャー」
な、なに？
「頼むよって」「ねえ、今キュンキュンしちゃった」
なにが？
「頼むとか、カレシみたい、あ、カレシか」
「森下くんと上原さんてさ、カレシとカノジョ感ないよね」
えっ　ねえっつうのは　どういうことだよ？
「ないよね、うちらも二人が一緒にいてもフッツーに見ちゃってるよね」
「そうそう、なんていうのかな、あたりまえみたいな？」
俺と愛里が一緒にいるのがあたりまえって　ヤベ　ニマニマする
「あれだよあれ、長年連れ添った夫婦見てるみたいな」
夫婦？
「そうそうそう、それそれ」
ニマニマが止まら　え・・　愛里が　なんで？　　俺のこと睨んでっけど？
「僕はそろそろ帰るよ」

「川口、なんつうか、手伝ってくれてありがとな」
「無意識とは思わなかったけどね」
それは・・
「それじゃうちらも帰ろうか」「だね」
「そっか、今日は愛里が世話に　えっ」
愛里が　俺のシャツ　後ろから引っ張った
「愛里、どした？」
「サトユミさんとサトアヤさん、今日は・・楽しかった」
「うちらも、ねえ」「うん、森下くん、お姉ちゃんの分のカレーありがとう」
「や、全然、つか、作ったのはとうちゃんだからさ」
「お父さんとお母さんにもお礼言っておいてね」
「おう」
「森下、鍋と炊飯器、一人で運べる？」
「ああ」
「僕手伝おうか？」
「あんくれえ一人で持てっからさ、それよか佐藤たちバス停まで送ってやってくれよ」
「うん、僕もバスだから、逆方向だけど」
「あ、そうだ、森下くん、ノート見せてもらってありがとう」「ありがとう」
「全然いいよ」
「あのモリシタダイチのノート見て勉強とか、ねえ」「うん、恐れ多かったもん」
なんだそれ？
「ついでに川口くんにカテキョってさ」
ついでって言わねえでやってくれよ
「最高だったよね」
「上原さんにはわかりにくいって言われたけどね」
「うちらはわかったから」「うん、ちょっとくどいけど」
「くどい？　　僕の説明はくどい？」
「ちょっとだけだってば」
「妹にも言われるんだよ、おにいちゃまの教え方はくどくて逆にわかんないって」
「そこまでじゃないかったよ、私なんてどうしても解けなかった問題わかったもん」
「だったらいいけど、教えるって僕は苦手だからさ」
すげえな　このまんま放っといたらずーーっとしゃべってっかもしんねえな
ピンポーーン
誰だ？　　え？　　とうちゃん
「ちっと、ちっと待ってて」
ドア開けたら　とうちゃんがちょいちょいって手招きして
ドア閉めて
「とうちゃん、どした？」
「さっき監督さんが来てよ」
「監督？」

なんかあったんかな　俺、なんかやり忘れたか？
「美里とラーメン食って帰ってきたら下の玄関とこにいてよ」
なんだ？　　日給？　　家政夫の日給は振り込みだよな
「これ届けに来た」
これは・・　プリン入ってた紙袋のでっけえバージョン
「なんかよ、奥さんが渡す袋間違えたってよ」
「へ？」
「５個入り渡すつもりが、ダイチに３個入り渡しちまったって」
「そんで監督が届けに来たんかよ」
「奥さんがすぐに届けてくれっつったってよ」
「わざわざプリンを？　　監督が？」
「３個じゃ足んねえだろ？」
「つか、もう食っちまったからさ」
「そんでも・・　だれか二人は食ってねえよな」
「俺と川口だからいぃんだけどさ」
「せっかく持ってきてくれたからよ」
とうちゃんが俺に紙袋渡して
「鍋と炊飯器持ってくからよ」
「俺が持ってくよ」
「ついでだからよ」
「そんじゃ、とうちゃんは鍋だけ持ってってくれよ」
「炊飯器、先に欲しいんだけどよ」
「え？」
「明日の朝のメシ砥いどきてえからよ」
「そっか、そんじゃとうちゃんも入ってよ」
「や、俺は・・」
「なんで？」
「俺みてえなおっさんが女の子の部屋にウロウロ入ってったらよ」
え？
「アイリちゃんの友だち気味悪がってもう来てくんなくなっだろ」
「んなことねえよ」
「ダイチ、悪りぃけど炊飯器だけ持ってきてくんねえか」
「え・・あ、うん」
ドア開けて　部屋ん中入って
「どうしたんですか？」
「とうちゃんが来ててさ」
「おとうさん？　　なんで入ってこないの？」
「おっさんが女の子の部屋ウロウロ入ったら愛里の友だち来なくなるっつって」
「エーーーーッ　おっさんじゃないから　おとうさんは伝説的イケメンだから」
伝説的？

「誰がイケメンなの？」「イケメンって森下くん？」
「じゃなくて」
じゃなくて？
「おとうさんがイケメンだっていうことを」
「見た見た、運動会で、すっごいかっこいいよね」「マジかっこいいよね」
ほら　とうちゃん　かっけえって言われてんだよ　おっさんじゃねえよ
「森下くんにおとなの魅力をガッと乗せたみたいなさ」
ん？
「だよね、見た目そっくりだけど、おとなの色気がハンパなかった」
おとなの・・　色気か　俺には・・　ねえな
「んっとさ、プリン、またもらったんだけど、食う？」
「もうお腹いっぱい」「私ももう入らない」
「あなたと川口くんが食べればいいんじゃないですか？」
「え？　　あ、川口、食うか？」
「勘弁して」
勘弁？
「僕は最近茶碗蒸しも見たくない状態なんだよ」
そんなに食わされてたんかよ
「そっか、そんじゃ」
あ　そうだ炊飯器
とうちゃんに炊飯器渡して
「みんなとうちゃんのカレー美味えっつってたよ」
「そっか？　　フッツーのカレーだけどよ」
「今日のってさ、いつもよか甘口寄りだったよな」
「子どもは甘口好きだろ、そんでも高校生だからこんくれえかなって」
そのこんくれえがさ　俺が監督ん家で作ったんと
「森下くんのお父さん」
佐藤と佐藤が　ドアから顔出してる
「あの、ごちそうさまでした」「美味しかったです」
「え、あ、ああ、あの」
とうちゃんがうろたえてるよ
「おとうさん」
愛里も
「今日のは、なんか大一さんぽかったです」
「あ？　ん？」
「なんとなくですけど」
愛里・・　やめてくれって・・　泣くから
「そっか」
とうちゃんが愛里にニッコリして
「あのよ、アイリちゃんとこれからも仲良くしてやってくんねえかな」

「え？　もちろん、はい」「こ、こちらこそ」
「ダイチともよ」
「も、も、もちろんです」「は、は、はい」
「そんじゃな」
とうちゃんが炊飯器持ってエレベーターの方に歩いて行った
「私、あがるとか初めてなんだけど」「私も、言葉出てこなかった」
へ？
「近くで見るともっとかっこいいね」「男の色気ハンパないよね」
佐藤と佐藤　見る目あんじゃん
「それじゃ、うちら帰るね」「上原さんありがとう」
「僕も一緒に行くよ、バス停までだけど」
「そんじゃ、気をつけて帰れよ」
「サトユミさん、サトアヤさん、また明日ね」
「また明日ね」「またね」
三人がエレベーター乗った
愛里の部屋に入って　ドア閉めて
「愛里」
ギュッて　ギュッて　したかったーーー
「ありがとう」
「ん？　抱っこ？」
「じゃなくて」
「そんじゃなに？」
「森下家総出で、サトユミさんたちを、もてなしてくれて」
「ったりめえだろ、愛里の友だちなんだからさ」
「サトユミさんから LINE が来たとき、ちょっと迷っちゃって」
「なにを？」
「この部屋に入れていいのかなって」
あ　そういえば　かあちゃんに電話して聞いたっつったな
「おかあさんに聞いたら、そんなことわざわざ聞かなくていいのよって言ってくれて」
「そりゃそうだろ、友だち来んのをいちいちかあちゃんにさ」
「私には使命があるから」
「使命？　なに？」
「この部屋を、おかあさんが若かった頃の空気で満たすっていうおかあさんの夢」
え・・
「満たせてるのかわかんないけど、少なくても乱してはいけないなって」
愛里・・
「でも、サトユミさんたちはそういう人じゃないなって思ってて」
「あ、うん」
「二人ともサッパリしてて、でも優しくて、人の噂話とかあまりしないし」
「俺の知恵熱は？」

愛里が　あっ！ て顔で俺のこと見上げて
「あれは・・　噂じゃなくて、なんていうか、そういうときの対処法を・・」
「いいよ、俺は愛里がアメリカ行くとかアメリカ行っちまうと知恵熱出すからさ」
「当分は・・行かないから」
「うん」
愛里の　くちびるに　甘え匂いが・・
「なんか・・」
愛里が身体離して
「ヨーグルト？」
ヨーグルト？
「じゃなくて、なんだろう、甘酸っぱいような・・」
俺のキス？
「今まで嗅いだことがない匂いが」
今まで嗅いだことがねえ？
「俺の匂いはいっつも嗅いでっだろ」
「それとは別に」
別に？ なんだ？
「ちょっと」
愛里が俺のシャツに顔近づけて
「あれ？　　なんかここ、お腹の左の・・」
腹の左？　なんだ？　シャツにはなんもついてねえけど　んっと　ペロッと裾めくって
「アーーーーッ」
「な、なんですか？」
「ついてる」
「なにが？」
「優大くんのウンコ」
「エーーーーッ」
「うっすら、おっかしいな、このシャツは・・」
あれ？　　まさか・・
作業用のカバンから赤Ｔ出して　みたら
「愛里、こっちについてた」
「えええっ　なんで気がつかなかったの？」
「ベッタリっつうわけじゃなくてさ、そんでもなんで監督や奥さんも言ってくんねえかな」
「そのＴシャツが煤けていろいろなシミだらけだから」
へ？
「気がつかなかったんだと思う、なんかいっぱいついてるから、擬態？」
「擬態？　　擬態っつうのはちげえだろ」
「今度から赤ちゃんの世話をするときは白Ｔで行った方がいいと思う」
「や、今日は掃除だけっつう依頼だったからさ」

「でも、おかあさんが」
かあちゃん？
「赤ちゃんの世話をすることになると思うって」
「なんで？」
「奥さんがいないと監督さんがパニクッて、男二人でオタオタするって」
「オタオターーー？　なんだよそれ？」
「私も想像したんです、私とおかあさんが赤ちゃんの世話を・・　ムリですよね」
あ・・
「今ムリって思いましたよね」
「あ・・　ちっと」
「いいんです、ムリですから」
「俺もさ、ハヤトくれえの子どもの世話ならできんだけどさ」
「そうですね、ハヤトくんは懐いてましたよね」
「赤ちゃんは初めてだったからさ」
「私は永遠に赤ちゃんは触れないと思う」
永遠？
「もし、もし・・　落としたりしたら・・　あぁぁぁっ」
「あ、愛里、触らせねえから、生むだけでいいから」
「生む？」
「あ、や、んっと、そうだ、愛里はプリン食う？」
「私もお腹いっぱいです」
「そっか、そんじゃ持って帰る」
「荷物いっぱいですね」
「こんくれえなんともねえよ」
「プリンの袋、持ちましょうか？」
「俺ん家来る？」
「いえ、玄関まで」
「なんで？」
「シャワーしたいし」
そっか　俺もシャワーしねえとな　優大くんのウンコついてんだもんな
「そんじゃ、またあとでな」
「はい」
鍋持って　作業用カバン持ってプリン持って
愛里の部屋のドア閉めた

9月30日

家のドア開けて
「ただいま」
「ダイチ」
とうちゃんがキッチンから出てきた
「おかえり」
つって　俺の手から鍋受け取って
「プリン、食わなかったんか」
「みんな腹いっぺえだっつってさ」
「そっか」
「とうちゃんとかあちゃん食ってよ」
「ダイチは食ったんか？」
「俺は食ってねえけど、とうちゃんのカレーいっぺえ食って腹がさ」
「ダイチにはちっと甘かったか」
え・・　や・・
「小せえ頃はよ、ハチミツ入れてよ、甘っま〜くしたのが好きだったな」
「うん」
とうちゃん　俺　今日　とうちゃんとおんなし味のカレー作れたよ
「今日のも美味かったよ」
「そっか」
とうちゃんが嬉しそうな顔して鍋持ってキッチンに入ってった
シャワー浴びねえと
「とうちゃん、かあちゃん風呂入った？」
「もう入って、寝てっからよ」
「そっか、そんじゃ俺入ってくる」
「おう」
だよな　昨日退院してきたばっかでさ　明日マジで会社行くんかな
行くよな　俺やとうちゃんがなに言っても行くよ

シャワー終わって
キッチンに
「とうちゃん、風呂入ってきなよ」
「おう、ダイチ、明日のアイリちゃんの弁当のおかずなんだけどよ」
「明日の？」

「どうすんのかわかんねえから、いちおうな、食材は買ってきたんだけどよ」
あ！
「とうちゃん、明日は愛里は弁当いらねえんだよ」
「休みか？」
「じゃねえんだけどさ、友だちと学食で食うってさ」
「学食・・　ヒトミがよく、なんかあの学校のか」
「うん」
「そんじゃダイチもか」
「俺は・・　テキトーになんか食うよ」
「アイリちゃんと、なんかあったんか？」
「なんもねえよ」
俺が熱出したときの予行練習なんつったら　とうちゃん心配するよな
「たまに女の子だけで学食で食ってみてえんだってさ」
「そっか、そういうのもしてみてえんだろうな」
「うん、今日来てた子たちだからさ」
「そんじゃダイチも安心だな」
「うん」
「ダイチは握りメシ持ってくか？」
「とうちゃんの握りメシ食いてえ」
「そんじゃ作っからよ」
「うん」
水飲みてえな　グラス出して
「ダイチの冬服出してあっからよ」
「冬服？」
「明日っから冬服なんだろ？」
「え？　あ！」
そうだよ　明日は 10 月 1 日だよ
なんかバッタバタしてて日付感覚バグッてたな
「プリンどうっすかな」
とうちゃんがプリンの箱を冷蔵庫に入れて
「せっかく持ってきてくれてよ」
「とうちゃんとかあちゃんで食ってよ」
「そんでも美里は今夜はもう起きてこねえと思うからよ」
「だよな・・　あ、そうだ、明日の弁当に一緒に入れりゃいんじゃね？」
「明日は握りメシと肉団子と・・んっと、そん中にか？」
プッチンするやつだと思ってんだな
「弁当袋ん中にさ」
見せりゃいいのか
「こういうのだからさ、このまんま入れりゃいんじゃね」
「そっか、こういんならな、ダイチは今食うか」

「俺もまだ腹いっぺえだからさ」
「そんじゃダイチも明日の弁当に持ってきゃいんじゃねえか？」
「え？　あ、そっか、そんでも・・」
あと2個あるな　愛里に・・つっても佐藤たちと学食だもんな
あ・・れ？　監督・・　食ってねえんじゃね？　3個入りって監督用だったんじゃね？
「とうちゃん、明日残りの3個、監督に持ってくよ」
「監督？」
「明日の昼は監督室に行って監督と食う」
まだ監督にはなんも言ってねえけど
「そっか、監督と昼メシ食うんか」
「そんときプリン持ってくよ」
俺の分はって子どもみてえに言ってたもんな
「監督と一緒に食うんならな」
んっと、この3個入りの箱、畳んじっまったけど、これを直して入れればいいな
5個入りの中から3個取って入れ直して　冷蔵庫・・と
「監督んとこでユウくんの世話したんか」
「世話っつうか、俺はちこっと手伝ったくれえでさ」
「大っきくなってんだろうな」
「前んときよか大きくなってた」
「赤ちゃんはな、すっぐ大っきくなっからよ」
「とうちゃん、俺さ・・」
今日　心のどっかでずっとなんか・・
「赤ちゃん育てられっかな」
「へ？　ダ、ダイチ、あの、んっと、アイリ・・ちゃん・・」
腹んとこで膨らんだみてえに
「これか？」
「ち、ちげえよ、そういうことしてねえよ」
「あ・・　そっか、そんならな」
「監督んとこでさ、俺、アタフタしちまって、どうすりゃいぃんかよくわかんなくて」
なんつうか
「自分がやってっことがいいのかどうなんかわかんねえままでさ」
「ダイチはいっつもがんばってんじゃねえか」
「そんでもさ、掃除や洗濯や料理とか、現場の仕事とかでさ、こんなん思ったことなくて」
なんかメッチャ弱音吐いてんな俺
「そんときになりゃなんとかなっからよ」
「そんでもとうちゃんは、21？　んな若けえときに一人でねえちゃん育ててさ」
「俺は・・　必死こいてやってただけでよ」
必死こいて？
「なんもわかんねえからよ、どうやったんかも憶えてなくてよ」
そんでも

「優大くんの世話はちゃんとできてたじゃん」
「ヒトミとダイチ育てたからよ、なんつうんだ？　ここじゃなくてよ」
頭じゃねえってこと？
「気ぃつくと身体が動いてるっつうかな」
身体・・か
「んな心配すんなよ、ダイチとアイリちゃんの赤ちゃん生まれてよ」
「えぇぇ、とうちゃ〜ん」
気早えよぉ　ニマニマしちまうけどさぁ
「そんとき、もしまだ俺が生きてたらよ」
もし・・って　まだって
「とうちゃんは生きてるよ、俺がじいちゃんになっても生きててくれっつったじゃん」
「ダイチがじいちゃんになるまでっつったら、俺はすっげえじいちゃんで動けっかな」
「動けなかったら俺がとうちゃんのオムツ取っ換えっから」
「ダイチが換えてくれんのか」
「おう」
「そんじゃ安心してじいちゃんになっかな」
「とうちゃん頼むからさ、とうちゃんが生きてねえとか、そういう」
「ダ、ダイチ」
とうちゃんが　俺のこと抱きしめて
「俺・・　そういうの・・　考えんのイヤなんだからさ」
「そっか、そっか」
「泣いちまったじゃねえかよぉ」
「とうちゃんが悪かったな、とうちゃんが悪かった」
俺は・・　涙止まんなくて・・　この涙が・・　いろんなこと詰まってんのはわかってて
とうちゃんのことや・・　今日の仕事で感じた不安や・・　かあちゃんの入院・・
なんか俺・・　いっぱいいっぱいになってた・・　んなこと思ってなかったのに・・
「とうちゃん」
とうちゃんの腕ん中で
「俺さ・・　今日・・　監督んとこでカレー作ってさ」
「そっか」
「奥さんが甘口で監督が辛口っつうから、甘口寄りの中辛・・　それがさ」
とうちゃん　その味がさ
「今日とうちゃんが作ってくれた味とおんなしだった」
「そっか、おんなしか」
「とうちゃんの味・・　作れたよ」
「そっか」
とうちゃんが　俺の頭撫でてくれて
「そっか」
とうちゃんの　そっかは　優しくて
「また抱っこされて泣いてるの？」

「かっ　かあちゃん？」「美里、起きちまったんか？」
「喉が渇いて水を飲みに来ただけ」
「炭酸ミネラルウォーター？」
「お願い」
とうちゃんが冷蔵庫開けて　俺は　かあちゃんに顔見られねえように鼻水手で拭いて
「カズオ」
かあちゃんが水のボトル受け取りながら
「まだお風呂入ってないの？」
「今、今入っから」
とうちゃんが俺のこと　ちっと心配そうな顔で見た
「とうちゃん、入ってきなよ」
「そっか？　　そんじゃ入ってくっからよ」
とうちゃんがキッチン出てった
「かあちゃん、グラスいる？」
「出して」
「おう」
「今日、愛里さんが部屋にお友だちを入れていいかって、わざわざ電話してきたの」
ああ　あれか
「あんたからも愛里さんに言っておいてよ、あの部屋は愛里さんの部屋だから自由にしてって」
「愛里は・・　使命があるっつってた」
「使命？　　なにそれ？」
「あの部屋を、かあちゃんが若けえ頃の空気で満たすっていうかあちゃんの夢」
「え・・」
「満たせてっかどうかはわかんねえけど、乱したくはねえからって」
かあちゃんは黙って水飲んでて
「今日来た友だちはそういう人たちじゃねえからさ」
「私はね・・」
かあちゃんの声が少しかすれて　ンッて咳払いして
「人を見る目はあるのよ」
「うん、わかってる」
「あんた、赤ちゃんの世話をしたの？」
「世話っつうか、監督が世話してんのを」
必死こいて・・だな
「必死こいて手伝っただけでさ」
「私には無理だわ、絶対無理」
「かあちゃんには誰もやらせねえよ」
「もしも将来あんたの子どもが生まれても」
え？
「私は子守りできないからね」

「あ・・うん・・え・・と」
「せいぜい学費の援助ができるくらい貯蓄しておくわよ」
え・・
「それじゃ、おやすみ」
「あ・・　お、おやすみなさい」
んな・・　かあちゃん　俺の子どもの学費の・・　んなこと考えてくれて・・
「まだまだあんたとヒトミの学費があるからそれどころじゃないけどね」
あ　顔だけ出して
「お世話になってます」
「子どもってお金かかるわね、まだまだ死ねないわ」
「かあちゃん！　死ぬとか言うなよ！」
「死ぬと思う？　この私が」
「え・・」
「いずれは死ぬだろうけど、死ぬときは私が決めるわよ」
かあちゃんなら・・　できそうだな
「それじゃ」
「あ、うん、おやすみなさい」
そっか　子どもの俺が言うのもなんだけど　子ども育てるには金がかかるよな
俺は　なんか　今日は　うっすらとだけ　現実を見せてもらったんかもしんねえ
憧れや夢や希望だけじゃなくて　必死になって育てて金稼いで
そのためには・・　そのためには・・んっと
勉強しよう

おっし　やった　メッチャ集中して勉強した
あんま遠く見ねえで　今やれることきっちりやるとスッキリすんな
愛里はシャワー終わったかな
『愛里』送信
ピコン
『はい』
俺は　なんか　愛里に本音言いたくて
『俺はさっき泣いちまいました w』送信
『とうちゃんに抱っこされて w 情けねーー www』
なんで泣いたんかっつうのは　なんつっていいんかな
ピコン
『泣きたいときってありますよね』
愛里
ピコン
『私はいつもあなたに抱っこされて泣いてるけど』
ピコン
『あなたの涙にも理由があって』

え・・
ピコン
『いろんなこと考えていっぱい考えて』
ピコン
『溢れちゃったんですね』
愛里・・　俺また泣いちまうからさ
ピコン
『前にあなたが私に言ってくれたことをそのまま言っただけですけど w』
『俺はただの泣き虫っす w』送信
ピコン
『あなたはいつも私を守ろうとしてくれて守ってくれて』
ピコン
『自分のことは』
ピコン
『なんて言えばいいのかわかんないけど』
ピコン
『ありがとう』
愛里　俺はさ
『愛里がそばにいてくれるだけでしあわせだから』送信
『マジで』送信
ピコン
『ちょっとどうなのかなって思うことがあって』
どうなのかな？
『なに？ どした？』送信
ピコン
『サトユミさんたちが私とあなたを』
ピコン
『長年連れ添った夫婦みたいって』
言った言った言った　夫婦みてえってさ
ピコン
『それって』
ピコン
『私とあなたは新鮮味がないっていうことなのかなって』
新鮮味？
ピコン
『倦怠感とかそういう空気があるのかなって』
倦怠感？
『俺は倦怠感なんて感じてねえよ』送信
『愛里は？』送信
ピコン

『私は感じてないけど』
ピコン
『あなたはあたりまえみたいに抱っこしたりハムハムするから』
あたりまえ？
ピコン
『もうそういうのがあたりまえみたいなカンジなのかなとか』
愛里　俺はさ
『あたりめえじゃねえよ』送信
『あたりめえみてえに愛里のこと抱きしめて愛里にキスしてえだけでさ』送信
『愛里のこと抱きしめると』送信
『いっつもドキドキする』送信
『愛里にキスするといっつも』送信
あれは・・　言えねえけど
『クラックラしてる』送信
ピコン
『ドキドキ？』
『うんドキドキ』送信
ピコン
『クラックラ？』
『うんクラックラ』送信
『愛里と手ぇつなぐときも　今もドキドキしてる』送信
ピコン
『今も？』
『うん』送信
そんでも　ひとつ　ひとつ最初んときと違うことが
『そんでさ』送信
『今はドキドキだけじゃなくて』送信
『メッチャ安心する』送信
『愛里がそばにいるって』送信
あ・・れ？　　既読ついてっけど　返信が・・　ねえ
『愛里？』送信
あれ？　　既読はつくんだけどな
『愛里　どした？』送信
ピコン
『よかった』
よかった？　・・つうのは？
ピコン
『あなたに飽きられちゃってるのかなって』
ハァァァァアア？
ピコン

『もうドキドキしなくなっちゃったのかなって』
愛里ぃぃ
『愛里　俺　自信ある』送信
『俺はぜってえ一生愛里にドキドキしてる』送信
『とうちゃんがかあちゃんに今もドキドキしてるみてえに』送信
『俺はじいちゃんになっても愛里にドキドキする自信ある』送信
ピコン
『あなたがおじいさんになったときって』
ピコン
『私もおばあさんてことですよね』
『うん』送信
ピコン
『えぇぇぇ　おばあさんにドキドキとか』
ピコン
『それはないと思う』
『そんじゃ賭けっか？』送信
ピコン
『賭けるって？』
『俺がじいちゃんで愛里がばあちゃんで』送信
『そんときも俺がドキドキしてたら』送信
『愛里からキスしてくれよ』送信
こんなん書いてるだけでドキドキしてんだけどぉお
ピコン
『ドキドキしなかったら？』
そんときは
『俺は墓ん中にいるってことだよ』送信
ピコン
『お墓の中ってことは死んでるってこと？』
『死んだときじゃねえと俺の心臓は止まんねえからさ』送信
ピコン
『ウソつき！』
や　愛里マジでさ
『ウソじゃねえよマジで』送信
ピコン
『私より長生きするって』
ピコン
『一秒でも後に死ぬって言ったでしょ』
あ・・　そういうことか
『そんじゃ愛里が生きてる間は俺はずーーっとドキドキしてっから』送信
ピコン

『なんかバカバカしいこと言い合ってて笑う www』
愛里から言い出したんじゃん　おもしれえなあ
ピコン
『明日のお昼あなたが監督と食べるって言ってて』
ピコン
『安心しました』
あんときとっさに言っただけなんだけどさ
『男二人で昼メシ食うよ w』送信
監督知らねえんだけどさ　プリン持って行ってみよう
ピコン
『明日から 10 月とか信じられない』
俺はとうちゃんに言われるまで気ぃつかなかったよ
ピコン
『サトユミさんたちが明日から冬服だよねって言って』
ピコン
『エーーッて思って』
ピコン
『そういうのはいつもママがやってくれてたから』
ピコン
『さっきあわててクローゼットの中から冬服出しました』
ピコン
『あなたはちゃんと知ってましたよね』
俺はさ
『白状します』送信
『さっきとうちゃんに言われるまで忘れてました』送信
ピコン
『あなたが？』
『とうちゃんが冬服出してくれてた w』送信
『情けねえっす w』送信
ピコン
『あなたもなんだと思うと』
ピコン
『ちょっと安心しました w』
『安心しねえ方がいいよ』送信
『俺けっこうヌケてっから w』送信
ピコン
『あなたのヌケてるレベルと私のは違うから w』
ヌケてるレベルってさ
ピコン
『それじゃ　おやすみなさい』

『愛里　おやすみ』送信
9 月が終わる
なんかいろいろあって　いろいろ
メッチャ濃かったな
寝よう

衣替えと卵焼き

ん・・アラ・・ム　あ　今朝は弁当作んねえからまだ起きなくても・・
ダメだ　二度寝したら寝坊する
顔洗って　制服　冬服になったな　着て　おっしゃ
キッチン入って
「とうちゃん、おはよう」
「ダイチ、おはよう」
「かあちゃんの弁当作ったの？」
「袋ん中にプリンも入れたからよ」
そっか　やっぱ会社行くんだな
「こっちのはダイチ」
え？　　弁当箱？
「ていしたもんは入ってねえけどよ、監督と昼メシ食うなら弁当の方がよ」
「とうちゃん・・」
「たまにはとうちゃんにもダイチの弁当作らしてくれよ」
「ありがとう」
月曜の朝から感激してるよ俺
あ、んっと・・　冷蔵庫から３個入りプリンの箱出して袋に入れて・・と
「ダイチ、握りメシ食ってけ」
「うん、ありがとう」
「白メシどうすっかな、まだ残ってんな」
そっか　愛里の分も炊いたんだもんな
「握りメシにして冷凍すっか」
愛里の分・・　あ！　　そうだ
「とうちゃん、俺が愛里の握りメシ作るよ」
「そんでもアイリちゃんはあれだろ？　　学校の、そこで食うんだろ？」
「愛里の朝メシ」
「そっか、昼はダイチの弁当食えねえもんな」
朝だけでも　愛里に俺の食って欲しいっつう俺の勝手な願いなんだけど
愛里の好きな梅とおかかの小せえ握りメシラップに包んで
そんで　もうひとつでっけえ握リメシ作って
「これ、とうちゃんの昼メシ」
「俺の？」
とうちゃんは　いっつも俺がとうちゃんになんかあげると

「ありがとな」
宝もらったみてえに嬉しそうな顔になったから　ちっと泣きそうになる
「そんじゃ、とうちゃん、いってきます」
「ダイチ、いってらっしゃい」
家の玄関飛び出して　愛里の部屋に走った

愛里の部屋のドアが開いて
「愛里、おはよう」
え？　なんで？　後ろに下がってってんだけど
「愛里？　どした？」
「え・・　なんか・・　初期に見たモリシタダイチが立ってるから」
初期に見た？
「あの頃も・・　そのブレザー着てました」
「愛里もそのブレザー着てたよな」
「なんだか・・　感覚があの頃に戻っちゃって」
「え？」
「つき合う前の」
「んなとこに戻んねえでくれよ」
「だって」
「愛里」
抱きよせて
「つき合ってんじゃん、今は」
「そう・・ですね」
「俺は愛里のカレシだよ」
俺の背中にまわしてた愛里の手が　ギュッて俺を
「顔を見ないと・・　そうだなって」
「なんでだよ、顔見てくれよぉ」
「だって」
「愛里ぃぃ」
愛里の顔　覗き込んだら
「あ、そのタコの口見たらあなただなって」
「タコの口で俺だなってさ」
「その手提げは？」
「これは監督に持ってくプリンと、とうちゃんが俺に弁当作ってくれた」
「えぇぇぇ、いいなあ」
「へ？　愛里は今日は佐藤たちと学食じゃねえの？」
「そうだけど、本音は、あなたのお弁当が食べたいです」
愛里ぃぃ
「そんじゃ、せめて朝は俺の握りメシ食ってくれよ」
「作ってくれたの？」

「やっぱ俺も愛里に俺が作ったメシ食ってほしいからさ」
袋から出して愛里に手渡すと
「嬉しい」
つって　そのまんまダイニングテーブルんとこ行って
「美味しい」
「目玉焼き作っか？」
「ううん、このおむすびとイチゴヨーグルトだけでいい」
「そっか」
「ゆうべ言い忘れたんだけど、サトアヤさんからLINEが来てて、
　お姉さんがカレーを食べて、なにこれメチャ美味しいんだけどって言ってたって」
「そっか」
「あなたにお礼言っておいてって」
「今日会うじゃん」
「早く伝えたかったんだと思う」
「そっか、ありがとな」
「ゆうべのおとうさんのカレー、あなたのみたいな味がして」
愛里　昨日もそう言ってたな
「あなたのはいつもは、あなたの家のみたいにもう少し辛いのに、なんでかな」
愛里が　気づいてくれて　そんだけで俺は
「なんでだろうな」
メッチャ嬉しいよ
「ごちそうさま」
「おう」
「歯を磨いてきます」
俺は　イチゴ載ってた器と紅茶入ってたマグカップ洗って
愛里と一緒に部屋を出た

学校までの道　愛里と手ぇつないで歩いて
「あの、やっぱり・・」
ゆうべの　あのことか
「ドキドキしてるよ」
「え？」
「俺は今メッチャドキドキしてる」
「えっと・・　聞こうとしたのはそれじゃなくて」
「へ？」
「おかあさんは・・　やっぱり仕事に」
「あ、ああ、い、行ったんじゃねえかな」
なんか俺
「とうちゃん弁当作ってたからさ」
メッチャ恥ずいじゃーーーん

「そうですか」
「おう」
なんだ　この　　沈黙
「ドキドキしてるんだ」
え？
「フッ」
「愛里、なんで笑うの？」
「なんか・・　フッフフッ」
「なんだよぉ、笑うなよぉ」
「だって、ハハハ」
「ドキドキすんじゃん」
愛里の手ぇ　ギュッて
「命賭けて惚れた人の手ぇにぎってんだからさ」
「だからあ、ハハハそういう言い方が」
「マジだから俺」
「え・・」
「マジで一生ドキドキすっから」
愛里が　俺の顔　チラッと横目で見上げて
「そうですか」
スンとしちまったけど？
「愛里？　　マジでさ」
「わかりました」
なんかすげえ冷てえカンジなんだけど？
「え、あ、あの、愛里？」
「私もですから」
「え？ あ？ なに？」
「なんでもないです」
「愛里もって、なに？」
「校門です」
「え？　　あ、うん」
手ぇ離して
「ドキドキタイムの終わりです」
「ドキドキタイム？」
「いちいち聞き直さないで」
「あ、うん」
愛里が　俺の顔見上げて
「吐きそう」
「えっ？　　は、吐きそう？　　愛里、どした？」
「な、くらいですから私は」
なくらい？

「愛里、なくらいっつうのは？」
「行きましょう」
「愛里、吐きそうって」
「いいから行きましょう」
「あ、おう」
愛里と二人で　校舎ん中に入っていった

教室ん中はみんな冬服で　やっぱ夏終わったんだな　とっくにだけどさ
「森下くん、上原さん、おはよう」「上原さん、森下くん、おはよう」
隣りの佐藤と窓際の佐藤
「おはよう」「おはよっす」
「昨日はありがとね」「ありがとう」
「え、それは」
愛里が俺のこと見たけど？
「愛里、なに？」
「サトユミさんとサトアヤさんがお礼を言ってます」
「愛里にだろ」
「森下家の全面サポートのもと」
「いいから、二人にだから」「そうだよ、軽く考えてよ」
「あ、うん、私も楽しかった」
「森下くんは？」
「俺？　　なに？」
「楽しかった？」
俺は・・
「愛里が楽しかったんなら、よかったよ」
「あ、そういう答えか」「そうなるよね」
「そうなるってなんだよ？」
「森下くんてさ、昭和のお父さんみたいなとこあるよね」「あるある」
昭和のお父さん？
「うちらの父親世代飛び越えて、もはやおじいちゃんの時代みたいなさ」
じ、じいちゃん？
「ザ・大黒柱っみたいな」
え？
「家族は俺が守る！ みたいなね」
それは・・
「あたりめえだろ、守るに決まってんだろ」
「ほら、そういうとこ」「うちのお父さんでも言わない」
愛里　え？　　メッチャ向こう向いて　なんか肩震えてねえか？　　吐きそうなんかな
「あ、チャイム鳴った」「席戻らないと」
俺もだな

「愛里」
こっち向いた愛里　くちびる噛んで　鼻でフフフフって　笑ってんの？　　え？
指で　後ろ？　　あ　席に着けってことか
なんで笑ってた？　　まああとで聞くか

おっしゃ 10 分休み　愛里んとこにって愛里・・教室出てっちまった　便所か
昼休みは一緒にいれねえから話したかったんだけどな　しゃあねえな便所だもんな
俺は便所行ってこよう

空いてんな
愛里　朝吐きそうっつってたけど大丈夫なんかな
吐きに便所行ったんか？　　どうなんだ？
授業中はふつうの顔して授業受けてたよな
「森下」
え？　　あっ　森山
「森下はもう決まった？」
決まった？
「なに？」
「グループ」
グループ？
「なんの？」
「自由行動の」
「自由行動？」
「来週から修学旅行だろ」
それか　それならもう決まってんだよ
「うちの学校は自由行動が緩くていいよな」
「え、ああ」
俺的にはなんなら去年から決まってっから
「グループもクラス関係なく組んでいいしさ」
愛里と二人
「森下には言っておかないと」
「あ？　　なに？」
「俺は応援タイムで一緒にやった仲間でまわるって約束しちゃってさ」
「へえ、そうなんか」
「なんかごめんな」
「なにが？」
「森下とも一緒にまわりたかったんだけどなあ」
ハァアアア？
なんで俺が森山としかもおんなしクラスになったこともねえし
「途中でどこかで会えればいいよな」

よなって　会えなくてもいいよ　むしろ会わねえ方がいいよっ
「あ、チャイム鳴った、それじゃ」
なんなんだ森山？
俺は森山を一生理解できる気がしねえ　してえとは思わねえけど
あ　ヤベ　教室戻らねえと

2時間目終了のチャイム鳴った
速攻で愛里んとこ行って
「愛里」
「あなたは監督室に行くんですよね」
「え？　　あ、まあ、うん」
「私は学食初体験に行ってきます」
は　はつ　たいけん
「愛里」
「はい」
「カレーはやめた方がいいぞ」
「え？」
「脂身ばっか浮かんでっから」
「え？」
「愛里は脂身ばっかのは嫌れえだろ」
「カレーは注文しないです」
「あとはさ」
「森下くん、うちらがちゃんと教えるから」「そんな心配しなくていいよ」
「え、あ、おう、そんじゃ、ちゃんと教えてあげてくれ」
「ほらあ、昭和のお父さん」「出たね」
出たって・・さ
「それじゃ、いってきます」
「おう」
佐藤たちと教室出ていく愛里を　見えなくなるまで目で追って
そんじゃ　俺も・・
監督室行くか　監督いるかな　いなくてもどっかで食えばいっか・・じゃねえよ
プリン届けねえと
ロッカーから　とうちゃんが作ってくれた弁当と監督へのプリン出して
校舎の西側に向かって　おとつい働いてたんだよな
今は解体の音も止んでる　昼休憩の時間だもんな
制服着てここ歩くと　なんか不思議な気になんな
監督室の前
扉開けて
「失礼します」
「え？　　森下？」

「これ」
プリンの袋　監督の方に差し出して
「持ってきたんすよ」
「プリン？」
「昨日、追加のプリン持ってきてもらっちまって」
「葵がさ、間違えたって落ち込んじゃってさ」
「奥さんが落ち込んだから、わざわざ持ってきてくれたんすか」
「解決策はそれしかないだろ」
「なんか逆にすいません」
「いいよ、葵にも届けてくれって言われたからさ」
「ごちそうさまっした」
「それで、なんでここにプリン持ってきたんだ？」
「監督の分すよ」
「わざわざ？」
「奥さんに、俺の分はって子どもみてえに言ってたじゃねえすか」
「子どもってさ、でもまあ、ありがとう」
なんだ？　　なんかここ・・　落ち着くな
「わざわざプリンのためにここに来たのか」
「や、なんつうか、監督と一緒に昼メシ食いてえなと思って」
「おいおい、気持ち悪いこと言うなよ」
「おとといも一緒に食ったじゃねえすか」
「まあな、そこ掛けていいよ」
「おいっす」
「お茶飲むか？」
「いいんすか？」
「ポットで持たされてるから」
「いただきます」
監督と向かい合って
とうちゃんの弁当　でっけえ握りメシと肉団子と卵焼きとブロッコリーとしめじ
かあちゃんの好きなものばっかだな　そんでもこのタコさんウィンナーは俺のためだな
「森下の弁当は自分で作ったの？」
「とうちゃんす」
「カズオさんが、美味しそうだな」
「とうちゃんのは美味えっすよ」
「俺のは・・　ほら、森下が作った唐揚げだよ」
「あ、そうっすよね」
「1 個食べるか？」
「自分で作ったもんは・・」
「なんだよ、その肉団子 1 個と交換してくれよ」
「え？　　ああ、いいっすよ」

監督のは　俺が作ったサラダと卵焼きとちくわを甘辛に炒めたやつか
優大くんの世話しながら、ヘタすりゃ弁当箱に詰めるだけでも大変だって
今の俺ならすげえわかる
「なに？　　他にも食べたいものがあるのか」
「え？　　あ、そんじゃ・・　卵焼き」
「森下のもくれよ」
「いいっすよ」
監督と卵焼き交換して
「俺はさ、こういう甘じょっぱい卵焼きが好きなんだよ」
「へ？　　そんでも奥さんのは塩味じゃねえっすか」
「そうなんだよな」
「奥さんに頼んだらいぃんじゃねえっすか？」
「葵も俺が甘じょっぱい方が好きなのは知ってる」
「え、そんじゃ・・なんで」
「朝食や夕食には出してくれるんだけどさ、弁当のは・・な」
「なんで・・なんすか？」
「この味は俺の母親の味」
え？
「葵は短大出てすぐに俺と結婚したから、最初は何もできなくてさ」
マジか？　　すげえ料理できっけどな
「泣いてたらしいんだよ、それをたまたま俺の母親が見て言ったんだってさ」
監督が　情けねえ顔になって
「あの変わり者の薫と結婚してくれただけでありがたいのよって」
「ハハハ」
「一生独り身で孤独な最期を迎えると思ってたんだからって」
監督のお母さんもおもしれえ人だったんだな
「葵はなぜか俺の母親に懐いちゃってさ」
きっと監督に似てたんかもしんねえな
「ひとつひとつ教わってできるようになって、最後に教わったのがこの卵焼き」
そうだったんか
「それから少ししして・・　俺の母親は入院しちゃったからさ」
「え・・」
「これはお母様の味だから、受け継いでいきたいなんて言ってさ」
受け継ぐ　なんか・・　あ　カレー　とうちゃんからしっかり受け継いでるって
「この前なんてさ、優大のお嫁さんにも受け継いで欲しいって、もう姑だよ」
「それは・・　受け継がねえとダメっすよ」
「おいおい、森下まで」
「親の味は・・　家の味っすから」
「葵と同じこと言うなよ」
「え？」

「これはこれで美味しいよ」
「そうっすよね、品がある味っすよ」
「タコさんウィンナーとちくわも交換しないか」
「え？　あ、いいっすよ」
ちくわも
「監督、ちくわの甘辛炒め美味えっす」
「そういう名前なの？　そう、伝えておくよ」
「おいっす」
「それで？　なんで俺と弁当食ってるの？　愛里さんと食わなくていいのか？」
「え・・　愛里は、今日は学食の使い方を知りてえって友だちと」
「森下と行かないのか」
「俺が熱出したりして欠席したとき、俺が心配しねえための練習だっつって」
「そんなことまで考えるの？」
「そういうときは安心して寝て、早く元気になって弁当作って欲しいからって」
「俺が高校生のときは、そんなこと考えもしなかったけどな」
「監督はカノジョいたんすか？」
「いたけどさ」
「えっ　いたんすか？」
「なんだよ、いたらおかしいか？」
「や、なんか、奥さん以外と監督って・・　考えらんねえから」
「そうかな」
「監督みてえな人と一緒にいるって・・　奥さんっきゃできねえっすよ」
「なんだよそれ」
「俺のかあちゃんととうちゃんも、それ以外は考えらんねえんすよ」
「森下のお母さんとは昨日マンションの前でちょっと会ったけど」
監督が俺の弁当箱からまた卵焼き取って
「よくまあこんな美男美女が出会ったなと思ったよ」
「そうすか」
「カズオさんの顔がさ、俺は父親の顔しか見たことなかったけど、
　昨日は男の顔になってたな」
男の顔？
「お互いを見るとき、惚れてますって目でさ、いたたまれなくて早々に帰ったよ」
「そうなんすよ、息子にしたら、ちょっと・・なんすけど、俺の目標っつうか」
「そうだろうな、命賭けてなんて、あれ見てなきゃそんなこと思いもしないよな」
「そうなんすよぉぉ」
「またデレデレしてるよ」
「そんなことねえんすけどねぇぇ」
「プリン食おう」
監督がプリンの箱開けて
「3 個も入ってるよ」

「3 個入りは監督用に買ったんだろうなって」
「森下は食べたのか」
「や、俺は食ってねえっす、とうちゃんとかあちゃんは今頃食ってんじゃねえかなって」
「それじゃ、ほら、森下も食べろよ」
「いいんすか？」
「葵の分はまだあるから、これは持って帰るよ」
「そんじゃ、いただきます」
「美味しいだろ」
「美味えっす」
「俺もここのは初めてだけどさ」
「なんすかそれ　ハハハ」
俺は今　監督とプリン食ってるよ　学校の昼休みにさ
なんか　昨日　優大くんのウンコと闘った同士みてえな感覚があんな
なんなんかな　監督としゃべってっと　すげえ楽なんだよな
教室にいるよかさ　ここにずっといてえなって
「そろそろ昼休み終わるんじゃないか？」
「あ、そうっすね」
「まったくさ、愛里さんがいないからって俺のところにさ」
「あ、まあ、そんだけじゃねえっすよ」
「それじゃ、また土曜日に」
「おいっす、失礼します」
監督室の扉開けると　なんか　なんつうか　またここことは違う世界に戻るみてえな
そんな気ぃしながら　校舎の方に歩いた

グループ決め

教室の扉開けたら
愛里が佐藤たちとしゃべってて　笑ってて
去年の今頃もこうやって　愛里の教室覗いて　愛里が友だちとしゃべってんの見てて
愛里が笑ってる顔見れてさ　メッチャ嬉しくてさ
え？　　こっち見た　誰かいんのか？　　後ろ振り返ったら・・　誰もいねえ
愛里の方見たら　ポカンとした顔で　あっ　俺か　俺のこと見たんか
すっかり去年の気分になっちまってた
「森下くん」「なんでそんなとこに立ってるの？」
「え、や」
まだ上原愛里に知られてねえ俺になってたな　今は違げえんだよ
今はこうやって堂々と愛里のそばに行けんだよ
「ちゃんと上原さんに学食の使い方教えたよ」
「そっか、ありがとな」
「教えるってほどのことじゃないけどね」
そんでも愛里には　なんつうか　大冒険つうかさ
「愛里、なに食ったの？」
「ラーメンです」
ラーメン？
「カレーは、あなたの忠告どおりスルーしました」
「そっか」
「日替わり定食はコロッケとメンチカツで、でもあなたが作ったのが、あ、えっと、
　親子丼もあなたの、えっと、だから消去法でラーメンを食べました」
愛里　俺の作ったのがってさ
「学校でラーメンはさすがにあなたでもムリだから、これもアリかなって」
「そっか、美味かった？」
「まあ、フツーのラーメン」
だよな　俺が食ったときもフッツーの味だったよ
「森下くん、学食で川口くんも一緒だったんだよ」「そうそう」
川口が？　　一緒に・・　学食？
「森下、違うよ、僕は一緒には食べなかったよ」
「食べ終わってうちらの横通ったから座ったらって、ね」「うん、誘ったの」
「僕は喜び勇んで座ったわけではないよ」
「森下くん、そんな怖い顔で川口くん見てたらかわいそうだよ」

「あ？　俺、怖え顔してっか？」
「してたよ、川口くん怯えてたじゃん」
「や、んなつもりねえけど」
「川口くんさあ」
川口が？　なに？
「あ、チャイム鳴っちゃった」
川口がなんだよ佐藤？
「森下くん、席戻らないと」
「あ、おう、愛里、そんじゃ、あとでな」
「はい」
つか　川口がなんなんだよ？

午後の授業終わって　帰りの学活
「今から修学旅行の注意事項と自由行動についてのプリントを渡す」
いよいよ来週だよ　修学旅行だよ　奈良京都だよ
来週の火曜日から金曜日　三泊四日　そのうちの二日は自由行動　自由だよ
ん・・と　自由行動のグループはクラス関係なく組める・・と　これは関係ねえな
そんで　単独行動は禁止で、2 人から 6 人まで　2 人　愛里と俺の二人
愛里と俺の　京都デート　うぉぉおおお
去年の今頃　二年生が修学旅行行ってるとき　俺はもう心に決めてた
来年はぜってえ上原愛里と二人でまわるって
あんときはまだ口もきいたことなかったけど
そんでも俺は　上原愛里と一緒にまわれねえなら修学旅行は行かねえって
そんくれえの覚悟決めたんだよ　ったりめえだろ　そんくれえじゃねえとさ
それが　それが実現するなんてさあああ
愛里と二人で京都の街を歩く・・って　どんなんかな
愛里はどこに行きてえのかな　愛里が行きてえとこなら俺はどこにでも連れてく
下調べしねえとな　俺が道間違えたら不安にさせちまうもんな
ぜってえ不安にはさせねえよ愛里
「今から明日の午後の特別クラスの時間までにグループを決めて」
もう決まってる　去年から決めてる
「行程表を作って木曜日まで提出すること」
あとは愛里がどこに行きてえかってだけだな
担任が教室出てった　途端　みんながあちこちに散らばって
俺も愛里んとこに速攻で
「愛里！」
走ってって
「俺と一緒にまわってください！」
あ・・　つい　つき合ってください！ みてえな言い方になっちまった
「え？　はい」

あたりめえみてえに　はい　ってさああ
俺の夢がこの瞬間　現実になったよーー！
「サトユミさんとサトアヤさんも一緒に」
「へ？」
「みんなでまわった方が楽しいよねって学食で話してて」
そ・・れは　愛里　それはさ
「森下くん、上原さん」「ワクワクするね」
佐藤と佐藤が来ちまったけど　そこはさ
俺と愛里の京都デートは？　　愛里　京都デートだぞ？
「あと、川口くんも」
「ハ？　　か、川口？」
愛里が俺のブレザーの袖引っ張って　顔近づけてきた・・けど
「川口くん」
すげえ小せえ声で
「学食で、誰と組むって話になったとき」
愛里・・　俺は今　川口の話聞いてる心の余裕ねえんだけど
「どうせ何人か余るからそこに入るって」
だったらそれでいぃんじゃねえかな
「それなら私たちと一緒にまわろうってサトユミさんとサトアヤさんが誘って」
なんで・・んなことさあ
「川口くん、ほらほらこっち！」
佐藤　これはリレーじゃねえんだよ　俺の去年からの夢でさ
「あの・・　どうしたんですか？」
「え？　　ど、どうしたって？」
「おでこ押さえて」
あ・・　つい
「頭が痛いの？　　熱？ 知恵熱？」
頭痛てえよ　熱出そうだよ
「や、なんも・・　ねえよ」
俺もかっこつけてねえでハッキリ愛里に言えよぉ
「川口くん、学食でうちらと組むって約束したよね」
学食で・・　とんでもねえ重要事項が決定されていた
俺は・・　んなこと知らねえで監督とノンキに卵焼き食ってたよ
「本当に僕が入っていいのかな」
川口・・　あ！　　いっそ川口と佐藤たちが三人で組めばいんじゃねえか？
「いいに決まってるじゃん」「イヤなら声かけないもん」
どうなんだ？　　それもありなんじゃね？
「恩情をかけてもらった僕が」
「恩情ってなによ？」「そうじゃないってば」
「僕が、こんなことを言うのは申し訳ないんだけど」

断わんのか？　川口やっぱ俺の気持ちを　いやいや佐藤たちとさ
「なになに？」「どうしたの？」
「できれば・・」
佐藤と佐藤と三人でまわりてえっつってくれ
「鈴木も入れてあげてくれないかな」
「鈴木くん？」「鈴木くんも？」
鈴木？
「鈴木ってだれだ？」
「ウソでしょ」「森下くん冗談だよね」
「マジでわかんねえんだけど」
「一緒に応援タイムで踊ったのに？」
応援タイム？
「森下くん言ってたじゃん、応援タイムのリーダーは虎之助だ！ って」
「ああ！　虎之助かよ」
「虎之助でインプットしちゃってるんだね」「そうだね」
「今、鈴木と話してて、鈴木も組む人がいないっていうから」
「鈴木くんならね」「一緒に練習したから親しみあるしね」
「いいの？　ありがとう」
なんなんだ・・　この・・　ザラメ数粒入れたら糸みてえなの出てきて止まんなくて
あっちゅう間にメッチャでっけえ綿アメになっちまったみてえな　この状況は
愛里　え？　愛里もニッコニコしてんだけど
俺と愛里の京都デートが　こんなんなってんだよ？
「来た来た」「いらっしゃい」
「俺まで入れてもらってありがとう」
「いいよ、多い方が楽しいじゃん」「だよね」
多くねえ方が楽しいこともあるんだよ　俺にはさ　俺と愛里にはさ

なんつうのかな
キラッキラで空みてえに青くきれいにでっかく広がってた俺と愛里の京都デートが
一瞬でしぼんだ風船みてえになっちまって　俺ん中ではなっちまってて
「二日あるじゃん、どこにする？」
「そうそう、森下くんどう思う？」
「あ・・？　なに・・？」
「学食で川口くんがさあ、テングを見たいって」
天狗でもカッパでも・・見に行きゃいいじゃん・・
「天狗を見たいんじゃないよ、森下、わかるよね、鞍馬山」
「え・・　ああ」
「僕はただ、鞍馬天狗で有名な鞍馬山近辺に行こうかと思うって言っただけでさ」
「山ってことは登山？」「登山はイヤだ」「私も・・登山は」
「違うよ、電車で行けるよ、ちょっと歩くところもあるけど」

「上原さんは？　どこか行きたいところある？」
「私は・・」
そうだ　そうだよ　愛里が行きてえとこ　せめてさ　愛里が不安にならねえようにさ
「神社とかお寺とか全然興味なくて」
「京都を巡るとなると、どこかには行くことになるけどね」
川口　愛里は興味ねえっつってんだろ
「京都に何があるのかもボワンとしか知らなくて」
「うちらも知らないから」「うん、念仏寺くらいしか思い浮かばないもん」
窓際の佐藤　念仏寺が浮かぶっつうのは　逆にすごくねえか？
「強いて言うなら・・」
うん　なに？
「和菓子が食べたい」
そっか　和菓子か　わかった　食わすよ　いっぺえ食わすからさ
「和菓子は・・　あちこちあるよねきっと」「あると思うよ」
「私は・・　それくらい」
それで充分だよ愛里　和菓子が食いてえっつう思いが知れて俺はよかったよ
「鈴木くんは？」
「俺は・・　入れてもらった身だからさ」
「そんなんじゃないから」「そうだよ、そういうのやめて」
「あ、うん、ありがとう」
虎之助は　このグループに入ってよかったんか？　気ぃ休まってねえんじゃね？
「それじゃあさ、明日までにそれぞれ調べて」
隣りの佐藤　グループを仕切ってんな　いいけどさ　全然いいんだけどさ
「まあだいたいここがいいかなっていうのを、明日の午後に決める？」
決まんのかな
「あっ！　森下くんの希望聞くの忘れた」
「俺はべつにどこでもいいよ」
「どこでもいいがいちばん困るんだよね」「あれだよね、夕飯なんでもいいみたいな？」
なんで俺は　佐藤と佐藤に責められてんだ？
「俺はっ　和菓子っ」
「え？」「え？」「え？」「え？」
「美味え和菓子があるとこだよ」
「ああ・・　だよね」「そうなるよね」
「そうなるってなんだよ？」
「ごめん、聞いた私が悪かった」
ハ？
「それじゃ、とにかく明日またってことで」
「そうだね」
「僕もいろいろ調べてみるよ」
「俺も・・　何かみんなの役に立つ情報を探してみる」

虎之助　このグループにいてしあわせか？
すげえ気ぃ使ってるよな

帰り道
校門出たから　愛里と手ぇつないで
京都でもさ　こうやって二人で手ぇつないで二人っきりでデートしたかったな
しゃあねえよ　もう決まっちまったんだから
「どうしたんですか？」
「え？ なに？」
「ため息ついたから」
「べつに・・　なんもねえよ」
「でも・・　元気ないですよね」
「んなこと」
あるけど
「ねえよ」
「もしかして・・　熱？」
「熱はねえよ、マジで」
「だって、子どもって遠足の前とか楽しみ過ぎて熱出すって、知恵熱」
子どもってさ　楽しみ過ぎてって・・
「熱なんか出してねえよ」
むしろ冷えっ冷えの気分でさ
「ほんとに？」
「ほれ」
愛里の方におでこ突き出して
「え・・　それじゃ」
愛里の手が　俺のおでこ　いつもなら　ドキドキすんのに　なんか・・
「熱はないみたいですね」
「ねえよ」
「それじゃ、なんで？」
「なにが？」
「なんか、なんていうか・・　機嫌悪い？」
「え・・　や・・」
「機嫌悪いの？」
「ち、ちげえよ」
「どうして機嫌悪いの？」
「悪くねえって」
「だって、なんかヘン」
「ヘンじゃねえよ」
「ずっとムッツリしてて眉間にシワ寄せて」
「え？」

「なに？　なにがあったの？」
「なんもねえって」
「ウソ」
「ウソじゃねえよ」
俺は・・　なんか・・
「私には言えないこと？」
「じゃねえよ、なんもねえよ」
なんか・・イライラしてて
「いつものあなたと違う」
「違わねえよ」
「違う」
「俺だっていっつもヘラヘラ笑ってるわけじゃねえよ！　あ・・」
愛里が　怖えもんでも見たみてえに俺のこと見てて
「あ、愛里、ごめん、あのさ」
俺の手ぇ振り払って
「愛里、ごめん、俺、ちっとさ」
愛里？　走った
「愛里」
追っかけた・・ら　愛里がまた走った・・から　追っかけた
「愛里」
「あなたと一緒に帰りたくない」
「え、そんでも、おんなしマンションだからさ」
「それじゃ先に帰って」
「や、愛里置いて行けねえよ」
「だったら私が先に帰る」
愛里がまた走って　俺は・・
「追いかけてこないで」
「おんなしマンションだからさ」
「だったらもっと離れて！」
愛里・・
「愛里、ごめん、マジごめん」
愛里の背中に
「俺、んっとにさ、ごめんな」
愛里は振り向きもしねえ
「愛里・・」
愛里はなんも言わねえまま　俺も　なんつっていぃんか
黙って愛里の後ろ早歩きして
そんでマンション着いた
愛里がエレベーターのボタン連打して
エレベーターが着いて　そんで　愛里が乗り込んでボタン連打してて

「愛里」
俺も乗ろうとしたら　ドア閉まりそうになって手で押さえて
「愛里」
「エレベーターに一歩でも入ってきたら」
愛里が俺のこと睨んで
「二度と永遠に口きかない」
「えっ？」
「本気だから」
俺は・・　ドアから　手ぇ離して　すぐにドアが閉まって
愛里の怒った横顔も見えなくなって
俺は・・　なにやってんだよ
愛里に当たっちまってさ　いっちゃんやっちゃいけねえことしちまってさ
立ってらんなくて　その場に座り込んじまって　頭抱えて・・
俺の　カギみてえなわがままで　愛里のこと
「ダイチ！」
え
「どした？」
「と、とうちゃん」
「具合悪りぃんか？」
「や、ちげえよ」
立ち上がって
「大丈夫か？」
「あ・・　うん」
「アイリちゃんはいねえんか」
「愛里は・・　先帰った」
とうちゃんが俺の顔　なんかすげえ優しい目で俺の顔見て
「そっか」
なんか・・　俺・・
「美里がいつもよか早く帰ってくるっつうからよ、早めに買い出し行ってきた」
「そっか・・　俺が持つよ」
とうちゃんが持ってたスーパーの袋受け取って
「あんがとな」
エレベーターのドアが開いて
とうちゃんと乗り込んで
とうちゃんは　片手で　俺の背中　撫でて　すげえ優しく撫でて
俺は・・　涙・・出てきて・・止まんなくて・・
「とう・・ちゃ・・ん」
とうちゃんは　俺の肩抱いて
「とうちゃんはここにいっからよ」
そう言って　俺の肩撫でて

「ここにいっから」
俺は・・　声あげて　泣いた

シャウト

とうちゃんと家に帰ってきて
俺は部屋に入って制服脱いで　いつもの服着て　キッチンに行った
「とうちゃん、手伝うよ」
「こっちはいいからよ、アイリちゃんとこ行かねえとよ」
え？
「アイリちゃんとなんかあったんだろ？」
「あ・・　うん、あの・・」
「そんじゃ仲直りしねえとな」
仲直り・・つうか
「アイリちゃんも早く仲直りしてえんじゃねえのか？」
「俺が・・　俺が悪りぃんだよ」
「そんじゃあやまんねえとな」
「謝ったけど・・　愛里は・・」
「大丈夫だよ、アイリちゃんはゆるしてくれっからよ」
「とうちゃん、俺・・　愛里にひでえことしちまったんだよ」
「な、なにしちまったんだ？」
「愛里に・・　当たっちまって」
「あたった・・つうのは？」
「愛里はなんも悪くねえのに、怒ったみてえに愛里に怒鳴っちまって」
「怒ったみてえに？」
「うん・・　愛里はなんも悪くねえのに、俺・・」
「そんじゃ・・　ダイチは泣きたかったんだな」
「え？」
「ほんとは泣きたかったんだろ？」
「え・・なん・・で」
「ねーちゃんがそうだったからよ」
かあちゃんが？
「俺はバカだから、しょっちゅうねーちゃんに叱られてたけどよ、
　ねーちゃんが、なんつうか、わけわかんねえみてえなこと言って怒って」
とうちゃんが・・　思い出すみてえに上の方見て
「俺に怒ったみてえに怒鳴ってよ、ねーちゃんごめんなごめんなっつうと、
　もっと怒って、そんで・・　泣きたかったんだなって、ほんとはよ、
　怒りてえくれえ悲しかったんだなって、ほんとはよ」

とう・・ちゃ・・ん
「ダイチも、すげえ悲しかったんだな」
「とう・・ちゃん」
とうちゃんの腕ん中に飛び込んで　俺　また泣いちまって
「そっか、ダイチは悲しかったんか」
とうちゃんが俺のこと　抱きしめて　背中　さすってくれて
「俺・・バカみてえなことだって・・わかってんだけどさ・・わかってっけど・・」
子どもみてえにしゃくりあげてっけど　止まんなくて
「一年のときから・・修学旅行は・・愛里と一緒にまわりてえって・・ずっと・・」
「そっか」
「愛里と二人でって・・そんでも・・他の友だちと・・昨日来た友だちと一緒に・・」
「ダイチは・・」
とうちゃんの声が　なんか少し暗くなって
「仲間はずれに・・されたんか？」
「俺も一緒だけど」
「そっか、そっか」
ホッとしたみてえな声に変わって
「愛里と二人っきりになれねえからって、俺・・一年ときからずっと・・
　愛里と二人っきりでって・・俺が勝手に思ってただけなんだけど・・」
「そっか」
「愛里はみんなと一緒にまわれんのが嬉しそうで・・だから・・」
「そっか」
「んなことで・・愛里に・・」
「そっか」
「そんで、なんか・・　ちっと・・」
とうちゃんが自分のシャツの裾引っ張って
「ダイチは小せえ頃よ」
俺の涙と鼻水ぬぐいながら
「公園で遊んでっと、よその子たちも寄ってきてよ、おじちゃん遊んでっつってよ」
そうだったな　とうちゃん人気だったよ
「みんなお母さんと来てっから、抱えてウワーッて回したりはできねえからよ、
　俺がダイチにやってんの見てやって欲しがってよ」
とうちゃん　みんなのこと回してたよな
「そんで俺が戻ってきたらよ、とうちゃんは俺のとうちゃんだよねってよ」
え？
「ベソかきながら、とうちゃんは俺のとうちゃんだよねって何回もよ」
俺は・・　なんか　全然成長してねえんだな
「とうちゃんはダイチのとうちゃんだ、ダイチだけのとうちゃんだって、
　そうすっと、やっとニコッとしてよ、可愛かったな」
「あんまみんながとうちゃんに懐くからさ、ヤキモチ焼いてたんだよ、俺」

「だから・・　なんつうんだ？　　アイリちゃんはダイチのカノジョだろ？」
「え？」
「みんなといてもよ、ダイチのカノジョでよ、ダイチはアイリちゃんのカレシだろ？」
とう・・ちゃん
「一年ときによ、とうちゃん俺運命の人見っけたってよ」
とうちゃんが　メッチャ優しい目で
「ウエハラアイリっつうんだよってよ」
俺・・
「それが、今じゃアイリちゃんこんなそばにいてよ、ダイチのそばにいるなんてよ」
なにやってんだよ
「よかったな」
ニッコリしてるとうちゃんに　俺・・
「とうちゃん、俺・・　愛里んとこに行ってくる」
「そっか」
「そんで、全部言ってくる、俺の、ガキみてえな、それ全部」
「そっか」
「とうちゃん、ありがとう」
「俺はなんもしてねえよ」
「とうちゃんは・・　俺のとうちゃんだよ」
「とうちゃんはダイチのとうちゃんだよ」
「そうだよな！」
俺は　玄関出て　走って　階段駆け下りて　愛里の部屋に向かった

ドアホン鳴らして
待ってっけど　全然出ねえ
もっかい鳴らして
いねえのかな　LINE してみっか
『愛里　今　愛里の部屋の前にいる』送信
『聞いてもらいてえことあってさ』送信
『愛里に謝りてえことあってさ』送信
『ちっとだけでも聞いてくんねえかな』送信
既読　ついた　けど　返信がねえ
『愛里　ドア開けてくんねえ？』送信
『ちっとだけでいいから話聞いて欲しい』送信
既読つくけど
『愛里　入っていいかな』送信
『愛里はなんも言わなくていいから』送信
『話だけでも聞いて欲しい』送信
ピコン　あ　来た
『勝手にどうぞ』

ピコン
『あなたはこの部屋の大家さんの息子ですから』
そうとう怒ってんな　だよな　そりゃ怒るよな
『そんじゃ入るよ　いい？』送信
ピコン
『ご勝手に』
ピコン
『私はベッドルームから出ませんけど』
マジか・・　そんでも
ケツポケットから鍵出して　開けて　ドア開けて
「愛里」
いねえ　やっぱベッドルームか
ベッドルームのドアの前に行って
「愛里」
返事は　ねえよな　ねえよ
「俺さ、ガキみてえな、つか、ガキでさ」
なんて言えば　つか　どっから
「愛里、ごめんな、本当にごめ　えっ？」
なんだこの大音量の　なんかの曲　なんで？
俺の話は聞きたくねえっつうこと？　愛里　んな・・
いや　俺は負けねえ　俺はぜってえに聞いてもらう！
「愛里！　俺は一年ときに！ まだ愛里とつき合ってもねえのに！」
こんな音量に俺は負けねえぞ
「二年になったら上原愛里と！ ぜってえ二人きりで修学旅行！ 自由行動！
　上原愛里と二人きりで！ 京都デートするって！ 一年ときからずっと決めてて！
　勝手に決めてて！ それが俺の夢で！ 一年間ずっとそう思ってて！」
あ！　音量上げた　いやいやいや　負けねえ　俺は負けねえよ
「だからー！ 佐藤たちも一緒にってー！ 川口もってー！ メッチャショーーック！」
どうだ　負けてねえよな
「そんでもー！ 愛里がー！ みんなと一緒がいいならー！ 俺もそれでいいよーー！
　だってさー！ みんなといてもー！ 愛里は俺のカノジョでー！ 俺は愛里のカレシだー！
　愛里と二人きりでとかー！ んなせこいこともう言わねえよー！」
ちょっと喉、もっと腹に力入れねえとな
「愛里がー！ みんなといてー！ しあわせなのがー！ 俺もしあわせだーーー！
　愛里がー！ 愛里が俺のカノジョでいてくれるだけでー！」
俺は・・　大切なこと忘れてたんだよ
「愛里がー！ いてくれっだけでー！ 俺はー！ しあわせなんだよー！」
え？　もっと音量上げた　なんかドアが振動で震えてねえか？
これよかもっと・・か　フーーーーッ　息吸って吐いて・・吸って
「愛里ーーーー！ 好きだーーーーーーーーーっ！」

あ・・　クラッとした
これは・・　完全拒絶されたっつう・・ことか
これ以上いたら　この大音量は　だよな
LINE しよう
『愛里　俺は家に戻るよ』送信
『晩メシ　とうちゃんと作って待ってっから』送信
『ここからは大家の息子としてです』送信
『このマンション防音しっかりしてるけど』送信
『あんまし大きいと多少漏れるから』送信
『近所から苦情来るかもしんねえから』送信
『俺が部屋出たら』送信
『音量下げてください』送信
『お願いします』送信
玄関に行って
『そんじゃ　ドア閉めるよ』送信
ドア閉めた　瞬間　音が止んだ
めげるな　めげるな俺　そんだけ俺は愛里のこと傷つけたんだよ
そんでもあきらめねえよ　あきらめられるわけねえじゃん
命懸けて惚れたんだよ　俺は愛里のこと
家戻って　とうちゃん手伝うか

家のドア開けた・・ら
「あら、ダイチ」
「かあちゃん、おかえり」
「ただいま、愛里さんは？」
「え・・　まだ」
「あんた、風邪ひいた？」
「なんで？」
「声がかすれてる」
それは・・
「シャウトしてきたから」
「シャウト？」
「音楽に合わせて」
「ハァアア？　バッカみたい」
俺はマジだよ　かあちゃん

キッチン入ったら　とうちゃんが玉ねぎを薄切りしてて
「ダイチ、どうだった？」
手を止めて　目ぇキラキラさせてっけど　とうちゃん
「会ってくんなかった」

「あ？」
「部屋ん中には入れたんだけどさ、ベッドルームに立てこもっててさ」
「たてこも？」
「出てこなくて、そんでも俺、ドアの前で話したんだけど」
「そっか、それは聞いてくれたんか」
「メッチャ大きな音で音楽流して」
とうちゃんが口開けて俺のこと見てっけど
「俺もそれに負けねえくれえ大きな声出してはみたんだけどさ」
「ハハハ」
へ？　とうちゃん？
「おもしれえな」
おもしれえ・・？
「ダイチ、つくね作ってくんねえか」
「いいけど、何作んの？」
「つくね親子丼食いてえって、美里がよ」
「そんじゃとうちゃんのつくねの方がいんじゃねえの？」
「美里がよ、汁は俺が作って、つくねはダイチが作れば、マジで親子丼だっつってよ」
なんだよそれ？　ダジャレかよ
「アイリちゃんもよ、ダイチが作ったつくね食いてえんじゃねえか？」
「そ・・っかな」
「俺も食いてえよ」
とうちゃん　慰めてくれてんだな
「わかった、作る」
愛里　愛里の好きなつくねこねてるよ　食ってもらえっかどうかわかんねえけど
食ってくれよ　半分はとうちゃんが作ってっからさ
つくね残しても玉子丼にはなっからさ
ん？　言わなきゃわかんねえんじゃね？　そうだよ、晩メシは基本とうちゃんだからさ
とうちゃんが作ったと思って食ってくれよ　愛里には俺のメシ食って欲しいよ

いつもの晩メシの時間になった　けど　愛里が来ねえ
「愛里さんどうしたのかしら？」
来ねえつもりなんかな
「ダイチ、迎えに行ったら？」
「俺？　俺・・は」
俺が迎えに行ったら　またあの大音量になっかもしんねえ
「そんじゃ、俺が迎えに行くからよ」
「なんでカズオが行くの？　ダイチ、行きなさいよ」
「あ・・　う・・ん」
「遅くなって・・　すみません」
愛里の声　来た　来てくれた

「愛里さん、大丈夫？　何かあったの？」
「え・・　ちょっと・・寝ちゃって」
「そうだったの、だったらよかったわ」
かあちゃんと愛里の声聞きながら
とうちゃんは卵と三つ葉入れて　俺は丼に白メシよそって
「今夜は親子丼よ」
「わあ、食べたかったんです」
「ベースはカズオで、つくねはダイチ」
かあっちゃっんっ
「まさに親子丼」
言っちまったよっ
「そう・・ですか」
愛里がメッチャトーンダウンしちまったよ

晩メシ食ってっけど
愛里は全然俺のことは見ねえ　覚悟してた　うん　覚悟はしてたからさ
「あら、愛里さん、つくね避けてるけど」
そっか・・　かあちゃんが俺が作ったって言っちまったからだな
「どこか具合が悪いの？」
「いえ、あの・・」
かあちゃんが　俺のこと見た　視線メッチャ感じる
「そうそう、来週は修学旅行ね」
そこ　いくかな　かあちゃん
「グループは決まったの？」
「え・・　はい」
「ヒトミのときはね、一度も話したことのない歴女に声をかけたんですって」
「れきじょ？　えっと・・　歴史が好きな」
「いわゆる歴史オタク」
「おねえさんは・・なぜ？」
「ヒトミは神社仏閣にはまったく興味ないし京都も全然知らなかったのよ、
　これは歴女と組めばなんとかしてくれるかもって思ったんですって」
「一度も話をしたことない・・人とですか？」
「一緒にまわろうって言ったら、ビーーックリした顔してたって、それはそうよね」
「それでも・・　組んだんですか？」
「そうなの、そして、その歴女さんが一日目に選んだのが鞍馬山」
「えっ？」　えっ？　川口とおんなし・・
「ヒトミは最初、天狗を見に行くの？ って、いるわけないじゃない？」
「でもそう思うのわかります」
なんか・・　愛里が柔らいできたっつうか
「清少納言の枕草子にも鞍馬山のことが出ていて、源氏物語の、光の君と若紫が出会う、

“北山のなにがし寺”って鞍馬寺の風景をリアルに描写したものなんですって」
「え？　あれって、そうだったんですか？」
「歴女さんが超初心者ヒトミに丁寧に教えてくれたそうなの」
「そういう人がいるといいですね」
「歴女って語りたがりらしいのよ、ヒトミはなんにもわからないでしょ、
ヘタなツアーガイドよりいろいろ知ってて楽しかったって」
「いいなあ、私はなんにもわからなくて」
「私もよ、何回か出張で行ったことがあるだけ」
「出張で京都に行くんですか？」
「支社があるからね、自由な時間もあるからちょっとだけまわったけど」
「どこがよかったですか？」
「高島屋」
「えっと？ それは？」
「デパート、東京にもある高島屋、あそこに入ったら、ああ私の世界って」
「フフッ」
「どうも私には侘び寂びは合わないわ」
「私もわからないです」
かあちゃんがいてくれてよかった　愛里がいつもの愛里らしくなっててさ
「侘び寂びなんてわからなくていいから、つくね食べたら？」
「え・・」
「どうして食べないの？」
かあちゃん　それは俺が悪りぃんだからさ
「え・・　自戒・・っていうか」
「自戒？」
なんで自戒・・　俺とつき合ったことを・・後悔・・　え・・
「自戒・・です」
「自分を戒めなくていいから、そんなこといいから、つくね食べなさい」
「え・・」
え？　愛里が涙ポロポロこぼしながら　かあちゃんのこと見てる
そんなに・・　俺は　愛里を傷つけたんか・・
「私が食べさせてあげましょうか？」
「フ・・フェェ・・」
愛里・・　泣いて・・
身体動きそうになって　なんとか食い止めた・・けど
「泣かなくていいのよ、泣いてもいいけど」
かあちゃんが愛里のこと抱きしめて
俺は・・　とんでもねえこと・・しちまった
なんか・・　ここにいるのが・・
空の丼片付けるふりして　席立って　キッチンに
どうすれば・・　いぃんかな　どうすれば・・

「ダイチ」
とうちゃん
「アイリちゃん、つくね食ってるよ」
「え？」
「よかったな」
そっか・・　つくね・・つくね食って・・・　そっか・・
涙と鼻水　手でぬぐって
丼洗った

初めて言えたこと

とうちゃんと俺は後片付けしてて
かあちゃんと愛里は　ベッドルームに入ってる
かあちゃん　愛里がなんかおかしいってわかったんだな　わかるよな
愛里　かあちゃんに言ってくれ　俺が愛里にすげえひでえことしたって
吐き出して欲しいよ　俺　どんな罰でも受ける　受けるから　だから・・
「ダイチ、明日はアイリちゃんの弁当作んだろ？」
「え・・あ・・ん」
作らせて・・もらえんのかな　俺が作った弁当・・　食ってくれっかな
「そんじゃいつもどおりで米研げばいいな」
「うん」
作ろう　突っ返されても　捨てられても　俺は・・
「カズオ」
かあちゃん
「愛里さんを送っていってあげて」
「お、俺？」
とうちゃんが俺の顔チラッと見た
つまりは・・　そういうことか
「私はダイチに話があるの」
やっぱり・・そっか
「おう、そんじゃ、アイリちゃん、送ってくからよ」
愛里がコクンて　鼻と目が真っ赤だ　泣いてたんだな
とうちゃんと愛里が家から出てって
「ダイチ、こっちに来て」
かあちゃんがリビングに　俺も後ろついてって
かあちゃんはソファに座って　俺は向かい側の床に座って
なんか・・なんつうか　判決を下されるみてえな気分で
「愛里さんの小学校や中学校のときの話、聞いた？」
「え？　　あ、んっと、附属の学校だって」
「そうじゃなくて、遠足や修学旅行の話」
「ん・・と、聞いたことねえ・・と思う」
なんか頭ボヤッとしてきて
「愛里さんは極度の人見知りでしょ、自分から声をかけるなんてできないし」
「あ・・うん」

「だからグループを作るときは、いつもポツンとしてたんですって」
え・・
「結局いつも最後に、余った人たちと組んでたって」
余った・・　愛里が
「その人たちともお互い話をしたことがないから、いつも無言でまわって終わり」
そうだったんか
「それがこの修学旅行のグループ決めでは、好きなお友だちから声をかけてもらって」
あ・・
「知ってる子たちばかりで、行く前から盛り上がって、すごく嬉しかったんですって」
俺・・　俺・・　んなこと全然考えねえで　愛里の気持ち　なんも考えてねえで
俺の身勝手な　独りよがりの思いばっかで　愛里のこと　傷つけた
俺は　なにやってんだよ　愛里のこと好きっつって愛里の気持ちひとっつも
「愛里さんね、あんたにひどいことを言っちゃったって」
「え？　や、ちげえよ、かあちゃん、俺が愛里に」
「聞きなさい」
「あ・・　うん」
「あんた、愛里さんのベッドルームの前で叫んだんですって？」
「え？」
愛里が言ったんか
「愛里さんが音量を上げても上げても負けじと叫んでたって、ハハハ」
笑ってっけど　俺は真剣にさ　そんでも愛里には迷惑でっきゃなかったんだな
「どおりで声がかすれてたわけね」
かあちゃんに訴えるくれえだもんな
「あんたが、自分が出ていったあとは音量下げて欲しいって、そんなときに、
　大家の息子としてって、もう　ハハハハ」
「音漏れしたら・・苦情来るかも・・しんねえじゃん」
「愛里さんもどれだけ大音量にしたのかしら　ハハハハ」
かあちゃん・・　かあちゃんは笑えっかもしんねえけど　俺は　つか　愛里は
「愛里さん、聞いてたんですって」
「音楽？」
「ちがうわよ、あんたがドア越しで叫んでたこと」
え？
「聞いてるってわかられたくないから音量大きくしたんですって」
えっ？
「最後は泣いてるのを知られたくなくて爆音になっちゃったって」
泣い・・て？
「ドアに、こうやって耳を近づけてたって　ハハハハ」
ドア・・に？　ドア・・　ちっと震えてたのって・・　え・・
「愛里さん、あんたの言葉を全部聞いてたのよ」
全部・・　え？　全部？

「あんたが自分のことをそんなに、あんたが何を言ったのかは私は知らないけど、
　ずっとそこまで思ってくれていたことも知らないで、あんたの気持ちも考えないで」
それは・・　俺の方で
「自分だけ喜んでて、あんたに冷たくしちゃってって、泣いてたの」
んな・・　愛里　んなさ　んなことはさ
「つくねを食べなかったのは、そんな自分があんたのつくねを食べていいのかって、
　愛里さんたら、つくねごときを、ハハハ」
「かあちゃん」
立ち上がって
「俺、愛里んとこ行ってくる」
「こんな時間に叫ばないでよ」
「叫んでも聞いてもらいてえんだよ！」
リビングから走って玄関行って　ドア開けた・・ら
「ダイチ」
「とうちゃん」
「アイリちゃん、ちゃんと送ってきたからよ」
「俺、愛里んとこ行ってくっから」
「え？　あ、そっか、うん」
ダッシュで廊下走って　エレベーター下に行っちまった　階段だ

ドアホン鳴らして
出てください　お願いします　出てください
あ　鍵開いた
愛里が　下向いたまま　ドア開けて
「愛里」
愛里は　下向いたままで
「ごめん、本当にごめん」
ごめんな愛里　俺・・　あ　ヤベ涙　出すな　俺は泣いちゃダメだ
「愛里がさ、佐藤たちと組めて楽しそうにしてんのにさ、駄々っ子みてえにさ」
でっきるだけ明るく言おうとしてんのに　涙・・　出てくんなよ
「愛里、よかったな、愛里が喜んで愛里が嬉しいなら、俺もマジで嬉しい」
愛里が　驚いた顔で　涙流れた顔で　俺を
「強がりじゃねえよ？　本気でそう思ってっから、だってさ」
ヤベ　鼻水　ズッてすすって
「俺、愛里が好きだから、愛里がしあわせなら俺もマジでしあわせだから」
愛里が　顔　両手で押さえて
「愛里」
俺は　抱きしめて
俺の腕ん中で　愛里は　肩震わせて泣いてて
「俺は愛里がいてくれっだけでしあわせなんだよ」

「でも・・ヒック・・あな・・あなたは・・わた・・私と・・ふたりで・・」
「一年のときはな、愛里に片思いしてたときはな」
「でも・・ほん・・本当は・・」
「俺は、今は、愛里のカレシだろ？」
「え・・はい」
「愛里は俺のカノジョだろ？」
「は・・い」
「俺はマジで、俺のカノジョの愛里が、初めて仲いい友だちと組めるって喜んで」
愛里　俺は今マジで言ってんだよ
「俺、よかったって、マジでよかったって思ってんだよ」
「え・・エェェン・・ウワァァン」
愛里が俺の腕ん中で大泣きして　ごめんな　そんなことわかってなくて
「俺、一年のときの感覚のまんまだった、愛里に片思いしてたときのまんまで、
　愛里と一緒にいたくて、二人になりたくてって、バカだよな」
愛里のこと　もっとギュッと抱きしめて
「愛里はここにいんだよ、俺の腕ん中にさ、いっつもさ」
愛里が　涙で濡れた顔あげて　俺の顔見上げた目からはまだ涙流れてて
「一年の・・ときから？」
「うん」
「一年のときから・・ずっと・・私と？」
俺の顔は　きっと今　メッチャ情けねえ顔で
「うん」
「それじゃ・・私は・・一年のときから」
愛里がしゃくりあげて　必死にしゃべろうとしてて
「私と組みたいって・・　思ってくれる人がいたの？」
愛里
「いた、俺、ずーーっと思ってた」
「う・・れ・・しい」
愛里が俺の胸んとこに顔つけて　泣いてる
「いたよ、愛里、ずっと、愛里と一緒にぜってえ一緒に」
俺も　涙・・
「俺・・　愛里と一緒のグループになれた、夢叶った、愛里、俺の夢・・」
愛里の頭に　顔つけて
「叶ったよ、愛里」
愛里が　俺の腕ん中で首振って　え？
「ちが・・う・・　まだ・・」
「え？　　ま、まだ？」
愛里が　俺から身体離して　胸んとこさすって　なんかゆっくり　息吐いて
俺の顔　真っ直ぐに見た
「森下大一さん」

「え？　あ、はい」
「私と・・一緒に、自由行動、一緒に、まわってくれませんか？」
え・・
「私と・・　一緒に行こう、京都」
愛・・里・・
「言えた」
え・・？
「初めて・・」
愛里が涙で濡れた顔で　必死に笑おうとしてて
「一緒に組もうって・・いちばん、一緒に組みたい人に・・」
「愛里」
愛里のこと抱きしめて　俺はもう声出して泣いちまってて
愛里も　俺の腕ん中で　泣いてて
「愛里・・　ありがとう」
それだけ言うのが　やっとで　やっと・・で
ただ　愛里のこと抱きしめてることっきゃ　できなくて
「顔・・　見せて」
愛里
「やだよ、俺今ひっでえ顔してっから」
「え、見たい」
「愛里はさあ」
腕ゆるめて
「ほれ」
愛里が涙で濡れたきれいな顔で　俺のこと見て
「THE・モリシタダイチもかっこいいけど」
「だからそのザってなんだよ」
「ヨレッとしたＴシャツ着て汗いっぱいかいて埃だらけで働いて」
愛里の指が　俺の頬の涙スーッて拭きとって
「こうやって目と鼻真っ赤にして泣いてたり」
「んな真っ赤かよ」
愛里がフッて笑って
「私のそばにいるときのあなたが・・」
愛里が　なんか　あっみてえな顔した
「なんでもない」
「え、お、俺はなんでもねえ？」
「じゃなくて」
「そんじゃなに？」
「え、だから・・」
愛里が　俺から離れようとして
「好き・・って」

えっ
愛里の腕をつかんで　引き寄せて
「愛里」
くちびるに　あ・・すげえ・・なんか・・　え　愛里が・・両腕・・俺の・・首に・・
あ・・もう・・あ・・
「おわあああああああ」
ヤベエヤベエヤベエ　理性ゼロに　なり・・かけた
「なに？ やだ、なに？」
「え、あ、なんでもねえ」
「だって、なんかすごい声出してピョンて」
「え、んっと、あの、あ、ぼ、煩悩・・が」
「煩悩？」
「あ、ん、もう、もう大丈夫だから」
「前にもありましたよね、煩悩がどうのって」
「え、あ、うん、もう、うん」
「だったら・・　煩悩を消すお寺に行けばいいかも」
「へ？」
「京都で」
「や、それは・・さ」
「川口くんに調べてもらいましょうか」
「や、川口は、いいから」
「川口くん、なんかそういうの詳しそうだから」
「愛里、マジ、もう大丈夫だからさ」
「でも、煩悩って心臓ヤラレますよね」
「え？」
「あなたが前に煩悩まみれとか言ってたときに、なんだったっけ、私も心臓ヤラレて」
「し、心臓？」
「移るのかも」
「や、煩悩は移らねえ・・よ」
「そんなのわからないでしょ」
「煩悩は・・　個人のことだからさ」
「そうかなあ」
「愛里、あの、煩悩のことは、もういいからさ」
なんか　すげえ疑わしそうな目で見てっけど
「んっと、あ、そうだ、明日までに美味そうな和菓子あるとこ調べっから」
「和菓子より煩悩を・・」
「そっちはいいから、和菓子、食いてえんだろ？」
「そう・・ですけど」
「そんじゃ和菓子いっぺえ食おう」
「あなたは？　　何か見たいものとかないんですか？」

「俺はなんでもいい」
「なんでもいいって、せっかく京都に行くのに」
「愛里と京都に行って一緒にまわんのが俺の夢っつったじゃん」
「でも・・　いちおう何かは考えておかないと、明日みんなで話し合うから」
「あ、だな、うん、なんか、うん」
「それじゃ、私はそろそろ勉強してシャワー・・」
「おう、そんじゃ、またあとでな」
「はい」
「愛里」
「はい」
ダメだ　今抱きしめたら　また・・
「そんじゃ」
「はい」
ドア閉めて　フーーーーー・・
あんな涙と鼻水ダラッダラ垂らして　そんでおっ立てて　カッコ悪すぎんだろ
しゃあねえ　つか　そんでも好きってさ　愛里がさ　たまんねえよ
帰るか　帰って　勉強して和菓子か　だな

家に戻ったら
かあちゃんは風呂入ってて
とうちゃんは　キッチンで明日のかあちゃんの弁当の下ごしらえか
俺も明日の愛里の弁当の下ごしらえしよう
「ダイチ、アイリちゃんと仲直りしたんか」
「うん、した」
「そっか、よかったな」
「うん、とうちゃんのおかげだよ」
マジでさ
「俺はなんもしてねえよ」
とうちゃんが茹でた野菜を豚肉で巻いてる　明日は野菜の豚肉巻きか
俺は・・　つくねのタネ残しといたから　これで小せえ団子作って爪楊枝に刺してさ
あとは・・　卵焼き　俺の甘じょっぺえやつ　そんでタコさんウィンナーも
野菜は・・
「アイリちゃんによ、ダイチの小せえ頃の話してよ」
「小せえ頃？」
「とうちゃんは俺のとうちゃんだよねっつう」
「あ、そっか」
全然成長してねえと思ったろうな
「そしたらよ、アイリちゃん、ダイチは優しいってよ」
え？
「俺が他の子どもたちと遊ぶのガマンして見てたんだねってよ」

愛里
「アイリちゃんはダイチのことよくわかってんな」
「俺は・・　ただ、拗ねてばっかの駄々っ子だよ」
「んなことねえよ、ダイチは優しい子だよ」
とうちゃんが俺の頭クシャクシャッて
「とうちゃん、俺さ」
んなこと　とうちゃんにしか聞けねえよ
「理性がどんどん、なんつうか」
「りせい・・つうのは？」
「え、あの、おっ立ち具合がハンパねえっつうかさ」
「それは・・」
「いつまでもつかな？　そういうことぜってえしねえって決めてっけどさ」
「抜くっきゃねえな」
「それは・・まあ・・やってっけど」
「それっきゃねえよ、俺も若けえ頃は、なんつうか、抜いてばっかで」
「何を抜いたの？」
「みっ　み・・さと」「かっ　ちゃ・・ん」
「なに？　お風呂入ったら？」
「あ、うん、そ、そんじゃ、とうちゃん、俺」
「お、おう、風呂」
「うん」
ヤッベ　こういう話はやっぱ野っ原でするっきゃねえな
シャワーだシャワー
かあちゃん現れたらウソみてえにスッてしたけどさ
スッつうかシュンか　んなことどうでもいいよ　シャワーしよう

牛若餅

シャワー終わって　部屋戻って　勉強・・の前に和菓子だ
『京都　和菓子』
えっ　メッチャあんだけど　愛里はどんなんが食いてえんかな
やっぱきれいなやつか　んっと？
なんか　こんだけあっと　わけわかんなくなんな
俺が和菓子を探すって　和菓子なんてどら焼きと大福くれえっきゃ知らねえのにさ
どうする？　和菓子に詳しい人に聞く？　いんのかそんな人？
いる　かあちゃん
かあちゃんいろんな和菓子持って帰ってくるもんな
俺は何がなんだかわかんねえまま食ってるだけで　憶えてねえよ
かあちゃんに相談すっか
部屋出て　リビングに・・　いた
「かあちゃん」
「なによ？」
「愛里が京都で和菓子食いてえっつうんだけどさ」
「いいわねえ、京の和菓子、品があって好きよ」
「どこ行けばいぃんかな」
「どこって、いっぱいあるわよ」
「いっぺえあり過ぎてさ、なんかこれ・・　これとかかな」
「これは東京でも買える」
「え？」
「これも、これも、デパ地下で買えるわよ」
「えぇぇ・・」
「ほら、こっちのお店は通販もやってるでしょ」
「そんじゃ・・　どうすりゃいいの？」
「どうすればって、手っ取り早いのは京都駅の売店だけど」
「駅の・・売店」
「えっとね・・　そうそう、ヒトミが鞍馬山に行ったときにね」
また鞍馬山かよ
「牛若餅っていうのがあったんですって」
「牛若・・餅？」
「鞍馬山って、義経が牛若丸のときに修行した山でしょ」
「それは・・知ってっけど」

「そういう地元でしか食べられないものがいいんじゃない？」
地元でしか　だな　通販で買えるんじゃさ
「グループでどこを回るの？」
「まだ決まってねえけど」
「決まったら、その近辺を検索したら、そういうお店があると思うわよ」
近辺　そっか　回ったついでに食えれば　なんつうか思い出？　　だよな
「かあちゃん、ありがとう」
「愛里さんと仲直りしたのね」
「仲直りっつうか、俺が悪かったから」
「フッ　青春しちゃって」
「あ？」
「まあそうやって調べるのも旅行の楽しみのひとつだから」
「うん、がんばる」
がんばる・・つったものの
今俺が持っている情報は　鞍馬山の牛若餅だけだ
どんななんだ？
へえ　なんか素朴っつうか　栃餅で作られてるって　どんなかな
おんなし店で　いろいろあんのか　これは・・　ちんこもち・・じゃねえよ　しんこだよ
ねじってあんのか　なんかこっちの茶色いの　ウンコみてえだな
んなこと言っちゃいけねえ　きっと由緒ある餅なんだよ　こんだけ出てるってのはさ
そんで・・んっと・・　これは行き先決めねえとわかんねえな
まずは・・　先に勉強しねえと

おっし　和菓子に戻るか
戻るかっつっても　どこに戻ればいぃんだ？
ピコン　愛里　俺はまだ見つけられてねえんだよ
『まわる場所考えましたか？』
全然考えてねえんだよ愛里　牛若餅っきゃわかってねえんだよ
『まだだけど』送信
どうすっかな
『ひとつだけわかったのは』送信
『牛若餅っつうのがあるらしい』送信
ピコン
『どこに？』
『鞍馬山』送信
『かあちゃんがおしえてくれた』送信
『正直俺　和菓子全然わかんねえ』送信
ピコン
『エーーーッ和菓子に精通してる人だと思ったのに』
え？

ピコン
『ウソｗ　高校生男子で和菓子に精通してる人ってあまりいないと思うｗ』
なんだよぉ愛里　からかったんかよ　よかったあ
ピコン
『和菓子にこだわらなくていいです』
ピコン
『歩いてて美味しそうなのがあったらでいいです』
よかった　そっか　うん
『かあちゃんに和菓子のこと聞いたら』送信
『けっこう東京で買えるって通販でも買えるって』送信
『かあちゃんが言うには』なんつったかな　あ、そうだよ
『まわる場所決めてからその近辺探したらいいんじゃねえかって』送信
『地元じゃねえとと食えねえやつっつうかさ』送信
ピコン
『そういうカンジの方がいいです』
そっかそっか
ピコン
『おかあさんからおねえさんのときの話を聞いて』
ピコン
『鞍馬山を調べてみたら』
ピコン
『なんかいいカンジで』
ピコン
『鞍馬山もアリかなって』
マジ？
『鞍馬山なら牛若餅はあるよ』送信
ピコン
『メチャ牛若餅推しｗｗｗｗ』
『それっきゃ知らねえｗ』送信
ピコン
『それじゃ鞍馬山ってことで』
ピコン
『細かいことは川口くんにまかせればいいし』
『川口頼みかよｗ』送信
ピコン
『行こうと思うって言ってたから調べてると思うｗ』
だな　川口ならな
ピコン
『私はどうしてもここに行きたいっていうのがなくて』
ピコン

『ボワンと京都の街を見てみたいなっていうだけで』
京都の街
ピコン
『ちょっと調べたけどよくわかんない w』
愛里
『俺もだよ』送信
『俺は愛里が楽しいそうにして笑って喜んでたら』送信
『どこでもいい』送信
ピコン
『それじゃ京都じゃなくてもよくなっちゃう w』
うん　どこでもいいんだよ　愛里がいれば
『そっか w　ダメじゃん w』送信
ピコン
『明日はあなたのお弁当が食べられる』
『また踊んのかよ w』送信
ピコン
『大好きだから』
大好き　愛里・・好きっつってくれた　俺のこと
『楽しみにしててくだせえ w』送信
ピコン
『はい』
ピコン
『それじゃ　おやすみなさい』
『愛里』送信
愛里　好きだよ　頭おかしくなるくれえ好きだよ
『おやすみ』送信
修学旅行メッチャ楽しみになってきた
どこでもいいな　愛里と一緒だからさ

学校への道
昨日の帰りはここでとんでもねえことになったけど
今朝は穏やかで晴れ晴れした気持ちだ
「私、あれから調べたんですけど」
「どっか行きてえとこ見っかった？」
「じゃなくて、あなたの煩悩を消すお寺はないかなって」
えっ
「煩悩って、消すじゃなくて祓うっていうらしいんですけど」
「愛里、それはさ」
「108 個もあって、あなたのがどれなのかわかんないけど」
俺はわかってっから　それはもういいから

「増上寺の大きな門をくぐると煩悩を払うことができるらしいけど、
　増上寺って東京だから、あ、今度行ってみますか？」
「あ・・や・・」
「あんなに、オバケでも見たみたいに叫ぶって」
「愛里、俺の煩悩のことはもういいからさ」
「でも・・　あの・・　ハムハム・・したときに、あんなカンジで叫ばれると」
「あ、ごめん、も、もう叫ばねえ、マジで」
「あなたって、煩悩がどうのっていうとき、叫びますよね」
「だからもう叫ばねえからさ」
「前も・・いつだっけ・・　あ、私が Shin 様のカットを見てたとき」
愛里・・　頼むからもうほじくり返さねえでくんねえかな
「他にはどういうときに叫ぶんですか？　　おとうさんとおかあさんの前では？」
「叫ば・・ねえけど」
「えっ？　　私の前でだけ？」
「あ、愛里、あのさ」
「もしかして・・」
愛里が手で口押さえて下向いちまったけど　なんて言えばいいんだよ
「私に」
あ　顔あげた
「物の怪がついてますか？」
「あ？」
「見える・・とか？」
「愛里、愛里には物の怪憑いてねえから」
「でも私の前でだけって」
「んっとさ、んっと・・　あ　す、好きが溢れ過ぎっと」
「好きが・・　溢れすぎ？」
「叫びたくなるっっうか」
「えぇぇぇ、そういう愛情表現てどうなの？」
「やらねえ、もうやらねえ」
「それじゃ煩悩問題はどうするの？」
煩悩・・問題・・　それは
「んっとさ、人間の煩悩っつうのは一生無くならねえんだよ」
「え？ 一生？」
「一生」
「それじゃ・・　あなたは一生煩悩を抱えて生きていくの？」
「うん、抱えて生きてくんだろうな」
「え・・なんか・・　大変ですね」
愛里
「そんでもさ」
俺はさ

「俺のこの煩悩はさ、悪くねえ煩悩だから」
「煩悩にいいとか悪いとかあるの？」
「俺は、なんつうか、守っから」
「なにを？」
「愛里を」
「私？　　なにから？」
「俺の煩悩から」
「えっ　私と煩悩って関係あるの？」
「え、あ、や、なんつうか」
「やっぱり物の怪？」
「物の怪はいねえから、愛里に憑いてねえから」
「ほんと・・に？」
メッチャ疑わしそうな目で見てっけど
「俺が守る」
「物の怪から？」
「物の怪でも怪物でもなんでも」
「お願いします」
「おう」
俺は　なんつうか　戦隊ヒーローみてえな気分で
そんでも俺が戦う相手は　俺なんだよな
俺がヒーローで　俺が怪物か
や　ヒーローはぜってえ勝つ　だよな　とうちゃん

行き先の話し合い

10 分休み
愛里は　佐藤たちと教室出てった　便所か
「森下」
虎之助
「どした？」
「森下は行きたい場所決めた？」
「まあ、鞍馬山かな」
牛若餅があるかんな
「俺も一日目は鞍馬山がいいと思ってた」
「そっか」
「昨日帰りに川口と話したんだけどさ、川口、行程も細かく調べてて」
やっぱそっか
「あ、鞍馬山の駅のそばに、牛若餅っていうのがあるってさ」
それは知ってんだよ　それだけなんだけどさ
「それなら上原さんの希望も叶うんじゃないかな」
愛里のことも考えてくれてんのか
「おう、んで、虎之助はどこ行きてえの？」
「俺は・・　川口のついでに入れてもらったからさ」
ついで？
「みんなが行きたいところでいいよ」
「虎之助、その補欠根性はやめろ」
「え？」
「虎之助は俺たちと一緒に戦って来た仲間だろ」
「森下・・　ありがとう」
「そんで？　　虎之助はどこ行きてえんだよ」
「嵐山はどうかなと思ってる」
「なんかあんの？」
「竹林の小路とかさ、お寺はあまり興味ないって言ってたから、ひとつくらいにして、
　そこから渡月橋に行って、そこに桜餅で有名なお店があるらしいよ」
「秋なのに桜？」
「一年中売ってるんだってさ」
そうなんか
「ちょっといかにもってカンジだけど、いかにももいいかなって」

俺はいかにもすらわかってねえからさ
「そんじゃ午後の話し合い、ガンガンプレゼンしてくれよ」
「わかった、がんばるよ」
頼むよ　マジで　俺はなんもわかんねえんだよ

昼休み
弁当箱のフタ開けて
「わあ、つくね団子」
愛里の嬉しそうな顔見ただけしあわせっす
「私、少しわかりました」
「行きてえとこ？」
「じゃなくて、あなたが叫ぶ意味」
えっえっえーーーっ
「サトアヤさんの実家でゴールデンを飼っていたそうで」
「え、ご、ご」
「でもサトアヤさんが中三のときに死ん・・　すごく泣いたって」
「そ・・そっか」
「えっと、そこじゃなくて、そのベンちゃん」
「べん？」
「サトアヤさんのゴールデンの名前、ベンジャミンでベンちゃん」
「そ・・っか」
「サトアヤさんが小学校の林間学校から帰ってきたときとか」
愛里は・・　なんの話してんのかな
「ベンちゃんの大好物だけど、たまにしかあげないおやつをあげると、
　嬉しくて嬉し過ぎてクルクル回って、最後には遠吠えしちゃったそうです」
「遠吠え？　　嬉しくて遠吠え？」
「救急車が通ったときもしたらしいけど」
「あ、へえ、そう・・なんか」
「だから、あなたが、好きが溢れすぎて叫ぶのって」
え？
「そういうのなのかなって」
ん・・っと　俺のは　そういうんじゃねえんだけどな
「だったら、そうなのかなって、納得しました」
まあ・・　なんつうか、愛里がそれで収まったんなら　いっか　だな
「本能だから、しょうがないかなって」
本能　そこは　そのまんまだ
「サトアヤさんも、しょうがないよねって」
「えっ？　　佐藤に俺が叫ぶっつったの？」
「いえ、ただ、好きが溢れすぎて叫ぶってどういうことかなって聞いただけです」
ぜってえ俺のことだってわかっだろ

「そしたら、ベンちゃんの話をしてくれました」
そんでなんで犬の話に持ってくんだ？
「森下くんて犬系男子だもんねって」
やっぱ俺のことだってバレてんじゃん
え？　そんじゃ・・　佐藤ん中では俺は好きが溢れすぎて叫ぶヘンなヤツになってんのか
「サトユミさんが」
え？　隣りの佐藤もいんの？
「どういう状況で吠えるの？ って」
吠える・・　俺は犬扱いだな
「ハムハムのとき」
「えっ」
「とは言えなかったから」
「あ・・　そっか、うん」
「私が勝手に怒って部屋にこもって大音量で音楽かけたときって」
ん・・と　愛里　それは全然違う状況でさ
「森下くんの声は通るからねって」
ん？
「そういうことです」
「え、あ、うん」
どういうことだ？
「でも、よかったあ」
「ん？」
「私に物の怪が憑いてるわけじゃなくて」
「憑いてねえっつったじゃん」
「はい、あなたの本能だったんですね」
俺の・・　本能
「おう、本能」
「でも、あんまりうるさいと近所から苦情がくるかもしれないので」
「え？」
「音量は下げてください」
ん・・と？
「フッ　あなたに言われたから」
「愛里、あんときは・・　ごめん、マジごめんな」
「あなたは悪くないですから」
「そんでもさ」
「もういいから」
「あ、うん」
「それより、午後の、行き先、どうしよう」
「鞍馬山じゃねえの？」

「それは川口くんの案で、もちろん賛成するけど、二日あるから」
「あ、だよな」
「私、昨日動画サイト見たんだけど、見てるだけで行った気になっちゃって」
俺は見てもいねえな
「なんかもういいかなって」
「へ？」
「三年坂ってあるでしょ」
「あ、うん」
「すごーくきれいにライトアップされてる映像があって、いいなあと思ったら」
愛里が　メッチャ驚いたみてえな顔で俺のこと見て
「実際に行った人の動画では、渋谷のスクランブル交差点状態なの」
「ん・・と？」
「人がいーーっぱいで、なかなか前に進めない」
「そんななんか」
「京都まで言って渋谷のスクランブル交差点を味わいたくないです」
「ああ、うん、だよな」
「私は、サラ〜ッと京都の街ってどんなかなって見たいだけで」
「そっか」
「でも、サラッとなんてムリだから」
どうすりゃいぃんだ？　サラッと・・サラッと・・
「みんなが行くっていうところでいいです」
「マジで？」
「ゆうべあなたが言ったみたいに、その近辺の和菓子が食べられればそれでいいです」
「そっか」
「あなたは？　行きたいところ、鞍馬山の他には？」
「俺は・・」
愛里が行きてえとこならどこでもいぃんだけど
「あ！　まさか・・　三年坂だった？　私がディスっちゃったから」
「愛里、ちげえよ、三年坂とか頭になかった」
「ほんとに？」
「マジ」
「私、午後の話し合いのとき、黙ってた方がいいですね」
「なんで？」
「だって、もし誰かが三年坂に行きたいとか言ったら」
「愛里はそのまんま思ったこと言った方がいい」
「でも」
「三年坂でスクランブル交差点は誰も味わいたくねえよ」
「そう・・ですか？」
「俺はイヤだ」
「あ・・　だったらよかった」

「愛里は正直なまんまでいいよ」
「いいんでしょうか」
「それがいい」
「そう・・ですか」
愛里の手ぇにぎって
「愛里のまんまがいい」
「そうですか」
「おう」
俺は　愛里とならどこだっていい　スクランブル交差点でもいい
愛里と一緒に京都まわれるだけで　夢叶ったからさ

午後のグループごとの話し合い
佐藤と佐藤がチラチラ俺を見てる
俺は遠吠えはしねえんだよ　なんつうかさ　まあいいけどさ
つうか・・　誰もなんも言いださねえな　俺も人のこと言えねえけどさ
「森下くん」
「えっ、さ、佐藤、なに？」
俺は遠吠えしねえよ
「司会進行してよ」
「俺が？」
「他に誰がいるの？」
誰がって　あ　みんな下向いちまった
「んっと、そんじゃ、えーーっと、どこ行きてえ？」
沈黙　かよ
「佐藤は？」
「どっち？」「どっち？」
「両方」
「え・・　私は・・　三年坂とか・・」
愛里が目ん玉飛び出るくれえの顔してっけど
「行きたいってわけじゃなくて、それくらいしか聞いたことないだけでさ」
愛里が　静かにフゥゥゥッて息吐いてる
「あとは・・八坂神社かなあ」
「うちのお姉ちゃんが言ってたけど、八坂神社ってなんにもないって」
「マジ？　　えええ、あと浮かばないよ」
「私も三年坂とかしか・・　あとは嵐山とか渡月橋？」
嵐山？　　虎之助　言えよ　なんで言わねえんだよ　嵐山っつったじゃん
「虎之助、言えよ」
「え？」
「嵐山がいいっつってただろ」
「え？ なになに？　　鈴木くん考えてきてくれたの？」「嵐山をどうすればいいの？」

おお　佐藤と佐藤が乗ってきた
「俺が考えてきたのは・・　嵐山で、竹林の小路とか」
「ちくりんってなに？」「竹がいっぱいあるとこじゃない？」
佐藤が検索始めた
「これだ！　　これこれ」「すご〜い、きれいだね」
愛里も覗き込んでる
「そこからは天龍寺も近いし野宮神社もあるからさ」
「ののみや神社って何かあるの？」
「斎王が伊勢に向かう前に身を清めた場所」
「へえ、そうなんだ」
「源氏物語の賢木の巻にでも出てくるよ」
「え？」
愛里　どした？
「賢木の巻って・・　六条御息所が娘について伊勢に行こうとして」
「そうだよ、そのときの」
「サイテー」
「え？」「え？」「え？」「え？」　え？
「光の君は、もう好きでもないのに遠く離れると思うと未練タラタラになって」
「あ、そっち？」
「紫の上がいるのに、今度は藤壺ととか、そんなことしてるくせに朧月夜にって」
愛里ワールドだ　俺の好きな世界だよ
「上原さん、野宮神社はやめよう」
「え？　　私は賢木の巻が嫌いっていうだけで、光の君は基本嫌いだけど」
「そういうの連想させるところはやめない？」「そうだよね、私もそんなに興味ないし」
「だったら天龍寺は？」
「鈴木くん、ごめんね、私、そういうつもりじゃなかったの」
「いいんだよ、実は俺の一押しは天龍寺なんだ」
「あ・・　そうなの」
「庭園があって、庭園の中を歩いて見れるんだって」
愛里　どうだ？
「一年中その季節の花が見られるらしいよ」
愛里の目がキラッキラしてきた　決まりだな
「あとね、天龍寺には直営の精進料理の店があるんだよ」
「精進料理って、修行僧が食べたんだっけ？」
「えっとね」
窓際の佐藤が検索してる
「あ、これ、精進料理とは肉や魚などを使用しない料理です」
「ベジタリアン的な？」
「じゃなくて、仏教における戒律に基づき、殺生を避け、煩悩を刺激しないために・・」
「サトアヤさん、今なんて言った？」

愛里　なんかメッチャ食いついたな
「仏教における」
「そのあと」
「殺生を避け、煩悩を刺激しないために生まれたって」
え？　愛里が俺のことジッと見ながら
「行くべきだと思う」
「上原さん、精進料理好きなの？」
「好きとか嫌いじゃなくて、煩悩を・・」
愛里　確実に俺のあのあれを
「必要だと思う」
「必要？」「うちらに？」
愛里は俺に必要だっつってんだよ佐藤
「そうだね」
川口？　な、なんで？
「僕たちの年代はあまり馴染みがないから、経験するのもいいよね」
あ・・　そういうことか
「あ、そうか」「そういうの食べられるってなかなかないもんね」
「俺もそう思ったんだ、しかもここのは美味しそうなんだよ、ほら」
虎之助が　みんなに画像見せた
「わあ美味しそう」「いくらくらいするの？」
「えっとね・・　いちばん高いのは庭園参拝料 500 円は別で 9,000 円」
「えーーー、9,000 円はムリ」「参拝料も言えると 1 万 4,000 円・・　それはちょっと」
「俺のおススメはいちばん安いので、庭園参拝料は別で、3 千 800 円」
「参拝料と合わせると・・　4 千円 300 円・・てことだよね」
「こういう経験はなかなかできないと思うんだ、お寺直営の店で精進料理ってさ」
「4 千円 300 円で煩悩が消えるなら」
愛里　精進料理食っても消えるわけじゃねえんだよ
「絶対行くべきだと思う」
「上原さんがそこまで言うならね」「うん、私も食べてみたいし」
愛里が　かわいそうなものを見るっつうか　そういう目で俺を見てる
なんつうか　俺のためか　俺の煩悩の　食っても消えねえんだけど
「鈴木くん、ここに二日前までに予約って書いてるよ」
「もう予約はした」
「えっ？」「えっ？」「え？」　え？
「すぐに埋まるらしいから昨日」
「でも、もしうちらが行かないって言ったら？」
「キャンセルすればいいから、ドタキャンじゃないならキャンセル料もないから」
「すごーーーい！」
「俺は遠征のときにはいつもこういうことやってたから」
「そうなの？」

「店の予約は初めてだけど、お弁当の注文とか」
「鈴木くんがいてくれてよかったあ」
虎之助　すげえな
「それじゃ一日目は嵐山？」
「昨日、川口と話したんだけどさ」
虎之助が川口の方を見た
「あ、僕？」
「やだあ、なにボーッとしてるの？」
「鈴木のプレゼンが素晴らしくてさ」
「だよね」「たしかにわかりやすかった」
「僕は、あそこまでできる自信はないよ」
「自信とかいいから、どこ？」
「鞍馬山」
「テング？」「川口くんどんだけテング好きなの？」
「天狗は一回頭から削除してくれないかな」
「それじゃなに？」
「まずはこれを見て欲しいんだけど」
川口が　一人一人に　プリントアウトしてきたんかよ
「すごーい、地図まである」「なんかいっぱい名所的なものがあるんだけど」
「仁王門から九十九折参道を歩いてグルッと回って貴船神社に下りて来るコースがいいかなって」
「ねえ、ケーブルカーって書いてあるけど、ケーブルカーは使わないの？」
「どうせなら九十九折参道を生で観た方が行くかいがあると思う」
「まあ、そうだね」「歩くのはうちら平気だからね」
愛里大丈夫かな　もしもんときは俺がおんぶすっから
「ねえねえ、奥の院参道って、すごい雰囲気あるよ」「わあ、すごい根っこ」
「ここはけっこう見るところがあるし歩くから一日がかりになると思う」
「そうなんだ」「でも、これだけを一日で見れるならいいよね」
「鞍馬山を一日目にして、嵐山を二日目にしたらどうかって鈴木とさ」
「嵐山ならどうにでも調整できるからさ」
「すごーい、川口くんと鈴木くん案でカンペキだよね」「うん、上原さんはどう？」
「え？　　あ・・うん」
「上原さん、鞍馬山の駅の近くに牛若餅っていうのがあるから」
川口　牛若餅で愛里を納得させようとしてんな
「うん、私も鞍馬山でいいと思う、牛若餅関係なく」
餅で釣られたわけじゃねえって主張してんな
「森下は？」
「おう、いいと思う」
「それじゃ、次は移動手段なんだけどね」
あ　10 分休みのチャイム鳴った

「続きはあとで」
俺は　シッコ行きてえ

よかった　愛里の好きそうな寺もあってさ
精進料理・・　俺の煩悩のために・・　食っても消えねえけど
「森下」
「あっ　も、森山」
なんなんだ？　　俺と森山のシッコ頻度がおんなしなんか？
「行き先決まった？」
「あ、まあな」
「うちはさ、大原と」
「大原？」
「三千院とかあるところで、近くに、にしんそばが美味しい店があるらしいよ」
「へえ」
「にしんそばって京都発祥なんだってさ」
「そうなんか」
「あとは、一年坂・二年坂・三年坂で八坂神社」
「へえ」
よかった　一個もかすらねえ
「森下たちはどこに行くの？」
「ん・・　川口と虎之助が考えてくれた」
「虎之助？　　ああ、鈴木？」
「おう」
「どこ？」
「え・・　鞍馬山」
「鞍馬天狗の鞍馬山？」
「おう」
「すごいところ攻めるね」
「そっか？」
「どこかで森下と会えればいいんだけどな」
どっこもかすんねえから会えねえよ
「大原で何か欲しいものある？」
「べつにねえけど」
「しば漬けが有名らしいよ」
「へえ」
「森下の分も買ってくるよ」
「や、いいよ、んなさ」
「遠慮しなくていいよ、俺と森下の仲なんだからさ」
どういう仲なんだよ？
「それじゃ、またね」

なんかよくわかんねえけど　かすんねえでよかった

移動手段

教室戻ったら
愛里と佐藤たちが楽しそうにしゃべってて
川口と虎之助は資料見ながら真剣な顔で話してんな
「んっと、そんじゃ次は、何を決めりゃいぃんだ？」
「鞍馬山までの移動手段なんだけどね」
「バスとか電車じゃねえの？」
「京都駅から鞍馬山まで電車だとだいたい 1 時間弱かかるんだよ」
「そうなんか」
「できるだけ早い時間に行った方が空いてるからさ」
「そうだね」「混んでるのはイヤだよね」
「いっそタクシーはどうかなって」
「タクシー？」「修学旅行で？」
「タクシーだと 29 分で着くよ」
「いくらくらいかかるの？」
「片道 6,500 円」
「えーーー？」「そんなに？」
「一人 6,500 円ではないけどね」
「一人いくらってことになるの？」
「だいたい 1,084 円、1,100 円で考えてもらえばいいよ」
「1,100 円かぁ」「電車だといくら？」
「2 回乗り換えがあって片道 900 円くらい」
「そんなに・・変わりはないね」「そうだね」
「電車だと移動時間に時間が取られるし、乗り継ぎもうまくいけばいいけどさ」
「そっか」「タクシーに 6 人乗れる？　だいたい 4 人だよね」
「この会社の」
川口が資料を指さして
「ハイグレードワゴンなら 6 人乗れるから予約すればいいと思う」
「そこまで調べてるんだ」「だったらタクシーにしようよ」
「タクシーでいいなら、予約は僕がするよ」
「すごい、川口くんと鈴木くん、優秀過ぎ」「私、今のところ何もしてないよ」
俺も・・　なんもしてねえな
愛里が行きてえっつったところを徹底的に調べようと思ってたからさ
「次は嵐山なんだけど」

虎之助の番か
「ホテル近くの駅から嵐山駅まで、乗り換え一回で約 30 分、
　駅から天龍寺まで歩いて 20 分弱、バスだと 3 分」
虎之助　んな細けえことまで調べてきたんか
「20 分くらいなら歩けるよね」「バス待ってる時間がもったいないし」
「天龍寺の北門から竹林の小路でここは歩いて 10 分だけど、ゆっくり見た方がいいと思う」
「そうだよね、せっかくだからね」「竹林って生で見たことないもんね」
「そこから渡月橋までは 10 分くらいだから」
愛里が　一点見つめてボーッとしてんだけど
「上原さん、渡月橋の近くに美味しい桜餅の店があるよ」
「え、あ、うん・・　え？　　秋だけど」
「一年中売ってるんだってさ、創業 100 年の店だって」
「あ、そうなんだ」
愛里が　無表情になってんな

5 分休み入れて
「愛里、どした？　　疲れちまった？」
「疲れてないけど」
「なんかボーッとしてたからさ」
愛里が俺のジャケット引っ張って　耳元で
「なんか・・怖くなっちゃって」
怖くなった？
「いろんなことがすごくキッチリ決められていくから・・　ついていけるかどうか」
「俺がいんだろ」
「え？」
「俺がついてっからさ、愛里はなんも心配しねえでいいよ」
「あ・・　そうですね」
愛里が　すがるみてえな目で俺のこと見てさ　抱きしめてえええ

行き先と移動手段が決まって
行程表は川口と虎之助が書いて提出してくれるっつてことになった
「川口くんと鈴木くんがいなかったらどうなってたんだろう」
「だよね、私もそれ考えてゾッとした」
「上原さんを路頭に迷わすところだったよね」
「え？　　私？　　私は・・」
佐藤と佐藤は愛里を守るつもりだったんか　リレーんときみてえに
「でもね、上原さん、おみやげはうちらに任せて」
「えっ・・」
愛里　なんか怖えもんでも見た顔になってっけど　どした？

「部活の先輩に聞いてくるから」
「私はお姉ちゃんにも聞いてみる、3 年前だから情報古いけど」
愛里が下向いちまってんだけど
「嵐山駅のそばにはいろいろあったよ」
「鈴木くん、おみやげの店まで調べたの？」
「いや、その辺りはザッと見ただけ」
「それじゃ、うちらでもうちょっと具体的にピックアップしておくね」
「助かるよ」
なんかこっちでは盛り上がってっけど
「僕もおみやげのこと考えると今から気が重くてさ」
気が重い？
「俺も親戚多いからさ」
親戚？
「僕なんて母親からリスト渡されてるよ」
リスト？　なんの話になってんだ？
「森下くんはどういう店がいい？」
「え？　俺？」
「森下くんもおみやげ買わなきゃでしょ？」
「誰に？」
「え？　冗談だよね」
「マジで」
「親とか親戚には？」「友だちとかも」
「俺、親戚いねえし、友だちっつっても・・」
修学旅行みやげ待ってる友だちなんていねえだろ
「あとお餞別くれた人とか」
「餞別？」
「もらうじゃん、知り合いのおじさんとかおばさんとかさ」
「や、そういう知り合いは・・」
なんかみんな・・　すげえしがらみん中で生きてんだな　まだ高校生なのに大変だな
「あ！　うちらは部活の先輩と後輩にもだ」「だよね、去年は先輩すごかったもん」
すごかった？　つか、部活？
「修学旅行って、ある意味おみやげ地獄だよね」
地獄？
「うちの先輩なんて、現地で大きい手提げ買ったって」
どんだけ買ったんだよ？　仕入れみてえじゃん
つうか　みやげって　そんなに買うもんなんか？

帰り道
愛里と手ぇつないで
「愛里、行き先決まったな」

「は・・い」
あれ？　え？　愛里が　険しい顔で黙っちまった・・けど？
「愛里、どした？」
「え・・　サトユミさんたちの話を聞いてたら、ちょっとトラウマが」
「トラウマ？　なに？ どした？」
「おみやげの」
みやげ？
「中学の修学旅行のとき・・　ママが、ズラーーッと名前を書いた紙を持ってきて」
ズラーーッと？
「これが幼稚園のときからのお母様たちで、これはご近所のお家で」
マジ？
「このお嬢様には去年おみやげいただいたからとか、なんとかの先生にもとか」
「愛里の修学旅行・・だよな？」
「そうだけど、皆さんにおみやげ買ってきてねって言うんです」
そ・・れは
「何を買えばいいかわからないから、帰りの空港でキーホルダー山ほど買って、
　ママに見せたら、これだけ？ って、あわてて通販でマーライオンのチョコレート買って」
マーライオン？
「ママはそのチョコにキーホルダー貼って配ってました」
「愛里、愛里の中学の修学旅行って、どこ行ったの？」
「シンガポールです」
えっ　中学で　シンガポール!?
「現地の学校で交流って、ほぼほぼ交流なんてできないし、私は人見知りだから・・
　そこじゃなくて、日本で通販で買えるなら私に買ってきてねなんて頼まないでって
　おみやげのこと考えて旅行中ずーーっと気が重くて、なんにも楽しめなくて」
「そうだったんか」
「今回は、そういうことしなくていいからよかったけど」
「そんじゃ、愛里のお父さんとお母さんにだけ買えばいいな」
「なんかもうそれもめんどくさくて」
「そこはさ、アメリカにいんだからさ、なんつうの？　日本の味？」
「お茶の先生やお友だちが送ってくれるから」
「やっぱ愛里から欲しいんじゃねえか？」
「え？　そうですか？」
「そりゃ愛里からならさ、なんでも嬉しいんじゃね？」
「八ッ橋でも？」
「俺ならすげえ嬉しい」
「え？　八ッ橋？　好き？」
「好きっつうよかさ、これ買ってるとき、俺のこと考えてくれてたんだなって」
「あなたって」

「ん？ なに？」
「そういうところが・・」
そういうとこ？
「乙女ですよね」
「乙女ぇぇっ？」
「あ、ちがう、あなたが乙女なんじゃなくて、なんていうか・・　くすぐる？」
「くすぐる？」
「なんでもないです」
「愛里ぃぃ、なんだよぉぉ」
「あなたはどこに行ったんですか？」
「え？　　あ、俺は伊豆」
「伊豆？　　伊豆だとおみやげって・・　なに？」
「かあちゃんはなんもいらねえっつうし、とうちゃんもな、ねえちゃんはもうアメリカで」
「何も買わなかったの？」
「朝メシについてくるみかんが美味くてさ」
「ホテルの？」
「ホテルっつうか、旅館みてえなとこだったけどさ」
「みかんを買ってきたの？」
「買わなかったけど、帰る日の朝メシのみかん持って帰って、とうちゃんにあげた」
「え・・」
「甘えなあっつって喜んでた」
愛里が　メッチャ驚いたみてえな顔して俺のこと見てっけど
「え？　　愛里？」
「今・・」
「今？」
「原点を見た気がして」
「げ、原点？」
「おみやげって、本当はそういうことですよね」
「や、みやげっつうんじゃなくてさ、美味かったからとうちゃんにも食わせてえなって」
「そういうことでしょ？」
「あ？　　なに・・が？」
「その土地に行って、美味しいな、あの人に食べさせたいなって」
「あの人っつうか、とうちゃんにさ」
「私は、穢れてました」
「えっ？」
「なんか今つくづくそう思っちゃった」
「愛里は穢れてねえよ！　　ひとっ欠片も穢れてねえよ！」
「心が真っ黒でした」
「愛里」
「あ、ちょ・・道の真ん中で」

「愛里は真っ新だよ、すげえきれいだよ」
「抱っこやめて」
「愛里が穢れてるとか、そんなん言ったら世界中のみんなドロッドロの地獄ん中っつうかさ」
「地獄・・」
愛里がグイッて俺から身体離した
「私は、あの地獄から脱却できるように」
「あの地獄？」
「サトユミさんが言ってた地獄から」
隣りの佐藤？　なに言ってた？
「頭ん中をリセットしてみます」
「え？　あ？　なに？」
「あ、着きました」
「え？　あ、うん」
エレベターに乗って
愛里はなんか考えてて
エレベーターから下りて愛里の部屋へ
「愛里」
愛里が俺のこと見上げて
「なんだか・・　解放された気がする」
「え？」
「ちょっとだけ」
「んっと？」
愛里が　部屋の鍵開けて
「ありがとう」
「え？　なにが？」
「みかん」
「みかん？」
「それじゃ、あとで」
「愛里、みかん食いてえの？」
「みかんはあんまり好きじゃない」
だよな
「それじゃ」
「あ、おう」
ドア閉まった・・けど
ありがとうみかんて・・　なんだ？
んっと・・　俺も家帰んねえと

家のドア開けたら
「あ、かあちゃん、おかえり」

「ただいま、ダイチもおかえり」
「ただいま、かあちゃん早かったんだな」
「今週いっぱいは早めに上がることにしたの」
だよな　退院したばっかでさ
「ダイチ、おかえり」
「とうちゃん、ただいま」
「買い出し行くんだけどよ、ダイチも行くか？」
「行く、ちっと待ってて、着替えてくっから」
とうちゃんと買い出し　久しぶりだ

とうちゃんと二人でスーパーん中
「美里がよ、魚食いてえっつってよ」
「魚は・・　サバ高っけえ、あ、とうちゃん、アジが安いよ、あとタコも」
「そんじゃ・・　タコ飯にすっか」
「とうちゃんのタコ飯食いてえ」
「そっか？　　そんじゃ、あとは・・　アジの塩焼きか？」
「安いからさ、いっぺえ買って、明日の弁当にもさ」
「だな、あとはねえか」
「スダチ買わねえと、かあちゃん焼き魚にはスダチっつうからさ」
「あ、そっか、だな」
スダチは・・　あっちか
スダチに柚子も出てきてんな　あっちの果物コーナーに　みかん
ありがとうみかん・・て　なんだ？
「ダイチ、みかん食いてえんか？」
「や、そうじゃねえけど」
「中学の修学旅行んとき、みかん持ってきてくれたな」
「とうちゃん、憶えてんの？」
「憶えてんに決まってんだろ、あんな美味えみかん食ったことねえよ」
「そこまでじゃねえけどさ」
「ダイチがよ、わざわざ持ってきてくれてよ、嬉しかったな」
「美味かったから、とうちゃんにも食わせたくてさ」
「あんときもそう言ってよ、俺は世界一しあわせなとうちゃんだなってよ」
「んなさあ、旅館のみかんだよ」
「世界一美味かった」
とうちゃん　俺は　そう言ってくれるとうちゃんがいて　世界一しあわせな息子だよ
「アイリちゃんにみかん買いてえんか？」
「や、愛里にはイチゴだけ買う、とうちゃんは？　　たまにみかん食う？」
「ダイチのみかん食ったら、他のは食えねえよ」
「俺が作ったわけじゃねえんだからさ」
「あれ以上美味えみかんなんてねえよ」

とうちゃん・・
「ダイチ、どした？」
「あ、や、イチゴ」
「このいっちゃん高けえやつな」
「うん」
「前のやつの底んとこにあんのがよ、萎びてきちまっててよ」
「そんじゃ、俺は明日の俺の弁当に持ってって食うよ」
俺ととうちゃんは　萎びたイチゴ食ってるとしあわせなんだよ
だってさ　とうちゃんはかあちゃんのために　俺は愛里のために
自分で稼いだ金でイチゴ買えてさ　それ食ってもらえんだからさ
「そんじゃ帰っか」
「おう」
そんでも・・　ありがとうみかんて・・　なんだ？

お地蔵様

愛里とかあちゃんがタコ飯食ってる
「美味しい」
愛里が嬉しそうな顔してさ
「この生姜がいいのよね」
「そうですよね」
とうちゃん　よかったなタコ飯にしてさ
「おねえさんは・・」
「ヒトミ？」
「修学旅行のおみやげは何を買ってきたんですか？」
「何も買ってこないわよ、私がいらないって言ったの」
「え？　　なにも？」
「だって修学旅行は学生が見知らぬ土地でいろいろなものを見て、食べて、
　経験して楽しまなきゃ、おみやげのことなんか考えてたら楽しくないでしょ」
「そうなんです、そうです」
愛里が泣きそうな顔してかあちゃんの腕にしがみついた
やっぱすげえトラウマになってたんだな　シンガポールのマーライオン・・じゃねえか
「でも、ダイチには何か買ってきたわよね」
「ああ、地蔵の置物もらった」
「地蔵・・　お地蔵さん？　　なんで？」
「なんか知んねえけど、阿弥陀如来が来るまで守ってもらいなっつってさ」
「え？　　守って・・　どういう・・」
「ヒトミなりにダイチのことを心配したんじゃない？」
「そんなに・・心配な状態だったんですか？」
「や、愛里、俺はべつになんもさ」
「あの頃はヒトミが悩んでたときだったから」
「おねえさんが？」
「高校を卒業したらすぐにアメリカの大学に行くか日本の大学に行くか」
「高校二年生で・・」
「もしも自分がアメリカに行ったらって、身代わり地蔵？」
「身代わり・・　そんな思いが込められて」
「ちげえよ、俺が、地蔵かよ？ つったらメッチャ笑っててさ」
「ヒトミはそういう子だから」
「おねえさんは照れ屋さんのところがありますよね」

照れ屋？　いやいやいや　愛里　ねえちゃんは俺にはさ
「大事にしなさい、ヒトミの身代わり」
「持ってっけどさ」
「あるんですか？」
「俺の机の脇の本棚んとこ」
「大事にしてるんですね」
「大事にっつうか、ねえちゃんからなんかもらったことねえからさ」
「それじゃますます大切なお地蔵さんですね」
「え・・」
愛里に　んなこと言われたら
「うん」
なんか大切なもんに思えてくっけど
「愛里さんも、おみやげのことなんて考えずに楽しんでくればいいのよ」
「いいんでしょうか」
「それが修学旅行よ」
「はい」
「お父様とお母様は何かおっしゃってる？」
「ママは・・　森下さんのお宅へのおみやげはちゃんと買ってねって」
んなこと言われてたんか
「いらないわよ」
「でも・・　お世話になってて」
「そう思うなら、何も買わないでいっぱい楽しんできてちょうだい」
「え・・」
愛里が半べそになってかあちゃんのこと見てるよ
「ダイチのマヌケ話をおみやげに持って帰ってきてよ」
「俺のマヌケ話ってなんだよ？」
「予定通りにいかなくてアタフタするとか大堰川に落ちたとか」
「んなさ、川には落ちねえだろ」
「ハハハ、落ちればいいのに」
「あの・・　おおいがわって」
「渡月橋がかかっている川よ」
「あれって鴨川じゃなかったんですか？」
「鴨川はね、上加茂川神社とか下鴨・・　まあ、川よ」
かあちゃんの説明もザックリ過ぎんだろ
「私・・　地理が苦手で」
「ね？　日本でも知らないところがいっぱいあるわよね」
「はい」
「そういうのを肌で感じられるのが旅行のいいところよ」
「はい、でもひとつ憶えました、渡月橋がかかっているのは・・おおいがわ」
「そうそう、それでいいの」

かあちゃん　ぜってえかあちゃんもそこんとこはうろ覚えだろ
「ダイチ」
とうちゃんが俺に顔近づけて
「ん？　　とうちゃん、なに？」
すんげえ小せえ声で
「ケガだけはよ」
あ　さっきの川に落ちるっつう話か
「ぜってえ川には近づかねえからさ」
「そっか、そんならな」
かあちゃんがあんなこと言うから　とうちゃん心配しちまったじゃねえかよ

晩メシ終わって
愛里とかあちゃんはリビングでしゃべってて
俺ととうちゃんはキッチンで後片付けしてて
「とうちゃん、ねえちゃんはとうちゃんにもなんも買ってこなかったんか」
「写真見してくれてよ」
「京都の？」
「京都っつうか、餅や饅頭とか、ヒトミが食ったもんの写真」
「食ったもんだけ？」
「こんな餅があんのかとかよ、宿ではこれ食ってたんかってな」
「宿のメシも？」
「うぐいす豆がよ」
「緑の甘えやつ？」
「それがよ、小せえ皿に５粒乗っかっててよ」
なんでそんな写真撮ってたんだ？
「みんなで数えたんだってよ」
「うぐいす豆を？」
「そしたらよ、みんなキッチリ５粒でよ、どんだけがんばって５粒にしたんかなってよ」
ねえちゃんの目のつけどころが・・　メッチャねえちゃんだな
「今はわかんねえけど、俺が院で習ったときはよ、なんでも奇数じゃなきゃなんねえってよ」
「ああ、うん」
「うぐいす豆配膳した人もよ、がんばったんだろうな」
そういうの売ってんじゃねえのかな　５粒ずつ入ってて袋開けりゃいいだけみてえな
「ダイチも美味えもんいっぺえ食ってよ」
俺は・・
「俺が食ったこともねえようなもんが、いっぺえあんだろうな」
「とうちゃんも京都行ってみてえ？」
「俺は、ダイチとヒトミが楽しんでくりゃよ、そんだけでありがてえよ」
「俺、いつかとうちゃんと二人で旅行行きてえな」

「あ？ 俺と？」
「なんかおもしろそうじゃん、とうちゃんとならさ」
「一緒にうぐいす豆数えっか？」
「ハハハ、それもおもしれえな」
「俺は修学旅行なんて行ったことねえからよ」
そうだよな　学校も行けなかったんだもんな
「ヒトミに写真見してもらったり、ダイチの話聞けるだけで行った気になれっからよ」
「俺も写真撮ってくるよ、うぐいす豆だけじゃなくてさ」
「楽しみにしてっからよ」
とうちゃんと旅行・・　行くことはねえかもしんねえな
とうちゃん苦手だもんな　かあちゃんと温泉行ったときもヘンになっちまったって
「ダイチ、タコまだこんなだけあんだけどよ」
「そしたら、俺は明日タコの唐揚げと・・　アジもあんだよな？」
「いっぺえ買ったから南蛮漬け作っかなって」
「あ、それいいな」
「そんじゃ、アイリちゃんのも作っからよ」
「うん、愛里はとうちゃんの南蛮漬け好きだからさ」
「そっか？」
とうちゃんが嬉しそうな顔して玉ねぎ出して
「ダイチ、愛里さんを送ってあげて」
「あ、おう」
かあちゃんの後ろにいた愛里に
「愛里、行こっか」
「あの・・　お地蔵様を」
「お地蔵様？」
「見せてもらってもいいですか？」
「あ、ねえちゃんの？　いいよ」
俺の部屋のドア開けて　臭くねえよな
んっと　本棚の
「これ」
「可愛い」
「そっか？」
「どこのお寺で買ったんですか？」
「さあ、みやげ物屋じゃね？」
「おみやげもの屋さんでこれを見つけて、あなたに・・」
愛里がねえちゃんの地蔵をジーーッと見てっけど
「心が洗われる気がする」
「えっマジで？ これで？」
「これを買ったおねえさんの心で私の心が」
愛里・・

「愛里がんなこと言うとさ、なんかすげえご利益ありそうに思えてくんじゃん」
「ありますよ、絶対あります」
「愛里、なんか、あのさ・・　大丈夫か？」
「なにがですか？」
「や、なんか」
「今日はすごく大切なことを森下家から教えてもらいました」
教えてもらった？　渡月橋の下の川は大堰川だっつうこと？
「見せてくれてありがとう」
「あ、や、こんなんいつでも」
「こんなとか言わないで」
俺を見上げた愛里の顔が　メッチャ真剣で
「あ、はい」
ねえちゃんの地蔵を本棚の上に戻して
部屋を出た

エレベーターに乗って二階のボタン押して
「森下家には」
「うち？」
「地獄が存在しない」
「え？　んっと？」
「なんていうか・・　お地蔵様のいる極楽浄土・・みたいな」
ん・・と？
「愛里、あの・・さ」
「なんですか？」
「地蔵ってさ」
「あのお地蔵様っていうことじゃなくて、そういうカンジっていうか」
「あの・・さ」
「はい」
「地蔵は極楽浄土にはいねえんだよ」
「え？ どこにいるの？」
「あ、やっぱいい」
「なんで？　おしえて」
「え・・　六道」
「ろくどう？　ろくどうってなに？」
「地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人道、天道」
「え・・なにそれ、え、ちょっと待って、今、地獄って言った？」
「言った」
「なんで地獄にいるの？」
「愛里、着いたよ」
「ねえ、なんで？」

愛里のことエレベーターから下して
「ねえ、なんで地獄にいるの？」
愛里の腰押さえて廊下歩いて・・つうか歩かせて
「なんでよ？」
「地蔵のことは倫社には出てこねえからさ」
「倫社なんかどうでもいいから！」
愛里・・　なんで、んな地蔵にメッチャ
「なんで、お地蔵様が地獄なの？」
「えっと、んっとさ、ザックリ言えばさ」
すっげえ真剣な目で俺のこと見てっけど
「地獄の苦しみみてえな？　そういう苦しみから救うためっつうかさ」
愛里が　メッチャ驚いた目になって俺のこと見てる
「地獄の苦しみから・・」
「まあ、いろいろ謂れがあって、どれが正しいんかは」
「それじゃ・・　森下家は」
「え、うち？」
「お地蔵様ですね」
「愛・・里？」
「森下家っていうか、あなた・・かな」
「お、俺？　俺が地蔵？」
そういえば・・　ねえちゃん言ってた　この地蔵あんたが赤ちゃんのときに似てるって
まだ似てのかな　あんな顔丸くねえけどな
「なんか、納得しました」
「え？ ど、どこに？」
「それじゃ、またあとで」
「え、あ、おう」
ドアが閉まって　鍵が速攻で閉まった
なんかよくわかんねえけど　帰ろう

勉強して　シャワー終わって部屋戻った・・ら
愛里から LINE 入ってる
『私はおみやげ地獄の中で』
おみやげ地獄？　そういや佐藤もなんか言ってたな
『あなたのみかんに救われました』
みかん？　なんかみかんをありがとうっつってたけど　みかん？
『おみやげは本来本当は原点は』
『大切な人にこの美味しいものを食べさせたいっていう』
『心なんだって』
『あなたはおとうさんに　この美味しいみかんを食べさせたいって』
『その心がおみやげの原点なんだなって』

んなたいそうなこと考えてたわけじゃねえんだけどな
『少なくとも私のキーホルダーには心は一個も入ってなかった』
『ママが通販で買ったマーラインのチョコにもなかった全然ゼロ』
愛里やっぱメッチャトラウマなんだな
『そんな心のないものをあげたら逆に失礼だと思う』
んなことねえよ愛里　みんなさ　そこまで考えてねえよ
『川口くんがリスト持たされたとか鈴木くんが親戚多いからとか』
だな　言ってたな
『サトユミさんとサトアヤさんはおみやげもの屋さんをピックアップしておくとか』
『修学旅行前あるあるを見て』
修学旅行前あるある？
『ものすごくズッドーンだったけど』
愛里はさ　優しいからな
『あなたのおとうさんへのみかんの話を聞いて』
『おかあさんも何も買わないで楽しんできてって言ってくれて』
すげえ考えちまうんだろうな
『森下家は　おみやげ地獄の中にいた私を救ってくれるお地蔵様です』
そういうことか　だからあんなに地蔵にこだわったんか
『ありがとう』
やっと　みかんありがとうの謎が解けたよ愛里
『愛里』送信
『京都では美味えもん食って』送信
『東京じゃ見れねえ景色見て』送信
『京都最高！ って楽しもう』送信
ピコン
『最高！ って思えなかったらどうしよう』
ハハハ　んなこと心配してさ
『最高でもねえなって思えばいいじゃん w』送信
『そんでも俺は愛里と一緒に行けるだけで最高っす』送信
ピコン
『ありがとう』
ありがとうなんてさ　んなこと言わねえでいいよ　俺の方こそありがとうだよ
ピコン
『中学の修学旅行のとき　おみやげ買う時間てなかったんですか？』
『あったよ』送信
ピコン
『あなたは何をしてたの？』
俺は・・
『ラーメン食った』送信
ピコン

『ラーメン？ w』
『ヒマだったから歩いてたらラーメン屋があって』送信
『腹減ってたからラーメン大盛り食った』送信
ピコン
『修学旅行でラーメンて w』
ピコン
『私もそういうことしたかった』
『愛里とおんなし中学だったら』送信
あんとき　もし会えてたら
『ぜってえ連れてった』送信
ピコン
『突然？　　話もしたことないのに？ w』
『中学もおんなし学校だったら』送信
『俺はやっぱぜってえコクッてたから』送信
あ・・れ？　　返信が　ねえんだけど
『愛里？』送信
ピコン
『どっちにしますか？』
どっち？
ピコン
『シンガポールか伊豆』
つまりはさ　つまりは　中学でコクッてもつき合ってくれたっつうことだよな
うおおおおおお
『伊豆でお願いしやす』送信
『シンガポールでラーメン屋探す自信ねえ w』送信
ピコン
『私も伊豆ってことで w』
『そんじゃ愛里は俺と一緒にラーメン食った w』送信
ピコン
『ママから頼まれたおみやげはどうしたらいい？』
それは・・
『俺に無理やりラーメン食いに連れてかれたって言えばいい w』送信
ピコン
『無理やりじゃないから』
ピコン
『私ぜったいラーメン食べたかったから w』
そっか　愛里　あんとき一緒にラーメン　食った気になってるよ俺
ピコン
『どうせママは通販で買います www』
ハハハ　そっか

ピコン
『中学もあなたと同じだったらよかったのに w』
『俺はおんなし学校の気になってっから w』送信
ピコン
『もし公立だったら』
愛里　マジで考えてんのか
ピコン
『ダメだ、学区がちがうから同じ中学じゃない』
いぃんだよ　愛里　だってさ
『俺は高校で会えてよかった』送信
『つか　会えてよかった　マジよかった』送信
ピコン
『そうですね』
ピコン
『でも』
ピコン
『中学の修学旅行では一緒にラーメン食べたことにします w』
愛里　たまんねえよ　愛里
ピコン
『それじゃ、私はそろそろ寝ます』
ピコン
『おやすみなさい』
『愛里　おやすみ』送信
う・・ぉおおお
なんか俺　中学の修学旅行の最終日の帰り三時間前　愛里とラーメン食った気になってて
なんかメッチャいい修学旅行になってんだけど
いやいやいや　想像の世界じゃなくてさ　現実で一緒に修学旅行行くんだよ来週
ダメだ　あんま興奮すっと寝れなくなっかんな俺
幼稚園の遠足んとき　前の晩に寝れなかったことあるもんな
とうちゃんが夜中におんぶして野っ原散歩してくれて気ぃついたら寝てて朝だったな
おっしゃ　寝よう　つか　まだ来週だよ

部屋割り

学校への道
フォワアァァ・・　ヤベ　あくび
愛里との LINE のあと、なんか興奮しちまってなっかなか眠れなかった
こんなんで修学旅行前夜はどうなるんだよ　一睡もできなかったらやべえじゃん
「眠れなかったんですか？」
「え、あ、まあ、ちっと」
「何かあったの？」
「なんもねえよ」
「ほんとに？」
「マジマジ」
ただ興奮して眠れなかっただけなんて愛里には言えねえ
「私、放課後に買い物に行ってきます」
「え？　　一人で？」
「はい、アメニティ用の詰め替え容器とか、まあいろいろ買いに」
「アメニティって・・　ホテルとかについてるやつだよな」
「しおりに書いてますよね、シャンプーとコンディショナーやボディソープ、
　あと歯ブラシセットは持参するって」
「ザッと見たけど」
「ダメですよ、ちゃんと読まなきゃ」
「アメニティならさ、俺んとこの洗面台の下にいっぺえあんだよ」
「そうですか」
「愛里もそれ使えばいいじゃん」
「シャンプーとかはいつも使ってるのを持っていきたいから」
「そんじゃハブラシだけでもさ」
「そしたら、最低 6 本は持っていかなきゃだから」
「なんで？」
「ホテルのって使い捨てだから」
「ぜーんぜん使えっから、俺ととうちゃんは 1 ヵ月は使ってっから」
「いっ・・・かげつ」
「かあちゃんに 1 ヵ月使ったら新しいのにしろって言われてっからだけどさ」
「そう・・ですか」
「使おうと思えばもっと使えっけど、掃除すんのにまわしてんだよ」
「私は・・　いいです、買います」

「愛里、遠慮なんかすんなよ」
「遠慮じゃ・・なくて」
「んっとさ、白と黒と・・　あ、ピンクもあっからさ」
「色の問題じゃなくて」
「なんの問題？」
「え・・　だって、あの、ああいうのについてるハミガキって一回分しかないし」
「あれはうまく使えば 4 回はいけっから」
「え？」
「だいたいさ、本来歯磨き粉は必要ねえんだよ、清涼感だけの問題でさ」
「清涼・・感・・だけって」
「とうちゃんなんて虫歯一個もねえんだよ」
「え、すごい」
「浮浪者んときなんて歯ぁ全然磨いてねえのさ」
「えっ」
「俺も虫歯ねえし」
「あなたも・・虫歯が・・ない・・のは」
「かあちゃんは若けえ頃しょっちゅう歯医者行ってたってさ　ハハハ」
「もう二度と・・　私にハムハムしないで」
「え？ な、なんで？」
「歯を磨いてないんでしょ！」
「磨いてっから！」
「ハミガキつけてないんでしょ！」
「つけてっから、清涼感、大事にしてっから！」
愛里がメーーッチャ疑わしそうな目で見てっけど
「マジで、かあちゃんが買ってくるハミガキ使ってっから」
愛里ぃぃ　その目やめてくれよぉ
「マジで、メッチャ高けえやつ、それじゃなきゃダメってかあちゃん言うからさ」
「そうですか」
「うん、マジだから」
「とにかく・・　私は放課後買い物に行きます」
「俺も一緒に行く」
「なぜですか？」
「一緒に行きてえじゃん」
「用もないのに？　アメニティのハミガキ 4 回に分けて使うのに？」
「大っきいの持ってくからさぁ、愛里ぃ」
「え？　大きいのって、ふだん使ってるのを持っていくの？」
「あれっきゃねえもん、あとはあの 4 回に分ける、あれだから」
「詰め替え容器売ってるけど」
「ハミガキの？　そんだけのための容器？」
愛里が　ゆーーっくり顔あげて　俺のこと見た

「今日は・・　私一人で行った方がいいと思う」
「なんで？」
「なんか・・　イライラしそう」
「え？ 俺に？」
「え、ていうか・・なんか、なんとなく」
「愛里、俺さ、小学校と中学の修学旅行んときはかあちゃんに渡されたの持ってっただけで」
「私もです、ママが全部用意してくれました」
「ん、なんつうか、旅行ってあんま行ったことねえからさ」
「私だって、そんなにしょっちゅう行ってないし」
「シンガポール行ったじゃん、あとアメリカも」
「好きで行ったわけじゃないけどっ？」
「あ、うん、ごめん、なんつうか」
愛里が　くちびるに指あてて　なんか考えてる
「そうですよね」
んっと？
「あなたも将来おかあさんみたいに出張に行く仕事に就くかもしれないし」
愛里　なに言ってんだよ
「俺は出張あるような仕事には就かねえから」
愛里のこと放って行くわけねえじゃん
「だったら旅行の準備のやり方なんて知らなくてもいいんじゃない？」
愛里ぃぃ
「え、なに？　やだ、なにそのキュゥゥゥンみたいな顔？」
「マジキュゥゥンだからさぁ」
「もう！　わかったから」
「え？　一緒に行ってもいい？」
「ひとつ約束してください」
「おう、なんでも約束すっから」
「私が買おうといるものに、いちいちもったいないって言わないで」
「え・・」
「約束できますか？」
「・・・」
「え？ なにその沈黙？」
「あ、や、する、約束する、もったいねえって言わねえ」
「だったら、はい、一緒に」
なんかいいなあ　修学旅行の準備　愛里と二人で一緒にさあ
「校門です」
「あ、はい」
なんつうかさ　準備段階でもうしあわせでさ
「森下、おはよう」

「おいっす」
修学旅行行かなくても　や　行きてえな　うん
「森下くん、おはよう」
「おいっす」
え？　愛里が　俺のことジーーッと見てっけど
「愛里、どした？」
「一瞬でモリシタダイチに変わるから」
「あ？」
ナンノコトダ？
「ビックリ」
ビックリ？
「俺は・・　森下大一だけど」
「気にしないでください」
「え、んなこと言われっと気になんだけど」
「上原さん、おはよう」
「サトユミさん、おはよう」
「森下くんもおはよう」
「おう、おはよっす」
「上原さん、あのね」
佐藤が愛里のこと連れてっちまった
友だちと話してる愛里も自然でたまんねえんだよなあ
俺も教室入ろう

朝の学活んとき　部屋割りが発表された
部屋割りっつうか　ホテルのフロアの見取り図で
男子が２階と３階で女子が４階と５階　うちのクラスは男子が３階で女子が４階
だいたいが３人で２人部屋もある
あとは自由にっつうことで　俺はどこでもいいな
「森下」
「虎之助、なに？」
「よかったらさ、同じ部屋にならない？」
「おう、いいよ」
「川口も一緒なら、自由行動のとき動きやすいんじゃないかな」
「だな」
「川口！」
川口が振り向いて　虎之助が手招きして
「川口、一緒の部屋にならない？」
「いいの？」
「おんなしグループじゃねえかよ」
「正直ホッとしてるよ」

「え、なんで？」
「あまり話したことのない人と二人部屋はさ」
最悪の状況を想定してたんか
「上原さんは佐藤さんたちと同じ部屋にするみたいだよ」
愛里　んっとだ　佐藤たちとニッコニコしてしゃべってるよ　よかったなあ
「早く部屋を決めないとエレベーターのすぐそばは悪夢だよ」
「悪夢？」
「わりと廊下の音って聞こえるから落ち着かないんだ」
「そうなんか、そんじゃ、いちばん奥か？」
「いちばん奥はエレベーターまで遠すぎて移動のときに」
「そんじゃどこだよ？」
「僕が決めてきてもいい？」
「決めてきてくれよ、いいよな、虎之助」
「うん、川口頼むよ」
「わかった」
川口けっこう・・つか、やっぱこだわりすげえな
あ　ちっとだけエレベーター寄りの真ん中ゲットした　さすがだ
川口が佐藤になんか言ってる　お！　佐藤がちょうど俺らの部屋の上の部屋ゲット！
おおおお　愛里が俺の真上だよ
「佐藤さんにもアドバイスしたら、僕たちの部屋の真上を」
「おう、見た、最高じゃん」
「だったらよかったよ」
「この部屋ってさ、三人てことだけど、これ、補助ベッドだよね」
「うん、そうだね、ホテルはだいたいツインだから」
「どうする？　三泊だから交代で寝る？」
交代？
「それがいいよね」
「なんで交代すんだよ？」
「だって、補助ベッドで三泊はさ」「補助ベッドで寝るのはキツイよ」
「そんじゃ俺が補助ベッドで寝る」
「えっ？」「えっ？」
「そんでいいじゃん」
「森下をずっと補助ベッドに寝かせるなんて」「俺、みんなに顔向けできないよ」
みんなって誰だよ？
「やっぱり公平にした方がいいよね」「うん、同じ旅費払ってるわけだからさ」
「ベッドがねえわけじゃねえだろ」
「そうだけど」「それはさ」
「俺が補助ベッドで寝る」
「でも・・ね」「うん、それは・・ね」
「俺はどこでも寝れっから」

「どこでもって」「それは」
二人で顔見合わせてっけど
「マジでどこでも寝れっから、いちいち交代する方がめんどいじゃん」
「本当にいいの？」
「おう」
「辛くなったら俺と川口で交代するからね」
「辛くなんねえよ、床でも寝れるよ、カーペットあんだからさ」
「床では・・　僕は寝れないな」「俺も・・」
「床で寝ねえよ、補助ベッドあんだから」
「そうだね、そう考えたら」「床よりはずっといいよな」
「そんじゃ決まりな」
「森下ありがとう」「ありがとう」
なんでそんくれえのことで
「森下と鈴木は枕はどうするの？」
枕？
「枕はついてんじゃねえの？　補助ベッドでもさ」
「そういう意味じゃなくて、僕は枕が違うと眠れなくてさ」
へ？
「俺の中学の新体操部にもいたよ、マイ枕持って遠征してた」
マイ・・枕？
「それじゃ僕も持っていこうかな」
枕を？
「その方がいいと思うよ、眠れないと辛いからさ」
修学旅行に・・　枕持ってくんか？
「森下は大丈夫？　あ、大丈夫だよね」「床でも寝れるってすごいよな」
いやいやいや　枕持って修学旅行行く方がすげえよ
「あ、チャイム鳴ったから、持ち物の話はあとで」「そうだね」
持ち物の話？　しおりに書いてんだよな？
にしても　枕持って修学旅行ってさ　どんだけ荷物デカくなんだよ？
まさか布団も持ってくとか言わねえよな　まさか持ち物の話って布団か？
わかんねえ　俺にはわかんねえ世界だ　枕持ってくってさ

昼休み
中庭にはいねえ
学食で　佐藤たちが食いながら愛里に真剣にしゃべってて
俺の横には川口で川口の前には虎之助が座って食いながら話し合ってる
「ドライヤーなんだけどね」
ドライヤー？
「同時に三人が使うっていうことはないからさ、一個だけあればいいと思うんだよ」
なくてもいいけどな

「それじゃ俺が持っていくよ」
虎之助　ドライヤーだぞ　んなもん持ってくってさ
「俺のは遠征に持っていったコンパクトのだからさ」
「それじゃドライヤーは頼むよ」
え　愛里が　俺のジャケットの裾つかんでる
どした？　　こっち見ねえ　前向いてメッチャ無表情で佐藤の話聞いてっけど
なんか知んねえけどなんかあったんだな
左手で愛里の手を握った　え　メッチャ冷てえ
つか　愛里　弁当にひとっつも箸つけてねえよ　具合悪りぃんか？
ピコン　ピコン　誰のだ？　　愛里か
「あ、ちょっとごめんね」
「いいよ」
愛里が携帯見てる　誰だ？　　お母さんか？　　アメリカだと夜の
「えっ」
ど、どした？
「フェ・・エェェェン」
「愛里、どした？」
まさか・・　またお父さんが・・
「上原・・さん、大丈夫？」「なにかあった？」
愛里が顔押さえて首振ってっけど
「愛里、なんかあったんか？」
愛里が　涙で濡れた目ぇシバシバさせて俺を見て
「あとで」
そう言ってまた前向いて
「もう大丈夫、ちょっと、かなり感動しただけ」
「感動？」「なに？」
「ううん、えっと・・　なんだったっけ」
「アイロンどうするかって」
アイロン？
「それは私が持ってくね、2way だしコンパクトのだから」
佐藤　アイロン持ってくんか？　　アイロンかけるもんて・・　なんだ？
制服？　　んなシワシワにはなんねえだろ
ピコンピコンピコン　あ　俺だ
かあちゃん　どした？
『あんたの新しい鼻毛カッター買ったから』
鼻毛カッター？　　今かよ
『カズオのも』
『今度から壊れたら即報告！』
鼻毛カッター・・　あ　鼻毛カッターは持ってかねえとな　三泊だもんな
あれ？　　鼻毛カッターは・・　どうなんだ？　　三人で使うんか？

それはちっとなあ　とうちゃんとなら気になんねえけど　川口と虎之助・・ギリか？
「森下、どうしたの？」
「え・・　ちっと、こっち」
ちょいちょいって二人を集めて　小せえ声で
「鼻毛カッターはさ」
「あ！　そうだよね」「言ってくれてよかったよ、盲点だった」
「それは、あの・・一人一個なんか？　それとも」三人で一個なんかな？
「僕はハサミも使うよ」「俺はハサミは怖くて使えないな」
つまりは・・　三人で俺のを使わなくていいっつうことか
「シェイバーもいるよね」「小型シェイバーあるけど充電がさ」
「携帯の充電器もいるよね」「遠征のときはタコ足配線ができる電源タップ持っていった」
なんか・・さ　すげえことになってねえか？　国内だよな　しかも三泊四日
ん？　愛里が俺の肩　指でトントンて
「愛里、どした？」
愛里が俺に顔近づけて　小せえ声で
「タコの唐揚げ美味しい」
やっと食えたんか
「そっか、そっかよかった」
「アジの南蛮漬けも」
「そっか、とうちゃん喜ぶよ」
よかったあ　愛里が弁当食えて
俺は・・　ほっとんど味しねえまま食ったけど
そんで・・
結局昼休みはそのまんま終わっちまって　愛里と二人で話せなかった
なんかなあああああ

アメニティグッズ

放課後の校門前
やっと愛里と二人になれた
「愛里、買い物行くんだよな」
「それが・・　必要なくなって」
「え、そんでも詰め替え容器買うって、いらねえの？」
「昼休みに来たLINE」
ああ　なんかそんで泣いちまって
「おかあさんからなんです」
「かあちゃん？」
「はい」
「かあちゃんがなんか言ったんか？」
「見て」
愛里が携帯のLINE画面出して
画像　なんだこのカバンみてえなやつ
『愛里さんのアメニティグッズはすべて揃えたから安心して』
へ？　なんでかあちゃんが愛里の？
「ゆうべおかあさんに、アメニティグッズは揃えたの？ って聞かれて、
　まだですけど、おかあさんのポーチを目指してますって言ったんです」
「かあちゃんのポーチ？」
「入院したときに持っていったポーチ」
「目指してるっつうのは？」
「使うものがピシッと揃えてあって、隙がひとつもないっていうか」
隙？　ポーチがギッシリっつうことか？
「こっちのは、あとから送られてきてたので・・　ほら、すごいでしょ？」
画像見てっけど　ん・・っと？
「AVEDAのシャンプーとコンディショナーとスタイリングミストとボディウォッシュ、
　ボディローションまで全部アメニティサイズで揃ってて」
んーーーと？
「こんなの日本で売ってないと思う、ハブラシとハミガキもあるし、
　トラベル用のバスキャプにヘッドバンドまで入ってて、ここには小さなブラシも」
愛里がメッチャ興奮してるっつうことは　まあ・・　いいっつうことなんだな
「夢のアメニティポーチ！」
そんな・・なんか　俺にはあんまわかんねえけど

「あなたにも LINE 来てましたよね」
「え？　あ・・」
鼻毛カッター
「まあ、うん」
「あなたのも揃えてくれたんですか？」
「俺のは・・　まあ俺がテキト〜にやっからさ」
「え？　あなたのはないの？」
「新しい・・　なんつうか、必需品は買ってくれたってさ」
「必需・・　あ、髭剃り用シェイバー？」
愛里に鼻毛カッターっつうのは言えねえ
「まあ、そんなカンジ」
「でも、私だけって・・」
「俺は、ほれ、洗面台の下にいっぺえあっからさ、それ持ってく」
「え・・　ハミガキは？」
「持ってく、ちゃんと持ってく」
「あの小さいのを・・一本？」
「や、ちゃんと、なんつうか、ちゃんと」
「なんだったら、もう大きいまま」
「愛里、俺のは心配しねえでいいよ」
「でもなんか・・私ばっかり」
「かあちゃん愛里が喜んでくれっから嬉しいんだよ」
「女の子だったら絶対喜ぶ、こんなすごいポーチ」
「んなこと言ってもらったらかあちゃんも喜ぶよ」
「私・・　おかあさんからの LINE が来るまで・・　押し潰されそうで」
え？
「ドライヤーとかコンセントとか、なんか・・　ゲルマン民族大移動を見てるみたいな」
ゲルマン民族大移動を想像してたんか
「なんかもう怖いから行きたくないまで思ってて」
「えっ？」
「そんなときに、おかあさんからこの LINE が来て、お地蔵様が現れたみたいな」
「地蔵？」
「持ち物地獄から救ってくれるお地蔵様、でも、おかあさんは・・　女神の方が」
持ち物地獄か
「たしかに・・な、川口は枕持ってくっつってた」
「川口くん、ずーーっと言ってたんです、枕が合わないと眠れないって」
マジか　愛里にまでか　そんなにか
「川口くんのスーツケース・・　大きいですよね、きっと」
「枕入れてくっつうからな」
「みんなどれくらいの大きさのスーツケース持って行くのかな」
「ん・・え・・どう・・なんかな」

「あなたはどれくらいのですか？」
「俺は・・」
なんも考えてなかったな　ん・・と　あ！
「家政夫するときに持ってくあの黒いやつ」
「えっ？　　あれは・・　三泊四日には小さくない？」
「足りっだろ、下着と洗面用具くれえだろ？」
「普段着もです」
「あ？」
「ホテルの中は制服じゃなくてよくて、あとはパジャマとか寝るときの」
「ジャージでいんじゃね？」
「ジャージ・・って？」
「学校の」
「えっ？　　あのジャージ？　　あのジャージを・・　あれは・・　どっち？」
「どっちっつうのは？」
「普段着？　　それとも寝るとき？」
「あれで両方いけんだろ」
「本気で言ってる？」
「マジで」
「ウソ」
「マジだけど」
「ウソでしょ？」
「や、だから」
「普段着は部屋の中だけじゃなくて、朝食や夕食は大広間でみんながいるところにも」
「高校のジャージならいんじゃね？」
「みんなけっこう気合入れてますよ」
「なにに？」
「いつもは制服姿しか見せてないから、普段着で本来のセンスを見られちゃうっていうか」
「俺センスねえもん」
「あ・・」
「愛里がいっちゃんよく知ってんじゃん」
え　愛里が立ち止まって　両方のこめかみ指で押さえてる
「愛里？　　頭痛てえの？　　めまいか？」
「どっちも・・」
「えっ　どっちも？　　歩けっか？ おんぶすっか？」
「そういうのじゃなくて」
「どういうの？　　やっぱおんぶすっか？」
「今・・　私の中で・・」
「うん、どした？」
「あなたらしいなっていう思いと、それはどうなの？ っていう思いが・・　せめぎ合っ

てて」
せめぎ合ってて？
「ジャージはいったん保留にしてください」
「え？　そんじゃ俺なに着りゃいいの？」
「だから保留にして」
「え・・　あ！　そんじゃ中学んときのジャー」
「あれを着たら 50m 離れて歩くけどっ」
「あ、はい」
「おかあさんに相談します」
「かあちゃん？」
「はい」
「俺が着るもんなんだからさ、かあちゃんにいちいち」
「とにかく！　保留！」
「あ・・　はい」
「聞いておいてよかったです」
「なにを？」
「あなたの、修学旅行での普段着についての考え」
「考えっつうか、べつに普段着なんだからジャー」
「いったん！　保留！」
「あ、うん」
「あぁぁ、でもどうなんだろう、そういうあなたも・・でも・・」
「愛里、俺の修学旅行の普段着のことは気にしねえでいいからさ」
「気にする！　気にするでしょ！」
「え・・？」
「とにかく、おかあさんに相談します」
「愛里、それってさぁ、なんかかあちゃんに言いつけるみてえなさぁ」
「言いつけますよ」
えっ・・　愛里がギロッて俺のこと睨んでっけど
「なんかもう、朝はハミガキのことでビックリさせられて」
俺・・　怒られてんのかな
「今は普段着のことで、なんか、こんな」
「愛里、俺、なんかごめんな」
「いちばん厄介なのがっ」
「あ、うん？」
「まあそれもモリシタダイチっぽいからいっかあ」
え？
「なんて思っちゃう自分がいて、それがいちばんイヤ」
「ん・・と？　愛里？　俺・・　どうすればいい？」
「おかあさんの裁決を待ってください」
さ・・裁決

「着きましたよ」
「あ、おう」
エレベーター乗って
「愛里」
抱きしめ　ドンッて　え？
「そういうのイヤ」
「えっ」
「なんか、おかあさんに叱られそうで心細くて私に抱っことかいうカンジ」
「ちげえから、ちげえよ、マジで、え？　　んな目でさ、マジちげえから」
「着きました」
「あ、うん、愛里、ちげえから」
「はい」
「全然信じてねえだろ、今のはいはさ」
「信じてるけど」
「え？　　マジ・・で？」
「はい」
今の　はい　は・・　信じてるはいだ
「愛里」
ギュッて　逃げ出さねえようにギュッて
「俺、淋しかった」
「え？」
「昼休み、愛里と全然しゃべれなくてさ、二人きりになれなくてさ」
「でも・・話し合わなきゃいけなかったから」
「わかってっけど、そんでもさ」
「あのとき、あなたが隣りにいてくれてよかった」
「愛里、俺のジャケット握ってたもんな」
「なんか・・　酸素ボンベ的なカンジでした」
「そっか」
「はい」
「愛里」
くちびるに
「廊下ですよ」
「ちっとだけ」
「え・・」
ちっと・・だけ・・でも　俺の　メッチャ
「お・・　おぉぉぅ」
「え？　　なに？　　大丈夫？　　煩悩？」
「や、あ、なんでもねえ」
「おかあさんはもう帰ってるんですよね」
かあちゃん・・か

「今週は早く帰るっつってた」
「それじゃ、着替えたらすぐに行きます」
「言いつけるんすか」
「プッ」
「言いつけるんすかぁ、愛里さ〜ん」
「なにそれ　ハハハハ」
なんだよ笑って　メッチャ可愛いなあっ
「それじゃ、あとで」
「おう、そんじゃあとで」
愛里が鍵開けて　ドア開けて
「もう一回言って」
「ん？ なに？」
「言いつけるんすかあって」
「いいよ、愛里さ〜ん」
もう笑ってるよ
「言いつけるんすかああ」
「ハハハ」
愛里が笑うなら　一億回でも言う
「それじゃ」
「おう」
ドアが閉まって鍵が閉まった
なんつうかさ　俺は　しあわせだあ
帰んねえと　とうちゃんと買い出しだ

サブバッグ

とうちゃんと買い出し行って帰ってきたら　愛里はもう来てて
かあちゃんとしゃべってた
俺ととうちゃんは晩メシの支度してて
「ダイチ！」
え？　かあちゃん？
「あとは俺ができっからよ」
「あ、うん」
なんだ？
リビングに行ったら
「ダイチ、あんたはどのカバンを持っていくの？」
「俺は前にかあちゃんが買ってくれた黒の、家政夫すっとき持ってくやつ」
「そう」
あ　スンナリ受け入れた　だよな　あれくれえでいいよな
「で？　サブは？」
「サブ？　サブっつうのは？」
「自由行動でまわるときに持つバッグよ」
「そんなんいらねえんじゃね？　財布と携帯くれえでさ」
「もし雨が降りそうだったら？」
「え？　んっと・・」
「折りたたみ傘を持たないとね」
「それは・・手に持つからさ」
「もし喉が渇いてペットボトルのお茶でもお水でも、そういうのは？」
「それは・・」
「両手に傘とペットボトル？」
「あ・・」
「しおりにも書いてるでしょ？　メインバッグとサブバッグって」
あんまちゃんと見てなかったっす
「愛里さん、ありがとう、愛里さんが言ってくれなかったら私も見落とすところだったわ」
「私は、あの」
愛里が俺の方見て
「言いつけたんじゃないです、私はただサブはリュックタイプがいいのかポシェットか」
「それよ、愛里さんが聞いてくれなかったら、ダイチがどうするのか考えもしなかったから」

「そんなん、かあちゃんが考えなくていいよ」
「あんたは何も考えてなかったじゃない」
「あ・・　はい」
「ヒトミにはリュックタイプのを買って持たせたの」
「やっぱりそっちの方がいいですか？」
「よかったって言ってたわ、両手も空くし、小さめだったからジャマじゃなかったって」
「それじゃ、土曜日のバイトの帰りか日曜日に買ってきます」
「今度の土曜日にバイトするの？」
「その方が気が紛れそうで」
「そうね、だったら、日曜日に私と一緒に買いに行く？」
「え？　いいんですか？　まだ退院して一週間しか・・」
「大丈夫よ、どうしても欲しいリップがあるから、季節限定の新色」
んっと　俺はキッチン戻っていぃんかな
「で？　ダイチ、あんたはどうするの？」
「え？　俺も土曜日はバイトすっけど」
「それじゃなくて、サブバッグ」
「ん・・・と」
リュック・・リュッ・・　あ！
「リュック、リュック持ってく」
「あんたリュックなんか持ってた？」
「中学んときの」
「中学のときの？」
「学校指定のさ」
「学校指定の？」
「俺の中学、学校指定のリュックだったじゃん」
「　　の？」
「え？　あ？　かあちゃん聞こえねえんだけど」
「声が・・出なかった」
「えっ？　かあちゃん、どした？ どっか具合悪りぃんか？」
「ショックで」
「なんの？」
「あんたが中学を卒業したとき言ったわよね」
「なにを？」
「あの　汚い　リュックは　捨てなさいって」
「そんでも・・　まだ全然使えっからさ」
「あんたは　あの汚ったないリュックを背負って　京都の街を歩くの？」
「そんなん関係ねえじゃん、物が入りゃさ、傘もペットボトルも入っから」
「ここに持ってきなさい」
「なにを？」
「あの汚ったないリュック」

「なんで？」
「いいから持ってきなさい！」
「あ・・　はい」
なんだよ　そんなんさ　見た目じゃねえだろ　機能だろ
部屋入って　クローゼットの奥の奥・・　あった
ほれ　全然使えんじゃん　ちっと縁んとこ擦り切れてっけど穴開いてるわけじゃ・・
あ　ここんとこにちこっと開いてっけど　こんくれえは大丈夫だよ
「早く！」
「わかったよ！」
リュック持って　リビングに戻ったら
「見せなさい」
「おいっす」
かあちゃんの前にリュック差し出したら　ジーッと見てっけど
「ほれ、かあちゃん」
「触りたくはない」
「洗ってあっから、中学んときもたまに洗ってたしさ」
「ここ、正面のちょうど真ん中の上のところ、穴が開いてる」
「え？　　ああ、チビっとじゃん、こんくれえならさ」
「穴が開いたのを持っていくの？」
「あ、そんじゃガムテ貼って」
「またガムテ！」
「な、中から」
「ファスナーの引き手が剥げちゃってるし」
「剥げるだけで壊れてねえよ、ちゃんと開閉できっから」
「愛里さん、どう思う？」
「え・・あの・・校章のプリントがかすれてるなって・・」
校章？　　ああ　ここか　正面ポケットの右端　そんでももうここの生徒じゃねえからさ
「こんな汚ったないリュック背負ってるカレシと京都の街を歩ける？」
「これは・・これで・・個性なのかな・・って」
個性？　　学校指定んだから個性はねえんだけど
「愛里さん、危ないわよ」
「え？」
「そっちに行っちゃダメ」
そっちってどっだよ？
「愛里さん」
かあちゃんが愛里の肩つかんで
「ダイチ、あんたはむこうに行きなさい」
「え、あ、うん」
「その汚ったないリュックもしまって」
汚ったねえってさ　行くけどさ

キッチン行ったら　とうちゃんがキャベツを千切りしてた
「ダイチ、もう終わっからよ」
「あ、うん」
「それ持ってくんか」
「え？　　あ、まあ」
どうなるんだ？　　かあちゃんと愛里次第か
「そりゃいいな、いっぺえ入るもんな」
「とうちゃん、だよな？ だよな？」
「背負って歩きゃジャマになんねえしよ」
とうちゃ〜ん　やっぱとうちゃんはわかってくれるよ

晩メシは生姜焼き
「そうそう、シンシンから電話があったのよ」
シンシンおじちゃん？　　なんでだ？
「前に私がバラより松阪牛の A5 ランクのステーキ肉を送ってって言ったでしょ、
　来週送ろうと思ってるからって言うから、ダイチも愛里さんも修学旅行でいないから、
　来週の土日以降にしてって言ったおいたわ」
「そっか」
「お肉はちょっと変更してもらったけどね」
「豚に？」
「ちがうわよ、ステーキ肉だと一回しか食べられないから、切り落としを 1kg 送ってよって」
お　おお
「とうちゃん、切り落とし 1kg だってさ」
「そんじゃいろんなもん作れんな」
「あの店に松阪牛の切り落としを注文しろっていうの？ って言ってたけど　ハハハ」
あの店って　どんな店なんだ？　　すげえとこなんだろうな
「愛里さん、帰ってきたら松阪牛でカズオが何か作るから楽しみにしてね」
何かって　とうちゃんに丸投げだな　そうなるんだけどさ
「はい・・　でも・・　私は、まだ行く前でもうパンパンになっちゃってて」
「そうよね、しおりを見たけど、持っていく物がたくさんあるものね」
「ドライヤーやアイロンは友だちがそれぞれ持っていくって言ってくれて」
「ありがたいわね、ヒトミのときもそうだったわ」
「おねえさん？」
「歴女さんが、ドライヤーとヒトミの分の充電器も持っていってくれたの」
「優しいお友だちですね」
「ヒトミが、なんでそこまでしてくれるのって聞いたら、声をかけてもらって嬉しかったからって」
「なんか・・歴女さんの気持ち・・わかります」
愛里が　ウルウルしちまった

「だから、ヒトミはアイロン持っていって」
「えっ　ねえちゃんが？」
「そうよ」
「ねえちゃんアイロンがけなんてできねえじゃん」
「ヘアアイロンよ」
「あ・・」
アイロンて　それか
「同じ部屋だから、歴女さんの髪を毎日巻いてあげたんですって」
「なんか・・そんなことしてもらったら・・嬉しくて泣いちゃう・・」
愛里　カンペキ歴女さんサイドで聞いてんだな
「夜には、教科書には載ってないような歴史の話をしてもらって、
　それがとにかくおもしろくて、旅行中ずっと楽しかったって言ってたわ」
「私は・・そういう話は全然できないです」
「いいのよ、そんなこと、お友だちも愛里さんと一緒に過ごすだけで楽しいわよ」
「そう・・でしょうか」
「ダイチなんて泣くほど愛里さんと一緒にまわりたいんだから」
え？　なんでかあちゃん・・　俺が泣いちまったの　知ってんだ？
愛里？　ポカンとお俺を見てる　違げえな　え？　とうちゃん？
とうちゃんニッコニコしてっけど　これは・・　あれだな
かあちゃんが誘導して　とうちゃんペロッと言っちまったやつだな
しゃあねえ・・　しゃあねえよ　事実だから

晩メシ終わって
愛里とかあちゃんはリビングでしゃべってて
俺ととうちゃんは後片付けしてて
「修学旅行っつうのは、いろんなもん持ってかなきゃなんねえんだな」
「なんか、そうみてえでさ」
「ヒトミんときは全部美里がやってくれたから、俺はなんもわかんねえんだけどよ」
「とうちゃんなら何持ってく？」
「どこに？」
「もし旅行すんなら、なに持ってく？」
「俺は旅行なんてしたことねえからよ」
「もし、するとしたらさ」
「なんもいらねえんじゃねえか？」
「え？」
「なんもなくてもなんとかなっからよ」
そうだ　そうだよ　とうちゃんは　家もなくてさ　言ってみりゃエブリデー旅行中でさ
そんでも生きてきてさ　今はこうやってガスコンロ掃除してでさ
「そんでも手ぬぐいは助かったな」
「手ぬぐい？」

「暑っちぃとき汗拭いたりよ、たまに顔洗ったりしてよ、そんときな」
そっか　タオル持ってきゃいっか　愛里が買ってくれたタオル　あれだ
「とうちゃん、俺、タオルだけ持ってくよ」
「それじゃダメでしょ！」
か、かあちゃん
「カズオはミニマリスト代表ではないのよ」
「それは・・」
「好きであんな恰好してたわけじゃないのよ、カズオ、そうでしょ？」
「俺は、あれっきゃねえだけでよ」
とうちゃん　情けねえ顔で笑ってっけど
「あれしかなかったの、あんたはなんでもあるでしょ」
「は・・い」
「だいたいあんた、タオルだけって、身体も髪も臭くなってヒゲも剃らないで、
　あんな汚ったないリュック背負って学校のジャージで」
あ・・　言ったんか　いいよ　愛里
「そんな浮浪者みたいな恰好で京都を歩くの？　　愛里さんと？」
かあちゃん　なんでそんな怒ってんのかな
「美里、俺が悪りぃんだよ」
「なんでカズオが悪いのよ？　　カズオは悪くないわよ」
「俺がなんもわかんねえでよ」
かあちゃんが　フーーッて息吐いて
「まあ、私もちょっと・・だったけど」
とうちゃん　ありがとう
「愛里さんを送ってあげて」
「あ、うん」
かあちゃんの後ろで　愛里が怯えた顔してた
「愛里」
でっきるだけニッコリして見せねえと
「行こ」
「あの・・」
「うん、なに？」
「さっきのリュックを」
あ・・
「あれはさ、やっぱあれは」
「ちょっと借りてもいいですか？」
「へ？」
「ちょっと・・だけ」
「え、あ、うん」
なんでだ？　　とにかく・・　部屋から出して
「これ・・だけど」

「あ・・」
「触んねえ方が」
「大丈夫です」
「え、んっと、そんじゃ、俺が愛里の部屋まで持つ」
「はい」
リュック持って　愛里と家を出た

愛里の部屋の玄関の中
「んっと、そんじゃ、ここに置いとくからさ」
「あの・・　私がこのリュックに、ちょっと、何かしても、いいですか？」
なにかする？　あ・・　そっか
「いいよ、切り刻んでもギッタギタにしてもいいよ」
「え？　そんなことしないけど」
「愛里の好きにしていいからさ」
「どうなるかは・・　私もわからないけど」
「どうにでもしていいからさ」
「そう・・ですか」
「おう」
「私・・」
「ん？　なに？」
「こんな気持ち・・　初めてで」
「え？」
「なんか・・　なんて言えば・・　愛しい？」
えっ　いっ　いっ　愛しい？
「マ・・　マジ？」
「自分でもビックリだけど」
愛里　愛里愛里愛里
「愛」里　え？　ヒョイッて　かがんで
「このリュック、なんか愛しくなっちゃって」
「リュ、リュック？」
「はい、なんでそんなふうに思っちゃうのかなって」
「リュック、そっか、リュック、ああ、リュックな」
「とにかく、ちょっと、考えてみます」
「あ、ああ、うん、そっか」
「それじゃ、またあとで」
「あ、あの、抱っこして・・いいすか？」
「え？」
「ちっとだけ、抱っこ」
「なにそれ　ハハハ」
「だってさ」

ギュッて　抱きしめて
「好きだから」
愛里の腕が　俺の腰にそっとまわるの感じて
「愛里がイヤだっつうことは、俺ぜってえしねえから」
「あなたは・・　私がイヤなこと・・　したことないけど」
「マジ？」
「はい」
「愛里」
くちびる　柔らけえ愛里の・・　ピコン　え？
「あ、ちょっと、あの」
「お、おう」
「やだあ、ママ」
「えっ　お、お母さん？」
「今から電話したいって」
「あ、そっか、うん、えっと、そんじゃ、また」
「はい」
愛里の部屋のドア閉めて
見られたんかと思った　タイミングがさ　メッチャ
家帰ろう

玄関のドア開けたら
「あ、とうちゃん」
「アイリちゃんとこ行こうと思ってよ」
「どした？」
「これ」
それは　ああ　アメニティ入ってるやつか
「美里が渡すの忘れたっつって」
「そんでも愛里は今お母さんと電話してっからさ」
「そんじゃ、どうすっかな」
「明日の朝、愛里の部屋に持ってくよ」
「そっか？　　そんじゃここに、この上に置いとくからよ」
「うん」
「ダイチ、ごめんな」
「え、なにが？」
「俺が・・　なんつうか、なんもわかんねえからよ」
「え？　　とうちゃん、なんのこと？」
「んな、なあ、なんもいらねえなんてよ、浮浪者じゃねえんだからよ」
とうちゃん・・　さっきかあちゃんが言ったこと気にしてんのか
「そんでダイチが叱られちまってよ」
とうちゃん

「とうちゃん、なんもいらねえんだよ、ほんとはさ、どうにかなんだよ、ほんとはさ」
「え・・？」
「無人島行くわけじゃねえんだからさ、どうしても必要なら買えんだからさ」
「ダイチ・・」
「んな、見た目とかそんなんでなんか言うヤツはどうでもいいよ」
マジでさ
「俺はとうちゃんの生き方尊敬してんだよ、とうちゃんみてえになりてえんだよ」
「あ、や、ダ、ダイチ、それはよ、それは」
「汚ねえ恰好でも臭くっても無精ヒゲ生えててもさ、京都行って楽しきゃいいじゃん」
とうちゃん　情けねえ顔してっけど
「とうちゃんは浮浪者んとき、かあちゃんのこと見てるだけで嬉しかったんだろ？」
「それは・・なあ、夢みてえでよ」
とうちゃんが照れたみてえにニッコリして
「そういうことなんじゃねえの？」
「そういうこと・・っつうのは？」
「バリッとした高けえ服着て高けえもん身につけててもさ、しあわせじゃねえ人もいんじゃん」
「そうなんか？」
「なんか、んっと、政治家とか？　いっつもシケた顔してさ」
「俺は・・　会ったことねえからよ」
「俺も会ったことは・・ねえけどさ」
「俺にはよくわかんねえけどよ、なんか辛れえことあんだろうな」
「あのおっさんたちは、とうちゃんみてえな目に遭ったことなんかねえよ」
「俺？　俺はなんも考えねえで生きてっからよ、辛れえって、ねえな」
とうちゃん
「寒みぃときはな、ちっと、そんでも炊き出しがあっとよ、温ったけえ汁もらえっからよ」
俺は　そういうとうちゃんが
「とうちゃん大好きだよ」
マジで　誰も　とうちゃんには　ぜってえ敵わねえよ
「とうちゃんもダイチが大好きだよ」
とうちゃんが　俺の頭クシャクシャッて
「ダイチ、明日の弁当の下ごしらえすっか」
「うん、する」
とうちゃんと二人でキッチンに行った

普段着

おっしゃ　勉強終わった
ねえちゃんが使ってた過去問おもしろかったな
「ダイチ」
「うっわあああ」
「なによ？」
「か、かあちゃん、パックして突然現れっから」
「お風呂上りだもの」
「あ、そんじゃ、俺入ってくる」
「先にカズオに入ってもらったわ」
つうことは・・　俺に話か
だな　ベッドに腰かけたもんな
「修学旅行に持って行く普段着」
やっぱそれか
「学校のジャージを持っていくって？」
「それは・・　俺、なんも考えてなくて、ジャージでいっかなって」
「ヒトミはそれなりのを持って行ったわよ、カジュアルだけどオシャレ」
「あ、うん、そんじゃ・・」
「愛里さんはね、あんたが学校のジャージでもいいと思ってるんですって」
「えっ？」
「それがあんたの世界ならそのままでいいって」
そのまま・・
「あの汚ったないリュックも、あんたらしくていいかなって思っちゃったって」
あのリュック・・
「愛しいっつってた」
「愛しい？　　あんたを？」
「俺のリュック」
「ハァァァァ」
ため息つかれてもさ
「あんたは、とうとう愛里さんをあの世界へ」
「あの世界？」
「カズオの」
「とうちゃん？」
「今ではカズオとあんたの世界になってるけど」

「とうちゃんと俺の世界・・つうのは？」
「すごく誇張してものすごく頑張って良く言えば、機能重視」
「あ、それ、マジそれ、機能すりゃさ」
「そのまま言えば、使えればいい着れればいい、ボロッボロでいつ捨てるのよっのゴミ溜め」
ゴミ・・溜め・・
「愛里さんはね、自分の価値観を押しつけてあんたの世界を壊したくないって」
え？
「もうそこまでいっちゃったわよ」
俺の世界を・・壊したくねえって・・　んな
「わかるからヤバイと思ってたのよ私は」
「わかるって？」
「まあそういうことだから、あんたの好きにしなさい」
「かあちゃん、俺、価値観とか世界とか、そんなん、なんもねえよ」
ドヨンとした目で見てっけどさ
「愛里が俺にこういうの着て欲しいとかこういうの持って欲しいっっつうんなら」
「だから、愛里さんはそれをしたくないって言ってるの」
「かあちゃん、俺、愛里がほんとは俺にこうして欲しいっつうことしてえよ」
「だから、そこには葛藤があるのよ」
「葛藤？　なんの？」
「なんて言えばいいのかしら、もし私ならね、私ならよ」
「なんでかあちゃん？」
「だったらもういい」
「あ、ウソ、かあちゃんならなに？」
「フゥゥゥゥゥゥ」
メッチャでっけえため息ついてっけど
「もし私なら、カレシにはセンスのある服、さりげなくね」
「さりげねえ・・センスっつうのは？」
「わからないなら私が選んだものをそのまま着て欲しいわね」
「俺、いっつもかあちゃんが選んだの着てんじゃん」
「今私は、愛里さんの立場で言ってるの」
「あ、そんじゃ愛里に選んでもらえばいぃんか」
「いいんだろうけどね」
「そんじゃ愛里に選んでもらうからさ」
「愛里さんはあんたの世界を壊したくないって言ってるけど？」
「俺は、んな、世界とかなんもねえよ」
「なにもないという世界」
「あ？」
「わからないでしょうね、わかってくれとも思ってないけどね」
「かあちゃん・・　俺、どうすればいい？」

「私に聞かれてもね」
「かあちゃん頼むからさぁ」
「ほら、そういうとこよ、そういうとこ、末っ子の、あああ」
「へ？」
「Give me a sec」
ちょっと待て？
かあちゃんがパックの上から額に手ぇあてて目ぇつぶって
「あ、これもう外してもいい時間だわ」
「ちょっと待てってパックの話？」
「ちがうわよ」
お　おぉぉぉ　パックはがしてる　脱皮みてえだ
「ゴミ箱」
「あ、はい」
パック捨てた
「こうしたら？」
「捨てるっつうこと？」
「ちがうわよ！　　なんでこういうことになるとあんたはバカになるのかなっ」
「かあちゃん、ごめん、俺なんもわかんねえから」
「ほらぁ、そういう目で」
「どういう目？」
「ハァァ・・　だからね、寝間着はジャージにして、普段着は愛里さん・・は選ばない」
「え、なんで？」
「あんたの世界を壊したくないって言ってる愛里さんが選ぶと思う？」
「そんじゃどうすりゃいぃんだよ？」
「そう・・ねえ」
かあちゃんが腕組んで目ぇつぶっちまった　あ　パキッと開いた
「日曜日まで待ちなさい」
「え？　　あ、うん」
「リュックはね・・　あのままでいいみたい」
「愛里はなんかするっつってた」
「私にも言ってたわよ、まだ何も浮かばないけどって」
「そっか」
「愛里さんがお手上げって言っても文句はないわよね」
「ねえよ、切り刻んでもいいっつっておいた」
「切り刻んじゃえばいいのに」
「え？」
「アメニティだけはちゃんと持っていきなさいよ、タオルだけとか言ってないで」
「あ、うん」
「あんたのためじゃなくて、同じ部屋の人たちに迷惑だから」
「同じ部屋？」

「臭いでしょ、汚いし」
「あ・・　はい」
「一緒にまわる人たちだって、つまりは愛里さんに迷惑かけるのよ」
「あ、そっか、ちゃんと、うん」
「わかる？　あんたが自分の道を貫こうとすると、結局は愛里さんが」
「かあちゃん、俺、自分の道とか貫くとか、そういうのねえよ」
かあちゃんが　俺の顔ジッと見て　すげえいっぺえ息吸って
「ハァァァァ」
吐いた・・けど？
「そうなのよ、そうなの、本人はな〜んにも考えてないんだけど、こっちがね」
こっち？
「ダイチ、あ、美里もいたんか」
とうちゃん　嬉しそうな顔してっけど　俺はずーーっとため息つかれてばっかでさ
「風呂、先に入らしてもらったからよ」
「うん、そんじゃ俺入ってくるよ」
かあちゃんが無言でスルッととうちゃんの横すり抜けて出てった
「美里とダイチがしゃべってんなんてな」
とうちゃんニッコニコしてっけど　楽しいおしゃべりとかじゃねえんだよ
「修学旅行の持ち物の話してたんだよ」
「そっか、美里ならな、なんでも知ってっからよ」
「俺、先にアメニティ準備しねえと」
「アメ・・」
「タオルとかハブラシとかさ」
「そんじゃ、ダイチがそれやってる間、美里の下着洗濯しててていっか？」
「全然いいよ」
とうちゃんと二人でバスルームに入った

洗面台の下の扉開けて
このカゴん中にいっぺえ入ってる・・　どれからだ？　これか？
「とうちゃん、このひげそり、どんくれえ使える？」
「ずっと使えっからよ」
「そんじゃ一本でいっか、あ・・　シェイビングフォームの小せえのはねえな」
「セッケン使えば剃れっからよ」
「この小せえ石鹸？」
「それ一個で身体も髪も全部洗えっしよ」
そっか　だよな　石鹸あればさ　あ　じゃねえよ
「かあちゃんにさ、シャンプーとかもちゃんと持ってけって言われた」
「美里に言われたんならよ、持ってかねえとよ」
「うん」
ん・・と　これがシャンプーで　こっちがコンディショナー　こっちがボディシャン

「その小せえ瓶いっぺえあっだろ？」
「かあちゃん出張んときガバッと持って帰ってくるよな」
「俺にはどれがなんなんかわかんねえな、外国語で書いてっからよ」
「そんでも、かあちゃんがとうちゃんのこと初めて連れてきたときも・・」
ねえちゃんから聞いたんだけどさ
「こういうのガバッとタオルの上に置いてたんだろ？」
「うん、小せえセッケン三個とおんなし瓶のが三本ずつあったな」
「使ったんだろ？」
「なんかわかんねえからセッケンだけ使ってよ」
「石鹸だけで三回全身洗ったんか？」
「全部なくなっちまってよ、全部使っちまったけどいぃんかなって」
「そんでも三回洗えって言われたんだもんな」
「洗った、三回」
「とうちゃん、俺とねえちゃんの長年の疑問つうか謎なんだけどさ」
「ナゾ？」
「とうちゃんどうやって身体洗ったんかなって」
「フッツーに洗った」
「かあちゃんのボディスポンジ使って？」
「あんなきれいなん、俺なんかが使えねえよ」
「あ、そんじゃ手で？」
「最初手でやったんだけどよ、なっかなか・・な、そんで」
とうちゃんが　なんかキョロキョロして　俺に顔近づけて
「なんかねえかなって、こそっと洗面台の下見たらよ、風呂掃除の道具があってよ」
「え？」
「そこに、風呂洗うスポンジあっだろ？　　あれがあってよ、これならいけっかなって」
「風呂用のスポンジ使ったんか」
ねえちゃん　やっと謎が解けたよ
「そんで、ついでにちこっと掃除してよ」
「マジ？　　それは知らなかったよ、とうちゃん」
「言えねえよ、んなことよ、浮浪者の俺がんなことしたら気味悪りぃだろ」
「風呂全部掃除したんか？」
「排水口と床だけ、鏡に水垢ついてんなと思ったけどよ、そんなんな」
「てことは、風呂用スポンジで身体洗って、そのまんま風呂用スポンジで掃除した・・んか」
「掃除すっときは風呂用洗剤使ったけどよ」
「かあちゃんには言ったの？」
「言ってねえよ」
「なんで言わなかったの？」
「なんでっつうのは？」
「や、そういうの俺、知らなかったからさ」

「あんときは・・なんで風呂入れてくれんのかわかんねえし、フワッフワしちまってよ」
どおりでねえちゃんも知らねえはずだよ
あのかあちゃんが　ねえちゃんにすらかあちゃんのは使わせねえで
ねえちゃん用のはちゃんと買って　俺ととうちゃんはおんなしの二人で使ってっけど
そのかあちゃんが浮浪者だったとうちゃんにかあちゃんのボディスポンジ
なんでそんときは使わせたんかなって　ねえちゃんも不思議がってたもんな
「ダイチ、他に持ってかなきゃなんねえもんねえんか？」
「あ・・」
頭ぶっ飛んでた
「歯ブラシは・・　これで」
ハミガキ　これ一本で 4 回使えるっつったら愛里にドン引きされたもんな
「とうちゃん、俺、愛里と約束してさ」
「なんだ？」
「ハミガキは、かあちゃんが買ってくるやつ持ってくって」
「そんじゃ、それ、持ってきゃいんじゃねえか？」
「これ開けたばっかじゃん」
「そんでもアイリちゃんと約束したんならよ」
「俺がこれ持ってっちまったら、とうちゃんとかあちゃんどうすんの？」
「俺はこっちの小せえの使ってっだろ」
「俺もたまに使ってる、古いの放っとくと固まっちまうもんな」
「固まってんのもよ、ちっと湯につけりゃ戻っからよ」
「俺もそれやってる」
小せえ頃とうちゃんがそうやってんの見てから真似してんだけどさ
「そんでも・・　美里にそんなん使わせんのはよ」
「だよな、かあちゃんはな」
どうすっかな・・　あ！
「とうちゃん、これ、小せえの、いっぺえあんじゃん」
「美里がいっぺえ持ってきてくれっから、ありがてえよ」
「これを・・夜・・朝・夜・・6 本持ってきゃいんじゃね？」
「そのハミガキじゃなくていぃんか？」
「愛里はさ、これ一本を 4 回使うのがダメだって」
「へ？」
「一回一本らしい」
「えっ　そんなにか？」
「清涼感が大事だからさ」
「せいりょう・・かん・・　なんかわかんねえけど、そんなら持ってかねえとな」
「あとは・・　これを何に入れたらいぃんかな」
「ビニール袋に入れたらいんじゃねえか？」
「そっか、それっきゃねえよな」
「俺、今持ってくっからよ」

「とうちゃん、ありがとう」
ん・・と　全部揃ったな　あとは・・　タオルだ　愛里が買ってくれたやつ
「ダイチ、これがいんじゃねえか？」
「え？　あ！　ジップロック！」
「これならよ、水っ気あってもよ」
「とうちゃん、頭いいなあ」
「んなよぉ、そんで、ほれ、大きい方だから、そのタオルも入んだろ」
「入るよ、とうちゃん、できたよ」
「よかったな」
「うん、やっぱとうちゃんは頼りになるよ」
「俺はなんもしてねえよ」
「俺一人じゃさ、どうしたらいぃんかわかんなかったよ」
「俺もわかんねえけどよ」
「これでカンペキだよ、とうちゃん」
「そっか、よかったな」
「そんじゃ俺、シャワーしてくる」
「掃除は俺がすっからよ」
「いいよ、俺やるよ」
「美里の下着干さねえとなんねえからよ」
「あ、そっか、そんじゃ頼むよ」
「ダイチ、よかったな」
「うん」
とうちゃんがニッコリしてバスルームから出てった

シャワー終わって　部屋戻った
いつもよか遅えから　愛里はもう寝ちまったかな
『愛里』送信
『寝てたらごめん』送信
『おやすみ』送信
ピコン
『なんとかなるかもです』
なんとか？
『なにが？』送信
ピコン
『あなたのリュック』
あ
ピコン
『なんとなくイメージができてきました』
イメージ？　なんのイメージなんかな？
ピコン

『まだ頭の中だけだからどうなるかわからないけど』
ピコン
『ちょっとワクワクしてきました』
ワクワク？
ピコン
『まだ頭の中だけだからかもしれないけど』
愛里は　なにを考えてくれてんのかな
俺の　なんも考えなしで言った　あのリュックのことで愛里が・・
俺が　んなことしねえでいいよっつったら愛里は・・
そしたら愛里は　一生懸命考えたことやめちまう
俺の世界　そんなん　ねえのに　守りてえって
ピコン
『寝ちゃった？』
だから　俺は
『震えてます w』送信
愛里にやってもらいてえ
ピコン
『なにそれ www』
愛里が考えてっこと　俺のために考えてくれてっこと
『まな板の鯉っす w』送信
『三枚におろしてもたたきにしてもどうにでもしてください w』送信
ピコン
『たたきって wwwww』
ピコン
『できなかったらキーーッてなって』
ピコン
『たたきにしちゃうかも w』
『いいよそれで』送信
『愛里』
マジでさ
『ありがとう』送信
ピコン
『まだ頭の中だけのことだから』
ピコン
『ありがとうは早すぎだし』
ピコン
『できあがったら』
ピコン
『あなたがメチャ怒るかも』
怒るわけねえじゃん　んなさ

ピコン
『こんなにしちゃった！ って』
愛里ならなにやってもぜってえ怒んねえよ　怒る気なんてどこにも
『そんじゃ』送信
『怒るの楽しみだなあ www』送信
ピコン
『怒る気マンマン w』
『どんだけ怒らせてくれんのかなあ w』送信
ピコン
『それくらいに思ってくれると』
ピコン
『すっごい気が楽です』
愛里　俺は今・・　涙出てて
『そんじゃ気楽にやって』送信
『メチャ怒らせてくだせえ w』送信
ピコン
『やだマジで気が楽になってるんだけど』
そっか　愛里　やべえ涙止まんねえよ
『wwww』送信
言葉浮かばねえんだよ
ピコン
『笑ってられるのは今のうちかも』
ピコン
『あなたに絶交って言われちゃうかも』
絶交なんて　するわけねえじゃん愛里
『ますます怒るの楽しみになってきた w』送信
ピコン
『もうすでに怒るのが前提って w』
『1cm 角に切り刻まれてっかな w』送信
ピコン
『wwww どんな想像してるの？ wwww』
ピコン
『マジで声出して笑っちゃった www』
『俺も笑い過ぎて涙出てる www』送信
ほんとは　愛里に　ありがとうとごめんが混じってさ
ピコン
『それじゃ私は寝ます』
ピコン
『おやすみなさい』
愛里

『おやすみ』送信
ピコン
『愛里は？』
え？
ピコン
『あなたはいつも　愛里おやすみの定型文で〆るのに』
定型文てさ　愛里　可愛すぎてまた涙出てきたんだけど
『つい』送信
『心ん中で愛里っつっちまって w』送信
ピコン
『なにそれ w』
『愛里　おやすみ』送信
ピコン
『ありがとう』
え？
ピコン
『私の気持ち　楽にしてくれて』
愛里・・　なんだよそれ・・　わかってたんかよ
『そんじゃ　これもわかってましたか？』送信
『俺は愛里に感動して泣いてました』送信
ピコン
『なにそれーーー wwwww』
『俺は愛里に泣かされてばっかすよ』送信
ピコン
『私がいじめて泣かせてるみたいな言い方しないで w』
『俺　一生鼻真っ赤っすよ』送信
ピコン
『ヤメテ wwww マジわらう www』
ピコン
『おやすみなさい』
『愛里　おやすみ』送信
なんか俺　修学旅行行かなくても愛里に満たされてんだけど
や　行きてえな　愛里と一緒に
寝よう

救急セット

ん・・・なん・・か・・ラ・・イン　LINE？　愛里か？
なんだよぉぉぉ　ねえちゃんかよぉぉ　なんでいっつも夜中にさあ
『修学旅行だって？』
かあちゃんに聞いたんだな
ピコン
『おみやげよろしく』
みやげ？　んなこと言うために今かよぉぉ
『なにがいい？　地蔵？』送信
ピコン
『地蔵送ってきたら　1m 大の自由の女神の像送ってやるよ』
なんでだよぉぉ
『そんじゃなに？』送信
ピコン
『いらない』
いらねえんなら言うなよぉぉ
ピコン
『おみやげのこと考えてるだけでウザイじゃん』
わかってんならさぁぁぁ
ピコン
『あんた　アイリのための救急セット準備した？』
愛里のための？
『愛里のためっつうのは？』送信
ピコン
『こういうとき　それぞれいちおう用意はするけど』
ピコン
『うっかり持って行くの忘れたりするから』
ピコン
『必要なのに忘れた物を誰かが持っていて、それをもらえば助かる』
たしかに　だよな
『何持ってけばいい？』送信
ピコン
『今から打つからスクショして用意すること』
『わかった』送信

そっか　そういうんは考えてなかったな　あっぶねえ
ピコン
『バンドエイド－靴擦れ起こしたときに必要』
そっか　そこんとこは考えたことなかった
『鎮痛解熱剤・ホカロン』
だよな　愛里は持ってくだろうけど　なくなったらさ
『生理ナプキン』
えっ？　　ナプキン？
『ねえちゃん　俺がナプキン持ってくの？』送信
ピコン
『外出中突然なったり替えを持っていくの忘れたりすることあるから』
ピコン
『女子はたいてい持ち歩くけど　万が一のためにあんたも持って行け』
あ・・　そっか　ん・・と
『買ってけばいいんか？』送信
ピコン
『一枚か二枚でいいよ』
ピコン
『女子は旅行には袋ごと持ってくから』
一枚か二枚・・
『その一枚か二枚はどうすれはいい？　　愛里にもらえばいいんか？』送信
ピコン
『カノジョにナプキンくれっていう男　キモッ』
ハァアアア？
『そんじゃどうすりゃいいんだよ？』送信
ピコン
『かあちゃんの持ってけばいいじゃん、使わなきゃ戻しておけばいいんだから』
あ・・そっか
ピコン
『以上のセットは必ず持ち歩くこと　ホテルに置いておいたら意味ない』
『わかった』送信
ピコン
『ここからは部屋に置いといてもいいやつ
　アイシングするためのビニール袋－湿布や冷えピタは表面だけで効かない』
アイシング？
『ねえちゃん　アイシング必要かな　修学旅行でさ』送信
ピコン
『歩きすぎて筋肉痛になったり　熱出したときも冷えピタより効く』
そっか
ピコン

『炭酸バスバブル』
『三人部屋だからバスバブル入れられっかな』送信
ピコン
『あれは疲れも取るし芯から温めるから旅行にはマスト
　生理のときは絶対的に必要』
そっか　そうだよな　そんでもあれって
『ねえちゃん　袋ごと持ってきゃいいの？』送信
ピコン
『90 錠入り持っていけば？　　笑笑』
『マジで？』送信
ピコン
『小分けの袋に分けて入れるって頭になんないかな？』
あ・・
『そうする』送信
ピコン
『あんたのことだから救急セットのことなんか忘れてると思ったよ』
俺のことだからってさ
ピコン
『ツバつけときゃ治るっていうヤツだから　笑笑』
『忘れてた　つうか頭にも浮かんでなかった』送信
ピコン
『しおりに書いてるよね』
ん・・と　しおり　どこだ？　　あった　ん・・・と
『常備薬（ 体温計 ）しか書いてねえよ』送信
ピコン
『むしろ体温計いらない』
ピコン
『養護教諭の部屋があってそこに体温計あるから』
そうなんか
ピコン
『具合悪くなったらそこに行ってホテルに残るのを許可してもらう』
んなこと説明されてねえな
ピコン
『養護教諭の部屋も事前に調べておいた方がいいよ』
『わかった　ありがとう』送信
ピコン
『とうちゃん　あんたがいない間淋しいだろうね　笑』
『かあちゃんいるからさ』送信
ピコン
『とうちゃん母性強いからさ　特にあんたに　笑笑』

母性ってさ　あ！　　そうだ　そうだよ
『ねえちゃん　謎が解けたよ』送信
『かあちゃんがとうちゃん連れてきた夜』送信
『とうちゃん風呂掃除用のスポンジで身体洗ったんだってさ』送信
ピコン
『父ちゃんらし過ぎる 爆』
『そんでついでに床と排水口掃除したんだってさ』送信
ピコン
『やりそーーーー　笑』
ピコン
『とうちゃんに会いたくなっちゃった　笑』
ねえちゃん　そうだよな　とうちゃんもねえちゃんに会いてえよな
『冬休みは帰ってこねえの？』送信
ピコン
『夏より短いしね』
ピコン
『クリスマス休暇は美智子ママのとこで過ごす予定　笑』
美智子・・　あ
『愛里のお母さん？』送信
ピコン
『いろいろ送ってくれる　日本のお菓子とか』
愛里のお母さん　ねえちゃんが世話になってます　ありがとうございます
ピコン
『美智子ママも母性強いから　私も甘えてる　笑』
ありがてえな　愛里のお母さん
ピコン
『救急セット忘れるなよ』
『忘れねえ　ねえちゃん　ありがとう』送信
ピコン
『美智子ママが心配してたから』
ピコン
『ちゃんと準備できるかしらって　笑』
だよな　離れてんだもんな
ピコン
『かあちゃんがちゃんと準備するから大丈夫って言ったら』
ピコン
『ありがたいわ〜ってホッとしてたよ』
ねえちゃんも愛里のお母さんの真似　うまくなってきてんな
ピコン
『以上』

ピコン
『See ya』
ねえちゃん　なんか俺も会いたくなっちまったな
いやいやいや　寝ねえとさ　もうこんな時間になっちまったよ

学校への道
フ・・ワアアア
「また寝不足？」
「ゆうべ真夜中にねえちゃんから電話かかってきてさ」
「おねえさん元気みたいですね」
「愛里んとこにもかけてきたんか？」
「昨日ママから電話が来ましたよね」
え？　あ・・　ハムハムしようとしたちょうどそんとき　あった
「おねえさんの話ばかりしてました　フフ」
「なんかメッチャ世話になってるって」
「ママったら、おねえさんにいろいろ送りつけてるみたいで」
「ねえちゃん喜んでたよ」
「イヤなら断ってくださいね、じゃないと永遠に送り続けるから」
「ねえちゃんは愛里のお母さんに甘えてるっつってたよ」
「ママに？　えぇぇ、ママの方が甘えてるんだと思う」
「んなことねえよ、クリスマス休暇も愛里ん家に泊まらせてもらうっつってたしさ」
「クリスマス・・」
愛里が急に暗い顔になってんだけど
「愛里、どした？」
「ママが・・　冬休み、クリスマスとお正月、アメリカで一緒にお祝いしない？ って」
「えっ」
「来年は受験だから夏休みも来れないでしょって」
「そ・・っか」
「私はクリスマス以前に、修学旅行のことで頭いっぱいって言っておいたんですけど」
愛里が・・　冬休みに・・　アメリカ・・
「あ、やだ、知恵熱出さないでくださいよ」
「え？」
「私は何も決めてないし、気持ち的には行かないになってるから」
「あ、そっか、あ、うん」
「ママがまたわけわかんないこと言い出して、この前どこだかの誰だかさんが、
　佃煮をたくさん送ってくださったから、修学旅行に京都のおみやげを送ってくれない？ って」
「マ・・ジ？」
「私、ブチ切れちゃって、キーホルダー買うからって、京都タワーのキーホルダー」
笑っちゃ・・いけねえ

「そしたら、愛里ちゃんいいわ、ママがこちらから送るからって、最初からそうしてよ」
愛里は　やっぱおもしれえ
「なにニヤニヤしてるんですか？」
「や、してねえよ」
「してたけど」
「してねえって」
「してたけど？」
ん・・っと　あ　これ　愛里が持ってて俺が持つっつた
「愛里、この袋、なに入ってんの？」
「ノンキに」
「へ？」
「あなたのリュックです」
「えっ？　　な、なんで？」
「現物があった方が、あ！　　放課後、私は買い物に行くので」
「そんじゃ俺も」
「あなたは来ないで」
「なんで？」
「ジャマ」
「ジャ、ジャマ？」
「集中したいから」
「何に？」
「あなたのリュックが 1cm 角にならないことを祈っててください」
「え？ あ、お、おう」
「なっちゃうかも」
「なってもいいよ」
「あなたは気楽ですね」
「え？」
「あ、ダメダメ、ちょっと緊張しててピリピリしちゃった」
「俺のリュックなんかで緊張しねえでいいって」
「だって」
「愛里、遊び」
「え？　　遊び？　　なにが？」
「俺のリュックでさ、遊ぶつもりでさ、ダメならダメでさ」
愛里が　ゆーーっくり俺のこと見上げた
「私は」
「あ、はい」
「ダメにしたくないんです」
「そんでもさ」
「私の中のイメージを具現化したいです」
具現・・化

「ダメならダメでとか言わないで」
「あ、うん、ごめん」
「ああ、またピリピリしちゃった、ごめんなさい」
「いいよ、慣れてっから」
「慣れてる？　慣れてるってどういうこと？」
「あ、や、んっと」
「あ、ごめんなさい、なんだかすごく攻撃的な」
「んなことねえよ、ふつうだよ」
「私はいつも攻撃的ってこと？」
「じゃねえよ、愛里は攻撃的なんかじゃねえよ」
「あなたはいつもそうやって私の悪いところ全部に目をつぶるから」
「愛里」
にぎってた手ぇ　ギュッてしたら
愛里が小さく息吐いた
「ごめんなさい、私がやるって言いだしたのに」
「そんだけ真剣に考えてくれてんなんてさ、マジで嬉しい」
「どうなるかわかんない」
「うん」
「マジで 1cm 角にしちゃうかも」
「うん」
「なんならもう繊維全部ほどいて糸にしちゃうかも」
「ハハハハ」
「笑わないで」
「これを全部ほどいて繊維にする方が大変なんじゃねえかな」
「そうですね・・　それに・・　あなたの大切なリュックだから」
「あ、や、大切っつう・・」
「ダメかもって思ったら、手を付けないで・・　撤退します」
愛里が　下向いちまった
愛里は　かあちゃんに　俺の世界を守りてえって
「愛里ぃぃ、撤退しねえでくれよぉ」
「え？」
「俺があのリュック持ってけるかどうかは愛里にかかってっからさぁ」
「持っていけるか・・どうか？」
「でねえと、かあちゃんに捨てられちまうよぉ」
「あ・・」
「愛里に守ってもらうっきゃねえんだよ」
守るものなんて　俺にはなんもねえけど
「私・・に？」
愛里の目に　涙溜まって
「俺は、愛里がいねえとどうもなんねえよ」

涙でいっぱいの目で俺のこと見てて　くちびる噛んで
「愛里がいねえとさ」
そんなん　なんもねえけど　そんでもさ　愛里があるっつうならさ
「俺の世界は壊滅する」
愛里が　片手で口押さえて　必死に声出さねえように泣いて・・
「愛里」
にぎってた手ぇ離して　愛里の肩抱いて
「俺、すげえ嬉しい」
マジでさ　愛里
「愛里が守ってくれんなんてさ、俺、メッチャしあわせだよ」
「テー・・マは・・」
テーマ？
「ボロさの、あ、ちがう、時間だけが作れる・・味？　　えっと」
かなり苦戦してんな
「がんばるけどぉぉ」
「愛里がやってくれんならさ、全面でっけえ花柄でも」
「でっかい・・花柄？」
「俺、マジで喜んで使うからさ」
「あなたの・・」
「うん、俺の？」
「想像がダサくて」
へ？
「ハードルがガグーーーッと下がって、気が楽になりました」
「ん・・と？」
「なんか私、おかあさんにプレゼンするような気になっちゃってたけど」
マジか
「あなたのでした」
「うん、俺の」
「だったら、Better than nothing でいいなって」
「いいよ、なんでも、愛里がやってくれんなら」
「校門です」
「あ、おう」
愛里の肩抱いてた腕　離した
「ありがとう」
「ん？　　なに？」
「あなたが・・　私のカ」
「上原さーん！　　おはよう」
「あ、サトユミさん、おはよう」
愛里　カ　なに？
「上原さん目が赤いけどどうしたの？」

愛里
「あ、えっと、ちょっとこすっちゃって」
「コンタクトじゃないよね」
「ううん、ちがう」
「私はコンタクトだからうっかりこすると地獄」
「そうなの？」
「うん」
愛里　俺が愛里のカ　なんだよーーー？
なんとなくわかってっけど　愛里に言って欲しいんすけどーーー！
内履きに履き替えっか

俺のリュック

放課後の学校前のバス停
「なんであなたまで並んでるの？」
「駅まで送る」
「いいから、バスを下りたら駅だから」
「そんでもさ」
「駅に着いたら一緒に行くとか言うから」
「え・・」
「言いましたよね、集中したいから一人で行きたいって」
「そんじゃ・・　バスが来るまで」
「約束ですよ？」
「おいっす」
「フッ　留守番させられるゴールデンみたいな顔」
「どんな顔だよ？」
「キュゥゥンみたいな」
「だってさ、俺のリュッ・・　あ、俺のリュックをなにかするなにかを買うんだよな」
「まあ・・　そうです」
「そんじゃ金」
ケツポケットから愛里用財布
「大丈夫です」
「そんでも俺のリュックんだろ？」
愛里がキッてカンジで俺のこと見上げて
「あなたがもし私に 1000 円渡したとして、もしかしたら、その 1000 円を」
「ビリビリ？」
「え？　　そうです、ビリビリに破くのと同じ結果になるかもしれないんだから」
「いいよ、そんでも」
「私がイヤ」
「俺は愛里のために稼いでっからさ」
「だから、余計にそれをビリビリにしたくないです」
「なんでビリビリ前提だよ」
「だって、どうなるかわからないから、今は誰がお金をどうとか考えたくない」
「そっか」
「はい」
バスが　来た

「それじゃ、いってきます」
「帰り、電車乗るとき連絡くれよ」
「はい」
愛里がバスに乗り込んで　後ろの方に立って　俺のこと見た
「愛里」
聞こえねえのはわかってっけど
「いってらっしゃい」
愛里が　コクンて　小首傾げた
かっ　わいいいいいいい
バスが　駅に向かって走ってった
そんじゃ・・　俺は帰るか

家のドア開けて
「ただいま」
「ダイチ、おかえり」
「とうちゃん、すぐ着替えて買い出し一緒に行く」
「そっか？　なんか準備しなきゃなんねえなら、俺ひとりで行くからよ」
「買いてえもんがあんだよ、ゆうべねえちゃんに言われてさ」
「ヒトミか、元気だったか？」
「メッチャ元気だった」
「そっか、よかった」
とうちゃん　ホッとした顔でさ
ねえちゃんは　とうちゃんに直には連絡しねえんだよな
かあちゃんと電話してる途中でちこっと代わってしゃべるけど
前にかあちゃんに聞いたことあんだよな
なんでねえちゃんはとうちゃんに電話したりしねえのかなって
かあちゃんは、とうちゃんと二人きりでしゃべったら泣いちゃうからって
帰りたくなっちまうからって
　「あんたが生まれるまで二人きりだった数年間はヒミにとっては、
　　“ヒトミだけのとうちゃん”との時間で、それが蘇ってきちゃうみたい」
ねえちゃんだけのとうちゃんとの時間　それだけはさ　俺にはねえもんなんだよ
「とうちゃん、行こ」
「今日は何が安くなってっかな」
「サバ安くなってねえかな」
「サバな、美里はサバの味噌煮好きだもんな」
そんでも　俺には　今さ　こうやって　とうちゃんと二人きりで買い出し行く時間がある

サバ安くなってた　よかったあ
あとは・・　タッパーやビニール袋売ってるコーナーに・・　あった

小分け用ジップ付きの袋　いっちゃん小せえやつ
10 枚一組か　10 枚もいらねえけど　またなんかんときに使うよな
「ダイチ、それ・・　なにに使うんだ？」
「ねえちゃんに言われてさ、炭酸バブルバス小分けにして持ってけって」
「修学旅行にか？」
「うん、愛里のために持ってけって言われた」
「そっか、ヒトミが言うんならな」
とうちゃんは　ねえちゃんが言うことは絶対的に信頼すんだよな
あ！　そうだ　あれもいちおう買っとくか　チョコ
「それは修学旅行のおやつか」
「や、もしもんときのさ、愛里が生理になったらっつうさ」
「アイリちゃんは修学旅行んとき生理になんのか？」
「ん・・っと、先月は実力テストの途中・・」
あれ？　6 日・・だったんじゃねえか？　最終日が二日目でさ
つうことは・・　この土曜日に　そうすっと二日目は日曜・・か？
かあちゃんと出かけるっつってたけど　ダメかもしんねえな
「ダイチ、どした？」
「愛里・・　今週末、生理になっかもしんねえ」
「そっか、そりゃ辛れえな」
「とうちゃん・・　ズレて明日なったりすっかな？」
「ヒトミも早くなったり遅くなったりしてよ」
「おからの煮物作っかな、明日の弁当にも入れられっからさ」
「だな、そんじゃ・・　おからと、ゴボウがねえからゴボウもよ」
とうちゃんと二人で　おから売ってる豆腐コーナーに走った
愛里　俺はこんなことっきゃできねえけど　そんでもなんとか
「ダイチ、ゴボウ買わねえとよ、しいたけはあっから」
「そんじゃあっちだな」
スーパーん中走り回ってっからさ

とうちゃんのサバの味噌煮　ごぼう入ってるやつ
生姜の香りが効いてて　メッチャ腹減ってくる
俺のおからの煮物もできた・・けど
愛里から連絡がねえ
どこに行ったんかはわかんねえけど　時間かかってんのかな
電車乗ったら連絡するって約束してくれたもんな
なんかあったんかな
『愛里　今どこ？』送信
途中の駅まで迎えに行く
ピコン
『私の部屋です』

えっ？ えっ？
『いつ帰ってきたの？』送信
ピコン
『時間は憶えてないけど　一時間くらい前かな』
マジで？
『なんで連絡してくんなかったの？』送信
ピコン
『ごめんなさい』
ごめんなさいってさ　謝んなくてもいいけど　そんでもさ
ピコン
『早く帰って早く始めたくて』
『そ
そっか　なんて気持ちになんねえ
　心配すんじゃん
　帰ってきたら連絡してくれよ
俺ん中は　そんな言葉ばっかで
そんでも　愛里は　俺のリュックをどうにかしようとしてくれてて
だから
『よろしくお願いしやす w』送信
ピコン
『がんばる』
がんばんなくていいよ　がんばんなくていいから　あんな俺のリュック
愛着があるとかこだわりがあるとかじゃねえんだよ　まだ使えんなって思ってただけで
あんなリュックより　俺は　愛里が危ねえ目に遭うのが　連絡くれなかったことが
「アイリちゃん、まだ帰ってきてねえんか」
「もう帰ってきてるって」
「そっか、そんじゃ晩メシは一緒に食えんだな」
「とうちゃん・・」
「あ？　　どした？」
「昔・・　かあちゃんが・・　連絡もくれねえで遅く帰ってきたときって」
「連絡つってもよ、電話もなんもなかったからよ」
「その間・・　とうちゃんどうしてた？」
「待ってた」
「心配じゃなかった？　　連絡もなんもなくてさ」
「すげえ心配だった、ねーちゃんボヤッとしてっとこあっからよ、事故とかよ」
「そんでかあちゃん帰ってきたときは？」
「ホッとした」
「そんだけ？」
「よかったあって力抜けて座り込んじまったな」
「よかっ・・た」

「ねーちゃんになんもなくて嬉しかった」
嬉し・・かった
俺は　ちっと　ちっと連絡もらえねえって　ちっとモヤっちまったのに
とうちゃんは　よかったって　嬉しかったって
俺は・・　小せえ　メッチャ　小せえ　そんで多分　ウゼえ
「とうちゃん」
頭ボリッボリに
「ダイチ、どした？　痒いぃんか？」
掻きてえ衝動が抑えらんねえ
「とうちゃん、俺、小っちぇ、イヤんなるくれえ小っちぇえ」
とうちゃんが　俺の手ぇつかんで
「ダイチはでっけえよ」
「メッチャ小っちぇええ」
「俺とおんなしくれえ背ぇ伸びてよ」
「外じゃねえよ・・　中・・」
「中か、中は、ダイチのはでっけえよ」
「え？」
「俺は院や銭湯でいろんなの見てっけど、ダイチのはなかなかねえくれえでっけえよ」
そういうことじゃ・・ねえけど　なんか・・　笑っちまって
「そっか、俺の・・」
「おう、どっこに出してもよ」
「ハハハ・・　どっこに出してもってさ」
「おう、どっこでも堂々と見せられっぞ」
「どこでも出しちゃダメじゃん」
「あ、だな、出しちゃなんねえな」
とうちゃんとしゃべってっと　俺の中にあったモヤッとしたのがスッと消えてく
「とうちゃん、俺の中学んときのリュックあんだろ？」
「あれはなんでも入っからいいな」
「かあちゃんが汚ったねえっつってさ」
「あ・・　そっか、そんじゃ・・」
「愛里が、なんかやってくれるみてえでさ、そしたら持ってけんだよ」
「そっか、よかったな、アイリちゃんがなんかやってくれんならな」
「うん」
「なんかってなんだ？」
「それは・・」
俺もわかんねえんだけど
「できてからのお楽しみだよ」
「そっか、楽しみだな」
「うん」
「ダイチが作ってんのは、明日の弁当のおかずか」

「うん、おから入りハンバーグ、とうちゃんは何にすんの？」
「サバとシソの竜田揚げにしようかと思ってよ」
「少し愛里のにもらっていっかな？」
「そんじゃ美里にもハンバーグもらっていっか？」
「いいよ、あれ？　つか、かあちゃん遅くね？　今週は早く帰ってくんだよな」
「仕事がな、そんでもいつもくれえには帰ってくるってよ」
「え？　連絡あったの？」
「あった」
「いつ？」
「ダイチが帰ってきた・・ちっと前かな」
なんだよぉ　かあちゃんはちゃんと連絡してきてたんじゃん
とうちゃんが心配すっからだよな
愛里ぃぃ　俺も心配してたんすけどぉお
やめよう　チンコまで小さくなっちまいそうだ

かあちゃんはとっくに帰ってきてるのに　愛里はまだ来ねえ
「愛里さんどうしたのかしら？」
「俺のリュックをなんかしてくれてる・・らしい」
「あのリュックをなんとかは、永遠にできない」
永遠て
「ダイチ、愛里さんにもうあきらめていいって言いなさい」
「え？」
「いいわよもうあのまま持って行けば」
「あ・・　うん」
ピコン　愛里だ
『私の部屋に来てもらえますか？』
「愛里の部屋に来てくれって」
「もういいからって連れてきなさい」
「あ、うん」
『今行く』送信
家飛び出して　愛里の部屋に走った

ドアホン鳴らしたら　ドアが開いた
「愛里」
「説明します」
「せ、説明？」
「ひとつひとつの私の考えが伝わるかどうかわからないので」
「考え・・　んっと」
「こっちに来てください」
「あ、おう」

愛里の後ろついてリビングに入った
「テーマは、ボロさを逆手に取る」
「ボロさを逆手に、うん」
「あ、ちがう、使いこなし感をあえて活かす・・の方かな？」
「そっ・・か」
「まず、ここを見てください」
正面の上の穴開いてたとこに・・　バンドエイド？　　や　違げえな　これは・・
「このアップリケ、けっこうリアルで、最初見たとき、メッチャバンドエイドって思って」
「あ、うん」
「最初はここに別のアップリケをつけようと思ったんだけど、
　これはあえて、バンドエイドで修理してま〜す的な方が、ごまかしてる感がないかなって」
ごまかしてる感・・
「バッテンのもあったけど、それはあまりにあまりだなって、だから、この二枚をこうやって、
　斜めにちょっとずらしてつけて、上のにはI’m okって書いてあって、
　パーフェクトじゃないけど、まあなんとか大丈夫みたいな？　　そういうカンジで」
愛里がパッと自分のひざ元に戻して
「メインは次です、正面の大きなポケットありますよね、ジッパーがついた」
「え、あ、うん」
「校章がついてましたよね、かすれちゃっるけど」
「あ、うん、中学の指定のだからさ」
「校章って、象徴っていうか、ここのですっていう所属を表す的な？」
「んっとさ、俺はもうあの中学の生徒じゃねえからさ」
「はい、だから、このリュックはあなたのです」
「あ・・うん、俺のだ・・けど」
「校章と入れ替わりに」
入れ替わり？
「あなたらしい象徴っていうか、あなたを表すっていうか」
俺を表す？
「これです」
これ・・は
「この右端のかすれた校章の上に、ショベルカーアップリケ貼りました」
クレーン車　これが・・　俺の　象徴・・
「くすんだオレンジっぽい黄色ととくすんだ紺だから子どもっぽくなくて、
　このリュックにも合うんじゃないかなって、すごく鮮やかな黄色と青のもあったけど、
　それだとモロ幼稚園児のみたいになっちゃうから」
俺は・・
「あと、ここのジッパーの、引き手？　　引っ張るところ？　　上のも塗装が剥げてて、
　代わりの、なんだっけ、タブ？ とかいうのが売ってたけど、

　そこだけ新品感を主張しちゃうなって、この使いこなし感はこのままに、でも・・」
言葉・・出なくて・・
「どうしようかなって考えてたら思い出して、あなたの作業服のズボンのツギ用の端切れ」
え？
「染めたのがまだ少しだけど残ってるって」
愛里が染めてくれたあの端切れが・・　この紐に・・
「このオレンジっぽい黄色となんとなく合う色があったからリボンみたいな紐を作って、
　久しぶりにミシン使ったからちょっと時間かかっちゃったけど、それをこうやって、
　ここにつけたら統一感が出るし、剥げたところは隠れるし、それに・・
　ショベルカーと作業服のツギに使った布なら、あなたにとって特別感あるかなって」
くちびる　痛くなるほど噛んでも　涙　出てきて
「あと、このリュックの紐、ダラ〜ンて、これもなんとかしたいなって、
　まとめる用のクリップみたいなのも売ってたけど、それだとなんか無理してますみたいな、
　もっと、逆に雑に？　ジャマだからテキト〜に留めたカンジにできないかなって検索したら、
　ヘアゴムで止める方法があって、私はいっぱい持ってるからそれじゃない？ って、
　ここ、ほら、こうやってテキト〜な長さにまとめて、ゴムで二ヵ所留めたら、
　わざとらしくないけど、ちょっとスッキリしたかなって」
手の甲で・・　鼻押さえても　鼻水止まんなくて・・
「あと、これは・・グフッ　見つけたらどうしても貼りたくなっちゃって、
　でも正面に貼るのはちょっと合わないなと思って、ここの裏の上の真ん中に」
愛里がクルッとリュックの裏っ側見せて
「タコさんウィンナー！　えっ　えええっ？　泣いてる？ なんで？」
「愛・・里が・・お・・」
「え・・　もしかして・・　あなたの世界を壊しちゃっ・・た？」
「壊し・・て・・ねえ・・よ・・俺の・・クソ汚ねえリュッ・・クが」
「やだ、なんで泣いてるの？　気に入らなかったら剥せるから、手で縫い付け・・　あ！
　裁縫用ボンドで貼ってから縫い付けたんだった、でもなんとか剥せると思うから」
「剥さねえで・・くれよ」
「だって泣いてるから」
「感動してんだよぉ」
「泣くほど？　泣くほどじゃないと思うけど」
「愛里は・・　バカじゃねえの」
「バカ？　私なりにがんばりましたけど？　気に入らないのかもしれないけど」
「こんな・・ショベルカーとかさ、作業服のツギに使った端切れとかさ・・
　愛里のゴムにタコさんウィンナーって・・」
「タコさんウィンナーがダメだった？」
「ダメじゃねえよ、メッチャ・・　ヤベ・・止まんねえ・・」

「えぇぇぇ、まさか泣くとか思わなかったから、どうしたらいいのか」
「これは」
鼻すすって　手で涙ぬぐって
「世界でたったひとつの、俺の、メッチャ大切でメッチャ特別なリュックになった」
「え、ほんと？」
「マジ、メッチャ・・　マジ」
「ハァァァ　よかったぁ」
「愛里」
抱きしめて　愛里のこと　俺の腕ん中に
「あなたの大切な世界を壊したくなくて、それをそのまま生かして・・
　もっとあなたらしく生き返らせたくて、どうしたらいいのかなって」
んなこと考えててくれて　んなことやってくれて
「俺は・・　愛里がいねえと、どうもなんねえよ」
「アップリケがあれば・・なんとかなると思うけど」
「そんなんじゃねえよ、愛里じゃなきゃダメなんだよ」
「そう・・ですか」
「愛里じゃねえと・・さ」
愛里の　くちびる　そっと・・もっと・・あ・・もっ・・あ・・・
ゴツッ　え？
「痛った〜い」
「あっ　愛里、ごめん」
「倒れてくるから、頭打っちゃった」
「愛里ごめん、マジごめん」
「あなたの身体なんか支えられないから」
「ごめん、愛里、んっとにごめん」
「自分のこと仔犬だと思ってる？」
「え？」
「自分のことを小さい仔犬だと思ってダイブしてくる大きいゴールデン」
「え・・あ、ハ・・ハハ・・」
愛里　マジでごめん　俺　一瞬　理性消えた
「あ！　おかあさんたち待ってますよね」
「あ、待ってる、愛里にあきらめていいからって言ってこいって言われた」
「あきらめないです」
「うん、こんなすげえの作ってくれた」
「あきらめたら、あなたに・・　負けちゃう」
「俺に？」
「あなたは、一年も、私と一緒に京都をまわるって思い続けてくれたのに」
「愛里・・　ちっと今は・・泣かせねえでくんねえかな」
「え？　やだ、泣かせようとしてないし泣かないでください」
「おう」

鼻すすって
「泣かねえよ」
「それじゃ、はい、これ」
愛里が　リュック　俺に差し出した
「愛里、ありがとう」
リュック持って　愛里の手ぇにぎって
愛里の部屋を出た

てんとう虫のリュック

かあちゃんが　リビングのソファに座ったまま
愛里がやってくれた俺のリュックをジーーッと見てる
かあちゃん　かあちゃんがなんつっても　俺はそのリュック持ってく
俺にとってはただのリュックじゃねえんだよ　すげえ特別で大切なリュックなんだよ
つか　なんか言ってくれよ　愛里がすげえ不安そうな顔してんじゃん
「ハァァァァ」
ため息ってさ
「よくこんなことを思いついたわね」
それは・・　どっちの意味だ？
「愛里さん、この腐乱死体を」
腐乱死体？
「生まれ変わらせたわね」
「生まれ変わ・・そこまでは」
「生まれ変わったわよ」
「私は・・　なんていうか、心肺停止になっているのを」
なんの　話だ？
「必死に、こうやって」
心臓マッサージ？
「なんとか息ができるようにはできたかなって」
俺のリュックは　そんな状態だったんか？　　心肺停止？
「違うわよ、このリュック、もともと学校指定のダサいリュックでしょ」
ダセえってさ
「もともとダサい上にあのボロさじゃ手の施しようがないじゃない？　　火葬しかないわよ」
なんでかあちゃんは俺のリュックを死体扱いすんのかな
「それをねえ、このボロさをあえて味にしちゃうなんてね」
マジ？　　だよなだよな
「このアップリケも、新品のリュックにつけたら、ここまでは活きない、
　このボロさだからこその、このアップリケのチョイス、見事よ」
かあちゃん　俺　泣きそうだよ
「この引き手の布も、このボロいリュックだからこそ味になっちゃってる」
そうなんだよ　かあちゃん　俺の作業ズボンのツギすんのに染めてくれたやつでさ
「私にはできない」

マジで？　かあちゃんでもできねえ？
「私なら速攻火葬」
だかからなんで死体扱いすんだよ
「ダイチ」
「あ？ え？ なに？」
「このリュック、信じられないくらいカッコよくなっちゃったわね」
「だよな、すっげえかっけえよな」
「旅慣れてる男のリュックみたいよ」
「え？　んな、まあ、うん、愛里が・・」
「さあ、ごはんにしましょう、愛里さんもお腹空いたでしょ」
「はい」
うん　いいよ　俺の話聞かなくてもさ　俺は　このリュックでマジ満たされてっから

かあちゃんと愛里が楽しそうにしゃべりながらメシ食ってる
「おからの煮物美味しい」
愛里が嬉しそうな顔してさ
俺は　おから煮るくれえっきゃできねえけど　愛里が美味えっつってくれんならさ
メシおかわりすっかな　腹へっちまって
「ダイチ」
とうちゃんが小せえ声で
「ん？　とうちゃん、なに？」
「これよ」
ひざの上にあのリュック置いて
「この紐よ」
とうちゃんがジッパーゆっくり開けて
「こうやって・・　クレーンとこまで持ってくとよ」
ゆーーっくりクレーン車のアップリケに近づけて
「この結んでるとこがよ、クレーンのフックんとこにちょうど来るんだな」
え？
「クレーンで引っ張ってるみてえでおもしれえな」
紐の長さ・・　愛里は　そこまで考えたんか？　それとも
「愛里」
「はい」
「この紐さ」
「あ、縫い目？　そこはあまり見ないで」
「じゃなくてさ」
リュック持ち上げて見せて
「こうやっと、クレーンのフックんとこに引っかかるみてえに見えんだけど」
「長さを決めるとき、そういう方が意味があっていいかなって」
マジ・・か　すげえ　愛里　すげえ

あ　かあちゃんと目が遭った　かあちゃんも　驚いてんな　あの目は
「え？　　なんで？　　長すぎる？」
「じゃねえよ、なんつうか・・」
愛里は　深くて　すげえ深くて
「アイリちゃんはうめえこと考えんだな」
「そう・・ですか？」
「こんなん楽しいよ」
「あ・・　よかった」
俺は　またヤラレてる
「味が沁みてて美味しいですね」
嬉しそうな顔でごぼう食ってるよ

晩メシ終わって
かあちゃんと愛里はリビングでしゃべってて
俺ととうちゃんはキッチンで片付けてて
「ダイチ、幼稚園ときのリュック憶えてっか？」
「幼稚園とき？　　んっと、なんか薄いブルーにグレーの」
「それは年中さんときからのでよ、年少さんの遠足んとき」
「憶えてねえな」
とうちゃん　なんか笑ってっけど
「年少さんときのはじめての遠足でよ、美里がリュック買ってくるっつってたんだけど、
　あんときは美里はすげえ忙しくてよ、急に出張入っちまって買うヒマなくなっちまってよ」
「そんじゃ誰が買ったの？」
「ダイチと俺でホームセンター行ってよ」
とうちゃんが買ったんか
「子ども用のリュック置いてるとこ行って、美里から金預かってっからよ、
　ダイチの好きなの買っていいよっつったら、チョコチョコってセール品とこに行ってよ」
さすが俺だな
「いっつも俺と買いもん行くからだろうな、そんでよ、そん中のたたき売りみてえのがあんだろ、
　値札のシール何枚も貼ってあるやつ、そっからよ、いっちゃん安いの見っけてよ」
とうちゃんの実地訓練の賜物だな
「これがいいっつうから、それ買ってきてよ、そんでヒトミが小学校から帰ってきて、
　そのリュック見てよ、ダイチ、こんなの買ったらかあちゃんに叱られるよって」
「こんなのてどんなやつ？」
「黄色いのに、こんくれえの赤い丸がいっぺえついたやつ」
あれ？　　なんか・・　あ　パジャマ縫うのに買った生地とおんなしだよ
「ヒトミが、こんなのてんとう虫みたいだよっつったらよ」

とうちゃんがメッチャワクワクしてるみてえな顔で俺のこと見て
「ダイチが目ぇこ〜んなでっかくして、てんとう虫？　俺てんとう虫みてえなの？ っつって、
　メッチャ喜んじまって、そのリュック背負って部屋ん中走り回ってよ、
　可愛かったな、手ぇこんなして、飛んでるつもりだったんだな」
とうちゃん　まるで今小せえ俺が目の前で走ってんの見てるみてえな顔してさ
「そんで、興奮しちまってよ、夜中んなっても、寝れねえって」
「それだけは憶えてるよ、とうちゃんにおんぶしてもらってさ」
「ん、おんぶして、ダイチの上から毛布背負って野っ原歩いてよ、そしたら眠っちまったな」
「俺、そのリュック憶えてねえんだけど、どこやったの？」
「ん・・・　遠足の次の日、美里が帰ってきて・・」
葬ったんだな
「ダイチが、俺のリュックは？ 俺のリュックは？ って、俺、なんつっていぃんか」
かあちゃんが捨てたとは言えねえもんな
「そしたらよ、ヒトミが、てんとう虫になって飛んでちゃったってよ」
「ハ？」
「ダイチはヒトミの言うことはなんでも信じっから、そんときも信じちまってよ」
ねえちゃん　真っ新な俺を騙すなよ
「とうちゃん、俺のリュック、てんとう虫になったんだよ、ほんとにてんとう虫になったって、
　ビックリした顔で俺によ、その顔がすっげえ可愛くてよ、俺、涙出ちまってよ」
つか可哀そうだろ年少さんの俺
「そうだな、ダイチのリュックはてんとう虫になって飛んでちまったんだなっつうと、
　とうちゃん、すごいねすごいねって・・　可愛くて可愛くて・・」
え？　とうちゃん　涙ぬぐってっけど
「そんでよ、野っ原で遊んでっとよ、あすこに、たま〜にてんとう虫来んだろ？」
「うん」
「そんときも、赤に黒のてんとう虫が葉っぱにとまっててよ、ダイチはこうやって顔、
　そ〜っと近づけてよ、俺のてんとう虫と会った？　俺のてんとう虫元気？ って・・
　それが・・メッチャ・・可愛くて・・涙出ちまって・・」
とうちゃん　今も涙出てっけど
「今度は・・」
鼻すすってるよ
「捨てらんなくてよかったな」
やっぱ　てんとう虫リュックは　かあちゃんが捨てたんだな　わかってたけどさ
「アイリちゃんのおかげだな」
「うん、なんかすげえかっこよくなってさ」
「かっけえな、クレーンついててよ」
「俺が好きなんじゃねえかって、愛里がさ」

「あんとき、俺がああいうのつけられてたらよ」
「え？」
「なんつうんだ、あれ、ツギ？」
「アップリケ」
「そういうのできてたらよ、もうちっと・・」
「とうちゃん、年少さんの俺は、てんとう虫リュックでしあわせだったんだよ」
「そんでもな」
「憶えてねえけどさ、そんでも俺にとっては最高のリュックだったんだよ」
「最低だったわよ！」
か　かあちゃん
「ヒトミはてんとう虫なんて可愛い表現をしてくれたけど、そんなものじゃなかった」
「俺は・・憶えてねえ・・けど」
「出張から帰ってきて、どんなリュックにしたの？ って見たときは・・　ゾッとした」
ゾッとって・・
「培養されて繁殖したとんでもないばい菌」
そこまで・・言わなくてもさ
「ダイチ、愛里さんのこと送ってあげて」
「あ、おう」
愛里が　かあちゃんの後ろで　ん？　　なんだ？　　その表情の意味がよくわかんねえんだけど

愛里の部屋の玄関
「愛里、俺のリュック、あんなすげえかっこよくしてくれて、ありがとう」
「え、あの・・」
「ん？　　なに？」
「あなたの中学校の指定のリュックが紺でよかったなって」
「うん、全員紺色のやつだった」
「黄色に大きな赤の水玉だったら」
え？
「どうにもできない、どうにもできないっていうか、1cm 角に切り刻んじゃったかも」
愛里　やっぱ聞いてたんか
「ちょっと聞きたいんですけど」
「え？　　うん、なに？」
「どうしてあなたは、黄色に大きな赤い水玉の生地を選ぶんですか？」
「え？」
「パジャマの生地もそうだったって言ってましたよね？」
憶えてたんか
「なぜ？」
「なぜって、年少さんのリュックんときは憶えてねえけど」
「セールの中のたたき売りのところで、これがいいって言ったって」

そんなとっから聞いてたんか
「安いのはいっぱいあると思うのに、なぜ黄色に真っ赤な水玉なの？」
「やっぱ・・　いっちゃん安いから・・じゃねえかな」
「つまりは、黄色に真っ赤な水玉は売れ残るってことですよね？」
「あ・・まあ・・　じゃねえかな」
「だったらなぜ作るの？」
「それは・・　俺に言われても・・さ」
「あなたみたいに買う人がいるからですよね」
「え？　お、俺が原因？」
愛里が　なんか考えてる顔して　そんで俺のこと見た
「お願いがあります」
「あ、うん、いいよ、なに？」
「今後、何か買うとき、安いからって、黄色に真っ赤なな水玉は絶対買わないで」
「あ、おう、買わねえ、約束する」
「たとえば・・　黄色に真っ赤な水玉の T シャツが、10 円で売ってたとして」
「10・・円」
「今揺らぎましたよね？」
「あ、や、買わねえ」
「せいぜい、最低でも、黄色オンリーか赤オンリー、それもイヤだけど」
「星の模様は？」
「買ってきたら私速攻で 1cm 角に」
「わ、わかった、買わねえ」
「でも・・　おとうさんが話してた年少さんのあなた、可愛いですね」
「え、マジ？」
「おねえさんの言葉を信じて、てんとう虫になって飛んでいったとか・・
　おとうさんが、可愛くて涙が出たって、なんかわかるなって」
「え・・　そっか」
「なんか・・　会ってみたかったな、年少さんのときのあなた」
「てんとう虫のリュック背負ってっけど」
「グッ・・グフッ　ハハハハハ」
きっと俺は　年少さんときでも　愛里に会ったら一瞬で好きになった
「私、キャーーッて逃げたかもぉ　ハハハハ」
「逃げんのかよ」
「だって・・ハハハ」
「愛里」
笑ってる愛里を　抱きしめて
「逃げんなよ」
「逃げたと思う、ハハハ」
「ぜってえつかまえっから」
「やだぁ怖いから」

「つかまえる、こうやって」
「そう・・ですか」
「おう、逃げらんねえよ」
「そうですか」
「おう」
ちっとだけ　腕の力緩めて　愛里の顔　見て
「愛里、ありがとう」
「あれで、一緒に京都ですね」
「最高っす」
「よかったです」
愛里の　くちび　夕方一瞬理性消えたんだ　そっと軽く
「そんじゃ、またあとで」
「はい」
「愛里」
「はい」
なんつっていぃんか　言葉探しても　思いがブワーーッて
「なに？」
「ありがとう」
「私がやりたかったから」
やりたかったなんてさ　愛里
「それじゃ、またあとで」
「おう」
ドア閉めて
愛里　俺　マジでしあわせっす
家帰ろう

おみやげ屋

朝起きて
顔洗って　制服に着替えて　ベッド見ると　愛里が生まれ変わらせてくれたリュック
枕の上にキチッと置いた
いっちゃん初めに入れたのは　ねえちゃんに言われた愛里用救急セット
正面のポケットん中には　小せえジップロックに入れたバンドエイドと痛み止めと
ホカロンとチョコとナプキン　便所からかあちゃんのをこそっと三枚持ってきた
もしも火傷したら？ って思って、前に愛里からもらったアロエのゼリーみてえなやつ
弁当用のしょうゆ入れで使ってねえやつに入れた
炭酸バスバブルも小分けにしたけど　これは持って歩かねえでもいいな
これさえ揃えば俺はもうなんも持ってかねえでもいいくれえだよ　持ってくけどさ
弁当作ろう

とうちゃんと二人で弁当作って
「ダイチ、明日は現場行くんだよな」
「うん、行くよ」
「ヤッさんたちはいねえんか」
「ショーさんの現場にいるみてえだから、いねえんじゃねえかな」
「たっちゃんもな、監督ってよ、すげえよな」
「まだ見習いっつってたけど、すげえよな」
「ねーちゃんもよ」
かあちゃんのことねーちゃんっつうことは　昔の話か
「ヒラの土方から職長飛び越えて監督になったくれえになってよ」
「それは部長になったときだっけ？」
「んっとよ、みーちゃんはいたかな・・　あんときはもういなかったな」
つうことは　とうちゃんが連れ戻された後で・・　課長になったときかな
「みーちゃんどうしてっかな」
「20 年くれえ前だよな？」
「ん・・　もう・・いねえかな」
とうちゃん　ちっと悲しそうな顔してる
「生きてっかもしんねえよ、38 歳まで生きたネコいるんだってさ」
「そっか？　　そんじゃ生きてっかもしんねえな」
「そうだよ、子どもいて、そんで孫もいてさ」
「孫か、みーちゃんの孫、似てっかな？」

「そっくりな孫連れて、とうちゃんとこに来るかもしんねえよ」
「俺んとこに？」
「あんときはありがとうっつってさ、そんで孫を」
「絶対に拾わないでよ！」
「か、かあちゃん・・　んと、おはよう」「美里、おはよう」
「おはよう」
「かあちゃん早えな」
「今日は病院に行ってから出社するのよ」
「びょ、ど、どっかまた具合悪りぃの？」
「ただの検診、退院後１週間の検診ってだけよ」
かあちゃんがあくびしながらバスルームに行った
そっか　検診か　よかった
「ダイチ、握りメシ食ってけ」
「とうちゃん、ありがとう」
握りメシ食いながら　愛里と俺の弁当持って　家を出た

愛里の部屋のドアホン鳴らしたら　ドア開いて
「おはようございます」
「愛里、おは・・よ、愛里、なんかボーッとしてねえか？」
「なんだか眠くて」
「ゆうべ遅くまで起きてたんか」
「じゃないんだけど、シャワーしてから、数学の課題やってないことに気がついて」
「そんで遅くなったの？」
「じゃなくて、すっごく眠くなっちゃって、ちょっとだけってベッドに入ったら」
愛里が　情けねえ顔して俺のこと見て
「そのまま寝ちゃった」
「そっか」
「どうしよう、課題まだ終わってない」
「俺のノート見せっから、午後イチだから、昼休みに弁当食った後に教えっからさ」
「ありがとうございますうぅぅ」
「んなこといいって」
「あなたがいてくれてよかったあぁぁ」
「愛里には俺がいっからさ」
「はい」
愛里が嬉しそうな顔で部屋の鍵閉めて　二人で廊下歩いた

そんで・・
昼休み
俺と愛里は中庭にはいねえ
また学食で佐藤と佐藤と川口と虎之助といる

中庭行こうとしたら佐藤に呼び止められて
「話し合いしたいからみんなで学食ね」
これ以上話し合うことあんのかな
学食のテーブルに　佐藤と佐藤と川口　こっちに愛里と俺と虎之助
「昨日アヤナと二人でおみやげ屋をピックアップしてみた」
おみやげ屋？
「まだ行ってねえのに？」
「あっちに着いてから探すとショップを探すのに時間かかっちゃってバタバタするから」
へえ　そういうもんなんか
「まずはこれは嵐山ね」
佐藤がみんなにプリント配って　こんなん作ったんか
「点在してるところより、たとえばここ、嵐山昇龍苑、ショップがまとまってるから」
そんでまたプリント配って
「こういうショップなんだけど」
すげえな　画像付きじゃん
「あとはやっぱり駅の近くにいろいろあって、こことかね」
川口メッチャ真剣な顔で見てんな　あ　なんか書き込んでっけど　そんなか？　みやげだよな
虎之助も　画像指さして天井見てなんか考えてんな
愛里は・・　弁当食ってる　おから入りハンバーグ食ってニッコニコしてるよ
「あとはね、京都駅のおみやげ街道がけっこう揃ってるんだよね」
おみやげ・・街道？　んな街道があんのか？
「正直、嵐山じゃなきゃっていうのが、今のところ見つけられなくて」
行きゃわかんじゃねえの？
「嵐山駅近くをサラッと見て、京都駅行った方がいいかなって思うんだけど」
「僕としては、必要個数を確保できればどこでもいいよ」
「俺も、松・竹・梅で各個数そろえばいいからさ」
川口と虎之助　仕入れ担当みてえだな
愛里は・・　とうちゃんのサバとシソの竜田揚げ食ってる　あの顔は美味えんだな
「テッパンはここのラングドシャだけど、ばら撒きには高いよね」
「僕はこれくらいのを買わないと、八ッ橋はダメって言われてるからさ」
「俺も親戚にはこれくらいじゃないとさ」
「だよね、うちらも先輩には・・　でも、ちょっとおとな向け過ぎるかな」
まだ行ってもねえのに具体的な話してんだな　すげえな
「森下くんはおみやげ買わないんだよね」
「買わねえよ」
「本気で？　一個も？」
「買わねえ」
「お父さんやお母さんには？」
「いらねえっつってからさ」

「それじゃ、うちらがおみやげ買ってる間どうする？」
「それは・・」
愛里を見たら　イチゴ食ってる　話は全然聞いてねえな
「愛里と二人でテキト〜に時間潰してっから」
「えぇぇ、なんか悪い」
「いいよ、プラプラしてっから」
「えっとね、嵐山の駅近かとか、けっこうカフェがあるから」
「こっちのことは気にしねえでいいよ、なあ愛」
「アーーーーッ！」
えっ　立ち上が・・
「私、数学の課題終わってない！」
あっ　「え？」「え？」「え？」「え？」
「あと何分？　　昼休み何分で終わる？」
「あと 10 分かな」
「エーーーーーーッ」
「上原さん、いいよ、戻りなよ」「うん、早く」
「そんじゃ俺も」
「うん、森下くんなんとかして」「森下くんならね」
愛里と俺の弁当袋持って　教室に走った

廊下走りながら
「私、サトユミさんたちが話してるとき、ボーッとしてて」
「そっか」
「途中から寝ちゃってたと思う」
「イチゴ食ってたよ」
「その記憶がない」
マジ？
そのまんま教室ん中に走り込んで
俺は自分のカバンから数学のノート出して愛里んとこに持ってって
「どこだ？」
「この、最後の 2 問」
「まずこっちは、この公式から」
「どの公式？」
「これ」
「どこに何を入れればいいの？」
「ここにこれで、こっちは」
「全然頭に入ってこない」
「愛里、落ち着け、大丈夫だから」
「何やってるんだろう私、学食でボーッとサトユミさんの」
「愛里、今はこれ、これのこと考えろ」

「あ、そうですよね、え・・・・と」
「これを、ここに」
「アーーーーーッ　チャイム鳴っちゃった」
どうする？　ん・・っと
愛里のノート取って　俺のノートを愛里の机の上に残して
「え？ え？ なに？ なに？ なに？」
「いいから、もし当たったら、それを書け」
「えぇぇぇぇ？」
「帰ってからちゃんと教えっから」
「でも、あなたは？」
「俺はわかってっから」
「あ・・　そうですよね」
あ　先生入ってきた
急いで席に着いた　セーーーフ
愛里が朝からボーッとしてたり　ゆうべも寝ちまったり　それって
きっと俺のリュックやってたからだ　すげえいろいろ考えてくれてさ
そんで疲れちまったんだな　愛里ごめんな　マジでありがとう
「それでは課題の 1 問目は川口、2 問目は森下、前に出て書きなさい」
「はい」「おいっす」
愛里のノート持って　ん・・と？　愛里、ここ間違ってんな　家帰ったら教えっからな
解答の式と答え書いて　席に戻るとき　愛里が泣きそうな目で俺のこと見てて
大丈夫だよ　愛里
「1 問目は・・　よし、正解、2 問目は・・　なるほどこう来たか、正解」
愛里が首傾げてっけど　ここんとこは下に書き直しておくか
3 問目と 4 問目は・・　愛里のノート　正解　よしよし
「それじゃ最後、5 問目は羽生、6 問目は上原」
愛里がビクッとしてる　大丈夫だよ愛里　そのまんま書いてくれよ
愛里が　書いてる　よしよし　そうだ　うん　そうだ　おっし
書き終わって　すげえ不安そうな目で俺のこと見たから
俺は胸元で親指立てて　大丈夫　フゥゥッて息吐いて　愛里が席に戻った
「5 問目、正解、6 問目・・　これは、上原」
「あ、は、は、はい」
「なぜあえてこの解き方にしたんだ？」
これはとうちゃんの解き方なんだよ
ねえちゃんが高二とき　とうちゃんがクイズみてえにやって
ねえちゃんは　この方がスッキリするって　今なら俺もその意味がわかる
「な、なぜあえて・・って」
愛里　心配すんな
「ふつうはここにはこっちの式を使うよな」
「ま、間違ってない・・です」

愛里　俺のやり方　とうちゃんのやり方信じてくれてる
「間違いではない、むしろ・・　うん、国公立志望はこの解き方を書いておくように」
ったく　この数学の先生けっこう意地になるっつうかさ
ぜってえこの解き方頭になかったよな　教本どおりじゃねえもんな
そんでもさ　よかった　愛里マジで

授業終わって 10 分休み
愛里が俺んとこ来て　俺の袖ギュッて引っ張って　廊下？
俺のこと見上げて
「死ぬかと思ったぁぁ」
なんだよそれ　メッチャ可愛いな
「できたじゃん」
「あなたのを」
愛里が声小さくして
「書き写しただけです」
「間違ってねえっつってくれた」
「正直私は何がどうなのか全然わからなかったけど、あなたならそうかなって」
「そっか」
「あなたが当たった問題、私、間違えてましたよね」
「ああ、うん」
「あなたが私のをそのまま書き写すとは思わなかったけど、あの荒ワザは」
「荒ワザってさ」
「なんかもうすっごく疲れちゃって、帰りたい」
「あと一時間ガマンしてくだせえ」
「帰っちゃダメ？」
「英訳だよ」
「そうだけど」
「寝ててもいいよ、俺がノート取っとくから」
「あなたは英訳のとき、けっこうスペルミスするから」
「そんじゃ起きてねえとさ」
「そうですね、目を開けたまま気絶してるかも」
「ハハハハ」
「なんで笑うの？」
「想像しちまったから」
「そんなの想像しないでよ」
「愛里、俺のリュック蘇生してくれんのに疲れちまったんだろ」
「そういうのじゃないと思う、気圧かなあ」
「愛里にだけ？」
「サトアヤさんも寝てました」
「え、いつ？」

「さっきの授業のとき」
「そっか」
「でも、サトアヤさんはサトユミさんとおみやげ屋さんを調べてたからかも」
「あれは、すげえな」
「私はもうそういうことからは解放されたから気が楽でした」
「そんじゃ、みんなが買ってる間、二人でなんかしよう」
「なんかって？」
「ん・・　なんか」
「ノープラン」
「いいじゃん、ノープランで」
「そうですね、あ、チャイム」
「そんじゃ、目ぇ開けながら気絶しててくだせえ」
「ちゃんと起きてますっ」
俺のと睨んで教室入ってって　かっわいいなあああ
この 10 分　愛里といつもみてえに話せたな
ここんとこ二人でなんともねえことしゃべるってできなかったもんな

帰りの学活が終わって
「愛里、帰ろう」
「はい」
「森下、上原さん、また月曜日ね」
「川口くん、またね」「おいっす」
「森下、数学の６問目はすごい解き方だね」
「そうなの？　　あ！」
「上原さん、あれはさすがに上原さんが解いたとは思わないよ」
「そうだよね、私は・・　今もまだよくわかってない」
「僕は目からうろこだった、あれはどの数学者のやり方？」
「俺のとうちゃん」
「森下のお父さん？」
「ねえちゃんが高校生んとき、おもしろそうだなっつって」
「おもしろそう？」
「とうちゃんにとってはクイズみてえで楽しいらしい」
「今、僕は打ちひしがれているよ」
「え？ なんで？」
「既成概念に囚われてガチガチになっている自分の姿っていうかさ」
「んなたいそうなこっちゃねえだろ」
「おみやげもさ、儀礼や慣習に縛りつけられて身動きできない自分がいるよ」
「それが川口なんじゃねえの？」
「身動きできてない？　　まあそうだよね」
「ちげえよ、川口の解いた式、綿密でキッチリして最終的にきれいな形になってんじゃん」

「森下にそう言ってもらえると嬉しいよ」
「そんじゃ俺と愛、え？ あれ？　愛里は？」
「さっき教室を出ていったよ」
「言えよ！」
「気づいてるんだと思ったから」
気づいてねえよ！　愛里、なんで先行っちまうんだよーーー！
いた、ロッカーんとこにいた
「愛里、先行くなよぉ」
「だって、なんの話をしてるのかわからなかったし、ゆっくり話したいかなって」
「川口とゆっくり話すことなんてねえよ」
「だって川口くん、夏休みもあなたと話したくて現場に行ったから」
「んなさぁ、置いてかねえでくれよぉ」
「どうせ帰るところは同じなん、あ！」
愛里が　キョロキョロまわり見渡してっけど
「みんな知ってっから」
「知らない人だっているでしょ」
「少なくとも PTA は知ってっから」
「えっ？　な・・なんで？」
「愛里があのマンションに引っ越してくるとき、ヘンな噂されねえように、
　逆に？　オープンにした方がいいって、かあちゃんと愛里のお母さんが」
「ママ？　ママが言っちゃったの？」
「言っちゃったっつうか、どっちかっつうと、森下美里所有の物件に住ませて、
　森下美里が日本での後見人になるっつうイメージ持たせた的な？」
「え？　そうなの？」
「愛里のお母さん言ってなかった？」
「え・・　なんか、おかあさんと一緒に学校に行ったっていうのは聞いたけど」
「それだよ」
「なんか・・　なにからなにまで、お世話になります」
「なんだよそれ　ハハハ」
「ていう気持ちです」
「俺はコソコソしたくねえし、悪りぃことはなんもしてねえからさ」
「そう・・ですね」
「堂々とだよ、堂々と」
「ちょっ、と！」
愛里が俺の手ぇ払いのけた
「T・P・O！　Time、Place、Occasion、校門の中ではダメです」
「愛里、英訳んとき寝てなかったな」
「話をそらさないで、あなたが絶対見てると思ったから意地でも寝ませんでした」
「見てました」
「やっぱり、私、眠くなると、ももをギュッてつねってたんだから」

「それか！　ときどき、なんかひじ張って腕動かしてんなって」
「そんなことを見てるからスペルを間違えるんです」
「あ、はい」
「帰りましょう」
「おう」
校門の外に出たから　速攻で愛里の手ぇにぎった
俺は　毎日こうしていてえよ　フッツーのことしゃべってフッツーにさ
修学旅行行かなくてもさ　つうか行きてえけどさ
昼休みは愛里と二人で過ごしてえよ　話し合いはもう勘弁してくれよ
「何を考えてるんですか？　なんか眉間にシワ寄せてるけど」
「や、ちっと、なんつうか、んっと」
「また数学の式がどうとか考えてるの？」
「え？　あ、や」
「あなたと川口くんが話してることって、わけわかんない」
「愛里」
「なんですか」
「帰ったら数学やんねえと」
愛里が　黙っちまった
「愛里？」
「わけがわかるように・・　お願いします」
「おう、まかしとけって」
「はい」
こんときの俺は知らなかった
俺にはわけわかんねえことを　愛里がわかるように教えてくれることを
それはまだ先の話なんだけどさ

前祝い

愛里の部屋にそのまんま入って　数学の課題んとこ教えてる
「なんとなくわかりましたけど、６問目は・・　ボヤ〜っとしか」
「これはどっちかっつうと国公立理系志望向けの問題だからさ」
「そうなんですよね、数学とか化学とか、ここまではわかってるよねみたいな、
　私立文系レベルは連れていってもらえないみたいなカンジで」
「愛里はちゃんと理解できてっから心配しねえでいいよ」
「だってこのままじゃ、三年になったら、こっちは救助されたいのに」
愛里が上の方に手ぇあげて
「助かりたければヘリコプターまで飛んで来いみたいな状態になりそう」
愛里の例えはいっつもおもしれえな
「どうしよう、取り残されちゃう」
「三年になったら理系と文系で分かれっから、文系の数学はそこまでじゃねえよ」
「理系と文系で・・　そう・・ですね」
愛里が　なんか考えてて
「愛里？」
「三年になったら・・　もうこうやって教えてもらえなくなるってことですよね」
え？
「授業もバラバラで、違う教室で・・　違うことを・・」
俺は・・　考えてなかった　愛里とおんなし教室でおんなし授業受けることが
「理系と文系じゃ、もう同じクラスじゃないみたいな」
永遠には続かねえってことを
「川口くんもいなくなっちゃう」
「へ？ あ？ ちょ、なんでそこで川口なんだよ」
「だって友だちだから」
「俺は？ 俺、俺もいちおう理系にすっけど？」
「そうだけど・・　こうやって教えてもらえなくなるのは心細いけど」
「教えっから、愛里が教えてくれっつったらいっつでも教えっから」
「でも、あなたはあなたで勉強忙しくなるし」
「んなこと気にしねえでいいからさ」
「三年になったら受験まっしぐらですよ」
「愛里」
愛里のこと抱きしめた　なんか・・　なんかちっと　愛里が離れていっちまいそうで
「んなこと、まだ考えんなよ」

「でも・・　事実だから」
「まだいいよ、まだ二年じゃん、俺と愛里はさ」
「そうだけど・・　ちょっと先を見ると・・」
「見んなよ」
「見ますよね？　見ないと、二学期ですよ？」
「まだ・・　修学旅行にも行ってねえじゃん」
「サトユミさんとサトアヤさんから・・　先輩たちの話を聞いて」
「先輩？　部活の？」
「はい、もう部活は引退してるけど、たまに指導に来てくれて」
三年は夏休み前に引退だもんな
「女子は５人いて、引退前はすごく仲が良くて、でも一人だけ理系にいって」
愛里が　俺の胸に頭つけて
「その先輩は引退してから顔を見せないから、理系って勉強大変なんだねって」
「それは理系とかそんなん関係ねえんじゃね？」
「でも離れていくことは事実だから」
離れてくってさ
「俺は・・」
愛里のこと抱いてる腕にもっと力込めて
「なにがあっても、愛里のそばから離れねえ」
「でも・・　理系と文系は、違う教室になるし」
「なんなら俺、文系でもかまわねえんだからさ」
「えっ？」
愛里がグイッて俺から離れて
「やめてぇぇ、そういうのやめて」
「俺はもともと高校出て就職してもいいって思ってたくれえだからさ」
「でも・・　大学行くんですよね」
「高卒よりはやっぱ給料高けえし、いい条件の就職あっからさ」
「あなたは何になりたいの？」
「言ったじゃん、惚れた人がなんも心配しねえで安心して暮らしてけるように」
「そういうの関係なく、あなた自身は何になりたいの？　本当は何になりたいの？」
「惚れた人が安心して暮らしてけるような、その人が好きなことして笑ってられる」
愛里　俺はずっと　愛里と会う前から
「そうしてあげられる男になりてえ」
愛里が上目遣いで俺のこと見て
「ブレないですね、けっこう頑なにブレないですよね」
「ブレねえよ」
俺の顔見ながら　なんか考えてっけど　俺はブレねえよ愛里
「私なら・・」
愛里なら？
「私があなたなら・・　あなたの頭脳と才能と実力を持ってたら」

愛里が　俺なら？
「自分が目指せる最高峰の大学に行って」
え？
「最高峰の授業を受けて、いっぱいいろいろなことを吸収して、可能性をいっぱい広げて」
愛里が両腕広げて
「どうだ！　　これなら何をやっても大丈夫、なんでもできる、これがやりたいって」
え・・
「そういう人に　私はなりたい」
愛里・・　それって
「あ、宮沢賢治のパクリみたいになっちゃった」
愛里は　俺にそうなって欲しいって思ってるってことか
「おう！」
「え？　　なに？」
「俺は」
両腕目いっぱい広げてみせて
「こういう男になっから」
「こういう？」
「こういうやつ」
ほれ　両腕広げてんじゃん　愛里がやったみてえにさ
「なんだかよくわかんないけど」
「こういうやつだって」
「なりたいものになってください」
「おう」
「それじゃ、あの、教えてくれてありがとう」
「いっつでも教えっから」
「マジで助かるぅ」
「そっか」
「着替えて、ちょっといろいろやってから、あなたの家に行きます」
「おう、そんじゃ」
俺も立ちあがって　カバンと空の弁当箱入った袋持って
「またあとでな」
「はい」
愛里の部屋を出て
そっか　愛里は俺にそういう男になってほしいんか
そんじゃ俺はあそこ目指す　そんで可能性無限大にして　どうだ！ ってさ
いよーーっしゃ

家のドア開けて
「ただいま」
「ダイチ」

とうちゃんがキッチンから出てきた
「おかえり」
「とうちゃん、ただいま」
「あのよ、ちっと見てもらいてんだけどよ」
「え、どした？」
「なんか届いてよ」
「誰から？」
「わかんねえんだよ、外国語で書いてっからよ」
外国語？　かあちゃんの仕事関係？
「こっちにあっから」
キッチン？
「れいぞうって書いてあったからよ」
とうちゃんが冷蔵庫開けて
「これは、れいぞうだよな？」
貼ってるシール指さして
「うん、冷蔵」
「そっか」
とうちゃんが嬉しそうにしてるよ
差出人は・・　住所は東京で・・　La Moda Shin
「とうちゃん、シンシンおじちゃんからだ」
「シンシンさん？　シンシンさん外人か？」
「ちげえよ、店の名前書いてんだよ」
「あの入口んとこのか、俺は今もさっぱりわかんねえよ」
「とうちゃん、これ・・　肉じゃね？」
「肉？」
あれ？　かあちゃん確か・・　俺と愛里が修学旅行から帰ってきてからって頼んだっつって
逆に早く届いちまったんかな
「とうちゃん、開けてみっか」
「そんでも、これ、美里様って書いてっからよ」
「かあちゃんがもらっても焼くのはとうちゃんか俺だからさ」
「そっか？　ダイチ、開けてくんねえか？」
「うん」
なんかすげえ包装だな
「ダイチ・・　これ・・　木の箱に入ってっけど、マジで肉なんか？」
すげえ高けえやつだからだな
「シンシンおじちゃんそういうの好きじゃん、なんか、こうビックリさせるっつうかさ」
「ああ、そんで木の箱に入れたんか、だな、肉が木の箱に入ってたらビックリするもんな」
フタを開けたら・・
これは・・　メッチャでかくて厚い・・肉が　二枚？　なんで二枚？

「ダイチ、これ・・　脂ばっかだな」
とうちゃん　それはサシでさ　いわゆる霜降りっつうやつでさ
「そんでもシンシンさん、がんばって買ってくれたんだな、美里のためによ」
がんばってっつうか　これ一枚いくらすんだ？　すげえんだろうな
「とうちゃん、これは、今夜食った方がいいよな」
「そんでもどうやって、薄く切って野菜と炒めっか？」
それは・・　どうなんだ？　ぜってえステーキ用だよな
「ただいま」
かあちゃんだ
俺ととうちゃんで玄関に走ってって
「美里おかえり」「かあちゃんおかえり」
「なに？　二人で出迎えって、何かあったの？」
「シンシンおじちゃんから肉届いてる」
「あ！」
あって？
「それだ！」
それだって？
「昼休みにシンシンから電話があったの、Face Time で」
シンシンおじちゃん　かあちゃんにはぜってえ Face Time だよな
「家に帰ったらサプラ〜イズって、ダイチとアイリンの前祝いよって」
「俺と愛里の？　えっ　結婚？」
「バカじゃない？　発想がバカ過ぎる」
んなさ　バカ過ぎるってさ
「修学旅行の前祝いですってよ」
「修学旅行？　そんなんで前祝いってすんの？」
「しないわよ、シンシンはお祝い大好きだからなんでもお祝いにするだけよ」
「かあちゃん、とにかくさ、ちっと肉、見てくんねえかな」
「私が見たって、まあいいけど」
かあちゃんと俺ととうちゃん三人でキッチン入って
「これなんだけどさ」
かあちゃんが箱ん中覗いて
「二枚、しかもステーキ用、確実にシャトーブリアン」
えっ　いっちゃん高けえとこだ
「まあ・・　適当に焼いて」
「適当にって、とうちゃんは薄く切って野菜と炒めっかっつってっけど？」
「それは・・　どうなのかしら、それは・・　ねえ」
「そんじゃ、ステーキ？」
「まあ・・　適当に焼いて適当に分けてよ」
適当ばっかじゃん
「着替えて来る」

どうすっかな
「ダイチ、美里が焼けっつったけどよ、焼肉みてえにすりゃいぃんかな」
「焼肉？」
「焼肉のタレでよ」
「それは・・・」
もったいねえよな　どうする？　　ん・・っと　あ！
「とうちゃん、ステーキ丼」
「すてえきどん？」
「前になんかで見たことあんだよ」
「なんかで、そっか、ダイチが見たっつうんならな」
「これ焼いてさ、薄く切って白メシの上に並べて、シソと、なんだっけな・・
　あ、ピーマンとシイタケも焼いて乗っけてさ、しょうゆダレかけてさ」
「そりゃ美味そうだな」
「あと、ちっとワサビ乗っけてさ、それでいけんじゃね？」
「だな、そんじゃ俺は・・　サラダみてえの作っか？」
「とうちゃん、それでカンペキじゃん」
「そっか、そんじゃそうすっか」
　　「あいつーーーー！」
え？　　ベッドルームからかあちゃんの声
「カズオ」
かあちゃんが　来た
「これは今日届いたの？　　そうよね？」
書留の封筒
「ゆ、郵便のにいちゃんが持ってきた、あとの手紙は、全部美里の鏡んとこに・・」
とうちゃんが怯えてるよ
「ダイチ」
「えっ　お、俺？」
「見て」
かあちゃんの手に　すっげえ派手な花柄のポチ袋二枚　？
「シンシンから、あんたと愛里さんに餞別だってよ」
「餞別？　　なんで？」
「修学旅行に行くから」
「そんでなんでシンシンおじちゃんが俺と愛里に餞別？」
「ヒトミのときもそうだったのよ、そういうのやめてって言ったのに」
なんか・・　俺が怒られてるみてえな気になんだけど
「私が修学旅行に行くってポロッと言っちゃったから、食いついてきたのよ」
「そ・・っか」
「夕食のときに渡すから」
「あ、うん」
「まーーったく、あいつはこういうの大好きなんだからーー！」

って言いながら　またベッドルームに入ってった
「美里、喜んでんだな」
「えっ？　　とうちゃん、俺には怒ってるみてえにしか見えねえよ」
「シンシンさんがなんかすっとよ、いっつもああなんだけどよ」
「だよな、なんかいっつも怒鳴っててさ」
「ほんとは嬉しいんだよ」
「え？ マジで？　　とうちゃんにはそう見えんの？」
「見えるっつうか、わかんだろ」
「マジ・・か」
俺にはわかんねえ
とうちゃん　さすがかあちゃんと結婚してっだけあんな　俺には一生わかんねえ
つか　かあちゃんと結婚とかぜってえムリだ　尊敬してっけど　結婚は　イヤだ
「美里は、んっとに可愛いな」
わっかんねえ　とうちゃん　それだけはとうちゃんの気持ちがわかんねえよ

俺の渾身のステーキ丼　できました
愛里が
「すごーい、美味しそう」
愛里　食ってくれよ　愛里のためにさ
「やればできるじゃない」
かあちゃんは適当ばっか言ってただけじゃん
「Shin 様が、このお肉を、あの、大一さん・・と、私のために？」
「そうなのよ、修学旅行の前祝いですって」
「えぇぇ、光栄過ぎるぅ、写真撮ってもいいですか？」
「もちろん、撮ったら私にもくれる？　　シンシンに送るから」
「え？　　Shin 様に？　　それじゃがんばって撮ります」
愛里　肉はシンシンおじちゃんだけどさ　作ったんは俺なんだけどな
愛里がメッチャ真剣な顔で何枚も写真撮ってるよ
「それじゃ、食べましょう」
「はい」
愛里が一口・・　どうだ？
「うわあ、柔らかくてタレとすごく合ってて美味しい」
マジっすか
「ね？　　さすがシャトーブリアンよね」
「なんか甘い香りで臭みが全然ないですね」
愛里　わかってくれんだな　ラム酒が決め手なんだよ
「やっぱりシャトーブリアンは違うわよね」
手柄は全部肉かよ　いいけどさ
「お肉を食べたあとの、このキャベツとニンジンとレーズンの、サッパリしますね」
それはとうちゃんが作ったんだよ愛里　な　とうちゃ・・　無になってんな

「そうね、カズオの定番の、サラダみてえの」
「私、これ大好きなんです、なんかホッとして」
「私も好きよ」
「これも森下家伝承の味にしないとですね」
「また伝承の味？　ハハハ」
伝承の味にすっからさ　愛里
「カズオ」
「あ？ え？」
とうちゃん無になってたからな
「これ、まだある？」
「うん、いっぺえ作ったからよ」
「おかわり」
とうちゃんが嬉しそうな顔で　かあちゃんから器受け取ってキッチン行った
「あの・・　私もいいですか？」
「おう、持ってくる」
愛里の器受け取って　俺もキッチンに入った
「ダイチ・・」
「ん？ なに？」
「しゃとうなんとかっつうのは、なんなんだ？」
「それは・・」
いっちゃん高けえとこ・・だけど
「牛のさ、いろいろあんじゃん、こことかこことかさ」
「ああ！　カタとかスネとか、そういうんか？」
「まあ、そんなんだよ」
「そんでも、あれは、ビーフシチューや肉豆腐にすっと、脂多すぎっかもしんねえな」
「だな、あれは、ビーフシチューや肉豆腐には向かねえな」
「丼にしてよかったな」
「うん、だよな」
かあちゃんと愛里のサラダみてえの・・の、おかわり持ってダイニングテーブルに戻った

かあちゃんが　俺と愛里に　あの派手な花柄のポチ袋渡した
「これは？」
「シンシンから、修学旅行の餞別ですって」
「エーーーッ　Shin 様から？」
「中にメッセージも入ってるわよ」
「Shin 様からの？」
愛里がそーーっと袋の中からメモみてえなの出して
「“アイリン　京都で素敵な夢を見てきてね　Shin”って、感動！」
俺にも入ってんな　んっと？
“ダイチ　これでアイリンを魔法の馬車で夢の世界に連れていってあげて

　でも　ヘンなホテルに連れ込んじゃダメよ　Shin”
シンシンっおじっちゃんっ
「あなたのにはなんて書いてましたか？」
「え、あ、まあ、愛里のとおんなしみてえなこと」
かあちゃんが俺のことジッと見てる　かあちゃん　読んだんだな
「Shin 様直筆メッセージ入りポチ袋って、このままフレームに入れて飾っておきたい」
へ？
「愛里さんたら、ハハハ、使わなきゃ」
「だって Shin 様のですよ」
「愛里さん、シンシンのファンみたいじゃない」
「みたいじゃなくて、ファン・・　もっと・・　崇拝？」
「あんなオカマのおじさんを崇拝しなくていいわよ」
「一生接点がないと思ってましたから」
「あったわね」
「はい、女神のおかげです、あ、ちょっと意識が前に戻っちゃって」
「私のおかげかしら？」
「はい」
「その前に誰かさんのおかげじゃないの？」
「え？　　あ・・」
愛里が俺のこと見て
「あ・・　はい」
え　なんでトーンダウンすんの？
「ヒトミのときももらったのよ、そういうのやめてって言ってたのに」
愛里が　なんか　なんつうか・・　ポワンとした顔でかあちゃんの話聞いてっけど
「シンシンからもらったお金でイタリアンのランチ食べたんですって」
「イタリアン？　　京都でですか？」
「京都って実は日本でいちばんイタリアンレストランが多いんですって」
「そうなんですか？」
「京野菜を使ってて美味しかったって言ってたわ」
「京都でイタリアンって考えたことなかったです」
「ヒトミは食べることが大好きだから、そういうのは詳しいの」
マジでさ　食うことだけはすげえこだわりあんだよ　ねえちゃんはさ
「それでね、シンシンにお礼って、あぶらとり紙を送ったんですって」
「あぶらとり紙？」
「ほら、顔の脂を取る紙が売ってるでしょ？」
「顔の脂をとる？」
「知らない？　　ダイチは知ってる？」
「揚げもんしたあとの油固めるやつっきゃわかんねえ」
とうちゃんは新聞紙使ってっけど
「今の子って知らないの？　　とにかく、そういうのがあって、そしたらシンシンが」

かあちゃんが目ぇ輝かせて
「ひっどーーい！　ワタシの顔が脂ぎってるって言いたいの？ って」
かあちゃんのシンシンおじちゃんの真似はもはや名人級だよな
「おねえさんは、なぜそれを？」
「シンシンはイジられるのが大好きなの、実際喜んでたしね」
「Shin 様をイジるなんて、私には・・」
「べつにやらなくてもいいわよ、でね、京都の郵便局から送ったんですって」
「京都の郵便局？　わざわざですか？」
「歴女さんがね、大きいものは別として、ハガキや小さいものは旅先から送ると、
　もらった人も嬉しいからって教えてくれたんですって」
「私も歴女さんと行きたいです」
愛里　俺がいんだろ？　俺
「たしかにシンシン喜んでもの、ヒトミがワタシにわざわざ京都から送ってくれたのよ〜って」
「私、郵便局って行ったことがないです」
「そうよね、今は全部メールや SNS で済んじゃうものね」
「はい」
「まあ、そういうことで、二人に渡したわよ」
「あの・・　Shin 様に、お礼は？」
「シンシンはお礼とか、そういうのは好きじゃないのよ、ひたすら貢ぎたいの」
「そうなんですか？」
「つくすタイプのオカマのおじさん」
「あ・・　なんかホッとしました」
「そうよ、でなきゃ私のところで止めて突き返してるから」
「それじゃ・・　大切にします」
「使っていいのよ、愛里さん」
「でも・・」
胸んとこに　メッチャ大切そうにさ　なんなら愛しそうにさ
よかったあ　シンシンおじちゃんがオカマで　でねえと俺　身がもたねえよ

葛藤

愛里を部屋に送って　家に戻って
勉強した　メッチャ集中してやった
俺は「どうだ！」って男になるからさ
「私なら」ってことはさ　愛里はつまり　俺にそういう男になってほしいっつうことでさ
シャワーしよう

部屋に戻ってきたら　枕の上に愛里がやってくれたリュック
カッケーーーー
正面のポケットに　入ってる　愛里の救急セット
炭酸バスバブルの小分けは机の上に置いてある　あとは・・　あ　裁縫セット
いつからだ？　　中学生になったときか　かあちゃんにもらったんだよ
「男子たるもの、制服のボタンやシャツくらい自分でつけられなきゃ男とは言えない」
社会出て　スーツのボタンやシャツのボタンが取れてる人がまともに仕事できると思うかって
出張や転勤して自分のことができねえようじゃ仕事なんてできるわけねえってさ
中学んときは学ランのボタンとズボンのボタンの予備入れて
今はジャケットのボタンとシャツのボタンの予備入れてっから　修学旅行もこれでカン・・
アーーーーッ　愛里の制服のボタンとブラウスのボタン
愛里　予備持ってっかな？　　そんでもいちおう俺も・・っつっても　どうする？
んーーーっと　あ！　　ねえちゃんの　あれだ

ねえちゃんの部屋に入って　ねえちゃん　あっちに裁縫セット持ってっちまったかな
持ってってねえ気ぃすんだけど　ねえちゃん　たいていああいうの机のいっちゃん上の・・
ん・・っと　ねえかな　あれ　この奥の　あった　あったあった
ボタンも入ってた　これを俺のに入れときゃいいな　ねえちゃんもう使わねえしさ
つうか　ねえちゃん　全然使ってねえな　俺のよか新品に見えるくれえ使ってねえな
つか確実に手ぇつけてねえ新品だよ
この小せえ缶の裁縫セットは　かあちゃんオリジナルなんだよな
市販の裁縫セットの中身の 1/3 はほぼ使わねえっつって
メッチャ小せえ針山と針とまち針　糸も黒と紺と白　他に必要なら自分で巻いとけって
この小せえハサミがさ　実はけっこう高けえやつでさ　すっげえ切れんだよな

あとは安全ピン大・中・小　ホックもある
ねえちゃんのもらっちまおうかな？　　ダメだ　それはダメだ
これはかあちゃんがねえちゃんのためにセットしたもんだからさ
ねえちゃんが好きな薄いブルーの糸と白の絹糸も巻いてある　全然使ってねえけど

部屋戻って
つい枕の上のリュックに目がいくんだよな　かっけえからさ
持っていきてえな　明日の現場
クレーンつったらさ　現場にピッタリだろ
そんでも・・　愛里が修学旅行用にやってくれたからなあ
現場に持ってっちまったら　でもさ　埃拭けばさ　いやいやいやいや
でもなあ　やっぱ早く使いたくなんじゃん　こんなかっけえのさ
だってさ　愛里が蘇生してくれたんだよ　俺のクローゼットん中で仮死状態だったのをさ
せっかく息吹き返してさ　前よかもっと一億倍生き生きしてさ　そしたらさ　やっぱさ
でもなあ　どうなんだ？　　愛里に聞いてみっか　愛里がダメっつったら　やめよう
『愛里』送信
『ちょっと聞きてえことがあんだけど』送信
『リュックのことなんだけどさ』送信
ピコン
『どこかほつれちゃった？』
ピコン
『ちゃんと縫ったつもりなんだけど』
や　じゃなくてさ
ピコン
『ヘアゴムが切れた？』
ピコン
『新しいのをつけたんだけど』
ピコン
『細いから弱かったのかも』
ピコン
『私まだいっぱい持ってるので』
あのさ　じゃなくてさ
『ほつれてねえし　ゴムも全然切れてねえよ』送信
ピコン
『よかった　急にリュックっていうから焦っちゃった』
そっか　んっと
『あのリュック　現場に持っててもいいかな』送信
ピコン
『もともとあなたの物だし今もあなたの物だから』

ピコン
『あなたが持って行きたいところに持って行けばいいと思う』
マジっすかーーーー？
ピコン
『修学旅行限定品じゃないし w』
そっかそっかそっか
ピコン
『むしろ使い倒した方が』
使い倒す？
ピコン
『成仏できると思います』
成仏ってさあ　愛里はおもしれえなあ
『そんじゃ現場に持って行きます！ w』送信
ピコン
『制服のブラウスのことなんですけど』
ブラウス？
ピコン
『あなたは制服のシャツは何枚持っていきますか？』
ん・・っと
『着ていくのと　あとはなんかのとき用に一枚かな』送信
ピコン
『つまり持っていくのは一枚だけ？』
『だけ』送信
ピコン
『旅行中洗濯できませんよね』
だな　え？　　あれ？　　洗濯して欲しいんかな
『愛里が洗濯して欲しいなら』送信
『ホテルの近くのコインランドリー探すから』送信
『心配すんなよ』送信
ピコン
『そんなことしないでください』
ピコン
『修学旅行中にコインランドリーとか』
ピコン
『三枚持っていきます』
三枚も？　　それはすげえ荷物になんじゃねえかな　なんかできねえかな
んっと・・　このホテルの近くに・・　近くっつうか　このホテルの地下にあるじゃん
『愛里　このホテルの地下にコインランドリーあるからさ』送信
『俺洗うから三枚もいらねえよ』送信
ピコン

『修学旅行中まで家政夫しないでください』
ピコン
『日数分の着替えを持っていきますから』
『日数分っつったら　メッチャ荷物多くなんじゃん』送信
ピコン
『あなたは　靴下は何足持っていくつもり？』
靴下？　　ん・・っと
『履いてくのと　あとは一足かな』送信
ピコン
『それって』
ピコン
『お泊り保育レベルだけど？』
お泊り保育？
ピコン
『ちなみに　下着は？　　何枚？　　一枚？　　それとも持っていかないとか？』
それはさあ
『下着はさすがに毎日取り換えっからさ www』送信
そんでもな　コインランドリーあんなら
『コインランドリーあればそんなにいらねえかな？』送信
ピコン
『私が決めるの？　　あなたの替えの下着の枚数？』
や　そんでもさ
『俺　あんま旅行したことねえからわかんねえんだよ』送信
ピコン
『私だって旅行するときは全部ママだったからわかりません』
ピコン
『アメリカに行ったときは向こうでママが洗濯してくれたし』
そっか　だよな
ピコン
『中学の修学旅行のときはどうしたんですか？』
あんときは・・
『かあちゃんがとうちゃんに言って　とうちゃんが袋にまとめたの持ってった』送信
ピコン
『今回もそうしてもらったらいいと思いますけど』
そっかなあ
『さすがに高校生でそれはさ w』送信
ピコン
『笑ってる場合じゃないと思う』
へ？　　なんで？
ピコン

『わかりました』
え　なにが？
ピコン
『おかあさんに相談します』
だよな
『女の子のことはかあちゃんに聞いた方がいいと思う』送信
ピコン
『私のことじゃなくて』
ピコン
『私のこともだけど』
ピコン
『あなたのこと』
俺？
ピコン
『サトユミさんたちが　下着の着替えは一日二枚とか言うから』
一日二枚？　　なんで二枚？
ピコン
『サトユミさんたちは部活の遠征で感覚がバグッてるって本人たちが言ってて』
だよな　一日二枚ってさ
ピコン
『あなたはどうするのかなと思って聞いたら』
ピコン
『別の意味でバグッてて』
バグッて？　　俺？　　俺が？
ピコン
『ていうか異次元にいるみたいで』
異次元って
『愛里　俺はここにいっからさ』送信
ピコン
『そういう意味じゃない』
どういう意味なんだ？
ピコン
『正常な判断をできるのはおかあさんだけなので』
ピコン
『おかあさんに委ねます』
ピコン
『あなたも』
ピコン
『ゼヒ』
ピコン

『おかあさんに委ねてください』
ん・・と　愛里のこと怒らせたんかな　だよな
『愛里の言うとおりにする』送信
『なんかごめんな愛里』送信
マジでごめんな
ピコン
『そんなカンジで謝らないで』
そんなカンジ？
ピコン
『あなたは謝るようなことしてないし』
ピコン
『私が勝手にテンパッてただけで』
そっか　だよな　お母さんがそばにいねえからな
ピコン
『ごめんなさい』
んなさ　愛里がさ
『愛里が謝ることなんてひとっ欠片もねえよ』送信
『俺もいろいろ調べて考えてみっからさ』送信
ピコン
『はい』
ピコン
『今日のステーキ丼のお肉』
シャトーブリアンな
ピコン
『すごく甘くていい香りがして』
シャトーブリアンだもんな
ピコン
『あれは何かしたんですか？』
え？
ピコン
『前にママが』
ピコン
『今夜はシャトーブリアンよってステーキにしたときは』
ピコン
『あんなにいい香りはしなかったから』
愛里　わかってくれたんか
ピコン
『あなたのことだから』
ピコン
『何かしたのかなって』

俺は・・　今　メッチャ胸がいっぱいになってます
『ラム酒でフランベした』送信
ピコン
『ラム酒？　　ママはブランデーを使うのよって言ってたけど』
『だいたいはブランデーだけど俺はラム酒使う』送信
『とうちゃんはステーキ焼けねえから』送信
『ステーキは俺が焼くことになってて　つうか焼くっきゃねえんだけど w』送信
『そんでいろいろ調べてブランデーでもやってみたけど』送信
『ラム酒の方が甘え香りすっからさ』送信
ピコン
『あなたなら』
ピコン
『シャトーブリアンじゃなくても』
ピコン
『美味しくできちゃうと思う』
愛里－－－っ
『愛里にはずーーっと美味え肉食わせっからさ』送信
ピコン
『シャトーブリアン？』
え・・　それは・・　んっと
『食わせてあげられるように稼ぐ』送信
ピコン
『シャトーブリアンじゃなくていいです』
ピコン
『私はいつものあなたのお肉の方が好きです』
愛里　愛里愛里　俺は
『しあわせだーーーーー！』送信
ピコン
『そこまで　ーーーーってしなくても wwww』
『こんなんじゃ足りねえよ』送信
ピコン
『あなたと LINE してると』
ピコン
『すっごい流れの中で』
ピコン
『みんなが溺れそうになってもがいてるときに』
ピコン
『あなたは何も起こってないみたいに』
ピコン
『ひょっこり浮いてるってカンジ』

『なんだよそれ wwww』送信
w 打ってっけどさ　ほんとはさ
愛里の言葉はいつもすげえ感覚がいっぺえで　俺はその言葉に溺れる
ピコン
『ノンキ過ぎて私の方が焦っちゃうみたいな w』
『焦らせてすみません』
ピコン
『やだ　土下座しないで w』
そんでもさ
『なんかあったら俺がなんとかすっからさ』送信
『愛里は心配しねえでいいよ』送信
ピコン
『そうですね』
ピコン
『あなたはモリシタダイチでした』
ん？
ピコン
『それじゃ　私はそろそろ寝ます』
ピコン
『おやすみなさい』
『愛里　おやすみ』送信
なんか　なんかいちいち可愛くて　いちいちツボで　全部好きだーーー！
寝よう　寝ねえと　明日は現場だ
このリュック持ってさ

雨上がりの現場

アラームで目ぇ覚まして
明け方ちっと雨降ってた気ぃすんだけど　今は降ってねえな
顔洗って　作業服に着替えて　リュックだよリュック
愛里の救急セットは机の上に置いて　帰ってきたらすぐに入れねえと
キッチン行って
「とうちゃん、おはよう」
「ダイチ、おはよう」
愛里の弁当作って
「ダイチ、カッパ持ってった方がいんじゃねえか？」
「そっかな、持ってった方がいっかな？」
「今はやんでっけど、なんかまた降りそうな空してっからよ」
「そんじゃ、ちょっと持ってくる」
部屋に戻って　クローゼットの奥の　あったあった　かあちゃんがもらってきたカッパ
おおお　やっぱこのリュックだと余裕で入るな
修学旅行もカッパ持ってった方がいっかな？　　どうなんだ？　　後で考えよう
「とうちゃん、カッパ入れたよ」
「そのリュック持ってくんか」
「うん、愛里も持ってっていいっつってくれてさ」
「そりゃ現場に持ってくにはピッタリだな」
「だよなだよな、これはぜってえ現場だよな」
「かっけえよ」
やっぱそうだよな
「ダイチ、昼メシの握りメシ作っといたからよ」
「え？ マジ？　　とうちゃん、ありがとう」
「俺はこんくれえっきゃできねえけどよ」
「メッチャ嬉しいよ、自分で作ろうと思ってたからさ」
「ダイチの握りメシくれえ、とうちゃんに作らしてくれよ」
「とうちゃんの握りメシ食うとマジで力出っからさ」
「そっか？」
とうちゃんニッコニコして釜洗っててさ　あ　そうだよ
「とうちゃん、ねえちゃんの修学旅行んときさ、とうちゃんが着替え用意したんだよな」
「俺っつうか、美里が・・　あ、ちっと今持ってくっから」
持ってくる？　　ねえちゃんの着替え？

とうちゃん戻ってきた
「これだ、美里が書いてくれてよ」
メモ　つうか・・
「とうちゃん、こんなん取っといたんか」
「美里が書いてくれたかんな」
かあちゃんが書いたものは　メモでも宝なんだな
ん・・と
　・ブラウス　4 枚　　4 枚も？
　・靴下 6 足　　マジで？　　3 泊 4 日だったよな
　・パンティ　5 枚　3 泊 4 日だよな？
　・ブラジャー　5 枚　　ブラ　そっか　愛里はそれも持ってかなきゃなんねえのか
　・ハンドタオル　4 枚
「とうちゃん、このハンドタオルって、ハンカチくれえのタオルだよな」
「身体洗ったりすんのに使うからっつってよ」
そっか　そんでも 4 枚って　1 枚でよくね？
　・フェイスタオル　1 枚
　・ハンカチ 5 枚
　・予備の洗濯ネット　1 枚
予備の洗濯ネット？　　ねえちゃんホテルで洗濯したんか？
「とうちゃん、この、予備の洗濯ネットってさ」
「着替えをよ、洗濯ネットに入れて、洗濯すんのをこっちのネットに入れるってよ」
「ハァァァア？」
「ヒトミは洗濯するやつの半分、京都から宅配便で送ってきてよ」
「洗濯物を・・京都から・・宅配？」
「帰るとき荷物になっからってよ」
こんだけ持っていって荷物になるってさ
「やっぱヒトミは頭いいな」
とうちゃん感心してっけどさ
「とうちゃん・・　ねえちゃんはどんくれえのカバン持ってった？」
「美里のスーツケース借りてたな」
だろうな　こんなんさ　こんだけじゃねえんだろ？　　アメニティとかさ
「かあちゃん・・　こんないっぺえ持って出張行ってんのかな」
1 ヵ月とかんときは　スーツケース 1 個だけど
かあちゃんも旅慣れてんだか慣れてねえんだかわかんねえよ
「美里はホテルの、なんつうんだ？　　洗濯してくれるのに出してっからよ」
そうか　そうだった　とうちゃんが入院してっとき　とうちゃんのパンツも出してた
「必要なものがありゃ向こうで買うっつって、いっつも買ってっからな」
そっか　かあちゃんはそういう人だよ
「そんでもな、ヒトミはそんなんできねえだろっつってよ」
「そう・・だけどさ」

「ヒトミは最後の日に、スーツケース宅配で送ってよ」
「へ？　スーツケースって、あの、スーツケース？」
「リュックだけで帰ってきたな」
スーツケース送るっつったら　メッチャ金かかんじゃん
そのまんま持って帰ってくれば修学旅行の資金内で収まんのにさ
ねえちゃんのやることはぶっ飛び過ぎて　俺には理解できねえ
「ダイチ、そろそろ出ねえとなんねえんじゃねえか？」
「あ、そうだ」
「ほれ、握りメシ食ってけ」
「とうちゃん、ありがとう」
握りメシ食いながら　リュック背負って
「そんじゃ、とうちゃん、いってきます」
「ダイチ、いってらっしゃい」
ねえちゃんの着替え事情　全然参考にならねえな

雨が降った後の現場
まだ作業は始まってねえけど　雨で埃っぽさがなくなってんな
監督室行かねえと
「失礼します」
「森下、おはよう」
「おはよっす」
「どうした？」
「今日の日給手渡しにしてもらいてえんすけど」
「いいよ、わかった」
「ありがとうございます」
「このところ昼に現れなかったな」
「それが・・　修学旅行の話し合いっつうんで」
「そうだったな、え・・っと」
監督が PC のスケジュール表を見て
「来週の火曜日から金曜日か、来週の土曜日は休むのか？」
「来ます」
「修学旅行から帰った翌日にもうバイト？」
「そりゃそうっすよ、修学旅行で俺が今まで稼いできた分全額使う覚悟っすから」
「おいおい、舞妓さん呼んでお座敷遊びでもするつもりじゃないよな」
「座敷？」
「おとなの冗談だよ、森下が稼いできた全額はいらないだろって話」
「そんでも愛里のために稼いできたんで」
「親御さんからお小遣いもらえるだろ」
「カノジョのための金を親に出してもらうっつうのは筋が違うっつうか」
「森下って、そういうところが昭和感あるよな」

昭和感？
「俺なんて全部親がかりだったな」
「そうなんすか？　監督なら旅費も自分で稼ぎそうっすけど」
「高校生のときはそんなもんだろ」
そっか　監督もこの学校の卒業生だよな
「監督、昼休憩んとき、聞きてえことあんすけど」
「なになになに、怖いな」
「や、なんつうか、先輩の話を聞きてえなって」
「なんの話だよ、話すことなんてそんなにないよ」
「ちこっとだけでいいんで」
「わかったよ、ところで、先週渡した革手袋、ちゃんと持ってきたよな」
「持ってきやした、んっと」
リュック開けて
「これ、ちゃんと、あといちおう軍手と防塵マスクもちゃんと持ってきたんで」
「そのリュック・・　幼稚園のときの？」
「ちげえっすよ、中学の指定のリュックで」
「中学の？　森下は物持ちがいいよな」
「それに、愛里が、ここにクレーンのアップリケつけてくれて」
「現場用か」
「修学旅行用なんすけど、現場にも持ってっていいって」
「修学旅行にそのリュック持っていくの？」
「そうっす」
「へえ」
「かっけえっすよね？」
「まあ、森下らしくていいんじゃないの？」
「俺らしいっすか？」
「嬉しそうにさ、とにかく、今日もよろしく」
「おいっす」
監督室出て
俺らしいってさ　だよな　だってさ　このリュックかっけえもんな
クレーンなんてさ　男心くすぐるっつうかさ
便所掃除だ

そろそろ昼休憩だな
やっぱ雨降った後だから埃飛ばなくて目ぇヤラレねえな
木っ端は水吸って重たくなってっけど　こんくれえはな
外部解体始まったら散水すんだろうな
おっし　休憩だ
監督室の扉開けて
「失礼します」

「顔、泥だらけだな」
「え？　そうっすか？」
袖で拭いたら　あ　マジだ
「お茶飲むだろ」
「いただきます」
監督が俺と自分の前にお茶置いて
「で？　何が聞きたいの？」
「今日も奥さんの卵焼きっすね」
「それが聞きたかったのか？」
「あ、ちげえっす」
「森下はおにぎりだけ？」
「そうっす」
「俺のおかず食べていいよ」
「んな、いいっすよ、奥さんが監督のために、育児で忙しい中作ってくれたんすから」
「そうだよ、優大育てながら俺の世話もしてくれてるよ、ほら、好きなの食べろよ」
「え、そんじゃ、卵焼き一個」
「いくらでもいいよ、で？　なに？」
「修学旅行んときって、着替えどんくれえ持ってったんすか？」
「着替え？　憶えてないけど、間に合うようには持って行ったと思うよ」
「つうことは、制服のシャツ三枚とかっすか」
「そうだったんじゃないかな」
「監督、頼むからちゃんと思い出してくだせえよ」
「そんなこと言われてもさ、昔のことだからさ」
「俺、制服のシャツ二枚っきゃねえんすよ」
「二枚だけでどうやってるの？」
「毎日洗ってるんすけど」
「買うしかないんじゃないか？」
「修学旅行のためだけにっすか？」
「まだ使うだろ、二年生なんだからさ」
「そんでも、今買うのは負けみてえな気ぃするんすよね」
「何と勝負してるんだよ、買えよ、購買でも売ってるだろ」
「それっきゃ手はねえのかなあ」
「ないよ」
「そんじゃ、靴下も日数分持ってったんすか？」
「靴下を二日連続で履いたら地獄だぞ、まわりもさ」
「洗ったりしなかったんすか？」
「修学旅行で洗濯してる高校生なんていないよ」
「そうなんすか」
「だいたい靴下をどこで洗うんだよ？」
「洗面台とか」

「それじゃさ、どこに干すんだ？」
「換気がされてたらバスルームで、あとはエアコンの風が来るとこっすね」
「本気で考えてるんだな」
「本気っすよ」
「だったらさ、森下の好きなようにすればいいんじゃないか？」
「俺の好きなように？」
「森下の修学旅行なんだから」
「俺の・・　そうっすよね？」
「靴下が臭くてシャツが臭くてまわりが迷惑してもさ」
まわり・・　愛里？　　それは・・
「それもまた思い出になるよ」
思い出に・・してくれっかな　二度と俺に近づかねえ・・とかになんねえかな
「まあな、荷物を少なくしたいのもわかるよ、おみやげ買わないといけないもんな」
「みやげは買わねえっす」
「友だちには？」
「みやげ買うほどの友だちっつうのは」
「カズオさんやお母さんには？」
「いらねえっつうんで」
「いいねえ、気楽でさ」
「監督は買ったんすか？」
「買ったよ、部活の先輩と後輩、餞別くれた親戚の人たち、あとは両親と兄貴」
「監督って、意外とマメなんすね」
「ふつうだろ」
「何買ったんすか？」
「部活はあれだよ、京都といえばの八ッ橋だよ、剣道部は代々八ッ橋だよ」
「部活別に決まってるんすか？」
「他の部のことは知らないよ」
「監督としゃべってっと、今まで知らなかったことを知るっつうか」
「そこまでの話はしてないだろ」
「俺ん中には、なんつうか、みやげ文化がゼロなんで」
「みやげ文化ってなんだよ、森下は本当に変わってるよな」
「や、ただ旅行の経験がほぼねえだけで」
「見た目は、アメリカやヨーロッパあちこち行ってますってカンジだけどな」
「俺の世界が狭めえっつうことっすかね」
「世界中行ったって、視野が狭かったらどこにも行かないのと同じだからさ」
「視野・・」
「自分のまわりをじっくり見ている方がいろいろ経験できることもある」
まわりを・・　じっくり・・
「監督、やっぱ監督としゃべってっと、心の目が開かれるっつうか」
「あのさ、この昼休憩中、俺は着替えの枚数やみやげの話くらいしかしてないよ」

「んなことねえっすよ」
「そんなことより、午後、三時休憩前くらいかな、ヤッさんとシゲさんとショーさん入るよ」
「マジっすか？」
「来月から外部解体が始まるから、今の現場と並行で、土曜日に準備と打ち合わせに来る」
「そんじゃ、来週も？」
「そうだな、10 月いっぱいは土曜日だけで、あとはフルで入ってもらうことになるな」
ヤッさんたちに会える！　メッチャ嬉しい！
「雨が降ってきたな」
「あ、そうっすね」
「森下、カッパ持ってきた？」
「持ってきたっす、とうちゃんが持ってけっつって」
「さすがカズオさんだね」
「これっす」
「あ・・　その、真っ赤な」
「そうっすよ、だから、ここ」
「タコさんウィンナー？」
「俺がこのカッパ着たときに、愛里がタコさんウィンナーみてえだって」
「うん、確かにそうだな」
「そんで、ここにタコさんウィンナーつけてくれたんすよ」
「え？　それってそういう意味だったの？」
「そうは言ってねえっすけど、ぜってえそれっきゃねえんで」
「へえ、まあいいよ、それ着てると目印になるから」
「目印？」
「それじゃ、午後もよろしく」
「おいっす」
カッパ着て　まずは　便所だ

とっくに雨はやんで　お日様出てんのにカッパ着てたから暑っちいな
そろそろ三時休憩だし　脱ぐか　あ　ヤベ　泥ハネすげえな
裏っ返してリュックに入れっか
「だいづーー！」「だいづーー！」「ダイちゃーーん！」
え？　あ！
「ヤッさん！　スギさん！　ショーさん！」
なんか知んねえけど　なんか知んねえけど涙出てきて
おっちゃんたちと抱き合って
「だいづ、会いたかったぁ」「会いでがっだ」「ダイちゃん、久しぶりだな」
「ヤッさん・・スギ・・さ・・ショー・・」
「だいづはぁ、す〜ぐ泣いてはぁ」「泣ぎっずでな」
「おっちゃんたち・・だっ・・て」

「こ〜れはぁ涙じゃねっぺ」「汗だ汗っご」
「会えて嬉しいよ、俺・・　メッチャ会いたかった」
「俺らもなぁ、だいづがぁここに入ってるってはぁ」「どよんびだけだべ？」
「え？ ん？」
「監督が、ダイちゃんは土曜日だけバイトで入るって言ってたんだよ」
「ショーさん、現場監督になったんだよな」
「まだまだ見習いも見習いだよ」
「いんやいんや、ショーさんはすげえんだした」「んだよ」
「ダイちゃんのおかげだよ」
「俺はなんもしてねえよ、監督がショーさんの経験と実力をさ」
「俺はこの夏まで浮浪者だったんだよ、声をかけてくれたのはダイちゃんでさ」
「ショーさん、あの監督はお情けで現場監督になんかしねえよ」
「だいづ、俺もぉそうしゃべってんだぁ」「んだんだ」
「ありがたいよ、本当にさ」
「ショーさん、奥さんとデートしてんの？」
「デートって、そんな・・な、どこかの公園で弁当食うくらいでさ」
「い〜っつも照れんだしたぁ、俺たちがぁ、カナちゃん元気かぁっつうとはぁ」
ショーさん真っ赤になってて　メッチャ可愛いな
「だいづ、その上さ着てらの」
「上？　あ、これはとうちゃんの秋冬用の作業着っす」
「カズさんの・・　それで冬だば・・たんげ寒みんでねが？」
「え？ あ？」
「そんでもはぁ、夏に着てたのよかはなぁ、ま〜だマシだっぺ」
マシ？　え？　なに？
「ダイちゃん、そのリュックは？」
「あ、これ？　俺が中学んときの学校指定のリュックなんだけどさ」
「中学のぉ・・」「まんだとっでらのが」「中学のを取っておいたのか」
「ここんとこに穴開いてたんだけどさ、愛里が、ほれ、バンドエイドのアップリケ」
「いんやいんや、穴にぃ、絆創膏貼ってんのけ」「ガムテでねはんで、まだいんでねが？」
「そんで、ここにクレーンでさ、この紐をここに・・　クレーンで引っ張ってるみてえだろ？」
「あいりちゃんもぉ・・考えたんだなぁ」「わのかっちゃだばなげてまるや」
「投げる？　どこにっすか？」
「ふっつうならぁ、ここまでのっつったら捨てっぺ？」
「かあちゃんは捨てろっつったんすけど」
「そんでもはぁ、あいりちゃん、よ〜くがんばったっぺ」
「そうなんすよぉぉ」
「愛里ちゃんは本当に器用だよな、現場用にって再利用できるようにしてくれたんだろ」
「修学旅行に持ってくのにさ」
「修学旅行？」「しゅがぐりょごぉ？」「修学旅行に持って行く？」

「俺、リュック持ってねえからさ、これならいぃんじゃねえかなっつって」
「そっかぁ、だいづはこれ持って修学旅行に・・」「こったので・・」
「来週の火曜から金曜まで、奈良京都行ってきやす」
「あいりちゃんと一緒に行くんだっぺ？」「あえるちゃんと」「京都デートか」
「んなあ、デートってぇぇぇ、まあ、そうなんすけどぉ」
「そいだばじぇんこかかるべ」
ん？ え？　久しぶりだからスギさんの言葉があんま聞き取れなくなってんな
「デートすっからぁ、土曜日だけでもってはぁ現場入ったんだっぺ？」
「まあ、そうっすね、今日の日給も手渡しにしてもらって持ってこうと思って」
「いんやいんやいんや」「わいわいわい」
おお　久しぶりのおっさんずラップ
「だいづはぁ男の中の男だっぺ」「んだ」
「マジっすか？」
「さすがぁ俺の小方だした」
「え・・　ヤッさん・・それ言われっと俺・・」
「ま〜た泣いてはぁ」「ほれ、なだふげ」
スギさんがタオルで・・
「スギさん・・　またタオル洗ってねえっすね」
「あ、忘れでだ」
「スギさん、ま〜たおっかあに叱られっちまうっぺ」「んだな」
なんか　なんかさ　おっちゃんたちといると　俺　帰ってきたっつう気ぃする

おーーっし　終わった
「ヤッさん、スギさん、俺、便所掃除してから監督んとこに」
「便所掃除ならぁ、ショーさん行ってっからぁ」
「え？　俺の仕事なんすけど」
「ショーさん、今の現場でもぉ最後の便所掃除は自分でやってんだした」
「そうなんすか」
「だいづは、ほれ、監督んとこに行かねえとなんねっぺ」「早ぐ行がねど」
「あ、おいっす、そんじゃショーさんにも、また来週っつっといてくだせえ」
「言っとくからぁ」「しゃべっどぐ」
「そんじゃ」
監督室の扉開けて
「失礼します」
「森下、ご苦労さん、どうだった、久しぶりにヤッさんとスギさんが入った現場」
「全然ちげえっすよ、スッとまとまって、そんでて、みんなが安心したみてえに動けて」
「やだねえ」
「え？」
「修学旅行に行くような高校生のくせに数時間でわかるってさ」
「働いてりゃ誰でもわかんじゃねえすか？」

「あ、そう、これ、今日の日当」
「ありがとうございます」
「中を確認して、ここにサインして」
「おいっす」
あ・・れ？　ん・・っと
「監督、俺の時給 1000 円すよね、これ・・1,500 円になってるんすけど」
「洗濯代」
「洗濯代？」
「修学旅行で靴下とシャツ洗うんだろ？」
「や、まだそう決めたわけじゃ」
「森下ならコインランドリー探しそうだよ」
「ホテルの地下にあるんすけど」
「ほら！　ほらな！　絶対調べてると思った」
「へ？」
「もし本当にコインランドリー使ったらさ、必ず報告してくれよ」
「え？　あ、おいっす」
「それじゃ、また来週」
「え・・　あの」
「おもしろい話待ってるよ」
「あ、おいっす、失礼します、えっと、ありがとうございます」
監督室の扉閉めて・・
マジか　時給 1,500 円　おおおお　正直ありがてえ
「だいづ！」「だいづ！」「ダイちゃん」
ヤッさんとスギさんとショーさんが走ってきた
「俺たちもぉ、もっと前にわかってたらはぁ、も〜っとぉ持ってきたんだけんちょ」
「持ってきた？　なにをっすか？」
「今ぁ手元にあんのがぁ、こんくれっきゃねえんだした」
「こんくれえ？　・・つうのは？」
「これ」
千円札三枚？　これが？　なんだ？
「あいりちゃんとぉ、美味えもんでも食ってけんちょ」
え？
「わんつかだばって、めえもん食わせでや」
え・・
「お・・　俺・・に？」
「ちっとはなぁ、男見せてぇ、美味えもん食わせてぇ、なあ」「んだ」
男・・見せて・・
「京都だっぺ？」
「京都っす」
「そ〜んないいとこではぁ、だいづに奢られたらぁ、ま〜た惚れちまうっぺ」

「え？」
「もうだいづさんとぉ離れらんねえわぁってはぁ」
「んなぁ、マジっすか」
俺は・・　泣かねえように・・
ヤッさんがおどけたみてえにしゃべることに乗ったふりして
「マジ・・すか」
「んだしたぁ、なあ」「んだ」
「ダイちゃん、修学旅行楽しんできてくれよ」
「おいっす」
「そんじゃ、また来週なぁ」「まだな」「来週も俺たちは午後から入ると思うよ」
「ヤッさん、スギさん、ショーさん」
俺は　やっぱ　この三人が
「ありがとうございます」
大好きだ
俺に手を振って帰って行く　おっちゃんたち
ありがとうございます
俺　ぜってえ楽しんできます　愛里に美味えもん食わせてあげます
おっちゃんたちの　この　しわくちゃの千円札三枚で

汚れたリュック

マンションの前で
作業服パンパンパンッて埃はたいて
この前よかは出ねえな　現場濡れてたから埃あんま立たなかったもんな
『愛里　今どこ？』送信
ピコン
『私の部屋です』
そっか
エレベーター乗って　二階のボタン押した
ピコン
『お弁当美味しかったです　ありがとう』
ピコン
『お昼に LINE できなくてごめんなさい』
『んなこといいよ w』送信
ピコン
『今どこですか？』
『エレベーターん中』送信
ピコン
『近く過ぎる wwww』
『もうすぐ行くよ』送信
ピコン
『その絵文字 wwww』
エレベーターのドアが開いた

ドアホン鳴らすと　ドアが開いて
「おかえりなさい」
「愛里」
抱きしめて
「コホッコホコホコホッ」
「え？　埃吸っちまった？　はたいてきたんだけどな」
「コホッ・・じゃなくて・・なんか・・思いっきり・・吸っちゃって」
「埃？」
「なんか、えっと・・牛乳拭いた雑巾・・みたいな」
「メチャ臭せえやつ？」

「その・・シャツが」
「これ？」
引っ張って嗅いでみてっけど　あ　少し　なんつうか
「蒸れたんかもしんねえ、カッパ着てたからさ」
「カッパって？」
「これ」
リュック開けて
「このカッパ」
「えっ？」
「かあちゃんがくれたやつ」
「えっえっえっ？」
「愛里がタコさんウィンナーみてえだっつってさ」
「えーーーーーーっ」
「これだよな、だからこのタコさんウィンナーの」
「まさか・・　現場に持って行ったんですか？」
「持ってってよかった、雨降ったじゃん」
「リュック！」
「リュック？　　持ってった」
「なぜ？」
「愛里が持ってっていいっつってくれたからさ」
「言ってないけど」
「ゆうべの LINE で俺が聞いたら、使い倒した方がいいっつったじゃん」
「それは、だって、まさか、今日だと思わないでしょ！」
「俺が今日バイトだって知ってたじゃん」
「そうじゃなくて！　　エーーーーーッ　私が　エーーーーッ」
愛里が　両手で顔押さえて　しゃがみ込んじまった
「愛里？　　どした？　　貧血？」
愛里の　息が荒い
「愛里、具合悪りぃんか？　　ベッド行くか？」
「倒れ・・そう」
「えっ？　　愛里！」
抱っこして
「あ・・ちょ・・っと・・今は・・その・・にお・・い・・は」
「あ、ご、ごめん」
あわてて腕離して　んっと・・　えっと？　　愛里の背中さすってみてっけど
「ハァァァァァァァァ」
愛里が　大きく息吐いてさ　苦しいんかな
「愛里？」
顔覗き込んでも　手で覆ちっまってっから見えねえな
「あなたが・・現場に・・リュック・・」

「うん、持ってった、ちゃんと持ってった」
「それって・・」
「おっちゃんたちも愛里はすげえっつってたよ、監督も俺らしいっつってくれてさ」
「修学旅行が終わってから・・だと・・思ってて」
「修学旅行終わっても持ってくに決まってんじゃん」
あ　愛里が　手ぇおろして　顔が・・　え？
「愛里、なんかすげえ疲れてねえか？」
「疲れ・・ますよね」
「バイト？　　愛里もバイトだったんだもんな」
「そこじゃなくて」
「どこ？」
愛里の視線が　テンテンテン　リュック？
「そんなに汚れちゃって・・」
「そんなんでもねえよ、ちっと拭けばさ」
「あなたの・・そのシャツが・・そこまでになるっていうことは」
「そこまで？」
「その中に入ってる・・そのカッパは・・」
「それはさ、泥ハネすげえから裏っ返して入れてっから大丈夫だよ」
「裏っ・・つまりは・・　内側が」
「うん、内側にして入れてっからさ」
「臭っさいのがむき出しで入ってるってこと？」
「むき出し？」
「そのリュックの中は・・　充満してるってこと？」
「充満じゃねえよ、余裕で入ってっから、まだまだ全然入っからさ」
「リュックの中が牛乳拭いた雑巾臭さで充満してる！」
「あ、そ、そんじゃカッパ出す」
「ここで出さないで！」
「あ、ご、ごめん、そんじゃ、んっと」
「私は・・」
愛里が　すげえ真剣な目で俺のこと見て
「あなたがそのリュックを修学旅行に持って行きたいって」
「うん、持って行きてえし持ってくから」
「中学のときのボロボロのリュックを、おかあさんに捨てなさいって言われても、
　あなたは持っていて・・　だから・・　なんとかして、どうやったら・・
　あなたが持っていけるようにできるのかなって考えて・・　必死に考えて・・
　なのに、あなたは、それを修学旅行の前に、そんなに汚して臭くしちゃって」
「愛里、ごめん、俺・・」
「どうでもいいのかなって」
「どうでもいいなんて思ってねえよ、愛里、マジで思ってねえよ」
「だって・・」

「愛里、俺さ、このリュック、すげえ気に入ってさ、すげえ好きで、枕の上に置いてさ、
　メッチャかっけえなって、そんで、クレーンつったら現場だよなって、
　男の夢っつうか、現場にこれ持ってったらメッチャかっけえなって」
「現場・・？」
「うん、どうしても現場に持っていきたくなっちまってさ」
「あなたは・・　現場の方が大事なんですね」
「え？　大事？」
「現場の方がずっと大事なんでしょ？　修学旅行なんてどうでもいいんでしょ？」
「愛里、んなこと思ってねえよ」
「修学旅行のために用意したリュックを現場に持って行って」
「それは、俺がなんも考えねえで」
「みんなとの話し合いのときは、なんか気が入ってないっていうか」
「それはさ、なんかあんまよく」
「私が着替えは何枚持って行くか聞いたときも、どうでもいいみたいな」
「愛里、ちげえよ、どうでもいいんじゃなくてさ」
「あなたが、一年前から、修学旅行は私と一緒に京都をまわりたいって」
「俺はマジでそう思ってるよ」
「一年も前から私と一緒にって思ってくれてたのが、それがすごく嬉しくて」
「愛里、俺、ほんとにそう思ってたし思ってんだよ」
「だけど・・　あなたが離れていくみたいで・・」
「えっ？」
「あなたはだんだん・・そんなことどうでもよくなって・・　私だけが・・」
愛里が　両手で顔覆って　白くて細い指の隙間から　涙が・・
「愛里」
俺は　抱きしめるっきゃできなくて
「愛里・・　俺・・　マジで・・　愛里と一緒に京都・・　マジで」
なんて言ったら　どうすれば　愛里にわかってもらえんのかな
あ　そうだ　片手でリュックのジッパー開けて　中からおっちゃんたちからの
「愛里、これ、これ見てくれよ」
愛里が　涙で濡れた顔を少しだけこっちに
「おっちゃんたちがさ、京都で愛里に美味えもん食わせてあげろってくれたんだよ」
シワクチャの札持ったままの片手戻して　愛里のこと抱きしめて
「そしたら愛里が俺のこと惚れ直してくれんじゃねえかってさ」
「惚れなお・・」
「惚れ直すっつうのも、なんか、へへ、あとさ、あと、今日の日給さ、
　いつもは振り込みにしてもらってんだけど、現金でもらってきてさ」
それってさ　愛里
「稼ぎたてホヤホヤの金で、京都で愛里に、あ、今日のだけじゃねえよ？
　そんでも、なんかさ、稼いだばっかの金、愛里のために使いたくてさ」
「え？」

愛里が　顔あげて　俺のこと見た
「京都でさ、愛里が欲しいっつうもの、なんでも買ってあげてえしさ、
　俺、そのために稼いできたっつうかさ、俺の金ぜーーんぶ愛里のために使いてえからさ」
「あ・・」
愛里が俺にしがみついてきて　俺の胸で声出して泣いて
「愛里」
愛里の頭　撫でて
「俺さ、着替えとか持ってくもんとかよくわかんねえからさ、頭に入ってこねえだけで、
　それで、愛里のこと不安にさせちまって、ごめんな」
愛里が　俺の胸んとで小さく首振って
「俺の頭ん中、愛里だけなんだよ」
マジでさ　愛里
「京都でさ、愛里がすげえ嬉しそうな顔して、すげえ喜んでさ、
　俺、愛里にぜってえ、なんつうか、京都で愛里が楽しいって、そうさせてあげてえって」
「え・・あ・・」
「それぱっかでさ、あとなんも頭になくてさ」
「あ・・もう・・やだぁ・・」
「え？ やだ？　 あ、や、愛里が行きてえとか食いてえっつうのがあったら、
　俺がちゃんと調べっから、愛里にはなんも心配させねえからさ」
「ちが・・う・・ちがうの・・」
愛里が　俺のシャツ引っ張って
「あなたが・・ヒック・・そんなこと思ってくれてたのに・・ヒック」
鼻水拭いて
「私・・ひどいこと言って・・」
「愛里はなんもひでえことなんて言ってねえよ」
「リュックが汚くなったとか臭くなったとか・・」
「愛里が言ってくんなきゃ俺気ぃつかなかったからさ」
「そんなこと・・どうでもよかったのに・・」
「よくねえだろ、んな臭くて汚ねえリュックで愛里と一緒に歩けねえよ」
「臭くても汚くてもいいです」
「よくねえだろ、かあちゃんに叱られちまうよ」
「あ・・　フフッ」
やっと少し笑った
「あっ　そうですよね・・　あ・・」
愛里がすげえ深刻な顔になって
「どうしよう」
また泣いた
「愛里」
抱っこして

「愛里のこと泣かせちまってごめんな」
「私が勝手に泣いてるだけで・・」
「愛里のこと不安にさせちまってさ」
「私が・・思い込んでただけで・・」
愛里がまた俺のシャツで鼻拭いて
「私・・　臭いとか言っちゃって」
「臭せえよ、さっき嗅いだら、俺、臭せえ」
「あなたが泥だらけになって・・汗いっぱいかいて・・」
「愛里、マジごめん、俺そういうのあんま気ぃついてねえからさ」
「ちがうの、そうやって働いてるあなたが・・」
愛里が顔あげた　あれ？
「愛里、鼻んとこに泥ついちまってる」
「え？　　どこ？」
「メッチャ可愛い」
「可愛くないです、鼻に泥をつけた女って」
鼻の泥取ろうとする愛里の手　つかんで
「マジで・・」
そんで・・
「可愛い・・　愛里・・」
愛里のくちびるに　たまんねえ　可愛くて　たまんねえ　俺・・
くちびる離すと　愛里の目が　んな目で見られたら　俺　とろけちまって
えっ　愛里が　俺のくちび・・　あ・・や・・も・・フワッフワ・・して・・
ドスッ
「イデッ」
「え？　　やだ、なんで？　　後ろに？　　なんで？」
腰・・抜け・・
「私が倒しちゃった？」
あーーーっ　俺の　ヤベ　ヤベヤベヤベーーーー　んっとんっと　あっ　リュック
リュック股の間に　置いた
「え、なに？」
「んっと、んっと、あ、こ、このタコさんウィンナー」
「タコさんウィンナー？」
「タコさんウィンナー」
「え、大丈夫？　　頭、打った？」
「この、タコさんウィンナーのアップリケさ」
「あの、本当に大丈夫？」
「これってさ」
もうちっと　もうちっとで・・
「俺が赤いカッパ着てるときんだよな？」
愛里が　なんか怖えもん見たみてえな顔になってっけど　見たんかな　俺の・・

「なんの・・こと・・ですか？」
「だからこのタコさんウィンナーのアップリケ」
「私のこと二重に見えてたりしませんか？」
「二重に見えてねえよ、それよか、このタコさんウィンナーの」
「怖いんだけどぉぉ」
「え？ なにが？」
「さっきからタコさんウィンナータコさんウィンナーって」
「や、だからさ、このタコさんウィンナーの」
「イヤーーーッ」
「へ？」
「絶対頭打ちましたよね」
「打ってねえよ、後ろにひっくり返っただけでさ」
「10 － 3 は？」
「あ？ なに？」
「10 － 3 は？」
「なんで？」
「いいから答えて！　　10 － 3 は？」
「7」
「あ・・　それは・・できる」
「愛里、俺、頭打ってねえし、気ぃ確かだしさ」
「だったらなんでタコさんウィンナー連呼するのぉぉ？」
「前に俺がこの赤いカッパ着たとき、愛里がタコさんウィンナーに似てるっつったじゃん」
「え？　　いつ？」
「言ったじゃん、帽子んとこかぶって紐絞めてみろっつって」
「え・・そういえば・・言ったような・・」
「このタコさんウィンナーのアップリケって、俺がカッパ着た姿じゃねえの？」
「今なんとなく思い出したばっかりで」
「そんじゃ、この、タコさんウィンナーのアップリケは・・　なんで？」
「あなたがたまにタコみたいに口尖らせるし」
「へ？」
「お弁当にタコさんウィンナー入れてくれるし」
「あ・・そう・・いう・・」
「見つけたとき、なんか可愛いって思って、名札代わりみたいなカンジでいいかなって」
「ああ、そっか、ああ、そういう、そっか」
「それが、どうかしたんですか？」
「や、なんもしねえよ、俺も可愛いなって」
「そう・・ですよね」
「おう」
すーーっかり　おさまった　俺のタコさんウィンナーも
「んっと、そんじゃ、俺、家帰ってリュック洗うからさ」

「あの・・　本当に頭は」
「頭？　全然うん全然」
「あとで・・きたりするっていうから」
「なにが？」
「気をつけてください」
「あ？　ああ、うん、んっと、そんじゃあとでな」
「はい」
ドア閉めて
そっか　このタコさんウィンナーは赤いカッパ着た俺じゃなくて　名札？
名札代わりにタコさんウィンナーのアップリケってさあ　愛里は可愛い過ぎんだろぉ
幼稚園児じゃねえんだからさあ
にやけてねえで早く帰ってリュック洗わねえと

アネモネ

リュック洗わねえと　リュックリュック
エレベーター飛び出して廊下走って家のドア開けて
「ただいま」
「ダイチ、おかえり」
「とうちゃん、ただいま」
リュックリュック
「雨、降ったな」
「カッパ持ってったから助かった」
「昼によ、雨降ってきたなって、そんでもダイチはカッパ持ってったなってよ」
「とうちゃんのおかげだよ、でねえとずぶ濡れだったよ」
「よかったな」
「俺、リュック洗わねえとさ」
「そんくれえなら雑巾で拭きゃいぃんじゃねえか？」
「それがさ、こん中」
リュック開けて
「カッパ入れてたから臭くなっちまってさ」
「そっか？」
「とうちゃん嗅いでくんねえ？」
とうちゃんがリュックん中に顔突っ込んで
「こんなもんじゃねえか？」
「そんでも愛里が臭せえってさ」
「アイリちゃんが臭せえって？　　そんじゃ、洗わねえとな」
「とうちゃん、俺、愛里のこと泣かせちまってさ」
「えっ、ダ、ダイチ、アイリちゃんに・・なにやっ・・」
「いろいろあんだけどさ」
「い、いろいろ？　　いろいろ・・やっ・・」
「まずはこのリュックでさ」
「リュック？」
「愛里は修学旅行で使ってから現場で使って欲しかったみてえでさ」
「順番みてえのがあんのか」
「俺、浮かれて現場持ってっちまったから」
「そっか、俺も気ぃつかねえでよ」
「俺、リュック洗ってカッパ洗ってシャワーすっけど、買い出しは？」

「もう晩メシ作ってっから心配しねえでいいよ」
「とうちゃん、ありがとう」
リュック持ってそのまんまバスルームに走り込んで　あれ？　　なんか・・
とうちゃんがバスルームに入ってきた
「ダイチ、リュックとカッパは俺が洗っとくからよ、風呂入れよ」
「あ、うん、ありが・・　とうちゃん、かあちゃんいねえの？」
「リビングにいんじゃねえかな」
かあちゃん・・　いたんか
「かあちゃん呼んできてほしいんか？」
「あ、や、ちげえよ」
作業服脱いで　これも風呂場で下洗いした方がいいな
なんで　かあちゃん・・　まあいいや　洗わねえと
「とうちゃん、カッパも風呂場の方が洗いやすいから、俺洗うよ」
「そっか？　　そんじゃリュックだけ洗っとくからよ」
「うん、ありがとう」
シャツとパンツだけでカッパ洗って・・
かあちゃん・・　来なかった　いつもなら　俺ととうちゃんがあんな話してっと
速攻で来て　臭せえとか汚ねえとかなにやってんだって怒鳴られんだけど
なんも言わねえって・・　かあちゃん具合悪りぃんかな
ちげえな　かあちゃんが具合悪かったらとうちゃんは・・だよな
作業服も洗って　けっこう泥ついてんな
そんでシャツと下着も脱いで　シャワー　気っ持ちいいいい　つうか　気味悪りぃな
あのかあちゃんがなんも言わねえって
なんか考えてんのかな　なんかすげえ怖えこと・・　なんだ？

晩メシはとうちゃんのカレー
俺がシャワーし終わったら　愛里はもう来てた
愛里も服着替えてる　だよな　俺が臭っせえ作業着で抱きしめまくっちまったもんな
今はカレー食いながらかあちゃんと花の先生がどうのって話してっけど
愛里　ごめん　正直　俺の頭に全然入ってこねえ
かあちゃんが　なんも言わねえからさ
俺がとうちゃんに　愛里泣かせちまったことや
リュック汚れて臭くなっちまったから洗わねえととか
カッパも臭せえから洗わねえととか　んなことしゃべってたのにさ
いつもなら　すーーぐ来て　臭せえとか汚ねえとかカッパ捨てろとか
鬼みてえな目ぇして言うのにさ　なーーんも言わなかった
リビングにいたならさ　ぜってえ聞こえてたのにさ
今も愛里とニコニコしながらしゃべってるだけで・・
不気味だ　もしかすっと　もっとこう　なんか　ドーーンと
「ダイチ」

「え？ あ？ はい！」
「なによ、はいって」
笑ってる　笑ってるよぉぉ　怖えよぉぉ
「私と愛里さんは明日買い物に行くけど、あんたはどうするの？」
「あ、えっと、あの、とうちゃんと、掃除と洗濯と買い出し・・します」
「どうしたのよ、しますだなんて」
笑ってっけど　このあと　なんかドーーンとくんのかな
「何か買ってきて欲しいものはある？」
「え？ みやげ？」
あ　一瞬　かあちゃんが　固まって　俺のことジッと
「あ、や、ごめん、かあちゃん」
「おみやげが欲しいなら」
ニッコリしたぁぁぁ
「何か買ってきてあげるけど？」
怖えぇぇぇぇ　マジ怖えぇぇぇ　メッチャ怖えぇぇぇ　チビりそうだ俺
「いや、あの、いらない・・です」
つか　チビッてかもしんねえ
「ダイチ、どした？」
とうちゃんが俺の耳元で
「ほっとんど食ってねえけどよ」
とうちゃん・・
「なんか・・　入ってかねえ」
「具合悪りぃんか？」
「や・・なんか・・」
「疲れてんのか？」
「疲れ・・ては・・ねえけど」
「ダイチ、なんか顔が青くなってんぞ」
マジ・・か
「ちっと寝た方がいぃんじゃねえか？」
「や・・んな」
「どうしたの？」
かあ・・ちゃん
「ダイチがよ、顔青くってよ、寝た方がいんじゃねえかっつってんだけどよ」
「さっきから様子がおかしいと思ったのよ」
それは・・かあちゃんが・・
「あんたはすぐ熱出すから」
すぐではねえけどさ
「少し寝なさい」
「あ・・　はい」
愛里のこと　見たら　すげえ心配そうな顔してる

「ちっと、あの、寝てくる、んな、てえしたんじゃねえから」
「早く部屋に行きなさい」
「あ、うん」
そうだな　今は　ちっと休まねえと　身ぃもたねえ　つか神経ヤラレる
部屋入って　ベッドに横になっ・・

あ？　なんか　音　真っ暗だ　何時だ？　携帯は・・　あった　マジで？
すげえ眠っちまってた
部屋から飛び出して　え？　あれ？
「ダイチ！　起きたの？」
リビングからかあちゃんの声
「あ、うん」
リビングに入ってったら
「大丈夫？」
「え？　ああ、うん、あの、愛里は？」
「ちょうど今カズオが送っていったわよ」
あ・・　ドア閉まった音で起きたんか　俺
「あんた、頭打ったって？」
「頭？」
「愛里さんが心配してたわよ、それで具合悪くなったんじゃないかって」
「打ってねえけど」
「愛里さんの部屋で打ったって」
「愛里の？」
あ！
「あれ・・は、ちっと腰抜かして」
愛里からキスされてクラ〜ッとしちまったんだけど
「腰を抜かした？」
「うん、そんだけで」
「腰をね、へえ」
「な、なに？」
「昔カズオも腰を抜かしたことがあったから」
「え、なんで？」
「さあね」
さあねって　かあちゃんから言っといてさ
「愛里さんから電話があったの」
「俺が頭打ったって？」
「ちがうわよ、あんたが帰ってくるちょっと前に」
「俺が帰って・・」
愛里の部屋から出たすぐ後っつうこと？
「私にだけ聞いて欲しいっていうから、ベッドルームで話したんだけど」

「え？　かあちゃん、俺が帰ってきたときってベッドルームにいたんか」
「あんたが帰ってきたのは聞こえたけど、愛里さんと電話してたから」
「あああ、だからか！」
「だから？　なに？」
「なんでもねえ」
なんだよ　かあちゃんがなんも言いに来ねえって　愛里と電話してたからか
メッチャ考え過ぎて具合悪くなっちまったよ
「愛里さん、あんたにすごくひどいことを言ってしまったって」
「そんなん、なんも言ってねえけど？」
「あんたのことを汚いとか臭いとか」
なんだ　んなことか
「それは、マジそうだからさ」
「私もそう言ったわよ」
言ったんかよ　言うよな　かあちゃんならさ
「あんた、あのリュック、現場に持って行ったんですって？」
「あ・・　うん、俺が・・浮かれちまって」
「愛里さん、私にお願いがあるって」
「お願い？」
「あのリュックが汚くても臭くても、あんたに持たせてあげて欲しいって」
え
「あのリュックが汚れて臭くなったら、私が持って行っちゃダメって言うと思ったみたい」
愛里
「だから汚くなったリュックを見て、プツンと何かが切れて、ひどいこと言っちゃって」
「愛里はひでえことなんて言ってねえよ」
「おもしろい言葉を使ったのよ、なんだったっけ？　あ、そうそう、陳腐な言葉を言ったって」
「陳腐？」
「修学旅行より現場の方が大事なんでしょって」
「それは・・」
「まあ、たしかにね、私より仕事の方が大事なんでしょみたいなね、ハハハ」
かあちゃん笑ってっけど　あんとき愛里は泣いて・・
「愛里さん、あんたと京都を一緒にまわれるのがすごく嬉しくてすごく楽しみだって」
「えっ　す、すごく？」
「自分でもビックリするくらい楽しみにしちゃってたって」
ビックリする・・くらい
「愛里さんもねえ、そういうの表に出せない子だから、わかるけどね、すごくわかるけど」
マジ・・で？
「あんたが愛里さんのことをどれほど大切に思ってくれてるのかも考えないで」
「それは俺が愛里にうまく伝えらんねえからで」

「最後まで聞きなさい」
「あ、はい」
「あんたに陳腐な言葉を言ってしまって、傷つけてしまったって」
「傷つけてなんかねえよ、全然傷ついてねえよ」
「それは私も言ったわよ、ダイチはそんなことじゃ傷つくわけがないって」
「あ・・　うん」
「あんたもねえ、外から見ると高尚なことでも考えてるように見えて」
ハ？
「実は、パンツに穴が開いてるなあなんてこと考えてたり」
「な、なんで、んなこと、わかんの？」
「眠くてボーッとしてるだけなのに、外から見たら興味なくて冷めてるみたいに見えて」
「マジ？　どうすりゃいいの？」
「どうしようもないわよ、カズオに似っちゃったんだから」
へ？
「ただいま」
とうちゃん
「アイリちゃんがよ、花、見してくれてよ」
とうちゃんがリビングに入ってきて
「ダイチ、起きてたんか」
「うん」
「頭、大丈夫か？」
「大丈夫だよ」
「アイリちゃんがすげえ心配しててよ」
「大丈夫、マジ、なんもねえよ」
それよか　とうちゃんはなんで腰抜かしたんだ？
「カズオ、それは愛里さんのお花？」
「美里とダイチにも見せてえから持ってってくれって」
とうちゃんが　ローテーブルの上に置いた
す・・げえ　いろんな形の緑の葉っぱの中に　白と薄いブルーと濃い青？　紫？
なんつうか・・　グラデーションみてえに・・
すげえきれいで　愛里見てるみてえで　なんか・・　涙・・出てきて
「愛里さん・・　夕食のときに話してくれたけど」
え？
「こんなに幻想的にきれいだなんて」
かあちゃんが　目ぇウルウルさせてる
「今日のレッスンで秋咲きのアネモネを使ったんですって」
アネモネっつうのか　この花　すげえきれいだな
「みんな白と赤、白とピンク、赤とピンクの組み合わせでやっていて、
白は大量に仕入れてたけど、青と紫が残っちゃってたから、それでアレンジしたって」
残った花なんて思えねえよ　すげえきれいだよ

「先生が花言葉を教えてくれて、ますます白とブルーと紫でやりたくなったって言ってたの」
花言葉？
「愛里さんの今の気持ちにピッタリだったって」
「なんつう花言葉？」
「なんだっけ、忘れちゃった」
「かあちゃん、そこは憶えててくれよ」
「調べなさいよ！」
「あ、うん」
携帯は・・　ベッドの横だ
部屋ん中に走ってって　アネモネ　花言葉　あった
　白：希望・期待
　ブルー：固い誓い
　紫：あなたを信じて待つ
あなたを信じて・・待つ・・
希望と期待と・・　固い誓い・・　あなたを信じて・・
愛里の今の気持ち・・
修学旅行・・　一緒にまわるの期待してて・・
一緒にまわろうって約束して・・
あなたを信じて・・待つ・・　俺がどうでもいいみてえに見えて　そんで・・
愛里・・　ごめんな　俺　そんな気持ちにさせて
そんなつもりじゃなかったけど　そんでも・・
そんでも　俺のこと信じて待つって・・　愛里・・
「ダイチ」
「とうちゃん」
「腹減ってねえか」
「減った」
やっと腹減ったよ　メッチャ減ってる

キッチンの流しんとこに立って
とうちゃんが温め直してくれたカレー食って
「美味え」
「食えるようになってよかったな」
「うん」
そうだ　とうちゃんに聞いてみっか
「とうちゃんさ、昔、腰抜かしたことあんだって？」
「腰抜かした？　んーーっと　あ！　浮浪者んときよ」
浮浪者だったときのことじゃねえと思うけどな
「仲間のおっちゃんに酒もらって初めて飲んだときに腰抜けちまってよ」
「じゃなくてさ、かあちゃんといるとき」

「美里と？」
「とうちゃん腰抜かしたってかあちゃん言ってた」
「あ？　ん・・　あっ！」
「思い出した？」
「あれ・・は、ねーちゃんが会社行くときに・・よ、クルッと振り向い」
「ダイチ！」
かあちゃん
「あんたはこんなところで立って食べるなんて！」
とうちゃんと二人きりんときは　いつもなんだけど
「まったく、愛里さんもこんな野生動物のどこがいいんだか」
「や、野生動物？」
「汚ったなくて臭くて、キッチンでカレーを立って食べるような野生動物よ」
なんか　なんか
「かあちゃん」
「なによ」
「ホッとする」
「ホッとする？」
やっぱかあちゃんは　汚ねえだの臭せえだのなんだの言ってくんねえとさ
「バカなの？」
そのすげえ怖え目もホッとする
「もういい、お風呂に入ってくる」
「かあちゃん、あのリュック使わせてくれてありがとう」
「お礼は愛里さんに言いなさい」
こっち見ないまま　かあちゃんはバスルームに行っちまった
「ダイチ、あと一杯分くれえは残ってっぞ」
「食う食う」
とうちゃんが白メシとカレーかき集めて俺の皿によそってくれた
「とうちゃん、そんで？　なんで腰抜かしたの？」
「あんときは・・よ」
「カズオ！」
「ね、ねーちゃん」
とうちゃん　昔に戻っちまってるよ
「言ったらどうなるか、わかってる？」
「針を千本・・　飲む？」
かあちゃんがジーーッととうちゃん見て　そんで　バスルームに入ってった
これは・・　俺には言えねえことか　会社行くときクルッと振り向いて・・
あ　なん・・か　わかった気いすんだけど
「とうちゃん、俺さ、今日愛里の玄関とこで腰抜かした」
「えっ　あ・・　ダイチ・・」
そっか

「あれは・・な　腰、抜けちまうな」
やっぱ　そっか
「うん、抜けちまった」
「そっか、ダイチもな、そっか」
「うん」
「そんでもよ、あの、フワッフワしちまうのだけはよ」
「それは、うん、ぜってえ、しねえ」
「そんならな」
「うん」
とうちゃんと俺　なんとなく　なんか　シャツの裾グイッて伸ばして股んとこ隠して
「んっと、ごっつぉさん」
「お、おう、そこ置いとけや」
「いいよ、自分で洗うよ」
「アイリちゃんによ、頭、もう大丈夫だって言ってやんねえとよ」
「あ、うん」
「あとよ、リュック、きれいになったからよ、今ベランダに干してっから」
「とうちゃん、ありがとう」
とうちゃんが　ニッコリ笑って　俺が食ったカレーの皿洗い始めた

部屋に入って
勉強の前に　まずは愛里に
『愛里』送信
『元気になったよ』送信
『つうか　眠かっただけｗ』送信
『頭打ったんじゃねえから　安心してください』送信
既読つかねえな　シャワーかな
『とうちゃんがリュック洗ってくれて　きれいになったって』送信
『あのリュック持っていけるよ』送信
『愛里がかあちゃんに頼んでく　・・・・
それは　どうなんだ？　　かあちゃんだけに聞いて欲しいっつったって
だから　かあちゃんはベッドルームに入って・・
俺は知らねえことにしといた方がいいんかもしんねえな　削除
『愛里のアップリケのおかげです』送信
『愛里　ありがとう』送信
マジでさ　本当にありがとう
『愛里の花　すげえきれい』送信
『愛里みてえで　すげえきれいで』送信
花言葉　期待と固い誓いと　あなたを信じて待つ
愛里の気持ち
『俺　大切にする』送信

『愛里のこと　マジですげえ大切だから』送信
なんのこと言ってんのかわかんねえよな
ん・・・・・っと　あ！　　あれじゃね？

そ〜っと部屋から出て
かあちゃんはまだ風呂だな　とうちゃんは・・　ベッドルームでなんかやってんな
愛里の花を　持って　そっとそっと　そんで俺の部屋に戻って
キーホルダー
えっと　ブルーが　固い誓い・・だから　約束守るよっつう意味で
愛里がアメリカで買ってきてくれた指切りのキーホルダーをブルーの花んとこに近づけて
カシャッ　送信
そんで　紫が　あなたを信じて待つ　信じてくれて嬉しいっつう意味で
水族館で愛里が買ってくれたタコのキーホルダー　タコの口を花に近づけて
カシャッ　送信
どうなんだ？　　余計にわかんねえかな？
愛里の花　俺の机のライトで　すげえきれいで
カシャッ　送信
勉強すっか

こんくれえにすっか
幾何やってるとキリねえんだよな　おもしろくてさ
とうちゃんも　ねえちゃんが高校んとき　ねえちゃんの問題集やってたな　おもしれえって
明日ねえちゃんの部屋から問題集持ってきてやっかな
ピコン　愛里だ
『ありがとう』
ピコン
『嬉しい』
ピコン
『おやすみなさい』
愛里
『愛里　おやすみ』送信
通じたかな　俺の心も　愛里に
通じたよな
通じてなかったらさ
また何度でも伝えるよ　俺
愛里　好きだよ

とうちゃんのあんぱん

かあちゃんと愛里は午前中に出かけた
昼メシは食ってくるっつって
俺ととうちゃんは愛里の部屋とこっちの部屋掃除して洗濯して
両方の部屋のベランダも掃除した
洗濯もの干して
俺のゴム長洗って干して
昨日現場で使った革手袋の汚れ落としてそれも干して
軍手も干して　カッパも干して
「ダイチ、リュック乾いてっからよ」
「とうちゃん、ありがとう」
よかった　きれいになってる　さすがとうちゃんだな
「ダイチ、あんぱん食うか？」
「食いてえ」
とうちゃんがギョサン脱いで　部屋ん中入ってった
「昨日買い出しんときに買ってきてよ」
キッチンからあんぱん二個持ってきて
「今日はダイチと一緒に掃除すっから、甘えもん欲しくなんじゃねえかなってよ」
とうちゃんが俺に一個手渡してくれて
「半額だったからよ」
この半額のシールはとうちゃんの戦利品の証みてえなさ
「これなら俺でも買えっかなって」
「え？　　これ、とうちゃんの金で買ったの？」
とうちゃんがちっと照れたみてえな顔でコクンとした
「ヤベエ、スペシャルあんぱんじゃん」
「んなよぉ」
「マジでさ」
とうちゃんの金で俺にあんぱん買ってくれんなんて　感動だよ

とうちゃんとベランダに並んで座って食う
「とうちゃん、美味えよ」
「美味えな」
「俺が小せえ頃はさ、とうちゃんと半分こしてたよな」
「ダイチはいっつも、とうちゃん、もう食えねえよってよ」

「それはさ、とうちゃん手で半分にすっけど、いっつも俺にでっけえ方くれてさ」
半分っつうより　3/4 くれえを俺にくれて　俺は　とうちゃんにもっと食って欲しくて
「食い切れるわけねえじゃん」
「ダイチは優しいからよ」
え？　　とうちゃん・・　気づい・・
「施設にいたときによ、おやつは、こんくれえのビスケット 1 枚でよ」
そんな話　初めて聞くな
「硬えんだけど、口ん中でゆ〜っくり溶かしてよ、そうすっと長く食えっからよ」
とうちゃん　情けねえ顔で笑ってる
「たま〜にどっかから菓子パン、なんつったかな、施設にくれた？」
寄付っつうやつか
「初めてあんぱん食ったときは驚いちまってよ、こんな美味えもんがあんのかってよ」
とうちゃんのあんぱんはそっから始まったんか
「もったいねえから、こうやって分けてよ、ちびっと食ってポケットに入れといてよ」
俺は　とうちゃんの小せえ頃の話聞くのが大好きなんだよ　あんましゃべんねえけどさ
「そんで、毎日ちびっとちびっと食って、最後のはカッピカピになってたけどよ」
カッピカピになるまで大切に食ってたんだな
「とうちゃんは、食いものん中で、あんぱんがいっちゃん好きなの？」
「好きっつうかよ、すっげえ特別なときに食う、なんつうんだ？　　ぜ、ぜい」
「贅沢？」
「それだそれ」
「そんでも、俺が小せえ頃は、おやつっつうとあんぱん食わせてくれたじゃん」
「そりゃ、ダイチにはよ、ぜ・・ぜいたく、させてえからよ」
「そっか」
「俺よ」
とうちゃんがベランダの向こうっ側をボーッと見て
「ねーちゃんの金で・・」
ねーちゃん・・つうことは　若けえときの話か
「黙って・・　ぜいたく・・さしてもらっちまったことあってよ」
「いつ？　　つか、なに？」
「あんぱん」
あんぱん？　　んーーっと　いつの話だ？
「ねーちゃん熱出しちまってよ」
「最初にとうちゃんが連れてこられたとき？」
「風呂入らせてくれたり、服買ってくれたりして・・　そのあとだな」
その辺りの話は　ねえちゃん経由で聞いてっけど
「いっくらなんでも今日は出てかねえとってよ、
　そしたら、ねーちゃん熱出しちまって、俺すっげえ心配になってよ」
とうちゃんマジで今かあちゃんが熱出してるみてえな顔になってるよ
「そんでよ、ねーちゃん、朝メシでも昼メシでも好きにしろっつって、

　俺の前に財布、ポンッて置いてよ、俺、ビーックリしてよ」
それも聞いてる　かあちゃんサイドで
「あっぶねえだろ？　　浮浪者の俺に財布丸ごとってよ、俺メッチャ心配になっちまってよ」
とうちゃんは真剣な顔してしゃべってっけど　俺は笑いそうになっちまって
んなこと心配する浮浪者ってさ　つか　とうちゃんみてえな浮浪者ならむしろ安心だよ
「そんで俺よ、どうすっかなって考えてよ」
とうちゃんが　いいこと考えついたみたえな顔で俺の方見て
「出てく前に、部屋掃除したらいんじゃねえかと思ってよ」
「いいじゃん、それさ」
「な？　　二晩も泊めてもらってよ」
俺は　まるで　今　とうちゃんが思いついて俺にしゃべってくれてるみてえな気になってる
「そんでも、掃除用の洗剤やタワシとか全然ねえからよ、これは買わねえとなって・・
　けど、俺、金ねえからよ、ねーちゃんの財布から・・　こそっと」
かあちゃんサイドの話では　とうちゃんはかあちゃんの財布から三千円抜いて
それで掃除用品やうどんの材料買って　かあちゃんの財布から勝手に金出したからって
かあちゃんに土下座したって　ねえちゃんが大笑いしながら俺に話してくれたんだよ
「そんで、スーパーで掃除用具カゴに入れて・・　そんときよ」
とうちゃんが　怖え話でもするような顔で俺のこと見て
「あんぱんがあってよ」
「あ、うん、あるよな」
「ねーちゃん、朝メシや昼メシはあんたの好きにしろっつってくれたな、そんでもな」
「かあちゃんがそう言ったんだから好きにしていぃんだよ」
「そっかな」
とうちゃんの顔は　完全に俺に相談モードだ
「そうだよ」
「そっか」
ちっとホッとした顔になった
「俺はよ、朝メシも昼メシも食わなくても平気なんだけどよ、そんでも・・
　あんぱん見たとき、あんぱんなんてもう一生食えねえだろうな」
「買えよ、とうちゃん」
「そんでもよ、半額のシールついてねえんだよ」
「とうちゃん、そんときは字ぃ読めなかったんだよな？」
「黄色に赤のシールついてっと安くなってるっつうのはわかっててよ」
すげえな　生活の知恵だな
「俺、買っちまってよ」
「いいじゃん、あんぱんくれえさ、かあちゃんそんなん気にしねえよ」
「そっか？」
「そうだよ」

「レジでピッてされたときは・・　ちっとクラッとした」
あんぱんでクラッと　とうちゃん　おもしろ過ぎんだろ
「そんで？　美味かった？」
「それがよ・・　味しねえっつうかよ」
味が・・　しねえ？
「ねーちゃんずーっと寝ててよ、こそ〜っと冷やすの持って部屋入って、
　ここに手ぇあててみっと熱くてよ、俺、すげえ心配になっちまってよ」
かあちゃんが具合悪くなっと神経全部そっち・・のやつか
「音立てねえように掃除してたけど、ずっと起きてこねえでよ、
　掃除終わって、あんぱん半分食わしてもらって」
「残りは？」
「ねーちゃんが買ってくれたジャンパーのポケットに入れた」
それ持って出てこうとしたんか
「そんでもよ、俺、気ぃついちまってよ」
「え、な、なに？」
「ねーちゃん目ぇ覚ましたら、腹減ってんじゃねえかなって」
「だよな、ぜってえそうだよ」
「うどん作っといたら、食うかなって」
「そんじゃ、うどん作ったら出てくつもりだったの？」
「うん、そんで、材料買ってきたら、ねーちゃん起きててよ」
こっからは　かあちゃんサイドので聞いてたんだけどさ
「俺みてえな汚ったねえ浮浪者が作ったのイヤなら・・つったらよ」
とうちゃんがビックリした顔で俺のこと見て
「イヤじゃねえってよ」
「とうちゃんのうどんメッチャ美味えもん」
「そっか？　ねーちゃんも美味えっつってくれてよ」
とうちゃん　メチャ嬉しそうな顔してさ
「よかったじゃん」
「でもなあ、ねーちゃんまた具合悪そうになっちまってよ」
ねえちゃんが言うには　そっからかあちゃんの葛藤が始まったって
とうちゃんが出てくっつったときから
「そんで、寝るっつってよ、あんたもちゃんと風呂入って寝ろってよ」
そういう言い訳して引き止めたんか　それはねえちゃんも知らなかったんだよ
「やっぱ具合悪りぃから、俺みてえなんでも看病さしてくれたんだな」
とうちゃん　違えよ　かあちゃんはとうちゃんに出てって欲しくなかっただけなんだよ
「夜中にこそ〜っと部屋入って熱ねえか手ぇあてたら熱くなくてよ、ホッとした」
とうちゃん
「よかったよ、とうちゃんいてくれて」
かあちゃんがとうちゃんのことヘタな言い訳で引き留めてくれて
「俺はなんもできねえけどよ」

「とうちゃん、半分残したあんぱんはどしたの？」
「次の日、雨の日・・」
とうちゃんが泣いた朝か
「あちこち掃除して、掃除終わって、そんで食った」
「美味かった？」
「なんか・・　夢見てんのかなって」
「夢？」
「んなきれいな部屋で、ねーちゃんの部屋でよ、あんぱん食ってるってよ」
「味は？」
「フワッフワしちまって、あんまよくわかんなくてよ」
「なんだよそれ　ハハハ」
「んなよぉ、笑うなよぉ」
「俺のこのあんぱんはさ」
とうちゃんの前に　空になったあんぱんの袋ぶら下げて見せて
「夢じゃなくて、すっげえ美味かった」
「そっか？」
「うん、俺の贅沢あんぱん」
とうちゃんが　優しい顔して　俺の頭クシャクシャッて撫でて
「そんじゃ、買い出し行くか」
「おう」
とうちゃんと二人　立ち上がって
「とうちゃん、あんぱん、ごちそうさま」
「また一緒に食おうな」
「うん」
それぞれの財布持って　家を出た

スーパーで　とうちゃんが豆腐探してる
「とうちゃん、何作んの？」
「美里が揚げだし豆腐食いてえっつってよ」
「かあちゃんなら絹か」
「ダイチ、そっちじゃなくてよ、こっち、安くなってっから」
賞味期限は今日までか　今晩の晩メシに食うから余裕だな
俺ととうちゃんだけだと賞味期限切れてても食っちまうけどさ
大根おろし用の大根は・・　まだ冷蔵庫にあったな
「とうちゃん、キノコ安くなってっから、キノコの炊き込み作るよ」
「そっか？　　そんじゃダイチ頼むな」
「おう」
「あとは野菜炒めか？」
「さっき通ったとこでさ、魚肉ソーセージすげえ安くなってたからさ」
「そんじゃ魚肉ソーセージ入れりゃいぃじゃねえか？」

「俺取ってくるよ」
「俺はピーマンんとこに行ってくるからよ」
とうちゃんと俺は獲物探すみてえに　スーパーん中走り回った

晩メシのしたくしてたら　かあちゃんが
「ただいま」
帰ってきた
「かあちゃん、おかえり」「美里、おかえり」
「ダイチ、ちょっと来て」
え・・　またなんか・・　叱られんのかな
かあちゃんが　でっけえ紙袋ソファの横に置いて　そんで座った
俺は　ローテーブル挟んだ向かいっ側の床に座って
「ダイチ、あんた制服のシャツ、二枚しかないわよね」
「あ・・　うん」
かあちゃんが紙袋の中から真新しいシャツ二枚出してローテーブルの上に乗せた
「旅先では洗濯もアイロンもできないんだから」
そう・・だけどさ
「それに、洗ってないシャツを着てたら、愛里さんが可哀そうよ」
「愛里？」
「一緒に歩くのに、あんたがヨレッとした恰好してたら」
そっか　だよな　俺はそんなん気にしねえけど　愛里は気になるよな
「わかった、持ってく、かあちゃん、ありがとう」
「それと、ホテルの中で着る普段着」
それもか
「私は買おうと思ったんだけどね、愛里さんが」
愛里が？　　なに？ どした？
「学校のジャージでいいって言うのよ、あんたの世界をこれ以上壊したくないって」
「や、だからさ、俺、なんもねえって、世界とかそんなんさ」
「学校のジャージを着たいっていう、あんたの気持ちを尊重したいって」
「尊重って、俺はなんも考えてなかっただけでさ」
「愛里さんも健気よね、みんながキメッキメで現れる食事の席に、カレシのあんたが」
俺は・・　愛里の気持ち　なんも考えてなかった
「一人だけジャージ姿で現れて」
愛里は俺のリュックとかさ　そういうのすげえ考えてくれたのにさ
「まあ、しかたないわね、あんたがジャージでいいって言い張るんだから」
「や・・　言い張るっつうか」
「私ならカレシが学校のジャージでなんてイヤだけど、愛里さんはそれでいいって」
いいわけねえよ　あんなにさあんなに美的感覚が溢れてる愛里がさ
それなのに　俺の気持ち尊重するって　愛里　俺・・
「かあちゃん、俺、前にかあちゃんが買ってくれたの持ってくよ」

「どれ？」
「え・・　かあちゃんが揃えてくれてるやつ適当に」
「私が買ったのは、出かけるときのためのもので、ホテルでくつろぐようなのはないけど？」
「そんでも、ジャージよりかはさ」
「ジャージだけ持っていけばいいんじゃなかったの？」
「やっぱさ、愛里のこと考えたらさ、ジャージっつうのは・・」
「それがあんたの出した結論？」
「結論つうか、うん、ちゃんとしたの持ってく」
「そう、だったら・・」
かあちゃんが紙袋に手ぇつっこんで
「これなんかいいんじゃない？」
へ？
「私が選んだんじゃないわよ、愛里さんよ」
「え、あ、そんでも、愛里は」
「私がね、旅行で着ないとしても、何かカジュアルな服をってね」
ん・・・と？
「そうしたら、愛里さんが、こういうショップがあるんですけどって」
こーゆーしょっぷ？
「もともとは作業服を扱っていたけど、最近はカジュアルな普段着も売ってるんですって」
もしかして・・　あそこか？
「ほら、このカーゴパンツ、カーゴパンツっていっても細身なのよ」
グレーの・・　すげえ　両脇にポケットがいっぺえついてる　メッチャ便利だ
「機能はね」
機能？
「通気性 UP、収汗速乾、遮熱、消臭、他にもなにかわからないけどあるわね」
マジか　すっげえ
「このエッグシェルブルーのパーカーも同じ機能があるんですって」
機能充実だな
「下にこのグレーの T シャツ」
お・・　おおお　すっげえしっかりした生地だ
「ちなみにこの T シャツ、580 円」
「えっ　マジ？」
「80 円負けたって、愛里さんは言ってたけど何のことかしら」
俺の赤 T よか　かっけえ　それはわかる
「パーカーは・・1,900 円で、カーゴパンツは・・2,900 円」
「マジで？」
かあちゃんがいっつも買ってくんのと一桁違げえよ　すげえよ
「どうする？　いらないなら明日返品してくるけど？」
「要ります、着ます」

「あら、そう？」
「はい、着ます、ぜってえ着ます」
「あんたが着たいって言うなら、まあ、それじゃ、ほら」
「あざーす」
おおおお　これは
「かあちゃん、これ、ストレッチ素材だよ、ほれ」
「あ、そう」
これなら　家政夫するときも着れんじゃん
「愛里さんの制服のブラウスも買ったし」
「かあちゃん、なんかいろいろ、ありがとう」
「肝心の私のお目当てはなかったけどね」
「お目当て？」
「リップグロスオイル」
ん・・と？　　リップ？　　口紅？
「季節限定色で、私が欲しい色は売り切れ」
かあちゃん・・　いっぺえ口紅持ってんじゃん　なんつうことはぜってえ言えねえ
「あ・・そ・・っか」
「愛里さんたらね、他の店舗にはないですかって聞いてくれたのよ」
「え、マジ？」
「再入荷はしないんですかって、そこまで聞いてくれたの」
「愛里は、かあちゃんのこと好きだからさ」
「感動しちゃったわ、来週には再入荷するって言ってたけど、買いに行けるかな」
え・・っと
「売り切れてるってわかってるけど、テスターをつけてもらったら、やっぱり欲しくて」
そろそろ・・さ
「ていうか、ますます欲しくなっちゃって」
「か、かあちゃん、俺、晩メシの・・」
「愛里さんも、おかあさんすごく似合いますよって」
「あ、そ、そっか、あの・・さ」
「そしたら、BA さんが、あら、娘さんですか、美人母娘ですねって」
母娘　そっか　母娘か
「ほら、さっさとキッチン行きなさいよ」
なんだよそれぇぇええ
「これは部屋に入れておきなさい」
「あ、うん、ありがとう」
かあちゃんがガサッと紙袋に突っ込んだ服とシャツ持って
リビング出て　部屋に紙袋置いて　キッチン戻った

魚肉ソーセージ

晩メシ
「ハァ〜、カズオの揚げ出しはやっぱり美味しいわ」
かあちゃん　とうちゃんはその揚げ出し作んのにすげえ手間かけてんだよ
絹だからさ　切ってキッチンペーパーで包んで　そんで湿ってきたら塩振って
冷蔵庫ん中で 20 分置いてさ　でねえと絹だからさ　崩れちまうんだよ
とうちゃんはすげえよな
昔　揚げ出し作ったら　かあちゃんが「絹ごしがいいな」っつって
そっからパート仲間のおばちゃんたちに聞いてさ　惣菜係の人にも聞いてさ
そんでメッチャ崩れやすい絹ごしで揚げ出し豆腐作れるようになったってさ
まだ字ぃ読めなかったときにさ
愛里はどっち好きなんかな　絹でも俺は作れっから　とうちゃんに習ってっからさ
え？　愛里　なんか・・　野菜炒めジーーッと見てっけど？
「あの・・　このピンクのは・・　なんですか？」
ピンク？　ピンクっつったら・・　魚肉ソーセージっきゃ入ってねえけど
「愛里さん食べたことないの？　魚肉ソーセージ」
「え？　それって、スーパーで赤い棒みたいな、あれですか？」
「中身はこれよ」
「初めて生のを見ました」
生じゃねえんだよ　魚肉ソーセージはもともと生じゃなくてさ
「一度も食べたことがないの？」
「ママは使ったことがなくて」
「うちでは昔はよーーく登場してたのよ、魚肉ソーセージカレーとかね」
「カレーに？」
「ヒトミが好きだったの、魚肉ソーセージ」
俺も好きだよ
「なぜ今まで登場しなかったんですか？」
「さあね、私がからかってたからかもね、貧乏カレーとか貧乏野菜炒めって」
かあちゃんはからかってるつもりでも　とうちゃんは落ち込んでたんだよ
「おかあさんは嫌いなんですか？」
「どっちかっていうと懐かしい味ってカンジかな」
「懐かしい？」
「私の家では食べてたから、カレーには入ってなかったけどね」
「それがなぜ今再登場？」

カンペキ気ぃ抜いてただけっす
「そうよね、なぜ？」
「あ、んと、俺、作りなおしてくっから」
とうちゃんマジかよ？
とうちゃんのせいじゃねえよ
「あのさ、俺が魚肉ソーセージ安くなってっからっつっちまってさ」
「いいわよ、これはこれで美味しいから」
「あの、私、食べます」
「愛里、ムリしねえでいいよ」
「食べます」
んな　すげえ意を決したみてえな顔でさ
愛里が　ゆ〜っくり箸で魚肉ソーセージつまんで　口ん中に
「あ　美味しい」
「マジ？」
「ほんのり甘い？　なんだろう、かまぼこみたいな？　ちょっとちがうけど」
愛里が　今度は野菜と一緒に　食った
「あ　美味しい、いつもの野菜炒めとはちょっと違う・・　ウスターソース？」
すげえ　そうなんだよ　ウスターと醤油ちこっと入れてさ
「美味しいです、貧乏炒め　あ！　ちがう、ごめんなさい・・」
「いいのよ、森下家の貧乏炒め、美味しいでしょ」
「はい」
よかっ・・たあ
え　とうちゃん　ホッとし過ぎて放心状態になってるよ

晩メシ終わって
かあちゃんと愛里はリビングでしゃべってて
俺ととうちゃんは後片付けしてて
愛里は魚肉ソーセージの野菜炒め全部食ったな　美味えっつってさ
「ダイチ」
「ん？　なに？」
「魚肉ソーセージ食ったことねえ人って・・　いるんだな」
「ああ、うん、だよな」
「アイリちゃんが食ったことねえっつったときはビックリしちまってよ」
「愛里のお母さんが嫌れえなんじゃねえかな」
「魚肉ソーセージ嫌れえな人がいんのか」
「やっぱ、魚が嫌れえとか、そんなカンジじゃねえかな」
愛里のお母さんがお嬢様育ちだからかもしんねえけど
「ヒトミは大好きだったけどな」
「ねえちゃんはビニールむいて丸ごと食ってたよな」
「アメリカには魚肉ソーセージあんのかな」

「ねえよ、魚肉ソーセージは日本にっきゃねえんだよ」
「えっ？」
とうちゃん　すっげえビックリした顔してっけど
「ソーセージっつうからよ、外国のもんじゃねえのか？」
「日本で発明されたんだってさ」
「マジかよ？」
「最初はツナでハム作ったらしいよ」
「ツナでハム？　　ネギトロみてえにたたいたんかな」
「それはわかんねえけど、最初の魚肉ソーセージはマグロとクジラ使ってたらしい」
「マグロ？　　そんじゃすげえ高けえだろ」
「そうなんだってさ、コロッケ一個 5 円の時代に」
「コロッケが一個 5 円？　　コロッケ一個 5 円なら俺も買えたかもしんねえな」
「その時代に魚肉ソーセージは一本 30 円もしたんだってさ」
「えっ？　　そんじゃ今なら・・　コロッケ 50 円で・・　一本 300 円？」
「感覚的にはもっと高けえかもしんねえ、一本 500 円とかさ」
「それは・・　買えねえよ、んなよ、一本 500 円なんてよ」
「だからさ、魚肉ソーセージはもともとは高級なんだよ」
「そっか、そんでも今は安くなってんな」
「今日のは安かったよな、5 本で 98 円、100 円切るってめったにねえよ」
「まとめて買っちまったな」
「日持ちすっからさ」
とうちゃんが　フライパン洗う手ぇ止めて　なんか考えてっけど
「ダイチ」
「え、なに？」
「ヒトミに送ってやれねえかな」
「魚肉ソーセージは・・送れねえと思う」
「そっか、ヒトミ食いてえだろうな」
とうちゃん　淋しそうな顔してる
「ねえちゃんがさ、ねえちゃんが帰ってきたら死ぬほど食わしてやろうよ」
「そうだな」
「とうちゃんの、魚肉ソーセージのケチャップ炒めとかさ」
「あれはダイチも好きだったな」
「だったっつうか今でも好きだよ」
「そっか？」
「魚肉ソーセージカレーも」
「あれは・・　美里が・・よ」
あれ？　　そんでも・・　とうちゃんの中辛の作り方って　最初に連れてこられた時期で
「とうちゃん・・　かあちゃんに最初にカレー作ったときは何入れたの？」
「やっぱねーちゃんが食うからなってよ、がんばって豚肉にした」
「俺が小せえときは、魚肉ソーセージカレー作ったよな」

「あんときは気ぃ抜いちまってよ、ヒトミとダイチが魚肉ソーセージ好きだからってよ」
「あれ食いてえな」
「ん・・　今度、美里が出張んときによ」
かあちゃんが出張すると　とうちゃん淋しそうにすっからなあ
淋しそうな顔して魚肉ソーセージカレー食うんだろうな
「私は当分出張はないけど？」
「みっ　美里」「かあちゃん」
どっから聞いてたんだ？
「ダイチ、愛里さんを送ってあげて」
「あ、おう」
かあちゃんの後ろにいた
「愛里、行こ」
「はい」
愛里と二人で家を出た

愛里の部屋の玄関
「あの、今日買った制服のブラウス、あなたの家に置いてきたんですけど」
「洗ってアイロンかけとくからさ」
「お願いします」
「愛里、あの新しい普段着、ありがとな」
「私は、あなたがジャージでいいって言ってるから、ジャージでいいって言ったんですけど」
「それはさ、やっぱな」
愛里の気持ち考えてなかった俺が悪りぃだけでさ
「おかあさんが、私が選んだらあなたは絶対着るからって」
へ？
「私はジャージでいいですって言ったんです、あなたの世界を」
「愛里、俺なんもねえんだよ、世界とかさ」
「おかあさんが、自分の息子がジャージでホテルをウロウロしてるなんて」
「え？　んっと？」
「考えただけでゾッとするからって」
エーーーッ？
「そうですよね、あの美意識の高いおかあさんならゾッとしますよね」
あ・・・れ？　なんか話が・・
「それじゃ、あなたがこれなら着るかもっていうショップがありますって」
かあちゃんが言ってたニュアンスと愛里のが違げえ気すんだけどな
「銀座だったから、カジュアル系がけっこう揃ってて」
「あの店、銀座にもあんの？」
「はい」
「作業用のも銀座にあんの？」

「そっちは見なかったけど」
「そっか」
だよな　愛里がさ　それは見ねえよ
「あれなら家の中でも着れるかなって」
「そっか」
「中の T シャツはグレーにしましたけど、白でも黒でもいいかも」
「あれってさ、580 円だったんだろ」
「500 円のは・・なかったです、あとはセールになるまで待つしかないと思う」
「愛里前に言ってたじゃん、500 円でいいのがなくて 600 円でいいのがあったら」
あんときの愛里も可愛かったな
「その 100 円にはすげえ価値があるって」
「言いました・・けど」
「だから、あの T シャツは、すげえ価値のある 80 円すよ」
「でも、よく考えたら・・　私のためにあんなこと言ったのかも」
「あんなこと？　　誰が？」
「おかあさん、あなたがジャージだとゾッとするって言ったけど」
「かあちゃんならマジでゾッとすんだよ」
「私にカジュアルなニットワンピを買ってくれて、クルクルッて丸めるとコンパクトになって」
「コンパクトになんならな、うん、いんじゃねえかな」
「グレーで、その上にエッグシェルブルーのショートカーデを合わせてくれて」
ん・・っと　なに言ってんのかわかんねえんだけど
「あ！」
「え、ど、どした？」
「あなたと私の普段着・・　ある意味・・　ペア」
「え？　　ペア？」
「あなたの服、私は白はどうかなって、そしたらおかあさんが、白はすぐ汚すわよって」
白は汚れんな　清潔感はあるけどさ　家政夫に行ったときとかはさ
「あとはカーキとブラウンで、それはあなたには合わないなあってグレーに」
「すげえかっけえよ」
「それって・・　おかあさんがペアにしたのかも、かもっていうか絶対そう」
「全然違くね？　　俺のはポケットいっぺえついててさ」
「色！　　グレーにエッグシェルブルー」
そのなんちゃらブルーがよくわかんねえんだけど
「ブルベの冬にピッタリだし」
冬？
「まだ秋じゃん」
「そういう意味じゃなくて」
愛里が両頬に手ぇあてて　なんか考えてっけど　なんの話か俺には全然わかんねえ
「唯一わかるのは・・」

「え、あ、うん、なに？」
「私もあなたも」
「愛里と俺？」
「おかあさんの手のひらの上で転がされてるってことです」
手のひらの上で　俺は　いろいろ思い当たることがあり過ぎんだけど
「いい意味で」
「いぃんかな？」
「私のこともあなたのことも考えてくれてるってことです」
よくわかんねえけど
「そっか」
「はい、私もおかあさんみたいなおとなの女性になりたいけど」
えっ？
「一生ムリ」
「愛里はかあちゃんみてえにはならねえでくれよ」
「なりたくてもなれませんから」
「愛里は愛里のまんまがいい」
「え？」
「そのまんまがいい」
「そう・・ですか」
「愛里」
愛里にゆっくり顔近づけて
「あ！ そうだ！」
「え？ な、なに？」
「ミニリュック買ったんです」
「あ、そ、そっか」
「見ますか？」
「あ、お、おう」
愛里がリビングに走ってって　なんか持って戻ってきた
「これです」
すっげえ小せえ・・　リュックかこれ？
「私は無難に黒にしようかなって思ったら、おかあさんがこのアイシーブルーなら、
　制服にも私が持ってるグレーのワンピにも合うわよって」
俺はよくわかんねえけど　そんでも
「可愛いよ」
「ですよね、ショルダーにもなるし、ふつうのバッグとしても持てるし」
愛里が背負って見せて　それがさ
「すげえ可愛い」
「これと制服のブラウスはママが送ってきたお金で買ったんですけど、
　ニットワンピとショートカーデはおかあさんが買ってくれて」
「いいじゃん」

「こんなに甘えちゃっていいのかなって」
「いぃんだよ、かあちゃんそういうの好きなんだからさ」
「でも・・　いつもいろいろ買ってもらって」
「だってあれだろ？　なんだっけ？　化粧売ってるとこで母娘って言われたんだろ？」
いつか　いつか本当にさ
「そうなんです」
愛里がメッチャ悲しそうな顔してっけど？　なんでだ？
「おかあさんが欲しかった色がなくて、すっごく似合ってたのに」
「愛里が他の店舗にねえかって聞いてくれたって、かあちゃん感動してた」
「ママはいつもそうだから、再販される予定はないって言われても、もしものときって、BA さんに連絡先渡して、BA さん困っちゃって・・　どういうわけか手に入れるんですけど」
「すげえじゃん」
「ダメモトってけっこう効くんだなってことはわかりました」
「愛里」
抱きよせて
「ありがとな」
「まだ手に入れてないです」
「そんなんさ・・　そんなん・・」
愛里の　くちびるに　俺のは・・すげえことになってっけど　こんだけこんだけだからくちびる離すと
「魚肉ソーセージ」
「え？」
「ちょっとだけ匂いが」
「えっ　あ、ご、ごめん」
「きっと私もだから」
「あ、愛里はなんもそんなしなかった」
「未知の世界を開拓してもらった気分」
「な、なにが？」
「魚肉ソーセージ」
「あ・・　そっか」
「ホッとする味だなって」
「マジ？」
「はい、カレーも食べてみたいなって」
愛里　どんどん俺の世界・・つうか　とうちゃんの世界を受け入れてくれて　俺
「愛里」
たまんねえ　たまんねえよ　愛里　俺　もう・・あ・・　ヤベ
「え？　やっぱり私も魚肉ソーセージの匂いがする？」
「や、じゃえよ」
俺の魚肉ソーセージが　破裂しそうなだけで

「んと、あ、ブ、ブラウスと俺のシャツ洗わねえとなって」
「そうですよね、ありがとう」
「今持ってんのは全部洗濯してあるよな」
「はい」
「そっか、んっと、そんじゃまた」
「はい」
ドア閉めて
最近やべえよ　俺の魚肉ソーセージ　ハムみてえになっちまいそうだよ
あの新しいズボン履いてるときは　ぜってえ愛里にキスできねえな
ストレッチ素材だもんな
んなこと考えてねえで　帰ろう

修学旅行前日

月曜日　スポーツの日
俺ととうちゃんは朝から制服のシャツとブラウス洗って干して
他の洗濯物も干して　部屋掃除して
かあちゃんは愛里の部屋でパッキング手伝いに行ってる
「ダイチ、シャツとブラウス乾いてっからアイロンしねえとな」
「愛里のは俺がやるよ」
「そんじゃ先にやっか？」
ん・・っと
「愛里のアイロン借りて愛里の部屋でかけてくる」
「そうだな、その方が早えな」
愛里に LINE
『愛里　ブラウスのアイロンかけてえんだけど』送信
『愛里のアイロンで愛里の部屋でかけていいかな』送信
ピコン
『ありがとう　お願いします』
よっしゃ
「とうちゃん、愛里んとこ行って、ついでに掃除してくるよ」
「そっか、そんじゃ昼メシ作っとくからよ」
「うん、ありがとう」
愛里のブラウス持って家を出たら　かあちゃんが戻ってきた
「愛里さんのパッキング終わったわよ」
「そっか、かあちゃん、ありがとう」
「女の子はね、持っていかなきゃならない物がたくさんあって大変よ」
だよな　よくわかんねえけど
「ゆうべ愛里さんのお母様からも電話があって、よろしくお願いしますって」
「そっか」
「一人娘の最後の修学旅行ですものね、心配になるわよね」
「ねえちゃんのときも心配だった？」
「そりゃ心配したわよ、あのヒトミだもの」
「俺のことは？」
「あんたは・・　どうにかするでしょ」
「なんだよそれ」
「ほら、早くアイロンかけてきなさい、それを入れれば終わりだから」

「おいっす」
かあちゃんが家ん中入ってって　俺は愛里の部屋に走った

愛里のアイロンは最新式で立ち上がりも早えしメッチャ使いやすいな
「そのアイロン、重たくないんですか？」
「んな重たくねえよ、そんでも適度の重さがねえとシワが伸びにくいからさ」
「私はお裁縫したときにしかたなく使ったけど、重たいし大きいしで」
俺は　俺がなんかやってるときに愛里が横でしゃべってんのがすげえ好きで
「そんなにお裁縫しないからべつにいいけど」
ひとり言みてえなしゃべり方もさ
「ママも私がアイロンがけなんかできないってわかってるのに、そんな大きいの買って」
「俺が使わせてもらってっからありがてえよ」
「だったら、それ、持っていきますか？」
「え？」
「私はほっとんど使わないから」
「俺がここで使うから」
「そうですか、あ、もう一枚終わってる」
「制服のブラウスは簡単だから」
「簡単て・・　あなたは私の複雑な気持ちを一生わからないと思う」
「複雑な気持ち？」
「私は毎日、モリシタダイチがアイロンがけしてくれたブラウスを着て」
「なんだよモリシタダイチってさ」
「笑ってるけど、ハンカチもモリシタダイチがアイロンがけしたのを持って登校してて」
「愛里のことは俺がやるっつったじゃん」
「前に、サトユミさんとサトアヤさんに聞かれて」
「何を？」
「手も止めないで話を聞けるってなに？」
「あ、ごめん」
「褒めてるんです」
「そ、そっか」
「上原さんのブラウスっていっつもきれいにアイロンかかってるけどクリーニングに出してるの？」
そっか　ちゃんとできてるっつうことか
「私、一瞬、ウソをつきそうになりました」
「ウソ？」
「あなたにアイロンかけてもらってるなんて言ったらどう思われちゃうのかなって」
「そんなん言わなくていいよ」
「でも、それはあなたに失礼だから」
「いいって、そんなん気にしねえから」
「モリシタダイチにアイロンかけてもらってるって言ったら」

言ったんか
「森下くんてなんでもできちゃうんだねって、スンナリ受け入れてくれて」
「そっか」
「ウソつかないでよかったって、あ、もうできちゃった」
「少し冷めてからたたんでパッキングした方がいいから」
「はい、わかりました」
「俺、今からバスルームの掃除してからたたむから下げとくぞ」
愛里が　ジーーッと俺のこと見てっけど？
「愛里、どした？」
「修学旅行前日に、私の部屋のバスルームの掃除をするって」
「するだろ」
「そんなことさせていいのかなって」
「いいに決まってんじゃん」
「でも、今頃、他のみんなはパッキングやらなんやらでバタバタしてて」
「修学旅行前日でもさ、みんなだってメシは食うだろ？」
「あなたにとって、私の部屋のバスルームを掃除するって、ごはんを食べることと同じ？」
「まあ、そんなもんじゃん」
「私はもう、なんていうか、ちょっと、ドキドキしてるのに」
「なんで？」
「明日ちゃんと起きれるかなとか」
「寝坊したら俺が起こすから」
「寝坊とか言わないで、本当に寝坊しちゃいそうな気分になるから」
「大丈夫だって」
「おかあさんがパッキングしてくれたから大丈夫だけど、なんか私が忘れたり」
「そんときは俺がなんとかすっからさ」
「充電器忘れたら？」
「まだ入れてねえの？」
「予備のを入れましたけど」
「そんじゃ大丈夫じゃん」
「私が夜中に突然わけわかんないことして充電器取り出したり」
これは　ちっとパニクッてんな
「愛里」
抱きしめて
「充電器忘れたくれえで死なねえし、そんときは俺のを貸すから」
「あなたはどうするの？」
「適当に川口のや虎之助の、ちこちこ借りっから」
「えぇぇぇ」
「俺はなんとかなっから心配しねえでいいよ」
「あぁぁ、ごめんなさい、私・・　ゆうべママから電話があって」
かあちゃんにもあったっつってたな

「あれは入れた？ これは大丈夫？ あれは忘れないでねとか、次々言われたら・・」
愛里が　俺の腕ん中で息吐いて
「ビリッビリになっちゃって」
「愛里のお母さん、そばにいれねえから心配なんだよ」
「でも、あんな言い方されたら、こっちが心配になっちゃって」
「かあちゃんも、ねえちゃんが修学旅行行くとき心配だったってさ」
「おかあさんが？」
「あのヒトミだから心配だったって」
「おねえさんは・・私なんかよりずっと」
「一人娘だから心配なんだってさ」
「そう・・ですか」
「母親ってそういうもんなんかなって」
「あのおかあさんでも・・なら、なんかちょっとホッとしました」
「そっか」
「はい、ごめんなさい、もう、大丈夫です」
「そんじゃ、バスルーム掃除してくっから」
「はい、お願いします」
「なんかあったら、すぐ声かけろよ」
「はい」
愛里が　俺の腕から離れて　ソファにストンと座った
そんじゃ　掃除してくっか

掃除終わって　乾燥機に入ってたタオル全部たたんで棚に入れて　おっしゃ終わりっと
愛里連れて昼メシだな
「愛里」
リビングに行くと　え？　　愛里　ソファで寝てる
「愛里」
「ん・・」
「こんなとこで寝てっと風邪引くぞ」
「ん・・」
「寝んならベッドでさ」
「やだ・・ここ・・で・・いい」
「よくねえよ、愛里」
「やだあ」
そっか　そんじゃ
「え？　　なに？」
「ベッド連れてく」
「抱っことか・・もう」
メッチャ眠そうだな
愛里を抱きあげたまま　ベッドルームのドア開けて

愛里のこと　そっとベッドに横たわらせて　上から布団かけて
寝てる　寝顔メッチャ可愛い
ヤベエヤベエ　寝てるときにキスは　ダメだ
ドアそっと閉めて
ブラウスたたんでローテーブルの上に置いて
愛里の部屋を出た

玄関のドア開けて
「ただいま」
「ダイチ、おかえり、アイリちゃんは一緒じゃねえんか」
「寝ちまってさ」
「そんじゃ昼メシは、起きてからか」
「うん、疲れたんかもしんねえ」
「そっか、ダイチは食うだろ？　　もうできてっからよ」
「ありがとう」
ダイニングに行くと　かあちゃんがサンドイッチ食ってる
「愛里さん寝ちゃったの？」
「うん」
「頭が痛いって鎮痛剤飲んでたから」
「マジ？　　んなこと言ってなかったけど」
「あんたが行った頃には効いてたんじゃない？」
「なんか神経ピリピリになっててさ」
「少し寝たら落ち着くわよ」
「うん」
「あんたは準備できたの？」
「あ！　　これ食ったら金下ろしに行ってくる」
「いくら？」
「え・・　5 万」
「あら〜、豪勢ね」
「なんかあったらさ」
それプラスおとといのバイト代とおっちゃんたちからもらった三千円もだけど
「愛里さんのお母様、10 万持っていきなさいって言ったんですって」
「じゅっ・・　10 万？」
「さすがに高校生で 10 万はね」
「愛里は、いくら持ってくって？」
「３万円」
ぜってえ使わせねえよ愛里
「あとはシンシンからもらったのをポチ袋ごと持っていくって」
「ポチ袋ごと？」
「お守り代わりって、確かに魔除けにはなるかもね、ハハハハ」

そっか　俺もシンシンおじちゃんのもいちおう持ってくか　ポチ袋ごと
その方が愛里が喜びそうだもんな　Shin 様のだっつって
なんかちっと複雑だけど

金下ろしてきた
あとは・・　今日は愛里のイチゴは買わなくていいんだな
そんでもさ、新幹線の中とかで食わねえかな　使い捨てのタッパーに入れればさ
新幹線の席も決まったしな　愛里と佐藤と佐藤　俺と川口と虎之助
向かい合わせにはできねえけどすぐ前と後ろでさ
てことは　愛里がイチゴ食うっつったら佐藤たちにもあげるよな
そんじゃ、このでっけえ使い捨てのタッパーに入れて新幹線の中で渡せばいいな
朝メシはそれぞれで食べてきて　昼メシは奈良公園で弁当支給されるんだよな
できれば、愛里の昼メシの弁当も作りてえけど　それはなあ
支給された弁当に愛里が食えねえもん入ってたらどうする？
握りメシと卵焼きとタコさんウィンナーくれえ作ってくか
そんとき食わねえでもさ　部屋でちこっとつまみてえってときにさ
だな　そうしよう

イチゴと使い捨てのタッパー買って帰ってきたら
「ダイチ、おかえり」
「とうちゃん、ただいま」
「イチゴ買ってきたんか」
「明日、新幹線の中で愛里と友だちが食うんじゃねえかなって、こっちのタッパーに入れてさ」
「そっか、アイリちゃん喜ぶな」
あれ？　かあちゃんいなくね？　愛里んとこかな
「とうちゃん、かあちゃんは？」
「会社行った」
「休みじゃん」
「なんかあったみてえでよ、電話来てよ」
「そんで会社行ったの？」
「すぐ戻ってくるってよ」
「そっか」
「ダイチのシャツと中に着る T シャツはカバンに入れといた」
「ありがとう、そんじゃ俺、もっかい持ってくもの確かめて入れっからさ」
部屋戻って・・
まずはリュックだな
正面のポケットに愛里の救急セット入れて
愛里用の財布
おとといのバイト代と下ろしてきた金入れた

愛里が作ってくれた現場用の財布に　おっちゃんたちにもらった三千円と
シンシンおじちゃんのポチ袋も入れとくか　これも入れて
ハンカチとティッシュは制服のポケットに入れて　財布は明日ズボンの・・
いや、リュックに入れといた方がいいな　折り畳み傘も入れて・・と
他にリュックに入れるもんてあんのかな？　　明日の朝イチゴ入れるくれえか
次は黒いカバンだな
シャツとＴシャツきれいに入ってる
とうちゃん　ありがとう
普段着セットと寝巻用ジャージも入れといたし　ハンカチの替えも入れた
洗面用具入れたジップロックと小分けにした炭酸バスバブル入れたジップロックも
充電器も入れといた
あれ？　　え？　　パンツと靴下がねえ　入れたはずだけどな　入れなかったかな
んっと　クローゼットの引き出し開けて　ねえよ　一個もねえよ
作業用の靴下と古いパンツもねえよ　え？　　何が起こった？
んっと・・　どうする？　　とうちゃん知らねえかな
「とうちゃん」
キッチン行って
「俺のパンツと靴下がねえんだけどさ」
「それは・・よ」
とうちゃんがすげえ申し訳なさそうな顔してっけど？
「な、なに？」
「美里がダイチのカバンの中見てよ」
かあちゃんのしわざか
「こんな古いの持ってかせらんねえって」
「あれはいっちゃん新しいやつだよ、俺的にはさ」
「そんで、引き出し見て・・　全部捨てろっつってよ」
「えーーーーっ　どうすんだよ、俺、どうすりゃいぃんだよ」
「俺が・・　こそっと取っといてっからよ」
「ハ・・アァァァ　とうちゃん、ありがとう」
「明日履くやつはな、机の上に置いてあっから」
「それは・・　合格っつうこと？」
「これはまだマシだっつってよ」
一組だけかよ
「美里が帰りに買ってくるっつってたからよ」
「なんでかあちゃん俺の荷物見たかなあっ」
「美里は、もっと早くダイチの見りゃよかったっつってよ」
「べつにいいじゃん、穴開いてねえしさ、誰に見せるわけでもねえんだからさ」
「美里もダイチの世話してえんじゃねえか？」
「え？」
「やっぱ息子の最後の修学旅行だからよ」

息子の・・最後の・・　そっか
「そんじゃ、かあちゃんに新しいパンツと靴下買ってもらうよ」
とうちゃんニッコリしてっけど
全捨てってさ　新しいのは正月前に買ったばっかじゃん

かあちゃんからとうちゃんに電話があって
晩メシは休み返上で集まってくれた部下たち連れて食いに行くから要らねえって
よっぽど大変なことがあったんだな　こういうとき　かあちゃんはすげえなって実感する
愛里は起きたかな
『愛里』送信
『起きてる？』送信
ピコン
『さっき起きました』
そっかそっか
『晩メシなんか食いてえもんある？』送信
ピコン
『食欲ないです』
え？　昼も食ってねえじゃん
『そうめんとかは？』送信
ピコン
『今食べたら吐いちゃいそう』
えっ
『俺　今からそっち行く』送信
ピコン
『大丈夫』
大丈夫じゃねえだろ
ピコン
『ただひたすら眠いだけ』
そんでもさ
ピコン
『シャワーしたら少しはスッキリしそうだから』
ピコン
『今からシャワーします』
そっか
『なんかあったら必ず連絡してくれよ』送信
ピコン
『はい』
愛里・・　大丈夫かな
どっか悪りぃんかな　ここんとこなんかさ

「アイリちゃん起きたんか」
「それがさ・・　食欲ねえって」
「そっか」
「すんげえ眠いって」
「疲れたんかもしんねえな」
そう・・なんかな
ここんとこ眠いとか　今朝も頭痛てえっつってたって・・
「握りメシ作っとけばいんじゃねえか？」
「握り・・メシ・・」
「アイリちゃんが起きたら食えるようによ」
食えんのかな　吐きそうって
「ダイチ」
とうちゃんが　俺の肩に手ぇ置いて
「とうちゃん・・　もし・・愛里が」
口に出すのも　怖えけど　そんでも
「修学旅行行けなくなったら・・」
とうちゃんが　俺の肩に置いた手で　俺の肩さすってくれっけど
「俺も・・　行きたくねえ」
とうちゃんの手がとまって　俺の肩つかんで
「俺はなんもできねえけどよ」
流しの下開けて
「今はメシ炊くっきゃできねえけどよ」
米・・
「握りメシ作っから」
とうちゃん
「美里が帰ってきて食うかもしんねえしよ、ダイチも食うか？」
「俺・・は」
「アイリちゃんのも俺が作っか？」
「え・・」
「そんでもな、アイリちゃんはダイチが作った握りメシが好きだかんな」
俺が作った・・握りメシ・・愛里は・・
「俺が、作る、愛里のは、俺が作る」
「そっか」
梅干とおかか混ぜたのが好きなんだよ　愛里は
こうやってさ　梅干たたいておかかとちっとだけ醤油入れて・・
白メシが炊きあがって・・
俺は愛里の好きな握りメシ　小せえ握りメシ作って
「とうちゃん、愛里んとこに持ってくよ」
「目ぇ覚めたら食うかもしんねえもんな」
「うん」

食って欲しい　愛里　食ってくれよ
握りメシ乗っけた皿持って　家を出た

てるりん小僧

愛里の部屋の前で
『愛里』送信
『握りメシ持ってきた』送信
既読着かねえな
『キッチンに置いておくから』送信
『食えるようだったら食って』送信
『ムリしねえでいいよ』送信
鍵開けて　ベッドルームのドア閉まってんな　また寝てんだな
キッチンの台の上に握りメシ乗った皿置いて
あ　リビングのカーテン開いたまんまだ
リビングにそ〜っと入って
窓んとこに　え？　　なんだ？　　ベランダになんか・・
てるてる坊主だ
明日の奈良は予報は曇りで　京都は滞在中はずっと晴れなのに
てるてる坊主・・
俺が幼稚園とき　親子遠足が楽しみでさ　とうちゃんと行けるって楽しみでさ
そんでも前の日雨降りそうで　ちっとだけ降って　俺ベソかいて
「とうちゃん、明日雨降っちまうよぉ、行けなくなっちゃうよぉ」ってさ
そしたら　とうちゃんが　ベソかいてる俺のこと抱きしめながら
「ダイチ、大丈夫だ、んっとよ、晴れるおまじないがあっからよ」って
とうちゃんは晴れるおまじない知ってるんだ　すげえって思ってさ
「ヒトミがよ、幼稚園ときにこさえてきてよ」
「なんだぁ、ねえちゃんじゃさぁ」
「それがよ、それやったらマジで晴れてよ」
「えっ？　　晴れたの？」
「晴れた、なんつったかな・・　てる・・　あ！　　てるりん小僧」
とうちゃんは施設でそんなん見たことねえから知らなかったって
「てるりん小僧いっぺえ作ってよ、ベランダんとこにぶら下げてよ」
「俺も作る」
「ダイチととうちゃんで作ればよ、ぜってえてるりん小僧が晴れにしてくれっからよ」
「うん！」
とうちゃんと二人で　ティッシュでさ　とうちゃんはうろ覚えだったから
ティッシュ二枚重ねて真ん中に丸めたティッシュ入れてキュッてひねっただけで

輪ゴムで首んとこ止めて　物干しにズラーーッとかけてさ
そこにねえちゃんが小学校から帰ってきて
「てるてる坊主？」って　「ちげえよ、てるりん小僧だよ」っつうと
「顔書かないとダメだよ」って　マジックで顔書いてくれてさ
あの頃のねえちゃんは優しかったな
そんでさ　次の日メッチャ晴れで
「とうちゃん！　　てるりん小僧が晴れにしてくれた！」って　俺大喜びして
すっげえ楽しみにしてたからさ　すげえ嬉しくて・・
愛里・・　てるりん小僧下げるほど楽しみにしてんのか
てるりん小僧下げるって　どんだけ楽しみなのか　俺にはすげえわかるからさ
愛里のてるりん小僧様　愛里を元気にしてあげてください
愛里が修学旅行行けるようにしてあげてください
頭下げて　ゆっくりカーテン閉めて
ソファの横のライトだけつけておいて　あとは消して
愛里の部屋を出た

玄関のドアを開けたら　かあちゃんの靴　帰ってきたんか
「ダイチ、おかえり」
「とうちゃん、ただいま」
「アイリちゃんはまだ寝てんのか」
「うん、寝てた」
「ダイチ、握りメシ作ってあっけどよ」
「俺は・・まだ・・」
全然腹空かねえ
「キッチンの台んとこに置いてっから」
とうちゃん
「愛里がさ」
「アイリちゃん？　　どした？」
「ベランダに、てるりん小僧ぶら下げてた」
「てる・・　ああ！　　そんじゃ大丈夫だな」
「う・・ん」
「てるりん小僧ぶら下げときゃ、アイリちゃんは大丈夫だよ」
「とう・・ちゃん」
「大丈夫だよ、ダイチ」
とうちゃんが　俺の頭クシャクシャッて
「かあちゃんは？」
「風呂入ってる」
「そっか」
「ダイチ」
「ん？」

「てるりん小僧作んねえか」
「え？」
「いっぺえぶら下げときゃよ、そんだけ大丈夫になんだろ」
とうちゃん　俺のこと元気づけようとしてくれて
「アイリちゃんとよ、ダイチと俺で作ればよ」
「そうだよな、いっぺえ作れば、大丈夫だよな」
「大丈夫だよ」
とうちゃんと俺で　リビング行って
ティッシュで　てるりん小僧作って　相変わらず　俺ととうちゃんのは不格好だけど
「顔書かねえとなんだよな？」
「うん、んっと・・」
ソファ脇のかあちゃんのペン立てから細いマジック出して
「とうちゃん先書いてよ」
「俺はな、絵ぇヘッタクソでよ」
とうちゃん　真剣な顔して顔書いてる
「どうだ？」
「可愛いよ」
「可愛いってよ、そんじゃダイチ」
「おう」
愛里が・・元気に・・なりますように
「ダイチうめえな」
「上手くはねえよ」
「そんじゃ、ぶら下げっか」
ベランダの窓開けて　物干しざおに　二個のてるりん小僧
「なにやってるの？」
かあちゃん
「てるてる坊主？　　明日はどう見ても雨は降らないわよ」
そういうんじゃねえんだよ
「カズオ、先にお風呂入ってくれる？　　ダイチとちょっと話したいから」
「あ、うん、そんじゃ」
とうちゃんが俺の顔見て
「すぐ入ってくっからよ」
「ゆっくりでいいよ」
あ　俺は見た　見てしまった　とうちゃんがスッてかあちゃんの手ぇ一瞬にぎった
すげえな　とうちゃん　なんか・・かっけえ　俺はあんなさりげねえカンジは
「どうしたの？」
「あ、や、かあちゃん、仕事、大丈夫だった？」
「まあね、懲戒免職は免れたってカンジかな」
「えっ」
そんな・・だったんか

「始末書は・・　どうなのかしら」
「か、かあちゃんが、なんかやっちまったの？」
「私ではないけど、部下の失敗は私の失敗だからね」
「かあちゃんが失敗してねえのに？」
「私の役目は部下たちの責任を取ることだから」
そしたら・・
「そしたらもし・・他の人がなんかとんでもねえことやっちまったら」
「私がクビ」
「え・・」
俺・・　今までかあちゃんの仕事よくわかってなくて　すげえとは思ってたけど
んな責任背負って　自分だけが気をつければいいっつうことなんかじゃなくて
「もしも、私が解雇されたり降格させられて収入が激減したら」
え？
「ヒトミには続けさせたいと思ってるの、あの子はもう自分の道を見つけて進んでるから」
「俺もそうして欲しい、ねえちゃんにはぜってえやりたいことやって欲しい」
「そうなったら、ダイチ、あんたには高校を辞めてもらわなきゃいけないかもしれない」
「そんなんどうでもいいよ、俺、働くからさ、俺のことはなんも気にしねえでいいよ」
かあちゃんが　いつもと違う目で俺のこと見てる　信じらんねえのかな
「かあちゃん、マジで、俺頑張って働くからさ、かあちゃん心配しなくていいよ」
「それじゃ・・　あんたが高校を辞めたとして」
なんか・・　俺の手に汗が・・
「あんたが辞めるならって、愛里さんも辞めたら？」
「愛里？　愛里は辞める理由ねえだろ、つか、愛里は高校続けねえとさ」
「でも、あんたがいなかったら淋しいしつまらないからって愛里さんが思っちゃったら？」
「そんなん、俺は愛里には続けて欲しい」
「なぜ？」
「それは、俺が辞めるのは俺ん家の事情で俺の事情で、愛里まで辞めてほしくねえよ」
「愛里さんがあんたがいない高校なんて行っても意味がないって思ったら？」
「意味はあるよ、俺、辞めたからって愛里と別れる気ぃねえしぜってえイヤだし」
「でも愛里さんが辞めちゃったら？」
「それは・・　俺が止める、ぜってえ止める」
「なぜ？」
「そんなんさ、俺が辞めなきゃなんねえからって愛里まで辞めるってさ」
「愛里さんのお父様とお母様はどう思うかしら」
愛里のお父さんとお母さん　そうだよ
「俺は愛里のことは巻き込みたくねえよ、お父さんとお母さんにも顔向けできねえよ」
「そうね、本当にそうよ」
「もしも、そんときは、かあちゃんも愛里に辞めるなって言ってくれねえかな」
「私が？　なぜ？」

「愛里はかあちゃんのこと尊敬してて、かあちゃんの言うことはちゃんと聞くから」
「あんたは誰の言うことなら聞くの？」
「え？　俺？」
「私がやめるなって言ったら私の言うこと聞く？」
「え？　そんでも高校辞めねえとなんねえときはさ」
「修学旅行」
「え？　しゅ、でも今は」
「愛里さんがもし行けなくなったら、あんたも行かないつもりなんでしょ」
かあちゃん・・なんで・・
「カズオがね、ポロッと言ったの」
とうちゃん？
「アイリちゃんが行けないならダイチも行きたくないって言ってたって」
「それは・・」
「あんた、つい今、あんたが高校辞めたら愛里さんも辞めるっ言ったらってことを」
「それは、高校辞めんのとは」
「愛里さんにとっては同じくらい重たいことよ」
「え・・」
「自分のせいであんたが修学旅行に行けなくなったって、一生責任感じてしまうわよ」
「それは・・　俺が勝手に選択することで愛里には」
「愛里さんにとっては自分のせいだってことなのよ」
「そんなん・・さ」
「愛里さんは私やカズオにも顔向けできないって思うわよ、そういう子でしょ」
それ・・は
「愛里さんのことが好きなら、愛里さんにそんな重たい責任を背負わせたらダメよ」
言葉が・・出なくて・・
「愛里さんが行けなくなったとしても、あんたは行かなきゃダメなの、
　つまらなくても淋しくても、あんたは行かなきゃダメ、愛里さんのために」
愛里のため
「愛里さん、おそらくPMSだと思う」
「PMS？　あ！」
そういえば・・　今月はまだ・・
「ヒトミも生理も重いけど、PMSも重くて、頭痛がしたり頭が重いとか、吐き気もあって、
　精神的にもアップダウンが激しくて、やたらと眠いって寝てたのよ」
ねえちゃんが・・　俺ん中ではいっつもゴロゴロ寝てるって思ってたのって　あれは
「愛里さんもPMSがある方だけど、今回は精神的にもいろいろあったから重いのかもしれない」
そ・・か　考えてみたら・・　ここんとこ愛里はなんか泣いたり怒ったりが・・
「旅行中にきちゃうかもしれないわね、最終日くらいならまだ・・ね」
旅行中に　あの辛れえ状態に
「もし今頃きてて、明日は二日目なんてことになったら」

早退するくれえ辛れえんだもんな
「そのときは本当に行けないかもしれない」
「あ・・うん」
「でも、あんたは行きなさいよ」
「行く・・　俺は・・　行くよ」
「愛里さんのことは、私とカズオに任せればいいから」
「もしもんときは・・　お願いします」
「ダイチ、風呂」
とうちゃん　相変わらず早えな
「あああああああ！」
「か、かあちゃん？」「美里？」
「忘れるところだった」
なんだ？　　仕事のこと？
かあちゃんがベッドルームに走ってって　紙袋持って出てきた
「あんたのパンツと靴下」
あ・・よかっ・・た　それか
「今すぐ洗濯して乾燥すれば今夜中にはパッキングできるでしょ」
「あ、うん」
かあちゃんは　下着と靴下は必ず一度洗ってからっつう人で
俺ととうちゃんは　そんなん気にしねえけど　ねえちゃんもぜってえ洗わないとダメでさ
「ダイチ、風呂掃除は俺がすっからよ」
「いいよ、俺終わったらやるよ」
「そっか？　　悪りぃな」
「全然いいって」
バスルームに入って
紙袋から　パンツ入ってる袋　パンツ 6 枚　靴下は　7 足
しかもこれ　すげえ高けえやつじゃん
そんでも・・　すげえ仕事大変だったのに　買ってきてくれたんだもんな
ありがとう　かあちゃん
タグ取ったパンツと靴下と今履いてるパンツも入れて　洗濯機 ON にして
シャワーだ

シャワー終わって　そのまんま風呂掃除して
洗濯終わってんな　よっしゃ　これは　浴室乾燥の方がいいな
ヘタすりゃイッパツで縮むことあるもんな
全部干して　浴室乾燥のボタン押して　よし
ヒゲも剃った　明日の朝も剃らねえとだけどさ
鼻毛も　大丈夫だな　あ！　　鼻毛カッター入れとかねえと　あっぶねえ
鼻毛カッター持って　部屋に入って　黒のカバンの中の洗面用具んとこに鼻毛カッター

なんか　信じらんねえな　明日から修学旅行ってさ
もしも・・　もしも愛里が行けなくなったとしても　俺は行かねえと　愛里のために
だよな　もしも俺が高校辞めて　そんとき愛里まで辞めたら
俺は愛里の人生　俺のせいでダメにしちまう気になる　気になるっつうかそうなんだよ
そんな思いは　愛里にはさせちゃダメだ　ぜってえダメだ
ベッドの上に大の字になって　目ぇ閉じても　頭のどっかがギンギンになってて
息が苦しい　呼吸しても苦しい　酸素がねえみてえに
外に出てえな　外に出たら呼吸できそうな気ぃして
そ〜っと玄関のドア開けて　野っ原に走った

冷てえ風　顔に浴びたら　なんか少し楽になって
そんでもすげえ目ぇ冴えちまってっけど
寝れんのかな　こんなんでさ　いっそ徹夜した方がいぃんかな
どうせ新幹線の中で寝ればいいしさ
ピコン　えっ　愛里
『眠ってるかもしれないけど』
ピコン
『既読ついた』
『起きてるよ』送信
愛里　起きてるよ俺
ピコン
『あれからずーーっと眠って』
ピコン
『もう一回シャワーを浴びたら』
ピコン
『やっと人間に戻れて』
人間に戻れたってさ　愛里はよ
ピコン
『お腹も空いて』
そっか　そっか　よかった
ピコン
『あなたが置いてくれてたおむすび食べたら』
ピコン
『すごくホッとして』
ピコン
『楽になりました』
よかった・・愛里・・よかった
ピコン
『ありがとう』
んなさ・・　ありがとうなんていらねえ・・よ

ピコン
『心配かけてごめんなさい』
んなことさ・・
『眠り姫が目覚めてくれて嬉しいっすよ』送信
ピコン
『100 年は眠ってないです w』
『俺には 100 年みてえに思えた w』送信
ピコン
『それじゃ私メッチャおばあちゃん w』
愛里だ　いつもの愛里だ
『俺も 100 年待ってたから　メッチャじいちゃん w』送信
ピコン
『おじいちゃんとおばあちゃんが修学旅行行くって笑う』
『杖ついて行こう w』送信
一緒に行こう　愛里　修学旅行一緒に
ピコン
『私はいっぱい寝たけど』
ピコン
『あなたは早く寝ないと明日寝坊しちゃいますよ』
『そしたら今度は俺が 100 年眠る番か w』送信
ピコン
『眠っててください』
ピコン
『置いていきます』
愛里・・　俺を置いていくって　すげえ　すげえよ　愛里　最高だよ愛里
『一緒に連れてってくだせえ！ w』送信
ピコン
『ちゃんと起きたら連れていきます w』
愛里　俺は　いっつも愛里に大津波にぶっ込まれてさ
『起きるに決まってんじゃん』送信
『愛里と一緒に修学旅行行きてえもん』送信
『一緒に行きた過ぎて泣きそうっす w』送信
w つけたけどさ　ほんとでさ
ピコン
『泣かないで www』
ピコン
『それじゃ、私はまだ全然眠れそうなので　寝ます』
そっか
ピコン
『おやすみなさい』

『愛里　おやすみ』送信
よかっ・・・た
ホッとして　涙出て・・
「ダイチ」
え
「とうちゃん？」
「握りメシも食ってねえからよ、どうしてっかなって部屋覗いたらいねえから」
とうちゃんが　俺の横に座って
「ここじゃねえかなって」
とうちゃんの顔見たら　また涙が・・
「とうちゃん・・　愛里が・・」
「アイリちゃんが？　　どした？」
「元気になったって」
「そっか、よかったなあ」
「俺の握りメシ食ったらホッとして楽になったって」
「ダイチの握りメシ食ったらな・・　よかった、よかったな」
「てるりん小僧、効いたよ、とうちゃん」
「そっか、やっぱてるりん小僧はすげえな」
「うん、すげえよ」
とうちゃんがニッコリして　俺の頭クシャクシャッて
「とうちゃん、腹減った」
「そっか、そんじゃ握りメシ食わねえとよ」
「うん」
二人で立ち上がって
「美里がダイチに渡してえもんがあるってよ」
「えっ？　　かあちゃんまだ起きてんの？」
「なんか仕事のなんかで電話とパソコンでなんかしゃべってた」
そんなに・・　大変な事態になってんのか
てるりん小僧様　かあちゃんの仕事を・・
かあちゃんの仕事のことは・・　シーツくれえのでっけえのじゃねえとダメかもしんねえな

怒涛の朝

家に戻ったら
かあちゃんがキッチンで炭酸ミネラルウォーター飲んでた
「あら、戻ってきたの」
「かあちゃん・・　仕事は・・」
「さっき、やっと終わったわよ」
「んな遅くまで・・」
「しょうがないわよ」
休みの日の夜中までやんねえとなんねえくれえ大変なことになってんのか
「カズオ、先に寝てていいわよ」
「そんでもよ」
「とうちゃん、あとは俺が片付けとくからさ」
「そっか？　そんじゃ、ダイチ、おやすみ」
「とうちゃん、おやすみ」
かあちゃんと　キッチンで　二人きり・・か
「バタバタしててつい忘れてたけど」
かあちゃんが俺の前に白い封筒差し出した
「なに？」
「修学旅行のお小遣い」
「こんなんいらねえよ」
「いるでしょ、交通費とか食事代」
「俺の金でなんとかすっからさ」
「あんたの最後の修学旅行なんだから、ほら」
ほらって・・　エーーッ　三万円？
「かあちゃん、こんなときにさ、三万もさ」
「高校生の親が渡すお小遣いとしてはふつうの額でしょ」
「じゃなくてさ、んな大変なときにさ」
「大変？」
「かあちゃんが懲戒免職になるかもしんなかったくれえのさ」
「何の話？」
それは免れたっつってたけど
「仕事、失敗したって」
「私は失敗してないわよ」
「かあちゃんの部下の人が」

「ああ！　ニューヨーク時間の月曜日の午前中に取引先との会議があってね、
　すべて支社の幹部たちに任せてたんだけど、ちょっと相手につけ入る隙を与えてしまって」
つけ入る隙・・
「急に相手側から、あることを要求されて、それを会議で話し合いたいって言われて」
かあちゃんがいる世界は　すげえ戦いの場で
「だったら、肉を切らせて骨を断つ、そこまでのことじゃないけどね」
笑ってっけど・・　なんか・・すげえ怖え場所で
「そこは譲歩する代わりに、実はこちらで狙っていたことを突きつければいいってね」
まさに孫子の兵法みてえなことが行われてて
「かあちゃんは・・　いっつも、んな戦いみてえなことやってんの？」
「戦いじゃないわよ、取引よ、どちらにも得があるようにするにはどうすればいいのか」
んなことを頭ん中でいつも考えてんのか
「ギリギリだったけど、うまくいったから」
んな　細せえ身体で　会社と　この家のこと・・
「え？　やだ、泣いてる？」
「や・・　うまくいって・・よかったなって」
「こんなことしょっちゅうだから」
しょっちゅうって・・
「かあちゃん・・　怖くねえの？」
「怖いわよ」
え
「でも怖いなんて言ってられないでしょ、社員たちを路頭に迷わせるわけにはいかないし」
そんな重てえこと背負って
「あんたたちのことだって」
俺たちのこと
「でもね、重荷っていうことじゃないのよ、そうね・・　活力源かな」
んなさ　現実は俺もねえちゃんもかあちゃん頼りで・・
「それにね、私にはカズオがいるから」
「え・・　とうちゃん？」
ヤベ・・　涙・・
「なんかね、カズオがいたら、なんとかなるんじゃないかなって思っちゃうのよ」
「だ・・よな・・とう・・ちゃんが・・いたらさ」
「なに泣いてるのよ」
「や・・なんか・・」
「私がもう逃げたいって逃げちゃっても、カズオはなんともない顔して、
　家族がギリギリでも暮らしていく分くらいはなんとかしてくれちゃいそうだなって」
とうちゃん・・　かあちゃんは・・　こんなにとうちゃんのこと頼りにしてるよ
「でもね、ヒトミの大学のことやあんたの学校のことまではね」

「そんでも・・かあちゃん・・」
指で鼻水ぬぐって
「辛くなったら、　逃げていいよ」
マジで　マジでさ
「そうね、さっきそう思ったわよ、これは、逃げても大丈夫かもって」
「さっき？」
「私には、もう一人カズオがいるんだなって」
「もう一人？」
「ダイチがいる」
え・・
俺は・・　もう・・　声出さねえように・・しようとしても・・
「そう思ったら気が楽になっちゃって、ますます大胆に大いに仕事ができるなってね」
「なんだ・・よ・・へへ・・結局・・仕事かよ」
「私から仕事を取ったら廃人よ」
「廃人て・・さ・・へへ」
「鼻水流しながら笑って気持ち悪い」
俺は・・　Ｔシャツで鼻水拭いて
「汚ったないんだから」
今は　かあちゃんになに言われても　俺・・　なんか嬉しくて
「お小遣い、持っていきなさい、今はあんたの修学旅行のお小遣いくらい出せるんだから」
「う・・ん、ありがとう」
「私が定年退職したら、あんたからお小遣いもらうわよ」
「おう、かあちゃんに小遣いあげられるくれえの男になっから」
「あら、頼もしい、エルメスのバーキンでも買ってもらおうかしら」
「おう、まかせとけ」
「フッ、ほら、カズオのおむすび食べなさいよ、せっかく作ってくれたんだから」
「うん、食うよ」
「私は寝るわ、頭が時差ボケで冴えちゃってるけど、寝ないとお肌にくるから」
「うん」
「あんたも早く寝なさいよ」
「これ食ったら寝る」
「そう、それじゃ、おやすみ」
「かあちゃん、おやすみなさい」
かあちゃんがキッチン出てって
かあちゃんがくれた小遣い入ってる白い封筒と　とうちゃんの握りメシ
俺は　しあわせだ　とうちゃんとかあちゃんの息子で　んっとにしあわせだ
とうちゃんの握りメシ食って　皿洗って　部屋に戻った

ん・・・・な・・・・・
「・・チ」・・え・・・なん・・・

「ダイチ」　え・・とう・・
「ダイチ」
「あ・・とう・・ちゃ・・」
「今日はいつもよか早く出んじゃねえのか？」
「え・・アラー・・　えっ」
ヤ　　ベッ
「アーーーーーーッ」
ヤベヤベヤベヤベーーーーーッ　もうこんな時間だ
「と、と、と、とうちゃん、どうしよう」
「顔、顔洗ってよ」
「あ、うん」
バスルームに駆けこんで　んっとんっと　歯磨く
ヤベ　なんで　んっと　ヒゲヒゲヒゲ　シェイバーメッチャ遅せえっ
顔顔顔　バシャバシャッて　ヤベーーーーーッ
洗った　んっと？ んっと？　制服だ制服
「ダイチ」
「と、とうちゃん」
「アイリちゃんはもう来てっから」
「エーーーーーッ？」
「朝メシ食ったからよ」
「あ、そ、そっか」
んっとんっと　黒いカバンと　リュックの中に財布入ってる　かあちゃんの白い封筒も
現場用の財布　制服のポケットに入ってる　あ　携帯　ケツポケットに入れて
俺の部屋飛び出したら
「愛里！」
「よかったあ、どうしたかと思っちゃった」
「愛里、ごめん、俺、寝坊しちまって」
「いいから行きましょう」
「愛里、具合は？」
「大丈夫だから！」
「あ、うん」
「ダイチ、握りメシ食ってけ」
「とうちゃん、そんな時間ねえよ」
「バス停行きながらよ、これで手ぇ拭いてよ」
ビニール袋に濡れたハンドタオル
「とうちゃん、ありがとう」
「これもよ」
え？　スーパーの袋？
「おとうさん、いってきます」
「アイリちゃん、いってらっしゃい」

「とうちゃん、いってきます」
「ダイチ、いってらっしゃい」
「かあちゃんは？」
「寝てっから」
「そ、そっか、そんじゃ、いってきます」
玄関飛び出して
愛里のキャリーケース　持ち上げて
「私が持つから」
「こんなん俺が持つっ」
「エレベーター来てます」
「おうっ」
エレベーターに乗り込んで　ハァァァァァァ
「大丈夫です、あと５分でバスが来て、それに乗って駅に行って」
「あ、おう」
「電車で一本で、電車に乗れば余裕ですから」
「そっか、うん、そっか」
「キャリーケース置いて、おむすび食べて」
「え？　　あ、うん」
エレベーターん中で握りメシ食ってたら一階に着いて
握りメシくわえて　愛里のキャリーケース持ち上げてバス停に走った
間に合った
「残りのおむすび食べちゃって」
「あ、おう」
「これで手を拭いて」
愛里がビニール袋からハンドタオル出してくれて
「バスが来ました」
「うん、来た、バス、来た」
バスの扉開いたら　けっこう混んでて
「愛里、先乗って」
愛里を乗せて　俺は愛里のキャリーケースと自分のカバン持って　乗れた
俺の後ろで扉が閉まった
ハァァァァァァ
バスが発車した・・ら　あっ　愛里が　とっさに腕つかんで
「愛里、俺につかまってろ」
「フッ」
「え？　　どした？」
「つかまってろとか言ってるけど、フッ　グフッ」
「え、な、なに？」
「不思議だなって」
「な、なにが？」

「あなたがヘボヘボだと」
へ、ヘボヘボ？
「私がしっかりしなきゃって、けっこう冷静になれるんだなって」
「愛里、ごめん、マジごめん」
「いいです、間に合ったから、なかなか来なかったから不安になっちゃったけど」
「んっとにごめん、俺、ごめん」
「一人で不安の中にいるよりあなたの家に行こうって」
「ごめん・・な・・さい」
「そうしたら、おとうさんが、え？ って顔して」
とうちゃ〜ん　そりゃそうだよなぁぁ
「朝ごはんを食べに来たと思ったみたいで」
ちげえんだよぉぉ　とうちゃ〜ん
「おむすびとイチゴを出してくれて」
ありがとう　とうちゃ〜ん
「私のことも心配してくれて」
とうちゃんも心配してくれてたもんなぁぁ
「もう大丈夫ですって言ったら、よかったなって」
よかったよぉぉ
「晴れたねって、なんて言ったかな、てる・・りん小僧？ のおかげ？」
そうなんだけどさぁぁ
「地域によって、てるてる坊主の呼び方ってちがうのかなって」
説明してえけど　今は心の余裕ねえんだよぉぉ　ごめんよぉ
「なんでこんなに早く？ って言うから、今日は早めに出ないとなんですって言ったら」
そうだったあぁぁ　とうちゃんに言ってなかったぁぁ　ごめん　とうちゃ〜ん
「そうしたら、おとうさんがすっごいビックリした顔になって」
そりゃビックリするよなぁぁ
「あなたの部屋に走っていって、今に至るです」
「愛里・・　んっとに、ごめんなさい」
「逆によかったかも」
「逆？ なんの？」
「これでもし、あなたが時間どおりに来て、私に朝食出してくれて」
「愛里ぃぃ、ごめん、やるつもりで」
「ちがうの、そしたら私だけドキドキして不安になって吐いちゃったりして」
「えっ」
「あなたが来ない、時間になっても来ない、どうしちゃったの？ って意識があなたになって」
意識が　俺？
「あなたの家に行って、最初はいつもと同じ穏やかな顔だったおとうさんが」
愛里が目ぇ見開いて
「こ〜んな顔してビックリして」

とうちゃん　メーーッチャビックリしたんだな　だよなするよそりゃ
「そこからバタバタで、それを聞いてたらすごーく冷静になっちゃって」
「あ・・そっか」
「バスの時間や電車の時間まで調べちゃって」
「愛里、マジでありがとう」
「今すごく楽です」
「そ・・っか」
「あなたの・・　グフッ　エーーッとか、とうちゃーんて・・　ハハハハ」
いいよ愛里　笑ってくれよ　愛里が笑ってくれて　こうやって一緒に・・
「えっ？　　ウソ、涙？」
「や、あくび、あくびした」
「あくびして涙って　ハハハハ」
「メッチャカッコ悪りぃじゃん俺」
「ハハハハ」
愛里が笑ってる　バスん中で　修学旅行に行く駅に向かってるバスん中で

バスが駅に着いて
集合場所の駅に行く電車に飛び乗って
扉のすぐ横の席が一個空いてっから
「愛里、ここ座れよ」
「あなたは？」
「俺はキャリーケース押さえてっから」
「だったら私も」
「いいから、心配だからさ」
「心配って　フッ」
へ？
「あなたの方が目が真っ赤で・・　あ！」
「え？」
「髪・・　梳かしてないですね」
「あっ」
ヤベ　忘れてた
「ちょっと、しゃがんでください」
「しゃがむ？」
「私の前に」
「ここ？」
愛里が　あの小せえリュックからなんか出して
「いくらなんでも寝ぐせがついた髪で」
「寝ぐせ？　　マジ？」
「修学旅行に行くって」
俺の髪を・・　愛里が・・　ブラシで・・　ヤ・・ベ　ヤベエ　んなときにヤベエ

んっと　別のこと別のこと　んっと
「できました」
「あ・・　そっか、ありがとう」
「あ、モリシタダイチ」
「え？　うん、俺だけど」
「私・・　モリシタダイチと・・　修学旅行に行くんですね」
「おう、俺と一緒に行く、愛里と俺でさ」
「モリシタダイチがアイロンかけたブラウス着て」
「きちんとかけたからさ」
「複雑です」
「なにが？」
「あなたには一生わからないと思う」
「なにを？」
「なんか・・　ドキドキしてきちゃった」
「愛里、もう大丈夫だよ、あと少しで着くからさ」
「寝坊したくせに大丈夫とか言う？」
「あ、ごめんなさい」
「いいです、間に合うから」
「愛里、マジごめん」
「そんなに顔を近づけないで、余計ドキドキするから！」
「あ、ご、ごめん」
「あ・・　私、なんか・・　ごめんなさい」
PMS か
「愛里、なんかあったら、俺がなんとかすっから」
「あなたが？」
「なんも心配しねえでいいよ」
「寝坊したくせに心配するなとか」
「あ、ごめん」
「なんか・・　ハハハ　笑いが　ハハハ　やだ・・止まらなアハハハ」
PMS だな　感情がさ
「なんでそんな顔して見てるの？」
「そんな顔？」
「深刻な顔」
「や、なんつうか、大変だなって」
「なにが？」
「愛里」
「そうですよ、モリシタダイチがカレシって感情が追いつかないっていうか」
「そっか、ごめんな」
「なんで謝るの？」
「や、なんか・・さ」

「でも、よかった」
「え？」
「あなたでよかったです」
え？　俺でよかった？　マジ？
「あ、着きますよ」
「あ、おう」
電車下りて
新幹線乗り場まで歩いて
「余裕でしたね」
「おう」
あれ？　とうちゃんが持たせてくれたスーパーの袋　何が入ってんだ？
え　イチゴ
「どうしたんですか？」
「とうちゃんが・・　イチゴ持たせてくれて」
「あなたが顔を洗ってるときに、あなたが私とお友だちにって買ったからって」
とう・・ちゃん　憶えててくれたんか
「ありがとう」
「や・・　俺は・・　とうちゃんがさ」
「あなたとおとうさんに、ありがとう」
「愛里・・」
とうちゃん　ありがとう
そんで
いってきます
かあちゃんも　ありがとう
かあちゃんがすげえ思いで働いてくれてっから　俺　修学旅行に行けるよ
愛里と一緒に
いってきます

Under the forest ダイチの物語第三章

著　者　　神原　涼

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社